

魔法少女リリカルなのは L×F=

花水姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある少女がいた。

その少女の名はフェイト・テストロツサ。彼女には親兄弟より親密な「もう一人の自分」とも呼べるべき少女がいた。

その少女の名前は『レヴィ・テストロツサ』

これはそんな二人の少女の出会いから始まる物語。

『魔法少女リリカルなのは L×F』

—— 始まります。

オリ主が神様転生して『レヴィ』としてフェイトに憑依する話。

我慢できずに書きました。

更新は色々な理由もあり不定期です。あまり期待しない方が良くもありません。

処女作な上、作者は精神的に脆いのであまり過激な表現での感想は控えてくれると嬉しいです。

プロローグは一人称視点で進みます。無印編以降は三人称っぽい表現が基本です。

色んな方の小説に感化されているので、文章やキャラ設定など見たことあると感じる場合がある可能性がありますが、当方は盗作などしているつもりはございません。

御都合主義満載です。それはもうひどい位あると思います。お気を付けてください。

完結しました。

現在番外編と称した蛇足を不定期更新してます。

目次

幸せにするためのプロローグ——原作開始前

転生×憑依Ⅱそれはプロローグ | 1

運命×雷刃Ⅱそれは第1話 | 9

師匠×告白Ⅱそれは第2話 | 14

使い魔×相棒Ⅱそれは第3話 | 27

真実×悲嘆Ⅱそれは第4話 | 33

覚悟×邂逅Ⅱそれは第5話 | 39

狂愛×親愛Ⅱそれは第6話 | 45

特典×復活Ⅱそれは第7話 | 57

事情×決意Ⅱそれは第8話 | 63

家族×平和Ⅱそれはエピローグ | 72

幸せになるための戦い——無印編

プロローグのまとめ兼無印編のキャラ紹介 | 77

第1話 初めての地球、初めての魔法少女 | 88

第2話 初めての温泉、二度目の魔法少女〈上〉 | 109

第2話 初めての温泉、二度目の魔法少女〈下〉 | 125

第3話 三度目の魔法少女、三人目の魔導師 | 154

第4話 三者の思惑、二人の決意と決別〈上〉 | 179

第4話 三者の思惑、二人の決意と決別〈下〉 | 194

第5話 初めての学校、望んだ普通 | 1 | 219

第5話 初めての学校、望んだ普通 | 2 | 227

第6話 雷神と星の輝き | 1 | 239

第6話 雷神と星の輝き | 2 | 250

第6話 雷神と星の輝き | 3 | 256

ical girl]	513
GOD編第4話 「Time traveler of Mag	
498	
GOD編第3話 「Briefing of Arthra	477
GOD編第2話 「Contact of [U—D]	462
GOD編第1話 「Start of [DGG]	453
彼女たちの戦い——GOD編	445
レヴィと闇の欠片	435
レヴィと知り合いのお兄ちゃん	
レヴィについてのお話し	423
彼女の話——空白期編	407
Epilogue	395
A☒s編最終話 「蒼の雷神」	381
第5話 「少女の夢」	369
第4話 「独りにしてしまった彼女」	358
第3話 「独りにされた少女」	341
第2話 「目覚めない彼女」	
第1話 「闇、始動」	
彼女が彼女になるために必要なこと——A's編	335
interval	306
無印編最終話 本当の私の全力全開—5	300
無印編最終話 本当の私の全力全開—4	292
無印編最終話 本当の私の全力全開—3	284
無印編最終話 本当の私の全力全開—2	274
無印編最終話 本当の私の全力全開—1	

	GOD編第5話	「Message of Future	524
	GOD編第6話	「Take of Rest	540
	GOD編第7話	「Levi of Rebirth	556
	GOD編第8話	「Battle of Eve	575
	GOD編第9話	「Start of the Combat	581
	GOD編第10話	「Battle of Sacred ki	617
	GOD編第11話	「Sphere of God spe	652
	GOD編第12話	「Flash of Thunder go	684
701	GOD編最終話	「Story of Farewell	
L×F			
	epilogue	「レヴィ×フェイト それは	715
	作者の後語り		738
	番外編		
	『もしもの時間、もしもの世界の彼女たち』		751
	エルトリアでの小話		761
	高町なのはが墜ちた日		771
	モブ子運命に出会う		787

幸せにするためのプロローグ——原作開始前 転生×憑依Ⅱそれはプロローグ

やあどうも、これを見ていると言う事は少しでもこの話に興味を持って貰えたと思つて話をしよう。

これはボク、レヴィ・テスタロッサが生まれてからの話。

「僕」が「ボク」になった時に出会った大切な人、フェイトとのお話。

時を遡つてお話ししよう。

「僕」が「ボク」になつてからの話を。

魔法少女リリカルなのはL×FⅡ

始まります。

*

気が付くと真つ白な空間だった。まるで病院の様に白い部屋、その部屋のベッドに僕は寝ていた。

「あれ？　僕は……」

何も思い出せなかった。自分の名前、なぜここに居るのか等。

それでもしばらく記憶を掘り返していると自分がどのような人物だったのかは思い出せてきた。

世間一般で言う『オタク』と呼べる人種であること。特に『魔法少女リリカルなのは』というアニメを中心としたメディアミックスにはまり込んでいたこと。

その中でも『フェイト・テスタロッサ』と言うキャラに心底惚れ込んでいたこと。

そんな事を思い出しているところの部屋に誰かが入ってきた。

「おお。もう目覚めているのか」

その人は、よくわからない。

容姿が全く印象に残っていないのだ。

いや、残っていないのではなく理解できないのかもしれない。
容姿、服装、何もかもが頭の中に情報として入ってこない。
けれども “その人” との会話内容だけは鮮明に覚えている。

「どうじゃ？ 調子は」

「……自分の名前が思い出せない以外は特には」

「ふむふむ、そうかそうか」

「あの、僕はいったいどうしてここに？」

僕がその人物に質問すると、すこし間をおいてから “その人” は答えた。

「単刀直入に言うのと死んだからじゃ」

「死んだ、ですか」

「なんじゃ、驚かんのか」

驚くも何も、実感が無いので驚きようがない。

「ふむ、実感が無いか。それも仕方ないのかもな」

口に出してはいなかった筈の思いを読み取ったかのように “その人” は言った。

「そち、ちと転生して見たくはないか？」

まるで今までの世間話の延長線上とでもいうかのように自然に出された質問。

「転生、ですか」

「うむ、そうじゃ。貴様も知っている輪廻転生の転生じゃ」

まるで二次創作のようだ。

オタクである僕は当然のごとく二次創作も読み漁っていた。

『もしも』の世界を見る事ができるのがとても心が躍るのだ。

「そうじゃな、そちの思う二次創作とやらと同じような転生じゃがな」
「なぜ、僕なのですか？」

二次創作だったら、神様のミスだか何だかで死んでしまったお詫びとして、なのだが。

「そうじゃのう、一番の理由は、儂も最近の流行に乗ってみたかったから、じゃな」

「流行、ですか……」

「うむそうじゃ。最近儂の周りで暇つぶしに転生させることが多くての。これが想像以上に楽しいらしいのじゃ。なので、儂もやって見たくなってるな」

完全に自己満足の為らしい。いや、ミスで殺されても嫌だからまあ悪くは無いんだけど。

「それでどうじゃ？ おぬし転生してみんか？」

「その人」が再度質問してくる。

「もし、断ったらどうするんですか？」

「別にどうもせぬ。おぬしはすでに魂のクリーンニングが半ば終わっているからの。完全にクリーンニングした後、正当な転生をしてもらう」

なるほど、じゃあ僕が自分のことを臆気にしか思い出せないのは、その『魂のクリーンニング』をされたからか。

そして、別に僕で無くとも構わない、と。

「それで、どうする？ 転生して二次創作の主人公になるか？ それとも輪廻転生の輪に戻り元の世界に行くか？」

3 度目になる問いかけ。

はつきり言ってしまうえば、転生は興味がある。今まで読んできた話の出来事が自分に降りかかってきているのだ。それでも、懸念事項はある。

「あの、一つ良いですか？」

「なんじゃ？」

「どの世界に転生するのか、教えてもらえますか？」

そう、転生先の世界だ。

たとえ転生しても直ぐに死んでしまうような危険な場所だったら転生したくはない。

「そうじゃの。『魔法少女リリカルなのは』と言う世界が人気らしいからの、そこにしようかと思っておる」

『魔法少女リリカルなのは』

前述したが、僕の大好きな話だ。世界滅亡のタイミングが二、三回

あるがそれでも、僕の大好きなキャラが居る世界というのは重要なフアクターである。

「どうじゃ？ 行く気になったか？」

「はい。是非」

「おお！ そうかそうか」

僕の答えに満足したのか嬉しそうな声を上げる “その人”。

名前も教えてもらってないし、姿も分からないし、もう “その人” が固有名詞みたいになってしまっている。

「それでは、何か願う事はあるか？ 叶える数は3〜5個ぐらいが多いらしいからの、その位であれば、できる限りは叶えてやろう」

3〜5個か、確かにその位が多い気はするが、ずいぶんアバウトだな。

「すみません。少し考えるので、待ってもらえますか？」

「良いとも良いとも。存分に悩み考えるがよい」

言質もとつたので存分に悩むことにする。

〜数分後〜

数分間悩んだが、大体決まった。

「決まったようじゃな」

「はい。まず1つ目は、アリシア・テスタロッサ、プレシア・テスタロッサ、夜天の書の管制人格、リインフォースを救える方法をください。正確には、アリシアの蘇生、プレシアの病の治癒と若返り、リインフォースは消えなくても済むように、辺りでしょうか」

「うむ。では、そのタイミングになれば儂に願うと良い。そうすればそれを行ってやろう」

おお、助かった。もしかしたら願い3個分とか言われるかとも思っただが。

「2つ目はできるだけ高い魔力と魔法適性を」

「うむ。魔力は10歳頃でS+、20歳頃にSSS位で良いかの？」

「はい。それで大丈夫です」

「魔法適性はサービスじゃ。どのような魔法でも習得を頑張れば使いこなせるようにしよう」

「ありがとうございます」

「これでリリなのでは十分なチートになる筈。」

「これで2つじゃな。あとはどうする?」

「はい。それでは、習熟速度のアップを」

「どういう事じゃ?」

「何かを覚えたり、できるようになったりするのが他人より早いように。『めだかボックス』に出てくる『黒神めだか』の《完成^{ジ・エンド}》程、とは言いませんが、そのようなイメージです」

「うむ。了解した」

「さて、キャラを救うのが3つ扱いされたようにここまでは考えていたが、あと二つはどうするか。」

「残り2つじゃな。どうする?」

「では、4つ目は、身体能力の強化を」

「うむ。それはわかりやすいな。任せておくがよい」

「最後は、僕がなるべくフェイトの側に居られるようにしてください」

「ふむ、赤い糸的な感じで良いのか?」

「別に、恋人になりたいわけではないですけど、フェイトを支えるような位置には居たいです」

「わかった。それでは確認するぞ。1、アリシア、プレシア、リインフォースの救済。2、高い魔力と魔法適性。3、習熟速度の向上。4、身体能力の向上。5、フェイト・テスタロッサとの縁。これで良いな」

「はい。大丈夫です」

「それでは。良き第二の人生を」

「ありがとうございます」

「その人」に挨拶すると、僕の意識は薄れていった。

*

いったか。さて、儂の行っ初めでの転生じゃからな。なるべく気合を入れて事に挑もう。何事も本気でやった方が楽しいし、嬉しいからの。

「よう。第245号神。最近調子どうだ？」

儂が転生した者に、能力を与えてやろうとした所に現れたのは儂の同僚である。第244号神。

「うむ。そちが先日言っていた『転生』を儂もやろうと思つてな。今見送つた所じゃ」

「ほう！ そうかいそうかい。それで？ どんな能力をつけてやったんだ？」

「うむ、それはじゃな」

儂が能力の説明をすると、244はつまらなそうな顔をして言っておつた。

「なんだ、そんなにチートじゃねーな。それにニコポ、やナデポも無しか」

「そうなのか？」

奴は十分チートだと言つておつたがの。

「まあ、いいや、それで？ なにに悩んでいるんだ？」

「うむ、それがの、3つ目と5つ目の願いをどうやって叶えてやろうかと思つてな」

習熟速度の向上、と言われても儂ら神にはピンとこない。

全知全能、とは言わなくともそれに近いことはできる儂らじゃ。何かをするために努力をして身に着ける、と言う事とは縁がない。

「なるほど、だったら、こうすりゃあ良いんじゃないか？」

「なるほど。そうか」

初心者である儂に244は丁寧に教えてくれる。

やはり持つべきものは心優しき同僚じゃな。

「ようし、これで少しは面白くなるだろ」

「うむ、ありがたい」

これで儂も『転生者ユーザー』の仲間入りじゃな。

*

「——つ」

目に刺さるような光で目を覚ます。

光になれない目は未だ脳に情報を伝えない。

しかしそれも数秒の間だけ。次第に慣れてくる目に入ったのは手術室のようなライト。

次に感じるのは、背中に感じる硬い質感。

これまた手術台のような感覚だ。

『あれ？…ここどこだ？』

そう口に出して言ってみるが、どこかおかしい。

「あれ？ 誰かいるの？」

そのおかしさを突き止める前にすぐそばから女の子の声が聞こえる。

見回してみても誰もいない。

そこは無機質な、まさに手術室と言えるような部屋だった。

そこに居るのは僕だけ。なのに、

「気のせいかな？」

声が聞こえる。すぐ側から、女の子の声。

『誰かいるの？』

もう一度声を出す。しかしまたもや違和感。声が聞こえているが、なにか違うような。そんな漠然とした違和感。

「っ！ まだだ。誰?! どこに居るの!？」

焦ったような少女の声。それもまたすぐ側から。

僕は辺りを見回す。すると、鏡が目に入る。

その鏡に映ったのは、少女だった。

金糸の様に煌めく艶やかな金髪。あどけない可愛らしい顔。宝石のように綺麗で光を吸い取るルビーレッドの左目にサファイアブルーの右目。

『あれ？ 僕、女の子？』

「あれ？ 私の目、こんな色だったっけ？」

ほぼ同時に呟く僕と少女。

それで僕は気づいてしまった、違和感の正体に。
鏡の中の少女が喋ったのは、『少女の言葉』だった。

——まさかまさかまさかまさか
頭に浮かぶのは一つの仮説。

よく鏡を見てみるとそこには見知ったような顔。

目の色は違くとも、そこに映っているのは画面の中で見た少女、
「フェイト・テストロッサ」によく似ていた。

『まさか、フェイト?』

もう一度呟いてみても鏡の中の少女の口は動かない。

「っ!?」なんで私の名前を? 誰? どこに居るの?」
やっぱりそうだ。

どうやら僕は、フェイト・テストロッサに憑依してしまったようだ。

運命×雷刃Ⅱそれは第1話

私が母さんに言われて検査をした後、目を覚ますと急に声が聞こえてきた。

自分の声に似ているけど、どこか違う。そんな声。

誰かいないか辺りを見回してみても私以外誰もいない。

そんな中ふと目に入った鏡を見つめると、私の目の色が変わっていた。

右目が青色になっていたのだ。

——なんで？

どうして？ そんな思いが胸を渦巻いているなか、今まで聞こえていた声が急に私の名前を呼んだ。

『まさか、フェイト？』

「っ!? なんで私の名前を？ 誰？ どこに居るの？」

叫んでも、答えは返ってこない。なんで私の名前を？

いや、私の名前はアリ……、違う。私はフェイト。フェイト・テストタロツサ。母さんはプレシア・テストタロツサ。私は母さんの娘、フェイト。

——すこし、混乱しているんだ。

そうだ、そうに違いない。この声も幻聴だ。

そう、自己完結しようとしていたら、また声が聞こえた。

『ねえ、フェイト。落ち着いて聞いてほしいんだ。』

どこか、落ち込んだような、無理やり冷静になろうとしているような、そんな声が聞こえた。

その声の説明を私は黙って聞き続けた。

その声の説明によると、その声は私に憑依してしまった誰かららしい。

基本的に体の主導権は私にあるようで、できれば自分の存在を認めてもらいたい。そのような、内容だった。

「う、うん。よくわからないけど。わかった。良いよ。」

『良いの？ 自分で言っておいてなんだけど、僕って凄く怪しいよ?』

「うん。だいじょうぶ。なんだか悪い人(？)じゃない気がするから」
それに、昔に比べて母さんが構ってくれなくなつたから、一人で寂しかったし。

『そっか。ありがとう、フェイト』

「どういたしまして。」

お礼を言うのは私の方かも、なんて思つてたり。

「あ、そうだ」

『どうしたの？』

「あなたの名前を教えてください。なんて呼べばいいの？」

『名前……』

「うん。名前がないと、呼び辛いよ。いつまでもあなたなんて呼ぶのも変だし」

『そうだな』

そう言うとしばらく考え込んでしまったのか声が聞こえなくなつた。

その間、私は暇になつたので、色が変わつてしまつた左目のことを考えていた。

——どうしよう。母さん、心配するかな……。

『よし！ 決まつた』

ボーっとしていたら決まつたようで、声が聞こえた。

「決まつたの？ なんて名前？」

『僕、いやこの際だ、〃ボク〃にしよう。』

どこが変わつたのかはよくわからないけど、きっと本人の中では何か変わったんだろうな。

『ボクの名前はレヴィ。レヴィって呼んで』

「レヴィ。……レヴィ。うん。わかつたこれからよろしくね。レヴィ」

『うん。よろしく、フェイト』

これが、私がこれからずっと一緒に過ごしていく、一番大切に姉妹以上の関係を築く事になる人、レヴィ・テスタロッサとの出会い。

*

やあ。どうもみなさん。名無し改めレヴィだ。

フェイトに受け入れてもらって、自分の名前を考えた後はプレシアに呼ばれるまで色々試していた。

その事でわかったことがいくつか。

1つ、体の主導権はボクの浸食度にて決まる。

これは、ボクが完全に切り離されて、寝ている状態になっているのを浸食率0%だとすると、20〜40%位だと、体の主導権はフェイトにあるが、僕も感覚を共有している状態。

この状態だと、簡単な魔法ぐらいならボクが個別で使える事が判明した。

それと同時にわかったのだが、ボクの魔力光は瞳の色と同じサファイアブルー。原作ゲームのレヴィ・ザ・スラッシャーのアクアブルーを鮮やかに、濃くしたような色で、ボクが発動した魔法はボクの魔力光の色になる。すなわち、ボクの魔力で作られている。って事になるみたいだ。

50%を超えると、初めのようなお互いが一つの体を共有する状態。この時は瞳の色が赤と青のオッドアイになる。

魔法を使う場合は、お互いが一人ずつ魔法を使う事もできるし、二人で一つの魔法を発動することもできる。その場合の魔力光は青と黄色を混ぜたようなマールブル色になる。魔力もお互いの魔力が合算されるらしく、戦闘と言う面では多分一番強いと思うがこの状態ではお互いが息を合わせないと上手くいかない。

正確に言うと、身体の主導権のメインはフェイトだが、右半身ならボクでも自由に動かせる。わかる通りお互いの息があっていないと右半身と左半身がバラバラに動いてしまうのだ。そんな状態では戦うどころか、まともに動く事すらできなかった。

浸食率が80%に近くなると、今度はボクとフェイトが逆転する。ボクが体を使い、フェイトはそれを見る、って言うような感じだ。瞳の色も両目が青色になる。この状態だと神様の特典である身体能力

の強化が適用されるらしく、身体能力が向上した。

最後に、浸食率が100%に到達すると、フェイトの意識が無くなって体の主導権が完全にボクに移る。もしもフェイトが気絶した等の状態になった場合、ノータイムでこの状態になるので、墜落とか誘拐とかの危険性が無くなる筈。

なぜわかるかって？　なんとなく、としか言いようがない。多分そうなんだろうって感じ。

これは今後訓練をする上で確かめなくちゃならないだろう。

さて、そんなことを確認していると、この部屋にプレシアがやってきた。

今の浸食率は約20%弱。フェイト以外がボク存在に気付くことは無いはずだ。

「起きたのね、フェイト」

台に腰かけているフェイトを見下ろし、声をかけるプレシア。

生で見ると凄い威圧感だ。

「母さん」

「フェイト、今日はもう良いわ。部屋に帰って自習していなさい」

「わかったよ。母さん」

フェイトの返事を聞いたか聞かないかのタイミングで部屋を出て行ってしまおうプレシア。

——あれが、フェイトのお母さん、か。

知ってはいたけど、本当にフェイトに良い感情を持っていないようだ。

『あれがフェイトのお母さん？』

「うん。そうだよ。プレシア母さん」

フェイトの部屋に帰りながらフェイトと雑談をする。

『なんか、怖い人だったね』

「そんなこと無いよ。今は忙しいみたいだけど、優しい人だよ」

フェイトの話を聞くに本当にプレシアを信頼しているみたいだ。

できる事なら今すぐアリシアを蘇生してフェイトに会わせて幸せな家庭を築いてもらいたい。

でも、その過程でフェイトが自分はクローンだと知ってしまった。そうなったとき、フェイトが心を保てるよう、ボクの話を通じてくれるように関係を築かなくちゃいけない。それに――

――まだ、ボクはプレシアに歯が立たない。

そうだ、ボクはまだまだ未熟だ。フェイトが、ボクが魔導師としてある程度の実力を身に付けなければ、プレシアと話す事自体が不可能に近い。

『フェイト。魔法の勉強、頑張ろうね！』

なるべく明るく言い放つ。フェイトが気楽でいられるように、天真爛漫に。

「ふふ、どうしたの急に」

『ボク魔法の勉強興味あるんだー。フェイト教えてよ！』

「もう、しょうがないなあレヴィは。良いよ、一緒に勉強しよう」

『やったー！』

君にボクのすべてを持って幸せを。

待っていてフェイト。必ずボクが、雷刃―レヴィ―が君の不幸を切り裂いてあげるから。

師匠×告白Ⅱそれは第2話

レヴィと出会って（？）から数日。あれからは楽しい毎日だった。レヴィは結構お茶目な面白い子で、私の知らない色んな話をしてくれた。

逆に私は自習の範囲だけど魔法、ミッド式の魔法についてレヴィに教えた。

そのままレヴィと同時に体を動かすこと―レヴィは50%の状態、とか言っていた時―の練習を試みたり、二人でシューターを同時に作ってシューターを使った鬼ごっこを試みたりと、一人でやるより楽しくて充実した時間が過ぎて行った。

そんなある日、私達が自習をしていると部屋に誰かがやってきた。「失礼します」

その言葉と共に入ってきたのは女性だった。

この家―時の庭園―には私と母さん以外の人は私は見たことがない。

「あの、誰ですか？」

「初めまして、フェイト、ですよね？」

女性は挨拶しながらも私の事を確認してくる。

「あ、はい、初めまして。私がフェイト、ですけど……」

「よかった、私はリニス。プレシアの、あなたのお母さんの使い魔で今日からフェイトに魔法を教える事になりました」

「え、リニスって」

「確か私が拾ってきた山猫の……」

「はい。山猫のリニスです。今日からよろしくお願いしますね、フェイト」

「あ、はい。お願いします。リニス、さん」

「リニスで良いですよ」

「じゃあ……リニス」

「はい」

優しく笑うリニス。どうして人間になっているのか、とか使い魔の

事とかよくわからないけど、優しそうでよかった。

(ねえ、どう思う？ レヴィ)

レヴィと秘密のお話をするために最近覚えた念話でレヴィに話を振る。

『んー？ そうだなあ。優しそうに見えるけど魔導師としての实力は相当ありそうだよ』

レヴィの声は浸食率―これもレヴィの言っていた言葉―が低いと私にしか聞こえないらしく、レヴィは普通に念話を使わずに話す。

(そうなの？)

『うん。感じる魔力が結構ある。今のフェイトより全然多いよ』

(そっか。良い先生だと良いね)

『どうだろうね〜』

(もう！ 不安になるような事言わないでよ！)

一瞬真面目になったかと思えば直ぐふざけた調子で言うレヴィ。

――ほんとにもう、無邪気なんだから。

そんな風に会話をしていたら、呆けているように見えたらしくリニス心配したような様子で声をかけてきた。

「フェイト？ 大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫だよ、リニス」

「そうですか。では今から魔法のお勉強をしますが、大丈夫ですか？」

「うん！ 私、頑張るよ。だから、よろしくお願いします。リニス」

心配そうに聞いてくるリニスを安心させるために元気よく返事をする。

すると、安心したのかりニスは笑いながら力こぶを作るように腕を曲げながら言った。

「はい。任せてください。フェイトを一流の魔道士にするのが、私の使命ですから」

この日から、優しくて厳しいリニスの元、私達―主に私―の魔法の特訓が始まった。

(がんばろうね。レヴィ)

『……』

ちやんとした先生ができたことが嬉しくてレヴィに話しかけるが、黙ったまま答えてくれない。

(レヴィ?)

『ん? ああ。そうだね! 頑張ろう! フェイト』

不安になった私が再度呼びかけてみると、今度は気づいてくれたのか元気な返事をしてくれるレヴィ。

(もう、すっかりしてよ!)

『あはは、ごめんごめん』

レヴィと一緒に笑うと、リニス気付いたのかこちらを不思議そうな顔で見ってくる。

「どうしました? フェイト。急に笑い出したりして」

「え、いや、なんでもないよ。ただ、嬉しかっただけで」

「……そうですか」

訝しげだが、なんとか納得したのかそれ以上追及してこないリニス。

——あ、焦った。

今度から自習の時はマルチタスクを重点的に練習しようと思心を決めたのでした。

*

どうもみなさん初めまして。プレシアの使い魔のリニスと申します。

私はプレシアの娘であるフェイトの教育係としてプレシアの補佐をしながら日々を過ごしていますが、今回は少しその教え子であるフェイトについて話をしたいと思います。

フェイト・テストロッサ。大魔道士プレシア・テストロッサの娘として名に恥じぬ実力を持っている勤勉で良い子ですが、少しプレシアも知らない秘密があるような気がします。

その事を思い立ったのは彼女の行動からでした。

良く、特に家の中を歩いている時など呆けている時が多いのです。それだけならば、気の抜けている子で済むのですが、この前フェイトの部屋を訪ねた時、誰もいない筈なのにまるで誰かがいるかのよう

に独り言を呟いていました。そして極めつけは、夜に魔法の練習をするのか外に向かっているとするフェイトを見かけたので注意しようとした時でした。

5歳の子供ではありえない速度で駆け出したと思ったら、すぐに見失ってしまったのです。

私はこれでも、プレシアが「維持するのですら大変だ」と呟いた程優秀な使い魔であると自負しています。

その私が知覚できない速度で「走った」フェイト。

今までの訓練ではそのような様子は見せなかつたというのに。

その時は、探そうと思えばできたのですが、探すことはせず後日本人に確認しようと思いついその場を去りました。

その後日が今日です。

フェイトが何を隠しているのかを本人に聞こうと思い、今私はフェイトの自室の前に居ます。

「——うん。——でね、——」

部屋の前で耳を澄ませばフェイトの楽しそうな歓談の音が聞こえます。

それでも相手の声は聞こえず、これだけを聞いたのならば狂ったのではないかと思うでしょう。

ですが私の勘が告げているのです。

——フェイトには重大な秘密がある。と。

「フェイト？ 少し良いですか？」

覚悟を決めた私は、扉をノックしながら中に居るであろうフェイトに声をかけました。

「え!? ど、どうぞ」

少し驚いたような声が聞こえてきましたが、気にせずに扉を開けて部屋に入ります。

「ど、どうしたの？ リニス」

部屋に入るとベッドの上に腰かけているフェイトが。それ以外には特に何もなく、人や動物がいるわけでも、人形がある訳でもない。「すこし、フェイトとお話ししようかと思ひまして。大丈夫ですか？」なるべく怖がらせないように柔らかい口調と言葉を選んで話す。

「お話し？ うん。良いよ」

笑いながら場所を開けるかのように横にずれるフェイト。折角なのでフェイトの隣に腰かける事に。

「それで、なんのお話し？」

「はい。実はフェイトに聞いておきたいことがありますして」「なに？」

「フェイトは、プレシアの事どう思っていますか？」

最初は本題ではなくほかの話題から。

実際優先度は低くとも聞いてみたい事柄ではあった。

プレシアはフェイトを私に任せて研究三昧。

寝る間も、ご飯を食べる事も惜しんで研究に没頭している。

私は使い魔として今の意志を貰ってからフェイトとプレシアが一緒に居る場面を見たことが無かった。

「その、プレシアと会えなくて、その、寂しくないのか、とか」「……」

私の問いに少しうつむくフェイト。

やはり、寂しかったのだろうか。

“見えもしない友人”を作り出してしまふほどには。

「寂しくは、無いよ」

うつむいたフェイトから出た答えはそれだった。

そんな筈は無いだろう。

5歳の少女が親と顔を合わせずに寂しくないわけがない。

それでもフェイトは、今度は顔をあげて言った。

「母さん忙しそうだもん。私をもっと頑張って母さんのお手伝いをできるように。って、リニスに魔法を教えてくださいるように頼んだんだと思うから。だから私は頑張れるよ。だって、母さんの為だから」

そう言って笑うフェイト。

なんて、なんて気丈で優しい子なのか。

——プレシア、あなたの娘はとても良い子ですよ。

それでも、やはり寂しいという気持ちはあるのだろう。そうでなければ、5歳の子供が「頑張れる」なんて言葉を使うとは思えない。

——それでも、この子は気丈に振る舞っている。

いや、振る舞っているのではなく実際に大丈夫なのかもしれない。

「見えない友達」のおかげで——。

「そうですか。フェイトは、良い子ですね」

「えへへ」

頭を撫でると嬉しそうにはにかむフェイト。

——ああ、なんて可愛らしい。

おっと、トリップしている場合ではありません。

早いかもしれませんが、本題に入りましょう。

「あのですね、フェイト。もう一つ聞いていいですか？」

「なに？」

「フェイト、私に何か隠し事ありませんか？ 例えば、「見えないお

友達」とか……」

私がそういった瞬間に今まで笑顔だったフェイトの表情が凍りついた。

*

「例えば、「見えないお友達」とか……」

部屋で寛いでいたらやってきたリニスとお話ししている時に出された質問に私は啞然とした。

——いつ、いつ、いつ、いつ、いつから気が付いていた。いつから知られていた。

(どうしよう。どうしようレヴィ！)

レヴィに念話で話しかける。

なぜ、気づかれた。誰かがいるときや部屋の外では細心の注意を

払っていたはずだった。

それなのにどうして。

『フェイト落ち着いて』

(で、でも！)

これが落ち着いていられるだろうか。

今まで隠してきたレヴィと言う存在が知られてしまったのだ。

しかも「見えないお友達」なんて的を得た表現までされて。

『とりあえず、落ち着いてリニスに話を聞いてみよう？　なんでそう

思ったのか、とか』

レヴィの適切な指摘で少しだけ冷静になる。

レヴィはこういう時頼れるお姉さんの感じになってきている。

普段は私より幼く感じられる言動が目立つが、私が困った時などは冷静に私を支えてくれる。

『がんばって、フェイト』

(うん。頑張る)

いったんレヴィとの念話を切ってリニスと話をする。

「リ、リニス」

「なんでしよう。フェイト」

リニスの調子はいつもと変わらないのに、なぜだが恐ろしさを感じる。

「な、なんで、そんな事、思ったの？」

やけに喉が渇く。

その所為か口の中が乾いてうまく喋れない。

「それはですね……」

そう言っただけで始まったリニスの説明を纏めると、以下の通りになる。

1、・私の部屋の前で何か声のようなものが聞こえたから耳を澄ませたら私が一人で喋っていた。

2、・私が夜出歩くのを発見し、注意しようとしたらものすごい速度で走ってどこかへ行ってしまった。

以上の事から私に隠し事があると推測して、今日話を聞きに来ただという。

「それで、どうなんですか？ フェイト」

うー、どうしよう。素直に話してどう思われるか。

私に変に思われるならまだしも、レヴィが変な物だと思われるのは嫌だ。

『フェイト』

(どうしたの？ レヴィ)

私が悩んでるとレヴィが優しく声をかけてくれた。こういう事ができるからレヴィは頼りになる。

『フェイト、ボクに任せて』

(え？ でも)

『素直に話そう。そのためには一回ボクが実際に居るんだって証拠を見せたほうが良い』

(……わかった)

その後私はレヴィに、リニスに伝えて。と言われた言葉を言って、レヴィに体を明け渡した。

*

「リニス、今から起きる事は手品とかじゃないから。冷静になって受け止めてね」

ボクがフェイトに伝えてほしいといった言葉をフェイトが言う。

ボクの個人的な思いだが、リニスはなんだかんだ言っつきちんと受け止めて、認めてくれる気がする。

だったら、これから―プレシアやアリシア―の事を相談するのにも、手伝ってもらうのにもリニスにはボクが存在を知ってもらってボクとある程度の関係を構築してもらった方が良い。

「？ いきなりなんです？ フェイト」

不思議がるリニスをよそにフェイトと体を入れ替える。

この身体はフェイトのであるがフェイトではない。と言うのが最近の自主練でわかった事だ。

ボクの体は普段は存在していないが、フェイトを通じてのみこの世

界に存在することができらしい。

なので、フェイトがいくら傷ついていようがボクがフェイトから主導権をもらった瞬間にボクの体が変わる為、傷も消える。

だからこの状態では身体能力が上がるのだ。なにせフェイトの体ではなくボクの体なのだから。

身体が入れ替わったことを感じ取り、ゆっくりと瞑っていた目を開ける。

そうするとそこにはフェイトの瞳とは真逆の色をしたボクの瞳があるはずだ。

ボクの魔力光と同じ色のサファイアブルーの瞳が。

「!? フェイト、その瞳の色は……」

「リニス、初めましてになると思うよ」

リニスに言葉を言わせないようにしてボクが喋る。

「改めて、初めましてリニス。ボクはレヴィ。フェイトとはここ最近の付き合いで、リニスの言う『見えないお友達』だよ」

リニスの目をまつすぐ見て言うボクにリニスはだいぶ戸惑っているようだ。

「フェイ……いえ、レヴィですか。初めまして。そうですかあなたが」

あれ？ 随分とあっさりしてるな

『随分とあっさりした反応だね』

精神体になってるフェイトも僕と同じことを考えていたらしく、声をかけてくる。

「あの、驚いたりとか、疑ったりだとか、しないの？」

「そうですね、驚いては居ますが疑っては居ません」

「それは、なんで？」

なぜ疑わないことができるのだろうか。はっきり言って瞳の色がいきなり変わっただけで別人とか、普通は信じられないと思う。

「そうですね、一つは勘でしょうか。なんとなくそんな気がしたという事です。まあフェイトが妄想をするような子ではない、と私なりに思っていたからではありませんが。二つ目は今のあなたを目の前にしているからです。目を閉じた瞬間にフェイトの魔力が跳ね上がりま

した。フェイトの魔力ランクは現在はA＋とAA程度。ですがあなたはAAAは少なくともあります。ここまでの魔力の増幅は種も仕掛けも無くてできるはありません。なぜ、という疑問は残っていますが、ね」

そうか、そうなのか。リニスはボクが思っていたより聡明な人(?)らしい。

「それじゃあ、リニス。ボクの事も」

「ええ。あなたも私の大事な教え子ですよ。レヴィ」

——あ。

リニスのその言葉で胸の中に何か落ちるような感触があった。それと同時に目から暖かい何かが零れ落ちてくる。

『レ、レヴィ?』

「どうしたんですか? レヴィ、そんないきなり」

『レヴィ、大丈夫? どうしたの? なんで』

『泣いてるの(ですか?)』

二人の心配そうな声が重なる。

ボクは自分でも知らず間に泣いてしまっていたらしい。

「ん、大丈夫だよ。多分、フェイト以外で初めて、ボクを認めてくれた人だから。ボクを、認めてくれた人が居たから。だから……」

——だから、嬉しいんだ。

その言葉が出せずに、ボクは泣き続けた。

「大丈夫ですよレヴィ。私も、フェイトも側にいますから」

『うん。そうだよレヴィ。私はずっと側にいるから』

『だから大丈夫』

フェイトの声はボクにしか聞こえてない筈なのに、それでも重なる二人の言葉。

ボクはリニスとフェイトに抱かれながら、暫く泣き続けてしまった。

*

「ごめんなさい」

あの後しばらく胸の中で泣いていたのが恥ずかしくなってしまう。
つい謝る。

「大丈夫ですよ」

『そうだよ。いつでも甘えていいんだからね』

なんだか、フェイトの甘やかしスキルが開花しつつあるが気にせず
リニスと話すことにする。

「あの、リニス」

「なんですか？ レヴィ」

「僕にも正式に魔法を教えてほしいんだ」

そう、今まではフェイトが学んでいることを横で見ただけ
だった。

自分とフェイトの体が別々なのだ気づいた時から夜フェイト
が寝るとほぼ同時に主導権をもらい、外に行って身体能力の確認や
トレーニング、魔法の練習を1, 2時間していた。

しかしそれでは限界が来る。

その練習で使っている魔法があっているのか、変な癖がついては居
ないのか等自分一人では確認できない事が多すぎるのだ。

「わかりました。それでは今度からレヴィの為にも時間を作りましょ
う」

そんなボクの要望をリニスは二つ返事で受けてくれる。

「ありがとう！」

『よかったね、レヴィ』

「うん！ ありがとうフェイト。これからもよろしくね」

『うん。これからも一緒だよ』

「そうだ、少しフェイトとレヴィの体について確認させてもらっても
良いですか？」

つい嬉しくて念話で話すことを忘れてしまったが、リニスはそれには
触れずに話題を変えてきた。

(フェイト、大丈夫だよね)

一応基本的な主導権はフェイトにあるのでフェイトに確認を取る。

『うん。大丈夫だよ。レヴィが分かっていること全部リニスに話して。私はいまいち理解してない事が多いから』

(うん。わかった。任せて)

フェイトの許可も貰ったので今わかっている事をリニスに話す。

「なるほど。そうですか……」

説明を聞いたリニスは少し考え込んでしまったがすぐに顔をあげて僕たちの方を見つめた。

「フェイト、レヴィ。あなた達の体についての確認は明日やりましょう。今日はもう遅いので二人とも寝なさい。特にレヴィは明日からちゃんと私が監督してあげるのもう夜に抜け出したりしないように」

リニスはそう言うのとベッドから立ち上がり扉を開ける。

「それでは、おやすみなさい。二人とも」

出る時にこちらに向き直り、挨拶をするリニス。

「うん。おやすみなさい」

『おやすみなさい。リニス』

「フェイトも『おやすみなさい。リニス』だって」

聞こえてないだろうからフェイトが言った言葉を通訳する。

「はい。おやすみなさい」

そう言うとりニスは扉を閉めて去っていく。

「ふう〜」

それを確認したらベッドに倒れこむ。

『あはは、ちよつと怖かったね』

そんなボクに話しかけてくるフェイト。

「うん。そうだね」

『結構緊張しちゃった』

「ボクもボクも!」

『ふふっ』「あははっ」

二人で笑いあう。

「それじゃあ、フェイト身体返すね」

『うん』

目を閉じて体をフェイトに明け渡す。

すると、ボクが精神が幽体離脱でもするかのように視線が上がって行く。

そうして完全に身体を見下ろす目線になると、フェイトが目を開く。

ちゃんと綺麗なルビーレッドの瞳になっている。

「それじゃあ、リニスにも注意されちゃったし。寝よっか」

『うん。そうだね』

お互いに見つめ合いながら布団に入る。

「お休み、レヴィ」

『お休み、フェイト』

そう言っつてボク達は眠りについた。

使い魔×相棒Ⅱそれは第3話

それからと言うもの、日々はゆつくりと、しかし確実に過ぎて行った。

リニスからまともな指導を受ける事ができ、魔法への理解度は格段に上がった。

そんなある日の事、ボク達が魔法の訓練を終え、庭を散歩している時だった。

ボクは庭にある森の方から微弱な魔力を感じたのでフェイトに話しかけてみた。

『フェイト、フェイト』

「? どうしたの? レヴィ」

『なにか魔力を感じない?』

ボクのその言葉にフェイトは不思議そうに首を傾げたが、そのまま魔力サーチを行った。

「うん。感じる」

『すこし行ってみようよ』

「そうだね」

ボクの提案にフェイトは簡単にのり魔力を感じる方向へ歩き出す。なにも疑問に思わないのもどうかと思うが、今回ばかりは助かった。

なにせ今回の魔力反応はボク達、特にフェイトにとっては運命的な出会いになるのだろうか。

——まあ、僕と言う存在がいる時点でどうなるかはわからないけど、ね。

*

魔力反応を頼りに森を歩いていたボク達だったが、付いた場所に居たのは傷ついたオレンジ色の毛皮をもった子犬、いや狼の子供だった。

た。

しかしその狼は傷ついているのか息が細く、今にも死んでしまいうだった。

「レ、レヴィー！ どうしよう!?!」

フェイトはそんな狼をすぐさま抱きかかえると、こちらに指示を仰ぐ

『とりあえずリニスに見せよう！ 何とかしてくれるかもしれない！』

「うん！」

ボクの提案に従いすぐさま屋敷の方へ駆け出すフェイト。

(早くしないとこの子が！)

純粹に子狼の心配をするフェイトに対しボクは心の中でほくそ笑んでいた。

——いらつしやい。アルフ。

*

あれから数か月たった。

ハッキリ言って特筆することは無い。

結局あの狼はフェイトの使い魔となり、『ずっと一緒に居る』という契約に従いフェイトと共にいる。

隠す気もないのと野生の勘からかボクの事は早々にばれたが、特に何事もなく受け入れられた。

まだ幼かったせいもあるのだろう。

この数カ月でアルフも新たに仲間に加わったボク達はリニスにこつてり絞られ、魔法がグングン上達してきた。

アルフと言うとともに研鑽する仲間もできた上、アルフは補助系前衛というなかなか居ない役割として育ちこれまたリニスとは違うスタイルなので模擬戦の相手としてもレパトリーが増え万々歳である。

そして今日はリニスが伝えたい事があるとある部屋に呼ばれた。

「なんなんだろうね〜」

未だ幼いアルフがつかない喋りと純真な笑みでボク達に喋りかけてくる。

「うん。そうだね、急に伝えたい事って言われても。レヴィはなにかわかる?」

『わかるわけないじゃん。でもなんだろうねえ。楽しみだな』

「レヴィなんて?」

「わかんないって」

「そっか」

雑談をしながら目的の部屋を目指す。

フェイトにはああ言ったが僕にはリニスの目的はわかっている。

つまり今日なのだ。

今まで魔法については基礎もぼつちりしたし、今までデバイス無しで空中戦ができる程になった。フェイトもボクも超必殺技と呼べるほどの魔法も習得した。練度自体は足りてないのか、リニスには勝てる事は無いが、あと足りないのは実戦経験とデバイスだけだろうと言うところまで来たのだ。

そう、デバイス。

つまり今回はそう言う事なのだ。

——ボク達のリニスからの卒業。

それが示す事は、遂にボクが動くときが来てしまったと言う事なのだ。

*

そんな事で呼ばれた部屋の前にリニスは立っていた。

「あら、フェイト、アルフ。いらっしやい。レヴィもちゃんと言いますよね?」

「うん。大丈夫だよ」

リニスの確認に対し答えたのと同時にフェイトと入れ替わる。

瞑っていた目を開けるとそこには青色に変わった瞳が見えて居るはずだ。

「ええ。ちゃんというようですね。それではこちらに」

ボクの存在を確認すると部屋へ入るように促すリニス。

フェイト以外はボクの存在を基本的に感知できないので、このように目に見える形で知らせるか、フェイトに伝えてもらおうしかない。

まあ、そんなどうでもいいことは置いておいて。

すぐさまフェイトに変わり部屋の中に入ると、そこには大きな試験管(?)のような物の中に長い物が入っていた。

先端は黒く斧のような大きな目目の刃がついている。その黒の中心には黄色の宝玉がはめ込まれ長い銀の棒がくつついている。

一見するとクレセントアックス、ハルバードとも言えるような見た目。しかし最も良く表現できる言葉を探すならば、黒を基調とした機械的なバルディッシュとなるだろう。

そう、つまり魔導師の相棒にして杖、全てを切り裂く雷刃、寡黙なダンディズムあふれるイケメンデバイス。

インテリジエントデバイスの『バルディッシュ』がそこにあつた。「これなに〜?」

アルフが質問するとリニスにはにこやかに笑った後、バルディッシュを見て言う。

「これは杖です」

「つえ?」

「そう。魔導師の杖にして相棒。魔法の発動の手助けをしてくれる杖、デバイス。あなたの行く先を切り開く雷刃。名を、『バルディッシュ』と言います」

「バル、ディッシュ……」

「はい。これはあなたの杖として、相棒としてあなたを、フェイトを支えてくれるでしょう。レヴィには申し訳ないのですが予算が合わずに一本しか作れませんでした。ちゃんとレヴィの魔力の波長もマスター登録してあるので大丈夫なはずです」

『大丈夫だよ! 気にしないで!』

こちらを見つめばつが悪そうに言うリニスに向かって言う。もちろん聞こえていない筈なので、即座にフェイトが伝えてくれる。

「レヴィが『大丈夫だよ! 気にしないで!』だって」

「そうですか。ありがとうございます。さあフェイト。最終登録を終

えてセットアップしてみましよう」

「うん」

大きな試験管から取り出されたバルディッシュを握りたつた一言「セットアップ」

その一言に応えるようにまたデバイスも一言だけ喋る。

〈Get Set〉

その言葉に従いフェイトの想像した戦闘服、バリアジャケットが展開される。

黒いワンピースに裏地が赤の黒いマント。各所にベルトがあり、腰の部分は前の無いスカート。

端的に言うとうとM o v i e i s tの時のフェイトのバリアジャケットトが展開された。

未だ年齢的には6歳ほどなのに、このバリアジャケット。

——やはりフェイトは真正の露出狂か!?

なんてくだらない事を考えつつも周りの状況を見つめる。

〈初めまして、サー〉

「うん。よろしくバルディッシュ」

「あなたの刃となりあなたを補佐するのが私の役目。なんでも申し付けてください」

「うん。これから一緒に頑張ろうね」

〈イエッサー〉

「それではフェイト、レヴィに変わってあげてください」

フェイトとバルディッシュの語らいが一段落した時にリニスが登場。

それに従い、フェイトと入れ替わる。

変わってもバリアジャケットは展開したまま、バルディッシュのコアが何か読み込むようにチカチカと点滅している程度だった。

「フェイトからレヴィに変わってもバリアジャケットは解けませんね。一応成功しているとみて間違いないでしょう」

リニスによると、成功という話らしいので大丈夫なのだろう。

『よかったね。レヴィ』

「うん」

フェイトと共に安心していると手元のバルディッシュが話しかけてきた。

「ああなたがもう一人のマスターでしょうか？」

「うん。そうだよ」

「マイスターリニスから聞いています。これからよろしくお願ひします」

「ありがとう。ボクの名前はレヴィって言うんだ。これからよろしくねバルディッシュ」

「イエッサー」

やはり口数は少ないようだが、声は渋く落ち着いた感じだ。カッコいい

「それではフェイト、レヴィ。これからはバルディッシュと共に精進してください」

そう言って退出しようとするリニスを止める。

バルディッシュを貰い、リニスに一人前と認められた今しかない。

「どうしました？」

『どうしたの？ レヴィ』

リニスとフェイトの二人が不思議そうに尋ねてくる。

因みに空気だったアルフはバルディッシュに興味津々なようで、指をくわえて見つめている。

閑話休題

「話が、あるんだ……。大事な話」

大事な話。そう今しかない。

リニスにバルディッシュを貰ったと言う事は、一人前として認められたと言う事。

未だ大魔導師と呼ばれるプレシアに勝てるとは思えない。しかし死ぬことは無いはずだ。

だから今しかない。リニスが消えてしまう前に。

——遂にアリシアとプレシアを救う時が来た。

真実×悲嘆Ⅱそれは第4話

今日フェイトに作っていたデバイス、バルディッシュを渡した。それは、フェイト達が一人前の魔導師になったと言う証であり、私の役目が終了したと言う事でもある。

プレシア程の魔導師ですら私の維持には苦勞しているようだ。特に最近は病状が悪化したのかより辛そうに感じる。

あの子達に仕込めることは仕込んだと思っているし、その最後としてデバイスを渡した。

最近では1対2とは言え、デバイス無しで私とともに戦えるほどには成長している。

——もう、私の役目は終わりですね。

その事をプレシアに報告しようと思いい部屋を出ようとしたら急にレヴィに止められた。

「どうしました?」

私がそう言い振り返ると、レヴィは強い意志を秘めた瞳でこちらを見ていた。

フェイトの姿でフェイトとは真逆の青色をした瞳。それはまるで深海の様に深く、大空の様にすべてを見透かすような目だった。

「話が、あるんだ……。大事な話」

「話、ですか?」

レヴィの顔をよく見ると、何時になく真剣な表情をしている。

真剣な時と言えば魔法を習っている時だが、その時でも楽しげな表情で、常に笑顔を絶やさない。それは、魔法の練習以外でもそうだ。

——実際は魔法の練習以外ではフェイトと入れ替わる事はほぼ無いので日常生活でレヴィを見ること自体稀なのだが。

そんなレヴィが真剣な表情でこちらを見つめている。

それだけで、深刻な話だと言うのが伺える。

「それで、どのような話ですか?」

そんなレヴィに対してちゃんと話を聞けるように、体ごと向きを変え正面で対峙する。

それを、真剣に話を聞くと解釈したのかレヴィは一度頷いてから話し出した。

「これは、フェイトにとっても大事な話だからキチンと聞いて貰いたいんだ」

私には存在を感知できないフェイトの意識に向かつて言うレヴィ。しばし頷いた後すぐさま次の言葉を切り出した。

「今から話すことは荒唐無稽な話。だけどとても大切な話。フェイトとプレシア。……そしてアリシアに関する大事な話」

それからの話は今までの世界を壊して有り余る衝撃を私達にもたらした。

私がプレシアの研究室の奥で見ってしまったフェイト似の女の子はアリシアと言う、プレシアの実の娘でフェイトの姉のような存在であること。

フェイトは実はアリシアのクローンであり、プレシアがアリシアを蘇らせようとして生み出し、失敗したとみなして記憶を改竄したこと。

そして自分には、それらを解決できる手段がある事。

「だから、僕はプレシアに合いたい。相対して理解してもらいたい。アリシアもプレシア自身も救えると言う事、フェイトが、アリシアの妹のようなものだと言う事。だからリニスにも協力してほしいんだ。ボクがプレシアと話し合える状況を作ってほしい。欲を言えば、激昂したプレシアを沈めて、説得するのも手伝ってほしいんだけど」

そう言ってきたレヴィはいつになく饒舌でいつになく真剣で、そしていつになく――

――不安な顔をしていましたね。

いつもはフェイトを安心させるためなのか、自信たっぷりと明るい、まさに天真爛漫な彼女はそこに居なく。

外見通りの、大人に信用してもらえるか不安気な少女がそこには居た。

――そんな顔をされたら、大人としては協力するしか無いですね。

「わかりました。レヴィの言う通りプレシアの説得を私も手伝いま

す」

「ありがとう！ リニスー！」

私の言葉にまさに太陽の様に輝く笑顔を浮かべるレヴィ。

——フェイトもこのように笑えるようになるならば、手伝う事になんの躊躇いもありません。

「それでは、何時プレシアと会いますか？」

それによって私の根回しも変わってくるでしょうし、今のプレシアがそう簡単に説得できるとは思えません。

——場合によっては強硬策も……、と覚悟はしておきましょうか。

「あー、今ちよつとフェイトが落ち込んでるから、早くても明日、……が良いかな」

私がそんな考えをしていると、レヴィは少し困ったような表情で言いました。

「なるほど、私ですら衝撃的なのですから仕方ありませんね。フェイト。ゆっくりと考えてください。あなたにとっても重要な話なのですから。レヴィ、フェイトをよろしくお願いしますね。私は少しやる事があるので。それでは」

少し逃げるようになってしまいがやる事があるのは事実だ。

フェイトは少し静かに考える時間も必要だろうし、レヴィも側に居る。彼女に任せておけば大丈夫だろう。

——さて、プレシアにはどう報告しましょうか。

元々プレシアには今日の事を報告するはずであったのだが、その内容を少しばかり変更しなくてはならないだろう。

——あの子たちの笑顔を見るまでは、消えるわけにはいきませぬね。

フェイトとレヴィと、眠っているように死んでいるアリシアの笑顔を見るためには。

そんなことを思いながら、私はプレシアの研究室に足を向ける事にした。

*

リニスが退出した後、ボク達はフェイトの部屋に帰ってきた。あれ

から今までフェイトは一言も喋っていない。

アルフは子狼の状態となり、足元で丸まっている。そんなアルフもどこか落ち込んでいるように見えるのは、フェイトが落ち込んでいるからだろうか。使い魔は主と感覚のリンクがあるらしいし、その所為なのだろう。

結局、誰も一言も喋らず、重い空気の部屋についてしまう。

とりあえず、ベッドに腰掛けじつと待つ。衝撃の事実を発表した本人が何か言うのも憚れるし、何よりボク自身がなんと声をかけていいのか思いつかない。

そんな重い空気のまま時間は経っていき、何分経ったのかはわからないが、ポツリとフェイトが話しかけてきた。

『…ねえ、レヴィ』

その声は沈んでいて聞いている方が悲しくなる様な声だった。

『さっき言ってた事って、ホント?』

「——うん」

『……そっか』

何も言えなかった。フェイトから発せられたのは、信じたくないと言う思いや、悲しみを押し殺したような声だった。今回ばかりはさすがに後悔もする。

——6歳、自我が芽生えてからはほんの数年の少女には早すぎたか。

当然だろう。今まで信じてたものが崩されるのだ。母の笑顔も何もかもが、記憶の中のアリシアだけに向けられたもの。自分フェイトに希望など、最初から無かったのだから。

『レヴィは……、レヴィは一緒に居てくれるよね?』

まるで藁にすぎるような思いだったのだろうか、その問いかけはあまりにもか細く今にも消えてしまいそうな声だった。だから、そんな不安をかき消すように、藁では無く大木になれるようになるべく明るい声で答える。

「うん。ボクはずっとフェイトと一緒にだよ。何があってもフェイトの側に居る。だって、ボクとフェイトは1つなんだから」

『……』

ボクの言葉に思う事があるのか、それとも信じられないのかフェイトからは落ち込んだ雰囲気を感じる。

当然だ。今まで仲良くしていたとはいえボクは姿も見えない、いわゆる幽霊のような存在。しかもついさつき今までの自分の存在を否定するような事実を、自分の知らなかった事実を知らしめたのだ。

——もう、どうしようもないのかな……。

言葉は軽い。とは良く言われる。しかし、言葉にしなければ伝わらない。ともよく言われる。だが、それは心が通じ合わない人同士だからだ。だから言葉にしなければ想いは伝わらない。しかし、心の中の想いは言葉で表せば軽くなってしまふ。言葉に表せられるからこそ軽くなってしまふ。

それは仕方ない、どうしようもない事実でしかない。いかにボクがフェイトに憑依してしようと、フェイトとボクは違う人間であり、心を共有していない。だから想いが伝わらないのは仕方がない。どうしようもないことだ。だが——

「わたしも！ フェイトとずっといっしょだよ!!」

——この世には、フェイトには心を通わせられる、想いを共有できる存在がいる。

使い魔。今まで空気を読んでいたのか、ヒト型ではなく、動物の姿になってボクーフェイトーの足元で丸くなっていたアルフが、ボクという言葉一端から聞けば独り言ーを聞いていても立っても居られなくなったのだろうか、顔を上げてボクを、フェイトを見つめて語りかけてきた。

アルフの想いはボクには伝わらない。それでも、アルフが何を想っているのかはわかる。それはフェイトにも伝わっているはずだ。使い魔とその主の感覚共有、それは一方的なものかもしれないが、フェイトの孤独感アルフに伝わっている。

「だからー！ いっしょだからー！ ぜったい、いっしょだからー！」

そんなアルフだからこそ放てる言葉。それは語彙の無い拙い言葉。だけど、だからこそ伝わる必死な想い。ボクにすら伝わっているの

だ。使い魔の主である、アルフの一番であるフェイトにはもつと伝わっている事だろう。

「……ありがとう。ありがとうアルフ……」

そう言つてフェイトは泣きながらアルフを抱き上げた。

フェイトがそうしたいと思つたから、ボクは引いた。本来この身体はフェイトの物である。アリシアの物でもボクの物でもないフェイトの物である。だから変わった。

ボクはあまり表に出るべきではないのだ。

——今回はアルフに助けられちゃつたな。

できればボクがフェイトを救つてあげたかつた。しかし今回ボクにはそれができなかつた。

結局、人が人を救おうなどと思うのは、思い上がりにすぎないのだろうか。

——それでもボクは、フェイトが幸せになる為なら何でもやるよ。

それが、ボクがこの世界に存在する理由そのものなのだから。

覚悟×邂逅Ⅱそれは第5話

レヴィがリニスに話した内容は衝撃の一言だった。

言葉にすれば簡単かもしれないけど、それでも私が伝えられるのは『衝撃だった』としか言いようが無い。

——自分の記憶は自分では無い、アリシアの物だ。

——自分はアリシアのクローンだ。

——母さんの研究はアリシアを生き返らせることだ。

——母さんはこの先長くは無い。

レヴィの語った全てが私を否定するようで、私の存在をかき消すように、とても、とても——

——辛かった。

心に穴が開いたようで、足元の地面が崩壊するようで、自分が自分でいられなくなる様で、何も手につかなかつたし何もできなかつた。

それでも、それでも——

——アルフの声だけは私に響いてた。

アルフの声、心の声。本心から私を心配する声、感情が伝わってきた。

アルフと私は繋がっている、でもそれは一方的なもので、私の心がアルフに伝わっても、アルフの心が私に伝わるわけではない。それでも、アルフの私を心配してくれる感情は伝わってきた。精神リンクとかそんなの関係なく、私に伝わってきた。

そんなアルフには多分今の私の感情も伝わっているのだろう。だから心配してくれているのだと思う。

——結局それは使い魔だから。

そんな斜に構えたような思いも浮かんでくる。それでも

「わたしも！ フェイトとずつといっしょだよ!!」

そんな、たどたどしい言葉は本物だった。

使い魔だからと言う理由もあるかもしれない、契約だからと言う理由もあるかもしれない。それでも——

——それでも、アルフのキモチは本物なんだね……。

そう感じられた、理由は無い。もしかしたら私がそう思いたいだけなのかもしれない。それでも私はそう感じたし、そう思った。だからか、自然とアルフを抱き上げていた。

「……ありがとう。ありがとうアルフ……」

声が震える、多分涙も出ているのだろう。そんな私にアルフは何も言わず抱きしめられている。そんな私を、レヴィは優しく見守っていてくれる。

たとえ母さんと過ごした記憶は私のものでなくても、レヴィと、リニスト、アルフと過ごした記憶は私だけの物だと、自信を持って言える。

だから私は泣いた。記憶の中の優しい母が本当に記憶の中だけだった悲しみに。レヴィも、アルフも共にいてくれる、そんな当たり前前の喜びに泣いた。

今だけは神様も許してくれるだろう。私は、優しい母に別れを告げるように、思い出を押し流すように、ただひたすらに泣いた――。

*

目に指す光で目が覚める。気づいたら朝のようで、目が覚めると言う描写をしたように、私はベッドの上で横になっていた。隣にはアルフも居て寝ている。

――寝ちやつてたのか……。

多分、泣き疲れて寝てしまったのだろう。そう考えると少し恥ずかしさもこみ上げてくるが、それでもどこかスッキリとした感覚がある。

やっと自分が自分になれたような、自分で自分を認められたかのような。

まるで――

「――まるで、正月の朝に新品のパンツを穿いた時みたいに清々しい気分だよ！」

『なに言っちゃってんの!? フェイトオ!!』

私が、なにかしらの毒電波を受信したと思ったら、レヴィが大きな声で突っ込んできた。

「おはようレヴィ」

『う、うん。おはよう。フェイト』

どこか、よそよそしい雰囲気から感じる。

「レヴィ、大丈夫？」

『フェイトこそ、その……』

なにかを言いよどむレヴィ、それはこちらを心配しているようで、まるでどう言えば良いかわからないように。

——ああ。そっか。

そんなレヴィの雰囲気には納得した。多分レヴィは昨日の事で私がどう思っているのか不安に思っているのだろう。

いつも何かを考えていないように見せかけて色々考えているレヴィ。

どこかおどけた雰囲気はこちらを和ませてくれるレヴィ。

どれもレヴィではある。とても強い子なのだと思う。でも、本当のレヴィは違う。

普通の人の様に、何時も悩んでいる。何を悩んでいるかはわからないし、教えてくれないけど悩んでいる。いつも不安がっている。

リニスに打ち明けた時も、今も。

そんな、優しくてかっこよくて、少しだけ可愛らしいレヴィを私は微笑ましく思った。

『どうしたの？ いきなり笑って』

「ううん。何でもないよ」

考えたことが顔に出たのだろう。つつい笑ってしまったようだ。

「レヴィ」

『なに？』

「私は、大丈夫だよ」

『……そっか』

「うん」

短いやり取り、何が大丈夫なのかもわからないそんなやり取り。

——でもそれで良い。

レヴィとはアルフ程の明確なつながりは無い。それでも私たちは

繋がっている。

アリシアがある意味私のお姉さんならば、レヴィはある意味私なのだ。

私が、^{フエイト}生まれた時その瞬間に一緒にこの世にあらわれたのがレヴィ。私以外に見えないけれど、私以外にとっては幽霊みたいなものかもしれないけど。それでもレヴィは私の側に居る。言うなれば私とレヴィは『双子』なのだ。

もしかしたらもう一人の私なのかもしれない、本当に私の妄想なのかもしれない。それでも今、レヴィはここにいるし、私にとってはそれで良い。双子の姉妹のレヴィで良い。

どちらが上も下もない。対等な兄弟で、友人でもう一人の私。それがレヴィ。

「レヴィは、私と一緒に居てくれるよね」

『もちろん。ずっと一緒だよ』

力強い相槌。

それで良い。それだけで良い。

レヴィが側に居る。アルフと一緒に居る。今はそれだけで良い。できるなら――

「母さんや、リニス、アリシアも一緒だと、もっと良いよね」

だから――

『そうなる為に、今から行こう。プレシアの所へ』

母さんと決着をつけるんだ。

*

ちよつと変なテンションだったフエイトが落ち着いたので、アルフを起こして部屋を出る。

すると、こちらの部屋を訪ねようとしていたのか、リニスと鉢合つた。

「ああ、フエイト。もう大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。ありがと、リニス」

リニスの問いかけに対し、朗らかに笑い答える。その表情を見て安

心したのか、リニスも微笑んだ。

「そうですか。……今日は、どうしますか？」

どうしますか、とはもちろん昨日の事についてなのだろう。ボク自身もうどうにでもなれ、と言う気持ちが強いが、それと同時に何となるだろう。と言う気持ちもあるので、今すぐにプレシアの下へ向かって大丈夫なのだが。

——フェイトは、昨日の今日だしなあ。

そんな事を考えていると、フェイトが念話をしてきた。

(ねえ、レヴィ。「どうしますか？」ってやつぱり)

『うん。プレシアの事、だろうね』

(レヴィは大丈夫なの?)

『それはこっちのセリフ。フェイトの方こそ大丈夫？ その、昨日の今日だし』

(私は大丈夫だよ。もし、もし母さんが私を認めてくれなくても、レヴィもアルフも居るから)

そんなフェイトの言葉は、とても力強かった。6歳ほどの、自意識が生まれてからは1年たつか経たないかの少女が言うにはあまりに重く、あまりに力強い。覚悟した者の言葉だった。

(……レヴィも、いつも一緒。だよね?)

それでも、その後に伝えられた言葉は、不安に駆られ押しつぶされそうな少女の言葉だった。

だからボクは言う。この世界に生まれた瞬間に決めたことを。フェイトを幸せにする。そのためにボクは居る。

『うん。ボクはいつもフェイトと一緒にだよ。でも』

でも、ボクとフェイトとアルフだけの生活より、母としてのプレシア、姉としてのアリシア。リニスにアルフ。そんな皆がいる生活の方が。闇の書の中で見せられた夢のような生活がフェイトにとっては幸せだと思っから。

そんなボクの考えを読み取ったかのようにフェイトが続ける。

(わかってる。母さんにアリシア、姉さんにリニス、アルフにレヴィ。みんないれば、もつと幸せ。だよね)

そう言った時のフェイトの顔は、どこか大人びたようで、とてもカッコよかった。

だから、そんなフェイトの負けまいと、ボクも覚悟を決める。ボクよりも直接的に関係のあるフェイトがここまでの覚悟を持っているのだから。

『うん。そうだね』

そんな短い言葉だけど。そんな短い言葉だからこそ伝わる。お互いの覚悟。だから

「リニス」

フェイトがリニスに告げる。リニスは静かに頷いた。こちらが言いたい事も分かっているのだろうし、多分リニスも覚悟してくれている筈だ。

「行こう。母さんの下へ」

一回り大きくなったように見えるフェイトを先頭に、進む。目指すは時の庭園の玉座の間。アリシアの前で、今と決着をつける。

狂愛×親愛Ⅱそれは第6話

「私はプレシアに事情を説明してから呼んでできます。ですので、あなた達はゆつくりと何を言いたいか考えておいてください」

リニスはそう言い残して玉座の間から出て行った。

ボク達が今いる場所は時の庭園の最奥、玉座の間。

玉座の間に付いても当然プレシアは居ない。常日頃から玉座の間で踏ん張りかえっている人なんていないだろう。なのでリニスが呼びに行ったのだ。

「どうする？ レヴィ」

打ち合わせをしておけとリニスに言われたからかフェイトがこちらに伺ってくる。

『基本はボクが喋るけど、最初はフェイトがプレシアに言いたい事言えれば良いよ』

「わかった」

『それと、ボクが喋ってるときはいつでも防御魔法が展開できるように準備してくれるとありがたいかな』

「うん」

『あとは……、なるようになるさ』

「そうだね。なるように、なるよね」

軽く打ち合わせをしてからもう会話が無くなる。しかし、居心地が悪いわけでは無い。この無言は、お互いが目指すべき場所、やるべきことを理解しているから生まれる無言。もう言葉は必要ないのだ。

「ねえ！ わたしはなにすればいいの？」

そんな中アルフが声をかけてきた。人間形態になってもまだ幼い。確かに戦えはするが、今回の相手はあの大魔導師だし、戦闘し勝利するのが目的ではない。あくまで対話が目的であり、戦闘行為は相手が暴力に訴えてきたときの最終手段でしかない。

「そうだなあ。じゃあアルフは、私たちの事守って、ね」

そんなアルフの質問にフェイトが答える。それを聞いたアルフは顔を輝かせて大きく首を振った後気合を入れて扉を見つめている。

微笑ましい光景ではあるが、アルフもやる気十分、と言う事だろう。使い魔は主の精神状態に影響されると言う。ならば今のフェイトのやる気がアルフに伝わっていると考えてもよさそうだ。

そうして、気合十分なボク達が言葉もなくただやる気を満たして待っている、扉が開いた。

その扉から入ってくるのはリニス。そしてリニスの後ろに居るのだが、

——プレシア・テストロッサ。

フェイトの母であり、アリシアの生みの親。魔法少女リリカルなのは第一期のラスボス。大魔導師にして研究者。魔導師としての実力は大魔導師と言われるだけの事はある。『条件付きSS』と言う魔導師ランクに加え、次元跳躍魔法と言う難度S+の魔法すら使いこなし、その魔力量から放たれる一撃は、次元航空艦の防壁を突破し一時でも機能を落せてしまうほど。

対して、研究者としてはどうかと言うと、魔導エネルギー工学の研究者にして、過去、魔導炉ヒュードラの開発主任でもあった。残念ながらそれがプレシアの不幸の始まりでもあった訳だが。まさに天才の名にふさわしい人物である。

その本人が今日の前に居る。今はまだ私服に白衣と研究者姿であるので、リニスが上手く説明してくれたのだろう。

「それで、そのレヴィとやらはどこに居るのかしら？」

ボク達を一瞥した後、リニスに向かって言うプレシア。まあ、当然の疑問だろう。なぜならプレシアにとって、今この場には自分とリニスに、フェイトとアルフしかいないように見えて居るのだから。

「プレシア、先ほども伝えたとおりレヴィはフェイトの中に居ます。二重人格、と言えば簡単でしょうか」

「そう。ならば、早く出さないさいフェイト。リニスが言っている事が本当なら瞳の色が変わるのでしょうか？」

「……母さん」

「今あなたと話すつもりはないの、良いから早く変わりなさい、フェイト」

フエイトの言葉に耳を傾けず、冷たく自分の要件を伝える。それはまるで焦っているようで、こちらを急かしている風にも受け取れる。そう言われたフエイトは諦めたのか、目を閉じこちらと変わる。(ごめんね、フエイト)

『……大丈夫。母さんとアリシアの事、よろしくね』
(うん。頑張るよ)

目を開ける寸前にフエイトと少しだけ言葉を交わす。フエイトからはわかっていたような、諦めたような感情が感じられる。それでも、よろしくされたのだ。頑張らないわけにはいかないだろう。そう、改めて覚悟を決め、目を開ける。

そこには、意識で見えていた時とは違い、目を通じて脳が処理する、生のプレシアがいた。

改めてみて思う、こちらを人間とは思っていないかのような冷たい目。表情は無表情だが、オーラと言うのだろうか、そう言う何とも言えないモノを感じる。

「初めまして。プレシア・テスタロッサ。あなたの娘”の体を間借りしてる。まあ幽霊みたいなものだと思ってくれて構わないよ”

ボクのあいさつに少し表情をゆがませるがすぐさまそれを元の無表情に戻し、なるべく感情を押し殺そうとした声音で声をかけた。た。

「あなたが、レヴィね。なるほど、確かに、一目でわかるわね。”ソレ”とは真逆の瞳の色。それで？ あなたの言い分は何かしら？ まさか本当に私の目的を達成できるとは言わないわよね」

「できるよ」

プレシアの質問にボクは即答する。ここから先ごまかしは利かない。相手はこちらの何倍もの人生経験と知識を蓄えている。弱みを見せちゃいけない。だから、事実だけを簡潔に、直接的に伝える。

「嘘を言うのは感心しないわ。私が何年かけても突き止められなかったモノが、ぽつと出のあなたに解決できるとも？ もし、本当なら方法を教えてもらいたいものね」

「できる。あなたの目的を達成する方法は教える事ができるし、実践

もできる」

「ならー」

「でもー」

声を荒げるプレシアをこちらも大声を出すことで収める。

「対価としてボクの言い分を聞いてほしい」

「……いいでしょう。何が欲しいのかしら？ お金？ それとも私の研究成果かしら？ 研究成果ならすきにすればいいし、お金なら少し時間をくれればすぐに用意するわ」

まくしたてるように言ってくるプレシア。確かにアリシアの為ならば金に糸目は付けないだろうし、プレシアの研究成果ならばそれなりのもので得られるだろう。

しかし、そんな即物的なものは要らない。必要ない。

「そう言うモノは良いんだ」

「なら、何が欲しいのかしら？」

プレシアの声から感じ取れるテンションが少しづつ上がってきている。

プレシアもボクも、お互い冷静になろうと努めているが、それでも熱がこもってきている。お互い自分の目的を達成するため、お互いを満足させる妥協点を探すため。

「ボクがあなたに望むのはただ一つ」

言え。言うんだ。ボクがこの世界でやるべき目的の一つ。ボクがボクである存在理由。

フェイトに幸せを上げる為に。

ボクは、ボクはプレシアに、望むのは――

「プレシア・テストロッサ。ボクがあなたに望むものはただ一つ。それは……」

――それは――

「フェイトを自分の子だと、アリシアの妹だと認めて、一緒に幸せな家庭を築いてもらいたい」

そんな、簡単そうで難しい。ただ一つの事。

*

レヴィという「アレ」の中に居るらしい存在が私に話があるとり二スに伝えられた。

それは、レヴィと言う者が私の目的を達成する手段があるのだから、アリシアの蘇生と云うものだった。

その言葉を聞いた時に私は居てもたつても居られなくなった。すぐさまその場に駆けつけ、拷問にかけてでもその方法を吐かせたかった。

しかし、私は冷静になるよう努めた。相手は交渉がしたいと伝えてきたのだ。ならば、相手にも言い分が、こちらに要求する事が有る筈だ。それを引きだし、満たすことでこちらの要求も満たされる。そう言う話し合いの場を設けたいと言うのだ。ならば冷静になるべきだろう。

しかし、そんな私の思いも開始しばらくして打ち壊されることになる。

相手の要求を聞いた瞬間、私は冷静でいられなくなった。

頭が沸騰した。まるで脳味噌が溶岩に変わったかのように熱くなり、考える事が困難になった。ここまで頭に血が上ったことは人生で何度あるだろうか。もしかしたら初めてかもしれない。

「ふざけないで！」

そんな私は、気が付いた時は大声で怒鳴り散らしていた。

「『ソレ』を！ その出来損ないを娘だと思えですって!? できるわけがないでしょう!! 私の娘は！ 古今東西、未来永劫、現在過去未来、何時どんな時でもアリシアただ一人なのよ！ 私の家族は!! アリシア以外に居ない!! 私はアリシアの為ならどんな事だつてやれたししてきた！ そんな私に！ アリシアの出来損ないを！ お人形を娘だと思えですって!? ふざけるのも、いい加減にしてちょうだい!!!」

「それでも、ボクはあなたとフェイトに本当の親子になって貰いたいし。アリシアも合わせて、本当の家族になって貰いたい」

激昂する私とは対照的にどこまでも冷静なレヴィの声が聞こえる。まるで、その瞳の色みたいに冷静に、冷徹にあちらの言い分を突き付

けてくる。

「あなたに何が判るの！ あの時、アリシアを失った私のキモチが!!
あなたにわかると言うの!!?」

「あなたのキモチはわからない。でも、今のあなたより、アリシアのキモチはわかると思うよ」

「ふっ、ぎけるなああああああつあああああああつあああああつあああああつあああああつあああつあああつあああつ!!!」

気が付いたら私は、隠し持っていたデバイスをセットアップしていた。

何も考えてはいなかったし、何も考えられなかった。ただこの激情を何かにぶつけたかった。目に映る全てのモノを破壊したかった。ただそんな子供の癪癪のような激情に身を任せてデバイスを振るった。魔法も何もない。ただ私のデバイスを形態変化させた鞭でただひたすらに目の前の子憎たらしい存在に打ち続けた。

「ハア……ハア……」

しかし、そんな私の八つ当たりはレヴィには届いてなかった。

「プレシア、少し落ち着いてください」

「ふたりは、わたしが守るんだ!」

いつの間にかレヴィの目の前に出リニスと、アルフとか言うッアレの使い魔が防御魔法を展開していた。デバイスでの攻撃とは言え、魔力も何も込めていない、振るっただけの一撃が防御魔法を貫けるわけもなく、三人は無傷で立っていた。

「あなた達も、私の邪魔をするのね……」

それならば。私の邪魔をするならば……

「話を聞いてください。プレシア!」

リニスが何かを言っているようだが頭に入っていない。

私の邪魔を。私とアリシアの邪魔をするモノは、全部、ゼンブ——
——ゼンブナクナッテシマエバイイ

「私は、アリシアの為ならなんだってできるの。あなた達を消すことだって!」

そう言って魔法を展開する。私の最も信頼し、最も得意とする魔

法、サンダーレイジ。ある一定の範囲を稲妻で打ち払う魔法であり、電気変換素質と相まって、高威力、広範囲かつ、雷の感電により、攻撃を受けた後の行動を制限するなど、追加効果もある。

本来は自然界の電子運動、つまり自然発生した静電気を利用し雷自体を起こさせることで、魔力消費を抑えるのだが、室内でも魔力さえあれば使える。さらに、術式構築の段階で対象認識を組み込んでおり、たとえ範囲内だろうと、対象以外には効果を及ぼさない。

細かく説明したが、結論から言うとその魔法が放たれることは無かった。

私が魔法を展開した瞬間に、リニスとアルフは防御魔法を多重展開し、なおかつレヴィイからもフィールド系魔法の展開を確認できた。その中でレヴィイは唐突に私に言葉を投げかけた。普通の言葉は今の私には届かなかつただろう。しかし、その言葉だけは届いた。

「あなたはそうやって、アリシアにすべての罪を被せるの?」

その言葉は私の耳を貫き、脳まで届き、脳が理解し、そして一瞬で激昂していた私を冷静にさせる程の力を持った言葉だった。

——私が、アリシアに罪を被せる?」

「なにを、何を言っているの」

「あなたはそうやって、アリシアのためだと言って罪を犯す。違法研究に手を染め、生み出した子を娘だと、人間だと認めず育ネグレクト児放棄し、今は殺人まで犯そうとしている。それらすべてを行った手で、あなたはアリシアを抱きながら言うんでしょう? 『アリシアの為に頑張ったのよ』って」

——ナニヲ、イツテイル?

言葉の内容は届いていた。しかし理解しなくなかった。

「目覚めたアリシアはそんなあなたを見てどう思うんだろうね。自分と同じ顔をした少女を無視し、人間として認めず、ましてや殺して。そうして目が覚めた自分に老けた母が言ってくる。『私はあなたのために罪を犯したのよ』って」

私に向かって放たれる言葉の刃が心を傷つける。脳味噌をぐちゃぐちゃにする。それでもレヴィイの言葉は止まらず、私に向かって見え

ない剣を振り下ろす。

「優しい母しか知らなかった少女はどう思うんだろうね。ありがとう。と言って素直に喜ぶのかな」

その言葉に私は居ても立っても居れなかった。

「ふざけないで！ そんなわけないでしょう！ アリシアは優しい子なのよ！ 優しくて、優しくて！ そんな子が!!」

気づいたら叫んでいた。アリシアは優しくかった。私が仕事で忙しいときも泣かず、悲しまずに待っていた。私が返ってきたときは明るい笑顔を見せてくれた。

一人でさびしくないように、大きくなったら私を手伝えるように、妹すら願った。そんな優しい子だった。

「なら、そんな優しい子はどう思うんだろうね。自分の遺伝子で作られた、ある意味で自分自身、妹のような子が優しくかった母に虐待され、殺され。その事を母は誇らしげに自分に語ってくる姿を見て。優しい優しいアリシアは、どう思うんだろうね」

そうだ。あの子は妹を欲しがっていた。"アレ"はそんなアリシアの遺伝子から生み出したクローンだ。それも、ただのクローンじゃない。

ヒュードラの暴走による、一瞬で大量の魔力を浴びてしまったが故に起きた心肺停止。その実情は急激な魔力に耐え切れなくてリンカーコアが壊れてしまったのが原因だった。

魔力生成機関のリンカーコアは不思議な物だと思われているが、それでも内蔵の一部であることは違いが無い。むしろ心臓に近い位置にある分、胃や腸よりも生死に直結する。

それが破裂したとなればなおさらだ。

もし、アリシアに大きな魔力があれば、自分ほどの魔力があれば、そんなことは起きなかつただろう。リンカーコアの活動が弱まっても、破裂してしまうことは無かつただろう。何度もそう思った。

だから"アレ"には、フェイトには大きな魔力が生み出せるようリンカーコアを調整した。

そう。手を加えたのだ。クローンそのままでは、また同じようなこ

とが起こった場合同じ結末になってしまう。だから手を加えた。

それだけじゃない。クローンと言うのは総じて寿命が短い。採取した遺伝子がすでに寿命を消費しているにもかかわらず、無理やり急成長させるために、同じ年月でも普通のヒトより寿命を消費する。だから寿命が短い。

そんなことが許せず私はアリシアのクローンを生み出すときにテロメアにも手を出した。つまり、通常より寿命を延ばしたのだ。そうすれば、クローンでも普通の人程度の寿命になる。

そこまで手を加えているのだ。当然同じ人間になる訳がない。手を加えているのに、手を加えて居ないものと同じであれば、なんと傲慢な考え方なのだろう。

そして最も恐ろしいのは、そんな当たり前の考え方に気が付かなかった今までの狂った自分だった。『アリシアを取り戻す』その執念に取りつかれ、何もかもを顧みず、自分すらも顧みず突っ走ったと言うのに、それは何時からかアリシアすらも気に掛けず、自分の妄執を果たすためだけの行為になっていた。

「あ、あぁっ」

目の前が暗くなり、足元がおぼつかなくなる。気づけばデバイスを床に落とし、その隣にへたり込んでいた。力が入らなかった。

絶望してしまった。己が犯した罪に、己が行為の意味に。

——なぜ、気づかなかったのか……。

その理由はわからない。

今となつてはアリシアを失ってから今までの自分がまるで誰かに操られていたのでは、誘導されていたのではと思えるほどに、狂っていた。狂おしいほどの愛に狂っていた。

「プレシア」

そんな私の側に近づくのはリニス。フェイトが一流の魔導師となるために私が用意した使い魔。昔アリシアが拾ってきた山猫。教育の邪魔になるからと、使い魔になるまでの記憶はすべて消した。リニスはアリシアの数少ない孤独を紛らわしてくれる家族だったと言うのに。

「……ああ、リニス。ごめん、なさい」

自然と謝罪の言葉が口からこぼれていた。多分リニスには伝わっていないのだろう。私が何に対して謝っているかなど、しかし謝らずにはいられなかった。

「……プレシア。私に謝っても何も意味はありません。私はあなたの使い魔です。それより以前の記憶もなければ、それ以外だと言う自我もありません。ですがプレシア。そんな私にも、過去が戻らない事はわかります」

リニスの言葉はまるで子供を諭すような口調すら感じられた。その言葉は私を怒らせる事は無く、ただただ心の中に入ってきた。

「ごめ、ん。……ごめん、なさい……」

「謝っても何にもなりません。プレシア、未来を見ましよう。過去は戻らない。でも今は、その過去を取り戻してくれる人が居る。手段がある。ならば、過去を見続けて後ろ向きに進むのは今日で終わりにしましょう。明日からは、フェイトと、レヴィと、アルフト、私。もちろんあなたとアリシアの二人も入れて。みんな歩いていきましょう」

そんなリニスの優しい言葉はまるで母のようだった。アリシアと共に居た頃の自分の様に、彼女らを慈しむ母の言葉だった。

私が母どころか人としての道を踏み外していた時、フェイトを育てていた母は、まさにリニスだったのだ。

「……母さん」

その言葉に思わず顔を上げる。その先に居たのは、赤い瞳の、まさにアリシアと瓜二つの少女。それでも、その顔には天真爛漫なアリシアと違って覚悟を決めた者特有の表情が垣間見える。

「母さん」

——こんな私でも、母と呼ぶのね……。

そう思いながらも、フェイトが私に向けて言う言葉を、私はただただ黙って聞いていた。

「私はお人形かもしれませんが。私はアリシアの出来損ないかもしれませんが」

「それは！」

——そんなことは無い！

そう声を大にして叫びたかった。だけどできなかった。私を見下ろすフェイトの瞳は、まだ伝える事があると、悠然と語っていたからだ。

「それでも、私はあなたを恨んでいません。母さんが私を作ってくれたから。アリシアでは無く、フェイトとして作ってくれたから、私はレヴィに出会いました。リニスに出会いました、アルフに出会いました。多分それらは全部、私がフェイトだったからできたことで、私がアリシアだったらできなかったことで」

子は、気づくと大人になっていると言う。しかし未だ2桁にも年齢の満たない子が、自意識だけならたった数年の子が、ここまでの成長をするのだろうか。

その大人びた言葉と覚悟は、まるで私を断じるかのようで、私が必要ないと告げるようで、とてもつらかった。

それでも聞かなくてはならない。

彼女を生み、そして放置した罪を贖わなくてはならない。

「だから、私はあなたに感謝します。プレシア・テスタロツサに、フェイト・テスタロツサとして生んでくれたことを感謝します。産んでくれてありがとう」

断罪されることすら覚悟した私に対し、フェイトはただ感謝の言葉を伝えた。

「だから、最後に聞いてください。私はあなたの娘じゃないかもしれない。それでもあなたは、私の、フェイト・テスタロツサの母親です」
「……………」

言葉も出なかった。彼女は母だと言う。自分が娘では無くても、私の事は母だと言う。

——なんて良い子なのか。

どうしてこんな良い子が生まれたのか。私の遺伝子では無い、産んだ命に責任を持たず狂った女の娘がここまで良い子に育つのだろうか。

「だから」

私がいくら自責の念に飲まれても、フェイトの言葉は続く。

「だから、あなたが許してくれるのなら、あなたが望むのなら私はあなたの剣にも盾にもなりません。母さんの罪を、たとえば世界が許さなくても私が許します。だから」

ああ、この子は。フェイトは。アリシアの妹は――

「だから私の母さんのままでいてください」

――どこまでお人よしのだろうか。

特典×復活Ⅱそれは第7話

フェイトがプレシアに言いたい事を言い終わった後プレシアは泣き崩れていた。それはまるで、この20数年の月日に貯めた全ての涙を出し尽くす勢いだっただけだ。

そんなプレシアをフェイトは黙って抱きしめ続けていた。何も言わず、ただただプレシアと抱き合っていた。

そうしてしばらくたった後、プレシアは泣きやみフェイトから離れ目元をぬぐう。その後、フェイトをしつかりと見つめた。

その瞳は、初めてであった幽鬼のような瞳でも、会話中の憎しみのこもった瞳でもなく、この地に足を付けている人間の目だった。

「フェイト」

「はい」

プレシアが声をかけるが、その先が出てこないのか暫く黙る。それでも決心したように一つ深呼吸してフェイトの目を見据えて喋り出した。

「私はあなたの母親では無かったわ」

「……はい」

「少なくとも今まではそうだった。それでも、そんな私でもあなたは私を母と呼ぶの?」

プレシアの質問は最もだろう。育児放棄は立派な虐待であり、虐待している者を親と思うか、と聞かれたらNOと答えたくなる。

「はい。あなたは、プレシア・テスタロッサは私、フェイト・テスタロッサの母親です。世界でたった一人の、大切な」

それでも、小さな子には、フェイトには関係ない。

親と子は切っても切れない関係にあるのだ。

「……わかったわ。あなたがそこまで言うなら私はあなたの母親になりましょう」

プレシアのその言葉を聞いた瞬間にフェイトの顔が輝く。

「いえ、違うわね」

しかし、プレシアはそう呟くとフェイトに向かって頭を下げた。「フェイト、私を許さなくていいわ。それでも私を、あなたの母親にしてください。すぐは無理かもしれない。しばらくはぎこちないかもしれない。それでも必ずあなたの事を愛するから。必ず良い母親になるから。だから、私と家族になってください」

それはみっともない姿だったかもしれない。50も過ぎた女性が6歳程度の少女に頭を下げているのだから。

それでも、その行為はプレシアには必要な儀式なのだ。娘が乞い、母が認め。母が願い、娘が認める。そんな荒唐無稽な儀式を終えなければ、この二人は前に進めないのだ。

「はい。はいっー」

感無量。その言葉が似合うようにフェイトは笑いながら泣いていた。それは顔を上げたプレシアも同じで、二人は自然と抱き合っていた。

それはまるで親子のようで。自然と、母と娘は抱き合い、お互いに家族ができた喜びに涙を流した。

*

「フェイト、悪いのだけれどレヴィに変わってもらえるかしら？」

しばらくフェイトと抱き合って居た後、プレシアがそう切り上げた。

その言葉にフェイトは無言でうなずくと目を閉じる。

(レヴィ)

『フェイト、よかったね』

(うん！)

入れ替わる刹那のほんの短いやり取り。だが、そのやり取りだけで良かった。ボクとフェイトの一つ目の目標は達成されたのだから。

静かに目を開ける。

目の前にはまるで憑き者が落ちたかのように和やかな顔をしたプレシアが立っていた。

目元は赤くはれているし、隈もある。しかしそれでも、清々しい顔だった。

「レヴィ。だったわね」

「うん」

「あなたにも迷惑をかけたみたいね」

「良いんだ。ボクはフェイトが幸せならそれで」

自然と会話が繋がる。ボクとプレシアは親子では無い。フェイトを娘と認めてもボクを娘と認めたことにはならない。ボクとフェイトは別人なのだから。

だからプレシアもボクもお互いの距離を測りかねていた。でも今はまだそれで良い。今はまだビジネスライクな関係で良いのだ。

「プレシア」

「なにかしら」

「ボクの目的はフェイトが幸せになる事だ。それは今、達成したともいえる」

ボクの言い分を静かに聞いてくれるプレシア。

「それでも、人間は常に上を目指す生物だ。人間の欲望は尽きることには無い。それはボクも同じ」

遠回しになるけど、伝えたい事は言う。言いたい事は言う。

「だから、フェイトにはもっと幸せになって貰いたい。もちろん、あなたにも」

「それはつまり」

先ほどまでも言っていたのだ。再度言わなくても伝わるだろう。

しかし言わなくてはならない。ボクとフェイトの覚悟は完了している。ならば、プレシアにも覚悟を決めてもらわなくてはならない。「うん。アリシアを蘇生する。そして、プレシアの病気を取り除き、若返ってもらおう。アリシアとフェイトを残して早々に死ぬなんて許さない。そんなことは天が、フェイトが許してもボクが許さない。あなたには、これからも色々押し付ける事になる。その最初がこれだ。あなたには、若返ってもらおう」

「……」

伝えた。先ほどから言っていた事だが、それに加えてプレシアの若返りも含めている。

相対しているプレシアもそんなことが言われるとは思っていなかったのか目を見開いて驚いている。しかし、それは数秒の事。すぐさま処理したのか、落ち着いた様子になった。

「わかったわ。どうするのかは、教えてくれないのかしら？」

「ごめん、説明しにくいことでさ、ちよつと教えられないかな」

「わかったわ。それで、それは直ぐできるのかしら？」

「ごまかすように笑う僕につられたのか、プレシアも苦笑をもらしながら言った。

「うん。すぐにできる。少しだけまって」

そう言つてボクは目を閉じて祈りをささげるように手を組む

(神様！・ 神様！)

そう念じるとすぐさま返信が来た。

『おー、やつと出番か。まちくたびれたぞい！』

なんか神様のテンションが高い。

(神様、お願いの事なんです)

『わかつておるぞお！ プレシア・テストロッサの若返りにアリシアの蘇生じゃな？』

(はい)

『任せなさい！ では、まずプレシアから行くぞおっ』

神様がそう言った瞬間。プレシアの体が光に包まれた。数秒たち光が収まると、そこには変わらずプレシアが立っていた。

しかし、良く観察すると違う部分が見える。顔色は良く、目尻などにもしわは見えない。

『どおじゃ？ だいたい30歳前半位まで若返らせただぞ』

(ありがとうございます！)

『よーし、次はアリシアじゃなっ！』

(あ、すこし待って貰えますか？)

気合を入れて、アリシアの蘇生をしようとした神様を止める。

今蘇生されてしまったらアリシアが培養槽の中でおぼれてしまう。

それに、周りで驚いている人たちの処理もしなくてはならない。

「プレシア、どう？ 調子は」

「……ええ。驚いたけど体の調子も良いわ。確認できないけど、きつと若返っても居るのでしようね」

確認もかねてプレシアに尋ねると、色よい返事が返ってきた。

「それじゃあ、この勢いでアリシアの蘇生も済ませちゃおう」

「わかったわ。こっちよ、ついてらっしやい」

そうプレシアに言われ、ついていく。行先は玉座の奥の奥に安置されているアリシアの遺体。

玉座の奥の扉に進むとそこには、フェイトとうり二つの少女が培養槽の中で膝を抱えている。それはまるで眠っているかのようだった。

「アリシアよ。私の最初の娘。綺麗でしょう？ これでも死んでいるのよ。体が朽ちないように中は特殊な薬品で満たしているの」

そう言いながら、培養槽から液体を抜き始めるプレシア。全ての液体が抜けきる前に、アリシアを抱きかかえ地面に下ろす。

「フェイト、あなたのお姉さんよ」

『これが、アリシア』

フェイトの言葉はプレシアには聞こえていないだろう。それでもプレシアはうなずき、こちらに向かって頭を下げた。

「レヴィ。よろしくお願い」

『レヴィ。お願い』

プレシアとフェイトの両方から頼まれる。別にボクが頑張る訳ではない

それでも、こういうのは気合いが大事なのだ。

「まかせて！」

力強く宣言する。

(神様！)

『委細承知!!』

どこのルシフェリオンだろうか。神様が墮天使の名前を関するデバイスのセリフって縁起悪くないか？

閑話休題

神様の掛け声とともにアリシアもプレシア同様光に包まれた。数秒たち、光が収まっても依然アリシアは横たわっている。不安になっ

たのかプレシアが駆け寄り、優しく抱きかかえる。ボク達もフェイトに身体の主導権を渡し、近寄る。しかしアリシアは目を覚まさない。

「アリシア。アリシア」

不安に駆られているのか、プレシアがか細い声でアリシアの名前を呼ぶ。

「ん、んう」

すると、か細い声だが、アリシアから声が漏れる。

「アリシア!?!」

「アリシア!」

プレシアとフェイトが声をかける。リニスとアルフは遠巻きに心配そうに眺めている。そんな中で、アリシアの目がゆっくりと開かれる。

「あ、ママ」

「アリシア! アリシ、ア。ア、リシ、アア」

プレシアがアリシアを抱きしめ泣き崩れる。

そんな二人を抱きしめフェイトも泣く。

「どう、したの? ママ。泣かな、いで。アリシア、だいじょう、ぶ、だよ」

自分の周りに母と、見知らぬ人が3人。しかもそれらが全員泣いていると言うわけのわからない状況にあって混乱しているだろうに泣いている母を心配するアリシア。

プレシアとアリシア、その妹にフェイト。ペットのアルフに家政婦のリニス。やっとテスタロッケが揃った、感動的な場面が目の前にはあった。

(ありが、とう。かみさま)

『当然の事をしたまでじゃ。それに、おぬし……、いやよい。またにかあつたら呼ぶのと良い』

(……は、い)

こうしてテスタロッサ家は皆で本当の一步を踏み出した。

事情×決意Ⅱそれは第8話

アリシアは復活した後すぐに意識を失ってしまったが、呼吸や心拍数なども正常なので、寝ているだけと判断し、今は急遽部屋を用意し寝かせてある。

そうしてアリシアの世話をリニスに任せ、ボクとフェイト、そしてプレシアは別の部屋に来ていた。

「じゃあ、色々聞かせてもらえるかしら？」

部屋に入り腰を掛け、一息ついた所でプレシアが喋り出す。

「私が、若返ったらしい事、アリシアの蘇生法。あなたの詳しい情報。できれば全てを話してもらいたいわね」

そう言うプレシアの瞳は、先ほど対面したときと同じ力強さが含まれていた。しかし、その強さは全てを投げ捨てた狂気の強さではなく、守る者を取り戻した母の強さだった。

「うん。……そうだね、何から話したものか」

正直言つて何を話せばいいのかは考えてもいないし、纏まってもいない。

「なんでも良いわ。死者蘇生に若返りだなんてファンタジーな事が起きたのだもの。よほど荒唐無稽な話じゃなければ信じられると思うわよ」

「……ん、そっか。それじゃあプレシアは神様って信じる？」

「……所謂宗教が奉じている神、で良いのよね？」

ボクが言った言葉にプレシアはわけのわからなそうな顔で質問を返してきた。

「うん。その神様が実際に居る、って言ったらどう？」

「……信じられる話ではないわね」

「だよ。だけど、信じて貰わなくちゃ話が始まらないから、信じる信じないは置いといて、神様は実在するって事が前提で話を進めるよ」
それから、ボクは話し始めた。先ほどの現象の事、ボクの事。それらの全て。

信じられないだろうけど、それ以外の良い言い訳を考えているわけ

では無い。

いや、考えていないことは無いのだが、プレシアに通用するかと言われたら微妙だと判断したので結局ストレートに話すことにしたのだ。

ダメで元々ではあるが、もし信じて貰えばこれからボク自身が動きやすくなる。と言っても結局ボクはフェイトの体に束縛されている訳だが。

そうして話し終わった後、プレシアは頭の痛そうな、何とも言えない顔をし、手で頭を押さえていた。

「とりあえず、これで全部だけど……」

ボクがそう言った後、暫くしてからプレシアは大きなため息をついて喋り出した。

「私はね。研究者なの。科学者なのよ」「うん」

「私はそれに誇りを持っていたし、この世の全てはいずれ科学で解明できると信じて居た。現に人造魂魄を用いて死んだ動物を使い魔として再生、造り直す事も出来て居るわ。」

そんな私はね、神様の存在は信じていないの。今は人間の魂魄についての研究は全く持って進んでいないけれど、それは論理的な問題でできない実験がたくさんあるからであって、いずれはできるようになると思っているわ。それと同じで、大昔に神が起こしていたと信じられていた現象は全て科学的に解明されているし、神が創造したと言われているモノも、憶測の域を出ていないかもしれないけど、科学的、論理的に証明され続けている。

そんな私からしてみれば、あなたがやったことは、あなたが神様の起こした奇跡だと信じているだけである種のレアスキル、ロストロギア的な物だと言われた方がしっくりくるし、そう感じても居る。何度でもできない、と言う話もそんな強い力があるのだから回数制限があるのだと言うことは容易に想像できるし、納得もできる。

現に、昔は神の啓示だと信じられていた予言も、今ではレアスキルの一つに認定されているし、それを持っている人もいる。

まあ、レアスキル自体が、解明できていない特殊能力をまとめた分類である。と言うのは否定しないし、否定できないけど。レアスキルと言つてもくくりが大きく、他者より少し優れている特異技能もレアスキルになるわ。私達の天然の電気変換資質もレアスキルの一種だし。さらに言えば、収束特性と言う。他人より少し魔力を集めるのが得意つていうのもレアスキル的一种に認定されているわ。

まあ色々言つたけど、あなたの言っている事を頭ごなしに否定している訳では無いわ。ただ、あなたの言っている事も突き詰めればレアスキルや魔法の延長線上と言う可能性がある。と言う事だけを頭にに入れて居て頂戴」

そうまくしたてたプレシアは、言いたい事を言つたのか、背もたれにもたれかかり一息ついた。

「うん。それはわかった。でも……」

——でもそれじゃあ、結局信じている事にはならないのでは無いか？

プレシアそう言われたボクの中にはそんな思いが渦巻いていた。

「だから、あなたの言つた事は私は否定しないわ。あなたがそう信じているのであれば、今はそれが真実なのだろうし、そうではないと言う否定材料が私に無い以上それは否定できない。だけど私はもつと違う何かなのだと考えている。そう思つてくれるだけで良いわ。

さ、この話はこれで終わりにしましょう。私は色々やらなきゃいけない事があるし、あなたも気疲れしたのではなくて？ 色々緊張していたでしょう？」

それだけ言つとプレシアは立ち上がり、部屋から出て行こうとする。

「あ、それと今日話したことは私とリニス以外の誰にも言わない事」

「う、うん」

(それと、まだ何か話していない事、フェイトに話辛いことがあるのなら、深夜フェイトが寝た後に私の部屋に来なさい)

(……了解)

最後に、それだけを言い、後半はボクにだけ念話をした後、プレシ

アはこの部屋から出て行ってしまった。

『……大丈夫？ レヴィ』

プレシアが出て行った後も、1人ずっと黙っている僕を心配したのかフェイトが声をかけてくる。

「うん。大丈夫だよ。ありがとうフェイト」

『ううん。私は、レヴィの言った事、信じてるから』

「……」

『だって、レヴィは神様がくれたプレゼントって事だもんね』

そう言ったフェイトの姿は見えないけど、きつと多分とても優しい笑顔で笑っているのだろう。そう感じたボクからは自然と、感謝の言葉が出ていた。

「……うん。ありがとう」

『どういたしまして？』

「フフツ、なんで疑問形なのさ」

『だって、レヴィが急にありがとうなって言うから！』

「はいはい、じゃ、部屋に帰ろうか」

『うん』

フェイトとの会話で少しだけ、気が楽になる。出会って約1年、ボク達はお互いがお互いを支える、掛け替えのない存在になっていたのだと、この時漸くボクは気づく事が出来た。

それに気づけたこと事に感謝をしながら、ボク達も部屋から出た。

*

「まったく、やはり子供、と言うことかしら」

レヴィとの話し合いから、やる事があると出て行った私は、1人廊下を歩きながらため息をついていた。

レヴィにいった事は本当に自分が感じている事であるし、レヴィの主張を完全に信じているわけでは無い。

それに、レヴィは話し合い、交渉の場に向かない。

先ほども、初めて会った時もそうだ。彼女——便宜上これから三人称ではそう呼ぶことにする——は自身の感情を伝える事しかできない。感情をぶつければ大人はどうかしてくれる、自分の事情を分

かつてもらえらると思っっている子供と同じ。彼女の話信じるならば、少なくともそれなりの年月は生きているのだろうし、思い出が無くても、知識があるのなら、それなりの会話、交渉もできるはずだ。

しかし実際はどうだ、てんで交渉にならない、論破しようと思えばできる穴だらけの論理。ただ自身の事情を感情に任せて吐いているだけ。ただの子供だ。

しかし、その子供の事情を汲んでやるのが大人と言う者だし。そんな子供を他の大人の悪意から守ってやるのが親と言う者だ。

私はレヴィの事を他人としてみようとは思わない。フェイトを娘として見ると、フェイトの母親になると決めたからには、フェイトと一心同体の、いや、二心同体の彼女もまた娘として見、尊重すべきだろうと思っっている。

だから、守るのだ。彼女が、彼女たち三人姉妹が大人になるまで私が母親として守ってやらなければならないのだ。

今までの数十年。その全ての償いとして、これから彼女たちが満足に独り立ちできるまで、私がなんとかしなければならぬ。

その為ならばどんなことでもできる。私の娘が幸せになるなら、神も信じるし狂言にも付き合おう。

そう考えていると私は自分の研究室のさらに奥にある通信装置の前についていた。

通信装置を操作する。連絡を取るのには、この通信装置に登録されている、数少ない。いや、たった一人の「元」協力者。

先程はレヴィの誘導に釣られてしまったが、母が娘の為に罪を犯す事が一概に悪いことだと私は思わない。確かに娘は自分の所為で親が犯罪を犯したのだと思うだろうし、それを悲しむだろう。自己嫌悪に陥るかもしれない。そう考えるなら、娘の為と言っても犯罪を犯すことは、娘の為にならないと言うのは、現在の冷静な私ならば容易に判断できる。

しかし、人間は自分勝手な存在なのだ。結局先ほどの話も、『娘の幸せな姿が見たい』と言う母の自分勝手な欲望を満たすための行動なの

だ。人間はどこまで言っても自分勝手、全ての人間は突き詰めれば自分大好き、ナルシスト野郎。そう言ったのはどこのどいつだったか。いや、忘れたわけでは無いし、これから連絡を取るのもソイツだ。『やあ、久しぶりだねプレシア女史。随分活気が良いね、若返ったようにも見える。一体全体どうしたのかね？ 君との取引はもうすでに履行済み、終了していたと記憶していたのだが』

通信装置の空中投影画面に映るのは、20代の男。その髪の毛は紫色で、瞳の色は金色。その喋り方は飄々としていてどこか人を馬鹿にしたような喋り方だ。

「久しぶりね、糞野郎」

『これはこれは、随分と酷い二人称もあったものだ。私悲しいなあ』

私の暴言に肩を上げながら答える男。どこが悲しんでいるのか説明してもらいたい

「別にあなたが悲しもうが私には関係ないわ」

『それは酷い。で？ 今回の連絡はなぜしてきたのかな？』

「新しい取引よ」

『おや、プロジェクトFでは物足りなかったのかな？ では次は人型機械の研究データでもお渡ししようか？』

「別にそう言うのじゃないのよ。あなた、確かそっちのお偉いさんと繋がりがあつたわよね」

『そうだが、それが？』

「私の、私達の戸籍やらなんやらをちよつと改変してもらいたいのよ」
『ほう。随分と直接的だねえ。公文書偽造かい？ それは犯罪だよ？』

「あなたが今更何を言うの」

『全く持ってその通りだ』

全く、いちいちチャチを入れてこちらの話を折る男だ。そんなんだからキチガイの紫もやしなんて言われるのだ。

『悪口が口に出ているし、私は紫もやしと呼ばれたことは無いのだが……』

「失礼、わざとよ」

『わざとじゃないかあ!』

『うるさいわね紫もやし』

『……はあ』

「こちらの暴言にため息を出す紫もやし。ため息をしたいのはこっちだ。

『はいはい、それで? 公文書偽造の対価に君は何を差し出してくれるのかな?』

「プロジェクトFの完成データ、それに付随する人造魔導師の作り方と効率的なインプラントをするための脳科学の研究データ。あとは、新しい魔導エネルギー機関、人造リンカーコアの論文、辺りでどうかしら」

『……随分と大判ぶるまいだねえ。それほど、その公文書偽造は君にとって大事なのかい?』

「……ええ。私は新たに覚悟し直したの。なんでもする、とね」

私の言葉、その言葉言った表情を男はしばらく見つめた後男は大声で笑いだした。

『ハアーーーーーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ!! ゲホツゲホツ』

あまりにも、大声で長々と笑ったためかむせる男。

『博士、お水です』

『ああ、ありがとう』

通信先から、そんなやり取りも聞こえる。

「それで? いきなり笑い出して失礼なもやしね」

『おいおい、紫が抜けてるよ』

「いちいち細かいわね、紫キチガイ糞もやし」

『今度は増えるよ……』

やはりいちいちうるさい男だ。

「良いから、早く進みなさい。」

『わかった。君のその欲望に敬意を払いその取引に応じよう。しかし、その条件だとなんかこちらが貰いすぎだ。取引と言うのは公平でなくてはならない』

「あら、取引と言うのは相手の足元を見て、揚げ足を取るものでは無くて？」

『政治家や商人ならそうなのだろうが、私は研究者であり科学者だ。政治家や商人では無い。それに先ほど君に敬意を表すると言ったのだ。そんな私が相手の揚げ足などとれるわけがないだろう？』

人間としてはどこがおかしくても科学者としての誇りは人一倍あるし、自身が欲望の権化だと自称しているこの男は、他者の欲望をも肯定する。故に、彼はその点にだけは真摯だった。

——『わたしは欲望の権化にして肯定者。全ての欲望を受け止め、肯定し、認定し、慈しみ、尊敬しよう。その欲望のまま動ける人間性を。理性を振り払える程の欲望を。私とは違い、一般教育を受け、人並みの論理感のある者の理性を、論理を超えて突き動かす欲望を、私は愛そう』——

そう言ったのは、目の前の男だ。十年ほど前だったか、私に初めて会った時に言った言葉だった。彼は、その言葉を証明するかのよう
に、欲望に対しては真摯で紳士的だった。

「そう、ならそれでいいわ」

『ああ。だからサービスで何かしよう。何でもいい。君の欲望を満たすためなら何でもしよう。言ってくれたまえ』

「ならば、自由に世界を移動できるような、権利を」

『了解した。君の研究成果や論文であれば、それを引き出すのは簡単だろう。それにしても』

「なにかしら？」

『昔あった君とはまた違う顔をしている。狂気に染まった顔ではない。未来への希望を切に望む顔だ』

「それがなにか？」

『いや、気にしないでくれたまえ』

「それじゃあ、取引が終わった所で詳しい説明に入るわ」

『ああ』

その後はどのように戸籍を変えるのか、世界渡航許可書はどの範囲まで有効なのが欲しいか等々、話し合い詰めた。

『以上でいいかな？ プレシア女史』

「ええ。それで構わないわ、糞キチガイ紫もやし」

『……結局最後までそれなのだね、しかもさつきと違うし』

「どうでも良いわ」

『……そうだね。どうでもいいことだ。それではまた後日、あなたの新たな母としての欲望もまた、私は肯定しよう』

最後にそう言って通信は終わる。

「最後まで一言多い奴」

私もそう言い残すと、通信装置の電源を落とし、奴に渡すための資料を纏めるためにその場を離れた。

家族×平和Ⅱそれはエピローグ

「フェイト、アルフ。朝ですよ。起きてください」

そんな声と共に部屋に入ってくるのはリニスだ。プレシアの使い魔でありテスタロッツサ家の家政婦兼教育係。

その後、アリシアが復活した後は新たな家族を迎えての、普通の家族のような生活が続いている。リニスに関してはプレシアの体調が良くなり本人に余裕ができた事や、契約の内容が『テスタロッツサ家を陰日向にと補助していく事』に変更され、それに伴い省エネモードが追加された事なども合わせ、維持が楽になったらしい。

省エネモードと言うのは、所謂アルフの子犬モードのようなもので、大きさは変わらないが、魔力をDランクまで落とす事で、コスパを上げているらしい。しかし、当然戦うことはできないので魔法の勉強（特に実技）の時は全力モードになる。

「おはよう。リニス」

そんなリニスに向かって起き上がり挨拶をする。フェイトは朝が弱いらしく未だ眠っているのでもう少し寝かせてあげる事にした。まあ、意識だけが寝ていて体は起きているので疲労は回復しないのだが。

「おはよ〜」

そんなボクにつられてか一緒に寝ていたアルフも大きなあくびをしながら起きる。

「おはようございます、レヴィ。それにアルフも。フェイトはお寝坊さんですか?」

「うん。もう少しだけ、寝かせてあげようかなって」

「レヴィはフェイトに甘いですね」

会話をしながらリニスは部屋のカーテンを開けていく。その横でアルフはベッドから飛び降りボクは着替えをするためにクローゼットに向かう。

「今日は天気が良いのでテラスで朝食をすることになってます。アリ

シアとプレシアはもういる筈なので向かってください」
「は〜い」

今日の服をテキトーに決め、リニスに言われた通りアルフと共にテラスへ向かう。

時の庭園は無駄に広く移動するのになかなか時間がかかる。子供の足ならなおさらだ。

そう思いながらもアルフと他愛無いことを喋りながら歩いているとフェイトが起きた。

『うにゆ〜？ あれ、もう朝……？』

「そうだよ、おはよう。フェイト」

『おはよう、レヴィ』

「フェイト起きた？ おはよう！ フェイト！」

「おはよう。アルフ」

フェイトが起きたことで即座に主導権を明け渡す。これは日頃の訓練の賜物だ。

そんなこんなで部屋を出てから数分でテラスに付く。

テラスには車いすに座ったアリシアとプレシアが隣合って喋っている。

「あら、フェイト起きたのね」

「フェイト！ おはよー!!」

「おはよう。母さん、お姉ちゃん」

「おはよ〜」

プレシアが近づくフェイトに気付き挨拶すると、アリシアがすぐさまこちらを向き、手を振りながら挨拶する。

あれからもう一月ほどたっているが、アリシアはまだ歩けていない。長年死んでいたため筋力が衰えてしまっていたのだ。目覚めて数日は体を起こす事すらままならなかった。

リハビリも続けているが、みんなと同じ席で同じものを食べたいと言うので主に上半身、特に腕の筋力のリハビリを重視していたためでもある。その甲斐もあってか移動こそ車いすで誰かが側に居なければ移動できないが、自分でスプーンとフォークを持つことも、読書す

ることもできるようになっている。

プレシアとは、例の話し合いの後、根掘り葉掘り聞かれ、原作知識の事なども話した。そっちの方は、すでにアリシアの復活や、ボクの存在が居る事で、参考程度にすると言われ、ボクにも原作の事は忘れるように言い渡された。

その後は、特に何も無い。アリシアのリハビリなどで忙しかったのもあるし、プレシア自体があれらの話し合いについて触れてこないのだから、こちらにも触れない事にした。

そんな、アリシアとプレシアに見つめられ、フェイトはそちらに近づく。

「フェイト！ こっちこっち！」

車いすと言うハンデも、リハビリの辛さも感じさせないアリシアは自分の横の椅子を叩きながらフェイトを急かす。よほど妹という存在がうれしいのだろう。会って直ぐに自分を姉と呼ぶように言ったり、一緒に勉強したり読書したりする時も何かとフェイトを構いたがる。

そんなアリシアをフェイトも好ましく思っているらしく大人しく妹としてアリシアに接している。

「レヴィも起きてる？」

「うん。起きてるよ」

「レヴィもおはよ！」

そんなアリシアはボクの事も何事もなく受け入れてくれていた。本人的には妹が二人で来た感覚なのだろう。

（おはよう！ アリシア）

そんな太陽みたいに笑う少女にボクは念話を送った。

アリシアは魔力が無いと言っているが極々少量なだけで皆無ではない。

そうしてそんな魔力でも受け取れるように念話の発信者が調整してやれば、念話を聞くことだけはできるようだ。もちろん送ることはできないらしい。これはいちいち入れ替わらなければ意思疎通ができないと思っ込んでいたボク達にプレシアが教えてくれたことだっ

た。これのおかげでわざわざ入れ替わる必要は無くなったのだが。

——ますます幽霊っぽくなっただよねえ。

そう、こちらが念話で会話をするだけになってしまったのでまさに幽霊状態なのだ。ここ最近はおクが主導権を握るのはフェイトが起きていない時か、魔法の練習をする時位しかない。

それでも、アリシアと、この場に居る皆とコミュニケーションがスムーズにとれるのだからありがたいことこの上ない。

「みなさん。遅くなりました」

ボク達が雑談をしているとリニス料理の乗ったカートを押してテラスにやってくる。

「ごはん!？」

その姿にまずアルフが反応し

「ごっはんく♪ごっはんく♪」

アリシアが目の前に置いてあったフォークとスプーンを手に取りはしやぎ始め

「もう、アルフもお姉ちゃんも行儀悪いよ」

フェイトがそんな二人を嗜め

「そうよ、フェイトの言う通りね」

プレシアは微笑みながらそんな三人を見つめ

「二人ともご飯は逃げないので落ち着いてください」

リニスが食事を並べていく。

そうして始まる一日。あの時から始まった平穏。普通の家族の様に笑いあいながら過ごす日々。

そんな日々を過ごして約3年。

.....

.....

「ここが、第97管理外世界」

「ビルがいっぱいだね」

「魔法文化は無いようですが科学技術自体は発達しているようですね」

「おお。やっぱり人が多いねえ」

「ここが.....『地球』」

テストロツサ一家は『地球』に足を踏み入れた。

——Next Stage “Magical Girl
Lyrical NANOHA”

幸せになるための戦い——無印編 プロローグのまとめ兼無印編のキャラ紹介

『レヴィ』

【基本データ】

年齢：？ 前世では大体20前後という設定だが、本人すら知らない（覚えていない）

容姿：？ 瞳の色は青（？）

【紹介】

神様転生でフェイトに憑依したこの作品の主人公。しかし、主人公主人公していたのはプロローグだけだったりする。

貰った特典は

- 1、「アリスア・プレシア・リインフォースの救済」
- 2、「高い魔力とあらゆる魔法の適性」
- 3、「習熟速度の向上」
- 4、「高い身体能力」
- 5、「フェイト・テストロツサとの縁」

神の悪戯により、5はフェイトに憑依と言う形に。

実は、3も黒神めだかの『完成（ジ・エンド）』そのまま。と言う裏設定があるが、特に重要でもないのでここでネタ晴らし。

憑依先の意識があるのと、本人の『フェイト第一主義』と言える主義が合わさり、基本的に表に出ない。

プロローグは彼女（便宜上彼女と称する）の一人称で基本的に話が進んだが、無印編からは一気に影が薄くなる。

好きになれない主人公との評価を受けている。この作品上は主人公だが、物語としてはどちらかと言うと舞台装置。

役者と言うよりは、演出家や脚本家の趣が強い。

プロローグは、『彼女レヴィによる彼女フェイトの為の物語』と言うのがテーマだった。

CVは当然、水樹奈々

*

『フェイト・テストロッサ』

【基本データ】

年齢：9歳（プロローグ終了時）意識としては4歳

容姿：原作通り

【紹介】

『フェイト』として意識が覚醒したのと同時にレヴィに憑依されたこの作品のヒロイン。

この作品は彼女のための物語と言っても差し支えは無い。

レヴィのおかげで母と姉を手に入れまさに怖いものは無い状態。

原作に比べ、悲壮感が無い代わりに必死さも無い。

リニスが生存しているため、指導が今でも続いている&プレシアからも指導を受けている。これらの要因から、実力は原作より上と言う設定がある。が、それが発揮される場面はほぼ無い。

生まれたころよりレヴィと共にいたせいかわ、どこかレヴィに依存してしまっていたりするが、そんなことは関係ない。少なくとも今は

プロローグ、物語全体としてはヒロインだが、無印編では主人公である。

無印編は、『彼女フェイトによる彼女なのはの為の物語』と言うのがテーマ。

*

『アリシア・テストロッサ』

【基本データ】

年齢：戸籍上は9歳、身体年齢は8歳、精神年齢も8歳

容姿：少し背の低いフェイト。よく笑うため、どこか雰囲気も明るい

【紹介】

レヴィの特典『アリシアの救済』により蘇ったフェイトのオリジナ

ル。

フェイトはプレシアがアリシアの『妹が欲しい』と言う願いを叶えてくれた本当の妹だと思っている。

意識が目覚めてしばらくは筋力が衰えており、リハビリ生活だったが、本人の努力と周りの援助もあり、現在は元気満々。元気が余りすぎてか、よくフェイトを連れまわしている。

実は何もしなければ家で大人しくしてしまうフェイトを慮って、強制的に外へ連れ出そうとしているという、姉としての意識の高い子。

天真爛漫、元気潑刺、自由奔放、純真無垢。彼女を表す4字熟語である。

頭は悪くないどころか、プレシアの娘だけあってかなり良い。フェイトの様に鍛えていない為フェイトほど運動ができるわけでは無い。

過去の死因は、次元振を起こすほどの魔力に当てられての、リンカーコアの破裂。

生き返つてもリンカーコアが脆弱なのは変わらない為、魔法は使えない。

実は常にフェイトの事を考えているかなりのシスコンだったりする。

*

『プレシア・テストタロッサ』

【基本データ】

年齢：肉体年齢33歳 実年齢は50以上

容姿：映画版過去回想の時のプレシア。つまり若い時のプレシア

【紹介】

レヴィによって自分が狂っていたことを自覚し、アリシア、フェイト二人の母になる事を決意したパーフェクトマザー。

この物語で最も何でもできる超人。めっちゃ役に立つ。

レヴィの事をまだまだ子供だと感じており、レヴィも合わせた『三人娘』を守っていこうと決意している。その為なら犯罪も辞さない。バレなきや犯罪じゃあないんですよ。

娘たちをととても愛しているがそれで変態行為に走ったりはしない。わかりやすく言うとINNOCENTのプレシアより大人しい。

なにか困ったらプレシア。と言う言葉が作者と物語後半の登場人物の間でまことしやかに言われている。助けてプレえもん。

*

『リニス』

【基本データ】

年齢：？

容姿：原作と同じ

【紹介】

プレシアが改心したことによって契約の内容を変更。『テストアロツサ家を陰日向に支え続ける』と言う内容に変わった。

しかし、優秀な能力はプレシアへの負担も大きいため通常時は魔力ランクをDランクまで落としている。

しかし、本気をだしたその戦闘技能は確かな物であり、フェイトの師匠は伊達じゃない。

プロローグでは唯一の大人と言う役だったが、無印編では出番が無い。多分一番空気な人

*

『アルフ』

【基本データ】

年齢：？

容姿：原作と同じ

【紹介】

原作から最も変わってないキャラ。ぶっちゃけ影が薄いとも言える。フェイトに関する事なら一番の理解者であり、じつはフェイト以上にフェイトの事をわかっていたりするので大事な場面では活躍する。だけど影は薄い。

原作での、フェイトを唯一支えられるキャラから、フェイトの使い魔。までランクが下がってしまったため。仕方ないね。

*

『高町なのは』

【基本データ】

年齢：9歳

容姿：原作と同じ

【紹介】

無印編から登場する原作の主人公。しかし今作での扱いは1話では『白い魔導師』呼ばわりと、扱いが酷かったりする。

無印編の虐められ担当。主に作者から虐められる。

初期案では彼女のヒーローで二人目の転生者でも出そうかと言う構想があったが、めんどくさいからやめた。

無印編のテーマ上、無印編のヒロインともいえる。フェイトとなのはの立ち位置は原作とはちようど真逆になった状態。

*

『ユーノ・スクライア』

【基本データ】

年齢：9歳

容姿：原作と変わらず

【紹介】

原作でのマスコットキャラポジション。今作では無印編の元凶なだけで影が薄い。

*

『アリサ・バニングス』

【基本データ】

年齢：9歳

容姿：原作と変わらず

【紹介】

姉御肌な9歳児。影が薄いどころか出番が無い。かと思いきや出番がある微妙なキャラ。少なくともユーノよりはある。

*

『月村すずか』

【基本データ】

年齢：9歳

容姿：原作と変わらず

【紹介】

落ち着いた9歳児。影が薄い（確信）。作者は好きだが、この作品では『なのはの友達』以外の何物でもないので必然と出番はない。

作者は結構好きなキャラである。すずかヒロインの二次創作もつと増えろ。

*

『クロノ・ハラオウン』

【基本データ】

年齢：14歳

容姿：原作と変わらず

【紹介】

次元航行艦アースラに搭乗している管理局歴代最年少執務官。

ありがたい感想の情報により、空戦AAA+だと判明。

なら魔力ランクAAAかAAA―位だろう。

クロノは魔力が多くなっても技巧で強いイメージ。

なのは、フェイトに比べ魔力は少ないが『上手い』魔導師であり、実力は十分。

この作品では、自分で管理局の杜撰さに突っ込めるほどには『管理局万歳』な思考では無い。物わがりの良い大人っぽい少年として扱っていく。

階級は執務官なのでないが、権限としては一尉と同じ程度。

執務官は刑事さんと同じ位の権限が与えられるようなので、現場での最高権限を得られる一尉と言う事に。佐官になると現場に出られない的な理由でStSなのはが昇進を断ってたらしいので、この判断に。

出番は、まああるっちゃある。

*

『リンディ・ハラオウン』

【基本データ】

年齢：30中盤。クロノの年齢的に多分34とか

容姿：原作と同じ

【紹介】

次元航行艦アースラの艦長。役職は提督。階級は一等空佐（一佐）階級はどこを探してもなかったが、以下のロジックで決めました。

1、3期のクロノ提督が艦隊を指揮してて偉そうであり、八神二佐よりは確実に偉い。

2、クロノ提督はカリム少将より少し低い、もしくは同格（これは年の近い友人と言う事もあるかもしれない）

3、リンディとクロノ、同じ提督だが、権限を持てる艦数が違う。艦隊指揮をしていたクロノと、パトロールの為かもしれないが一隻

のリンディ。
4、さすがに艦隊指揮できる偉い人をパトロールの任務にはつかせないだろう。

5、特務六課の司令官八神はやては二佐のまま。（次元航行船ヴォルフラムを指揮する権限有）

5は機動六課の功績、という可能性もありますが、これらを踏まえ、クロノとはやての間の一佐としました。

ちなみに、なぜ『空佐』なのかは、時空管理局は、陸、海に分かれていて、

海は主に次元世界を渡ったり、次元犯罪者を追うような部隊。

陸は、主にミッドチルダのような次元世界の内部を管理する部隊。

と言う事が原作から読み取れます。

ですので、多分空つてのは、空戦魔導師の事だと思っのですが、空戦適性のあるはやては陸佐です。

それは、はやての所属は『陸』なので陸佐なのだ予想すると、多分空尉などの『空』の管轄は海なのでしょう。

そして、次元哨戒の任についているアースラが陸の管轄なわけは無

く（本局に戻ってますし）海となるので、空佐としました。
海佐でも良い気はするけど、そしたら空ってなんだよってなるの
で、空にしました。

魔導士ランクはSー、条件付きS+

条件と言うのは、魔導炉接続での魔力無制限状態の事です。

なぜニアSかと言うと、なんかそれっぽかったからと言う理由で
す。あまり意味はありませんし。

まあ、次元振止められるしアースラ最強戦力らしいし、強いんじゃない
ね？ 少なくともクロノよりは強いよね。って事でこんな感じ。

*

【オリジナル設定等】

『浸食度』

レヴィがどれくらいフェイトの体に乗っ取っているかの度合い。
実はこの作品で最も重要な設定であり、日常、戦闘かわららずフェイ
トが良く使う為覚えていと得。

0%：

レヴィの意識が完全に切り離されて、寝ている状態。

20〜40%：

体の主導権はフェイトにあるがレヴィも感覚を共有している状態。

この状態だと、簡単な魔法ぐらいならレヴィが個別で使える。

その時レヴィが使った魔法はレヴィの魔力光の色であるアクアブ
ルーになる。

50%：

お互いが一つの体を共有する状態。

この時は瞳の色が赤と青のオッドアイになる。

魔法を使う場合は、お互いが一人ずつ魔法を使う事もできるし、二
人で一つの魔法を発動することもできる。

2人で1つの魔法を発動した場合の魔力光は青と黄色を混ぜたようなマーブル色になる。

魔力もお互いの魔力が合算され計測される。戦闘と言う面では一番強いが、主導権はフェイトが握っていてレヴィは右半身なら自由に扱える状態なので、お互いの息があつていないと右半身と左半身がバラバラに動いてしまう。

この状態のときは基本的に全身の駆動をフェイトに一任し、とつきの時以外はレヴィは魔法を使うのに専念することで解消している。

60〜80%：

今度はレヴィとフェイトが逆転する。レヴィが体の主導権を握り、フェイトはそれを見る。

瞳の色も両目が青色になり、神様の特典である身体能力の強化が適用されるらしく、身体能力が向上する。

しかし、一般人よりは強い程度であり、同年代の夜の一族（つまり月村すずか）と身体能力だけで本気で戦っても勝てない。

この状態のフェイトは簡単な魔法なら使える。

100%：

フェイトの意識が無くなって体の主導権が完全にレヴィに移る。もしもフェイトが気絶等の状態になり、レヴィの意識が覚醒している場合、ノータイムでこの状態になる。

『アリシアの死んだ理由』

プレシアが研究、開発主任として動いていたプロジェクト、『魔導炉ヒュードラ』の無理な実験により、ヒュードラは崩壊。次元振を起こすほどの魔力の暴走が起きた。

これにより、いまだ体が出来上がらず、なおかつ容量の少ないアリシアのリンカーコアはこの魔力の奔流に耐えられず破裂。つまり内臓破裂である。

人体の生命維持に関係ない臓器とは言え臓器は臓器。しかもその位置は心臓に近いと、危険な位置にあつたためアリシアは死んでしまった。

『フェイトの魔力について』

アリシアの死因であるリンカーコアの破裂。これを次に生まれるアリシアには起こさせぬようにとプレシアが必死で研究し完成させたのが、リンカーコアの遺伝子レベルでの調整。

簡単に言うとガンダムSEEDのコーディネイター状態。

これにより、フェイトは10歳当時で魔力ランクAAAと優秀を通り越して天才の部類に入る魔力を手に入れる。

この研究成果によって人造魔導師が高い魔力を持つことが可能になってしまった事が、今後にとどの程度影響するのかは、誰にもわからない。

『魔力保有量と魔力発揮値』

魔力保有量は読んで字のごとく、リンカーコアが溜め込める魔力の量。最大MP。

魔力発揮値は魔力を発揮できる値。つまり出力であり、使える魔法、魔法の威力などはこちらが直接的に関係する。

魔力ランクはこれら二つを総合的に判断したランク。

魔導師ランクは、魔力ランクを踏まえ、どの程度の戦闘力を保有しているかの総合的な実力を見る。

例：魔力保有量1000、魔力発揮値100の魔導師の場合

この人物の最大魔法の威力は発揮値の限界である100。そしてこの人物が、その魔法を何発撃てるかと言うと、魔力を消費していない十全の状態で10発となる。

実際、バリアジャケット等の常時発動魔法から、飛行魔法などの移動魔法、防御魔法などを考えると、10発も打てない。

魔力発揮値は訓練でどうにかなる部分が多いが、魔力保有量は完全に本人の資質なので、こちらが優先される。

なので、魔力に関しての詳しいデータは以下のようなになる。(これは例であり、実際こうであると言うわけでは無い)

例：

高町なのは

魔力ランク：AAA

魔力保有量：15万

魔力発揮値：1000

使用魔法必要発揮値

 ダイバインバスター：200

 ダイバインシューター1発：10

スターライトブレイカー：1000（使用に必要な値。実際の威力は戦場の魔力素をかき集め凝縮し続けるため発揮値で測れないが、収束魔法を使用するのに必要な発揮値はこの値だとされる）

浮遊魔法、身体強化魔法などの常時かける必要がある魔法は、1／秒などの勢いで魔力が減っていく。そのため空戦魔導師は一定以上の魔力ランク（魔力保有量）が求められる。

バリアジャケットは魔力を物質化させるためにそれなりの魔力が必要であり、維持、再構築にも魔力が必要。

故にそれなりの防御力を求めるとそれなりの魔力が必要になる。

例：

なのはのBJ

発動：500

維持：5

フェイトのBJ

発動：200

維持：2

フェイトのBJ（ソニックフォーム）

発動：100（通常からソニックに変わると、差分の100が保有魔力に戻ってくる）

維持：1

第1話 初めての地球、初めての魔法少女

第97管理外世界 惑星『地球』。文明レベルはBと、ミッドチルダほどではないが科学力はある。魔法文化は無し、つまり魔法の存在が認知されておらず、そのため管理外世界に認定されている。管理局が統治するに足りないと感じた世界である。

ここではコミュニケーション可能な知的生命の存在が、現地名称の惑星『地球』のみで確認されているため、『第97管理外世界』は『地球』と同義であると認識されている。

ギル・グレアム提督の出身世界であり、魔法文化は無いが、極稀に高い才能を持った魔導師が生まれる地でもある為、管理局の上層部からは秘密裏に監視されている。

『魔法少女リリカルなのは』では、主人公『高町なのは』の出身世界でも有名であり、1年で2度も第1級危険指定ロストログアの災害に見舞われ、かつ闇の書の闇と決別したある種特別な世界でもある。

そんな地球、特に原作の舞台となる海鳴市にテストロッサ一家は来ていた。

「ここがレヴィが来たと言って言っていた、地球の海鳴市ね。全く、よくこんな世界知っていたわね」

紫がかった黒髪を持つ母と思わしき女性、プレシア・テストロッサが歩きながら言葉をこぼす。その女性の隣には、金髪赤目の身長以外は瓜二つの少女が二人、周りを見回していた。その一方後ろにオレンジ色の髪をし、額に宝石のような物を付けている10代中ごろのスタイル抜群の女性と、茶髪のこれまたスタイルが良い20代初め頃の女性が付き従っていた。

『あはは』

どこかごまかすような笑いが一行に聞こえる。テストロッサ家以外の人には聞こえていない『魔法』と呼べる技術の一端。その技術を知る人は『念話』と呼ぶものが一行の頭の中に響く。

「魔法文化はありませんが技術力自体はミッドとあまり変わりなく不便ではありませんし、それにここ海鳴市はミッド郊外位ですが、自然

も多く少し遠出すれば温泉や海などのレジャー施設もあるみたいで
すし、二人の教育には良い場所ではないでしょうか？」

そんな声をフォローするように茶髪の女性、リニスが海鳴市の概要
を説明する。

そう、ここ海鳴市は都会に近いが山もあり、海もあると言う、中々
に自然が多い場所であった。山側に少々遠出すれば温泉が、海側に遠
出すれば海水浴と、レジャー施設には困らず、町の中心、つまり今現
在一行がいる海鳴駅周辺は都会と言って遜色ないほどのビルや施設
が立ち並んでいる。

「そうね。まあ管理外世界だし管理局もあまり気にしてない場所なの
でしょう。良い場所と言えば良い場所ね」

そんなリニスの言葉に納得したのか、プレシアは少しの溜息を吐く
とリニスの方に向き直り指示を出す。

「それじゃ、あなたは市役所だったかしら、ここの行政施設に行つて
色々やってきてちょうだい」

「はい」

「このために色々とやってきたんだから大丈夫でしょうけどお願い
ね。私たちはめぼしい住居探しておくから」

「わかりました」

「それじゃ、よろしくお願いね」

「バイバイ！ リニス！」

プレシアとリニスの大人の会話が終わると、プレシアの隣に居た二
人の少女の内、どちらかと言うと背の低い方の少女が手を振り上げリ
ニスに別れを告げる。

そんな少女の別れの挨拶にリニスは、にこやかにほほ笑い挨拶を返
す。

「はい。アリシア、また後で。家が決まったらそこで。フェイトにア
ルフも頑張つて良い家を探してくださいね」

そんなリニスは別れを告げた少女をアリシア、そのアリシアより少
し背の高いアリシアによく似た少女をフェイトと呼び、オレンジ髪の
女性をアルフと呼んだ。

「うん。リニスも頑張ってるね」

「任せといてよー！」

フェイトはアリシアとは違い少し大人しい子なのか、ひかえめに、それとは真逆にアルフは元気よく返事を返す。

「わかってるでしょうけどレヴィもですよ。あまりレヴィと騒がないでくださいね。ここは魔法文化が無いのですから下手したら変な子だと思われてしまいますからね」

「はーい！ わかっているよ」

「うん。大丈夫」

そう言ってリニスは少し忠告すると去っていく。

プレシア一家が抱えている秘密。それは魔法と言う文明を知っている、使用できると言う事だけではないもう一つの秘密があった。その秘密は、先ほどのリニスも言っていたレヴィと言う存在だった。

「まったく。リニスは心配性なんだからな」

リニスが去っていくのを確認した後、アリシアは腕を組み頬を膨らましていかにも「不機嫌です」と言った体を取る。

『ボクは他人に見えなければ、リンカーコアが無い人には念話も聞えないからね。空想の人物と話す人や、見えないものが見えてる人だと思われちゃうかもしれないね。リニスの言うことも最もだよ』

そんなアリシアを含めたプレシア一家に聞こえるのは、この場に居ない少女の声。

自身をボクと呼び、『フェイトの体を間借りしている』と言っている少女の声だった。

そんなレヴィの声を聞いてアリシアの頬はますます膨らむ。それは未だ10にもなっていない少女がやるとただただ微笑ましいだけであった。

「そうね。だからこれからは家が決まるまではレヴィとの会話は控えましょう」

そんな娘を優しい目で見ながらも諭すプレシア。その言葉に渋々従ったのか、アリシアは頬を膨らませるために口内に溜めていた空気を、ぷすーと実際に音が出る程の勢いで吐き出した。

「お姉ちゃんったら」

そんな姉であるアリシアを見てフェイトが苦笑する。それを見てプレシアが微笑む。そうしてアルフも笑う。

「もう！ みんな失礼だよ！ 早く家さがしにいこー！」

笑われることにご立腹なのか一人足早に歩きだすアリシア。それにあわててついていくフェイト。それを微笑ましそうに笑いながら見ているプレシアとアルフ。

そんな普通の、それどころかとても仲の良い微笑ましい一家は、自分たちのこれからの住居を探すために歩き出した。

*

「ええ。それではここで、お願いします。はい」

その後、海鳴市の中央からは少しだけ離れた場所で、家賃は高いがその分家の広さもあり、家具なども必要最低限の物は最初から設置されているマンションを見つけ、そこに移り住むことになった。

今は、合流したりニスに契約諸々に関しての事柄は任せて、他の面々は時の庭園から必要なものを持ち運んでいる所であった。

「食器に洗面具、当面の服に布団。とりあえずこれだけあれば数日は大丈夫でしょう」

転移魔法を利用し運ばれた物を確認し終わると、プレシアは備え付けてあったソファに腰を下ろし一息ついた。

「お疲れ様です。プレシア」

「ありがとう。あなたもお疲れ様、リニス」

プレシアが一息つくのと同時に、目の前に差し出されるお茶を飲みながらプレシアはリニスにお礼を言った。

そうして大人二人が寛いでいると、自分たちの部屋をあらかた片づけたアリシアが勢いよく飛び出した。

「お母さんお母さん！」

「あら、どうしたの？ アリシア」

「お片づけ終わったから探検してきて良い!？」

家を探し歩いたと言っても、現地の不動産屋に赴き特に考えもせず契約したためか、アリシア達は疲れている様子は見せず、特にアリシアは未だ見ぬ土地を歩き回れる興奮を抑えきれぬ様子で、プレシアに詰め寄っていた。

「そうねえ……。危ないことはしない、って母さんと約束できる？」

「うん！」

「知らない人に付いて行っちゃダメよ？」

「うん！」

「フェイトやアルフと離れないでね？」

「うん！」

娘を心配するためか色々と言い含めるプレシアだが、アリシアは聞いているのか、聞いていないのかはわからないが、とにかく返事だけは調子が良かった。

「それから……」

「大丈夫！ 私たちは大丈夫だから！」

あまりにしつこい母に焦れたのか、プレシアのいうことを遮り自分たちは大丈夫だと主張するアリシア。その姿にプレシアも折れたのか、注意することを止めた。

「……そうね、わかったわ。あと、フェイトを頼んだわよ？」

「うん！ 大丈夫だよ！」

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

「はい！！」

母に許可を貰い元気よく返事をするアリシアは妹を連れに、自分たちの部屋へ舞い戻る。

「フェイト！ お母さん良いつて！」

「ん、そっか。それじゃあアルフ。行こう」

「ああ。そうだね」

アリシアの掛け声にベッドで寛いでいたフェイトも起き上がり、狼の状態で寛いでいたアルフも、人間の姿へと変わる。

「それじゃあ、お母さん！ 行ってきます！！」

「行ってきます」

部屋から出てリビングに居る母に声をかけるとアリシアはすぐさま玄関へと駆け出す。

「フェイト」

プレシアは、アリシアに追従しようとしたフェイトを呼び止め側によると、中腰になりフェイトに話しかける。

「アリシアは危なっかしいから。お願いね？」

「うん。まかせて」

「それと、あなたもくれぐれも気を付けてね。知らない人に付いて行っちゃダメよ？　アリシアに言われても危ない事はしないようにね？　もしもの時は良いけれど、なるべく魔法は使わないように。それから……」

「母さん」

アリシアと同じように注意を促し始めたプレシアに、フェイトは苦笑しながら言葉を遮ると自身の思いを告げる。

「大丈夫だよ」

そんなたった一言。それだけで、プレシアには十分だった。

「わかったわ。行ってらっしゃい。アルフにレヴィも気を付けて、二人を頼んだわよ」

「まかせなよ」

『りょーかい』

最後に、娘の使い魔と娘に憑依している幽霊、体が無いだけで、自分の三人目の娘に声をかけると、見送る為に玄関に出る。

「それじゃあ、皆。行ってらっしゃい。夕飯までには戻ってくるのよ」

「はーい！　行ってきますー！」

「行ってきます、母さん」

「行ってきます」

『行ってきます』

アリシア、フェイト、アルフ。そして姿は無いがレヴィと、各々が返事をし、アリシア率いる探検隊は未知の土地へと足を踏み出した。

*

「この辺はあんまりビルとか無いんだねえ」

「集合住宅が有る位だねえ。それもあんまり見ないけど」

「多分、住宅地なんだと思うよ」

家を出てからしばらく、辺り一帯を散策している探検隊一行は思い思いの感想を述べていた。アリシアは特に見るべき場所の少ない町で少しばかり退屈し始めており、アルフやフェイトなどは、見知らぬ土地を見て回るだけでも目新しさを感じていた。

それもそのはずで、アリシアは5歳までとは言えミッドチルダの中でも都会に住んでおり、1人で出かける機会が無かったとはいえ、プレシアに近場ではショッピング、遠出するならピクニックと色々な経験をしている。

一方フェイトは、アリシアの記憶があるとは言え、それはもはや思い出では無く、一種の知識の様にこの三年間で感じてきており、本人の思い出としては時の庭園と呼ばれた場所しか記憶に無い。つまり、プレシアの屋敷と、その庭。あとは近場の森や山だけである。

自分たち以外の人間を見る事が実は初めてであり、このように人がたくさん住んでいる（と思われる）住宅地を歩くだけでも結構楽しめている。

「っうー」

そんな一行がうろうろしていると、急にフェイトの頭に嫌な響きが走った。

その響きは、一瞬のめまいや頭痛などでは無く、嫌な予感を感じさせる物だった。

「どうしたの？ フェイト」

足を止め顔をしかめた妹を心配するアリシア。彼女は妹の顔色をうかがおうと、下から顔を覗き込む。

「なんでもないよ。ただ、変な感じがあるだけ」

「変な感じ？ 私は何も感じないけど……」

訳が分からず辺りを見ますアリシア。そうしたアリシアはアルフも顔をしかめつ面にし、必死に周りの匂いを嗅ごうとしているのが付いた。

「どうしたの、アルフ。もしかして、アルフも嫌な感じするの？」

「……ああ。なんとも言えないんだけど、ね」

アリシアの質問に答えながらも、表情や行為は止めないアルフ。そんな二人が心配になり、家へ帰ろうか提案しようとした瞬間、何かが爆ぜた。

「なに？」

「え!？」

「こいつは!!」

アリシアは、その感覚にどこか覚えがあり、無意識に自分の肩を抱きしめた。

フェイトは信じられない物を見るかのように、ある方向に顔を向ける。

アルフはフェイトと同じ方向を向いたまま、何時でもどうとでも動けるように、中腰に、されど脱力し臨戦態勢を取った。

「レヴィ、これって」

不安になりついレヴィに話しかけてしまったフェイトだが、その質問に対する答えはすぐさま帰ってきた。

『うん。魔力反応だ。それも飛び切りの』

「なんで、こんな世界で」

レヴィの言葉に信じられないという表情で誰に言うわけでも無く、つい疑問を呟いてしまうフェイト。

『とりあえず、アリシアをどうにかしないと』

レヴィのその言葉にやっとなづいたのか、フェイトは傍らに居るアリシアを見た。

そうすると、アリシアは自分の肩を抱き、蹲って震えていた。

「アリシア！ 大丈夫!？」

「……フェイト？ うん、だいじょうぶ、だよ。お姉ちゃんだもん」

フェイトに声をかけられ、妹を安心させるためにと気丈にも笑おう

とするアリシア。しかしその口は、体に付随するかのようには震え、まともな声にならなかった。

「とりあえずアルフはアリシアを連れて家に！ 母さんカリニスに事情を話してきてー！」

「フェイトはどうすんだい？」

「私は、この魔力反応の原因を探ってみる」

「でもー！」

「大丈夫。危険そうなことはしないから。だから早く」

「でも……」

『アルフ、アリシアを連れて家に帰って。いざとなったらボクも居るから』

「……わかった」

アリシアを連れて行けと言うフェイトと、フェイトを一人にするわけにはいかないと思っているアルフ。二人の間で意見が食い違いがそれはレヴィの鶴の一言で、ひとまずの決着を得る。

「直ぐプレシアカリニスを呼んでくるから。それまで、絶対に無茶はしないで」

アルフは渋々、と言った形でアリシアを抱くとフェイトに向き直り、それだけを告げると抱いているアリシアになるべく振動を与えないように、それでもできるだけ早く字面を駆けた。

「バルディツシュ」

〈Get set〉

残されたフェイトは人目の無い場所に移動すると愛機の名を呟く。その言葉に呼応するのはアクセサリとしてポケットに忍ばせていたバルディツシュ。

魔導師の杖にして相棒。フェイトの行く先を照らし、闇を切り裂く雷刃。

たった一言のやり取りだけでセットアップを終えると静かに飛行魔法を展開するフェイト。

「レヴィ」

『うん。認識阻害は任せて。だからフェイトは最短で、最速でまっす

ぐに原因の場所へ向かって』

「わかった。最短で最速でまっすぐに、だね」

〈行きましよう。サー〉

短いやり取りで各々の役割を確認すると、フェイトは電柱を超える程まで浮かび上がる。

このあたりはビルが少ないので、あまり高く飛ばなくても一直線で目的地へ行けるだろう。

「バルディッシュ」

〈イエッサー〉

そうしてフェイトは音に迫りよる。

音を置き去りにする勢いで翔る。

——早く、速く、音速はやくで

*

そうしてたどり着いた場所は海鳴市からも離れた郊外だった。

側には大きなお屋敷が一件。もう少し範囲を広げると、豪邸と一般では言えるような広い庭等を備えた家がぼつぼつと建っている。

そんな中でも一際目立つ豪邸の側の森にそれはあった。

『結界魔法』

それは、魔導師の使う魔法の一種であり、結界と言う境界線で世界を区切り、分ける魔法である。

その境界線の外と中では、文字通り世界が違う。それは時間の流れだったり、物質の影響だったりする。有名なものは時間と空間を切り分け戦闘の影響を結界外に及ばないようにする結界だが、用途は様々であり、中に居る者を閉じ込めると言う用途で用いられることもある。

今回は、中の影響を外に出さないための結界であり、外から中へは配慮されていないらしい。

「なんでこんな所に結界が？ この世界に魔法文化は無いはずなのに

……」

有る筈がない場所に有る。ありえない物を見てフェイトは恐慌状態になりかけてしまう。それも、フェイトと常に共にあるレヴィの言葉ですぐさま気を取り直す。

『とりあえず今は中に入って様子を見よう。もしかしたら、次元犯罪者を管理局が追いつめているのかもしれないし』

「……う、うん」

レヴィの言葉で意を決して結界の中へ飛び込むフェイト。しかしその中には想像した光景は無かった。

あるのは、結界内の森とその中央に居る巨大な猫。いや、巨大な“子猫”だった。

しかもその巨体は森の木々の高さを大きく超えている。

「な、なにアレ……」

二度目の信じられない物。今度は先ほどとは別の方向で信じられない物を見て遂にフェイトの脳みそは悲鳴を上げる。

「え？ この世界って巨大生物とか普通なの？ 魔法ないのに？ でも魔法ないけど結界はあるの？ わけわかんないよ。意味が分かんないよ。なに？ 原住魔法とか、なんかシャーマニズム的な何かとか言い張っちゃうの？ だってこの結界ミッド式だったじゃん。おかしいよ。なんで管理局はこんな世界を魔法文化なしとか言っちゃうの？ 怠慢？ 仕事してないの？ それともここ数年で急成長遂げたとか言っちゃうの？ 馬鹿なの？」

『ふえ、フェイト！ とりあえず落ち着いて!!』

脳がオーバーヒートを起こした所為か支離滅裂な事を呟き続けるフェイトを落ち着かせようと頑張つて声を変えるレヴィ。

「なんなの？ どういうことなの？ 地球を防衛する人たちの戦いとか始まつちゃうの？ 実はこれ宇宙人の侵略なの？ 有効射程200mとか言うわけのわからない実弾兵器で戦ったりするの？ 実は今足元では威力2000あるロケットランチャーが飛び交ってたりするの？」

しかし、その呼びかけはあまり意味を成していなかった。

『ちよつとフェイト！　なんでそんなこと知ってるのとか、なに口走ってるのとか、もうどうでもいいから気を取り直して〜!!』

フェイトにしか聞こえない筈のその声を第三者が聞いていたらその人はこう言うのだろう。「その声はとても悲痛で、まるでどうしていいかわからない赤子の鳴き声のようにも感じました」と。

「は!?　私は、なにを……」

レヴィの悲痛な叫びが届いたのか正気を取り戻すフェイト。

『よ、よかった。とりあえずあの猫が暴れたら危ないし行動不能にしよう』

「えっと、うん。そうだね。かわいそうだけど仕方ないよね」

正気を取り戻したフェイトは、レヴィの提案に素直に従い、バルディッシュを猫に向ける。

「バルディッシュ」

〈Photon Lance〉

フェイトの掛け声に従い一発だけの直射型の魔法を放つ。

それは高速で飛び対象に直撃した。

〈直撃を確認しました〉

「まだ、元気だね」

『大きいからダメージに強いのか、さっきの魔力反応の所為で魔法に耐性が付いちちゃってるのか。とにかく、もう何発か撃ってみよう』

「うん。フォトンランサー」

〈Photon Lance Full Auto Fire〉

マスターの短い指示でもその場にあつた適当な魔法を使うのがインテリジェントデバイスの特徴であり、今回もフェイトはフォトンランサーと、使う魔法の種類を指定しただけだが、バルディッシュはフォトンランサーを連射した。

連射されたフォトンランサーは、先ほどと同じように猫に当たるが、それは最初の数発だけで、突如猫の上に現れた人影によって防がれてしまう。

「!?　魔導師!?!」

自身のフォトンランサーを防いだのはれっきとした魔法、バリア系の魔法であった。それはつまりそれを行使した人影が魔導師であることの確固たる証であった。

「あなた誰？ どうしてこんな事するの！」

その魔導師はこちらに声をかけてきた。その姿はまだ幼くフェイトと同年代の様に見えた。白いバリアジャケットに白と黄色と色はともかく、形状は一般的な杖の形をしているデバイス。しかし、先ほどの魔法を見るにそのデバイスもバルディッシュと同じ、インテリジェントデバイスの様に見えた。

「あなたこそ誰？ 管理局？」

「かん、りきよく？」

フェイトの質問に何を言っているのかわからないような顔をする白い魔導師。その反応で少なくとも、管理局員ではないと判断したフェイト。魔法技術の無い現地の魔導師がインテリジェントデバイスを持っているとも考え難く、最も可能性の高いのは、次元犯罪者か。ならば、その幼い見た目で油断する訳にはいかない。リニスやプレシアに一流の魔導師であるとお墨付きをもらっていてもフェイトに実戦の経験は皆無。自身の状況と敵の可能性のある未知数の魔導師。今現在自分が置かれている状況を冷静に判断すると、フェイトは頭の中を切り替え、戦闘準備を整えた。

「(レヴィ)」

『やるの？ フェイト』

「(うん)」

『わかった。ボクはもしもの為の保険になるよ？ それで良い？』

「(大丈夫)」

相手に聞こえないように念話、特にレヴィとだけ聞こえる念話を利用し、お互いの気持ちを戦闘へと傾けていく。

「バルディッシュ」

〈Scythe Form〉

フェイトの呼びかけに即座に応え自身の形を通常形態のアックスフォームから、高速近接戦闘形態であるサイズフォームへと変えるバ

ルディツシュ。

その姿かたちを見て、相手の白い魔導師はこちらの戦う意志を読み取ったのかデバイスをこちらに付きつけるように身構える。

「その、形は……」

バルディツシュを見つめいう魔導師。心なしか震えているようにも見える。

「怖い？」

「えっ？」

だから聞いた。

「怖くて当然。だって……」

——だってこの形は——

「命を刈り取る形をしているでしょう？」

戦う意志を、鎌へと姿を変えたバルディツシュに込め、言葉と同時に動く。一瞬で間合いを詰めバルディツシュを振り払う。

〈Flyer Fin〉

しかし、その場に相手は居なかった。相手のデバイスがとつさに反応し飛行魔法で上空に飛びあがったのだ。

——やっぱり、インテリジェントデバイス。

相手のデバイスの種類に確信を持ち、その確信からますます相手の正体がわからなくなってくる。

もし次元犯罪者だったとしたならば、なぜあんなに、自分と変わらなそうな年齢でこんなことを。なぜ一人なのか。なぜ攻撃をしてこないのか。

疑問は尽きないが、それが解消されることは無いのだろう。すでに戦いの火蓋は切って落とされたのだから。切ったのは自分であるのだが。

「なんで急に攻撃してくるの！」

上空からそんな世迷言を言ってくる。

「あなたの事情は知らないし、知る必要も感じないけど。ただ、一つだけ。あなたがあの巨大な猫のような危険生物を作成していると言うのなら、私はそれを阻止します」

「な！ それは違うよ！」

フェイトの放った言葉を即座に否定してくる。

「私はあの子を作ってないよ！ ただ、原因は知ってるけど……」
「ならばなぜ直ぐに止めようとしない。あなたが私の攻撃に反応できたと言うことは、少なくとも、あなたは私が攻撃を開始する前に、あの猫の側に居たはず。ならばなぜ原因を排除しようとしない？ それは、あなたがそうする気が無いから。違う？」

「違う！ 違うよ!! うまく言えないけど、アレは危険なもので、下手に扱っちゃうとこの世界が危険で！ だから!!」

「じゃあ何故あなたは管理局に報告しない？ なぜ大人を頼らない？」

「そ、それは……」

フェイトの追求に言葉を失う白い魔導師。その姿を見て、フェイトは少しため息をつくと鋭い視線と共に言い捨てた。

「あなたが悪人では無いならば、そのヒーローごっこはすぐさまやめた方が良く。あなたの言う通り、あの猫が危険な物なのならばすぐに」

「わ、私は、ヒーローごっこなんか……」

「……話しても、無駄か」

自身の言葉に反抗する相手に付き合う気が失せたのかフェイトは小さくつぶやくとバルディッシュを腰だめに構え、その場で横薙ぎに振った。彼我の距離を見ても刃が届くわけがない距離。しかし――

〈Arc Saber〉

――バルディッシュの宣言と共に、形成されていた魔力刃が切り離され相手に向かって飛翔する。それはさながらブーメランのように回転しながら相手に向かう。

〈Protection〉

しかしその刃は相手へと届かない。インテリジェントデバイスがとっさに防御魔法を展開したからだ。だが、その光景はフェイトにとっては予想通りの物であった。

そもそもアークセイバーが相手に直撃するとは思っていない。

アークセイバーを放った理由の一つは相手の戦力調査だった。

バリアを“噛む”性質を持ったアークセイバーは、生半可な防御魔法だったら噛んだ後切り裂く事ができる。しかし、それが叶わず相手の防御魔法と削り合い、魔法を構成した魔力が散り、魔力素をばら撒いている現状から見ると、相手の魔力量は相当な物だと判断できる。それこそ自分と同程度。

しかし、その一般的に見たら大魔力を保持している本人はどうかと言えはてんで素人。才能はあるようだが、戦闘経験、特に対魔導師戦の経験はほぼ無いと言っても良いだろう。

証拠に、不規則なアークセイバーの軌道に驚くも、それを目で追えてはいた。しかし追えていただけで、思考が間に合わなかったのか、思考に体が間に合わなかったのかはわからないが、少なくとも動くことはできていなかった。

故にデバイスがとつきに防御魔法を発動し、その結果本人が意識して使う魔法とは比べ物にならない、脆弱な魔法となってしまうのである。

だからその隙を突く。

「セイバーブラスト」

〈Sabber Blast〉

そのキーワードを呟いた瞬間に、アークセイバーが炸裂する。噛んでいた防御魔法共々炸裂し、相手の目の前に煙幕を張る。

「きやつ!!」

その予期せぬ衝撃に身をやられ体勢を崩す魔導師へと高速で近づき、バルディツシユを振るう。

「きゃああああっ!!!」

抵抗なく切られ墜落する魔導師。止めとばかりに、威力をほとんど殺し電気の性質だけを残したフォトンランサーを一発だけ追い打ちする。

魔導師の地面への衝突と同時に直撃するフォトンランサー。これではばらくは相手はまともに動けないだろう。魔力ダメージと共に自分の電気変換資質による感電にも似た痺れがすこし残る筈だ。

「あなたは弱い。その弱さでわざわざ危険に挑むことは無い。ヒーローごっこは大人しく諦めたほうが良い」

冷酷に、冷酷に。落した相手にただそれだけを告げ、当初の目的である猫へと向きを変える。視線の先の巨大な子猫は、今までの戦闘に怯えたのか丸くなり震えていた。

〈Ax Form〉

猫へとバルディッシュを向けるとバルディッシュは自発的にサイズフォームからアックスフォーム。つまり、最初の形態へと戻る。

「ごめんね」

〈Thunder Smasher〉

怯える子猫に罪悪感を感じ、それだけ呟くと魔法を放つ。フェイトの持つ数少ない直射砲撃魔法、サンダースマッシャー。

それは雷光を纏いながら一直線に対象へ向かうと着弾と同時に炸裂した。

着弾時に起きた煙が晴れた場所に向かうと、そこには、普通のサイズになった子猫と青いひし形の宝石のような物が落ちていた。

「ごめんね」

子猫を抱き上げ少しだけ回復魔法を使う。あまり得意ではない為、本当に気休め程度だが、自分が与えたダメージが少しだけ早く抜けるだろう。

そうして子猫を寝かせると、隣に落ちていた宝石を手取る。

「これが、原因だったのかな？」

『わからないけど、一応持って帰ろう。プレシアに見せれば何かわかるかも』

「そうだね」

レヴィとのやり取りで回収が決定された宝石を、バルディッシュの収納空間に安全に収納できたことを確認すると、フェイトはその場で浮き上がり、来た時と同じように高速でその場から離れた。

その場に残ったのは、フェイトに撃墜された白い魔導師だった少女

と、その少女を心配するように駆け寄る小動物。そして離れた場所の子猫だけだった。

(あなたは結局誰なの？ 何故攻撃してきたの？ どうして、謝りながら攻撃するの？ もう、訳が分からないよ)

動けない体で、意識と視線だけでフェイトを見送った少女の頭の中には、その事だけがただただ渦巻いていた。

それも体の痛みで長くは続かず、意識を失ってしまう事に成ってしまうのだが。

*

「お帰りなさい！ フェイト!!」

帰宅したフェイトを迎えたのはアリシアのハグだった。玄関には、アリシア以外の全員も集まっており、皆フェイトが無事に戻ってきた事に安堵していた。

「よかった。良かったよお」

抱きついているアリシアは心配のあまりかフェイトに抱きついたまま泣き出しており、服の肩の部分がぬれ始めている。

「何はともあれ、無事でよかったわ、フェイト」

「ごめんなさい。母さん」

「あなたが無事ならそれでいいの」

プレシアもよほど心配していたのか、少し涙目になりながら、アリシアごとフェイトを抱きしめた。

「さあ、フェイトも無事帰ってきた事ですし、夕飯にしましょう。今日は新居引っ越しパーティーですから、腕によりをかけてたくさん作ってくださいよ！」

リニスの明るい言葉で一同はダイニングに向かう。

「何があったのか、後で詳しく聞かせてもらおうわよ。レヴィ」
『うん』

その裏で、プレシアとレヴィだけの、そんな会話が会った事も知らず、この日のテストロッサ家はアクシデントがあつたものの、無事に地球、海鳴市へと根を下ろすことができたのだった。

*

「それで、もう少し詳しく話を聞かせてもらつていいかしら？」

深夜、日もまたぎ子供はもちろんの事大人ですら眠っている人もいる時間、ある部屋に30代半ばに見える女性と10歳行くか行かないか位の少女が部屋の中に居た。

女性はプレシア・テストロッサ。テストロッサ家の家長である。

少女は、フェイト・テストロッサ。テストロッサ家の次女である。しかし、本来あるべき瞳の色はワインレッドとも言えるような綺麗な赤色であり、今の彼女とは違う。

今いる少女は、瞳の色以外フェイトと瓜二つであるが、その瞳の色だけはサファイアブルーとでも言えるような綺麗な濃い青色をしていた。

少女の今の名はレヴィ。彼女がフェイトに似ているのは当前であり、彼女の体はフェイトの物なのだから。

「うん。フェイトが言った事で、ボク達が見聞きしたことは大体合つてるんだけど」

「当然、それ以上の情報が聞きたいのよ」

二人が話すその姿はまるで悪の大魔王とその参謀の様に、怪しく、昏い雰囲気纏っていた。

「そうだね、僕が昔話した『信用しにくい不確定な未来予知』によるならば、その宝石はロストロギア『ジュエルシード』。最近発掘された筈の物だ。そしてフェイトと戦った少女がフェイトの無二の親友に、なる筈の高町なのは」

「そしてフェイトを彼女に合わせるために、このロストロギアに関連

する事件を通して、彼女との友情を育むためにこの世界に私たちは来た」

「そして、ボクの未来予知とまあ6割がた同じ状況で二人は出会っている」

「このまま誤解とすれ違い、それを乗り越えた共闘。お互いの思いをぶつけあうことで二人は無二の親友となる」

「確かに違う事が多いけれど、大筋は間違っていない。今のところはね」
「ええ。その様ね。それで、私は管理局が来る時までフェイトを陰ながら見守っていればいいのか?」

「うん。フェイトを表で守るのは、ボクがするから」

「良いわ、あなたのその狂言に付き合っている限り、フェイトにとって、あの子たちにとって良い未来が待っていると言うのなら、その狂言に付き合いますよ」

「ありがとう。それと……」

「ええ。アリシアの事でしょう。大体予想はつくわ。」

アリシアの死因は次元振、正確にはそれを発生させる程巨大な魔力の奔流に充てられてのリンカーコアの破壊。それによるショック死。つまり今回のアリシアに起きた影響は——」

「次元振を起こせるほどの魔力の奔流。氷山の一角とは言えその一部を感じてしまった事による、PTSD心的外傷の発作、つてところか」

「ええ。これからはアリシアには私かりニスガ側に居るようにしましょう。私はこれの研究に時間を取られることを考えると、リニスガ側に居るのが良いのでしようね。だから」

「うん。実働はフェイトとアルフ、それにボクってことになるね。大丈夫、上手くいくように努力するよ」

「上手くいくように、じゃだめなのよ。上手くいかせなくちゃ」

「……そうだね」

「……………あなたももう寝なさい。これから数日はジュエルシードの搜索を含めた市内の散策、あなた達が通う学校の選定と、やる事は色々あるのだから。アリシアなんかは旅行なんかも楽しみにしているし。やる事はたくさんあるのよ」

「りよーかい。それじゃ、お休み」
「ええ。おやすみなさい」

こうして、いない筈のラスボスと参謀の会話は終わった。
それは夜も更け虫も鳴かないような時間の話だった。

第2話 初めての温泉、二度目の魔法少女へ上

「わっふーい！ おんっせん！ おんっせんっ!!」

車の中ではしゃいでいる少女はアリシア・テスタロッサ。彼女は今人生で初めての温泉と言う、地球、特に日本の文化に触れるのでテンションが鰻登りすぎて竜となって有頂天で天元突破してしまい。はしやぎにはしゃいでいる。

「ア、アリシア借り物なんだからあまり暴れちゃダメだよ」

そんなアリシアの隣で窘めるのは妹のフェイト。しかし妹とは言ってもアリシアが車いすから脱却してからは元気なアリシアに振り回されたり、このようにテンションの上がったアリシアを嗜めると言うどちらが姉なのかわからない状況になる事が多くなってしまう。

「良いじゃない。家族で初めての旅行なのだから少しくらい羽目を外したって」

レンタルカーの助手席から声をかけるのはプレシア。

今、テスタロッサ家は近場の海鳴温泉向かうため、レンタルカーに乗り山道を走っている。家族で旅行と言う状況ではしゃいでいるのがアリシア。乗っている車が借り物だから壊したらいけないとあわてているのがフェイト。そんな二人を見て微笑んでいるのがプレシア。リニスは運転中、アルフは爆睡中となっている。

「で、でも母さん。これ借り物なんでしょう?」

「大丈夫よ。壊しても走れるくらいならちよっとお金払えば良いだけなのだから。だからあなたはそんな心配しないでアリシアみたいにはしゃいで良いのよ?」

「そうだよフェイト！ お姉ちゃんと一緒にはしゃごう!!」

「そ、そんなこと言われても……」

はしゃげと他人に言われてもはしゃげるなんて事は無く、結局フェイトは目的地に着くまで借りた猫の様に大人しくしていた。

一方のアリシアは車の窓から山の風景を乗り出す勢いで眺めたりとと完全にお子様だった。実際アリシアもフェイトも肉体年齢は1

0に満たない程度とまだ子供なのだが、フェイトが少し落ち着きすぎているだけである。

*

そうして、約1, 2時間程山を走った所に海鳴温泉と言うのはある。ここ、海鳴市から近く、山の中にあるので自然も豊富で静かと、近場の人間からはとても人気のスポットらしい。

フェイト達が初めてここに来てからもう1週間たった。それはつまり、初めてジュエルシードに対面してから1週間と言うことであり、あの後も何個か確保していたりする。

アルフが起動前のジュエルシードを発見し確保した物を調べたところ、ジュエルシードはあらかじめの封印処理は施してあるらしく、それが弱まり、なにがしかの切っ掛けで封印が解けて発動してしまうらしい。と言うのがプレシアの調査結果である。

ここ最近海鳴市では謎のガス爆発だったり水道管破裂だったり、奇怪な事件が多く、それらもジュエルシードの所為だと予想される。なので、今もプレシアがジュエルシードについて調べているが、今日から数日はそれを忘れ世間一般も連休で旅行シーズンと言うこともあり、それにあやかり近場にも旅行しようと言う話になったのであった。

そこで調べた所近場では中々有名な温泉宿があると言うことで、そこに泊まりに来たのである。

「おおー。なんかすごい家だ。これが日本の“和”って奴だね！」

「確かに不思議な作りですね。全面木造ですか……。火事の時とかどうするんでしょう」

海鳴温泉に付き早々民宿の外見について言いたいことを言い始めるアリシアとリニス。アリシアはまるで日本に旅行した外人(間違っではない)のようなことを言い、リニスは家屋と言えば、中世ヨーロッパの城のような作りの時の庭園での記憶しかない為、全面木造の

家に興味深々であった。

「ほら、二人とも中に入るわよ」

民宿の外見だけではしゃげる二人にプレシアが声をかけ中に入る。すると民宿の女将さんが出迎えてくれた。

「どうもいらつしやいました。旅館山の宿へようこそ」

そう言つて頭を下げる女将。

「わー！ 和服だ！ すごい！」

「あ、こ、こんにちは！」

頭を下げる女将の来ている服装になぜか感銘を受けるアリシア。頭を下げられたので、あわてて自ら頭を下げるフェイト。

そんな二人を女将は微笑ましそうに見つめていた。

「ええ。初めまして。予約していたテストロッサなのだけれど」

「はい。テストロッサ様ですね。大人が3名、子供が2名でお間違えないでしょうか？」

「ええ。大丈夫よ」

「それではこちらに」

プレシアの言葉への対応に女将のプロ意識が垣間見える。綺麗に一礼すると、足音をたてずテストロッサ家を誘導し始めた。

*

「それでは、こちらがテストロッサさんのお泊りになるお部屋となります。どうぞご覧ください」

女将の案内に従い通されたのはそこそこ広い部屋。もちろんここです大人3人子供2人が寝るのだから広くなければ困るのだが。

部屋に通された後、女将が去ろうとした所をアリシアが止める。

「あのー！」

「はい。なんででしょうか？」

「女将さんみたいな和服つて着れますか？」

アリシアは先ほどから女将の和服に興味津々だったようで、せっかくなのだからと、自分も来てみたかったらしい。そんなアリシアの言葉に女将はにこやかに笑うと手を当てて少しだけ笑った後に応えてくれた。

「申し訳ありませんが、私共のような着物は置いてないのです」
「そうですか……」

女将の言葉にしよぼくれるアリシア。よほど和服が来たかったのだと見える。

「ですが、浴衣と言ってお風呂に浸かって貰った後着るような服ならありますよ」

続く女将の言葉にはっと顔を上げる。

「部屋の隅の籠に浴衣が入っておりますので、温泉に浸かった後にでも着てください。持って帰られるのは困りますが、この宿に泊まっている間だったら常に来ていただいて大丈夫ですよ」

「ホントですか!？」

「はい」

「やったー!」

アリシアは首を縦に振る女将を見、目を輝かせると小さく飛び跳ねる。

そんなアリシアを愛おしそうに見つめる女将にプレシアは頭を下げた。

「すみません。家の娘が」

「いえいえ、可愛い娘さんですね」

「ええ。自慢の娘ですから」

そんなやり取りをした後お互いに少しだけ笑うと、女将は会釈をして去っていった。

「さあ、フェイト。温泉入るよ!!」

「ええ!? もう入るの? もう少しゆっくりしてからでも……」

「良いから! 行くよお!」

よほど温泉に入りたかったのか、それともよほど浴衣が着たいのか、アリシアはフェイトを連れ去り、温泉に向かってしまった。

「まったく、あの子ったら落ち着きが無いのだから」

嵐のごとく去って行ったアリシアを見送ったプレシアはため息をつくともまだ部屋に残っていたアルフとリニスの方を向いて喋りかける。

「あなた達は どうする？ 私は少しゆっくりしようかと思ってるけど」

「じゃ、あたしやフェイト達と一緒に温泉にでも行こうかね、子供だけじゃ不安だし」

「私ももう少し部屋で寛ぐことにします。慣れない運転で肩もこってしまいましたし」

プレシアの問いにアルフとリニスそれぞれ応え、各々自分の方針に従った行動を取り出す。アルフは浴衣を手にアリシア達を追い、リニスとプレシアはお茶を入れ部屋で寛ぎだした。

*

「温泉だー！！」

「温泉だー！！」

さっそく温泉に入る為にやってきたアリシア達だが、アリシアもアルフも早々に服を脱ぎ浴場に突撃、扉をあけ放つとそのまま叫びだした。

「二人とも静かにしてよ……」

そんな姉と自身の使い魔が恥ずかしいのかフェイトは後ろから顔を伏せながらついてきている。

「良いじゃん良いじゃん！ いま誰も居ないみたいだし、貸切だよ!!」
「それでも、ダメだってばあ」

天真爛漫と言うよりは自由奔放な姉を説得するのに苦心するフェイト。苦心するだけで説得が叶っている訳ではないのがまた涙を誘う。そんな涙ぐましい努力も実を結ばず姉は妹を置いて温泉へと突撃しようとする。

『アリシア、ちゃんと身体洗ってからじゃなきゃダメだよ』

そんなレヴィの忠告を聞くと今まさに足をつけようとしていたアリシアは止まり振り向くとフェイトの下へ戻る。

「そーなの？」

『うん。体を綺麗にしてから入るのが温泉のマナーなんだよ』

何故レヴィの話は素直に聞くのかと目の前に居る姉に対し疑問を投げかけたいと激しく思うフェイトだったが、レヴィの話聞いたアリシアは何度か深くうなづくとう唐突に話を切り出してきた。

「そっかー。じゃあフェイト、お姉ちゃんと洗いっこしよう！」

「え？ い、いいよ。自分で洗えるよ」

「良いから！ ほら!!」

恥ずかしさから断るが結局姉の強引さには勝てずに押し負け、お互いがお互いを洗うことになってしまふ。それでも、それが嫌なのではなく恥ずかしいだけなのは、この姉妹の仲の良さを物語っているだろう。そうして姦しくお互いの背中を流し合った姉妹は、仲良く温泉に入る事になるのだった。

「あたしや完全に空気かい？」

一人はずれで自身の体を洗うアルフを残して。

*

「はふ〜」

「気持ちいいね……」

「ああ。極楽だねえ」

仲よく並びながら温泉の気持ちよさを味わうアリシア、フェイト、アルフの3人。それに加えて、レヴィも現在はフェイトの意向により、感覚を共有するまで浸食度を上げて貰い、一応温泉の感覚を味わっている。

『いやあ、ホントに気持ちいいね〜』

「うん。そうだね……」

初めての温泉のあまりの気持ちよさに頭が回らないのか、フェイトはレヴィの言葉に対しついつい口に出して答えてしまった。現在この広い浴場にこの3人しか居ない貸切状態だから良いものの、他に人が居たら完全に怪しい子である。

しかしそんな事には終ぞ気づかずにとろけた顔をして呆ける3人。広い浴場を身内だけで、しかも3人で専有していると言う後ろめたさ

と共に、ちよつとした優越感があり、さらには気持ちのいいお湯に
広々とした解放感。

それらが相乗効果をもたらし3人、特にフェイトの頭を蕩かしてい
た。

そんな極楽の時間は唐突に終わりを迎えてしまう。

「わあく。広ーい」

「そうだね〜」

「お姉ちゃん洗ってあげるよ」

「あらそう？　じゃあお願いしようかしら」

「それじゃあアンタは私が洗ってあげるわ！」

浴場に入ってきたのは、2人の高校生らしき女性と3人の少女。

女性は紫がかった髪に抜群なプロポーションをした女性と、もう一
人は、茶色い髪の女性。3人の少女の内2人は女性2人の兄弟なの
か、どこことなく顔立ちや雰囲気似ている。もう一人は金髪碧眼の見
るからに日本人の容貌ではなく、なぜかフェレットらしき小動物をつ
かみ、洗おうとしている。

その5人組みが来たので意識がそっちに割かれ、ふと見やるとフェ
イトは驚愕し、慌てて顔を伏せる。その様子に訝しみ、アリシアが話
しかけてきた。

「どうしたの、フェイト？　大丈夫？」

「だ、だいじょうぶだから……」

そんなアリシアにだけ聞こえるようになるべく小さい声で話す
フェイト。しかし浴場の構造の所為かそれはやけに響く、ように聞こ
えてしまう。

——ど、どうしよう！　どうしよう！

外には出さないように努めながらも、フェイトの内心はパニックに
陥っていた。

——どうしてあの子がこんな所に居るの!?

それは、3人の少女の内一人、栗毛の少女を見たせいだった。バ
リアジャケットは装着していないし、髪型もツインテールでは無いが

しかし劇的な出会いを、居るはずがない存在との出会いは忘れる事は出来ない。

いないと思っていた魔法技術の無い管理外世界での高い魔力を保有している現地魔導師。最初は次元犯罪者かとも思ったが、結局は自分が実力行使にてのしてしまつてそのまま別れた存在。

——白いバリアジャケットの魔導師！

「(ど、どうしよう、レヴィ!)」

混乱の境地に入り、自身の中に居る存在に助けを求めてしまう。

『落ち着いてフェイト。とりあえず向こうはまだ気づいてないみたいだしフェイトの名前だつて知られてないんだから』

「(う、うん……。でも、どうしよう。私だつて気づかれちゃうかなあ)」

『とりあえずボクと入れ替わろう。そうすればフェイトに一番似てるのはアリシアになるし、アリシアは彼女と会つた事ないんだから、どうにか切り抜けられるはずだよ』

「(そ、そうだよ。じゃあ、後はお願い)」

『任せて』

他から見たらただうつむいて黙っているだけのやり取りが終わりフェイトの瞳が青く染まる。

「フェイト、ほんとにどうしたの?」

「大丈夫だよ」

心配するアリシアを安心させるためにそちらに顔を向けるレヴィ。その顔、瞳を見るとアリシアは即座に二人が入れ替わつた事に気がいた。

「レヴィ? なにかあるの?」

「うん、とりあえず普通にしていいけど、フェイトの話題はなるべく出さないように、お願い」

『アルフも、お願い!』

「なんかわからないけど了解」

「ん。わかつた」

短い作戦会議が終わるとアリシアとアルフ、それに交代したレヴィ

の3人は先ほどと同じように寛ぎ始める。魔導師として、魔導師でなくともマルチタスクの訓練をしている3人にとって、平静を装いながら会話する事は朝飯前だった。

そんな短い作戦会議が終わった時、後から入ってきた5人組みも体を洗い終わったのか浴槽に入浴してくる。

「先客がいるから皆あまりはしゃがないようにね」

「はい」

紫髪の女性の注意に素直に従う少女たち。しかし、返事をしたのはその内の2人だけで、最後の一人、栗髪の少女―高町なのは―だけは先客を訝しげに見つめていた。

「なのは？ どうしたの？」

そんな妹の様子が気になったのか、姉―高町美由希―はなのはの顔を覗き込んだ。

「え？ いや、なんでもないよお姉ちゃん」

「そう？ なら良いけど、他のお客さんもいるからあまりはしゃがないでね？」

「う、うん。わかった」

そんなやりとりの後一行が湯船に近づくと、紫髪の女性が入る前にアリシア達に訪ねてきた。

「あのく、私達ペットのフェレットが居るんですけど……、お湯につけても大丈夫でしょうか？」

「あ？ あく、気にしないでおくれ、私たちは気にしないからさ。ね？」

その問いにアルフが答える。知らない人から見たら一番年上だからである。

「うん」

「う、うん」

そんなアルフに同意を求められレイヴィとアリシアも同意の意を示す。

「ありがとうございます」

一言礼を言うと少女たちも続けて礼を言い入浴する。

その最中ですら、こちらを伺っていた高町なのははしばらくすると、こつちに近寄ってきた。正確には高町なのは率いる少女軍団が、だが。

「あの〜」

筆頭である高町なのはは意を決したように一つ頷くとレヴィたちに向かって話し始めた。

「私、高町なのはって言います。あの、名前、聞いても良いかな？」
急に接触を図ってきたなのはに驚くあまり返事を返せずお互いを見つめ合うレヴィとアリシア。その様子が、言葉が通じないのかと思っただのか、なのはは後ろに居る友人たちに振り返り助けを求めていた。

「ど、どうしよう。言葉通じないのかな？」

「私が代わりに話しましょうか？」

「うん、お願い」

「Hey, My name is Arisa. You guy
s can speak Japanese? (ハイ、私の名前は
アリサ。あなた達日本語喋れる?)」

なのはのSOSに金髪の方の少女が応え颯爽と前に出ると唐突に流暢な英語で話しかけてきた。

言ってしまうとアリシアたちに英語はわからないし、日本語も分からない。英語はどこことなくミッド語に似ているとはいえ似ているだけであり、聞き取れるかと言われたらNOと答えるだろう。しかし彼女たちが言葉を理解し話せているのは偏に翻訳魔法のおかげである。

呼んで字のごとく『翻訳魔法』。言葉の通じない現地人と円滑にコミュニケーションをとるために開発された魔法であり、その効果は単なる翻訳だけには収まらない。

翻訳機能で言えば、相手の言葉から意味を捉え、その意味を通訳する。なので、英語のような単純な言語に対しては効果をいかんなく発揮するが、日本語の様に言外の意味を捉える事が重要な言語に対しては精度が落ちる。

そして、翻訳以外の機能は幻覚魔法である。これは、現地住民に違

和感を与えないよう、潜入調査の際ばれにくくするためにかかっているモノであり、こちらが発した言葉に合わせて口の動きにだけ幻覚をかけ、あたかもネイティブな言葉を発しているように見せかける効果である。

これらの効果をすべて合わせ、翻訳魔法とミッドでは呼ぶのだが、この翻訳魔法は魔法の使えないアリシアにもかかっている。そんなアリシアたちが日本語がわからないと言うわけはもちろん無い。

「ああ、ごめん。日本語話せるよ」

なので、その旨を一同を代表してレヴィが言葉にする。その言葉を聞いてなのは安心した表情となり、アリサと名乗った金髪の少女はこやかに笑みを浮かべ喋り始めた。

「そう！ なら早く反応してくれてもよかったじゃない」

「ごめんね。急に話しかけてくるからびっくりしちゃって」

「そう。それはこっちが悪かったわね」

「ううん、良いんだ。それと一応話せるけど、得意ってわけじゃないから、よろしくね」

「そうなのね！ わかったわ。それから改めて、私の名前はアリサ。

アリサ・バニングスよ！」

アリサは快活な性格らしくレヴィの言葉を聞くとニツと笑って堂々と自己紹介をし直した。

そんなアリサに後れを取らないように後ろにいた二人も自己紹介する。

「わ、私は高町なのはです！ なのはが名前だよ！」

「私は月村すずか。すずかが名前です」

栗色の髪をしたのが高町なのは、紫髪の方が月村すずかと名乗った。

「ボクはレヴィ」

「私はアリシア！ アリシア・テスタロッサだよ！ よろしくね、アリサになのは、すずか！」

なのは達3人の自己紹介に合わせて、レヴィとアリシアも自己紹介をする。

「ほら、なのは。聞きたい事があるんでしよう？」

「う、うん」

自己紹介が終わるとアリサがなのはを肘で小突いて言う。やはり先陣を切ってきただけあってレヴィたちに何か聞きたい事があるらしい。

『聞きたい事って……』

その話を聞いていたフェイトが不安になり、つい呟いてしまう。

「(うん。十中八九フェイトの事だろうね)」

『だ、だよ。レヴィよろしくね!』

「(う、うん。)」

不安がっているフェイトを安心させるため念話で応答するレヴィだが、フェイトはよほどなのはに自身の話題を出されたくないのか、レヴィに後を頼むと意識を落してしまった。よほどなのはと関わりたくないらしい。

そうして意を決した様子なのはが切り出した言葉は――

「あ、あの。二人のどっちかって、私と会った事、無い?」

――レヴィたちが予想した通りの話題だった。

――ビンゴ……。

つついレヴィは頭の中でそう思ってしまった。自身が考えていたことが的中したせいなのだが、あまり嬉しいと思わない。

――だけど、考えによってはなのはもフェイトもお互いを強く意識してらって事だよ。

逃げるフェイトを追うなのは。この形は凶らずともレヴィの知る未来に似ている形になっている。

――なーんか雰囲気はラノベやギャルゲーちっくだけど……。

特に現代ファンタジー作品なんてこんな感じだろう。非日常的な出会いをした主人公とヒロイン。その場ではお互い自己紹介をしないのだが、数日後、日常の中で運命的な再開をし、それを機に主人公はヒロインの事が急激に気になってしまう。

その時のファーストコンタクトが軟派もどきの「どこかで会った事ない?」という言葉。

——あー、こんな作品あったら流行りそう。

なんて、とりとめののない事を考えながらも、表ではきちんと対応している。

「えーっと、無いと思うけど?」

自身の演技力を総動員してとぼけるレヴィ。それが通じていたかどうかは本人の知る由では無い。

「アリシアは?」

「ううん、知らない。はじめてだと思うけど……」

一応アリシアにも確認を取るがアリシアはもちろん会った事が無いのでそう答える。

「それじゃあ、姉妹は? レヴィちゃんくらいの、女の子。いたりしないかな?」

よほど、聞くべきことを考えていたのか質問を一つ捌いても即座に次の質問が飛んでくる。

2つ目の質問にどう答えるべきかアリシアがレヴィの方を見るがレヴィはそんななお構いなしに即答する。

「いないよ」

その返答にアリシアすらも驚くがそれでもレヴィは力強い言葉で続ける。

「少なくとも『ボクには』いないよ。姉妹はね」

そのやけに力の籠ったセリフにアリシアは何か言いたそうに口を開いたが、結局何も言わずに口を閉じた。

そして質問した側であるのはもその言葉を信じたのか、一度頷くとすこしはにかみながら謝った。

「そ、つか。ありがとう。ごめんね、変なこと聞いちゃって」

「ううん、大丈夫。それに似た顔の人は世界に3人いるって言うんだし、不思議じゃないよ」

「そうなの?」

「そうさ」

その後はとりとめのないことを少女たちは話していた。旅行先で出会った年の近い者同士なのだからかその話は多岐にわたり盛り上

がった。

いつ、こちらに来たのか、や日本語上手だね。などのとりとめのな
い話から、最近この海鳴市は変な事件が多く物騒だから気をつけろ、
など。

その話をされた時のなのは何かを悔やんでいるような雰囲気を一
瞬だけ見せたが、それも直ぐに取り繕ったのか消え、アリサとすず
かには気取られなかった。

唯一理由も含め知っているレヴィは気づいていたが、今その事を指
摘する意味も、しなければならぬ理由もないため気づかないふりを
することに決めた。

そうして長話をしてしまい、アルフが上がるのに合わせレヴィたち
も浴場を出る事にする。

アリサ達からこれから卓球で遊ばないか？ などと誘われたが、家
族と用事があるからとお茶を濁すにとどめた。

そうして、温泉から上がりアリシアは念願の和服―浴衣だが―を帯
と言う不可解な物体に悪戦苦闘しながらもなんとか着、テスタロッサ
家ととつている部屋に向かっていた。

「(フェイト、フェイト)」

その道中にレヴィは意識を落したフェイトを起こす。

『ん？ ふあ……。レヴィ？』

「(そうだよ。もう温泉からは上がったから、起きて)」

『……うん。あの子とはどうだった？』

意識を覚醒させたフェイトは状況を理解すると即座に先ほどの事
について聞いてきた。

「(なのは？ フェイトの事は煙に巻いたよ)」

『なのはって言うんだ。そっか。ありがとう』

「(どういたしまして。他にも色々話したけど良い子だったよ？」

フェイトも逃げずに話してみればよかったのに)」

『や、やだよお』

レヴィの言葉に不満な声が返ってくる。

「(どうして)」

『だって、初めて会った時、敵だと思ったとは言えあんなことしちやっ
たし……。絶対恨んでるよ……。』

「(そんなこと無さそうだったけどなあ)」

言葉尻が弱くなり、不安がるフェイトにレヴィは自身が感じた印象
を素直に話すが、フェイトは一向にそれを認めようとせず、強く拒ん
でいた。

『そんなことあるよ！ きつと私を見つけたら復讐されちゃうんだ
！』

「(なんで、そう思うのさ)」

『……………特に理由は無いけど……………』

ぶすつとした声で答えるフェイト、その声についつい苦笑いがこぼ
れそうになる。

「(とにかく、話した印象は悪い子じやなさそうだったし、もし今度会
うことがあればちゃんと話してみれば?)」

『……………』

「(無視ですかい)」

子供のようないざ実際未だ10にもなっていない子供だが―態度をと
るフェイトに呆れながらも、アリシア、アルフと共に部屋へと向かっ
ていた。

*

「あら、三人ともお帰りなさい。温泉はどうだった？」

アリシア達が部屋へ帰ってくると、それに気づいたプレシアが訪ね
る。その問いにアリシアはプレシアの元へ飛び込むと、プレシアの顔
を見上げ朗らかな笑顔を浮かべながら言った。

「気持ちよかった！」

「そう、それは良かったわね」

そんな愛らしい娘の言葉にプレシアは、にこやかに答えながらアリスアの髪を撫で始めた。

「それで？ 二人はどうだった？」

「おお、気持ちよかったよ」

「……うん。気持ちよかったよ」

プレシアに話題を振られたアルフとフェイトもそう答えるのだが、フェイトの方はどこか言うのを躊躇った。

——最後のアレの所為でよくわからなかったよ……。

そんな思いがフェイトの胸中を駆け廻っていたのだが、母に心配をかけるわけにはいかないうえ、なのは達が来るまでは確かに気持ちよく温泉に没頭できていたことも事実なので、無難な答えを返す事になっってしまった。

「そう。それじゃあ夕飯までしばらくあるから、暫く自由にしていわよ。だけど部屋から出るなら18:00までには帰ってきてね？」

「はいー！」

アリスアはプレシアの言葉に元気に返事をした後、少し離れた場所で座っているフェイトの元へ向かいフェイトにどうするか聞く。

「フェイト、どうする？」

「んー、暫くはゆっくりしてたいかな」

「そっか！ じゃあ、私も！」

フェイトが部屋でゆったりすると言うので、アリスアも持ってきた暇つぶし用に本を開きフェイトの隣に座る。

フェイトにアリスア、プレシア、リニス、そしてアルフと、部屋には5人いるが特に会話もなく、しかしそれが苦にならない穏やかな空気が部屋の中に充満していた。

—— T o b e c o n t i n u e d

第2話 初めての温泉、二度目の魔法少女へ下

「レヴィ！ 反応は!?」

『未だ健在！ 近づいてるからこっちの方角で大丈夫なはず!』

普通の人なら寝てしまっている深夜、海鳴温泉の裏山を高速で空を翔るの、黒いレオタードに白いスカート、その上から黒いマントを羽織り黒い斧槍を片手に持った金髪の少女。

フェイト・テスタロッサの姿があった。

その様子は叫んでいるセリフからも読み取れる通り非常に焦っており、探査魔法を何度も放ちながら高速で空を駆けている。

「フェイト！ こっちはダメっぽい！ すぐそっちの方に行くから、待ってて!!」

そんなフェイトにアルフからの念話が届く。そのアルフの声もどこか焦っているようで切羽詰っていた。

「わかった！ でもこっちもまだ見つかってないから!」

「了解！ ちよつと遠回りになるけど別ルートでそっちに向かうよ!」

そんな短いやり取りで念話を終了する。いかにマルチタスクで複数の事柄を同時に処理できると言っても、集中を欠いてしまう事には変わりない。

故に今必要な事柄に集中するために、できるだけ無駄は省いておきたかった。だからアルフとの念話も連携に必要な最小限の情報交換に留めすぐさま探索に集中する。

なぜフェイト達がこのように焦っているのか、それは少し前にさかのぼる。

夕飯も終わり、家族皆で、アリシア達三人は二度目、プレシアとリニスは初めての温泉も楽しんだ夜。みんなで寝ていた時の事だった。

突然一週間前のあの時と同じ悪寒がその場にいた全員に走ったのだった。それによりアリシアはまたもや発作を発症、今回は一週間前

とは違い、あの嫌な感覚を覚える程の魔力の疼きが一過性では無く、今もまだ続いている。故にアリシアの体調も危うい状態であり、今現在プレシアとリニスが看病を続けている。

そんな状態の為、フェイトとアルフは海鳴温泉近辺にこの件の原因であるジュエルシードがあるのだと辺りをつけ、現在全力で探している最中である。

そうしてフェイトが海鳴温泉を飛び出してから数分してようやくジュエルシードを発見した。

「(アルフ、見つけた)」

「(!) 了解。すぐそっち向かうから！」

短くアルフに要件を伝えるとすぐさま封印の準備に取り掛かる。

『今は発動直前、施されてる封印が解けかかっている状態だから、とりあえず大魔力攻撃で大人しくさせよう!』

「うん！」

レヴィの言葉にうなづくとともに魔法の演唱に入る。母が最も信頼し、得意とした魔法。母がリニスに知識として与え、リニスから教わり、そして母の監修によって完成を迎えた魔法。

〈Grave Form〉

バルディッシュもこちらにあわせ形態を変える。大魔法用のグレイブフォーム。その姿は杖や斧と言うよりは槍に近いのだが、この形態は大魔法用と言う名の通り魔力の利用に優れている。

変形と同時にフェイトの足元に魔法陣が現れる。今から使う魔法は大規模な魔法なため、このような装置が必要になる。足元を固定すると言う効果もある。

「サンダー——」

フェイトが唱えるのは今現在の自身が無演唱で使える最強の魔法。母から娘に伝えられた魔法。自然の力を借り、電気変換資質があるからこそこできる魔法。

〈Thunder Rage〉

「——レイジッ！」

サンダーレイジ、その掛け声とともに迸る雷光は漆黒の夜を一時的に晴らし、その轟音は静かな山の夜を引き裂いた。

動くモノが対象ならば奇襲か、拘束でもしなければ当たらないが、しかしその威力は絶大。今回は動かない物が対象なだけあり、楽に当てられる。しかも、魔法とは言えその実体は雷。音の440倍の速度で空気を引き裂き、そのエネルギー量は1GJにも及ぶ。

発動さえしてしまえば超音速で飛来する魔法を避けられる者はいない。それこそ光速で動かない限りは。

故にあの大魔導師が信頼し、多用する魔法。威力、速度、追加効果。全てにおいて上級、発動の手間はデバイスで補い、屋外であれば魔力消費すら抑えられる優れもの。まさに最強。故に最高。

その最高の魔法は寸分たがわず目標を打ち抜いた。

雷が空気を引き裂く独特の轟音と共に直撃を受けたジュエルシードはその機能を停止したのか魔力の放出を止める。

鳴動を止めたジュエルシードにゆっくりと近づきながら、無言でバルディッシュを突き付ける。そばに寄っても動かない事を確認すると、ジュエルシードをバルディッシュで触ると声をかける。

「バルディッシュ」

〈シリアルナンバー18〉

「封印！」

掛け声とともにバルディッシュが自動で封印魔法を発動する。この封印魔法はプレシアが解析して作成したお墨付きの魔法であるため気兼ねなく使える。

〈ジュエルシード、シリアルナンバー18。封印完了を確認〉

バルディッシュが封印が完全に完了した事を教えてくれる。その言葉でようやく安心を得れたフェイトは、詰めていた息を吐き出すとともに胸をなでおろす。

「ナンバー18」

ジュエルシードを拾いながら封印するときに一瞬見えたナンバーを思い出す。ナンバー18、それは少なくとも同じものが後17個はあると言う事が推測される数字。

「この前のは15で、アルフが見つけたのが02だけ?」

『そうだったと思うよ』

〈そのように記録されています〉

「そっか」

ならば今回の18を合わせ3個を発見封印したことになる。そう
なると残り15個、白い魔導師、なのはと言ったか、彼女が何個か回
収しているだろうと予測しても未だこのような出来事が起こらない
と言う保証にはならない。

そうフェイトは考えているのだが、実際のジュエルシードの数は全
部で21個、その全てが海鳴市に落ちている。

そして現在なのはが回収しているジュエルシードは6個、今フェイ
ト達が回収したのを合わせても9個にしかならない。なので発動前
に見つける事が出来なければ、これからあと12回はこのような状態
になってしまうと言う事である。

しかし、そんなことフェイトにはわからないし、やるべきことを成
し遂げ緊張が切れた今のフェイトはアルフが来るまでゆっくりして、
それから帰ろう。などと言う風にしか考えてなかった。

だが、その考えは儂くも叶うことは無い。一人の少女とその言葉に
よって。

「ねえー!」

唐突にかけられる声、人も寝静まった深夜、しかも山の中で駆けら
れた声にフェイトの心臓は跳ね上がり、つい体も跳ね上がりそうにな
る。

しかしそれは精神力で押しさえつけ、声をかけられた方向に振り向
く。その先には予想通り、一週間前フェイトが出会い一方的にのして
しまった白い魔導師、高町なのはがいた。

「君は……」

「あなた、この前の……」

お互い声が出ない。フェイトはともかく、なのははなぜフェイトが
この場に居るのがわからないのだろう。

一週間前に自分に関わるなど言った人物がジュエルシードを持っているのだから。

「あの、その……」

なのは何を言えば良いのか、何が言いたいのか纏まらずしどろもどろになってしまっている。

フェイトはこれ以上関わる訳にもいかないと、バルディツシユにジュエルシードを収納するとその場を去る為に飛行魔法を発動した。

「待って!!」

その様子で逃げられると悟ったのか、フェイトが飛び上がった瞬間、叫び声を上げるのは。その言葉、自分が呼び止められたことに驚き、またもや動きを止めてしまうフェイト。先ほどと見つめ合う位置は違うが、先ほどと同じように見つめ合うことになってしまう。

「なにかよう?」

呼び止めたのに何も言わないのはに耐え切れず、つい自分から話しかけてしまうフェイト。その声は感情を表に出さないようにした所為か、とても冷たく感じてしまう。

「っ……」

その冷たい声に怯んだのか、なのはは息をのむが、それでも覚悟を決め口を開く。

「あなたと、話がしたい、んだ」

覚悟を決め絞り出した一言、——話がしたい。

「私はあなたと話す事なんて無い」

しかし、その勇気振り絞り出した言葉はフェイトの一言によって、無残にも切り捨てられる。

「それでも、私はあなたと話したいの!」

それでもあきらめずに声をかけるなのは。未来で『不屈の魔導師』と呼ばれるその精神は伊達では無い。

「……」

相手が全体に折れないと気づいたのかフェイトは小さくため息をつくと飛行魔法を解除しなのはの前に降り立つ。それを、会話をする事を了承したと受け取ったのかなのはの顔は喜びの表情で輝く。

「それで？ なにを聞きたいの？」

極めて簡潔に、努めて冷静に話を促すフェイト。しかしなのはにとっては初めてフェイトから話しかけられてこともあり、満面の笑みを浮かべている。

「あ、あのね。その、なんで魔法が使えるのか？ とか色々聞きたいことあるけど、その」

「……」

「あなたの、名前を教えてくださいな」

「フェイト」

「フェイト、ちゃんって言うんだね」

フェイトの名前を聞きだすことができ、あまりの嬉しさに先ほどよりも輝きを増した笑顔で何度もフェイトの名前を呟いていた。

「次は私」

「え、う、うん！ 何でも聞いて！ あ、私はなのは、高町なのは！

小学3年生、8歳！ 誕生日は……」

「うるさい」

なんでも聞いてと言った側から自分の情報を自ら喋り始めるのはを、フェイトは少し怒気を込めた声で一刀両断した。

それで、やつと自身が思いのほかテンションが上がってしまったという事を実感したのか、なのははうつむくと小さな声で誤った。

心なしか、そのツインテールも気落ちしているように見えるのは、幻覚かはたまた現実か。

「なぜ、あなたがここに居るの？」

落ち込んでいるのはを無視し、話を進めるために、聞きたかった事を聞く。実際問題、なのはが温泉宿に宿泊しに来ている事を知っているフェイトにとっては、こんな質問をする意味は無いのだが、しかしこの場でこの質問をした方が不自然でないだろうと、否、しない方が不自然であるだろうと判断したために、なのはに少しでも不審がられないようにするためにしたのである。

「えっと、今日は家族と友達と温泉に泊まりに来て。それで、寝ようと思ったらジュエルシードの反応がしたから、だから」

「そう」

——知っている。

その情報は全て知っているし、予想がついている。なにせなのはに
はそう言うつもりが無くても、浴場で一度会っているのだから。

「ねえ」

「ふえ？」

唐突に話を切り出したフェイトに困惑するなのは。しかしそんな
なのはの事などお構いなしに、フェイトは用件を切り出す。

「もう、この件に、ジュエルシードにはかかわらない方が良い」

「なっ！」

「あなたは結局私より後に来た。それはもし私が封印できていなかったら、あなたはジュエルシードの暴走に間に合っていなかったかもしれない」

「そ、それは……」

「それに、前回の一戦であなたは素人だと言うことも予想はついている」
「……」

フェイトの余りもの一方的な物言いに、なのはは閉口してしまう。
それでもフェイトは関係ないとばかりに自分の言いたい事をまくし
たてる。

「あなたでは危険すぎる。なぜジュエルシードを集めているのかは知
らないし興味もないけど、それが単なる善意だったらやめた方が良
い。あなたでは力不足」

「……そ、そんな……」

「私はこれから管理局が来るまではジュエルシードを探す。もし、探
している間にジュエルシードの封印が解けても、私の方が早く現場に
向かえるし、言ってしまうえば魔法になれているから事態を終息させる
こともあなたよりうまくできると思ってる。」

だからあなたはこの件から手を引いて、普通の生活に戻ると良い」
一方的に言われ、なのははついうつむいてしまう。フェイトに言わ
れたことは全て凶星だった。そんなことはわかりきっていた。なの
はだって今までジュエルシードを封印してきた。確かに被害もだし

た。ここ最近の海鳴市での原因不明の怪事件はだいたい暴走したジュエルシードの所為だ。もしこの件に当たっていたのが、自分では無く、ユーノに求められていたのがフェイトであったのなら、もっと上手くどうにかできたのであろうことも予想がつく。

しかしそれでもフェイトの言葉は認められなかった。今まで必死に頑張ったのは自分だ。今までジュエルシードを封印してきたのは自分だ。

たしかに、日中は学校もある。家族に内緒にしているので自由に動くことも、助けを求める事も出来ない。そもそも今まで、魔法が使えるのは自分だけだと思っていた。そう、思い込んでいた。

「だからもう、ヒーローごっこは止めて——」

——ヒーローごっこ。確かにそうかもしれない。フェイトから見たら、自分より経験も実力も勝っているフェイトから見たらそうなのかもしれない。それでも、自分は、なのはは今まで頑張ってきたのだ。胸の中に思いが渦巻く、あまりにもその思いが煩雑で、複雑で、膨大で。いつの間にかなのはは自身の手を強く握りしめていた。

その手が震えている事に気が付いたのは、最初からなのはの側にいたフェレット、ユーノだった。

今はフェレットの姿だが、彼は人間である。そしてジュエルシードをある遺跡から発掘したのもユーノだった。彼は魔法の無い世界に、ロストロギアとも呼ばれる危険物を持ち込んでしまった事に強い責任を抱いていた。誰もが彼の、ユーノの所為ではないと口をそろえて言うだろう。しかし人一倍責任感の強い彼は自分を責めずにはいられなかった。

だから一人でやってきたのだ。しかしそれは無茶でもなんでもなく、タダの無謀でしかなく。結局彼はいたいけな少女を、今まで魔法とは無関係だった少女を巻き込んでしまう事になってしまった。

その少女が今責められている。彼女は、なのはは何も悪くない。むしろ今までとても頑張ってきた。それが最高の結果として表れて居なくても、でも最良の結果としては現れている。現にこうしてこの世界が無事なのはなののおかげなのだから。

だから――

「あのー！」

――好き勝手言うフェイトに、一言言わなければ気が済まなかった。

「使い魔は黙ってて、今はこの子と話をしているの」

そんな決意はフェイトの冷たい一言によって一刀両断されてしまった。

「ですがー！」

だけど引くわけにはいかない。今なのはを擁護できるのは自分だけなのだから。

しかし、そんな思いは実を結ぶことは無かった。

唐突にユーノの目線が上昇する。今現在フェレット、つまり小動物になってしまっているユーノの目線はすごく低い。それこそ人間では想像もつかないような、まるで違う世界にすら見える程の。

その目線が上がった。それもなのはの腰程度まで。

なぜなら、ユーノは今何かに持ち上げられていたからである。

「だ、誰ですか！ 離してください！」

『悪いけど、そう言うわけにはいかないねえ。今あたしのご主人様がアンタのご主人様と話してるんだ。横やり入れるんじゃないよ』

必死の懇願に帰ってきたのは、念話だった。しかもその念話はどこか大人の女性の様に聞こえた。恐る恐る、後ろを確認するユーノ。それで見えたものは、オレンジ色の狼だった。

「あ、アルフ」

『フェイト、こいつは私が見張つとくから。だから今のうちに話しかけときな。今後の為にも、ね』

「うん。ありがとう」

アルフと呼ばれたオレンジ色の狼に加えられながらユーノはどこかへと連れて行かれてしまう。

「あの、待ってください！ ボクはー！」

『いいから、今はあの二人だけにしてやっておくれ』

必死の訴えもアルフは聞く耳を持たず、二人から離れて行ってしま

う。この時だけは、小動物の身である自分がとても情けなく思うユーノであった。

そんな二匹が離れて行ったのを確認すると、フェイトは話の続きを切り出すことにした。

「だから、もう一度言うけど。この件からは手を引いて。あとは私達に任せて、あなたは全部忘れて『普通の生活』に戻ると良い」

今まで散々きつい言葉を言ってきたフェイトだが、これはフェイトの優しさでもあった。フェイトは『普通の生活』と言うモノに、一種の憧れを抱いていた。親がいて、家族がいて、友人がいて。それらと笑いあえるそんな普通に。

今では確かに『普通』の生活を送れているのかもしれない。母であるプレシアも、フェイトの隠された思いを悟ってか魔法の関係ない世界で、魔法の必要のない世界で暮らす為に尽力してくれた。

それは、悲しくもジュエルシードと言う災害によって叶う事は無かったのだが、しかしそれでもジュエルシードの事件が一段落すれば、願っていた『普通の生活』を送れるかもしれないのだ。

だから、フェイトはなのはが許せなかった。魔法に心惹かれ、その力を振るう場を、事件を求めているようにしか見えなかった。自身の『普通』がどれだけ幸福なのかも知らずに、『非日常』に埋没しようとしていた。フェイトはそれが許せなかった。そんななのはが、そんななのはにしてしまったジュエルシードが許せなかった。

ジュエルシードが無ければ、彼女は『普通』で要られただろう。初対面で一方的に攻撃した自分に対して復讐するどころか、仲良くなるうとすらする優しい子だとフェイトは感じていた。

そんな優しい子が普通に生きて普通に生活し、普通に終わる。そのどれもが羨ましくて、愛おしいとすら感じていた。それは、『普通』では無い自分へのコンプレックスなのかもしれない。自己満足なのかもしれない。しかし、そんな事には気づかず。嫉妬から出る、『なにかむかつく』と言う思いが原動力となって、フェイトはなのはに対して冷たく接してしまっていた。

「……………よ」

しかし、その思いはなのはにはわからない。フェイト自身ですら自覚していない思いが、なのはに伝わる訳がない。

だから、なのはは――

「そんなの、フェイトちゃんにわかるわけないよ！」

――なのはは爆発してしまった。

今よりさらに幼い頃ですら、自身の感情を押し込めてしまえる強い彼女の心は、仲良くなるうと思っていた少女に冷たくあしらわれ、今までの自分を否定されたことで壊れてしまった。

「フェイトちゃんに何がわかるの！ 私だって、なのはだって頑張ってきたもん！ なのはは、魔法だって、いっぱいいっぱい頑張ったもん！ それが、それがフェイトちゃんにわかる訳ないよ！」

「わからないよ。だけど、あなたがこのままだと危険なのはわかる。あなたの実力じゃ、これからは――」

「そんなの分かんないでしょ！」

「わかる」

「わからないよ！」

「わかる」

「わからない！」

堂々巡りの言い争い。ただ相手の言い分を否定するだけの、叫び声を上げるだけの言い争い。この場に大人がいれば止めてくれたのだろう。お互いの言い分を聞き、二人が納得できるように上手く仲裁してくれただろう。

しかし、この場にそう言う大人は居なかった。この場に居るのはなのはとフェイト、遠くで見ているユーノとアルフ。そして、フェイトの中に居るレヴィだけなのだから。

ユーノは小動物となつてしまっているが、実年齢はなのはとあまり変わらない。つまり子供だ。

アルフは見た目は確かに大人のように見えるが、それは使い魔の特性で自由に成長を操作できるからであり、時間を凄した年数で言えば、フェイトより少ないうえ、アルフはフェイトの思いが理解できて

しまっていた。フェイト本人は『ただ気に食わない』と思っているだけかもしれないが、アルフはフェイトがなのはを羨んで、なのはの日常を壊したくなくて言っているのだと理解してしまっていた。そしてその思いにアルフも共感できていた。

だから止めない。だから止める事が出来ない。

子供は笑って、遊んで、時にはケンカして。そうして大人になって行くのだ。そうやって人付き合いを学ぶのだ。

悪い言い方をしてしまえば、これはいい機会だった。フェイトが感情で動く。家族以外の人付き合いを学ぶ、良い機会であった。

そして最後のレヴィは……。

彼女には止める気すらなかった。ケンカするほど仲がいい、ではないが。お互いの心を打ち明けるには、強引な手段だが、ケンカがちょうどいい。殴り合って認め合えばいい。この二人ならそれができると、そう思っていた。故に止める気が無い。

むしろ、『これも青春だねえ』などと親父臭いことすら思っていたりする。

だから、今この場に止める者はいない。止められるものは居ない。故に、二人の口げんかが、実力勝負にまでヒートアップする事を止められる者はいなかった。

「この分からず屋！」

遂に、フェイトが声を荒げて叫ぶ。フェイトにしてみれば珍しいことだった。

いや、初めてかもしれない。フェイトがフェイトとして生まれてから約半年はレヴィとだけ過ごした。リニスも居たが、リニスは教師であり、フェイトと日常を過ごすなどと言う事はほとんどなかった。次の半年はアルフが加わった。しかしその当時のアルフは未だ幼く、フェイトにしてみれば妹ができたような気分だった。

そしてプレシアとの和解、アリシアの目覚め。

プレシアとの和解の時ですら、フェイトは若干6歳という若さ、自我が目覚めてからは1年ほどしかたっていないと言うのに、大人しく、落ち着いてプレシアを許した。

それから約3年。アリシアはフェイトを可愛がり、プレシアはフェイトを溺愛し、そしてフェイトは二人を尊重していた。一步引いていたと言っても良いかもしれない。そうしてフェイトが生まれてから4年間、フェイトの世界はそれだけで完結していた。

時の庭園と言う隔絶された世界である関係上それは仕方のないことでもあった。故にフェイトが声を荒げるのは、それも憤りから荒げる事は初めてであった。

「分からず屋は、フェイトちゃんの方だよ！」

なのは先ほどから叫んでいたせいか、少し声が擦れているように聞こえる。それでも叫ばずにはいられなかった。認めるわけにはいかなかった。自分は良い子でならなければならなかった。そんな自分が、〃何もしない事〃を求められていた自分が、初めて〃何かする事〃を求められたのだ。だから今の自分がある。今までの自分の頑張りがある。それを否定する事を、認めるわけにはいかなかった。

「この、分からず屋!!」

その叫びはどちらの叫びだっただろうか。それはわからない。フェイトかもしれないし、なのはかもしれない。それとも、両方かもしれない。

しかし、その言葉で状況は動いた。フェイトは飛行魔法を発動し、なのははデバイス、レイジングハートをセットアップ。バリアジャケツトを纏い戦闘態勢に。

「だったら、私が弱いか確かめさせてあげる！」

「確かめる必要は無い。あなたは、弱い！」

お互いがお互いの言い分を叫び、唐突に戦闘が始まる。

フェイトのフォトランサーに対し、なのはは避ける事を選択する。一週間前は避ける事すらままならなかったが、戦う気が十分である今は反応することができた。故に回避が可能であった。

しかし、それは結果として良い手では無かった。フォトランサーを避けるために、そちらに意識が集中しすぎたせいで、なのははフェイトから一瞬視線をずらしてしてしまった。

そしてフェイトには、その一瞬で十分だった。

〈Scythe slash〉

バルディッシュをサイズフォームに変形させながら、高速で近づいての一閃。並みの魔導師ですら反応が困難なそれを、素人であるのはが反応できる訳もなく、フェイトは気づいたらなのは目の前に居て、バルディッシュを振りかぶっていた。

漆黒の鎌の、無慈悲な刃はなのはめがけて振り下ろされる。避けれる道理はない。そして、なのはには反応しきれずフェイトの攻撃が当たる。

〈Protection〉

かと思われた。それは、なのはの相棒、インテリジェントデバイスであるレイジングハートのとっさの判断により防がれる。

一撃を防いだことを好機だと思ったなのはレイジングハートに指示を送る。

「レイジングハート!」

〈Barrier blast〉

レイジングハートのバリアブラストの掛け声と共に、攻撃を防いでいたプロテクションが炸裂する。

「なっ!」

予想外の衝撃によってなのはとの距離が開いてしまうフェイト。それを見逃さずなのはレイジングハートをカノンモードへと変える。

「これでも! なのはが弱いって言える!」

どこか悲壮感を含んだ叫び声とともに放たれる砲撃魔法。

〈Divine Buster〉

デイバインバスター。なのはが初めて使った魔法であり、最も信頼する魔法。単純な魔力を相手にぶつけるだけの砲撃魔法だが、それゆえに大量の魔力が必要とされる。なのはの魔導師生命で最も信頼し、最も使用した魔法でもある。

その魔法がフェイトへと迫る。しかし、フェイトは落ち着いて状況を判断していた。

——砲撃魔法。

彼女が最も信頼すると予想される魔法なのだろう。威力、速度共に申し分ない。しかしそれがフェイトに通用するか、と言われたらNOだ。

速度はフェイトにとって避けられないほどのものでは無い。今から回避行動をとつても十分間に合うだろう。

対して威力はどうか。それは十分だと言える。元よりフェイトのバリアジャケットは一般的なバリアジャケットより防御力を低く作っている。故に直撃してしまつたらそれなりのダメージが入ってしまう事も予想される。

故にここで選ぶべき最適解は回避。

——でも、それじゃあだめ。

しかし、フェイトはその選択を今回ばかりは選ばなかった。いや、選びたくなかった。

——自分の土俵では無く、相手の土俵で、相手の全力を上から潰す！

相手がその分野に自信を持っていれば居る程、精神的な衝撃を与えられる方法だとフェイトは理解していた。

そして、今回なのはにジュエルシードから手を引かせるためには、心を折る必要があつた。自分は、全てにおいてなのはを上回る事を示す必要があつた。

故にフェイトがとつた選択は——

「バルディッシュユ」

〈Thunder Smasher〉

——同じ砲撃魔法での勝負。

なのはのピンク色の砲撃とフェイトの金色の砲撃がぶつかり合う。

「レイジングハート！ お願ひ!!」

すかさず放たれたなのはのその言葉で、ディバインバスターの出力が上がる。言葉から察するに、なのは自身は未だ魔力の制御が上手くできないのでデバイスに出力を上げさせたのだろう。

「!？」

ディバインバスターの出力が上がったせいか、それとも元々の威力

の違いか。フェイトのサンダースマッシャーはなのはのデイバインバスターに押され始めた。

さすがのフェイトも本職の砲撃魔導師に、使える程度の砲撃魔法で勝てるとは思っていない。しかし、素人のなのはに負けるとは思っても居なかった。

——腐っても、AAAランクッ！

自身と同程度の魔力、つまりそれは、天才の領域であるAAAランクである事を示している。その潤沢な魔力から放たれる純粋な魔力砲。技能など要らない力任せな、魔力任せの一撃。ならば、より適性が高い方が勝る。当然の道理だった。

——このままじゃあ、勝てない……。

認めよう。彼女は、高町なのはは砲撃魔法だけで言えば自分以上なのだ。しかし、ここで負けるわけにはいかなかった。

彼女には思い知らさなければならぬ。彼女は弱いのだと。彼女の実力ではジユエルシードに関わるのは危険なのだ。

故にフェイトはズルをする。

「……レヴィ、50%。お願い」

自身の中に居る、自身以上の才覚を持った隣人に助力を請う。

『良いの？』

「今は、プライドより結果が大事だから」

自身のプライドも、勝負のフェアも何よりも結果。『なのはが弱い』と言う結果を示すことが大事だった。

『……わかったよ』

レヴィの同意の言葉と同時に、フェイトの右目が青く染まる。そして、魔力が爆発的に上昇した。

『雷光波！』

フェイトにしか聞こえないレヴィの掛け声とともに、フェイトからもう一本「青色の砲撃魔法」が迸る。それは、フェイトのサンダースマッシャーと交わり、デイバインバスターの勢いを削いだ。

拮抗する両者の砲撃魔法。それは二人の間でぶつかり合い、逃げ場を失った魔力はその場で停滞。臨界点を超え大爆発を起こした。

「ぎゃあっ！」

その衝撃で思わず体制を崩すなのは。その胸中には悲しみと共に小さい絶望すら浮かんでいた。

—— 競り、負けたっ！

自信のあった砲撃魔法。はじめての魔法。最初から今までずっと共にしてきた、信頼の魔法。

それがフェイトには通用しなかった。

最初は自分が勝っていた。しかしそれは勝っていただけであつて押し勝てる程では無かったが、フェイトにも勝るモノがあるのだと心底嬉しかった。

それが油断に繋がってしまったのかもしれない。途端にフェイトから感じる圧力が増したと思うと、フェイトの砲撃魔法に「青い砲撃魔法」が重なり、一気に拮抗状態まで持ち込まれてしまった。

—— 砲撃魔法でも、ダメなの!?

ユーノから褒めて貰った砲撃魔法。ユーノに才能があると、砲撃に關しては誰にも負けない砲撃魔導師としての才能が有ると言われた、その砲撃魔法ですらフェイトには勝てなかった。

—— それでも！

それでも負けるわけにはいかない。彼女に、フェイトに認めさせなければならぬ。自分は弱くないのだと。そうしなければ

—— 私の、やっと見つけた居場所！

『何もしない事』を要求されてきた自分が、初めて見つけた、『なにがする』事で褒められる場所。それが奪われてしまう。魔法が、奪われてしまう。

—— そんなの、嫌だ!!

故にレイジングハートを握りしめ目を凝らす。爆発で生じた煙のどこからでもフェイトが仕掛けて来ても良いように、相手を見逃さないようにと。

しかしその行動は遅かった。戦闘経験の、対人戦闘の経験の差。判断力の差。その全てでなのはフェイトに劣っていた。故に

ジュエルシードを差し出したレイジングハートがフェイトへ懇願する。

「私は別に、こんなのは」

〈お願いします〉

レイジングハートの力の籠った一言に何かを感じたのか、フェイトはふと一度目を閉じると、バルディッシュを引いた。

「バルディッシュ」

そしてもう一度目を見開いた時、フェイトの瞳は綺麗な赤色の双眸へと戻っていた。

〈イエッサー〉

フェイトの指示に従いバルディッシュがレイジングハートより吐き出されたジュエルシードを受け取る。

それを確認すると、フェイトは何も言わずなのはに背を向け、どこかへと歩き去る。

「うう、ああつ。あ、ああつああああああああああああああああああああつつつううつ」

フェイトが夜の闇に姿を消して暫くしてからやっと、なのはは大声を上げて泣いた。

泣いた。全てを押し流すように。全てを忘れ去るかのように、泣いた。鳴いて、泣いて、哭いた。

それは魂の叫びだった。自分の魂の慟哭だった。悲鳴だった。

「……なのは」

オレンジ色の狼にやっと解放されたのかユーノが近づきなのはを心配そうに見つめる。

今は何も言っただけはしくなかつた。一人にしてほしかった。そして、ユーノは何も言えなかつた。

それでも、言葉を発する者がいた。いや、**“物”**がいた。

〈泣いて、なにになると言うのです〉

レイジングハート、なのはの相棒。はじめての魔法から今まで、なのはを支え、共に成長してきた愛機。彼女は、無機質なはずの機械音

声に、厳しさと、優しさを込めて言った。

「今回は負けました。確かに彼女の言う通りマスターは弱い。でもそれは『今』です。彼女がマスターが弱いから手を引けと言うのなら、彼女より強くなつてしましましょう。彼女に勝つて、こちらが言い返してやるのです『この件から手を引け』と」

「で、でも……。わたしじゃあ」

珍しく饒舌な彼女の言葉が胸に刺さる。その言葉でも涙があふれる。

へなにを泣いているのです。泣いている暇があるなら考えなさい。心に刻むのです。彼女の動き、彼女の魔法。その全てを記憶し、理解し、取り入れるべき場所は取り入れればいいのです。

良い所は吸収し、劣っている部分は研鑽し、彼女を研究し、そうして強くなり、認めてもらいましょう。マスターは弱くないのだと。マスターは戦えるのだと。あなたの魔法にかける思いは、今ここで、一度彼女に負けた程度で諦められる程の物だったのですか？

それならば、その程度の思いならば捨ててしまいなさい。そんな程度だったら彼女の言う通り諦めたほうが良いでしょう。その程度の強さしかない、『弱い』マスターであったのなら、そちらの方が幸せでしょう」

「そん、な。そんな、こと！」

——そんな事、無い!!

自分に自信を持てなかった。昔から、自分に何ができるのかわからなかった。でも、やっとわかった。ユーノくんが教えてくれ、レイジングハートが導いてくれた。

——魔法。

それは、それだけは私が持てる、他人に自慢できることだった。

確かに、ヒーローごっこだったのだろう。他の誰にもできない事が出来るだけの小娘が、調子に乗っていただけなのだろう。

しかし、それでも自分が誇れることは魔法なのだ。

それしかない、思い込んでいた。それだけなのだと思っていた。しかし、彼女が、フェイトが言う通り今ここで魔法を忘れ『普通』の

生活に戻ったならば、それはそれで何かを見つけ、普通に幸せな生活を送るのだろう。

しかし自分はお会ってしまったのだ。見つけてしまったのだ。それに、決めたのだ。ユーノを助け、ジュエルシードを全部集めようと。――一度決めた事は、最後までやり通す……。

それを捻じ曲げてしまったら、私は、なのはは幼いあの日以上、何もできなかったあの日々以上に弱くなってしまう。レイジングハートの言う通り「弱いなのは」になってしまう。

「そんなの、嫌だよっ！」

その叫びは意図したものでは無かった。それは自然と口を突いて出てきた叫びだった。

涙を生んだ悲しみ以上に、なのはの魂が主張した叫び声だった。

へならば、強くなりましょう。彼女の言う強さを手に入れましょう。大丈夫です。できます。あなたなら、本当に「強い」マスターならばできます。私もそれを補佐します〜

――ああ、自分は本当に……。

本当に、良い相棒を持った。

「ありがとう。レイジングハート」

涙で腫れた目を擦り、涙を拭きとりながら言う。

――ありがとう。

こんな自分を支えてくれて、折れかけたを、立ち止まりかけた己を叱咤してくれて。

――ありがとう。

こんな素敵な相棒とめぐり合わせてくれて。

「ありがとう。ユーノくん」

――ありがとう。

弱かった自分を、幼い優越感に浸っていた愚かな自分に気づかせてくれてありがとう。

レイジングハートに、ユーノに――

――ありがとう。

そしてフェイトに――

——ありがとう。

自分を生んでくれた母に、見守ってくれる父に、心配してくれる兄に、優しい姉に——

——感謝を。

自分の日常の象徴たる友人たちに——

——ありがとう。

全てのモノに、空も海も大地も草木も……、森羅万象に感謝を。

なのはは今、生まれ変わった気分だった。今までの自分は先ほどの涙と共に死んだ。流れて消えた。

いまのなのはは相棒の言葉で、フェイトの厳しきで、ユーノの優しさで生まれ変わったのだ。

今ならわかる、幼いころの家族の大変さを。その家族を幼心に恨んでしまっていた自分の幼稚さを。

帰ったたまず謝ろう。兄と、姉と、母に。三人とも不思議な顔をするだろう。それでも、自分が何かを得られたのだと気づき、褒めてくれるのだろう。

そして次に感謝を伝えよう。父に、生きていてくれてありがとう、と。

そして最後に友人に、謝罪と、感謝の気持ちを伝えよう。今の自分の素直な気持ちを伝えよう。

やりたい事を見つけたこと。それで、付き合いが悪くなってしまった事。他人に話しづらく、それで心配をかけていたこと。全てに謝り、そしてすべてに感謝しよう。自分の日常を守ってくれていたことを。

へマスター。今のあなたは、とても眩しく、輝かしい顔をしています
「そうかな」

そうなのだろう。レイジングハートが言うのだ、間違いないだろう。

晴れ晴れとした気分だった。

生まれ変わると言うのは、こういうことを言うのだろう。

「——ありがとう」

自分を気づかせてくれて。その刃で、弱かった自分を晒してくれて。その雷光で、自分を生まれ変わらせてくれて、ありがとう。

「レイジングハート、帰ったら特訓。頑張ろう。もっともっと」

〈はい。容赦はしません〉

「望むところ」

そして、次にあつたらまずこの気持ちを伝えよう。感謝の気持ちを。そして、彼女に認めてもらおう。自分の力を。高町なのはは弱くないと言う事を。

そうして、彼女と対等になって、同じ目線になって。それで

——友達に、なつて貰おう。

対等でなければ友人でないならば、対等になってしまえばいいのだ。

彼女には今まで2回負けている。それならばあと2回負かしてしまえばいい。それでフェア。平等。対等だ。

そうした思いを、決意を胸に秘め、立ち上がる。

とりあえず今は、この泥にまみれた顔を何とかしなくてはならぬ。いい。

そうしてなのはは清々しい思いで旅館へと足を向けた。

*

「大丈夫かい？ フェイト」

なのはに背を向け一足先に旅館に帰ったフェイトはプレシアや元気になったアリシアに迎えられた。

しかし、その歓迎に応えることは無く、消沈したままフェイトは布団にもぐりこんだ。

そんなフェイトを心配してアルフが布団脇から声をかけているのだが、フェイトは布団を頭までかぶり無視を決め込んでいた。

『ごめん、アルフ。今フェイト落ち込んでるみたいでさ、ちよっと一人にしてやってくれないかな?』

「そうかい、わかった。レヴィ、フェイトお願いね」

『りょーかい』

レヴィの言葉に渋々納得し、アルフはフェイトから離れる。その様子を見守っていた他三人も、今は静かにしておこうと言う結論に達したのか、フェイトを刺激しないように、眠りについた。

『ねえ、フェイト』

「(……なに?)」

レヴィの言葉には応えるフェイト。意識を完全に落してしまえば、レヴィでも早々たやすくフェイトには干渉できない。それでも、全てを知っているレヴィだけは、許せた。

完全に他人の干渉を切るのではなく、どこか話を聞いて貰いたかったのかもしれない。

『どうして、落ち込んでるの?』

「(……)」

レヴィのその質問にすぐさま答える事は出来なかった。それでも、レヴィは待ってくれている。自分の答えを、自分の言葉を待ってくれていた。

「(また、やつちやった)」

また、それは先ほどのなのはとの戦闘だった。言葉では無く実力で、一度ならず二度までも。先ほどなのはの方が発端だったとはいえ、それでもレヴィの力を借りても叩きのめしたことは事実であった。

「(彼女の気持ちも考えず、否定して、勝手にむかっついて。めんどくさくなつて実力行使で)」

自己嫌悪だった。そんな事しかできない自分が嫌になつてしまった。もつと話したらよかつたのかもしれない。彼女の話をもつと聞いてあげれば良かったのかもしれない。

その全てが後の祭りで、どうしようもなく。結局冷静で無かつたのは自分もそうなのだ。

歩み寄ろうとしていた彼女を否定したのは自分なのだ。

『きつとフェイトはなのはの事が心配だつたんだよ』

「(そんなことない)」

そんなはずがある訳がない。そうであつたのなら、あんな暴力で叩きのめすようなことするはずがない。

『多分そうだよ。考えてみて、フェイトは何でなのはにジュエルシードから手を引いて貰いたかつたの?』

「(……それは)」

それは、彼女が危なつかしくて。

『なんで、危なつかしいと思つたの?』

彼女が弱いから、彼女の実力だと危険だと思つたから。

『なんで、彼女が弱いとフェイトが心配するの?』

それは、危険な物だつて言つてるのに、弱いまま首を突っ込んで、それで

「(それで、怪我しちゃうから……あ)」

『そうだね、弱いまま危険なことをしたら、怪我しちゃう。それが嫌だから、なのはにそんなことになつて貰いたくないから、フェイトはなのはに魔法に関わつて貰いたくなかつたんでしょ?』

「(そんなこと、ないよ)」

『確かに、やった事は乱暴だつたかもしれない。それはなのはを心配してたからで。やり方は間違つちやつたかもしれないけど、でもその思いは間違つてないと思うよ』

「(そう、なのかな)」

『そうだよ。それになのはは“強い”子だから』

「(強い?)」

『そう、強い』。だからフェイトのキモチもきつとわかってくれるよ』

「(……そうかな)」

『うん、今はわからなくても良いけど、きつとフェイトは彼女の強さに気付くときがあると思う。今は気に食わない子でも、なんで気に食わなかったのかその理由がわかる時が来ると思う』

「(……)」

『だから、その時はちゃんとなのはの事を見てあげて、そうすればフェイトの事も、なのはの事も、全部わかると思うから』

「(そんなの) わかんないよ」

最後の言葉は自然と口に出ていた。予想以上に疲れていたのか、もうフェイトの意識はまどろみの中で、念話すらできない状態で、そうしてゆっくりと沼に沈むように意識を落していった。

『理屈じゃなくて、心でわかるとおもうよ。その時になれば、ね』

そんな、レヴィの声が、聞こえたような気がした。

*

ある時、ある場所に次元空間を飛ぶ船がある。

次元航行艦『アースラ』

それは、管理局が保有する次元移動技術の粋をこらした、戦艦の名前であった。

それは今、多数ある次元世界のパトロールと言う任務を帯びて、次元間を飛んでいた。

その中の一室。所謂艦長室と呼ばれる部屋がある。そこには、30代の翠髪の女性と、10歳程度に見える黒髪の少年がいた。

「第97管理外世界 惑星『地球』、ですか。なんでこんなところにこんな物が」

手に持った指令書を見ながら黒髪の少年。クロノ・ハラオウンは言った。それは独り言のようにも、愚痴の様にも聞こえた。

「仕方ないじゃない。匿名とは言えロストロギアの発見報告。その危険性を書き連ねられた資料と一緒に通報があれば、ね」

クロノの言葉に反応するのは翠髪の女性、リンディ・ハラオウン。この戦艦の艦長であり、クロノの母親でもあった。

「しかし、偶然管理外世界に旅行していた魔導師が発見、対処していると言う状況がもう怪しいです」

「確かに怪しいけど、ロストロギアの情報がある以上行かないわけにはいかないでしょう？ 私たちは管理局員なのだから。」

それに、送られた資料によると発見されたロストロギア、ジュエルシードは一月前に管理局に輸送依頼が届けられているわ。残念ながらそれは断られているようだけど」

「……その所為で管理外世界にジュエルシードがばら撒かれてしまった、と？」

「数週間前の通報ではそうなってるみたいね。資料上は」

「それで、なぜ僕らに命令が飛んでくるんです。そんな通報が来ているのだったらもつと事前に専用のチームを組んで対処するべきでしょう！」

「それを私に言われても困るわ。私が受けた依頼は、『哨戒任務を一時中断、97管理外世界に向かい、その世界に飛来したと思われるロストロギアを回収してこい』ってだけですもの」

「だから、それを哨戒任務をしていた我々に来るのがおかしいんですって。この船の戦力はそこまで多くないんですよ？」

「そりゃあねえ、哨戒任務ですもの。武装局員が約20名。それにAA+ランクの最年少執務官様が一人。私も戦力に数えるならまあそれなりの戦力とは言えるのでしょうけど……」

「艦長は艦の指揮が仕事です。それを放り出して戦闘をするだなんて

……」

「わかってるわよ」

「なら良いんです。しかし、そんな戦力の艦にロストロギアの収集だなんて、無謀も良い所じゃないですか」

「そうねえ。でもそういう命令だしねえ」

「だいたい、なぜロストロギアの輸送任務を断ったんですか！ そんなことしなければこんなことにはなっていないなかったと言うのに！」

「一応、資料では『管理局が護衛するほどの危険性をロストロギア、移動経路の環境共に認められなかった』ってなっているけれど」

「そんなもので断るのがどうかしているんです！ その処理をした管理局員の給料は下げるべきだと！」

「まあそんな権限クロノどころか私にも無いのだけれどね、部署違いですし」

「他には、なぜロストロギアの通報があつたにもかかわらず、一回目を無視したのかが問題だ！ 2回も通報が無ければ動かないだなんて、管理局は怠惰な組織だと思われるだけじゃないか！」

「大きくなりすぎるのも、問題って言えば問題よねえ」

「まったく！ この案件を処理していた部隊はいつたいどこなんだ！ 今度帰ったら文句を言いに行つてやる!!」

「あまり怒りすぎるのもどうかと思うわよ？」

「母さんが能天気すぎるだけだ！」

「あら、今は勤務中なので『艦長』なのでは無くて？」

「ぐ、か、艦長ももつとこの件について、深刻に考えるべきだと僕は思うのですが」

「あらあら、怒りんぼさんねえ。お茶でも飲んで一息ついたら？」

「結構です！ そんな砂糖の塊飲んだらますます血圧上がりますよ！」

「あら、失礼ね。糖分は脳のエネルギーだからいいのよ。それに砂糖の塊だなんて失礼しちゃう」

「とにかく、すでに手遅れかもしれないとはいえ、ロストロギア事件の解決は管理局の責務。早く向かいますよう」

「ええ。それに、激しい戦闘になるかもしれないわ。気を付けてね、ク
ロノ執務官」

「わかっています。今から調整しておきますよ。それでは」
「ええ。それでは」

第3話 三度目の魔法少女、三人目の魔導師

私立聖祥大学、それはここ海鳴市にある最も大きな学校である。私立故学費は高いが、小学校から大学までのエスカレーター式の学校であり、日本の教育全ての期間を聖祥で過ごすことが可能なため、カリキュラムは独特な物であり、そのレベルも高い。

その性質上、とある有名企業の子息や、資産家の子供なども入学しており、金額に見合った素晴らしい教育をすると高い評価を受けている。

その聖祥大の付属小学校。なかでも3年A組に高町なのはは通っていた。

「……高町さん、高町なのはさん」

そして今名前を呼ばれているのも高町なのは。2度フェイトと戦い、打ちのめされ、そして新たなる思いをその内に宿した魔法少女である。

だが、彼女は教師が何度も名前を呼んでも一向に反応を示さなかった。

それもそのはず、悲しきかな彼女は――

「高町なのはさん！ 起きなさい！」

机に突っ伏しては居ないものの、その意識ははるか彼方、夢の世界へと飛び立っていたのだから。

「ふあ、ふあい！」

先生の怒鳴り声でようやく意識が戻るなのは。

「高町さん、お疲れかもしれませんが、授業はちゃんと聞きなさい。良いですね？」

「え、えーっと、はい。すみません」

先生の言葉に素直に謝るなのは。彼女とて寝たくて寝てしまったわけでは無い。気が付いたら意識が飛んでいただけなのだ。しかし義務教育と言え、いや義務教育だからこそ、その授業の内容は大切であり、話を聞かないなど許される事では無かった。

「素直で良いですけど、気を付けてください。夜もきちんと寝ないとダメですよ」

「はい」

先生はそれだけ注意するとすぐさま授業を再開した。その授業をなのは今度こそはきちんと聞いている。

ように周りからは見えて居た。しかし、なののはの友人であるアリサとすずかにはどうしても、どこか上の空なように感じられて仕方が無かった。

なののはその変化はこの間の温泉旅行の時から顕著に表れていた。二日目の朝に唐突に自分たちに謝ったかと思うと『やりたいことができたの』と、力強い瞳で宣言してきたのだ。

つい数週間ほど前には、自分が何をすればいいのか、自分の取柄はなんなのか悩んでいた彼女が、決意の籠った表情と力強い言葉で宣言したそれに、二人は多いに喜んだものだ。

しかし、それは学校が始まってからは不安要素の一つとなってしまうた。

授業中たまに舟をこぎ、先生に叱られる。そうして起きているかと思えば、どこか授業に集中し切れていないような、上の空な印象を感じさえもする。

そして放課後は相も変わらず、やりたい事の為に自分たちとは別行動。

心配すると言う気持ちも強かったが、友人であった彼女が急に遠くへ行ってしまったかのような、どこか遠くへ行ってしまうかのような寂しさの方が強かった。

「なののは」

そんな心配と寂しさがごちゃ混ぜになった心境で二人はなののはに近づく。

「アリサちゃんに、すずかちゃん」

「これ、さっきの授業のノート。なのはちゃん取れてないところあるんじゃない？」

すずかがなのはにノートを渡す。大人しそうに見えて人一倍周囲に気を配り観察している、すずかかなりの気遣いだった。

「わあっ。ありがとう、すずかちゃん」

そのノートを受け取り、メモできなかった箇所を必死に書き映し出すなのは。それが一段落しそうな頃合いを測り、アリサが本題を切り出す。

「ねえ、なのは。最近、疲れてる？」

「ふえ？ どうして？」

「だって、最近よく授業中に居眠りすること多くなつたじゃない」

「そ、そうかな？」

なのはは、アリサの言葉に心当たりがあるのか、すこし狼狽えながらもとぼける。

「そうだよ」

有無を言わずすずかの援護射撃。実際アリサもすずかもなのはの様子を心配している。

「やりたい事が出来たつてのはわかるけどさ、もうちよつと手を抜けないの？ 別に今すぐやる必要は無いんでしょ？」

アリサから放たれた言葉は最もな意見だった。やりたい事が見つかったとはいえ自分たちは小学生。勉強が手に付かないほどそれに没頭する必要は無い。確かに没頭したい気持ちはわかる。アリサやすずかだつて趣味位あるし、それだけを延々とやり続けたい。それだけしか考えられないと言う時期もあった。

しかし、それで授業を蔑にして良いか、と言われればそうではないのだ。特になのは達が通っている学校は私立なうえ、今はまだ義務教育期間中。勉強する気が無い者が無駄に金を消費する必要もない。勉強ができないのならば、勉強する気が無いのならば別の、それこそ公立の学校に行けばよいのだ。

極論かもしれないが、そう言う世界なのは達はいるのである。

「ダメだよ」

しかし、なのはの返答は違った。なのはは頭が悪いわけでは無い。ちよつと国語は苦手だが、算数などの理系に関しては天才と呼ばれるアリサをしてすら唸らせる頭脳の持ち主である。そんなのはが、アリサの言葉の意味を分からないわけがない。わかっていて、アリサの言葉を否定したのだ。

「確かに、勉強は大事。ここが私立で、お金がかかるって事も分かってる。だけど、『コレ』は今じゃなきやダメなの。今できなくちや意味が無いの」

自分の胸元をギュツと握りしめながらなのはは力強く言う。その視線は、アリサ、すずかの二人に向けられ、向けられた二人が思わず視線をそらしたくなるほど、その視線は力強く、決意にあふれていた。

ふと、アリサとすずかはお互いを見る。

——こうなっちゃったらもう。

——どうしようもできない、ね。

視線だけのやり取りだがお互いの言いたい事はわかる。なんだかんだこの三人組で2年以上友達をしてきたのだ。なのはの性格は、一度決めたことを何としてでもやり通すその頑固な性格は、重々承知だった。

「まったく、しょうがないわね」

「そうだね。なのはちゃんは頑固だもんね」

「えー？ そんなことないよー」

小さく三人で笑う。なんだかんだ言っても三人は友人、親友なのだ。その親友が話せないと言うのなら無理には聞かないし、やり遂げると言うのなら影日向に応援しよう。

「だけど、無理しちやダメよ？」

「そうだよ。体壊しちや元も子もないもんね」

だけど、心配する位なら許してほしい。やはり、友人にはいつまでたっても元気であってほしいのだから。

そうして小学3年生の三人は、お互いに胸の中に秘めた思いを隠したまま、それでもいつも通りの学校生活を送っていた。

*

なぜ、なのはがアリサ達に心配されるほどに疲れていたのか。その理由の一端を話す事にしよう。

高町なのははフェイトに滅多打ちにされた。それは戦闘だけでなく、心も一度は折られかけた。しかし、それは相棒たるレイジングハートの叱咤もあり、見事復帰。いや、生まれ変わった心持ちですらあった。

そんななのはは旅行から帰ったその日から、正確には旅行の間から己に課した試練をこなしていた。

まずは夜、風呂に浸かる前の筋トレ。これは旅行後から始めた物だが、レイジングハート監修の元なのはの『切れてる運動神経』を少しでもまともにするための運動だった。

なのはの運動神経が切れているのには実は訳がある。

なのはの実家は道場を持っており、門下生は居ないが、兄妹はなのはの家に伝わる古武術を学んでいる。それは父から学んでおり、そして父の息子である兄の才能はまさしく、父から受け継ぎ、研鑽に研鑽を重ねた努力の賜物であった。

なのはが生まれてからしばらくは父が事故により入院しており、なのははその武術を学んでいない。どころか、家の事情で家族から放置されかけていたと言える。

つまり、なのはの運動神経が開花しなかった事は、この時期の環境が原因の一助でもあるのだが、それだけで全力疾走すると転ぶ少女が出来上がる訳がない。

そんな小学生がいたら運動神経以前に、体や脳の異常を疑う方が先である。

しかし、なのははいたって健康、特に異常は見受けられない。なら

ばなぜ、そんな事態が起きてしまうのか。

実は、なのははものすごく運動神経が良いのだ。父譲りの兄、それに及ばずともそれと同等の才能を受け継いだなのは。しかし、それを開花させることは無く、それでも兄姉の訓練の様子は幼い時から見続けていた。

故になのはは、なのはの脳と体は知っているのだ。自分が「アレ」に及ばずとも、準ずる動きができる事を。しかし、そのイメージに、その認識に体が、筋力が付いて行かないのだ。それらが原因で全力疾走すると転んでしまう少女は出来上がった。

その事に気付いたレイジングハートは、まずなのはに筋トレとジョギングを命じた。イメージに追いつかず動けないのならば、イメージに追いつけるように鍛えてやればよい。幸いにもなのはは未だ9歳。まだまだどうにかなる年頃である。

故になのはは、朝起きたら海鳴臨海公園までジョギング。夜風呂に入る前はストレッチと軽い筋トレと。ストイックに訓練を積んでいた。

それ以外での事は主に魔法関連の事だ。寝る前にはレイジングハート主導の魔法の座学。魔法の成り立ちから理論まで。実際魔法、と呼んでいるが、それは『魔力素と呼ばれる素粒子を変換したエネルギー（これを魔力と呼ぶ）。そのエネルギーを利用した、力学』が魔法である。つまり、科学や物理学などの延長線上なのだ。

これはなのはの得意分野が功を奏した。

なのはの得意分野は、算数などの理系。実はこれは算数の域を超え、数学や物理、化学の領域まで及んでいる。故になのははレイジングハートの教える小学生には早すぎる知識を、スポンジが水を吸収するかのようになのはの物にしていった。

そして、朝のジョギングの後、海鳴公園についてからは、学んだ魔法学の実践。今は時間が限られているため、浅く広くではなく、深く

狭く突き詰める事となっている。

つまり、なのはの得意な砲撃、射撃魔法の練度を重点的に高める事にしたのだ。その結果、なのはは空間把握能力も大変優れていることが発覚。

当然と言えば当然かもしれない。自分の力だけで飛ぶことが不可能な人間。その少女が、魔法の力とはいえ、直ぐに自由自在に空を舞う事が可能となっているのだから。

故に、射撃魔法はフェイトのような速射型では無く、誘導制御型となるように構築。朝の訓練は主にこの誘導制御の訓練と言っても過言では無い。

そして、レイジングハートはそれだけの訓練で終わる事を良しとしなかった。

マルチタスクを利用した授業中のイメージトレーニング。アリス達を感じた、集中し切れていない、上の空と言うのは、これをやっているからだ。

その内容は、レイジングハートが記録し再現したフェイトとの戦いが主であった。

フェイトのフォトンランサーを視認、避ける、防ぐの選択。フェイトの高速移動の感知、漠然としたものでも、前後右左上下。どこから来るのか把握できるように、そうなるまで何度もイメージのフェイトに切り裂かれ続けた。

そして、〃本気を出した〃フェイトとの砲撃魔法の打ち合い。あの時一瞬だけの、『赤と青のオッドアイ』となったフェイトの圧力。それは魔力の爆発的な上昇が理由だのだと、レイジングハートは推理した。そして威力の上昇した金色と青色の〃二発の砲撃魔法〃、それからはじき出される、あの状態のフェイト―以後全力フェイトと呼称―の魔力量を算出。

その魔力量から導き出せる最大威力の砲撃魔法に負けない威力の砲撃魔法。

それを放てるようになるために、なのははイメージ上の全力フェイ

トに何度も打ち貫かれた。

全力フェイトの魔力の概算は通常時の約2倍。果てしない数値である。ただでさえ、フェイトの魔力ランクは推定AAA。その2倍の魔力容量、魔力発揮値となると、オーバーSではきかない。理論値最高のSSSに迫る勢いとなるだろう。

それを聞いたなのはは、驚きや絶望よりも先に、納得の感情があった。

そこまでの実力者。それが手加減をして自分と相対していたのだ。それは自分の実力に不満を覚えるだろう、と。

フェイトとなのはは魔力量では大体同じ程度と予想されていた。そしてお互いの実力差は経験と訓練の差なのだ、しかし違った。一般人から見れば十分以上の魔力を持ったなのは。その2倍。そんなもの、もはやチートの勢いだ。

魔力は半分。経験は、魔導師になってからこれまで約1月ちよつと。こんな木端どころか、砂利の一粒のような魔導師ではフェイトが不安になっても仕方ないだろう。

しかし、なのははそのフェイトに勝たなくてはならない。実力で、経験で劣っているのなら戦術で、戦略で勝らなければならない。アリスが認め、レイジングハートが教えてくれたこの頭の回転。それと、見る”ことの才能。それでフェイトを上回らなければならない。

故になのはは見続けた。イメージ上ではあるが全力フェイトの全力の高速移動。レイジングハートの予想だが、それは音速を超えるだろうと言われた。

超音速。音を超える程早いのだ。それはつまり、全力で一直線なのはにぶつかるだけで、直撃すればバラバラ、直撃しなくても衝撃でズタズタになってしまうであろう速度。

力学上、そんな速度で移動したら小回りが利かないどころの話ではないのでそんなバカげた速度は出さないだろうが、それでもフェイト

がその気になれば、なのはを瞬殺できてしまうと言う事であった。

その速度をなのはは見続けた。その速度での攻撃を回避できるように、認識できなければ、体が追い付く筈は無い。だからまず、認識できるようにするのだ。

そして、誘導射撃でその速度を殺す。そうしなければ勝ち目は1%もない。故に鍛えた。自身の体も、頭脳も、射撃魔法も。その全てを貪欲なまでに鍛えた。

とても小学3年生にこなせないような、ハードな一日を送り続けた。

それでいて、ジュエルシード探しにも手は抜かない。一度決めたことなのだ。やり遂げると決めたのだから。

ジュエルシード探しの方は順調とはいかなかったが、だが特訓の方は順調であると言えるだろう。

そんな無理が祟ったせいか、アリサとすずかに心配されてしまったが、止めるわけにはいかない。フェイトを超えるためには、フェイトに認めてもらうためには止まる訳にはいかなかった。

*

そうして、なのはがアリサ達に心配された同日、夜19時。普通の子供は自分の家で過ごしている時間。

海鳴市中心部、ビルが立ち並ぶその場所にフェイトは居た。

「この辺、の筈なんだけど……」

フェイトは今街中を歩いてた。近場まではアルフも一緒だった

のだが、どうしても最後の一手、場所の詳しい特定ができなかった。故に二手に分かれて探索をしよう、という事になったのだ。

しかし、一向に見つからない。かれこれ数十分は歩いているのだが、見つからない。

母からは20時になっても見つからなかったら諦めて帰ってきなさいと言われている。その20時まであと1時間もない。

——これは、今日は諦めて帰るかなあ。

などと考えていたその時だった。突如何度も経験した、悲しいことに慣れてしまった悪寒と共に強烈な魔力反応を検知した。

「(アルフ!)」

「(わかってる! 今全力で広域結界張ってる!!)」

街中でのジュエルシードの起動。今は目覚めかけと言った状態だったが、それでも側に居た人にどのような障害が起きてしまったかはわからない。

このような事態を防ぐために、わざわざ小学校への編入を延期してジュエルシードを探していたのだと言うのに。

——あの子に偉そうなこと言っておいて、間に合わなかったっ!

人が多すぎた、ビルが立ち並ぶ複雑な場所だった。言い訳を探せばいくらでも出せるだろう。しかし、それでよいはずがないのだ。

彼女に、高町なのはに大きな口を叩いたのだから、やるからには全力でやらなくてはならない。

「バルディッツシュ!」

バルディッツシュをセットアップし、即座に飛び上がる。ジュエルシードを確認。それは大通りの真ん中。スクランブル交差点の中央に浮遊していた。

「バルディッツシュ!」

〈sealing〉

バルディッツシュをグレイブフォームに変え、すぐさま封印魔法を発動する。

「レイジングハート！　お願い！」

〈sealing〉

少し離れた場所から同じような掛け声が聞こえる。

——あの子は！

——フェイトちゃんも、やっぱり来てたんだね!!

お互いが心の中で驚きを留める。そんな物を表現するより先にやらなければならない事があるからだ。

「ジュエルシード！」

「シリアル14！」

「封・印！」

フェイトとなのは。ジュエルシードを挟むようにお互いの封印魔法が飛び、ジュエルシードを封印する。

「……」

「……」

ジュエルシードを間に挟み、お互い無言で顔が見える距離まで近づく。

「フェイト、ちゃん」

先に口を開いたのはなのはだった。

その瞳には今までのような迷いや、臆病な雰囲気は感じられず、それどころか歴戦の戦士のような風格すらにじみ出ていた。

なのはの顔を見るだけでフェイトの頭が熱くなる。自分でも認識できない熱が、理解を超えた疼きがなのはを見ると目覚める。

「どうして、ここに居る？」

冷静に努め放った言葉はやはり今まで同様、感情を抑えた冷たい言葉となつてなのはに届く。

今までなら怯んでしまった言葉。しかし今回はそのような様子を見せず、まっすぐに堂々とその言葉を受け止める。

「フェイトちゃんに、お礼を言いたくて」

——は？

(意味が分からない。なぜ急にお礼の話になったの？　もしや日本の学校でよくあるとされる『お礼参り』の事?)

あまりに唐突な話題の為フェイトの思考が空回りを始めるが、どうにかマルチタスクの残りの思考を総動員して、冷静さを保つ。

「フェイトちゃん。ありがとうございます」

「あなたにお礼を言われる筋合いは」

「フェイトちゃんにはなくても、私にはあるから。フェイトちゃんは、私に気付かせてくれたから。私の弱さとか、全部」

「そう」

ならば、ならばなぜ

——ならばなぜ、ここに居る……。

自身の弱さに気づいたのならば大人しくしていればよいのだ。全てに気付いたと言うのなら自分がいかに危ない事に首を突っ込んでいたのかわかったはずだ。ならばなぜこの場所に居るのだ。

わざわざお礼など言いに来ずに、大人しく家で家族と笑って過ごしていればよかったのだ。

今度は思考が加速する。頭が熱を持つ。どうにもいけすかなかった。目の前に居る魔導師が、高町なのはと言う存在が。

「だけど、ううん。だからこそ、私は示さなくちゃならない」

フェイトの事を無視したのは一人で語りだす。

「私が弱かった事を教えてくれたフェイトちゃんに。私は、弱くないんだよ。って」

何を言っているのだろう、この少女は。弱かったのならば弱いはずだ。それが弱くないなどと言う事がある物か。

どうにも狂わされる。目の前の魔導師は、高町なのはと言う存在はフェイトを狂わす。

「だから、必死に特訓した。フェイトちゃんに認めてもらえるように。フェイトちゃんに勝てるように。私は、『高町なのはは弱くない』んだって！　知ってもらえるように!!」

そう叫びながらなのはは足元に魔法陣を展開する。

「っ！ 戦う気？」

その姿を見て、相手がやる気十分だと感じたフェイトはバルディッシュを胸元に構え直し、即座に動けるように体制を整える。

「はい。私と戦ってください、フェイトちゃん。私と戦って、そして認めさせてみせるから！ 私の努力と、気持ちを！ 私の思いを！ 全力全開で、この魔法に込めて!!」

なのはの叫びに呼応するかのようになのはから感じられる魔力が上昇する。

——来る！

と思ったその時には

「ショートバスターツ!!」

すでに砲撃は放たれていた。

〈Blitz Action〉

とつさに短距離高速移動魔法を発動して横にずれる。それとほぼ同時に、なのはの砲撃魔法は、先ほどまでフェイトがいた場所を的確に打ち抜いていた。

——威力を落してタメを失くした砲撃魔法。

確かに強くなっている。いや、器用になつていると言ったらいいのだろうか。前回戦った時は、魔力の調整すらデバイスに頼っていたと言うのに、もうこのような応用ができるようになっていいる。

——天才、か。

天才。その一言がふさわしいような成長ぶりだった。しかし足りない。フェイトには届かない。

ブリッツアクションでの離脱の勢いのまま、なのはの死角に入りバルディッシュを振るう。

〈Scythe Slash〉

今までは高速移動後の一閃。それですべて決着がついていた。しかし、今回はそうはいかない。

そんな予感がフェイトの中で渦巻き、そしてそれはその通りとなつ

た。

〈Flash Move〉

レイジングハートのその言葉と共に、なのはの姿が消える。

予想するに、ブリッツアクションと同系列の短距離高速移動魔法。

——私対策は、ばっちりと言うわけ、か。

たとえ一瞬でもこちらに迫れる速度を出すために新しい魔法すら使ってきた。

いくら、こちらの移動法と言う手本があるとはいえ、見たのは2度、その内の一回は土煙に紛れての移動だったため、まともに見れたのは一度きりの筈。

それで、ここまでそっくりな魔法を作れる。それは才能か、はたまたデバイスの努力のおかげか。

しかし、これで相手も同様。短距離の移動ならば素早さは同じになつたと言える。

そこから導き出されるのは、移動魔法の応酬だった。

フェイトが死角を取ったら、なのははそこから離脱、距離を取り、それをフェイトが詰める。

そのような、移動の応酬が繰り返されていた。

その最中フェイトはなのはの特性の一つに思い至った。

——そうか、あの子すごく「眼」が良いんだ。

いくら魔法の補助があると言っても、今まで足を止めて砲撃魔法を撃ってきただけの少女が、フェイトと同じ高速戦闘をこなせるはずがない。どれだけ訓練しようが、やはり限界はある。そのうちの一つが「眼」だ。

速さを認識できなければその速さで動くことはできない。そしてその速さを認識するためには、その速さになれる事、特に眼と脳がなれることが重要だ。

故に慣れているフェイトは高速戦闘の最中、物を正確にとらえる動体視力と高速の世界で通常通り思考ができる高速思考の両方が鍛えられている。自然と鍛えられた、と言ったほうが正しいだろう。

しかし、なのはは違う。確かに初めて会った時はハーケンセイバーの軌道を目で追えていた。その時はそこそこ眼が良いのだろうと思っただが、それでもフェイトの起動にはついて来れていなかった。

しかし、たった一週間足らずの特訓でフェイトに迫る高速戦闘ができていく。それはつまり、想像もつかない程の訓練を積んだということもあるだろうが、やはり天性の眼の良さがあるのだろう。

それでも、フェイトには届かない。確かにフェイトの動きを視認し、いや、視認せずとも反応するときもあるが、それでもなのははフェイトの攻撃範囲外、サイズスラッシュの射程外に出る事しかしていない。それはつまり、高速で動けても、その最中での近接戦闘の訓練は積んでいない。と言う事だ。

——ならば、こちらが負ける道理は無い！

相手がいくらしがみつこうと、こちらは近づき武器を振るうだけ、相手はそこから逃れるのが精いっぱい。ならば、このまま押すだけで高速戦闘に慣れていない相手はいずれ力尽きる。

——そう、思っていた。

「レイジングハート!!」

〈Divine Shooter〉

その言葉が発せられた瞬間、フェイトの目の前にピンク色のスフィアが現れた。

「なっ!!」

遅延発動か、はたまた隠蔽魔法か、そのどちらにしても相手を侮った結果。相手の罠に引つかかってしまった。

——逃げ続けたのは、この状況を作り出すため!?

違う、明らかに違う今までの彼女とは違う。魔力量に物を言わせて力づくであった彼女とはまるで別人だった。

「レイジングハートと考えた、知恵と戦術！ その一！ 相手が速いなら、その速さを奪い取れ！」

〈Divine Cage〉

「シューシューシューッ!!」

なのはの掛け声と共にフェイトの周囲のスファイアが一斉に迫ってくる。

——遅延魔法には驚かされたけど、スファイアの数自体は少ない。この数で籠ケージだなんて。

笑わせる。

罠を仕掛けていたのは賞賛に値する。この短期間でこのような魔法を使えるようになったことも。しかし新しい技を使おうと意識しすぎているのか、地力が圧倒的に足りていない。

確かに目前に現れた弾には驚きもしたし、回避も間に合わない。だが

「防御魔法、最大展開」

〈Defenser〉

多くても10に満たない数の射撃魔法。近場での発動故、回避は困難。だがそれだけだ。

バルディッシュによって防御魔法が前面に展開される。フェイトは防御魔法が得意では無い。故に最低限の防御だが、直撃さえしなればそれで良い。網目の大きい杜撰な網を、さらに広げるだけ、それだけで離脱はたやすい。

そうしてディフェンサーを前面に展開したまま、全面へ飛ぶ。

スファイアがディフェンサーにぶつかるとディフェンサーを「削る」。

——この射撃魔法、貫通属性も付与されている？

防御の薄いフェイトが足を止めて防ごうと考えたら防ぎきれず大

きなダメージを受けていた可能性がある。しかし、今回選択したのは離脱。それは間違いでは無かった。

この時点では。

「知恵と戦術、その二！ 相手の行動がわからないなら、わかるように誘導せよ！」

包囲網を潜り抜けた先で見えたのは、魔法陣を展開し、どつしりと腰を据え、チャージが完了しているなのはの姿だった。

〈Divine Buster〉

未だ、放たれてないそれはデバイスの前に魔力を凝縮している。その様はまるで小規模な収束魔法の様でもあった。

「っ!!」

フェイトもこれには驚愕する。タメられた魔力を感じ取るだけで喰らったら一撃で落とされるほどの威力だと感じる。

「デインバスター、フル、パワーアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

なのはのその大きな咆哮と共に、デインバスターが放たれる。

フェイトとあえて高速戦闘を繰り返す事で、フェイトの位置を誘導。そこに射撃魔法を罠として仕掛ける。

その射撃魔法で作られた囲いを抜け出そうが、耐えようが、容赦なく叩き込まれる最大タメの砲撃魔法。

素晴らしい戦術であり、それをこなす実力が、才能がなのはにはある。それでも、フェイトには届かない。

いや、並みの魔導師であつたら、所謂「普通」のミッド式魔導師であつたらこの連携になすすべもなくやられていただろう。

しかし相手はフェイト。ミッド式魔導師にしては珍しい、高速近接戦闘を得意とする魔導師なのだ。

なのはの選択は間違いでは無かった。しかし、今この時点では間違いだった。フェイトを研究し切れていなかったともいえる。

なのはにとつての最善は、デインバスターを発動した瞬間、フルパワーなどでは無く、今まで通りのデインバスターを即座に放つ

ていればよかった。それだけでフェイトはデイベインバスターに呑まれていただろう。倒せなくても甚大なダメージを与えられたはずだ。

しかし、フルパワーを選択したがゆえにタメの時間は長くなり、フェイトに時間を与えてしまった。フェイトに『移動できる隙間』を与えてしまったのだ。

〈Blitz Action〉

その隙間さえあれば、フェイトには十分で、そしてフェイトの最高速度は音に迫る。

フェイトが消えた場所をデイベインバスターは何物にもさえぎられることなく通過し、なのはが魔力の放出を止めると同時にその光を弱めていき、消える。

「はあっ、はあっ」

叫びすぎたのか、魔力を使いすぎたのか息を荒くしながら今までフェイトがいた場所を見詰めるのは。

レイジングハートも排気口のようなパーツから余剰魔力を勢いよく吐き出す。それはまるで、詰まっていた息を思いっきり吐き出しているように見えた。

——フェイトちゃんが、いない。

デイベインバスターの光が収まり、その場所を見てもフェイトは見当たらない。もしや落してしまったかと思い、下を見ても居ない。

しかし、なのはの死角を取っているような感覚は無い。レイジングハートに鍛えられた空間把握能力は集中さえしていれば相手が自分

の後ろに居るかいなか位ならわかるほど鍛え上げられていた。

しかしその気配はない。前後左右、下に居ないのであれば、残るは

——上！

そう思い、上を見上げるなのは、その視線の先には、バリアジャケットすら傷ついてない。フェイトの姿があった。

足元には金色の魔法陣、デバイスであるバルディッシュは天高く上げられその頭上にも魔法陣が。

さらに、晴れ渡っていた空はいつの間にか雲に覆われ、今にも大雨が降りそうである。

〈マスター！ 離脱を！〉

「わかってる！」

その姿を見て、なのはもレイジングハートも離脱を選択する。なのははバリアジャケット、防御魔法共にフェイトとは違い強固なものとなっている。潤沢な魔力を贅沢に使った、砲撃魔導師らしい防御力。しかし、それを考慮してもフェイトが準備している魔法は『避けなくてはならない』と直感が訴えていた。見たことない魔法だが、それでも感じる魔力の奔流からは危険を感じた。

だが、なのはは思い至らなかつた。自分が考えられる戦術は、相手も思いつくのだと。

「え？」

離脱しようとしたなのはが絡め取られる。それは、金色の輪であり、なおかつ電流を放っているのか、微小の痺れすら感じる。

〈マスター、バインドです。どうか術式に割り込んでください〉

「そんな事、言っても！」

知らない魔法、知らない術式。存在はレイジングハートから教わった。ユーノに手伝ってもらい、バインドブレイクの方法も学んだ。し

かしこれはユーノの使う魔導式では無かった。

当然と言えば当然である。バインドの魔導式が全て同じであったら、そんな物なんの役にも立たない。

しかもフェイトのバインドはライトニングバインド。電気を纏ったバインドであり、それは縛られながらスタンガンを当て続けられるのと同じことだ。

なのはもバリアジャケットが無ければバインドに絡め取られた時点で気を失っていたであろう。

〈Protection〉

レイジングハートは脱出不可と見るなり防御を選択。プロテクションを多重展開した。しかし、その選択は結果から見れば何の意味もなさなかった。

「アルエル、クルファル、トリアス。怒れる雷神、その怒りを迸らせ給え。バンリル、ザキアル、シユロウゼル」

〈Thunder Rage〉

バルディツシュがあれば無詠唱でも使えるはずのサンダーレイジ。しかしフェイトはそれをあえて詠唱することで威力を上げていた。

フェイトは驚愕していた。なのはの成長ぶりに。この一週間で自分に冷や汗をかかせる程に「上手く」なった彼女の努力に、そこまでできる程の才能に。

——凄い子だ。

素直にそう思う。たった一週間でこれほど強くなれるものなのだろうか。

——この成長速度、やっぱり彼女は天才だ。

もしかしたら自分より才能が有るのではないだろうか。いや、あるのだろう。そして貪欲だ。強くなることに対して貪欲だ。相手の技でも自分にとって使えると思ったのなら真似てくる。それだけな

「やつ、ぱり」

そんな状態でも、こんじょうで口を開くのは。その言葉はなんとかフェイトに届き、驚かせた。

——まだ、喋れるの？

意識を失ってもおかしくない一撃だったはずだ。多重発動した防御魔法のおかげか、それとも持ち前の精神力か。電気による痺れがあるにも関わらず、なのはは地面に倒れたままフェイトに向かってしゃべる。

「フェイト、ちゃんは……強い、ね！」

そんなことを、ぎこちない笑顔を浮かべ言ってくるのは。

そんななのはに、フェイトは空恐ろしさを感じていた。

よく見れば指先は痙攣しているのか、不規則に跳ねている。それは、いまだ電気がなのはの体を駆け廻っていることに他ならない。普通そんな状態でまともに動ける筈がない。

——どういう、体をしているんだあの子はっ！

もはや精神力だとかタフだとか、そんなチャチな物じゃ断じてない。もつと恐ろしい物をフェイトは感じ取った。

「本気も出さずに、汗一つかかないで、ホントに、すごいよ！」

そんなことを笑いながら言っただけなのは。

何がスゴイだ。何が汗一つかかないだ。冷や汗はかいたし、戦闘移動自体は十分全力の範囲内だ。全力中の全力であるサンダーレイジを詠唱でバイプッシュしてまではなつたのだ。

——私知ってるよ！ あの子みたいなのを、バトルジャンキーって言うんだよね！ レヴィが言ってた！

そんな言葉がフェイトの頭の中に響くが、意識的に無視する。

「もう、フェイトちゃん用に考えて、練習した戦略、は使い切っちゃった、けど」

すでになのはは回復し始めているのか必死に体を起こそうとしている。

——けど。なんだと言うのか、もういい加減いいだろう。

なのはの言葉に対してそんな考えが浮かぶほど、今のフェイトは疲れていた。

「もつと、全力でぶ、つかるからー！ 残りの魔力と体力、全部で!!」

そう宣言すると、デバイスを杖にしても立ち上がるなのは。

それを見て、フェイトもバルディッシュを構え直す。

一触即発。どちらが先に動くか、緊張した空気が漂い始めたその瞬間。

その緊張を打ち破るものがあつた。

ドンツと腹の底に響くような振動を起し、それと同時に魔力を放ち始めるそれ、ジュエルシード。

「え!?!」

「ジュエルシード!?!」

なのはもフェイトも驚き戸惑う。封印はしたはずだった。

しかし、その封印は完全なものでは無かつた。なのはとフェイトの、二人の違う封印術式が合わさつた結果、互いが互いの邪魔をし、キチンと効果を発揮できていなかったのだ。

そしてその後が始まる戦いで放たれた、なのはとフェイトの全力の魔法。その魔力は未完成な封印しかされていなかったジュエルシードを呼び起こすのに十分だった。

たしかに、なのはのショートバスターが切っ掛けで唐突に戦闘が始まり、ジュエルシードの事は二人の頭の中からすっかり外れていた。しかし、なのはと共に現場に来たユーノが、ジュエルシード発動を感じし、その場に向かっているはずのアルフがいたはずだ。

ユーノは今現在なのはの側により回復魔法を使おうとしているのか、なのはに向かつて魔法を使っている。それは悲しくも魔力が回復

し切っていないユーノでは焼け石に水な状態ではあったが、その微々たる回復が、なのはを立ち上がらせることができた要因でもあった。では、残りのアルフは何をしているのかと言うと、実は遠目からなのはとフェイトを見守っていた。二人の戦闘があまりにも高度で、かつ、なのはのあまりの成長ぶりに驚愕していた。

そうした故あって、二人は間に合わない。アルフは居場所が遠く、ユーノはなのはへの回復で手一杯であった。

——っ！ 早く何とかしないと!!

なのはとフェイト、二人のキモチが合わさる。どうにかしなくてはそのままでは危ない。そう思い、二人ともジュエルシールドに近づこうとする。

なのはは動きがおぼつかないその身体を、必死に動かそうともがくほど。

しかし——

『そこを動くな!!』

どこかから、男子とも女子とも取れない中性的な声が響く。そして『ブレイズ、カノン!!』

その声と共に、ジュエルシールドに濃い青色の光が当たる。

砲撃魔法ブレイズカノン

「ふう、ジュエルシールド、封印完了」

その魔法を放ったと思わしき、黒色をベースに肩には攻撃的なトゲ携えたバリアジャケットを纏う魔導師は、ゆっくりとジュエルシールドの元に降り立ちジュエルシールドを確保すると、自分の手から何か身分証のようなものを拡大投影し掲げた。

「熱くなっていたところすまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。任意同行。お願いできるかな?」

今、地球に管理局の最年少執務官が降り立った。

第4話 三者の思惑、二人の決意と決別へ上

少し時間は巻戻り、なのはとフェイトがジュエルシードを発見する少し前。

次元航行艦アースラ内ではようやくたどり着いた任務地に対して搭乗員一人一人が各々複雑な思いを抱えていた。

最年少執務官と持て囃されるクロノ・ハラオウンもその一人。

「ここが、第97管理外世界、現地名称惑星『地球』か」

彼はアースラのコクピット内でモニターに映る青い星をみて何とも言えぬ思いを抱いていた。

「どーしたの？ クロノくん」

そんな彼に声をかけるのは彼の補佐官にしてアースラ通信主任であるエイミィ・リミエッタ。クロノの士官学校時代からの幼馴染でもある。

「いや、この世界にロストロギアがあるんだな、と思うとね」

「うーん、まあ通報通りならそうだけどね」

「まあそんなことは良い。武装隊の状況は？」

「今は出撃前の小休止ってところだと思うよ。多分指示があれば直ぐ出撃できると思う」

「そうか」

事務的な会話が終わり何とも言えない空気が流れる。それも仕方ないだろう。もともとアースラは次元世界の哨戒任務中であった。これは各世界を回り、突発的な事故などが無いかを軽く確認するだけの任務であり、本来ロストロギアに対する備えなどしていないのだ。それがなんの因果かロストロギアを回収しなくてはならないと言う事になってしまう。

実働隊である武装隊や、アースラの切り札であるクロノはその事に

対する感情もひとしおだろう。

そうして、何とも言えない空気のまま各々が過ごしていると、唐突に艦全体にアラートが鳴り響く。

「どうした!」

「今確認中!」

すかさずクロノが叫び、エイミイはすぐさま目の前のコントロールソート进行操作し始める。

「何があつたの?」

別室で仕事をしていた艦長、リンデイ・ハラウンもアラートを聞きつけブリッジまでやってきた。

「いえ、それが」

クロノが艦長に未だ原因はわからない。と報告をしようとした時、エイミイは大声で報告した。

「巨大な魔力の奔流を確認、このまま増大を続けたら次元振の恐れがあります!」

「なんだと!」

次元振、それは魔力の暴走によって起こり得る、次元断層の前触れであり、規模が小さいもので小物や人一人を吸い込む程度、これによって迷い込んでしまう人のことを『次元漂流者』と呼び、管理局ではこの次元漂流者の案件が年に数十は起きているとされている。

しかし、大規模になるとその程度の被害では済まされない。都市一つ、国一つは当たり前。歴史上もつとも大きな次元振による被害は、世界一つを滅ぼしたと言われている。

少ない戦力で、そのような魔力を感知されるほどの事件に当たってしまった事がクロノには信じられなかった。

——帰ったら絶対にこの案件を処理した奴らを全員退職させてやる! 絶対だ。やると言ったらやってやる!!

あまりの出来事に頭を抱えながらそんな物騒なことを思う。

「それはジュエルシードかしら？」

しかし、そんな中でも艦長は冷静に状況を把握しようと、エイミィに聞いた。

「はい、そうだと思われませんが」

「クロノ、直ぐに武装隊を率いて降下しなさい。このまま放っておく訳にはいきません」

「わかりました、艦長」

リンディの命令により、ブリッジから出ようとしたクロノをエイミィが止める。

「待ってクロノくん！」

「どうした、エイミィ」

「魔力反応消失」

「なに？」

エイミィが報告したことは先ほどの魔力の奔流が止まったと言う事だった。

「その代り、魔力を検知できた場所に広域結界が張られている模様です」

「映像出せる？」

「はい」

リンディの言葉にすぐさま答え現地映像を出すエイミィ。

そこには、オレンジ色の魔力光で作られた広域結界の映像が見えた。

「広域結界、ですね」

「見る限り中々の強度だ。しかも術式は多分封時結界」

「相当高レベルの結界魔導師がいるようね。内部の映像は？」

「少し待ってください」

エイミィの操作によりモニターの表示が変わる。そこに移されていたのは、二人の魔導師の戦いだった。

「これは」

「どちらかが、通報してきた匿名の魔導師、と言う事かしら？」

クロノとリンディはその映像を見て今あの世界が、どんな状況なの

かを考える、しかしエイミイだけは違った。

「この二人、すごく強いっ」

「どういう事だ？ エイミイ」

「まず、高速戦闘のレベルが高い。白いバリアジャケットの方は攻撃してないけど、こことこことここ。それとここにも、多分これデイレイ型の魔法だよ」

「罨を仕掛けている訳か」

「ひとまず、状況を見守って見ましょう。情報収集をかねて、ね。クロノ執務官及び武装局員のみなさんはいつでも出撃できるように体制を整えておいてください」

「わかりました」

リンデイの指示により、状況を見守る事になったアースラ乗組員。そして全艦放送されている映像は、本職の魔導師をして唸らせるものであった。

「あ！ デイレイ魔法が発動した！」

「遅延魔法で射撃魔法だと？ どういう扱い方だ無茶苦茶すぎる！」

「でも、そのお蔭で黒い子の動きが制限されたわ」

「わあ！ あそこに突っ込むの!?!」

「だめだ、それは誘導されている」

「ええ。砲撃の準備に入っているわね」

「あの白い子、砲撃魔導師ですね」

「エイミイ、一応で良いから魔力計測してもらえる?」

「わかってます！ 最初からやっていますよ!」

三者三様でモニターに見入り盛り上がる。

「ああ！ 撃った!!」

「これは、決まりかしら」

「いえ、黒い方はスピードタイプのようにです。今の状況なら」

「すごい、避けた!」

「さすがね、あの状態から無傷で離脱できるなんて」

「すかさずバインド。しかも」

「大規模魔法？ しかも天候操作系儀式魔法！」

「なんて、大掛かりな、まさか雷を呼ぶつもりか？」

「彼女、電気変換資質持ちみたいね」

「防衛魔法の多重展開、でもその程度じゃあ」

「あの魔法は防ぎきれないだろう、な」

突如、モニターが光り輝く。それは雷が落ちたせいだが、その余波でモニターに映す役割であるサーチャーがいくつか破壊されてしまった。

「なんて威力」

「自然の雷をも利用して威力を上げているのね」

「艦長！ 二人の魔力計測結果、出たみたいです」

「そう、どんな感じかしら？」

「こ、これは……」

エイミイがなにやら操作すると、途端に固まった。

「どうした？ エイミイ」

クロノがエイミイの名前を呼ぶと、エイミイは硬い動きで振り返りながら言った。

「この子たち、すごいよ！ 凄いつてもんじゃない！ 凄すぎるよ！」

「はやく、報告してくれ」

「白い子の砲撃魔法、平均魔力発揮値約150万、最大威力を計測した時はその倍以上！ 推定魔力容量と合わせての測定、魔力ランクは推定AAAです！」

エイミイの言葉にブリッジ全体が騒然とする。

魔力ランクAAAとは、管理局員の魔導師全体で15%いるかいないかのランクであり、十分以上に天才と称されるほどである。それがいまだ幼い少女、しかも管理外世界に居るのだ。驚かないわけがない。

もし管理局に入れば将来は安泰。10年ほど前線で経験を積みあげたあとは死ぬまで指揮官などで左団扇を振っていればいい生活すらできないことは無いとされる。

「と、言う事は黒い方の子は少なくとも同等以上の実力者、と言う事ね」

「黒い子の方も同じく魔力ランクは推定AAA、発揮値が白い子より低いですけど十分以上の数値ですよ！」

リンデイのつぶやきに返されたエイミイのその一言に、またもや騒がしくなるブリッジ。

一人だけでもすごいと言うのに、それが二人も。冷静になって考えてみれば、同等の戦いをしているのだから実力が同じくらいだと見るのは当然であり、魔導師の実力と魔力ランクは≡で繋がれる。それは、魔力ランクが実力と思っても良いのだ。

つまり魔導士ランクAAAクラスが2人。しかもそれが管理外世界でロストログアを巡って戦っている。これは誰がどう見ても異常事態でしかなかった。

そうしてアースラのブリッジがざわついている瞬間、またもやアラートがけたたましく鳴り響く。

「ジュエルシード再動！」

エイミイの報告にブリッジ内に緊張が走る。

「クロノ執務官！」

「わかっています！」

リンデイの叫び声にクロノはバリアジャケットを翻し、即座にブリッジに備え付けられている転移装置へと入り込む。

「エイミイ！」

「了解！ 転移座標は結界内、ジュエルシード直上50m！」

「転移開始してくれ！」

「転移、開始！」

エイミイが叫びながら操作をすると、クロノが光に包まれ転移される。

こうして、クロノはジュエルシードの直情に現れ、ブレイズカノン

でジュエルシードを鎮圧。回収すると同時に、名乗る事にしたのだ。

「熱くなっていたところすまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。任意同行。お願いできるかな？」

*

*

クロノの言葉に唾然とするのはとユーノ。ユーノにしてみればどうして今頃と言う思いでいっばいだが、しかし安心する思いもあった。

管理局が来ればより早くこの事件は終息する。それはつまりなのはがもう戦わなくてよいと言う事であった。このように傷つき辛そうなのはを見なくてよいと言う事なのだ。

一方のフェイトは急激に頭が冷えていくのが感じられた。なのはとの戦いで思っていたより熱が入ってしまったていたらしい。

任意同行に応じる応じないはともかく、戦闘の意志が無いことだけは示さなくてはいけないだろう。

「バルディッシュ、モードリリース」
「エイエッサー」

バルシッシュを待機状態へ戻す。バリアジャケットは展開したままなので完全な待機というわけでは無いが、デバイスの戦闘形態を解除したので、戦闘の意志は無いと思ってくれらるだろう。

「(アルフ、管理局が来たみたい。母さんに連絡お願い)」

『了解。くれぐれも変なことはしないでね？ フェイト』
「(わかってるよ)」

遠くに居たアルフを母への使いへと送りだし、クロノと名乗った執務官の側へ降りる。

「協力感謝する。そっちの白い魔導師もできれば武装解除してくれる

と助かるんだが」

「え、っと、わかりました」

クロノに言われレイジングハートを解除するなのは。

「きやつー！」

しかし、フェイトから受けたダメージは残っており、支えにしていた杖を失くした事で自分の体を支えきれず前へ倒れ込む。

「おっと」

しかし、クロノがすかさずなのは受け止める事で、なんとかなのはが地球と固いキスをしなくて済んだ。

「あ、あの」

「すまない、戦闘のダメージが残っていたんだな」

「えと、ありがとうございます」

「座れるか？」

「はい」

クロノの助けもあり、地面に座り込むのは。同年代の男子と接することが少なかったのか、それとも戦闘の余韻が残っているのか、どこかその顔は紅潮しているようにも見えた。

「戦闘のダメージ……？ 見てたんですか？」

なのはを座らせたクロノにフェイトが言う。

クロノがなのはに言った『戦闘のダメージが残っていたんだな』と言う言葉、それはつまり、なのはが戦闘によってまともに動けない状態になってしまった事を知っていると言う事だ。

「ああ、不愉快にさせてしまったら申し訳ないんだが、君たちの戦闘は見させてもらった」

フェイトの問いを素直に肯定するクロノ。その潔さに少々フェイトは驚いていた。

フェイトは実はあまり管理局に良い印象を抱いていない。それはプレシアが管理局に対して警戒しているせいであるのだが、その管理局員、初めて会う管理局員が人のよさそうな同年代の少年で会った事に驚いていた。

「君たちがどのような理由で戦闘をしているのかわからなかったし、

君たちの戦力調査と言う理由もある、しかし途中でジュエルシードの発動を感知し、慌てて降りてきた、と言うわけだ」

自分たちを見ていた理由、なぜ急に表れたのかその理由すら正直に話すクロノにフェイトは少しだけ気を許してしまいそうになる。

「それで、任意同行の話だが」

「あの、任意同行って、なんですか？」

クロノの言葉を遮るなのは。なのはは申し訳なく思っているのか、その姿はおずおず手を上げていた。

「あ、ああ。そうだね、事情の説明を聞きたいんだ。ここではなんだから僕達の拠点に来て貰いたいんだが……」

そう言いながらフェイトとなのはを交互に見るクロノ。そんなクロノにフェイトはきつぱりと告げた。

「もう、時間も時間ですし、疲れも残っているので明日で良いですか？」

フェイトのその言葉に、クロノははっと気づいたのか申し訳なさそうに、なのはを見る。自分で立てないほどのダメージを負ってしまったなのはの事を考えてない。とても思っているのだろうか。

「そ、そうだね。艦長、どうします？」

クロノのコールに合わせるかのように、空間投影されていた画面が身分証の表示から女性の顔に変わる。

『そうねえ、明日ちゃんと来てくれるって約束してもらえるのなら、こちらにも構わないのだけど……』

画面に映る翠髪の女性は困ったと言うジェスチャーなのか、片手を頬に当て首を傾ける。

「母も連れてきていいのなら必ず向かいます」

フェイトのその言葉になのはが驚いたようにフェイトを見る。対してリンディは満足そうに微笑んだ。

『わかりました。それではそちらのあなたはそのように、それで白い方の子はどうかしら？』

リンディの言葉に、しどろもどろに目を泳がせるなのは。

「あ、あの。親、連れてこなくちゃ、ダメですか？」

その言葉から読み取れるのは、親に自分のやっている事を伝えていないのだろう。それも当然。なのはは地球生まれの地球育ちであり、もちろん家族も魔法の事なんて知らない。いきなりそんな事を真剣に言いだしても家族が心配するだけだろう。

『別に無理に連れてくる必要はないですよ。あなたからだけでも話が聞ければ、私たちは十分ですから』

なるべく安心させるようにリンディは柔らかい笑顔でなのははに笑いかける。実際、なのははその笑顔と言葉で安心したのか、ほっ、と息をついた。

「それじゃあ私も大丈夫です」

『わかりました。それでは待ち合わせの場所を決めましょう。どこかわかりやすくしてなるべく広い場所は無いかしら？ あとできれば人通りが多くない場所であれば最高なのだけれど』

「それじゃあ、海鳴臨海公園っていう場所があつて、そこなら」

『そう、わかりました。黒い方の子も、それで大丈夫かしら？』

「はい」

『ありがとう、それじゃそこに。そうねえ、お昼食べてから、13時頃にしましうか』

「はい。大丈夫です」

「わかりました」

リンディ主導で話はまとまり、明日13:00に海鳴臨海公園で待ち合わせる事が決まった。

『それではまた明日。クロノ執務官も帰投してください』

「艦長」

リンディの命令にクロノが口をはさむ。

「白い方の子を家まで送ってあげて良いでしょうか？」

『許可します。ちゃんとエスコートしてあげるのよ？』

「からかわないでください」

その短いやり取りを終えると通信を切ったのかクロノは画面をしまう。

「と、言うわけで君を家まで送ろう。家を教えてくれ」

「え、えと。一人で大丈夫、ですよ？」

「何を言っている、まともに立てないような状況で一人で帰れるわけがないだろう」

「え、つとでも」

クロノがなのはに手を差し伸べるが、なのはは遠慮しているのかその手を取ろうとしない。

「あの」

自分を置いて始まったどこか嫌気がさす空気に顔を顰めながら、フェイトは声をかける。

「あ、ああ。どうした？」

「もう帰っていいですか？ 私の使い魔が張ってる結界も、解きますけど」

「そ、そうか。いや、ここは人目に付く可能性があるから、すこし目立たないところに移動してからにしよう」

「わかりました。ついてきてください」

「ああ」

すぐさま歩き出すフェイトに応えると、クロノはなのはを抱きかかえ付いて行く。

「にやあ!?! あ、あのお」

「大人しくしてくれ、落してしまおうぞ」

「ふあ、ふあい」

後ろで繰り広げられる甘い空気に当てられたのか、気分が悪くなるフェイト。それは表情にも表れており、裏路地で待機していたアルフ（狼形態）が驚いた声で話しかける程であった。

『ふえ、フェイト……。顔凄いいよ?』

「放っておいて」

『わ、わかった』

「アルフ、帰るよ」

『あ、ああ』

フェイトの言葉にアルフは頷き転移魔法を発動する。

「転移魔法まで使えるのか」

クロノはその有能な使い魔に、そこまで有能な使い魔を使役しているフェイトに感心していた。……なのはを抱えたまま。

フェイトがどこかへ行ってしまった事で結界も解除され、先ほどまでなのは達がいた大通りに人の雑踏が戻ってくる。

「あ、あのー！」

そうなっても未だ抱えられているのはは、すこし大きな声でクロノに話しかけた。

「あ、ああ、悪い。僕達も転移魔法で帰る事にしよう。住所を教えてください」

「え、つと」

なのはが自分の家の住所を教えると、クロノはエイミィに指示を出す。

「しばらく待ってくれ、僕の補佐官が座標を割り出している」

「えつと、ほさかん？　ざひよう……？」

「君は、もしかして魔法の事をあまり知らないのか？」

「え、つと、はい。魔法に出会ってまだ一か月位、です」

「一月であんな戦闘を……」

何気なく言ったなのはの言葉にクロノは驚く。魔力文化の無い管理外世界で魔力ランクAAAと言う恵まれた、もはや突然変異と言って良い程の才能に加え、一月であそこまでの戦闘ができる程のセンス。それはまさに魔法戦技をするために生まれてきたと言っても過言では無い程の才能とセンスである。

「えつと、その」

「どうした？　何か聞きたい事があるのか？」

どもりながら喋るなのはが、なにか言いにくい事があるのかと思いい、自分から話を持ちかける。

「その、下ろしてくれると、助かります」

その言葉にクロノはようやく、未だ自分がなのはを抱えていたことに気付いたのか、ばつの悪そうな表情を浮かべると、なのはを下ろし

た。

「すまなかった」

「い、いえ。その、心配してくれた、んですよね？」

「いや、まあそう、なのだが」

「恥ずかしそうに頬を掻くクロノに、なのはは面白くなってしまったのか小さく笑いだす。

「な、なぜ笑う」

「だって、クロノくん。面白くて……」

「クロノ、くん？」

年下であろう女の子にいきなり君づけで呼ばれ頬を引きつらせるクロノ、しかしなのはの考えも当然、なのはとクロノは残念ながら同じ位の背丈であり、実はフェイトの方がクロノより身長が有ったりする。少しだけだが。

そんなクロノが年上に見えるわけもなく、さらにクロノはミッドチルダ人ではあるが、黒髪黒目で少し童顔と、日本人そっくりの顔立ちをしていたことも相まってなおさら実年齢より若く見えてしまう。

『クロノくん。ラブコメしてるとこ悪いんだけどさくあ？』

「な、エイミー！ なにをいきなり！」

唐突に通信枠を表示させ通信してきたエイミーの言った言葉にクロノはしどろもどろになってしまう。

『座標割出終わったよ？ いや、ホント、良い空気を引き裂くようで心苦しいんだけどね？ でもこっちも仕事だからさあ？ あく、執務官さんはお気楽でいいですねえ。仕事しながらそんな可愛い子を軟派できるんだからさあ』

不機嫌なのか言葉に棘どころか猛毒と大量の刃を隠しもせずに見せびらかすエイミーにクロノはタジタジになっていた。

「わ、わかった！ そう見えたのなら謝る！ だから早く座標教えてくれ！」

『もうS2Uにデータ送ったから、早く送ってきな！』

そう言い放つと一方的に通信を切るエイミーにクロノはわけのわからない思いでいっぱいだった。

「一体なんだと言うんだ……。と、とりあえず君の家の側まで送るから、なるべく離れないでくれ」

「は、はい」

「それじゃあ行くぞ」

クロノが自身のデバイスであるS2Uを起動し、そこに新しく登録された座標に転移する。

*

転移の光が収まると、そこはなのは家の側の路地だった。

「ここで、だいじょうぶか？」

「あ、はい。大丈夫だと思います」

そう言うとなのは立ち上がる。その様子を見たクロノは心配そうな様子でなのはに訪ねた。

「体の方は」

「未だ少しだけしびれが残ってますけど、大丈夫、だよ」

クロノの言いたい事を理解しているのかなのはグツとこぶしを握って自分が元気であることをアピールする。

「そうか。それなら良いんだ。気を付けて帰ってくれ」

「うん」

「それじゃあ、また明日、よろしく頼む」

「ふえ？」

別れ際に言われたクロノの言葉が理解できなかったのか、なのはは首を傾げた。

「明日だ明日。僕らの拠点に来て話を聞くと言っただろう」

「あ、そうだったね。うん、13時に海鳴臨海公園だよ。大丈夫だよ。覚えてる。うん」

怪しいなのはの言動にクロノはいぶかしげな目線を送る。

「にやははは」

なのははクロノのそんな視線がいたたまれないのか、ごまかすよう

に笑いながら自分の頬を搔く。

「まあ良い、忘れずに来てくれよ」

「うん。大丈夫だよ」

「それじゃあ、また明日」

「うん。また」

最後にそれだけ話すと、クロノは再び転移魔法でどこかへと去って行ってしまふ。

そんなクロノをなのはは見送ると、少しおぼつかない足取りで、自分の家へ向かった。

第4話 三者の思惑、二人の決意と決別〈下〉

フエイトとなのはが戦い、管理局が遂にこの地球にやってきた翌日の昼、高町なのはは外を走っていた。

昨日定めた待ち合わせの時間が迫っている事もあるが、今の時間は12時30分。早めの昼食を終えすぐさま家を出たのだ。なのはの家から待ち合わせ場所である海鳴臨海公園までは歩いても20分程度。待ち合わせは13時なので歩いても間に合う時間であるが、それにもかかわらず、なのはは走っていた。

理由としては鍛練であると、なのはは言うだろう。なのはは実は今朝、最近の日課である鍛錬ができなかった。昨夜のダメージの所為か起きた時はすでに10時だったのだ。もちろん家族には心配された。だがなのはにとっては心配された事より、自分が決めた日課をこなせなかった事が不満だった。ユーノはもちろん、レイジングハートですら昨日の今日なので無理をする必要は無いと言ったのだが、なのはは頑なにその言葉を受け入れなかった。

一度決めたことはやり通す。そんな高町なのはの信条が、頑固なまでの信念がそれを許さなかったのだ。

なのでなのはは今走っている。朝できなかったことをせめて今やろうと。そして早めに家を出て、ランニングをしながら遠回りをして海鳴臨海公園に行こうと思っていたのだ。

そんななのはが臨海公園にたどり着いた時間は12時50分。待ち合わせ10分前と言う、まあ悪くない時間だろう。

公園の敷地内に足を踏み入れると同時に歩みを遅くしていき、息を整えるために歩く。そのまま臨海公園の名前の由来である海が見える展望台へとたどり着くとそこにはすでに人が居た。

金髪ツインテールのなのはと同じくらいの年齢だと思われる少女、フエイトとそのそばに立つ知らない女性。その黒髪の女性とフエイトは母娘なのだろう。海を見ながら言葉を交わし、お互いが明るい表情を浮かべている。

そんなフェイトになのは少しばかりの衝撃を受けていた。自分が見たことのない表情を浮かべるフェイト。それは当然だろう。母親の前でいる時と、敵とみなされたなのはの前に居る時、同じ表情だったらそつちの方が怖い。

しかし、なのはが受けた衝撃はそんな簡単なものでは無かった。フェイトの明るい表情をなのはは初めて見たのだ。自分の前では感情が無いような、凍りついたような冷徹な顔しかなかった彼女が、その尻尾を下げ、口角を上げ、優しく、朗らかに笑っている。

そんな顔が、そんな表情を浮かべるフェイトが衝撃的だった。悔しいとすら思ってしまった。

「……フェイト、ちゃん」

そんな衝撃でなのはは足を止め、ついフェイトの名前を呟いてしまった。

その声は決して大きくは無かったが、ある程度は近づいているため相手にも聞こえたのだろう。フェイトはなのはの方に振り向き、なのはの存在を確認すると、唐突に表情が凍った。

今までの明るい表情とは一変した、今までなのはに向けられ、なのはが見慣れてしまった冷たい顔。

——っ！

そんなフェイトになのはは得も言えぬ胸の痛みを感じた。その光景は自分の想いが一方通行だったのだと、フェイトにとって自分は未だ敵であるのだと、突き付けられる光景だった。

そんなフェイトを見てなのはの存在に気が付いたのか、フェイトの側に居た母親らしき女性はなのはの方を向き、近づいてきた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

にこやかにあいさつする女性に対して、すこしどもりながらもキチンと頭を下げ挨拶するのは。

「フェイトの母親のプレシア・テストロッサです。あなたが高町なのはさんね?」

「えっと、はい。そうです」

「あなたの事は娘から聞いているわ。ごめんなさいね」

自己紹介が終わるとすぐさま謝るプレシアになのはは驚き戸惑う。なぜプレシアに謝られたのかが理解できなかったのだ。

「え!? えっと、その……」

何を言えば良いのかわからず狼狽えるなのはが可愛らしかったのか、プレシアは少しだけ笑うと、なぜ謝った彼の理由を説明しだした。「あの子、フェイトがあなたにきつく当たっているでしょう? 今もああやってあなたを睨んで」

プレシアにそう言われ、少しだけ意識をフェイトに向けるとプレシアの言う通り、フェイトは先ほどと変わらぬ表情でなのはを睨んでいた。

特に顔が怖くなったとか、雰囲気が悪くなくなったなどと言う悪い変化は見られない。しかし、冷徹な表情はいつもなのはと対峙するときのフェイトそのものであり、良くなっているわけでも無い。

「それに、あなたの言う事も良く聞かないで戦ったりして、謝って済むことじゃないと思うけど、謝らせて頂戴」

「い、いえ、それは、その……私の方も、悪かった、事とかあったり、したり……」

何を言いたいのか定まらず、明瞭を得ないなのはの言い分を、取り敢えず受け止め微笑むプレシア。

「だから、あなたにはできればあの子と仲良くなって貰いたいのよ」「え?」

「あの子、フェイトは私の所為で友達がいなくてね。生まれてから今まで側に居たのは家族と家政婦だけ。だからそれ以外の人にどう接していいのかわからないの」

唐突に語りだしたフェイトの過去になのはは驚き、思い出してし

まった。昔の自分を。独りだった頃の幼い自分を。

「それどころか、私の所為で家族との時間も取れなくて……、だからずうずうしいお願いだとは分かっているのだけれど、フェイトと仲良くなつてほしいの」

今は過去のものとなったあの頃の自分。その時代を経験しているからこそ分かる、家族が側に居てくれなかった悲しみ。

この時なのは気づいた。なぜ自分があままでしてフェイトにこだわってしまったのかを。フェイトの事が知りたい、その思いだけでなのはフェイトに挑んでいた。今はフェイトに勝ちたいと言う思いもある。しかし、その最初の、なぜ『フェイトを知りたい』と思つてしまったのか、その原点。

出会つた瞬間自分の直感が訴えたのだろう。自分では理解できなかったが感覚の奥深く、直感を越えた部分で勘付いていたのだろう。

『フェイトが自分と似ている』事に。

同じ悲しみを知っているから。

それでも彼女は、フェイトは強かった。優しく、気高く、強かった。だから知りたかつたのだ、子猫に謝りながら攻撃をする彼女が、こちらを心配しているのか、否定したいのか明瞭としない彼女が。それらを併せ持つた彼女の全てが『氣になつていた』のだ。

同じようで違うから、なぜ違うのかを知りたかつた。彼女と自分に分かたれた原因が知りたかつたのだ。

「大丈夫ですよ」

それに気づいたなのは、プレシアを安心させるかのように笑つた。

「私、諦めてませんから。フェイトちゃんとお友達になる事」

朗らかに笑いながら宣言した。

*

「二人とも待たせてみたいですまない」

プレシアがなのはと話した後、結局フェイトはなのはとは一言も会話を交わさなかったが時間が時間だったのか直ぐにクロノが現れた。

「えっと、あなたが」

クロノは見知らぬ女性、プレシアを見る。そのクロノの視線に訝しむ思いを感じたのかプレシアは自分から頭を下げた。

「この子の母親のプレシア・テスタロッサです」

「ああ、すみません。クロノ・ハラウン、執務官です」

慌ててクロノも頭を下げながら自己紹介をする。名乗られた役職にプレシアは少し驚いたようにクロノを褒めた。

「あら、その年で執務官だなんて相当優秀なのね」

「いえ、自分はまだまだ未熟ですよ」

「過ぎた謙遜は嫌味に聞こえますわよ、執務官様」

嫌味たつぷりなプレシアの言葉にクロノは少しばかり顔をゆがめた後、その顔を隠すようにもう一度頭を下げた。

「それは申し訳ありません。ありがたく受け取らせていただきます」

外見だけ見ればなんて事の無い話し合いだが、その実は嫌味を含んだ大人の言いあい眼が白黒するなのはとフェイト。

フェイトなどは母親の意外な一面を見てことさら驚いている。

クロノはそんな二人に視線を動かすと強の本題を切り出した。

「それでは、早速になるが僕達の船に行こう」

「あ、はい」

「わかりました」

「それじゃあ僕のそばに寄ってきてくれ」

クロノの指示通りに集まる三人。三人ともが近寄ったことを確認

するとクロノは転移魔法を発動させた。

「さて、ようこそ次元航空戦艦『アースラ』へ」

転移の光が収まって見える光景は無機質な人工的な部屋。その光景がまさにSF映画の世界である所為か、なのはは少し目を輝かせて辺りを見回している。一方フェイトも初めて入る戦艦に興味があるのか辺りを見回しているが、なのはほど熱のこもった視線は送っていない。

「ここはあまり見ても何も面白くないと思うぞ。さあ、付いてきてくれ。艦長に合ってもらおうから」

「は、はいー」

「わかりました」

先を歩くクロノ連れられ歩く三人。なのはは未だ興味が尽きないのか辺りをキョロキョロ視線を移しながら付いて行くが、フェイトは変わらない光景に飽きたのかもうすでに辺りを見回す事はしていなかった。

「ああ、そうだ」

そうしてしばし歩いたところでクロノは何か思い当たったのか、急に足を止めるとなのはの方へ向き直った。

「先日から思っていたんだが、何時までその恰好で、と言うかそんな場所にいるんだ？ 君は」

「ふえ？」

クロノが言った事に思い当たらないのか頭を傾げるなのは。そんななのはを見てクロノは顔を横に振りながら言う。

「ああ、違う、君じゃない。君がしよってる鞆の中にいるんだろう？ あのフェレットもどき」

「え、あー」

なのははクロノにそう言われて初めて思い出したのか、家を出る前に鞆に詰めたユーノを慌てて取り出した。

「ごめんね！ ユーノくん」

「ああ、もうついてたのか」

慣れてしまったのかそれとも意外と凶太いのか、ユーノは今まで寝ていたらしくなのはに取り出されると前足で器用に頭を擦る。

「で？ いつまでその姿なんだ？ いい加減戻れるのだろう？」

そんなユーノに呆れながらもクロノが言った言葉にユーノははつと気が付いたように頷いた。

「ああ、そうだったね。ここ最近ずっとこの姿だったから忘れてたよ」
そう言うとなのは手の上から降り、光に包まれるユーノ。

「え？ え？ どういうこと？」

その光景の意味が分からず狼狽えるなのはを無視して、光に包まれたユーノは大きくなる。そして、光が消えるとそこにはなのはやフェイトと同年代の男の子が現れた。

金髪碧眼中性的、年齢や顔立ちも相まってか男の子と言うには少し可愛らしいが、男の子である。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかもね」

そんな『人間』に変わったユーノをなのはは震える手で指さしながら怖いしていた。

「どうしたの？ なのは」

なのはがなぜ震えているのか理解できないのかユーノは顔を傾けながらなのはに近づく。

「な、なななな」

「な？」

「なんでユーノくんが人間になってるのおおおおおおっ
?????!?!??」

そんななのはの大声がアースラに響き渡った。

*

「まったく、すっかりと説明をしておかないからこうなるんだ」

「ご、ごめんなのは。最初に出会った時はこっちの姿だったとばかり」

「? 君はあの子の使い魔じゃないの?」

「違うよ……」

「落ち着いたかしら? なのはちゃん」

「……すみません。ありがとうございますごきますフェイトちゃんのお母さん」

なのはが叫んだあと数分程なのはを落ち着かせたり、説明したりと無駄な時間があったが、その甲斐あってなのははユーノがフェレットでは無く人間である事実を受け止められたようだ。

むしろ今ユーノはなのはの使い魔だと思い込んでいたフェイトの誤解を解くのに疲れてしまっていた。

「あれ? でも君ってあの子達と一緒に温泉入ってたよね?」

「あー!」

フェイトの何気ない一言で収まっていたはずの場が騒然となる。

「え!?! なんでフェイトさんがその事を!?!」

「ほう、もしや僕は君を覗きの罪で検挙しなくちゃならないのかな?」

「ちよつと待ってよ! アレはなのは達が無理やり! 僕だって男湯の方に行きたかったさ!」

「ユーノくん。だったわね」

その話を聞いたプレシアが笑いながらユーノの後ろに立つ。

「は、はい」

「ちよつと、来てもらえるかしら?」

「はい」

プレシアの顔は誰がどう見ても笑顔だと言うのに、纏うオーラは全く微笑ましいものでは無く、直接向けられたユーノ以外の三人を竦みあがらせる程だった。

——あ、あれは怒ったお母さんと同等! フェイトちゃんのお母さんは化け物なの!?

——やばい、ああなった母さんは誰にも止められない。ご愁傷様……。

そんなプレシアを見てなのはとフェイトは失礼なことを考える。

「……………え？ ……はい。 ……ね」

なにやら離れた場所で話し合いを始めたプレシアとユーノ。まるでユーノは怒られている子供の用に下を向き縮こまってしまっている。

「え!?! あ、……………はい」

どんどんとプレシアの怒気が高まるのと共に涙目になるユーノ。

そのあまりにも哀れな光景が同情を誘ったのかフェイトは最近めつきり表に出る事が無くなったレヴィに相談した。

「(ねえレヴィ)」

「ん？ どうしたんだい?」

「(どうにか母さんをなだめられないかな?)」

「うーん。フェイトが上目使いで「止めて!」って言えば一発だと思うけど?」

「(そんなテキトーな)」

結局帰ってきたのは当てにならないアドバイスだけ。フェイトは落胆し肩を落としてしまう。

『いやいや、結構本気なんだけど。騙されたと思ってやってみなつて』

「(むー、ホント?)」

『ホントホント。「ゆるしてあげて!」って言えば大丈夫だつて』

このままではまだ見ぬアースラの艦長を待ち惚けにさせてしまうので、仕方なく意を決してプレシアに近づく。

「母さん」

「あら、どうしたの? フェイト」

フェイトが声をかけたことで今までの怒気を一瞬でひっこめ表情

通りの優しい雰囲気が変わるプレシア。

「もう時間もたっちゃってるしさ、彼、許してあげて？ ね？」

とりあえず母が落ち着いているうちにとレヴィに言われた通りに上目使いでプレシアにやめるよう頼む。

そんな可愛らしいフェイトを見た瞬間プレシアの動きが止まる。

「母さん？」

「はっ。……わかったわ。フェイトに免じて許してあげる」

「……あ、ありがとうございます」

気を取り戻して直ぐにユーノに許しを与えるプレシア。与えられたユーノは今までの恐怖から解放された喜びでか硬くつぶった目から涙が零れ落ちていた。

「……ありがとう。ありがとうございます」

あまりに感極まってしまい泣きながらフェイトに感謝するユーノ。そんなユーノにフェイトは少し引きながらも応えた。

「う、ううん。大丈夫だよ。それとフェイトで良いよ。同い年くらいだし」

「ううっ！ ありがとう！ ありがとう、フェイトお！」

「う、うん。わかったから、わかったから手離して……」

滂沱の涙を流しながらフェイトの手を掴み拝み倒すユーノをなんとか落ち着かせ、一行はやつと艦長室へと向かう事になった。

その時間約30分の出来事だった。

*

*

「ようこそ、アースラへ、歓迎いたしまわ」

一行がようやく艦長室に辿り着き、部屋に入ると同時に中にいた女

性、リンデイがそう声をかける。

「お邪魔します」

「初めまして、この子の、フェイトの母のプレシア・テスタロッサです」
「プレシアさんね。今日はよろしくお願いします。どうぞ、好きなの
ころにお座りください」

フェイトが律儀にお辞儀をし、それと同時にプレシアも自己紹介を
する。この部屋の異常を素通りして。

いや、異常だと感じられなかったのだろう。この中で異常だと感じ
られたのは、高町なのはただ一人。生粋の『日本人』である彼女だけ
だった。

——な、なななな、なんなのこの部屋!?

そんな異常を唯一感じ取れるなのは艦長室の光景に驚き戸惑っ
ていた。

それはそうだろう。SFの世界のような船の中、その最高権力者が
いるはずの艦長室で見慣れた物があったのだから。

そう、畳と座布団、茶器に鹿威しと言う純和風の出で立ちと言う、
『見慣れた物』だったのが問題だった。

なぜ室内に鹿威しが、とか色々突っ込みたい物が多いが、何より近
未来的な様相を期待したなのにとって、その光景は期待を斜め上に
突き抜けすぎてショックだった。

「どうした？ 君も好きなのところに座ると良い」

気づいたら一人入り口で取り残されクロノに心配される始末。

とりあえず、隠しきれない驚きを抱えたままなのはユーノの隣に
座る。

それを見るとクロノはリンデイの隣に座りやっど今日の目的であ
る事情聴取の体勢が整った。

「それでは、改めまして。本日は戦艦アースラにお越しいただきありがとうございます。この船の艦長を務めさせていただきます、リンディ・ハラオウンと申します。」

「フェイト・テスタロッサです」

「プレシア・テスタロッサです」

「あ、た高町なのはです！」

「ユーノ・スクライアです。スクライアは部族名なので僕の名前はユーノって事になります」

頭を下げるリンディに続きフェイト達も自己紹介と共に頭を下げる。

「それでは今回は第97管理外世界で起きているロストログリア事件の事についての事情聴取をさせていただきます。私と執務官のクロノ・ハラオウン。それと書記官としてエイミィ・リミエツタも同席させていただきますますが、よろしいですね？」

「はい」

リンディの事務的な確認作業にプレシアが答える。この辺りは大人の仕事だ。

「それじゃあ、お話を伺いましょう。まず、ロストログリア『ジュエルシード』についてなのですが……」

そう言ってリンディが話を進めようとすると、それをなのはがおずおずと申し訳なさそうに手を上げ遮った。

「あ、あのお、ろすとろぎあって、なんですか？ それとその、第なんちやら世界とか……」

「……ユーノ、君はちゃんと説明をしてないのか？」

なのはの言葉にクロノは半目になりながらユーノを見つめる。

「えっと、ユーノくんには、ジュエルシードを放っておいたら大変なことになる。って事位は説明してもらったんですけど……」

なのはのその言葉からは申し訳なさが伺え、本人も縮こまってしまっている。

「なのはさんは管理外世界の出身だから仕方ないわね。それじゃ最初から、世界の成り立ちからお話ししましょうか」

「よ、よろしくお願いします」

にこやかに笑いながら言ったリンデイに恥ずかしそうに言うのは。そうしてリンデイとクロノを中心に世界の説明と共に、ロストロギア、そしてなのは達がどれだけ危険な事をしてきたかの説明がなされた。

「と言うわけなのよ。それじゃあ本題に戻って、ジュエルシードの事なのだけど」

「それは、僕から」

そう言つて次はユーノが説明をしだす。自分が発見したロストロギアであること。管理局に護送を依頼したが断られ、結局自分たちで運ぶことにした事。途中で事故が起こり輸送船が壊れ荷物であったジュエルシードが97管理外世界、その中の日本海鳴市にばらまかれてしまった事、その時の事故の衝撃で封印が弱まっている事。

そして責任を感じ自分が回収し直すために日本へ来たが、魔力素の相性が悪く苦戦し結局現地で強力な魔力を持ったなのはに頼ってしまった事。

それら全てを嘘偽りなく、事実だけを簡潔に説明した。

「なるほど、責任を感じてと言う事ね」

「はい」

「それは立派ね」

「だが、無謀だ」

ユーノが行った行動を褒めると共に窘めるリンデイとクロノ。その事にユーノは少し落ち込んでしまい、隣に座っているのははどうかユーノの事を擁護しようと口を開こうとした――

「ですが」
――が、それはリンデイの言葉でできなかつた。

「あなたのような子供にそのような決断をさせてしまったのも我々管理局の落ち度。謝罪させてください」

リンデイはそう言っつてユーノに頭を下げた。

「そ、そんな！ リンデイさんが謝る必要は……」

「そうかもしれないが、部署が違つてもそれは管理局の判断だ。その所為で君を、君たちを危険な目に合わせる事になってしまった。それは許される事では無い。だから、この通りだ」

そう言っつてクロノも頭を下げる。

純和風、畳の上で正座で話し合っているために、その行為は所謂土下座の状態となつてしまつている。そこまでの深い謝罪にユーノはどうすれば返せばいいのかわからず、慌ててしまつていた。

「わ、わかりました！ わかりましたから頭を上げてください！」

ユーノが何か言うまで頭を上げる気が無い二人に慌て、つい大声を出してしまうユーノ。しかしその声でリンデイとクロノは下げた頭を上げ直した。

「ありがとうございます。今後このような事が無いよう、極力努力いたします」

「それじゃあ、次は君たち二人、なのはとフェイトの話なのだ」

ユーノの話は一段落し、話題はなのはとフェイトの話題に移る。

最初になのはの話を聞き、次にフェイトの話を聞く。それらを統合すると以下のようになる。

なのはの証言

ある日不思議な夢を見、それがユーノとジュエルシードの投影体の戦闘であつた。翌日頭に響く声（念話）に導かれ進むとフレットとなつたユーノを発見、怪我をしていたので病院に運んだ。

同日夜、同じ声が聞こえ向かうとジュエルシードの投影体が暴れており、ユーノの言う通りにレイジングハートをセットアップし撃退。

これを封印した。

以後、なのは自身からユーノの手助けをすることを進言、ジュエルシードを封印してきたがある日フェイトと遭遇、交戦に入り撃墜される。

以後何度かフェイトと出会い、対話の機会もあつたがお互いの意見の不一致により2度交戦した。

フェイト・プレシアの証言

家族で旅行に第97管理外世界に到来、教育、科学力共に水準が高く、平和である日本に腰を落ち着ける予定だったが、ある日強大な魔力反応を感知。現場に向かうと魔法文化の有る筈の無いこの世界でミッドチルダ式の結界魔法を発見。内部で管理局員と次元犯罪者の交戦があるのかと思つたがそんなことは無く、いたのは一人の魔導師（高町なのは）のみ。

忠告をしたがこれを聞かず止む無く交戦、これを撃墜。この時に管理局に通報を入れた。

その後も旅行中にジュエルシードを感知し、封印したところ高町なのはと遭遇。この件から手を引くように忠告するが高町なのははこれを固辞、交戦に入り撃墜。

そして先日もジュエルシードを感知し高町なのはと三度目の遭遇。今度は高町なのはが襲つてきたのでこれを撃墜。

大雑把にまとめるとこうなる。

「な、なるほど……」

「……」

二人の話を聞き終えたリンディはなんと言えば良いのかわからず、曖昧な言葉しか言えなかった。隣のクロノなんて頭痛がするのかわからず、つむいて眉間を揉んでいる。

「……そ、そうねえ。お二人の言い分はわかりました。わかりました、が！」

語尾を強く言いながらフェイトに強い視線を送るリンディ。

「フェイトさん。確かに管理外世界に高い魔力を持った魔導師、それもインテリジェントデバイスを持った魔導師がいるのは怪しいでしょう。ですが、それでろくに話も聞かずに撃墜する事は良いこととは思えません」

「……はい」

「それに、二度目の時もなのはさんに手を引いて貰いたかったら、キツく当たるのではなく、きちんと話せばなのはさんも分かってくれたのではなくて？ それをせず安易に戦闘行為に走るのはそれはただの暴力です。良いですか？」

「はい、すみません……」

リンディの説教に反論も無く縮こまるフェイト。そのフェイトを見ると、リンディは次になのはの方に視線を動かした。

「次になのはさん！」

「は、はい！」

「確かに始まりはフェイトさんの一方的な攻撃からだったかもしれませんが、2度目はなのはさんもフェイトさんも、お互いが口喧嘩で熱くなりすぎてそれで戦闘になったと解釈しました」

「は、はい」

「あなた達の年で冷静になれ、と言うのは難しいかもしれませんが、それで直ぐに戦闘行為に走るのはいいとは言えません。それに三度目はなのはさんから戦闘を仕掛けていましたね。もう少し話し合う姿勢を見せるべきだったのではなくて？」

「うう、すみません」

「三度目の戦闘の光景は勝手ながら見させてもらいましたが、はつきり言って二人ともやりすぎです！」

「す、すみません」

「ごめんなさい」

リンディの剣幕に萎れるのはとフェイト。言いたい事を言い終

わり、二人が反省していると感じたのか、リンディは一息つくど、それまでの怒気を収め初めのような穏やかな雰囲気に戻った。

「とにかく、二人とも今回の件でお互いの誤解も解けたでしょうし、反省するようにしてください。良いですね?」

「はい」

「わかりました」

「それじゃあお互いに謝罪して今までの事は水に流しましょう?」

「……」

「……」

リンディに諭されお互いに見つめ合うのはとフェイト。なのはもフェイトもどことなく目を合わせづらいがリンディの言う事も最もなので意を決して頭を下げる。

『ごめんなさい』

その声は見事に一致し二人同時に頭を下げた。

「はい! それじゃあこの話はこれでおしまいにしましょう」

それを見届けにこやかになるリンディ。それにつられ緊張感が漂っていた場の雰囲気も和やかなものになる。

「それじゃあ、今後の事についてだが……」

空気が変わった事を切っ掛けにクロノが話を切り出す。

その言葉にリンディは一つ頷くと言葉の続きを継いだ。

「この件はこれより管理局が責任を持ちます。なのであなた達は普通の生活に戻ってかまいません」

「え?!」

リンディの言葉に反応したのはなのはだけだった。もともとユーノは管理局に頼むことが良いと考えており、リンディの言う事は最もだと思っていた。

フェイトやプレシアはもとよりこの世界には魔法やロストロギアなど関係なく訪れただけであり、ジュエルシードは放っておくと危険だと判断したため仕方なく関わっていた部分があった。

故にこの申し出は管理局の業務として当然であり、本人たちとしても願っても居ない事であった。

しかし、なのはは違った。なのは本来の責任感の強さと頑固さ、それは一度決めた『ジュエルシードを集める』と言う目標を途中で終わらせてしまう事に難色を示した。それに加え、なのはが見つけた『魔法』と言う手段。それを振るう場を取り上げられてしまう事を無意識に恐れてしまったのだ。

「あ、あの」

なにか言いかけるなのはの機先をクロノが遮る。

「君たち一般人にこれ以上危険なまねはさせられない。今後は僕達に任せて、この事は忘れて『普通』の生活に戻った方が良い」

クロノの言う『普通』。それがなのはは最も恐れていた事だった。やっと見つけた打ち込める事。自分が他人に誇れる事。それが『魔法』。その魔法を忘れ、『普通』に戻ってしまえばまたなのはは昔のなのはに戻ってしまう。自分に自信が持てず、日々を無為に過ごしていたあの『弱いなのは』に戻ってしまう気がしてしまった。そうになってしまう事がとてつもなく恐ろしかった。

「あの、手伝っちゃ、ダメですか？」

だからなのはは怒られることを覚悟してそう提案した。

どうしても『普通』には戻りたくなかった。今の『強いなのは』になれた魔法を捨てたくなかった。忘れたくなかった。

たとえそれが他の何かを失うことになっても。

今のなのはは無意識にでも『魔法』に縋っていたかった。

「しかし、僕達管理局が来た以上君たちに任せるわけにはいかない」

「だから、そのお手伝いを……」

「危険な目に合うかもしれないんだ。そんな事を許せるはずがないだろう」

「だけど」

クロノの言い分を聞かず食い下がるなのは。フェイトはそんなのはを訝しむ目で見ていた。

「わかりました」

なのはとクロノの言いあいをリンデイの言葉が止める。

「なのはさん。今日は保留にして、よく考えてみてください。私達はその考えを尊重しましょう」

「艦長！」

リンデイの申し出になのはは喜び、クロノは驚いた様子でリンデイに向かつて声を荒げる。

「なのはさんはこう言っていますが、フェイトさんはどうしますか？」

クロノを無視しフェイトへと話しかけるリンデイ。その問いにフェイトは

「あなた達にお任せします」

そう、きつぱりと答えた。

「え？ どうして？」

そのフェイトの言葉に今度はなのはが信じられないかと言うような表情で驚いていた。

「私は別にジュエルシードに用は無い。必要だったから集めてただけ、私がやらなきや危険だと、そう判断したからジュエルシードを封印してただけだから」

「で、でも、フェイトちゃんあんなに強いのに……」

「強さは関係ない。それに強いならその執務官は私より強いはず。何も問題は無いでしょ？」

「でもー」

「あなたがどう思おうと関係ないけど。私はこの世界にジュエルシードを集めに来たわけじゃない。母さんと、姉さんと、家族と『普通』に暮らす為に来た。それだけ」

食い下がるなのはに言い放ったフェイトのその言葉に、なのはは信

じられないとでも言うように、ただただ口を開くだけだった。

「だから、集めたジュエルシードもお渡しします。……良いよね？
母さん」

「ええ。大丈夫よ」

「わかりました。それでは、ジュエルシードはこちらでお預かりしましょう」

フェイトの言葉にリンデイは頷くが一向に場にジュエルシードは現れない。

「？ 母さん？」

「あら、タダで渡す気は無いわよ？」

ジュエルシードを保管している筈のプレシアが出さないので、母を見るフェイト。その視線にジュエルシードが出てくることを皆が待っているのだと気づいたプレシアはそう言った。

「な！ ロストロギアの不当所持は違法だぞ！」

「あら、私は別に渡したくない訳じゃないわ。ただ、それをあなた達管理局がタダで受け取ろうとするのが気に食わないだけよ。この世界の警察、管理局のような組織も落ちたお金を届けたらその金額の1割を報酬としてくれるそうよ？」

私たちは旅行に来たらこんなことに巻き込まれたのよ。謝罪だけじゃなく、あなた達の『誠意』を見せてもらいたいわね」

クロノの言葉にプレシアは嫌味たっぷりに言い放った。もともと管理局が来たらこの交渉をするつもりであったし、フェイトに言い聞かせてたのもプレシアがジュエルシードを管理していたのも全てこのためだ。

「わかりました、フェイトさんとなのはさん、それにユーノくんには後ほど謝礼をすることにします。その事の交渉はまた後日でよろしいでしょうか？」

とりあえずこの場を収めるためにプレシアの言い分をのむリンデイ。

「ええ。良いわよ」

この後は大人同士の話し合いが必要であり、子供がいる場でする事では無いと判断した二人はひとまず、ジユエルシードの受け渡しを保留とした。

「それでは、今日聞きたい事は大体伺いました。なのはさんは自分がどう思っているのかよく考えて、明日でもそれ以降でも良いわ。あなたの決断を聞かせて頂戴。フェイトさんはありがとうございます。お母さんと良く話し合って、後日満足のいく謝礼をさせていただきます」

「はい」

「……」

「それでは、今日はここまでとしましょう。クロノ、送ってあげて」
「……わかりました」

リンデイのその言葉でアースラでの事情聴取は終わった。

*

海鳴臨海公園展望台。昼に集まった場所であり、転移魔法で帰ってくればもう時は夕暮れ、太陽が落ちかけている時間であった。

「それじゃあ、ボクはこれで」

4人を転移魔法で送ったクロノはそう言うのと再度転移魔法を発動しアースラへと帰っていく。

後に残された4人の間には何とも言えない空気が漂っていた。

「それじゃあ母さん、帰ろう」

「……ええ、そうね」

最初に口を開いたのはフェイトであり、フェイトはプレシアにそう

言うと一緒に歩き出す。

「ま、待って！」

そんなフェイトをなのはが呼び止める。

「ね、ねえフェイトちゃん」

「あなたは」

「え？」

呼び止めたなのはが何かを言う前になのはに背を向けたまま、フェイトがなのはに言う。

「あなたは、なぜそこまで魔法にこだわるの？」

それはフェイトの疑問。常に会うたび言った「手を引け」と。しかしなのははそれを固辞してきた。故にフェイトは気になっていた。なのはが魔法にこだわる理由を。

「わ、私は、魔法に出会えて、ユーノくんを助ける事が出来て、これなら、魔法なら人の役に立てるんだって思って、それで」

「それが、自分を傷つける事になっても？」

「だって、私がやらなきゃ」

「もう管理局が来た。あなたはやらなくていい。それでもなぜ管理局の手伝いまでしようとして、魔法に関わろうとするの？」

「それは、私は『弱い』から……。でも、魔法があれば私は『強く』なれるから、だから」
「そう」

そう言ったなのはの魔法にこだわる理由はフェイトには理解できない物だった。故に再確認した。フェイトはなのはが気に食わないのだと。自分を傷つけてでも、*“普通”*に戻る事を拒否する彼女が。

「あの、フェイトちゃん」

「なに？」

「一緒に、ジュエルシード集めよ？」

なのははフェイトと共に居たかった。もっと一緒にいてお互いを知りたかった。だから一緒にいられる同じ目標を持って進める、ジュ

エルシード集めに誘った。

「私は『普通』になる為にこの世界に来たの。ジュエルシードの所為で延期してたけど今度からここの学校にも通う」

「え？」

「私は、あなたが嫌っている『普通』を満喫するためにこの世界へ来たの。だから、ジュエルシードには、もう関わらない」

「……………」

「バイバイ」

黙るなのは置いてフェイトは歩き出す。プレシアも何かを言いたそうにしていたが何も言わず、黙ってフェイトと共に帰路に付いた。

茫然とフェイトを見送るなのは。

フェイトの言い残した言葉に衝撃を受けていた。

——わたしは、『普通』を嫌ってる…………

そうなのかもしれない。普通に過ぎゆく時間が嫌だった。普通の世界で何もできない自分が嫌だった。

そんな中『特別』に、魔法に出会ってしまった。

この世界で魔法が使えると言う特別に、普通とは違う非日常に、なのは気づいていなかった。自分がジュエルシードを集めていたのは魔法が使える使命感でも、自分だけが魔法が使える責任感でもない。

——魔法と言う非日常を、『普通』ではない世界を楽しんでいたのだと。

その事をフェイトに突き付けられてしまった。必死に言い訳をして、必死に覆い隠してきた事を、遂に暴かれてしまった。

「なのは？」

フェイトの姿が見えなくなっても固まったままにいるなのはをユーノが心配して声をかけてくる。

「え、あ、うん。なに？ ユーノくん」

「ボク達も帰ろう？」

そう言いながらユーノはフェレットに戻りなのはの肩へと駆け上がる。

「な、なのは!？」

そんなユーノをなのはは胸に押し付けるように抱きしめた。

「ど、どうしたんだい？」

「ごめん、帰るまで、このままで」

なのはの様子がおかしいことに気付いたユーノはその言葉に頷き、黙ってされるがままで居た。

——私は、どうしたら良いの？

“日常”と“非日常”

どちらが良いのか、なのははどちらに居たいのか。

フェイトは明確に宣言した、“普通”を選んだ。

——私は、どっちが良いんだろう……。

なのはの胸中は家に帰るまで、いや、家に帰ってからもその疑問で埋め尽くされていた。

—— 3度出会い、引かれ合い、出会う度にぶつかって、弾きあつてきた少女二人の思いは、ついにこの瞬間、ぶつかることなくすれ違い、そしてそのまま離れて行った——

第5話 初めての学校、望んだ普通 — 1

「それでは、今日は皆さんに新しいお友達を紹介しま〜す」

フェイト達がアースラで事情聴取を受けてから数日後の平日。私立聖祥大学付属小学校のある教室では、いつも通り始まるかと思われていた朝は、担任のその言葉からいつもとは違う一日を刻み始めていた。

「それじゃあ二人とも、入ってきて良いですよ〜」

担任のその言葉の後教室に入ってきたのは、瓜二つの二人の少女だった。

二人とも金髪に赤い目、顔立ちも似ているどころかほぼ同じ、違う事は髪を結んでいるリボンの色と髪型、そして背丈位であった。

先に入ってきた背丈が小さい方はツインテールであるのだが、全ての髪を纏めている訳では無く後ろ髪の大体は流している。

顔立ちからは不安よりこれからの事への期待がありありと見え、その様子から明るそうな娘なのだと予想できる。

彼女は担任に促され、明るい声で自己紹介した。

「アリシア・テストアロツサです！ 皆よりちよつと年上だけど、いろんな事情により妹のフェイトと同じ学年に通う事になりました！ よろしく願います！」

そう言うで一礼して一歩下がるアリシア。聞き取りやすく明るいその声は男子女子問わず、好印象を与えた。

そうしてクラス中の視線はもう1人の転校生に移る。

もう1人はアリシアより少しだけ背が高く、髪型は完全なツインテール。アリシアとは対照的にその様子は不安気であり、気が弱いのか恥ずかしがり屋なのか、クラス中の視線に耐えきれず、肩を竦め、顔をうつむかせてしまっている。

それでも、後ろのアリシアが小声でエールを送ると、意を決したのか顔を上げ自己紹介した。

「フ、フェイト・テストタロツサです。えっと、その、よろしくお願いします」

最後の方は声が小さくなってしまったが、なんとかそれだけ言い切り頭を下げる。

その小動物的可愛らしさや守ってやりたくなる雰囲気クラス、特に男子は湧いた。

「は〜い。静かに、テストタロツサさん達の席は一番後ろの空いてる席二つで、おねがいします」

担任に言われその通りに新たに設置されたと思われる飛び出た席に並んで座る。

「はい、それじゃあ今朝のHRでは特に喋ることは無いので、このままアリシアさんやフェイトさんへの挨拶の時間とします。あまり騒がず、1時間目に遅れないよう気を付けてくださいね〜」

アリシア達が座った事を確認すると担任はそう言っ教室から出て行ってしまった。

*

担任が出て行くのを確認すると教室中はアリシア達の周りに群がり、質問攻めを始めた。

「あ、あわわわわ……」

「え、えっとね、その」

多数の人からの質問攻めにフェイトは誰にどう応えていいかわからず、ただただ慌てるだけになってしまい、アリシアの方は何人かに応えようとしているが、それでも間に合っていない。

「Be quiet!」

そんな騒然とした教室に決して大きくは無いが教室中を通る声が発せられた。

その声を発したのは一人の少女、フェイト達程の煌びやかな金髪ではないが、彼女も金髪であり、綺麗な碧眼の目は釣りあがり、腕を組

んで仁王立ちするその姿からは威圧感すら感じる程。

「そんないつぺんに質問攻めにして！ 二人とも困っているじゃない！」

その威圧感に押され静かになるクラスメイトたちを見て怒鳴った少女、アリサ・バニングスはさっそく指示を出し始めた。

「ほら、どつちに質問したいのか決めたら2列に並びなさい！ それから自分の名前を言った後に質問する！」

アリサがそう指示を出すとクラスメイト達は自然と1人、また1人と列をなし、並び始めた。

それを見て満足したのかアリサは一つ頷くとアリシア達の方に向かい頭を下げた。

「ごめんなさいね二人とも。転校生は珍しいから皆テンションが上がっちゃって」

「アリサ？ アリサじゃない!？」

そう言っって頭を下げたアリサの事をアリシアは思い出したのか驚いたように声を上げる。そんなアリシアに快活な笑みを浮かべるとアリサはそのまま側のフェイトに向き直り、あいさつした。

「ええ。久しぶりねアリシア。それから、フェイトだったわね。私はアリサ。アリサ・バニングスよ。アリサで良いわ。これからよろしくね」

「う、うん。フェイト・テストロッサです。その、よろしく」

「ええ！ よろしく！」

そう言っってアリサは右手を差し出す。

「？」

その手を不思議そうに見つめるフェイト。

「握手よ、握手。これからよろしくって意味。親愛の証よ！」

「そ、そうなんだ……。じゃあ」

アリサにそう言われ、おずおずとその手を握るフェイト。

「よろしく、アリサ」

そう言っってアリサとフェイトは二人して笑いあった。

「それじゃ、時間も少ないしさっさと自己紹介と質問をする！」

そんなクラスを取り締まるアリサの言葉と共に、まるでアイドルの握手会の様に質問と自己紹介が始まり、それは1時間目の授業が開始しかけるまで続いた。

*

「へー。それでここにねえ」

動物園のパンダのような扱いを都合4回程受け、やっと来た昼休み。アリシアとフェイトの二人はアリサとすずかに引き連れられ、屋上で一緒に弁当を食べていた。

「うん。今まではリニス、……家政婦の人に教わってたんだけど、私も元気になったからつてお母さんが学校に行こうつて言いだしてね」

そうしてアリシアはなぜ海鳴に來たのかの事情を話していた。勿論、魔法や異世界の事などは抜き、ある程度の嘘と真実を織り交ぜたカバーストーリーであるが。

「わあ、フェイトちゃん達のお弁当綺麗だねえ」

「うん、リニスが作ってくれたんだ。それにすずかのも凄いや」

「えへへ、私のも家のメイドさんが作ってくれてるんだ」

フェイトは同じ大人し目の性格であるすずかと意気投合したのか、お互いの弁当の内容で盛り上がっている。

「それで、温泉に一緒に來てたあの子は？ どうしたのよ？」

「あ、それ私も気になってた！」

そうして盛り上がっていると、アリサの放った疑問にすずかがのり、話題はアリシアと一緒に温泉に入っており、フェイトによく似た少女、レヴィの話題になっていた。

「えっと、レヴィはね」

「レヴィは姉妹じゃなくて従妹なんだ。あの時は一緒に旅行に來てたけど、レヴィはもう向うに帰っちゃったから」

「ああ、だからレヴィは『姉妹は居ないなんて言ったのね』」
「う、うん」

アリサの質問に答えたのはレヴィがもしもの時の為に考えたカバーストーリー。先ほどとは違い嘘に塗れた言い訳。しかし、フェイト達の事情を知らないアリサ達は疑う事もなく、その話を真実として受け止める。

「あ、そ、そうだ！ アリサの方は？ もう1人いたよね？」

とりあえず、話題をそらそうとアリシアは今この場に居ないもう1人、高町なのはの話題を出す。

「ああ、なのはの事？」
「うん」

「フェイトちゃんは会った事無いよね、もう1人私達と仲の良い友達に高町なのはって子が居るんだけどね」

すずかたちとは初対面（という事になっている）フェイトの為にすずかがフォローしてなのはの事を知らせる。

「まあ、なんか一昨日から家庭の事情？ だかなんだかで、学校に来れなくなっちゃったみたいなのよ」

「そ、そうなの？」

「あ、別に病気とかじゃないみたいなんだけど、ただ忙しくてしばらく学校に来れないから、って」

アリサの言葉にすずかが補足をする。

その言葉を聞き、事情を知っているフェイトは顔をうつむかせてしまふ。

「まあ、なのはの事だからいつかひよっこり帰ってくるわよ」

「なのはちゃんが学校来たら紹介するね。きっとフェイトちゃん達も仲良くなれると思うし」

「え、う、うん」

なのはと決別し“日常”を選んだ筈なのに、なんの縁かここでもなのはの影がフェイトの前にちらつく。

ぶつかり合っていた頃より一層、なのはが「日常」を捨てたのだと
感じさせる程強く。その影はフェイトに何とも言えない苛立ちすら
感じさせていた。

——こんな、「友達」がいてくれるのに……。

なにが不満なのか、フェイトには理解できなかった。

「あ、ああ！ そうそう、二人とも今日の放課後暇？」

なのはの話題を出した途端に、暗くなってしまったフェイトに気付
いた三人、特にアリサは持ち前の面倒見の良さから話題を変えるため
に少し大きな音で手を鳴らし喋る。

「え、あ、うん。特に何も用事は無いけど。ね？ フェイト」

それに合わせアリシアも考え込んでしまっているフェイトに話を
振る。

「え？ うん」

「そう！ それなら私の家に遊びに来ない？ こっちのゲームとかも
いっぱいあるし、お茶するだけでも良いし！」

「あ、良いね、それ。二人の歓迎会？」

「そうね！ ちょっと小規模だけど私達だけでも早めにやつちやいま
しよ！」

アリサの提案にすずかは手のひらを合わせ、にこやかに賛同する。

「どう？」

「え、っと」

アリサの提案にアリシアとフェイトは困惑してしまい、どう返答し
ていいかわからなくなってしまう。

当然ながら二人とも「友達」と言える他人は初めてであり、友達の
家に遊びに行くなんてイベントは初めてどころか、予想すらしていな
かった。

「えっと、お母さんに聞いてみないと、その、わかんない」

結局アリシアがそう答える。

「そう！ じゃあ、携帯は持つてる？ 持っていないなら一度家に帰っ

その後、大丈夫そうなら連絡してくれば、迎えに行くけど」

その答えにアリサは頷きながら提案を出し続ける。その、少し強行な態度にフェイトはどう対応すればいいかわからず慌ててしまい、漫画やアニメだったら目が渦巻のようになって回っていたかもしれない。

「ほら、アリサちゃん、二人とも困ってるから少し落ち着いて〜」

そんなフェイト達の様子に気づき、テンションの上がっているアリサをさすがが窘める。

「ああ、そうね。ごめんなさい」

「え、うん。えっと携帯、だったよね」

すずかに窘められ落ち着いたのか、浮いてしまっていた腰を落ち着かせると謝るアリサに、困惑しながらも、言われた事を確認するアリシア。

「ええ。持ってる?」

「うん、えっと、コレでしょ?」

そう言っつて制服のポケットからごく一般的な携帯を取り出すアリシア。フェイト達には必要ないが、アリシアは自分から念話を送る事が出来ない為、地球に来て早々にアリシア用と、それと連絡を取るためプレシア用に買っつておいた物の片方だった。

因みにアリシアのは一般的な形であるが、電話しかできない、所謂子供携帯である。

「んじゃあ、今から家に連絡するね」

そう言っつてアリシアは席を立ち、少し離れた場所で家に電話をかける。

『もしもし、テストロッサです』

数コールの後、電話に出たのは澄んだ声の若い女性。リニスだった。

「あ、リニス? ママ居る?」

『アリシアですか。今プレシアは向うで研究中なんですが、呼びましようか?』

「ああ、ならリニスから伝えてくれれば」

『そうですか、わかりました。それで？ どうしましたか？』

「えっと、今日帰るの遅くなるけど良いかなあ、って。友達が家に誘ってくれてね。それで遊びに行きたいんだけど……」

『まあ！ それはそれは。わかりました、プレシアには私の方から言っておくので気にせず遊んできてください。でも夕食までには帰ってきてくださいね』

「うん！ 大丈夫！」

『それじゃあ頑張ってください』

「はーい。じゃあねー」

「良いって！」

通話が終わり、戻ってくるなり興奮した様子で許可を得れた事を報告するアリシア。

「そう！ じゃあ車を迎えに来させるから、学校終わってから少し待ってもらおうかもしれないけど、よろしくね！」

「うん！」

「わかった」

アリシアの報告を聞き、朗らかに笑うアリサに釣られ、アリシアも笑顔を浮かべ、フェイトも少しだけ微笑んだ。

「ほら、三人とも。そろそろ昼休み終わっちゃうよー」

いつの間に片付け終えたのか、そんな三人に屋上の入り口から声をかけるすずか。彼女の隙を突いた行動に目をはためかせながらも、三人は慌てて弁当を片付け先行くすずかに追いつかんと、早足で追いかけて始めた。

第5話 初めての学校、望んだ普通 — 2

「うわあ、アリサってお金持ち？」

放課後、アリサに言われた通り迎えが来るまで待ち、そしてアリサの言う迎えを目にしたアリシアは、驚きながらそんな事を呟いた。

「んー、まあそうなるわね」

アリサはそんなアリシア達の驚きに慣れているのか、特に感慨も無くアリシアの言葉を流した。

「すごい、ふかふか……」

フェイトも迎えの車に備え付けられている椅子の座り心地に心を奪われており、しきりにシートを手で押している。

「鮫島、出してちょうだい」

アリサがそう言うのと少女4人を乗せた高級車は音も振動もなく動き始めた。

「うわあ、すごいね。全然揺れないよ」

「うん、旅行の時借りた車はもつとすごかったよね」

アリシアとフェイトはお互いが知っている唯一の比較対象であるレンタカーを話題にさすが、もちろんレンタカーは安物な上、古いので比べる事すらおこがましいのであるが、その言葉にアリサもフォローをする。

「さすがに山道じゃここまで揺れないなんて事は無いわよ」

「それに、これに驚いてたらアリサちゃんのお家に付いたらもつとびっくりするよー？ アリサちゃんの家凄い大きいから」

「何言ってるのよ。さすがの家も相当じゃない！ それにさすがのお家は由緒正しい家なんですよ？ 家みたいな成り上がりとは違うんじゃないの？」

「そんなことないよ。古いだけでさすがに『バニングス』には敵わないよ」

さすがの言葉に噛みつくアリサ。二人の何ともレベルの高い言い争いに、フェイトもアリシアも驚きを通り過ぎて呆れてしまってい

る。

*

「お嬢様、到着しました」

その後もお互いの家族についての雑談をしていると、目的地―バニングス邸―に到着したのか、運転手であるアリサが鮫島と呼んだ老齡の執事が声をかける。

「あら、じゃあ降りましょ。あまり期待しないでよね」

一言良い残り一番に降りるアリサに引き続き、残りの三人も車から降りる。

『おお〜』

降りた二人は『地球に来てから』はほとんど目にしない豪邸に感慨深い声をあげるが、すずかは慣れているのか特に反応を見せずにアリサに付いて行く。

「二人ともー。早く行くわよー」

アリサの掛け声に合わせて家に入る4人。

「お、おお〜?」

家に入った途端にアリシアが、何やら名状し難い声を上げる。

「ん? どうしたの?」

当然アリサはそんなアリシアを不審に思い、後ろに振り向きながら声をかけるが、それには首を振りながらなんでもないと告げる。

「アリシア、どうしたの?」

「え、うん。そのお」

フエイトの心配そうな声にも明瞭を得ない返答をするアリシア。

「ちよつと、どうしたのよ」

不審に思い、アリシアの側によりながら声をかけるアリサ。

そんなアリサに対してアリシアは申し訳なく思いながらも言った。

「えつと、思ったより狭いなくって」

たははは、と乾いた笑いをしながら頬を掻くアリシア。

そんなアリシアが言い放った言葉に驚いたのか、アリサは目と口を大きく開いている。後ろのすずかも目を大きく開き、口元を隠すように手を口へ持つて行っている。

対してフェイトはアリシアの感想に得心が行ったのか、納得した表情で再度辺りを見回している。

「ああ、確かにちよつと狭いかもね」

「は、はあく!? 確かに期待しないでって言ったけど、家が狭いってどんだけ広い家に住んでんのよ!」

フェイトからも放たれた言葉に、つい大声で返してしまうアリサ。その大声に驚いたのかフェイトの体が跳ねる。

「あははく、ごめんって〜」

頬を掻きながら何とも気の抜けた声で謝るアリシアに呆れ、ため息を吐きながらも冷静になったアリサは、少しだけ声のトーンを落とした。

「家で狭いとか、アンタたちの家に興味がわいたわよ。いったいどんなお城に住んでるんだか……」

「今度見てみたいなく」

やれやれ、と言いたげに頭を振りながら言うアリサに追隨するように、すずかも興味を持ったことを伝える。

「あく、いやー。こっちの家は多分普通の集合住宅なんだけど」

「うん、その、向こうの家がね……」

申し訳なきように言うアリシアに、なにやら言いにくそうなフェイト。

「へく。向こうのお家が凄いんだ〜」

「まあ、良いわ。とりあえず廊下じやなんだし部屋に行きましょう。落ち着いたら色々話してもらえるからね!」

腰に手を当てながら強気なアリサに押され、取り敢えず首を縦に振るアリシアとフェイト。そんな二人を見て満足したのか、アリサも一つ頷くと踵を介してまた歩き始めた。

*

「ふくん、なるほどねえ」

「はわあ、ホントにお城に住んでたんだあ」

「ま、まあ古い上に周りには何もなかったけどねえ」

「うん。山と森だけだったよね」

アリサに通された部屋のソファに座り、メイドさんが出してくれたお茶を飲んで一息ついた一行は、アリサの宣言通りアリシア達の『向こう』の家について話していた。

想定していない話題の為、急遽フェイトがレヴィと相談したのだが『世界丸々が敷地である』事を除いて特に隠すことはしない方針で行くことにしたのだ。

「へえ。アンタたちってなんか由緒正しいお家柄だったりするわけ？」

「んにや、そんなことない、と思う」

「家は母さんが仕事の関係で貰った、とかなんとかって理由だったと思う」

「仕事の関係でお城貰えるって、どんな仕事なのよそれ……」

アリシアとフェイトの話すともんでもない内容に、驚くことすら疲れしてしまったアリサは、ただただ肩を下げため息をつく事しかできていない。

「アリシアちゃん達のお母さん調べたら出てきたりして」

「あー、それは絶対ないと思うよ」

冗談なのか本気なのか判断付かない様子のすずかの言葉に、出されたジュースをストローで飲みながらアリシアが否定する。

「ホントかしら？ 家のパパですら出てくるのよ？ お城貰えるような仕事してる人ならもつと簡単に探せるんじゃない？」

「アリサのお父さんって有名な社長さんなんでしょ？ それなら簡単なんじゃない？」

自分の父を比較対象に出すアリサに、今までの話からアリサの父が

相当の有名人だと判断したフェイトはその言葉を否定する。

「いや、そうだけど、アンタ達のお母さんもそうなんじゃないの？」

「んー、お母さんの仕事って詳しくは知らないけど、研究者って奴だから、そんな事無いと思うよ？」

気の抜けたアリシアの返答に、それもそうかと納得したのか、アリスもさすがもそれ以上話題を深める事はしなかった。

「さ、それじゃ、何して遊びましょうか？」

話題も一段落したのでアリスがこの後の行動を訪ねると、アリシアが元気よく手を挙げた。

「はいはい。ゲームがしたいですー！」

「そう！　　すぐかとフェイトもそれで良い？」

「うん。大丈夫だよ」

「うん。私も興味あるから」

「それじゃあ、ゲーム引つ張り出すから少し待ってて頂戴！」

全員の返事を聞くと、アリスは席を立ち部屋に設置されたテレビの横にある棚を漁りだす。

そこから出てくる出てくる、ゲーム機及びそれに関する物が。

「なにか要望はある？」

とりあえず、持っているハードとそれに関する機器を取り出して、次に肝心のソフトの入っている段を漁ろう、と言う所で三人の方へ向きどんなゲームがやりたいか聞く。

「よくわからないからお任せで！」

「私もそれで」

「私も何でもいいよ」

「それが一番困るのよね」

三人の意見は「アリサに任せる」だったので苦笑いを浮かべながらも、なるべく皆で遊べそうなものを選ぶ。

——とりあえず、鉄板はパーティゲーム物かなあ。中に入ってるゲームも色々種類あるし。あとはパズル系と、レース物。これくらいあれば大丈夫よね！

とりあえずで三種類程ソフトを選び、ゲーム機器をセッティングすると、人数分のコントローラーを持ってテレビから少し離れたソファへ向かう。

「とりあえず皆で遊べるパーティゲーム物にしたわ！ 色々なゲームで遊べるしとりあえずこれで良いでしょ！」

「わーい！ やったー！」

アリシアは戻ってきたアリサの手からいち早くコントローラーを受け取ると、強く握りしめ今か今かと目を輝かせながらゲーム開始を待ち構えている。

「ふふっ」

そんな子供っぽいアリシアの行動に子供らしくない子供であるアリサは嘖出してしまう。

「ちよつと、アリサ！ 今笑ったでしょ！」

「あはは、ごめんごめん。それじゃあ、アリシアも待ちきれないみたいだし、始めましょう！」

「む〜」

むくれつつらのアリシアを放置したまま、4人は各々ソファに座り、ゲームの開始を待った。そこには、皆種類は違うモノの、笑顔が確かに存在していた。

*

宴もたけなわ、律儀に1時間ごとに休憩を進めるメイドさんに従いながら、日も落ちるかと言う時間まで遊びとおした4人だったが。遂に解散する流れになっていた。

「あ〜、楽しかった！ ありがとね、アリサ！」

「すごく楽しかったよ。すずかも、ありがとう」

玄関で二人にお礼を言うアリシアとフェイト。すずかはいつも通りにこやかに笑いながら、アリサその勝気な顔に満面の笑みを浮かべている。

「私も楽しかったわ！ また遊びに来てても良いんだからね！」

「ふふふ、私も楽しかったよ。それじゃ、また明日ね」

何やらツンデレのようなセリフを言い放つアリサと、終始おっとりとした笑みを浮かべたままのすずかに手を振り、二人はアリサが用意してくれた送迎の車に乗る。

すずかもしばらくしたら家の迎えが来るらしく、ここで二人とはお別れとなる。

「じゃあね、二人とも。また明日」

「バイバイ。また明日」

乗り込む直前に手を振り合い、別れの挨拶を済ますと、今度こそ二人は車に乗り込み車は発進した。

*

「あ、楽しかった」

「そうだね」

相変わらず座り心地抜群のソファと揺れない高級車に身を任せ、二人は今日の感想をまたもらす。

「(それにしても、レヴィ)」

『ん？ どうしたの？』

そんな中フェイトは自信と常に共にいる存在、レヴィに念話で声をかける。今まで影も形もなくても、常にフェイトと共にあるのだ。

「(ホントに、ゲームやらなくてよかったの？ 交代したのに)」

そう、フェイトは遊んでいる最中、何度かレヴィに交代するかどう

か問いかけていた。自分が楽しく遊べているこの空間を、遊戯をもつとレヴィに直接味わってほしかったのだ。

『何度も言ったけど、大丈夫だよ』

しかしレヴィは頑なに首を縦に振らなかった。

『アリサはボクを覚えていた。それに、アリサもさすが人も人を見る目が良い。観察力に長けてるって言うのかな、空気をよく読めるって言うべきか。そんな二人の前で交代なんかしたら、瞳の色も変わっちゃうし、その場では何も言わなくても怪しまれちゃうと思うよ』

「(でも……)」

『ボクはフェイトが楽しんでるのを見てるだけで楽しいよ。それに夢にまで見た初めての友達との時間なんだから。目一杯楽しまなきゃ損だよ』

頭の中には、なんとも思っていないようないつも通りのレヴィの声がかんこえる。普通なら言葉通りの意味で受け取るのだろう。しかし、生まれてから、フェイトとして存在してから文字通り四六時中共にいたフェイトには、レヴィの言葉を素直に受け止める事は出来なかった。

——やっぱり、遠慮、しちやってるのかな……

いつも、どんな時もレヴィはフェイトの事を気遣ってくれた。レヴィの行動は全てフェイトの為にあると言っても過言では無かった。それこそ、生まれた時から。

故にフェイトは最近よく考える事があった。

——もしレヴィに体があれば……

もし、そんな奇跡が起こり得たら。今日この楽しみを自分だけが味わうのではなく、レヴィも合わせた5人で味わえたらどう、と。

「(ごめんね、レヴィ)」

『なんでフェイトが謝るのさ』

「(何でもない。でも、ごめん)」

理由も何も言わず、表情にも出さず、ただ悲しげな念話を送るフェイトに、レヴィは何も言えなかった。

——今日はホントに楽しかった。

それこそ、今でも夢心地の気分でいられる程。それはフェイト達にとっては夢のような出来事だった。

そんな夢が叶ったからこそ

だからこそ、脳裏に過るのは一人の少女。

忘れようと思っても忘れられない強烈な存在感を持つ少女。

最初は犯罪者かと思った。

次はただの素人だと思った。

次は自分から危険に飛び込む英雄症候群ヒーローに夢見たの子供かと思った。

そして、今は

——私以上に才能に恵まれた体。努力を忘れず、失敗にくじけない強靱な精神。まるで、魔法を使うために生まれたような娘

——高町、なのは。

なぜ、とまた疑問が浮かんでくる。昼もかすめた疑問。友達の温かさを、友達と過ごす時間の幸せを知ってしまったからこそ、より強く想起される。

——なぜ、彼女はこの幸せな「日常」よりも、辛い「非日常」を選んだの？

忘れようと思っても忘れられない。強烈な程の存在感を持つ天才魔法少女、高町なのは。

特に気にも止めない少女の筈だった。すこし、魔力量が多い位だと。

しかし気づいたら、こんな時ですら思い出すほどに、脳裏に焼き付くほどに強烈な少女だった。

——なぜ、あなたは……

なぜ、なぜ、なぜ

疑問は尽きず、去れとて解決されず。

もう二度と関わらない筈だったのに、それでもまだフェイトの頭を悩ませる。

「(レヴィ)」

『ん？ どうした？』

「(帰ったら、母さんにゲーム買ってもらおう)」

『え？』

——そうだ、そうしよう

白い魔導師の事で頭を悩ますより、そちらの方がよほど建設的だろう。

「ねえ、アリシア」

「んん？ どうしたの、フェイト」

「帰ったら、母さんにゲーム買ってっておねだりしよう」

「え？」

フェイトの言った事があまりにも予想外だったのか、驚きで目を瞬

かせるアリシア。

「もう、アリシアもそう言う。なんで？ そんなに意外？」

「う、うん！ そんなことないよ！ そっか、うん！ そうだね！
買ってもらおうね、ゲーム！」

「うん！」

アリシアも巻き込んでの、気紛らわせ。そうでもしなければ、いつまでもあの少女の事を考えてしまいそうだったから。

車内に二人の楽しげな声が響く。

それでも、フェイトの悩みは消えることは無い――

――おまけ

「ママー、あのね、ちよつと用事があるんだけど」

「どうしたの？ アリシア」

「ほら、フェイト」

「う、うん。あのね母さん」

「何かしら？」

「えつとね、その、今日、友達とね。テレビゲームで遊んだの」

「ええ。楽しかったのよね？」

「うん。それでね、その。家もゲーム、欲しいな、って」

「!!？」

「買って、欲しいなあ」

「買って、ママ」

「あ、ああ、あああああ」

「母さん？」

「ママ？」

「フェイトが、あのフェイトが、我がママを！ フェイトが生まれて早4年。あの大人しく、いつも一歩引いてたフェイトが、初めての、初めての我が儘をおおおおおおおおお！！」

「か、母さん!？」

「うわあ、急に泣きだした」

「ええ、ええ！ 何でも買ってあげるわ！ ゲームだったわね！ 今すぐ買いに行きましょうか!? いえ、いつそお店ごと全部買いましよるか!!？」

「か、母さん！ 落ち着いてえ！」

「リニスく助けて。助けて、リニスく」

こんな騒動があつたとか無かつたとか。

第6話 雷神と星の輝き――1

「それじゃあ、次の章に入ろう」

次元航空戦艦アースラのある一室では魔法の授業が行われていた。授業を行っているのはアースラに搭乗している中での最高戦力である、クロノ・ハラオウン。その授業を受けているのは、高町なのは。

管理局の手伝いを自ら申し出たなのはは、リンデイと共に家族にアースラでなのはを預かると言う説明をした後、ずっとアースラで過ごしていた。

レイジングハートやユーノの監修の元とは言え、ほぼ独学で魔法を学んできたなのに対して、キッチンとした魔導理論や訓練をしてもらうため、出撃以外の時間はほぼクロノやエイミイを筆頭としたアースラ乗組員によって鍛えられていた。

ユーノやレイジングハートが教えなかった魔法や、そもその魔法の成り立ち。魔法を使うために必要な学問や、魔法を使う上での道徳など。やっている事はミッドチルダの魔法学校の小学科でも学ぶことだが、それを現役の執務官からワンツーマンで学べるという、一般人からしてみたら莫大な金を払ってでも受けたいと言われるような環境が出来上がっていた。

「さて、今日はここまでにしよう」

そう言つて黒板代わりに使っていたディスプレイを閉じるとクロノは部屋から退出する。

「……ふにゃ〜」

クロノが退出したことを確認するとなのはは力を抜き、ぐったりと机に倒れ込む。

へお疲れ様です。マスター〜

そんななのはをレイジングハートが労うように声をかける。

「うん。ありがとう、レイジングハート」

実際なのはは疲れると言う程の事はしていない。ただ、アースラに逗留してまですることが勉強と魔法の訓練が基本となっているだけなのだ。やりたい事である魔法に関わる事だけに、いつも通っている学校の授業よりは興味ももて、楽しい物だった。

だがしかし、なのはが思っていた程出動は多くなかった。ジュエルシード自体はなのは達の様に足で探す事などせずに、アースラによるサーチャーの大量導入での人海戦術。発見次第武装隊が転移し回収している。

発見が遅れ、ジュエルシードが起動してしまっていた場合はクロノとなのはが出動し、ジュエルシードを封印してきていた。

しかし、これまでアースラが確保したジュエルシードは15個。これはフェイトやなのはから受け取った物も含まれているが、この中でなのはが実際に出動したのは1回きりであった。

つまり、なのははそれ以外の時間は勉強と軽い訓練しかしていなかったのだが、その甲斐あつて、レイジングハートの中には今まで無かった魔法も記憶されており、クロノから教わった戦術や、魔法の使い方なども合わさりかなり器用になったと言える。

「ねえ、レイジングハート。今なら、フェイトちゃんに勝てるかな？」
へええ。きつと」

レイジングハートの答えを聞いたなのはは考える。

それはフェイトの事だった。なのはの頭の中は、出動時以外はほぼ常にフェイトの事でいっぱいだった。どうすればフェイトに勝てるのか、どうすればフェイトに攻撃を当てられるのか。

イメージトレーニングも合わせ、教わった事を組み合わせていき、いつしかフェイトと再戦することをずっと考えてきた。

その結果、創り出したオリジナル魔法もある。デイバインバスターなんて目にならないほどの魔法。撃てば一撃必殺。自身の全てを込める砲撃魔法。威力も、射程も、攻撃範囲も、全てが一級の魔法。

常に考えていた。暇な時間はずっと、フェイトとの模擬戦を想定していた。どのように動けばフェイトを誘導できるのか、どのように戦えばフェイトに勝てるのか。

今、フェイトは魔法から、ジュエルシードから離れてしまっているが故に合えないが、ジュエルシードをすべて回収し終わったら、リンディに頼み込んでフェイトと一戦交えさせてもらうつもりですら居た。

そう考えて、ふとなのはは携帯を開き、友人から送ってもらったメールを見る。

その中には、自分の小学1年生からの友人である2人と、最近転校してきて仲よくなったらしい2人が移っている。

——フェイト、ちゃん。

その中には、アリサと肩を組んだアリシアと、隣のすずかに促されながら、恥ずかしそうにピースをしているフェイト。その4人が映し出されていた。

——フェイトちゃんの言ってた学校って、聖祥だったんだね……。

この画像を見るたびにすぐさま学校に行き、自分もフェイトと会いたいと言う思いが膨らむが、しかしそれを頭を振る事で諫める。

アリサとすずかのメールには学校に来れるようになったら、この2人を含めて5人で遊ぼうと書いてあったが、今はその時ではない。

もし今自分がフェイトと会ってしまえば、フェイトは自分を避けるためにアリサとすずかからも距離を置いてしまうだろう事は想像に難くない。

だから、まずは一つずつ終わらせなくてはならない。ジュエルシードの事を片付け、『魔導師である』フェイトとのしがらみを終わりに

し、『普通の』フェイトとの付き合いを始めなくてはならない。

そのためには、自分の気持ちに一区切りをつけなくてはならない。魔導師であるフェイトへの未練を断ち切る為に。悔いが残らないように、最初で最後の戦いを、全力全開のぶつかり合いを。自身の全てをさらけ出して、ぶつけて、勝っても負けてもフェイトへの未練を終わらせなければならない。

——だから

「もつと頑張んなきゃね。レイジングハート」

へはい。あなたならできます。マスター」

そう言っただけで思いを新たにしたら、アースラに警報が鳴り響いた。

*

「どうしたんですか!？」

鳴り響く警報を聞き、なのはは急いでアースラの艦橋に飛び込んだ。その中ではアースラのオペレーター達が大騒ぎでキーボードを叩いている。

「あら、なのはちゃん。いらっしやい。」

その中でも、艦長席に座ったリンディだけは落ち着いた様子で入ってきたのはを迎える。

「あの、リンディさん。どうしたんですか？」

「ええ。それがね、ジュエルシードが発動しちゃったのよ」

「だったら、私たちが行けば……」

「普通なら、それで良いんだけどね」

もったいぶるようなリンディの言葉を引き継ぐかのようにクロノが喋る。

「我々が発見できなかった残りのジュエルシードが、全て同時に発動したんだ」

「え!？」

その言葉になのはは声を荒げる。

「そんな！ 街は!?! どうなってるの?！」

「幸い、発動したジュエルシードは全て海だ。街に直接の被害はないが、ジュエルシードが発動した影響で津波が起きてしまっている。海洋を航行していた船や沿岸は被害なし、と言うわけにはいかんだろう」

「そんな！ 早く封印しに行かなきゃ!！」

「今、ユーノに一足先に結界を張りに行つて貰っている。僕や武装局員も、直ぐに現場に向かう事になる」

「だったら、早く行こうよ!！」

焦るなの是对してクロノは追いついた様子でなのには話しかける。

「だが、その前に君には現状を詳しく説明しなくてはならない」

「そんなの良いから、直ぐ行かないと!！」

「悪いんだけどなのはさん。あなたには聞いて貰わないといけないわ」

なのをは落ち着けるように優しく、しかし顔は真剣そのものの表情でリンディはなのには告げる。

「現在、ジュエルシードを6個取り込んだ魚らしき暴走体が、海で暴れています。ユーノくんは結界を張つて貰い、なんとか大きな被害は出ていませんが、結界の中は酷い状態です。モニターを、よく見てもらえるかしら?！」

リンディにそう言われ、なののは初めてブリッジに設置された巨大なモニターを見る。

そこに映し出された映像は酷いありさまだった。

6本の竜巻が相当広いはずの結界内を所狭しと暴れまわり、その影

響か海面は大荒れ、大きな津波すらできそうな程。

そして一際目を引くのは、その中で悠々と泳ぐ、巨大な影だった。

鯨のようなその影は、まるでこちらに自身の強大さを見せつけるかのように、たまに水面から飛び出では海中へと帰っていく。

その体長は少なくとも10m以上はありそうな。まさに鯨のような巨体。その巨体を覆うのは、大きく、とげとげしく、まるで触つたら手がズタボロになってしまう事を容易に想像させるかのような鋭利な鱗。

頭部からは3本の角が生え、一瞬見えた口にはサメのような牙がたくさん生えている。

ヒレも凶悪さを増し、通り過ぎるだけで人を両断できてしまいそうな、ギロチンのような物が胸、背、尾、腹全ての箇所についていた。

その姿はまるで、黙示録に記された世界で最も巨大な海の獣のような、見た者に絶望を与える姿だった。

「見て分かる通り、結界の中はあの様子だ。悪いが、僕達は君の安全を保障できない」

その映像を見て驚くなのは、なるべく優しく聞こえるよう声色を落してクロノが告げる。

「だから、君は今回出撃する必要は無い。それどころか、僕としてはこのままここで大人しくしていて欲しいとすら思っている」

クロノが告げるその言葉に、なのはは寂しさと、言葉にできない怒りを感じた。

「クロノくんは、大丈夫なの?」

その怒りを抑え、一言質問する。

「大丈夫じゃないだろう。あそこまでの生物と戦った事が無い訳じゃないが、僕の専門は犯罪者、人間だ。それに今回はジュエルシード6

個分の魔力を持った生命体。ハッキリ言ってしまうえば、第6世界の竜神にも迫るんじゃないかとすら思っている」

「だったら！ 私も一緒の方が！」

「ああ、そうだ。戦力的に見てなのは、君はとても魅力的だ。現在のアースラではボクに次ぐ実力を持っていると言っても過言じゃない。戦術などを気にしないジュエルシードの暴走体に対してなら、魔力量の多い君の方が、僕より有用だろう」

「それじゃあ……」

「だが、君は一般人で僕は管理局員だ。僕は一般人である君を守る義務がある。そして、あの場所で僕は君の生命を保証できない。だから、付いてきてくれなんて、言えない」

クロノの冷静で、言い返ししようのない正論になのは口を紡ぐが、すぐさまその頭の回転を生かし反論する。

「じゃあ、ユーノくんはどうして現場に居るの!? ユーノくん局員じゃないでしょ！」

「彼は、ジュエルシードをこの世界にもたらしてしまった責任を重く感じて、今あの場所に立っている。善意で手助けしているだけの君とは違うんだ」

なのはの反論を冷静に受け止め、それでもなのはの言い分を認めないクロノ。しかし、聞き分けのないなのはにだんだんとクロノの頭にも熱が昇ってきてしまう。

「じゃあ、どうしたら付いて行っても良いって言ってくれるの?」

「なのは！ 僕は付いて来るなど言っているんだ！」

「だけど！ クロノくんでも大丈夫かどうかわからないでしょ!? だったら一人でも戦力は多い方が良いじゃない!」

クロノとなのはが言い争いを始めたその瞬間、ブリッジに現場のユーノから通信が入った。

『クロノ！ 悪いんだけど直ぐ来てくれ！ 中で暴れられてると、境界が安定させられない!』

ユーノはそれだけ言うと、通信に意識を割く余裕もないのか、すぐさま通信を閉じた。

「っ！ エイミー！ 直ぐに武装局員を現場に派遣してくれ！」
「了解！」

クロノの指示を聞き、エイミーはすぐさま別所で待機していた武装局員に指示を出し始める。

「悪いがなのは、君に構っていられる時間は無いようだ。僕も行かなくちやならない。君は大人しく、部屋で待っていてくれ」

「待ってよ！ 私も行くから！」

「ダメだと言っているのがわからないのか!？」

2人がまた口喧嘩をしようと仕掛けた時、リンデイが大きく手を叩いて場を諫めた。

「クロノ執務官。直ぐに現場に向かってください」

「……わかりました」

艦長としてのリンデイの指示にクロノは直ぐに従い、ブリッジを後にする。

「なのはさん。どうしても、行きたいですか？」

「はい」

まるで子供を諭すかのような声色のリンデイの問いに、なのはは直ぐに答える。

「私たちは現場であなたを守る事を確認できません。それでも、行きますか？」

「はい」

またしても直ぐに返答するのは。その強いまなざしを見て、リンデイは一つため息を吐いた。

「わかりました。でしたら、今この場で遺書を書いてください」

「い、遺書……」

「はい。ズルいかもしれませんが、なのはさん、あなたが我々の忠告を聞かず、死を覚悟して現場に行く事。もし死んだとき、なにか家族や友人に伝えたい事等。紙と書く物をあげますので、この場で書いてく

ださい」

そう言つてリンデイはなのはに、紙とペンを渡す。

「……確かに、ズルいですね」

なのははそう言うと、躊躇せずリンデイから紙とペンを渡し、その場で遺書を書き始める。

急いでいたため、簡潔で字もお世辞にも綺麗とは言えないモノになつてしまつたが、読めるので大丈夫だろうと思い、完成したそれをリンデイに手渡す。

「確かに、受け取りました。なのはさん、ズルい大人である私を許さなくていいです。ですが、どうか、無事に帰ってきてください」

そう言つたリンデイの言葉からは、子供を危険な場所に向かわせることになつてしまつた自身へのふがいなさが汲み取れた。

なのはが協力を申し出た時も、実際に出撃するときも、どんな時も優しいそんな大人の仮面を外さなかつたリンデイが、初めてなのはの前で見せた弱い姿だつた。

「はいー」

そんなリンデイに心配させまいと、なのはは一際大きな声で返事をする。

モニターの中ではすでにクロノとユーノ、武装局員の半数が結界内にて暴走体と戦い始めている。

「エイミイさん、お願いしますー!」

「なのはちゃん。デバイスをセットアップして、バリアジャケットは纏つた?」

「はい! 準備完了です!」

「それじゃあ、頑張つて。絶対、無茶しちやダメだよ!」

「はい! 高町なのは、出撃します!!」

なのはのその掛け声と共に、なのはは転移の光に包まれた。

その光はまるで神の威光の様に、戦場を貫いた。

第6話 雷神と星の輝き―2

なののが出撃しようとしているその頃。

聖祥の通学路で息を荒げて道路に蹲っている少女と、その少女を心配している良く似た少女、二人が居た。

「……………っ！ ああっ！」

「アリシア！ しっかり！ しっかりして！」

苦しんでいる少女、アリシアは額から脂汗を大量に流し胸を押さええて呼吸すらままならない様子で蹲り、もう一人の少女、フェイトはそんなアリシアに対してどうすれば良いのかわからず、狼狽え声をかける事しかできなかった。

「フェイト！ アリシア！」

そうしていると、少し遠くから走ってくるのは一人の女性。

オレンジ色の髪をして露出の激しい服を着ている、フェイトの使い魔、アルフが駆けてきた。

「アルフ！ アリシアが！ お姉ちゃんがっ!!」

「わかった。わかったから直ぐアリシアを連れて家に帰ろう」

戸惑いのあまりアリシアへの呼び方すら定まらなフェイトをなだめ、アリシアを背負うアルフ。

「とりあえず人目のつかないところに行こう、そうしたら転移で直ぐ帰れる」

「……………う、うん」

アルフの言葉に頷き、歩き出す二人。

アリシア達がこうなってしまったのにはわけがある。

それは当然のことながら、今現在なのはが戦っているジュエルシードの暴走体が原因なのだが、何時もであつたらここまでひどくは無かつた。

それもそのはず、今まではジュエルシードが起動しかける余波だけで体調が悪くなっていたのだが、今回は完全な起動、それも6個同時にその全てが一体の暴走体に吸収されると言う最悪の状態になってしまっている。

その余波は想像以上であり、一瞬海が荒れたかと思えばアリシアはなんとか意識を保っているものの倒れ、ストレスにより呼吸困難になつてしまつたほど。

そして結界が張られた今ですら、暴走体が放つ魔力の波動は結界を揺るがし、結界から漏れ、その漏れた魔力が今でもアリシアを苦しめている。

「アリシアー！」

転移で家に帰るとプレシアが慌ててアリシアに駆け寄る。

リニスはエコモードを解除し、アルフと共に強力な結界を家に張る。

それでもフェイトを襲う悪寒は、心臓を振るわせるざわめきは収まらなかつた。それはつまり、アリシアへの負担も無くなつていないと言ふ事だ。

「っ！ 結界を張つてもダメみたいね。リニス、転移でアリシアをあつちに送れる？」

「それが……」

プレシアの質問に顔を曇らせるリニス。

「それが、この魔力波の影響なのか、転移が安定しないんだ。この町の中程度の短距離ならともかく、時の庭園までの長距離転移となると……」

「下手すれば次元の狭間……、と言うわけね。わかつたわ」

アルフの言葉を聞き、転移が不可能とわかつたプレシアはすぐさま

デバイスをセットアップし、自身も結界を張り始めた。

その光景を見てフェイトは拳を強く握りしめ、唇を噛むほどの怒りに震えていた。

——管理局はっ、あの子は何をつ！

それはこの事件を未だ解決できていない管理局への、そして、高町なのはへの怒りだった。

魔法に関わると決めたのならば、もつとしつかり働いてほしい。ロストロギアの管理を謳うのならば、もつとキチンと管理して欲しい。色んな不満が、言葉にならず頭の中を飛び回る。

——私、なら……。私とレヴィだったらっ！

無意識に魔力波の中心を感じ取りそこを睨むフェイト。

しかし、その思いは的外れであるとも感じていた。

彼女が魔法に関わると決めたのと同じように、フェイトは魔法に関わらないことを決めたのだ。

ならば、ある意味逃げ出した自分が今更出て行って何をすると言うのだ。なんと言うのだ。

厚かましく彼女を、高町なのはを罵れとでも言うのか。そんな厚顔無恥な行為はフェイトにはできなかった。

——私は、どうすればっ

最初感じていたはずの怒りは、結局苦しむ姉に対して何もすることできない自身へのいら立ちへと変わっていった。

そうして自身を責めているフェイトの首元から声が聞こえた。

〈行きましょう〉

その言葉は口数が少なく、機械音声ではあるが確かな「熱」をフェイトに感じさせる声だった。

「バル、ドイツシユ……」

〈行きましよう、サー〉

ただそれだけ、無口なデバイスであるバルドイツシユの口数はやはり少なかつた。しかし、その少ない言葉に乗せられた『熱』は、苛立ちによつて燻つていたフェイトの心に火をくべた。

「でも、私は……」

——私は、もう選択してしまつたから……。

魔法から背をそむけることを。ジュエルシードから目を背ける事を選択してしまつたから。だからその選択は、その思いは許されない。行つてはいけない行為だ。

そんな事をしてしまつたら、あの時の自分だけでは無い、彼女の選択すら踏みにじる事になってしまうから。

「……イト」

「え？」

そう、思い悩んでいたフェイトに微かな声が聞こえた。

「フェ、イト」

それは、ベッドの上に寝かせられたアリシアの物だつた。

「アリシア!? どうしたの？」

すぐさま駆け寄つて声をかけるフェイト。

「フェイト」

そのフェイトに気付いたのかアリシアは苦しそうな顔に笑みを浮かべながらフェイトを見る。

「フェイト。気にしないで、良いん、だよ」

か細い声。だがフェイトは極力顔を寄せ、一言も漏らさぬように耳を澄ませる。

「もつと、我がま、まになつて、良い、んだよ」

「アリシア?」

アリシアが何を言っているのか、フェイトには理解できなかった。何が良いのか。何をどう我が儘になれと言うのか。

だが、その疑問はアリシアでは無く、隣に立っていたプレシアから教えられた。

「そうよ、フェイト。なにも気にしなくていいわ。あなたは、あなたのやりたい事をすればいいの」

「母さん……、でも……」

「もしそれが悪いことならば叱つてでも止めるわ。だけど今は違うのではないかしら? あなたは、あなたのやりたい事は、アリシアを助ける事でしよう?」

「……そう、なのかな」

——そうなのかも、しれない。

プレシアに言われ、アリシアに許されようやく気づけた。自分はアリシアを救いたかったのだと。

しかし、過去の自分は『魔法に関わらない』と言う選択をした。故に、アリシアを救うために過去の選択を覆すと言う我が儘を、フェイトは許せなかった。誰でもない、自分が我が儘を言う事を許せなかったのだ。

「フェ、イトお願い。おね、ちゃんを、たすけ、て?」

か細い声、青い顔。誰が見ても体調が良いとは言えないアリシアだが、フェイトに心配を駆けまいとその顔には笑みを浮かべ、そして今、免罪符すらフェイトに差し出してくれた。

フェイトの我が儘では無く、姉のお願いだからと。フェイトの心に、逃げ道を作ってくれた。

「……う、ん。うん。うん!」

フェイトは自然と泣いていた。自分はこのほとんど年の変わらぬ姉に、どれだけ心配をかけていたと言うのか。

「フェイト。もっと自分に正直になりなさい。もっと我が儘を言っても良いの」

うつむき、涙を流すフェイトをプレシアは優しく抱きしめてそう

言ってくれた。

『フェイト』

そうして、家族の愛に涙するフェイトに聞こえる声。念話では無く、フェイトの頭に直接響く、フェイトにしか聞こえぬ声。

『行く』

その声はまるで自分の本心の代弁者の如く。たった一言だけでフェイトを促した。

「うん！」

その声に、姉の思いに、母の願いに強く頷き、涙をぬぐう。

「行くよ。アルフ、バルデイツシュ」

〈Yes, sir〉

「ああ！ いつちよ派手に暴れてやろうよ！」

自身の使い魔と愛機に声をかけ、バリアジャケットを纏う。アルフも私服からバリアジャケットへと変え、フェイトの側に立つ。

「フェイト」

「アリシア、大丈夫。私が、お姉ちゃんを必ず助けるから」

そんなフェイトを見つめる姉の視線を受けながら、フェイトは強く宣言する。

誰でもない、自分に言い聞かせるために。

「がん、ばって、ね」

アリシアのその言葉を聞きながら、フェイト達は転移した。

目指すは、発動して暴走している、ジュエルシード。

第6話 雷神と星の輝き―3

転移は上手くいき、結界の上空へ現れたフェイト達を襲うのは暴風とそれに巻き上げられた水滴だった。

「レヴィ、最初から全力で行くよ」

『りょーかい。最強モードだね』

顔は見えないが、今のレヴィは不敵に笑っているのだろう。そして、今の自分も同じ顔をしているのだと、フェイトは無意識に感じていた。

「アルフは局員と、あの補助魔導師と連携して敵の動きを鈍らせて」

「あいよ。まかせな、ご主人様」

簡潔な指示だが、それを全うするためにアルフは下へと降り、暴走体と戦っていた局員たちと合流する。

アルフを見送ると、フェイトはレヴィの言う『最強モード』になる為に、意識を研ぎ澄ませた。

目を瞑り、バルディッシュを目の前へ掲げ詠唱する。

「常に目指すのは最強の自分」

『ああ、遂に来てしまった。この時が』

〈Every one shakes Between the real and
フェイトとレヴィ、そしてバルディッシュで全く別のことを同時に喋る。しかし、それで良く、そうしなければならなかった。

「我が身が求めしは理想の体」

『なんと悲しいことか、世界はやはり誰にでも優しく、誰にも優しくない』

〈That's why, people would ask for ideas
最初はレヴィがおふぎだけで考え始めた詠唱だった。理由はカッコいいから。ただそれだけだった。

「体は二つ、心は三つ。だけど今だけは体は一つで、心も一つ」

『だけど、私だけは優しくあろうとそう決めた』

〈Not a bad thing it never〉

だが、バルディッシュも含めてこの詠唱をすると、『最強モード』の

成功率が格段に上がった。それもそのはずでフェイトは気づいていないがこの詠唱はレヴィの創り出した催眠魔法の発動のための詠唱であった。

フェイトとレヴィの意識が混在し、二人が二人とも体を動かさず魔法の使える状態。通称50%の状態だが、弱点は一つの体を二つの意識が動かしてしまう点にある。

フェイトが動かすのは全身だが、レヴィも右半身だけなら動かさせてしまう。故にお互いの意思疎通ができていないと、右半身と左半身がバラバラに動いてしまうのだ。

通常であればそれはレヴィが体を動かさないと言う事で疑似的に解決していた。しかしそれは40%以下の状態とほぼ何も変わらない状態となってしまうのだ。

そういつた事を解消し、フルパフォーマンスを求めるためにレヴィが考案したのは、フェイトとレヴィの意識の一時的な融合。つまり、自分たちに催眠術を掛け、『フェイト』の意識は“一人”であると思ひこませることだった。

デメリットとして同時に別々の魔法を使えると言う事は無くなってしまうが、それはもともとマルチタスクを使いこなす魔導師には関係の無い話であり、そうした結果レヴィ曰く『最強モード』は完成した。

「その全てで、理想を追い求める事に決めた」

『その全てで、理想を追い求める事に決めた』

↑In all, it was decided to pursue the

気づけばバラバラだった詠唱はすべて、同じ詠唱へと変わっていき、最後の一言は、たった一人から放たれた。

『だから私は、理想の自分なのだ』

そうして目を開ける『フェイト』の瞳は紅と蒼のオッドアイへと変わり。

その身から立ち上る魔力は倍以上に膨れ上がり、身にまとっていたバリアジャケットすら形を変えていた。

黒いレオタードにスカート、肩にマントを羽織り、装甲部分は左腕と靴の部分だったそれは、右腕と左腕の前腕には銀色の籠手が装着され、胸部には黒色に金色の線が入った装甲が現れ、脚部は脛全てを覆うレガースとブーツに覆われていた。

フェイト本来の装甲を捨てた筈のバリアジャケットはそこには無く、必要最低限ではあるが、確かな安心感をもたらす「鎧」が装着されていた。

『最初から、全力で行くよ』

誰に向かつて言ったのか定かでは無いその声は、まるで二重音声のように響き、同じ声色、同じ言葉だと言うのに、重なって響く。

『アルカス・クルタス・エイギアス。怒れる天神、今怒涛の雷で撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル』

そうして『フェイト』が唱えるのは現在使える最強の魔法。基礎を詰めに詰め、そしてあふれんばかりの魔力に任せた「暴力」が形成される。

フオートランサー・ジエノサイドソフト
『殲滅轟雷電刃衝』

魔法名の宣言と共に、『フェイト』の横から大量のスフィアが展開される。その数約80。

青と黄色を混ぜたようなマーブル色をしたスフィアは全て『フェイト』の目線と共に狙いを定める。

『打ち砕け……、ファイア』

冷徹ともいえる程冷めた声色で宣言された攻撃は、まさに敵を打ち砕かんと襲い掛かった。

時間はすこし巻戻り、フェイトが上空に現れた瞬間、それは当然ながらアースラに感知されていた。

『クロノくん！ 結界上空に転移反応！』

「なんだって!？」

それは当然ながらエイミイにより現場指揮官であるクロノにも報告されていた。

「こんな、忙しい、時に！ 誰だ！」

クロノは必至で暴走体からの攻撃を避けながら、動きを妨害するためのバインド設置や、少しでもダメージを与える為ブレイズカノンを放っていた。

『この反応は、フェイトちゃん達だよ！』

「なに!？」

数日前に魔法には関わらないと、そう宣言した筈のフェイト達に出現。戦力的にはありがたいことこの上ないが、クロノの執務官としての責務が、プライドがそれを素直に喜ぶことをさせなかった。

——くそつ、なのはだけでは無く、フェイトまでこんな場所に駆り出してしまっただなんて！

フェイトもなのはも自分の意志でこの戦場に立っているが、それでもクロノはそれを良しとは思えなかった。自分や武装隊局員とは違いその二人は一般人なのだ。確かに自分以上の魔力があり、戦闘技能もある。戦力としては十分だろう。

同じ一般人であるはずのユーノは少々他二人とは理由が違い、彼は自分の後始末を付けたいと言う意地と責任感から戦場に立っている。それは、なのはを巻き込んでしまった事への罪悪感もあるのだろう。しかし、クロノにとってユーノの言い分は認めたくない執務官の部分と、同意してしまう“男”としての部分が混ざり合っていた。

だからユーノにだけは特に何を言う事はせず、注意をし、遺書を書かせてからは好きにさせている。

しかし、それでも任務で、義務で、責務で、なにより誇りでこの場に立っている自分たちとは違い、彼女たちは一般人なのだ。それはつまり、この場に立つ任務も、義務も、責務もない。それどころか自分たち管理局に保護を求めている立場ですらある。

そんな少女たちを危険な戦場に立たせてしまう。そんな自分の力の無さがクロノは恨めしかった。

——とりあえずそんな事は今はどうでも良い！ 今は戦力が増えたことを素直に喜ぼう。

そう、自分を落ち着かせ、頭の中を切り替える。

「エイミー！ とりあえず、なぜこんなところに来たのかの質問と……」
「やあやあ、執務官さん。どーも」

クロノがエイミーに指示を出そうとした時、上空から声がかげられた。クロノが上空を見上げると、そこには降りてくるオレンジ髪の女性があった。よく見れば獣耳と尻尾も生えている。

「君は……」

「初めましてじゃないけど、この姿じゃ初めてかもね。私はアルフ。あそこにいるフェイトの使い魔さ」

「そうか、君が」

クロノは知り合いに使い魔の姉妹がいるので別段驚きはせず、簡潔に要件を済ませる為話し始めた。

「長話している暇はない。君たちはなぜここに来た」

「私達は私達で早くアイツの暴走が止まってくれなきゃ困るんだ。だから手を貸す」

「……わかった。ならば僕の言う事は聞いて貰うぞ」
「わかったよ」

短くそれだけをお互いに伝え合うと、アルフはさっそく暴走体に向かってバインドを仕掛け始める。

「総員に通達。先日のフェイト・テストアロツサとその使い魔が増援に来てくれた。これから彼女たちも含めて事に当たる。それから前線部隊で魔力がもう持たない者は後退し、余力があれば結界の強化を手伝ってくれ！」

クロノが通信でこの場に居る全員に声をかけると、いたるところから返事が聞こえる。幸い、ユーノとなのはの活躍もあり、武装局員で未だ墜落した者は出ていない。

それを確認して、クロノも前線に戻ろうかと思った瞬間、アルフが大声で叫んだ。

「全員アイツからできる限り離れな！ 私のご主人様のデカいのが来るよ!!」

そう言ったアルフは、高速で離れると、チェーンバインドを何本も放ち、暴走体本体や暴走体が生み出している竜巻を拘束しだす。

それを見たクロノはすぐさま指示を出す。

「総員後退！」

それに合わせてなのはやユーノも含めた前線に居た戦闘員が全て暴走体から離れる。

ユーノはアルフの様にチェーンバインドを使い、暴走体の動きを止めていた。

——デバイスもないのに、よくあそこまでやる。

そんなユーノの動きを見てクロノは感心していた。

その瞬間、目の前が閃光に包まれた。

局員たちが離れたのを確認した瞬間、上空の『フェイト』は展開していた魔法を放った。

自身の両翼に展開された計80基のファイアから繰り出されるフォトンランサー電刃衝。それは秒間7発、約4秒間に渡って、計2240発のフォトンランサー電刃衝を雨霰のように打ち出す。

その光景はまさしく雷光による豪雨の様であり、暴走体を打ち付けるその勢いは滝の様でもあり、遠くから見たら光の柱の様にも見え
た。

『轟雷昇滅……』

その言葉と共に『フェイト』は両翼に展開していたスファイアを自身の掌に回収、収束させ、巨大な剣を作り出した。

それが完成するや否や、『フェイト』はその剣をフォトンランサーの雨を浴びせられ弱っている暴走体に向けて投げつける。

それはその巨体ゆえゆつくりと見えるが、しかし実際の速度はフォトンランサーと変わらぬ速度で落ちてゆき暴走体を貫く。

剣が暴走体を貫いたのを確認すると『フェイト』は、放つて目の前に付きだした手を握りながら『最後の魔法』を唱える。

『天覇封殺雷神剣』
スパークエンド・サンダーフレード

その言葉と共に、生み出された剣は、中に内包していた魔力を雷として暴走体の内部へと解放、爆発した。

迸る閃光。直近で雷が落ちた事より酷い光と轟音が戦場を支配する。

『フェイト』より近くに居たクロノ達は、直前のアルフの助言により目と耳を塞ぎ、手で防御することができたが、もしそれが無かったら失明や失聴していたのではないかと言う位の光と音だった。

『……っう』

そこまですを確認し『フェイト』は一息つく。さすがの魔力ランクSSとは言え、魔法ランクS以上の大魔法を立て続けに2発も放てば疲労する。

しかし『フェイト』は少し息をつきはしたが、その顔にはそこまでの疲労は見れなかった。それもすべては『最強モード』であるが故。

これはフェイトとレヴィの意識が混ざる事で、50%の状態でかつレヴィが神より貰った特典が発動すると言うまさに『最強』に相応し

それを見ていた『フェイト』はなのはに声をかける。

『なのは、デイベインバスターより大きな魔法、使える?』

「え? う、うん」

『魔力は?』

「あまり、残って無いけど……」

『そう』

そう言うと『フェイト』はバルディッシュをレイジングハートの側に寄せる。

〈Magical Transfer〉

『フェイト』は何も言わずともバルディッシュは自身を通じてレイジングハートに魔力を渡す。

〈Charge Complete〉

レイジングハートもそれを素直に受け取り、自身を介しなのはへと供給する。

「え?」

『私の魔力、少し分けたから。私達ボクが時間を稼ぐから、その間よろしく』

「えっと、う……うん」

なのはが頷いたのを確認すると、『フェイト』はアルフ達に声をかける。

『アルフ! ユーノ! それにクロノ達も! なのはが仕留めてくれるから、それまで時間を稼いで! 攻撃しなくていい、攻撃を避ける事と、私の合図ボクで一斉にバインドを掛けられる準備だけして!』

「あいよ!」

「わ、わかった!」

「なぜ、君が指示を……、いや今は良い!」

『フェイト』の言葉でその場にいた全員が動き出す。

〈マスター。私達も〉

「……うん!」

なのはも覚悟を決め、上空まで上がり魔法の準備に入る。

それを見届けるとフェイトはクロノに声をかけた。

『クロノ』

「なんだ」

『エイミーでも誰でも良い、私が合図して一斉に^{ボク}バインドを仕掛けたら、すぐになのは以外の全員を結界の外まで転移させられない？』

「……バインドを掛けた時に外に転移できれば良いんだな？」

『うん』

「わかった。そう指示を出しておく」

『よろしく』

クロノに簡潔に告げると、『フェイト』はバインドを仕掛ける準備をするために動き始める。

「まったく、なぜ僕が……」

そんな『フェイト』を見ながら、ため息をつき、局員へと指示を出す。

「結界内に居る総員、フェイトが指示を出したら一斉に相手に向かってバインドを掛ける。その時できるだけ僕の側に寄ってくれ。バインドを掛け終わったのと同時に結界外へ転移する」

そう指示を出すと、局員は何も聞かず「了解！」とだけ返事をする。

——まったく、聞き分けの良い部下で助かる。

そう思いながら、クロノも作戦の準備を始める。

——頼んだぞ、なのは……。

上空に居るなのはに願いを託して。

その頃のなのはは魔法の準備に入っていた。

『フェイト』に言われた「デイバインバスター以上の大魔法」。その言葉で思いついた魔法はただ一つだった。

「レイジングハート、いけるよね」

へはい。私とマスターならば必ずできます」

「うん、じゃあ、行くよ」

その言葉と共に、レイジングハートを天へと掲げ魔法の準備に入る。

足元には射出を安定させるための足場であり、発動補助のための魔法陣を展開。

それは、今までデイバインバスターを打つために使っていた魔法陣とは比べ物にならない程の大きさだった。

——今まで、使い切つてあげられなかった魔力をもう一度かき集める。

そう思つて、魔力の集束を始める。なのは目の前には、小さな魔力殻^{シエル}ができていた。

そこに、戦場^{シエル}全てからかき集めた魔力を込めていく。

——本当は、フェイトちゃんとの戦いの為に開発した魔法だった。だが、となのはは思う。

——フェイトちゃんが放つたあそこまでの魔法でも倒せなかった暴走体。フェイトちゃんの魔法と同レベルの威力を出せるのは、もうこれしかない。

だから、となのはは念じる。

——私の、知恵と戦術、その全てでたどり着いた一つの答え。

なのはの想いと共に、シエルはどんどん大きさを増していく。それはなのはの身長を超え、なのはの2倍、3倍、と加速度的に大きくなっていく。

——もつと、もつとつ！

なのはがそう念じると、シエルの周りを一回り大きいリングが多い始める。それは魔力を集め、収束の補助をする帯状魔法陣だった。それが1本、2本と数を増してシエルの周りを回転し始める。

——もつと、ここにはもつと魔力が有る筈！ 私が、ユーノくんが、クロノくんが、局員の皆が使い切れなかった、無駄にしちやった魔力を、もつと！

いつしかシエルの大きさは、なのはの身長の数倍では効かない大きさになっていた。その大きさは直径何十メートルなのかと思われる勢い。

そしてそこまで圧縮と膨張を繰り返した高純度の魔力の塊は、自然と光を放っていた。

その光に、局員の一人が気づき声を上げる。

「お、おい、アレ……」

その言葉に、誰もが少しだけ上を向いてしまった。

「なー！」

「アレは？」

「アレは、まさか」

だれもがその光を、その光を放つ球体を目にして声を上げた。

——まるで、星の光のようだ、と——

「あれは、集束……砲撃魔法……」

一人クロノはその異常さに声を失う。10にも満たない少女が、あの小さな体であそこまで大きな集束魔法を放とうとしている。その光景に、心を奪われていた。

『全員、回避』

突如として響く『フェイト』の声に、クロノも局員もとっさにその場から離脱する。

あまりの光景に一瞬忘れていたが、今は戦闘中なのだ。我々が攻撃しなくても相手が攻撃しない理由は無い。

しかし、とクロノは思う。

——まさかなのはは、アレを放とうって言うのか!?

クロノはたどり着いてしまった。『フェイト』の謎の指示。その意味に。

——確かに、あそこまでの集束砲撃魔法が放たれたら暴走体はおろか、側に居る僕達も危ないじゃないか!

だから『フェイト』は言ったのだ。全員でバインドを放ったら即座に転移する、と。

そのギリギリの危うさに気づき、局員に指示を飛ばそうとした瞬間、クロノに、戦場に居る全員に声が響く。

それは終戦を告げる天使の言葉であり、破滅を齎す悪魔の言葉だった。

「チャージ完了しました! いつでも行けます!」

なのはから通信越しに放たれたその言葉は、集束砲撃の威力を理解している者にとっては断罪の言葉に聞こえ、それを知らない者にとっては祝福の言葉に聞こえた。

『全員、私かクロノ執務官の側に近寄って』

その言葉と共にクロノと『フェイト』の側に局員たちが集まる。

「フェイトこっちは良いぞ!」

『全員、バインド放て』

『フェイト』の指示に従い、放たれるバインド。それは一つ一つは弱

くとも、『フェイト』の魔法を受け、弱っていた暴走体の動きを止めるのになんら支障は無かった。

『アルフ！ クロノ！』

『フェイト』の叫びによって、バインドを放たず転移の準備をしていたアルフとクロノは即座に転移で側に居る者ごと転移を始める。

そして転移が終了する直前に、『フェイト』は叫ぶ。最もフェイトの心を掻き見出し、だが最も頼りになる、白い少女へ。

『なのはああああああつ!!』

その言葉を聞き、なのはは天高く掲げたレイジングハートを、バインドで雁字搦めになっている暴走体へむけてゆつくりと下ろす。

「スターライトオツ……」

〈Starlight Breaker〉

「ブレイツカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

渾身の叫びと共に滅びの光が、全てを押しつぶす星の輝きが、振り落とされた……。

光が走った

音の無い光が奔った

なのはの魔力によって破裂しそうなほどに魔力を貯め込み、脈動していたシエルは破壊され、その内部にため込んでいた魔力をすべて解き放った。

その様はまるで、星が最後の輝きに強く光るように、膨れ上がった自身を全て曝け出すかのように、貯め込まれた魔力は迸った。

放たれた魔力の奔流はまず、暴走体に当たると暴走体を雁字搦めにしていたバインドを破壊した。力任せに、押しつぶした。

次に、暴走体を飲み込んだ。暴走体の全長10mと言う巨体を大きく上回る範囲で、飲み込んだ。その光の柱に吸収した。

次に、押しつぶした。海を押しつけ、水を溢れさせ、その魔力で暴走体を大地へと押しつぶした。

次に、消滅させた。ジュエルシードの魔力でその巨体を保っていた暴走体の体を、体を構築していた魔力ごと消し飛ばした。

しかし、そこまでやってなお、なのはの貯め込んだ魔力は尽きなかった。終わりを見せなかった。

次に、光は弾けた、暴走体が受け止めきれなかった魔力の奔流が、大地に炸裂し、弾け、結界内の辺り一面に飛び火した。

そこから先は、世界終末の映像を見せられているのかと錯覚するほどの映像だった。

弾けた魔力は海面に着弾し、その場所の海を押しつけ、消し飛ばした。

結界に当たった魔力は、その勢いをせき止められ、結界を壊す勢いでぶつかり合い、さらに細かく弾けた。

そうして、いろんな場所で弾け、海を押しつけ、消し飛ばした魔力は、なのはの周囲以外に終末と滅びを与えると、消え去った。

『フェイト』達は結界の外に転移した後、残った余力を振り絞り全員で結界を強化していた、結界に魔力を供給し続けた。

もしそうしなければ、なのはのスターライトブレイカーは結界を破壊し、なのは以外の全員を吹き飛ばし、近隣の港を消滅させていたかもしれない。

「……………はあつ。……………つああ」

そんな事を露とも知らず、なのはは大きく深呼吸していた。まさに大魔法を放ったのだ。その体には、今までの戦闘の疲労もすべてが一気に襲い掛かってきたかのような倦怠感に襲われていた。

〈ジュエルシード、封印完了です〉

そう言うレイジングハートの目の前には、まるでなのはに降伏するように、全てを諦めて五体投地をしたかのようにジュエルシードが浮かんでいた。

「……はあつ。レイジングハート」

なのはがそう言うと、レイジングハートは6個のジュエルシードをすべて収納し、言った。

へお疲れ様です、マスター」

レイジングハートの労いの言葉に、なのはは顔を輝かせると強く頷き、言った。

「ジュエルシード6個！ 封印、完了しました！」

そんなやり遂げた少女の輝かしい宣言は、誰の耳にも入ることは無かった。

「あれ？ あれれ？ みんなああああああああ、どこ行ったのおおおおおおっ!？」

なのはの、そんなむなしい声だけが、落ち着いた海に響いた。

無印編最終話 本当の私の全力全開――1

ジュエルシードの封印後、フェイト達はアースラに居た。

武装局員も含め、戦闘に参加した者で負傷者は少なからず出たが死者は出ず、あの規模の暴走体相手だったら十分以上の戦果だと言える。

そしてラストアタックを決めた功労者であるはずなのは、今クロノに怒られていた。

「まったく！ なんだあの魔法は!!」

「あ、あれは、デイベインバスターのバリエーションで……」

「違う！ そんな事を聞いているんじゃないし、そもそもアレは砲撃魔法とは違う種類の魔法だ！ 大体なんなんだあの威力は！ フェイトが気づいたから良かったものの、下手したら暴走体ごと僕達全員を消し飛ばすところだったんだぞ!!」

「で、でもちゃんと非殺傷設定にはなってたし……」

「あのクラスの集束砲撃に非殺傷なんか関係あるか！ 非殺傷でも衝撃や軽い痛みなら感じると知っているだろうし、説明もしただろう！

あの威力ならその衝撃や痛みだけでショック死する可能性だってあるんだぞ！」

「で、でも、あの時はアレを使うしか……」

「それにも限度があると言っているんだ！ 集束魔法と言うのはため込み、収束した魔力の量が他の魔法より直接影響する魔法なんだ、そんな魔法をあの量の魔力で撃つたら大惨事になるに決まってるだろう！」

「で、でも、私はアレはただの砲撃魔法だと……」

「……そうか、君にはまだ集束魔法の説明をしていなかったな」

しばらく怒鳴って頭が冷えたのか、なのはの言葉に思う事があったのかはわからないが、クロノはその怒りを鎮め、いつも通りの冷静さを取り戻した。

「とにかく、今度僕が集束魔法の訓練に付き合うから、アレを放つ機会

は早々無いと思うが、むやみやたらに使う事はしないでくれ」

「……わかりました。その、ごめんなさい」

そう言っただけなのはが頭を下げると、その話題はそれで一区切りとなり、空気を読んでなるべく呼吸すら控えていたエイミィやユーノは大きく息を吐き出した。

そうして部屋の空気が変わったのを確認すると、同じ部屋にいたりンデイが大きく手を鳴らし、皆の視線を集める。

「皆さん、執務官さんのお説教も終わったみたいなので本題に入ります」

リンデイの言った言葉に、クロノは少しバツが悪そうに視線をそらす。

「ジュエルシードの封印、そして暴走体の討伐。お疲れ様でした。特になのはさんとユーノくん、それにフェイトさんとアルフさんは本当にありがとうございました。あなた達が居なければ私たちは非情な判断を下さなくてはならなかったでしょう」

リンデイのその言葉になのはが手を上げ質問する。

「あの、非情な判断ってなんですか？」

「……それは、この戦艦『アースラ』に搭載されている主砲で、海鳴市毎暴走体を『消滅』させると言う事です」

「そんな！」

リンデイの告げた言葉はなのは達にとってまさに非情な手段だった。いや、非道な手段とも言えるだろう。

魔法文化の無い97管理外世界の一つの国の一区画が消滅すると、巨大な次元震が発生して周りの世界毎消滅するのでは当然前者の方が被害は少ないし、管理局にとってはそちらの方がまだましである。よって、曲がりなりにも提督の称号を与えられ、一つの戦艦を任せられているリンデイは、最終的にその判断を下しただろう。

そこにどのような葛藤や苦しみが有ろうと、世界の守護者とはいえ、時には小を切り捨て大を助けなくてはならない時はあるモノなのだ。

「ですが、それもあなた達の活躍のおかげで選択せずに済みました。

ですので重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました」

そう言つて、リンデイは頭をさげる。

「……なのは、僕が出撃前に君に言った事は強がりでもなんでもない。管理局員としての誇りと責務から言った本心だ。だが、君たちのおかげで助かった事には変わりがない。本当に、ありがとう」

そう言つてクロノもリンデイに続き頭を下げる。そしてその二人につられるように、周りの乗組員や、武装局員が全員頭を下げた。

『ありがとうございました！』

そう言つて頭を下げる局員たちにどう声をかければいいのかかわからずおろおろするなのは達三人。

そんななのは達を見かねて、リンデイが最初に頭を上げ、他の全員
の頭を上げさせた。

「皆さん、なのはさん達が困っているから頭を上げましょう。さて、なのはさん、ユーノくん、それにフェイトさん達。私たちはあなた達になにかお礼をしなくてはならないのですが、なにが良いですか？」

「え？ い、良いですよ！ そんなの、私がやりたくてやった事ですし……」

リンデイの切り出した言葉になのはは声を上げ遠慮するが、それはリンデイが許さなかった。

「いえ、なのはさん。これは組織として必要な事なのです。信賞必罰、管理局は司法行政立法、全てを司っていますが、特に司法の趣が強いのです。そんな私たちが良いことをした人に何もしなかった、では済まされないので。だから、私たちを助けると思つて、何か言つてください。できる限りのことをさせてもらいます」

リンデイにそこまで言われては、遠慮するなど言えなくなつてしまつたなのはは必死に頭をひねらせていた。

一方同じ事を言われているフェイトは、念話でレヴィやアルフと相談していた。

「(どうする?)」

「(あたしは別に何でもいいよ)」

「(レヴィは?)」

『特に何も思いつかないな』

「(だよな)」

元々アリスアの苦しみを和らげるために戦闘に介入したのであり、その目的を達成している今、特にこれと言った事は思いつかなかった。

「(またプレシアに丸投げしたらいいんじゃないかい?)」

『それもそうだね。プレシアならボク達に悪いようにはしないだろうし、ぶっちゃけ今日は早く帰りたい』

「(私も、じゃあそれで良いか)」

「(異議なしだよ)」

『異議なくし』

三人の会議がひとまずの決着をつける頃、なのはの方も何か思いついたのか声を上げた。

「あのー！」

「はい? どうしましたか?」

「えっと、まずフェイトちゃんが良いかどうか聞かなきゃダメなんですけど、少し良いですか?」

「……はい? え、ええ。良いですが」

なのはの言っている意味が良く理解できず、リンディはつい首を傾げてしまうが、そんなリンディは気にせずなのははフェイトへと向き直る。

「フェイトちゃん……」

「なに?」

名前を呼ばれ、返事をしただけなのにフェイトの語気はつい荒くなってしまう。

なのははそれに一瞬、ほんの一瞬だけ怯むが、それでも気を強く持ち、フェイトに言った。

「私と、戦ってくださいー！」

「!!」

なのはから言われた言葉はある意味予想はしていた。しかしそれをこの場で言うとは思わなかったのだ。

「私の我が儘だってわかってる。それでも、もう一度、もう一度だけで良いから、私と戦ってください！ 全力で、本気で、私と！」

なのはのその言葉には熱がこもっていた。その熱はフェイトがなのはに会う度に冷たくなるフェイトの心に火をくべる程の熱だった。

フェイトはその熱を無理やりおさえこもうとした。戦う理由が無い。ただその言葉で。

しかし、それを止める声があった。

『フェイト、受けよう』

それは、レヴィの声だった。

今までレヴィは温泉の時以外でフェイトとなのはの関係について口出しすることは無かった。だが、今この時はレヴィの中にも譲れないものがあつた。

『多分だけど。なのはに、彼女に全力でぶつかればフェイトのそのもやもやも解けるはずだよ』

レヴィは見抜いていたのだ。フェイトの心の波を。なのはに会う度にかき乱されるフェイトの心を。

(でも、私には彼女と戦う理由は……)

『でも、今逃げればそのもやもやはずっとそのままだよ』

——逃げる？ 私か？

レヴィの言葉のたった一言がフェイトの頭の中を支配する。

『今逃げて、彼女とは同じ学校で共通の友達もできてしまった。もし、このままなのはを避ければ自然とアリサやすずかとも疎遠になるよ』

(そ、それは……！)

それは、嫌だった。はじめてお友達。せっかくできた『普通』の友達だった。

学校で話、放課後には共に遊ぶ。ただそれだけの関係。しかし、フェイトが夢見ていた『友達』でもある。

『もし、フェイトがアリサ達と疎遠になったら、きっとアリシアもそうなっちゃうだろうね』

(なんで?! アリシアは、お姉ちゃんは!)

——関係ないはずなのに!

そう思っても、レヴィに伝える事は出来なかった。なぜなら、レヴィが先に言葉を紡いだから。

『関係ないわけ、無いじゃん。アリシアは多分友達よりフェイトの方を優先するよ。フェイトが一人になりそうなら、友達と疎遠になってもフェイトの側に居ると思うよ』

(なんで?)

——なんでお姉ちゃんはそこまで?

そこまで、自分を愛してくれるのか?

『フェイトの、お姉ちゃんだからだよ。フェイト、もう逃げるのはやめよう。なのはとぶつかり合って、もやもやも、ごちやごちやな頭の中も全部吐き出そう。なのはにぶつけよう?』

レヴィの言葉がフェイトのぐちゃぐちゃになりかける頭の中に入ってくる。

姉の為、姉を一人にしない為。

レヴィの為、レヴィがそうしろと言うから。

彼女の為、彼女がそうしたいと言うから。

あらゆる言葉が、あらゆる言い訳がフェイトの中でめまぐるしく現れては消えていく。

『甘えるなよ！ フェイト・テスタロッサ!!』

そんなフェイトを感じ取ったのか、レヴィが大声を上げる。

幸い、今の状況ではその声は自分以外には聞こえていないが、それでもその声に驚き、肩が飛び上がったフェイトを、目の前のなのはは心配そうに見つめる。

「フェイト、ちゃん？」

「ご、ごめん、もう少しだけ、まって、考え、させて」

「う、うん。良いけど……」

なのはに震える言葉で伝え、もう少しだけの猶予をもらう。

——なんで？ なんでレヴィは怒るの？ なんで？ なんで……。

なにもわからなかった、前後不覚に陥ったように、まるで唐突に視力がなくなっただかのように目の前が真っ暗になる。

生まれたところから一緒に居て、支え続けてくれたレヴィからの叱責は、それほどフェイトに衝撃を与えていた。

このまま意識を失ってしまいそうな程のめまいの中で、それでもレヴィの声だけは澄んだ空気に響くように良く聞こえる。

『もう、全部他人に任せるのはやめよう？ 自分が動く理由を、アリシアに、プレシアに、ボクに。誰かに委ねるのはやめようよフェイト。そうしないと、本当にフェイトは『お人形』になっちゃうよ？』

人形、『お人形』。どこかで聴いた事のある響きだった。

——あれは、確か、そう……。

レヴィと出会ってから、フェイトになってから1年がたった頃、プレシアとぶつかり合った時、プレシアが言った言葉だった。

——お人形を娘だと思えですって!?!——

そう、確か最初、フェイトはプレシアにとっては『お人形』だった。
——でもそれは、あの時終わったはず……。

そう、あの時レヴィのおかげでフェイトは『お人形』ではなく『娘』
になれた。なれた、筈だった。

——でも、私は、ずっとお人形だったの？

自分の行動を他人に委ねるな。そう、レヴィは言った。

確かに、今までのフェイト自身を振り返ればフェイトはいつも受動的だった。

“フェイト”になる前、まだ“アリシア”だった頃は、母から言われた勉強だけを淡々とこなしていた。それしか知らなかったし、それだけやれば母が喜んでくれたから。

“フェイト”として生まれたころからレヴィに何をしたらいいか聞いていた。アルフと出会った時も、レヴィに背中を押されなかったら結局森の奥には行かなかったかもしれない。

アリシアが元気になってからは、何時もアリシアに手を引かれていた。常に、アリシアはフェイトの隣か前に居た。

そうしてついさつきも、自分が何をすればいいのか、何をしたいのかわからなくなったフェイトにアリシアは理由をくれた。

アリシアが言わなければ、結局フェイトは今も側でアリシアの手を握っていただけだったかもしれない。

フェイトは、やつと気づいた。今まで自分がどれだけ周りに依存していたのか。どれだけ主体性が無かったのか。

環境が悪い、自立させるよう躱けなかった家族の責任。そう言ってしまうばそうなのだろう。

だが、レヴィはそれを終わりにしようと言うのだ。

『フェイトが、唯一誰からも言われなくて、感情的になるのが、なのはとの事だけだったんだよ』

——そう、だったかもしれない。

別に誰にも、彼女に対し苛立ちを覚えろとは言われていない。誰も、彼女を叩きのめせとは言っていない。

それでも、フェイトはなのはに苛立ちを覚え、なのはを叩きのめした。

『フェイトがなんでなのはが気になるのか、なのはに苛立つのか、ボクにはわからない。だけど、もう一度ぶつかれば、きっとわかるから』
なぜなのか、それは自分でもわからない。だけど、レヴィはわかる
と言う。

「わかった」

その言葉は自然と口からこぼれていた。レヴィに言うでもなく、なのはに向かって言っていた。

「戦おう」

視界を取り戻した瞳でなのはを見つめ、床を踏みしめた足でしっかりと立ち、宣言した。

「もう一度、全力で」

「……うん！」

力強いフェイトの言葉に触発されたのか、なのはは満面の笑みを浮かべて答えた。

「リンデイさん、お願いします。私とフェイトちゃんが全力で戦える場所をください。誰にも迷惑を掛けずに、私たちの全力を出せる場所をください！」

なのははリンデイに振り向き、お礼の内容を言った。

「……わかりました。ですが、時間を貰いますよっ。」

「はい！」

「大丈夫です」

「それでは、そうですね1週間。1週間後の昼、海鳴臨海公園で待ち合わせましょう。それで良いですね？」

「はい！ ありがとうございます！」

「よろしく、お願いします」

リンディは快く引き受けてくれたことに二人はお礼を言った。

「はい。それじゃあフェイトさんは、何かありますか？」

「……少し、母と相談させてください」

「そうですね、わかりました。できるだけ早く決めて連絡してください」

「はい」

「それじゃあ、今日は遅くなったので解散しましょう。なのはさんも、お家に送りますよ」

フェイトの要求もあっさり通り、この場はそうして解散となる。

「フェイトちゃん」

別れ際、なのはが声をかけてきた。

「私、負けないから」

「……私も、負けるつもりはない」

お互いがお互いに発破をかけ合い、その場はそのままもう何も言わず帰路についた。

無印編最終話 本当の私の全力全開―2

なのはは家に帰り、リンディと共に両親に事情を話していた。少し、大人の話があるからと、今は自室のベッドの上で物思いにふけている。

それは、当然ながらフェイトの事だった。

どうすれば勝てるのか。それは今日全力のその上、更に全力、まさに全力全開のフェイトを見てより深く考えなくてはならない命題と化した。

あそこまでの大魔法、アレにはさすがに移動砲台と称されたものでも耐えきれるとは到底思えなかった。

ならば必要なことはアレを撃たせない。フェイトに大魔法を使わせないようにすることだ。

〈マスター。決戦の日まであと1週間あります。それまでに色々対策を練りましょう〉

「うん。そうだね」

レイジングハートの言葉に素直に頷く。

たった一週間であるフェイトに対して何ができるとは思えないが、やると決めたのだ。後悔しないように、フェイトへの未練を打ち切る為。

そうして色々考えていると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「なのは？ 起きてる？」

部屋の外から声をかけてくるのは姉の美由紀だった。

「どうしたの？ お姉ちゃん」

「お父さんたちが呼んでるから、下に来てくれない？」

「わかった〜」

「それと、ユーノも連れてきて」

美由紀はそれだけ言う顔も見せず下に降りて行った。

——いったい、なんなのだろうか？

なぜ呼ばれたのかわからず、首を傾げながら眠りかけていたユーノを引き連れ下に降りると、そこには何とも言えない剣呑な雰囲気であった。

その場に居るヒトを確認すると、父、士郎はいつもの優しい顔では無く訓練で見せるような少し険しい顔をしている。母、桃子を見るといつも通りの母のように見えるが、なにか得体のしれない悪寒を感じる。

兄、恭也はその不機嫌さを、敵意を隠そうとせずリンデイを睨んでおり、姉の美由紀もどこかリンデイを憎んですらいる様子が見える。

そして睨まれているリンデイの頬はすこし赤く染まっているようにも見えた。

「なのは、こっちに来なさい」

子供心に恐怖を覚えながら士郎に呼ばれ近寄る。

「なのは、話は全部聞いた」

——はて、全部聞いたとは何のことだろうか。

そう、とぼけてみるがなのはもうすすり気づいていた。なのはは人の顔色を伺うのが得意だ。それは幼い頃のある理由で身についてしまった能力なのだが、そんな察しの良いなのは、リンデイの顔を見た時になぜ自分が、自分とユーノが呼ばれたかあらかた見当は付いていた。

「全部って、全部？」

「ああ、全部だ。なのはが最近隠している事も、リンデイさんの下で何をしてきたかも、全部聞いた」

——ああ、やはりそうか。

士郎のその言葉を聞いてなのはの中に諦めの感情が浮かぶ。

「少し、我慢しなさい」

士郎のその言葉が聞こえるのとほぼ同時に、甲高い破裂音が家に響

き、なのはの頬に痛みが走った。

「なぜ、ぶたれたか、わかるね」

「……心配を、かけさせた、から……」

なのはの答えを聞いて士郎は初めて仏頂面をやめ、少し悲しそうな表情へと変わる。

「そうだ。じゃあ、言わなきゃいけない事は、わかるね」

「……ごめん、なさい」

心配かけさせてごめんなさい。

なのはが謝ると同時に、美由紀がなのはに抱きつき、桃子がしがみ頭を撫でてくる。

「なのはのバカバカツ、もつと私たちを頼ってよ。私達に魔法は使えないかもしれないけど、お手伝い位はできるんだからっ！」

そう言う美由紀は泣いていた。

「なのは、良く頑張ったわね。それと、ごめんなさい。頼りない家族で、相談もできない私達で」

そう言いながら、桃子は頭を撫でてきた。その手は、少し震えている。

「わ、私は……」

なのはは何か言いたかった。違うのだと、そうじゃないのだと、声を荒げて言いたかった。しかし、なのはの瞳からも雫がこぼれ、その想いは言葉にならなかった。

「僕が……」

だが、なのはを代弁してくれる人は居た。いや、なのはを庇ってくれたのかもしれない。

「僕が全部悪いんです！ 魔法の事はこの世界の人には秘密にしなきゃいけないって！ 僕が言っつて！ だから……」

そう叫ぶユーノは、フェレットのまま、自分の姿など気にせずなのはを擁護する。

「ユーノ、いやユーノくんと呼んだ方が良いかな」

士郎はそんなユーノに、落ち着いた声で喋りかける。

「僕達は、君も、叱らなきゃいけない」

「え？」

「もつと大人を頼りなさい。事情は全て聞いた。君が君の生まれ故郷ではもう大人として扱われている事を、管理局、だったか。その組織に通報してもあしらわれた事。だがね、1人ですべて解決しようと言うのは思い上がりだ。もつと大人を頼りなさい。自分が大人だと言うなら、見栄を張らず、もつと周りを頼りなさい」

静かに、淡々と、しかし力強く士郎はユーノを叱る。

「……はい。すみません、でした……」

そうしてユーノは謝った。泣きながら謝った。何時振りの涙だろうか。ここ数年はとんと涙を流すと言う事をしていない気がする。

それほど、ユーノが育った環境と言うのは特殊であった。特殊すぎたのだ。

「なのはさん、ユーノくん」

その空気をなるべく壊さぬよう、リンディは静かに声をかけた。

「もう一度、謝らせてください。あなた達を危険な目に合わせて、すみませんでした」

そういつてリンディは深く頭を下げた。

「リンディさん、でもリンディさんは私の我が儘を聞いてくれただけで……」

「そ、そうですよー」

「それでも、私はもしもの保険を、あなた達自身に書いて貰いました。いえ、書かせました」

「？ ……あ」

そう言われ、なのははようやく思い出す。自分が今日出撃する前に書いた紙の事を。

「い、しよ……？」

「はい。ユーノくんにも書いて貰いましたが、管理局には魔導師を臨

時で運用するために必要な制度の一つに、『遺書を書かせる』という物があります」

そこまで言うところリンディは少し区切り、再度話し出す。

「これは、つまり端的に言ってしまうえば責任逃れのための制度です。本人がこちらの忠告を聞かず危険行為に走つたと証明するための。なのはさんは言いましたね『ズルいですね』と。確かにズルいですが、ズルい大人です。私を許さなくていいです。ですが、私は最後の私の責任として、ご家族に全て話しました。ご家族には、家族であるあなたに起こった事を知る権利があり、私には話す義務があります」

リンディはそこまで話すと、すこし息をつき、自分を落ち着かせる。

「多分、一週間後のなのはさんと約束を果たしたら、私たちは二度と会うことは無いでしょう。ですからなのはさん、最後に一言だけいいですか？」

「……はい」

なのはが頷くのを確認するとリンディはなのはに近づき、なのはを抱きしめる。

「なのはさん、生きていてくれて、ありがとうございます。私の息子を、救ってくれて、ありがとうございます。この町を救ってくれて、ありがとうございます。ありがとうございます、ます」

30を軽く過ぎた女性が、10も満たない少女に抱きつき、泣きながら感謝を述べる。それはあまりに、滑稽な光景だった。

だが、それを笑える者はこの場には居ない。

リンディのその言葉で、リンディがどれだけ自分を憎んでいるのかわかってしまったから。少女を、息子を自ら死地に追いやらなければならぬ辛さと、組織の一員として義務を果たさなければならぬ責任。それらすべてを背負い。そして、『管理局員』として判断を下したリンディ。

「リンディ、さん」

なのははそんなリンディに何も言えず、ただしがみつく女性の背中

を撫でていた。

* *

「お騒がせして、すみませんでした」

あれからしばらくし、落ち着いたリンディは直ぐに帰ることになった。

「もう夜も遅いし、家に泊って行けば……」

桃子はそう言うが、リンディはその言葉に首を横に振る。

「すみません。これでも、忙しい立場なんです。被害が出てしまったと予想される地域への支援や、この世界の行政への根回し、それと、もう一人、謝らなければならない子がいますから」

「そう、ですよ」

「はい。ですから、今日はこれで失礼します」

そう言つて立ち去ろうとするリンディを桃子が呼び止める。

「リンディさん」

「はい？」

「また、いらしてください。今度は母親同士、お喋りしましょう」

「……ふふつ。はい。きつと」

桃子の言葉にリンディは少し微笑み、その場を後にした。

* *

「さて、なのはもつと色々話をしてほしいが、今日はもう遅いから寝よう」

「うん。それじゃあお父さん、お母さん。お姉ちゃんにお兄ちゃん。

おやすみなさい」

「ああ、お休み」

「おやすみなさい、なのは」

「おやすみ、なのは」

「おやすみ」

なのはは、やっと、暖かい家族を手に入れられた。そんな気すら、していた。

翌日、高町家では、なのはの大演説会が開催されていた。

なのはが関わった魔法の話を、家族全員で聞く。ただそれだけの話なのだが。

そのなかで、フェイトの話になると、なのははひたすらフェイトの事をしゃべった。

それはもう、まるで恋する乙女のように、フェイトについて知っている事を話した。

そうして、話し終える頃には朝食の後から始めたはずが、すでに昼食の時間になっていた。そのまま、軽く昼食をとる事になり、みなが食卓に着いたころ、士郎がなのはに喋りかけた。

「なのは、その、フェイトちゃんとは、もう一度戦うんだよね」

「うん。一週間後、リンデイさん達が戦っても被害の出ない場所を作ってくれるから、そこで」

「なるほどなあ」

なのはの答えを聞くと、士郎はなにか悩み、暫くすると言いくいのか歯切れ悪く喋れ始めた。

「なあ、なのは。その、父さんたちが、あー、武道をしているのは、知ってるよな」

「? うん。毎朝お稽古してるの見てるよっ」

「あー、で、だな。その魔法に使えるかはわからないが、そのー。なのはも、やって見るか?」

「え?」

「なっ!」

「ちよつと!!」

士郎の言葉になのはは首を傾げ、美由紀と恭也は何を言っているのか信じられないと言う様に声を荒げ、座っていた椅子から急に立ち上がる。

「何言ってるのよお父さん!」

「そうだ!　なのはにはまだ早い!　いや、なのはには教ええないって言う話じゃなかったのか!？」

二人して父である士郎を責める美由紀と恭也。しかし、そんな言葉を受け流し、士郎は静かに言った。

「確かにその予定だったが、なのはが戦いの世界に身を置きたいと言うなら話は別だ。それに、力の意味を知らない子供に持たせられる程、*“力”*と言うのは甘くない事はお前たちも分かっているだろう」
「……」

「そ、それは……そうだが」

「俺は何も御神流を継げと言っている訳じゃない。ただ、なのははリンデイさんが頼りにしてしまいう位大きな力を手に入れたんだ。なら、『力を振るう意味』を知っておく必要がある。と、俺は思ったんだが、どうだ?　なのは」

士郎のその言葉に美由紀と恭也は反論する事ができなくなり、大人しく席に座る。

そうして話を振られたなのはは一二もなく頷いた。

「うん!　やる!　頑張る!」

その言葉は珍しく子供らしい返事であったが、それが武道を習う事とは、何とも子供らしくない。いや、ある意味子供らしいかもしれないが。

「わかった。じゃあ、今日の午後から訓練だ。一朝一夕で何とかなる物ではないが、なのはには『戦う事の意味』と『力を振るう意味』を徹底的に叩き込む。ついて来れるか?」

挑発的な笑みを浮かべながら、なのはに聞く士郎。その士郎に対してなのはは、真面目な顔で、大きく頷いた。

無印編最終話 本当の私の全力全開―3

アースラでなのはと決闘の約束をした後、フェイト達も当然ながら家に帰っていた。

アルフの転移で家に帰ると、そこにはプレシアとリニスと二人、いや三人の帰りを待っているところだった。

「フェイト！ 良かった」

「フェイト、レヴィ、それにアルフも。お帰りなさい」

フェイトの無事な姿を見てリニスは胸をなでおろし、プレシアは帰ってきた三人に微笑む。

「ただいま母さん、リニス。……アリシア、は？」

フェイトは帰宅の挨拶を済ませると、自分が出撃する理由となったアリシアの容態を訪ねた。

「アリシアならもう大丈夫よ。今は静かに寝てるわ」

「ん、そっか」

プレシアのその言葉を聞き、フェイトはようやく安心し、表情をほころばせる。

「ねえ、母さん。話があるんだ」

「どうしたの？」

「あのね」

そうやってフェイトはプレシアに話し出す。

『最強モード』を初めて実戦で投入した事。紆余曲折あり、暴走体はなのはが止めを刺したこと。

その事のお礼としてリンディに何か要求できる事。その要求でなのはがフェイトに決闘を申し込んだこと。そして、その決闘を受けた事。

「そう。それは、フェイトが決めたの？」

「……うん。確かにレヴィに言われて、って事はあるかもしれないけど。私もあの子とは、決着を付けなきゃいけないと思ってたから」
「なら、良いのよ。頑張りなさい、フェイト」
「うん」

フェイトの話聞き、ある程度の事情を察したプレシアは優しくフェイトの頭を撫で、そう言うだけに収めた。

「それと、管理局からのお礼んだけど……、私達じゃ考えても特に何も思いつかなかったから、だから母さんにまた頼んで良いかな？」

「ええ、わかったわ。お母さんに全部任せなさい」

「うん」

「それじゃあ、今日は疲れたでしょう？ もう寝なさい」

「うん。お休み、母さん、リニス。いこアルフ」

「あいよく」

そうやってフェイトはアルフを引き連れ自室へ行く。

その後ろ姿を見送るとリニスに声をかける。

「リニス、悪いんだけど通信機を持ってきてもらえるかしら？」

「わかりました」

リニスに指示をだすと、背もたれに体を預け、リニスが煎れてくれたお茶を飲む。

そうして少し寛いでいると、リニスが通信機を持ち戻ってくる。

「相手は管理局、と言うよりアースラのリンディ艦長でよろしいですね？」

「ええ」

リニスは一応の確認をすると、通信機を操作し準備を終えるとプレシアに差し出す。

そうして、暫く待つと通信機からホロウインドウが現れ、そこに一人の女性が映る。

「……お久しぶりですね、テストロツサさん」

「ええ、お久しぶり、ハラウン提督」

そこに映されたのは、艦長室で仕事をしていたと思われるリンディだった。

「まさか、このような形で連絡をしてくるとは欠片も思っていないませんでした。待ってれば、明日こちらから連絡をしたのですが……」

「ええ、そうでしょうね。ただ先手を打っておきたかっただけよ」

「ただそれだけで、この回線” を使ってくるだなんて、あなたは随分と剛毅な人ですね」

リンディはそう言うのと、目つきを鋭い物へと変えプレシアを睨む。しかし、睨まれた本人はどこ行く風と言った風に、その視線を受け流す。

「ま、脅しだと素直に受け取って頂戴」

「わかりました。さすがの私も、この回線” に接続できる『個人』と事を荒げたいとは思いませんから」

先ほどからリンディの言うこの回線” と言うのは、それは当然、アースラ、それも艦長室へとつながるホットラインの事である。通常であれば、よほどの緊急指令が無い限りは使用されないそれを通じてプレシアがコンタクトを取ってきた事にリンディは衝撃を受けていた。

しかし、提督の位を戴き、艦長の任に付いているリンディの経験とプライドが、外見上の平静を取り繕っていた。

「それで、用件は何でしょう。テストロツサさん」

「ええ。今日家の娘に、フェイトに『何か望みがあれば可能な限り応える』と言ったそうね」

「……はい」

「その要望は母親である私に一任する、とも」

「はい。そう伺っています」

「その件なのだけど、『私達の事を上に報告しない』で欲しいのよ」

「……それは一体なぜなのか、理由を聞いても？」

プレシアの要望に怪訝な思いを感じながらも、それを悟られないようあたかも「一応」と言う体を崩さないリンディ。

「いえ、ただどうせ戦闘の光景は録画してあるんでしょうけど、それを見てたらわかるでしょ？ 家の娘の特殊さを」

「……」

プレシアの言葉に返答しない、いやできないリンディ。それはリンディ自身がプレシアの言葉を肯定してしまう事なのだが、リンディには沈黙以外の返答ができなかった。

「今はまだ、世間に出ていい子じゃないのよ。あの子は」

「……それは、過保護に過ぎるのでは？」

「別に、あなたには関係ないでしょう」

リンディの皮肉を、そのまま受け止め言うプレシア。

「まあ、とにかく映像を破棄、それか家の子の場面だけ編集でも良いけど、してちょうだい。一般人を2人、ではなく3人もあの激戦に向かわせたなんてあなたも人聞きが悪いでしょう？」

「2人も3人も変わりない、とも言えますが」

「ええ。普通なら、そうでしょうね。最初の1人も2人も変わらないでしょう。ただ、3人目は違うのではなくて？」

プレシアの言った言葉の意味を分かってしまうが故に、リンディは苦虫をかみつぶした思いをしていた。どうにか、表情には出さなかったが。

「どうせ、あの2人にはなにか契約書か遺書でも書かせてるのでしょう？ 別にそれ自体を悪いとは言わないわ、規則ですもの。ただ、うちの子は、書いてないけど」

「……」

「どうする？ 別に私はあなたが仕事しないから家の子が『正義感』に駆られて戦闘に介入した、と声を荒げてても構わないのよ」

プレシアからリンディに、止めの言葉が放たれる。途中から劣勢だったが、最後の一言でリンディの敗北は決定したような物だ。

つまり、プレシアはこう言っているのだ「こちらの要求を飲まな

「かつたらお前ら全員職を失うぞ、と」

そして、その意味を強めるために、わざわざホットチャンネルにアクセスしてまで先手を打ったのだ。

——それができる技術と、伝手がこちらにはあるのだ——と脅すために。

プレシアの言った事をそのままされてしまうと、それは管理局の正義を疑う民衆が出てきてしまう可能性がある。それは、リンデイはともかく、もつと上にとつてはまずいことこの上ない。であれば上の判断として、プレシアに示談を持ちかけるか、もしくはプレシアを断罪するかしかないが、管理局はあくまで『次元世界の平和を維持する組織』であり、独裁者では無い。もし、後者の行為を行ってしまったら、それこそ『管理局の正義』を損なう危険性がある。

ならば、前者しかないのだが、プレシアはそれをわかってこちらに要求しているのだ。

——リンデイも、他のアースラ乗組員も安全に平和に事を済ますか、お互いに損害を出しあうか——

損害を出し合う行為はまさに百害あって一利なしとしか言えない。ならば、当然リンデイは受けざるを得ない。

その事を理解しているがために、リンデイは今まさにその表情を初めて崩す。

「わかりました。そちらの要求をのみます」

「よかった。私も世話になるあなた達に悪い事はしたくは無いのよ」

苦虫を噛み潰したような表情のリンデイと打って変わり、プレシアのその表情はとても晴れやかに、黒い笑みが浮かんでいる。

「それじゃあ、こっちからの用件は以上よ。お互いに満足のいく結果になって嬉しいわ」

そう言つて席を立つプレシアの顔には完全勝利した勝者の笑みが浮かんでいる。

「……少々待っていただいても、かまいませんか？」

そうして、通信を切ろうとするプレシアをリンデイが止める。

「……なにかしら？」

「先程とは別の要件で、そちらの御嬢さん。フエイトさんに、言いたい事がありました」

「なにを言いたいのかしら?」

リンデイの言葉を聞いて、目を細めるプレシア。その視線からは、リンデイを警戒する意思が読み取れる。

「いえ、特に何をしようと言うわけでは無いのです。ただ、直接会って、謝罪とお礼を、と思ひまして」

「……そう、ならせめて明後日以降にしてもらえるかしら?」

「……なにか、理由が?」

「別に、ただ明日一日くらいはあの子たちを休ませてあげたいだけよ」

「そうですか、わかりました。では明後日の昼過ぎ、そうですねおやつ時位でしょうか、そちらに伺いたいと思います」

「ええ。わかったわ」

「それでわは」

そう、お互いに挨拶して本当に通信を終える。

「お疲れ様です」

その頃合いを見計らい、リニスがプレシアに新しいお茶を入れたカップを差し出す。

「ありがとう」

「どうですか?」

少ない言葉だがそれでもお互いに何が聞きたいのかはわかる。曲がりなりにも使い魔とその主なのだから。

「まあ、こちらの思った通り、と言うところかしら」

「あちらは、信用できるのでしょうか?」

リニスの言いたい事は至極その通りであり、あちらが言い出したこととはいえあちらは要求をのまなくても良いのだ。特に、今回は報告をどうぞごまかすのか等については一切話し合っても居なければ、確認を取る事もしないのだから。

「あなたの言ってることもその通りだけど、あの人は信用できるわよ」

「……それは、レヴィがそう言っていたから、ですか？」

「それもあるけど、私が直接会って、話し、感じた素直な思いよ。それに提督とか言うそこそこの地位についてる局員にしては随分まともそうじゃない。パトロールなんて任務に就くくらいだしね」

「だったら」

「ええ。〃次〃も厄介になるのだし、ここはあちらを信用しとかなないと」

「……それにしても、随分と虐めていたようですが」

「あら、いじめだなんて心外ね。格の違いを教えてあげたのよ」

リニスの言葉に不敵に笑うと、貰ったお茶を飲み干し、リニスに渡す。

「ありがとう、美味しかったわ。私も今日は寝るから、あなたも休みなさい」

「はい。それでは、おやすみなさい。プレシア」

「お休み、リニス」

そうお互いに言っていると、プレシアも自室へと戻りテストタロツサ家も静かになった。

翌日、しっかりと眠り、完全復活したアリシアは、自室で隣に寝ているフェイトの心配をしていた。

「大丈夫？ フェイト？」

「だ、だいじよ、ぶ。だよ」

アリシアの言葉に、微かな声で返事をするフェイト。しかし、言葉の内容とは裏腹に、その様子は全然大丈夫には見えない。

「ほんと？ えいつ」

怪訝そうに首を傾げるとアリシアはフェイトの体をつつく。

「~~~~~あつ……………」

その瞬間、フェイトの口から声にならない叫びが出る。

「っ——ううっ」

しかし、その叫びすら自身の体を痛めつけるのか、さらに声を出さぬよう悲鳴を押し殺すフェイト。

「やっぱりダメっぽいねえ。レヴィは〜?」

『ボ、ボクも、ダメみたい。体今無いはずなのに、痛い、痛すぎる……』
フェイトが、いやフェイトとレヴィの2人が味わっている痛みは、端的に言ってしまうえば『筋肉痛』であった。

なぜ、フェイト達が筋肉痛になっているのかと言うと、それは前日の戦闘。ひいては、『最強モード』の所為である。

本来、適応されないレヴィの転生特典である、『身体能力の強化』これが少なからず適応されているとはいえ、本来フェイトの体では出せない身体能力をだし、なおかつ魔法ランクSか少し下に分類される魔法を立て続けに使用した反動が出ているのである。

なぜレヴィまで痛がつているのか、と言うとこれは『最強モード』になる為の催眠魔法の弊害が残っているからであり、レヴィが感じている痛みはフェイトの感じている痛みとほぼ同じなのであった。

故にフェイトとレヴィの主導権を変えた所で、表にでるのが変わるだけで、痛みが緩和されたり、無くなったりはしない。

「はあ~~~~」

そんな、痛みでのた打ち回りたいが、痛すぎて動けない妹を見ながら、アリシアは大きいため息を吐いた。

無印編最終話 本当の私の全力全開―4

地球の衛星軌道上に戦艦『アースラ』は浮かんでいる。

第97管理外世界で起きた、ロストログア災害、通称「ジュエルシード事件」は幕を下ろした。

そんなアースラでは現在後処理に追われており、けが人の治療、報告書の作成。そして何より、被害のあった現地への後処理が多大な忙しさを作っていた。

関係各所への根回し、事件が起きたのが管理外世界なので、魔法がバレないように情報操作等。その忙しさには、魔法の使えない事務官も、実働要員の局員も分け隔てなく襲われていた。

そして、そんな中アースラ内で2番目の権力を誇るアースラ搭乗執務官であるクロノもまた、忙しさに時間を奪われていた。

「……………ふう」

そんなクロノは、書類整理を一段落させ背もたれに体重を預け一息つき、冷めたお茶を飲みつつ、今回の事件をどのようにまとめて報告すれば良いか、を悩んでいた。

「クロノくん、入るよ〜」

そんな折、そう言うや否や別所で仕事をしていたエイミイが部屋にやってくる。

「エイミイか、どうした」

「いや、今日の映像の解析とか諸々が終わったから一応報告に、と思って」

「そうか」

エイミイはアースラの通信主任であると同時に、クロノの執務官補佐である。それは、通常時通信士としての仕事が無いときは、基本的にクロノの仕事の手伝いをしている、と言う事であり、今回の用事もクロノに頼まれた物だった。

「どんな感じだった」

「とりあえずこれが、資料で、実際に映像見ながらの方がわかりやすいかな」

そう言うときエイミーはクロノに紙束を渡しながら、機械を操作し映像を映し出す。

そこには今日の戦闘、特に途中から現れたフェイトが映し出されていた。

「ここからフェイトちゃんの詠唱が始まる」

「ふむ、珍しい詠唱だな。魔法の起動キーも言っているようには見えない」

クロノが気になった事は当然フェイトの事であり、フェイトが使った魔法。いや、フェイトがその魔法を使った事実が気になっていた。

「それで、ここで詠唱が完了すると……」

「魔力値が2倍以上、か」

「うん。魔力保有量は詳しい検査ができないからわからないけど、少なくとも次に使う魔法の発揮値は、前回測定したフェイトちゃんじゃあ、出せない筈だよ」

エイミーがそう言っている間に、映像は『フェイト』が魔法を放っている場面だった。その映像が映った瞬間にエイミーが映像を一時停止する。

「ここ、このスフィアの色」

「ああ、やはりか」

エイミーが指さす箇所を見ながらクロノは得心がいったように頷く。

「現場では、見間違い、と思ったんだがな」

そこには、金色と青色の混ざりあったような、マーブル色をした魔力光でできたスフィアがあった。

「確か、前回の時の彼女の魔力光は……」

「うん、金色だけ、だったよ」

そう言いながらエイミーは別枠でなのはとフェイトが戦っている映像を映し出し、クロノに見せる。

「まさか、魔力光が変わるだなんてな。いったいどういう原理なんだから」

そう、クロノが懸念していた事は、フェイトの強化自体もそうであるが、何より『魔力光の色が変わった』と言う事実を訝しんでいたのである。

魔力光の色と言うのは千差万別で、その本人のリンカーコアが生み出す魔力の波長によって決定される。

同じ色の魔力光が存在しないわけではないが、詳しい検査をする、人間の目には同じ色に見えても微妙に波長が違う事がほとんどであり、その魔力の波長を本人認証に使用するシステムなども開発されている位である。

そして、それは生まれつき決定され、生まれてから死ぬまで魔力光、すなわち魔力の波長のパターンが変わったと言う事例は今まで発見、報告されていなかった。

だから、クロノは気になったのである。フェイトの魔力光の色が変わったと言う目の前で起きてしまっている事実。

「魔力発揮値や魔力保有量が変わるのは納得できる。強固な魔力リミッターでも掛けて居ればそれで済む。半分以下の魔力でまともな戦闘ができるか、と言われればNOと言うが……」

そうクロノは二つの映像と、手元の資料を見ながら独り言を呟く。「逆に、急激に魔力が増してもその状態での戦闘訓練を十分に積まなければ、まともな戦闘をこなすことは不可能と言っても良い……」

しかし、リミッターを掛けたり、何らかの方法で魔力量を増やしたとしても、魔力光——魔力の波長パターンは変わらない。二色の魔力光が混ざる事例としては、他者が外部から魔法に直接魔力供給したパターンだが、それは本来の発動者の魔力光の周りに、後から供給された魔力光が纏わり付くように発現する、という研究結果が出ている。

つまり、今回のような、魔法自体の中で色が混ざると言う事は無いはずだ」

独り言を自分が言っていると言う事すら意識せず、クロノの意識は

仮説と記憶している事例の海に沈んでいく。

「では考えられる仮説としては、リンカーコアが二つある状況。リンカーコアが魔力の波形を形作るなら、二種類のリンカーコアを所持していれば魔力の波形が二種類あってもおかしくは無い。

しかし、現状リンカーコアの解明はほとんど進んでいない。なぜリンカーコアを持つ者と持たざる者が居るのか。その原因すらつかめていない。わかっているのは、遺伝が関係している言う事だけ……。ならば、僕達が知らないだけで、生まれつきリンカーコアが二つある、奇形児に近い形の存在が居てもおかしくは無い。無い、が……」

そこでクロノの思考はこれからの事へと移り変わる。

「この事が発表されたらどうなる。彼女は要注意観察どころか、なんらかの組織に誘拐されモルモットとして扱われてもおかしくは無い」
この世界の全てが優しいわけでは無いことをクロノは知っている。
執務官と言う、刑事であり検察官であり、裁判官である彼は自分の仕事で関わらなければならぬ人間を多く見てきた。それは、善良な市民が冤罪を掛けられていたり、外道を裁くための場だったり。
年若いながらも、多くの人間をクロノは見てきたのだ。

「エイミー、僕は、どうすれば良いかな……」

そう、隣にいるエイミーに弱音を吐くクロノ。

その言葉にエイミーは答えられなかった。管理局員としては、起きた事件は隠さず報告する義務がある。しかし、これが知れ渡ってしまったえばフェイトは狙われる事になる。ヒトの口に戸は建てられず、この世に残った情報は必ずどこかから漏れる。絶対の秘密と言うのは無理に近いのだ。

そしてクロノの前なので言わないが、フェイトを狙う相手が犯罪者だけとは限らない。エイミーは、クロノもそうだが執務官、執務官補佐等と言う役職に居ると、心無い管理局員や、管理局勤めの研究者なども見かける事がある。

たとえ、もし、管理局外にこの事実が漏れなかったとしても、管理局内部で隠すと言う事は不可能に近い。管理局外部はもちろん、内部

にすら隠し通す必要があるのなら、その方法は、この事実と仮定、そしてそれに至る可能性のある情報を知っている者を、ごく少数の人間だけに留めるしかない。

それは、この事実を『報告しない』と言う事他ならないのだ。

エイミイもその事がわかつているがゆえに、クロノが管理局員の義務と一人の少女の将来の間で板挟みになっている事も分かるがゆえに、何も言えなかった。

「……」

「……」

そうして二人が黙りこみ、暫く時間が経ったとき、クロノに通信が入る。

「はい。こちらクロノ・ハラオウンです……、つて母さ、艦長」

通信をかけてきたのはアースラの艦長、リンディだった。

「どうしました」

「今日はお疲れ様でした。クロノ執務官」

「はっ」

リンディの言葉に、敬礼をして答えるクロノ。その様子を見ながら、リンディは言葉を続ける。

「クロノ執務官、報告書の進捗はどうですか？」

「そ、それは、その……」

リンディにそう言われクロノは言いよどむ。先ほど考えていた事も理由ではあるが、何よりそれほど進んでいる訳では無いからだ。

「進んでいないようですね」

「いえ、その……はい。申し訳ありません」

謝るクロノにリンディは微笑む。

「いえ、今回に限ってはちょうどよかったです。前回の戦闘の報告書、及び映像を含めた参考資料から『フェイト・テスタロッサに関連する

部分を消去』してください」

「なっ!?!」

リンデイの口から放たれた言葉にクロノは驚愕する。

「で、ですが、それは―!」

「はい。言いたい事はわかっています、クロノ執務官。ですが、これはテストarroツサさん、母親の方ですが、彼女から我々が払う報酬として提案され、私はそれを承諾しました。

それに、クロノ執務官もどう報告すべきか悩んでいたのでは?」

「それは……」

リンデイの質問にクロノは言葉を詰まらせる。

「ですから今回の事は我々、アースラ乗組員での嚴重機密事項とし、箝口令も引きます。良いですね、これは艦長命令です」

「……わかりました」

クロノは澁々と言った体で了承する。しかし、ある意味助かったと言える助かった。どのように報告すれば良いのかも悩んでいたし、ある意味これはリンデイがすべての責任を取ってくれと言ったような物なのだ。

「ですのでクロノ執務官、あなたは引き続き報告書の作成と、資料の編集、添削をお願いします」

「はっ! 承りました!」

艦長の指令に綺麗な敬礼を返し、アースラ内での通信は終わった。

無印編最終話 本当の私の全力全開―5

ジュエルシード21個を封印し終えてからちょうど一週間。戦艦アースラのブリッジにはいつもより人が集まっていた。

その場に居るのは、まずアースラ乗組員、艦長であるリンディ・ハラウン提督、執務官及び本日の解説役としてクロノ・ハラウン、映像を撮るためのサーチャーを管理するオペレーター達とそれを統率するエイミイ・リミエツタ。

それ以外のアースラ乗組員は別室にて映される映像を見る為大画面のモニターのある部屋に集まっている。

それ以外で、ブリッジに居るのはまずフェイトの家族である、プレシア、アリシア、アルフにリニスの4人。

そして、なのはの家族である、士郎、桃子、恭也に美由紀の4人とユーノ。

それぞれが、モニターにすでに映っている二人の少女を真剣な表情で見つめていた。

なぜ、この人数がアースラに集まっているのか。それは状況を見ればわかるだろうが、今日、この時がなのはとフェイトの再戦の日であり、家族にもそれを見せようと言うリンディの計らいだった。

すでに高町家には事情の説明をしてあるし、テストロッサ家のもととミッドチルダの人間なので、見せても特に問題は無い、と判断したためである。

高町家とテストロッサ家が出会った時、お互いが頭を下げ合うという場面もあったが、重要ではないので割愛する。

そうして、家族たちが見守る中、映像の方では少しだけ、動きがあっ

た。

「やっただね。フェイトちゃん」

今まで見つめ合い、一言も話さなかった二人だが、まずはなののが口を開く。

「フェイトちゃんは、本気にならなくて、良いの?」
「?」

なのはの言っている意味が良くわからず、首を傾げるフェイト。そのフェイトになのははさらに説明する。

「赤と青のオッドアイになって、魔力が爆発的に増える……、一週間前あの時みたいな状態に。私は、なって欲しい。例えそれで、私の勝ち目が減っても。私は、本気のフェイトちゃんと。全力のフェイトちゃんと全力でぶつかり合いたいから」

そう言っただけで真剣な瞳でフェイトを見つめるなのは。そのなのはの目線に、フェイトはつい、目をそらしてしまう。

——あれは、*私*じゃ、ないから……。

『最強モード』中の『フェイト』は、フェイトであってフェイトでは無い。レヴィであってレヴィでは無い。フェイトであり、レヴィでもある。そんな曖昧な精神状態を魔法で無理やり発現させ、固定させる。それが『最強モード』だ。

だから、フェイトは今日はそれになるつもりは無かったし、レヴィの手助けも貰うつもりは無かった。

『どうする、フェイト? なのはは、ああ言ってるけど』

答えはわかりきっているが、一応と言った体で聞いてくるレヴィ。フェイトはそれにきっぱりと自分の意志を告げる。

（要らないよ。私はもう、ちゃんと自分の足で立つて決めたから）
『……うん。それで良いんだ。それでこそ、フェイトだよ』

フェイトの言葉に、嬉しさと一抹の寂しさを感じながらレヴィは言う。

『ボクは、見てるだけだから。戦闘が始まったら、声もかけないよ』
(うん)

常に共に居た。共に居なければならなかったレヴィとの決別。それは、別れでは無く、巢立ちの決意であった。

『頑張つて、フェイト』

それだけ言うと、レヴィの意識は引っ込む。意識を閉ざしたわけでは無く、起きている事は感じられるが、それも随分と小さく感じられるだけになった。

それを確認すると、フェイトは大きく深呼吸して、なのはの瞳を見つめる。

「アレは、理由があつて今日はできない」

「……」

「その理由は、後で詳しく話すけど。だけど、全力を出さない訳じゃない」

フェイトの言い分を、なのはは黙って聞く。

「私は、私だけの全力で。誰の手も借りず。私の意思で、あなたを倒す」

フェイトの力強い言葉を聞くと、なのはは一度目を閉じる。

数度深呼吸すると、再度目を開き言った。

「フェイトちゃんが本気にならないなら、私、勝っちゃうよ?」

「負けない。あなた程度に、私は負けない」

売り言葉に、買い言葉。

頭に血が上るほどの激情を感じているわけでは無いが、お互いの言葉でお互いの心に点火し、エンジンの回転数を上げていく。

「私が、勝つよ」

「私が勝つ」

そうして、お互いの心の火が燃え上がり、その解放を今か今かと待ち望み始めた瞬間。

二人は、どちらともなく飛び上がった。

「デイバインシューター」

〈Divine Shooter〉

なのはは、小手調べに魔法の基本の一つである、射撃魔法、デイバインシューターを放つ。

「フォトンランサー」

〈Photon Lancer〉

それに対抗してか、フェイトも自身の基礎魔法であるフォトンランサーを放つ。

直射型のフォトンランサーに対し、デイバインシューターは誘導型。

その結果、デイバインシューターはフォトンランサーを巧みに避け、フェイトに接近。フォトンランサーもなのはに接近するが、なのははそれを移動魔法も使わず、軽々と避ける。

対して、フェイトもデイバインシューターを避けるために動き始めるが、デイバインシューターはなのはの優れた操作技術の賜物か、フェイトを執拗に追いかける。

それを確認して、フェイトは高速機動へと入る。デイバインシューターを置いていく速度での起動。

誘導制御魔法は誰が制御するかと言うと、当然使用者である魔導師がする。なので、誘導制御魔法の避け方は、その魔法の誘導性以上の回避をするか、それか魔法自体の速度では追いつけない速度で動けばよい。

なので、フェイトは後者を選択した。

それを見たなのはも、もはや牽制のデイバインシューターは意味が無いと思い、破棄。

自分に加速魔法を使用し、フェイトを追いかける。

そこから始まったのは、追いかけてこだった。

こう表記すると可愛らしく見えるが、実際の速度は約80 km/h。高速移動としては遅い方だが、一般人からしてみれば、高速道路の車と同じか少し遅い程度。相当早い。

アースラに居る観戦者も、魔法戦技に慣れていない事務員なんかは、サーチャーが追えているから何とか確認できるだけで、自身の肉眼では認識できないだろうと思うほど。

高町家は、皆一般人であるが、母桃子以外は、武術を嗜んでいる事もあり、普通の一般人よりは動体視力が良い。それに加え、サーチャーは追えているので、まだ苦ではない。

そうして始まった追いかっこは、唐突に終わりを見せる。

フェイトが牽制で放ったフォトンランサーを避ける為に、気をそらしたなのはの視界から、フェイトが消えた。

そして、フェイトにとっては、その一瞬で良かった。

〈Blitz Action〉

バルディッシュのその声を置き去りにし、フェイトが消える。

観戦者の中には驚く者も数人いたが、なのははそれに驚かない。今までのフェイトとの戦い、その全てで使われた魔法だからだ。

〈Protection〉

レイジングハートの言葉と共に、即座に自身の後ろに防御魔法が展開される。そして展開した防御魔法に、サイズフォームへと変形したバルディッシュの魔力刃が当たり、火花を散らしていた。

その光景をお互いに確認し、フェイトは笑みを浮かべる。

「ついで、これる？」

フェイトの不敵な笑みと共に放たれた言葉に、なのはも同じ不敵な笑みを浮かべ答える。

「当然!!」

〈Barrier Burst〉

レイジングハートのその声と同時になのはの展開していた防御魔

法が破裂し、煙幕を張った。

破裂の衝撃は、先ほどと同じブリッツアクションで躲したフェイトだが、煙幕に隠れなのはの姿が見えない。

しかし、フェイトはその先を予想していた。

——あの子なら……。

意趣返しに来る、と。

だから、即座に後ろへ振り向きつつ、バルディッシュを横にし、突き出した。

ギーン！

と甲高い音が響く。フェイトの後ろへ回り込んだのは、レイジングハートを『打撃武器』として使用してきたのだ。

なのははあの後、実家の武術を学び始めた。それは未だ綺麗な素振りをどれだけ維持できるか、と言う基礎の基礎の部分と、力を持つものの心構えと言う、精神的な部分でしかないが、それでもなのはは『レイジングハート程度』の長さの武器を振り回す基礎』を学んでいた。

地上で行う事が前提の地球の武術と、空中で行うことが前提の空戦魔導師の近接格闘術では、勝手が違うはずなのだが、——当然一週間の間で訓練したとはいえ——そこを感覚でとらえ、判断し、一週間で合わせてくるのがなのはの恐ろしい部分でもある。

そうして始まったのは、単純な追いかけてこたえなく、相手から離れ、近づき、武器を振るう。時には、射撃魔法を牽制として放つ。

それは、近づき接触したと思ったら離れ、しかし離れ過ぎず。そんなつかず離れずを維持していた。

一合、二合、三合と二人はぶつかり合い離れあう。

その様は、クロノにこのまま空戦魔導師の教本ビデオにしてよいのではと思わせる程の、戦いぶりだった。

そんな戦いぶりを披露している二人が考えている事は一緒だった。

——あの子に……

——フェイトちゃんに……

——『暇を与えちゃいけない！』

なのはは本来砲撃魔導師であり、その本質は足を止めての砲撃魔法による撃ちあいであるが、魔法の出力で劣るフェイトはなのはの舞台にさせてしまえば、勝ち目が薄くなる。なので、こうした高速機動戦であり、高速接近戦を挑んだはずだが、相手は、なのははそれを予想していたかのように、近接戦闘の技術を磨いてきた。

それゆえ、膠着状態が続いているが、しかし、この膠着状態が続けば、勝ちに近づくのはなのはではなく、フェイトだ。

フェイトはバリアジャケットの防御力を捨ててでも機動力を確保した、ミッドチルダ式では珍しい高速近接魔導師だが、なのはは逆に機動力が無く、堅牢な防御力と尋常ならざる火力を持つて相手を圧倒するミッドチルダ式の華である砲撃魔導師だ。

それはつまり、フェイトより機動力では劣ると言う事であり、フェイトと同等の速度を出すためには、魔力で無理やり増幅してやるしかない、と言う事だ。

つまりなのはとフェイトでは効率が違い、さらに同じ程度の魔力量の二人が、このまま同じ戦いをしていたら効率の良いフェイトに軍配が上がるという事である。

しかしそんなことはなのはも百も承知であった。

フェイトはなのはに砲撃魔法のチャージ時間を稼がせないための、高速機動戦だが、なのはも思惑としては一緒だった。

それは、今まで見てきたフェイトの大魔法を警戒しての事だった。

現在の状況が続けば、なのはも砲撃魔法を撃てないが、それはフェイトも牽制に使用しているフォトンランサー程度の魔法しか使えないと言う事だ。

あとは、こちらの戦術の用意が済めば、罠にはめそのまま火力で押し切る。ただそれだけで良い。

そうしてなのはは、フェイトの攻撃をさばき、避けながらあるモノを設置していく。

唯一フェイトとの戦いで成果を出した戦術の発展系、クロノに無茶苦茶な使い方だと呆れられた魔法。

「(レイジングハート、今の状況は?)」

念話でレイジングハートに罠の経過を確認する。その答えは直ぐに返ってきた。

〈(現在、19個展開中。今までの訓練から予測するマスターの限界まで残り13です。〉

「(19個か、じゃあ、25個設置したら教えて!)」

〈(了解しました、マスター)〉

念話で作戦の完成を予想しながら、なのはは移動魔法とレイジングハートによる打撃を繰り返し、フェイトを誘導する。

そうしてお互いが、牽制と打撃を繰り返す高速機動戦闘をしながら、なのはの『罠』は着々と進んでいく。

〈(マスター。25個、設置完了しました)〉

「よし。行くよレイジングハート!)」

〈(Yes, Master)〉

レイジングハートに作戦の発動を知らせると同時に、打って出るなのは。

機動力を確保するための移動魔法に、さらなら魔力を注ぎ込み、今までより一段階はやい速度でフェイトに突撃する。

「なっ!？」

唐突な突進に驚き、大きく避けるフェイト。しかし、なのはそんなフェイトを気にせず、そのまま直進しフェイトから大きく離れる。

——しまった!

急な展開で一步遅れたが、フェイトも加速しなのはを追う。

そうして、移動するなのは唐突に振り返り叫ぶ。

「かかったね、フェイトちゃん!　そこはもう、私の『檻』の中だよ!」
〈Divine Cage〉

なのはの叫びと共に、レイジングハートが魔法を起動する。

それは前回戦った時に使われた魔法、そしてその時罫にはまった時と全く同じ状況だった。

発動した魔法はデイバインケージ。隠蔽魔法をかけたスファイアを設置し、その中央を対象をおびき寄せ、四方八方から同時に射撃する魔法。それは、「罫」として使うために気付かれにくさに特化しているが、フェイトの「奥の手」と似たような魔法だった。

前回はそれに嵌められ、冷や汗をかいた。しかも今回は前回の約3倍近いシューターが形成され、こっちに迫ってくる。

しかし、フェイトはニヤリと顔に笑みを浮かべると、さらに加速した。

——予想は、していた!

そう、予想はしていた。高速機動戦に入った時から、なのはが自身の機動力を削ぐためにこの魔法を使うであろう事は。なぜなら一度見ているのだ。ならば予想できない筈がない。

——予想より、仕掛けるのが早かった。けど！

なのはがフェイトの全力を想定して訓練を積み、戦術を考えていたように、フェイトもまた、なのはの成長速度を予想し、戦術を組み込んできた。

そのフェイトにとって、今のなのははもつとデイバインケージのファイアを増やせると予想していた。しかし、それよりも早くなのはが仕掛けてきたため先ほど驚いたのだ。

——わかっていれば、対処はできる！

そう思いながらフェイトは、加速し、防御魔法を展開する。

〈Defense〉

バルディッシュの展開した防御魔法も前回と同じ。

前回より隙間が狭く、そして前回と同じ魔法であるならば、貫通属性も組み込んでいるだろう。

しかし、今回も前回と同じ。少しだけ時間が稼げればいいのだ。

展開したディフェンサーにデイバインケージの弾が当たる。すると、予想通りそれはディフェンサーを削り始めるが、しかし、破壊される前に潜り抜ける。

そこには、当然

「バスター！」

威力と射程は落ちるが、溜めを極限まで減らしたなのはのショートバスターが射出されていた。

——それもまた、予想通り！

〈Defense〉

そしてフェイトは二度ディフェンサーを発動する。

防御魔法とは言え、フェイトは防御魔法が苦手で、デイフェンサーも最低限の防御力しか持っていない。

しかし、一瞬、ほんの一瞬の間をくれれば良かった。

そうしてフェイトは加速したままショートバスターと衝突する。

デイフェンサーとショートバスターがせめぎ合い、フェイトの勢いが削られる。しかし、それに逆らわず、追突する勢いをそのまま、『方向だけ』ずらした。

それによって起こる現象は、フェイトの体は縦に回転しながら、上前方に、跳んだ。

「うそっ!?!」

それはさすがになのはも予想しておらず、まさか避けるのではなくあえて砲撃魔法に突っ込んでくるとは思わなかった。

そして、その驚きは一瞬の油断となり、フェイトに渾身の一撃を放たせてしまった。

〈Scythe Form〉

フェイトは縦に回転する体を押さえつけず、それどころか自分でもその勢いを増すように飛行し、その間にバルディッシュをサイズフォームへと変形させ、遠心力を乗せた大上段の一撃をなのに向けて振り下ろした。

〈Protection〉

とつさにレイジングハートが防御魔法を張るが、遠心力と慣性ののつた一撃は従来のそれよりはるかに威力が高く。

「つがあつー！」

ガラスが割れるような甲高い音と共にプロテクションは割れ、フェイトの一撃がなのはに直撃する。

戦闘が始まり、お互いが受けた初めてのダメージ。その先制はフェイトがもぎ取った。

〈マスター、しっかりしてください！〉

大上段の振り下ろしの衝撃を殺しきれず、落ちるのはをレイジングハートは心配し叫ぶ。

「だい、じょうぶ。だ、よー！」

なのはは、魔力ダメージとは言え大きなダメージを受けた鈍い痛みと、バルディッシュを叩きつけられた衝撃に動きを遅くする体を、その不屈の心で制し活を入れる。

そして図らずとも、お互いの立ち位置に上下関係ができてしまったなのはは、フェイトを見上げながら言う。

「やっぱり、フェイトちゃんは強いね！」

フェイトの斬撃によって切り裂かれたバリアジャケットを修復しながら、なのはは笑みを浮かべる。その表情には強者と戦える喜びと、それを打ち倒す為の野獣の牙が見え隠れしていた。

そんななのはと対照的に、フェイトは冷たい表情でなのはを見降ろす。

「あなた如きじゃ、私は倒せない」

その視線は、今の立ち位置こそがお互いの実力の縮図であるのだと、暗に語っていた。

その表情を見てなのは心の炎は沈下するのではなくさらに燃え上がる。今までだったらあまりの実力差に呆然としただろう。しかし、そんな『弱いなのは』はもう居ない。

今は、あの時とは違う。確固たる意志を持ってフェイトを倒す。そう覚悟した『不屈の魔導師』がそこにいた。

「だったら、その余裕の態度、取れないようにしてあげる！」

〈Divine Buster〉

その言葉と共に放たれるデイバインバスター。

しかし、その砲撃はフェイトにたやすく避けられてしまう。フェイトはその勢いのまま、なのは後ろへ回り込む。

フェイトの基本戦闘パターン。それはなのはもわかりきっていた。故に今度は受ける事はせず、あえて前に動く。

〈Protection〉

「え？ なあっ!？」

だが、そうしたのはののの耳に、レイジングハートが防御魔法を展開した声が聞こえ、それとほぼ同時に背中に鋭い痛みが走る。

その痛みの正体は、後ろに回り込んだフェイトが撃った魔法、サンダーバレットである。

サンダーバレットはフォトンランサーと同じ直射魔法に分類されるが、性質はだいぶ異なり、その特色は『防御貫通』に有ると言える。防御魔法や、バリアジャケットを含めた防御系魔法を貫通、破壊するための効果が強く付与され、それと同時に強いスタンも相手に与える。

それゆえ、連射性はなく単発でしか放てず、威力もあるとは言えな

いが、その強力な効果で、フェイトが「奥の手」を決める為に使う魔法の一つでもある。

その痛みと体を走る痺れに、まともな飛行ができないと判断したなのは、移動を諦めフェイトに向き直り、反撃の一撃を放とうとした。「ダイバインツ——っ!？」

しかしそれは叶わない。フェイトがチャンスを逃すわけではないのだから。

「バインド！」

前回戦った時も受けたバインド。ライトニングバインドでなのは両手が固定されている。

しかし、前回受けたと言う事はレイジングハートはその魔導式を解析しており、なのはバインドブレイクを練習していた。

——たった、2個なら！

さっそくなのはバインドブレイクを仕掛けるために魔導式へと介入する。練習の甲斐もあり、両腕を拘束する程度なら数十秒で解ける筈だった。

しかし、フェイトはそれを許さない。

〈Lightning Bind〉

さらに、重ね掛けされるバインド。それは、なのはの体を、足を、頭を。至る所を拘束していった。

そしてライトニングバインドの特性は、接触面からのスタンが特徴であり、なのはは各所から与えられる微弱な痺れと、数を増したバインドに苦戦していた。

——はやく、解かないと！

今回はバインドに絡め取られ、その間にサンダーレイジを喰らい負けた。今回も同じ轍を踏むわけにはいかない。

しかし、そんななのはの目の前では、恐ろしい光景が始まっていた。

「アルカス・クルタス・エイギアス」

それはフェイトがバルディッシュをグレイブフォーム、大魔法を発動するための高出力形態に変形させ、頭上へ掲げている姿だった。

フェイトはその体勢で魔法の発動キートを唱える。

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

〈Photon Lancer Phalanx Shift〉

そうしてフェイトの両翼に多数のスファイアが形成される。

その数、約40。

本来フェイトがフアランクスシフトで形成できるスファイアは38基が限界だった。普通の対魔導士戦であれば、そこまでの数の一斉掃射があれば十分だった。しかし、相手はなのは。その耐久力もさることながら、気絶しない限り立ち上がるその精神力を憂慮し、フェイトは限界を超えた。

「っうー！」

〈頑張ってください、サー〉

辛そうに顔をゆがめるフェイトを励ますバルディッシュ。

フアランクスの限界を超えたこともそうだが、すでに今までの戦闘でフェイトの魔力は相当消耗していた。

なのはとの長時間の高速機動戦も、フェイト有利に進んだとはいえ、なのはの空間制御能力の前に、想定以上に魔力を使わされていたし、なのはの張った罫を打ち破り、ピンチをチャンスに変えるためとはいえ、デイバインケージからのショットバスターのコンボを抜ける為の無茶な機動と、いつも以上の強固な防御魔法で随分と魔力を消費してしまった。

「……フォトンランサー・フアランクスシフト」

しかし、フェイトはその全てを超えて、ただなのはを倒すために魔法を使った。奥の手のフアランクス、その限界すら——たった2基、されど2基——超えて見せた。

「ああ……あああああつあああああつ！」

フェイトの魔法が完成した事を感じ取りなのはが吼える。

それは、少女が叫ぶにはあまりに雄々しく、あまりに野獸的であった。

しかし、その叫びで精神を持ち直したのか、一つずつバインドブレイクを完遂させて行くのは。

「っ!! 撃ち碎け、ファイアアアアアアアアアアアアツアツアアアアアアアツ」

そうして足掻くのはに、絶体絶命だと言うのにいまだ心折れぬ『不屈の魔導師』に、フェイトはバルディッシュを振りおろし、自身の最高の魔法を放った。

〈Protection〉

レイジングハートの助けもあり、バインドを4つ解除したが、それでもなのはに防御魔法を張れる余裕はなく、直前にレイジングハートはプロテクションを発動する。しかし、それはあまりに頼りなく、そんな頼りない壁に限界を超えた、まさにフェイトの『最高の魔法』となったフランクスが襲い掛かる。

40基のスイアから秒間7発、4秒間。計1120発のフォトンランサーは、狙いを誤らずすべてがなのはへと向かって飛ぶ。

「っうー！」

その衝撃を、その豪雨の様な怒濤の雷光をなのはは歯を食い縛って耐える。

——フェイトちゃんにも、もう余裕は無いはず。これを、耐えきればっ！

そう、なのは自身の残り魔力の状況から、あらかたのフェイトの残存魔力を予想していた。

この魔法さえ凌げば、なのはの勝ちが決まったような物。

しかし、レイジングハートが張ったプロテクションはあまりに脆く、フアランクスの掃射が始まってから1秒も持たずに破壊され、辺りは自身に当たり炸裂したフォトンランサーによる煙幕で満たされていた。

——まだ!? まだなの!?

なのはは、もはや精神力だけで耐えていた。

バインドは破壊できず、もはや破壊することを諦め、ひたすらバリアジャケットに魔力を流し続け、短いはずの4秒間が終わるのを待っていた。

それは外から見たらあまりに短く、本人からしたらあまりに長い4秒間だった。

しかし、それは唐突に終わる。なのはの体に走る衝撃が無くなっていったのだ。

——おわ………った？

目を開けると辺り一面煙に覆われフェイトの姿すら確認できない。

「今の内にー！」

そう言いながら残った2つのバインドを解除しようとするなのは。

だが、それをフェイトは許さない。

フアランクスの掃射が終わると同時に突出したバルディッシュを

中心に、役目を終えたスファイアの魔力を回収し、巨大な魔力刃を形成する。

本来グレイブフォームは魔力刃を形成するように設計されていなく、今回形成されたそれは、バルディッシュを中心に、その周囲を覆う魔力の塊であった。

その魔力の塊で、巨大な『雷の槍』を形成するとフェイトは一直線に飛ぶ。

まだ自分でバインドは解除していない。放つ直前の様子から予想すると、なのははバインドをすべて解除できていないと予想できる。

——今しか、ないんだ！

ファランクスシフトのスファイアを形成していた魔力を最後まで使い切るコンボ、スパークエンドの派生形。

〈SparkEnd ThunderSpear〉

そしてフェイトは自分ごと、自分すらも槍の一部とし、飛ぶ。

ファランクスシフトの影響でできた煙幕を切り裂き、なのはに向かって一直線に。

「——っ!？」

唐突に晴れた煙幕の先に見えた光景に声を失うのは。しかし、今やらなければならぬ事をとっさに判断し自身の愛機へと指示を出す。

「レイジングハート!!」

〈Protection〉

ギリギリで防御魔法の展開が間に合い、まさに、雷光の速度で迫っ

そうしてようやくその勢いがなくなったその槍に手を添えながらフェイトは『最後の言葉』を呟く。

「スパーク、エンド」

その言葉と共に、なのはの腹を貫通している魔力刃はその内部に溜めこんだ魔力を爆発させる。

そのダメージは当然直接バリアジャケットを貫き接触しているのはが最大限受けてしまうのはもちろんだが、それはなのはとほぼ変わらない距離で、魔力刃形成の核となっているバルディッシュを握りしめているフェイトも喰らう。

「フェ、イト、ちゃん!？」

なのはが見つめるフェイトの顔は、確かに笑っていた。

心中まがいの一撃だとしても、最後に浮かべていたのは、勝利を確信した笑みだった。

そうして魔力は爆発する。

辺りに雷光と爆音をまき散らし、なのはを支えていたビルはその衝撃をまともに受け消し飛ぶ。

アースラ内に放送されていた映像ですら、その閃光にホワイトアウトする。

その衝撃をまともに受け、なのはとフェイトは気を失っていた。

閃光が消え、映像が復活すると、その映像には気を失い墜落する二人が映し出されていた。

一応下が海とは言え、それなりの高度から落ちたら普通死ぬ。それは魔導師だろうが一般人だろうが関係なく、二人はかろうじてバリアジャケットが残っている為、衝撃をある程度和らげるだろうが、それでも絶対に安心とは言えない。

その映像を見てアースラの中は阿鼻叫喚、と言った様子を見せる。なのはの兄姉である恭也と美由紀はなのはの名を叫び、アリシアもフェイトの名を叫んでいる。

リンデイは、オペレーターの一人にすぐさま医務室を使用できるように指示を飛ばし、クロノはバリアジャケットを纏い、転移の準備に入っていた。

しかし、それらすべてが一度中止する。

映像の中でフェイトが気を取り戻したのか、飛行魔法を発動させ、未だ気絶しているなのはを抱きかかえ近場のビルが倒壊し足場と なっているとゆつくりと着地したのだ。

その当人であるフェイトは、ほとんど無意識だった。燃え尽きたと言っても過言では無い。

気を失ったのは本当だが、その瞬間レヴィの声が頭に響き、なんとか意識を取り戻した。

フェイトは動かぬ頭で考えていた。

それは、レヴィに言われたなのはを嫌う理由だった。

ゆつくりと、なのはの顔を眺めながら考える。

すると、だいぶ頭が働くようになったのかおぼろげながら、自分の心が理解できてきた。

端的に言うと、フェイトはなのはを羨んでいただけなのだ。

一緒に温泉に行く家族と、友達がいて、魔法の才能にあふれ、それでもなお己の道を貫き通すなのはに、その輝かしい、まるで一等星のような光に、“なのは”と言う存在に目を奪われた。

そんななのはを、フェイトは無意識に自分と比べていたのだ。自分は親を知らない。父親を知らない。自分は友達を知らない。自分は、本来のプレシアの子供では無い。自分の魔法の才能はなのはに劣り、そして、自分には主体性が無い。

——ああ、私は彼女が羨ましかったんだ。

だから、その輝かしい光から目を逸らし、逆に憎んだ。

近づこうとするなのはを拒絶した。

そうしないと

——そうしないと、自分がみじめだったから。

そう思うとなぜ自分があそこまでなのはを拒絶していたのか、心にもストンとはまる感覚がした。

——だけど、もう違う。

全力のなのはに、全力でぶつかり、そして自分の力だけで勝利を手に入れたフェイト。

もう、人形では無い、フェイト・テストアロッサという人間であることを決めたフェイト。

いずれ、なのはには才能の差を見せつけられる時が来るだろう。彼女は才能もあり、努力もする。しかし、今だけは自分なのはより上なのだ、そんな小さな自尊心で奮い立たせられる。

もう、なのはどの違いを気にしなくても良いのではないか。フェイトはなのはに、自分に、本当の意味で勝つことにより、やつと自分を認められた。

そう思えてくると、気絶しているだけのなのはの顔すら、微笑ましく思えてくる。

「このっ」

最後に残った少しの憎しみを込めて、なのはの頬を引っ張る。

「……いた、痛いよお姉ちゃん。おねえ、ちゃ……」

その痛みで目が覚めたのかなのはが目を開ける。

「ふえ、フェイトちゃん！……っう」

フェイトの姿を見て思い出したのか、急に体を起こそうとするが、激痛が走ったのかそれは叶わず横になる。

「ごめんね」

その様子を見て、フェイトは素直に謝る事が出来た。本気の勝負の為とはいえ、相手に魔力の塊を突き刺し、体内で炸裂させるのはやりすぎたと素直に思ったからだ。

「あー、私、負けちゃったんだね」

フェイトの謝罪で全てを思い出し、察したのかなのははそう呟く。

「うん。私が、勝った」

フェイトも取り繕う事などせず、ただ、誇らしげに微笑んだ。

なのははその微笑みを見て、すこし考えた後、口を開く。

「あのね、フェイトちゃん。ありがとう」

「え？」

その言葉はフェイトへの感謝の言葉だった。フェイトはなぜ言われたのかわからず頭を傾げる。

「フェイトちゃんは私を心配してくれたんだよね。私が弱いから、このままじゃ危険な目に合うからって」

「それは……」

フェイトはそうではないと言いたかった。先ほど自覚した通り、自分がなのはから目を逸らしたくて、辛く当たっていただと言うのに。「でも、私認めてもらいたかったんだ、フェイトちゃんに。確かに私が日常をないがしろにしたのは悪かったと思う。それでも、私は私のやりたい事に全力で、一生懸命頑張ったかったんだって。知ってもらいたかった。認めてもらいたかったの」

そんなフェイトを気にせずなのはの語りは続く。

「だから、この模擬戦で勝って、『なのはは弱くないんだよ』って知ってもらおうと思ってただけど、結局負けちゃった」

「私はっ」

フェイトは違うと言いたかった。私はそんな高尚なものでは無いと言いたかった。

「だからフェイトちゃん、ありがとう。こんななのはを心配してくれて。なのはの友達の為に怒ってくれて」

「それは、私がつ」

フェイトが何か言おうとするのを、なのはは首を横に振って止める。

「……本当は、フェイトちゃんに勝ってから言いたかったんだけど、我慢できないから言うね」

「？」

「フェイトちゃん。私と、高町なのはと、友達になってください」

なのはの言葉を聞き、フェイトは言葉を失う。

「お願いします」

そんなフェイトをよ所に置き、なのはは寝たまま言う。頭を下げられない代わりに、その瞳は純真で真摯に、フェイトを笑いながら見つめていた。その笑顔はとても清々しく、澄んでいて、そして温かい笑

顔だった。

「でも、私は」

フェイトはそんなのはからつい視線を外してしまう。見てられなかった。自分をぼろぼろにした相手に笑って話しかけられるのはを。自分を負かした相手と友達になりたいと言う、なのは“強い輝きを直視できなかった”。

「私は、君に、ずっと酷いこと言つて、今も、こんなにボロボロにしてっ」

「酷いことは、私を心配してくれただけだし、今回は私から言い出した全力の勝負だったんだから仕方ないよ」

「それでも、私は、君の友達になんて……」

「対等じゃないと、友達になれない」
「？」

「だから、私はフェイトちゃんと対等になりたかったの。フェイトちゃんに勝つて、これで今までの事は帳消しだよって言いたかった。それでも結局負けちゃったんだけどね」

にやはは、とはにかむ彼女を見てフェイトは目を見開いた。

彼女は、高町なのはやはり強かった。フェイトと出会った頃から強かった。なんて、なんて強い心なのだろう。高町なのはと言う少女は、自分など足元にも及ばない強い心を持っている少女だったのだ。

折れない心、不撓不屈の精神。不屈の魔導師。

「フェイトちゃんにいつか勝つから。だから、それまでは対等じゃないかもしれないけど、フェイトちゃんにとっては“弱いなのは”のままかかもしれないけど、それでも、友達になつてください」

そう言つて彼女は、なのはは右手を差し出した。しかし、その右手を取ることは躊躇われた。

「私は、友達になる方法なんて……」

アリサやすずかとは、自然と友達になっていた。と言うより、友達

と認識されていた。

しかしフェイト自身としては、姉の、アリシアの友達であるという認識が強かった。だからフェイトは今まで友達と胸を張って呼べる人は居なかった。

「簡単だよ。名前を呼ぶの。ただそれだけ。お互いがお互いの名前を呼ぶ。それだけでもう、お友達なんだよ。」

フェイトちゃん今までずっと私の事『君』とか、『あなた』とかって呼んでたでしょう?」

——言われてみれば……。

言われてみればそうなのだろう。ずっと『なのは』と呼ぶことを心のどこかで躊躇われてきた気がする。

だけど、友達になるならば、なりたいのならば勇気を出さなければならぬ。

「……は」

「?」

無言で差し出された右手を握る。

そして勇気を、一握りの勇気をもって

「……なのは」

「……うん!」

呼んだ。

『なのは』と呼ばれた彼女は、それはとても嬉しそうに笑った。

「なのは」

「うん」

「なのは」

「うん」

「なのは、なのは、なのはっ!」

「うん、うん、うん」

気づいたらなのはの胸に飛び込んでいた。なのはの体調など考えもせず、彼女に体を預けていた。

嬉しかった。やっとできた友達。家族以外で初めて自分の想いを

ぶつけて、ぶつけられて、そうして認め合えた友達。自分だけで作った、初めての対等の友人。

「フェイトちゃん」

「なのはっ」

「フェイトちゃん」

「なのはぁ」

「フェイトちゃん」

「なのはっっ！」

ずっと呼んでいたかった。お互いの名前を、今二人が通わせた思いを確かめ合い続けたかった。

自然と涙がこぼれる。しかし、その涙は悲しみの涙ではなく。心の温かさからあふれ出た物だった。

こうして、フェイトとなのはは“友達”となった。

Magical Girl Lyric al Na
no ha end with this. To the nex
t stage.....

,
s
|
M
a
g
i
c
a
l
G
i
r
l
L
y
r
i
c
a
l
N
a
n
o
h
a
A

i n t e r v a l

『レヴィと言う存在』

フェイトとなのはが友達になってからしばらくたったある日。

現在高町家ではフェイトがなのはに秘密を話す、という名目でテスタロッサ家一同がお邪魔していた。

長い付き合いになると思われる家族に説明しておこう。と言うレヴィの意見の下である。

「それで？ 今日は何のお話なの？」

なのははあれからフェイトを通じて、フェイトの師匠であるリニスや大魔導師であるプレシアから魔法について教授してもらっていた。

今日もそのたぐいの話かと思っていたのはだが、フェイトが話し出す事は少し違っていた。

「あのね、今日は、私の……私とずっと一緒に居るレヴィについて話したくて」

そう言うフェイトの言葉になのはは聞き覚えがあった。

当時はフェイトの事でいっばいで、今その名を聞くまですっかり忘れていたが、臆気ながらも思い出してきていた。

「レヴィ……れ、ヴィ……。あ！」

そうして思い出したなのはは大きな声を上げる。

「レヴィちゃんって温泉の時の！」

「うん」

なのはの言葉に頷きフェイトは説明を始める。

「私には、生まれた時からずっと一緒に居るレヴィって子がいるんだ」

「それは、多重人格……ということかい？」

士郎が疑問を訪ねる。士郎のその言葉は最もであり、普通はそうだと感じる。

その疑問に答えたのはプレシアだった。

「厳密には違うのですが、そのような物……とお考えください。フェイトとレヴィの関係については、科学的、魔法的に解明できない物でして……」

「なるほど。プレシアさんが言うならそうなんだろう。フェイトちゃん」

プレシアの言葉に頷き士郎はフェイトに優しく声をかける。

「今日は、そのレヴィちゃんを僕達に紹介してくれる。って事で良いんだね？」

「はい」

そう言うのとフェイトは目を閉じる。

しばらく瞑目してから目を開くと、そこにはフェイトの持つ綺麗な紅色の瞳では無く、爽やかな蒼色がうつりこんでいた。

虹彩の色が変わるといふ不思議な光景を目にし高町家の面々は驚きを隠せないでいる。

「……はじめまして。ボクがレヴィだよ」

一同の視線を浴びながらもレヴィは自己紹介した。

仕事上多様な人間を見てきた士郎や、生来の観察眼の良さを持つなのは人目見ただけで目の前の人物が「フェイト」ではない事を見抜いた。

「なるほど、僕は高町士郎。高町家の大黒柱で喫茶翠屋のマスターをやっている。よろしくレヴィちゃん」

そういう士郎はレヴィに向け手を差しだし、握手する。それを皮切りにレヴィに向けて高町家の自己紹介が開催される。

そして、最後のなのはの番となった。

「初めましてじゃないけど、改めて……。高町なのは、聖祥大小等部3

年生」

「うん。いつもフェイトと一緒に見てたよ。ボクはフェイトと離れられないからね。はじめて出会った時も、この前の戦いも。全部、見たよ」

そう言うと、なのはとレヴィはどちらともなく手を差し出していた。

その手を強く握りながらレヴィとなのはは笑いあう。

「これからよろしく、レヴィちゃん」

「よろしく、なのは」

こうしてレヴィは高町家に認知されるようになった。

『囑託魔導師試験』

「これより、フェイト・テストタロツサの囑託魔導師認定試験及び、魔導師ランク測定試験を開始する」

クロノが放つその言葉が響くのは本局訓練室の一室。そこでは今からフェイトが囑託魔導師になる為の実技試験が開始されようとしていた。

『頑張つて、フェイト』

フェイトの頭にレヴィの声が響く。しかし、フェイトはあまり乗り気ではなかった。

「これは君の魔導師ランク認定試験も兼ねている。どちらも試験官である僕と戦うわけだが、なにも勝つ必要はない。君の実力を実際に測

る事で大体の魔導師ランクを決めるだけだ。当然、僕に勝つことができたら文句なしに試験は合格だし、魔導師ランクはAAAが認定される」

フェイトの前に立つクロノがなにか言っているが、フェイトはそれを適度に聞き流し、なぜこうなってしまったのかを考えていた。

それは、なのはがリンディに言われた言葉が切っ掛けだった。ある日リンディからなのは(とついでにフェイト)に囑託魔導師にならないかという打診があったのだ。

「しよくたく、まどうし……ですか?」

「ええそうよ。管理局法では管理外世界での魔法使用を厳しく罰しています。本来であればお二人にも厳命を下したうえで、特になのはさんからはデバイスの封印処置などもする必要がある場合もあります」

「そ、そんなー!」
リンディの言ったデバイスの封印処置という言葉になのはは敏感に反応し、大声をあげる。

「レイジングハートとわかれるなんて、嫌です!」
胸元でペンダントとなっているレイジングハートを強く握りしめるなのは。そんななのはをリンディは微笑ましく見つめながら言う。
「ええ。ですから、その辺の事とかが結構自由になるので囑託魔導師になつてはどうでしょう。と言う事です」

「……な、なるほど」
リンディの言葉にわかっているのかわかっているのか曖昧だがとりあえず頷くなのは。そんななのはを尻目にフェイトが冷静に質問をする。

「囑託魔導師になると、なにかしなくちやいけない事とかあるんですか?」

「そうですね。なる為に試験が必要ですが、それはお二人なら大丈夫でしょう。筆記試験もあるので、なのはさんは管理局法についてのお

勉強も必要だと思いますが、受けてくれると言うならこちらから教材をお送りします。

それで、嘱託魔導師になった後ですが。基本的に管理局の要請があった場合はその任務に就いて貰う必要があります。これは嘱託魔導師の義務ですね。その代りちゃんとお給料はでます」

魔法に関するある程度の自由を認める代わりに管理局の仕事をする。これが嘱託魔導師というシステムの根幹である。

しかしその話を聞いてあまり乗り気でなかったフェイトの天秤はさらにマイナス方面へと傾く。

「それだったら……」

そう言っただけで断ろうとするフェイトをリンデイが遮る。

「ですが、お二人ともまだ若く住まいは管理外世界。それに学生ですので嘱託魔導師の中でも管理外世界在住で学生向けの制度を受けて貰おうと思います。こちらは、本来の嘱託魔導師よりも魔法の使用制限や、それに関する法をどれだけ理解しているかの確認テストが難しくなりますが、その代りお二人が仕事をしたい、と言わなければ基本的にこちらからは任務を通達することはありません」

その話を聞いて、フェイトの傾いた天秤が少し、ほんの少しだけ水平に近づく。

「詳しいことは後日パンフレットをお送りしますので、そちらの方も良く読んでみてください」

最後にリンデイがそう言っただけでその日の通信は終わった。

「……フェイトちゃん！」

「な、なに？　なのは……」

通信が終わりしばらくしてなのはが勢いよくフェイトの顔を見ながら名前を呼ぶ。返事はしたが、何とも言えない嫌な感じをフェイトの直感は訴えていた。

「一緒に、嘱託魔導師になろうー！」

——ああ、やっぱり……。

その時のフェイトの心境は予感が当たってしまった悲しみと、少し

だけの諦めに満ちていた。

結局なのはの強い希望と、レヴィもプレシアも遠回しに受けてみると説得され、そのままなのはと一緒に勉強し、今日、なのはと一緒に試験を本局まで受けに来たのだ。

——あれ？ 私って、また流されちゃってる？

そう思い至ったフェイト。他人の言う事に素直に従う人形であることを止めようと決意したが、人間そう簡単に性格を変えられるわけは無く、結局周りに流されるフェイトであった。

試験の結果は囑託魔導師には合格。魔導師ランクはA A―が認定された。

結果を伝えたクロノからは、「もう少し全力を出しても良かったんだぞ」と苦笑いされながら言われたが、あまりフェイトは乗り気ではなかったため良しとした。

対してなのははやる気十分であり、クロノと良い戦いをしたらしく魔導師ランクはA A+が認定されていた。

お互いの結果を言い合った時の、なのはの勝ったと言いたげなドヤ顔が、少しむかついたフェイトであった。

彼女が彼女になるために必要なこと——A， S編

第1話 「闇、始動」

「紫電、一閃!!」

敵対者の放つその言葉と共にボクは、いやボク達は吹き飛ばされる。

その勢いは何もない空中では衰えず、そのまま歩道橋へと突撃してしまおう。

「っう!?!」

ボクの憑依先であり、この身体を持ち主であるフェイトはその衝撃をもろに喰らい声にならない悲鳴を上げる。

「っ、な、のは……」

バルデイツシユは断ち切られ、相手の攻撃で骨の2，3本が折れていようとも、それでもフェイトはなのはのいる方向へと這いずり手を伸ばす。

「なぜそうまでしてあの少女の事を気に掛ける」

ボク達を吹き飛ばし、今こうして地を舐めさせている張本人が側に降りてきてボク達に、いやフェイトに言う。

「友達、だからだ!」

そのフェイトは相手を睨みながら力強く言う。

「友、か……」

「とも、だち……なん……だっ」

それだけ言うと痛みには耐えきれなかったのかフェイトは気を失う。

その瞬間、まだ意識のあるボクに身体の主導権が移る。

「っ!？」

主導権を手に入れると同時に動こうとしたのだが、体に走る激痛にそれは叶わなかった。

——い、痛い！　すごく痛い!!

痛みで混乱する思考を切り離し、マルチタスクを利用して体の状況を冷静に観察する。

——あばらが何本か折れてる、それに左腕も。

そうして出た結論は戦闘不能の四文字だった。

唯でさえバルディッシュは折れ魔法補助としてはともかく武器としては役目を果たさない上、相手はまだ無傷。経験不足とは言え、ボクとフェイトを無傷で打倒した歴戦の猛者だ。勝てる勝てないと言う次元の問題では無かった。

——ああ、もう……最初っから踏んだり蹴ったりだよ、これ……。

一矢報いたかったがそれすらできない体に思考は諦めの命令を出す。それにつられボク自身の意識も薄らとしてくる。

「許せ、我らにも譲れぬものがあるのだ」

ボク達を襲った、黒いサンバイザーに黒いボディースーツを身にまとったピンク髪の女性は、小さな声でそう呟くと、いつの間にか手元

にあった本を広げ、こちらに突き付けた。

「ぐ、あ、あああああああああつ
!!????」

耐え切れないほどの痛みと不快感が体を駆け巡る。

ボクフェイトの体から、蒼いリンカーコアが無理やり引きずり出され、そしてそのまま魔力を吸われる。

「む？…これは……」

相手も疑問に思ったのだろうか、魔力蒐集は恙なく進行しているのでそのまま限界まで吸う事にしたのだろう。

どうしてボク達が突然こんなことになっているかと言うと、簡単に言えば始まったのだ。

リリカルなのは最大の危機にして、薄氷の上を歩くような危険を乗り越え、奇跡を手繰りよせた物語――

――魔法少女リリカルなのは A×sが

* *

「いってきまーすー!」

アリシアが元気な声で家の中に居るプレシアとりニスに言う。

「そのあたりを散歩したらすぐ帰ってくるんですよ。もう暗いんですからね」

「はーい!」

リニスの忠告に素直に頷くと、アリシアは隣にいるフェイトとアル

フに声をかける。

「じゃあ、行くよ！ フェイト、アルフ！」

「うん」

「あいよ〜」

頷くフェイトにアルフ。アルフはジュエルシード事件後、本格的に魔法を使う事が無くなったのでリニスと同じ節約モードを導入した。これは通称『子犬モード』と呼ばれ、リニスとは違い、魔力だけでは無く体も小さくすることで更なる節約を行っている。当然ながら、この状態では戦う事は出来ない。

小さくなったからなのか、飼い犬としての本能(?)が目覚めたのか、子犬モードを導入したアルフは良く散歩に行くことをねだってきた。

今回もその日課としてアリシア、フェイトと共に散歩に行くのだ。

「~~~~♪」

アルフはペットと言う扱いなので、一応付けられたリードをアリシアが握りしめ散歩をする。

それがアリシアは楽しいのか鼻歌を歌いながら、夜の街を散策した。

フェイトも後ろから付いて行くのだが、ハッキリ言つてこの約半年で随分と住み慣れた街並みは夜とはいえあまり楽しいものでは無い。それに最近プレシア伝手でリンデイからある忠告を聞いている事も、楽しめない要因の一つであった。

リンデイからの忠告、それは最近管理世界で魔導師が通り魔に襲われる事件が多発しているらしい、と言う話だ。

管理外世界とは言え魔導師であるフェイトとなのはには十分に注意をしておくように、という忠告だった。しかもその犯人と思わしき

一団は、この近辺の世界に居ると考えているらしく、今度リンディ率いるアースラが戦力を強化しこの近辺に調査しに来るらしい。

もしかしたら、その時に挨拶に伺うかも。という事も言っていたが、とにかく用件は魔導師を狙う通り魔に気を付けろ。と言う事だ。

『どうしたの？ フェイト』

そんなフェイトが悩んでいる事を読み取ったのか、レヴィが声をかけてくる。

「(……うん)」

なんと答えれば良いのかわからず、フェイトは生返事を返す。そんなフェイトの考えている事に予想がついたのか、レヴィは質問してきた。

『もしかして、プレシアから聞いた通り魔の事？』

「うん。ここは管理外世界だし、そうそう無いとは思うんだけど……。なんか嫌な予感がして……)」

——嫌な予感がする。フェイトの直感はハッキリ言ってそう鋭い方では無い。無いが、大抵こう言った直感と言うのは当たってしまう物なのだ。物語的に

「(フェイト!)」

『フェイト!』

魔力の波動を察知したアルフとレヴィが同時に念話を飛ばす。

「(この感じ、多分結界! しかもこの方向は……)」

それはフェイトも感じており、すぐさま感知魔法を発動し詳しく調べる。

そうしてわかった事は結界が展開された事と、その展開された方向にある場所が良く見知った場所だった、と言うだけだ。

——なのはっ！

なのは、高町なのは。半年前ジュエルシード事件が切っ掛けで出会い、ぶつかり合い、そして認めあった友達。フェイトが初めて一人で作った親友。

その彼女の家がある方向だった。

「アルフはアリシアを連れて直ぐに家に帰って！」

「(フェイトはどうすんのさ!)」

「私は、なのはの様子を見に行く」

「(でも!)」

フェイトは自分の使い魔であるアルフに指示を出すのが、アルフはそれに反発するがフェイトは強いまなざしでアルフを見つめて言った。

「おねがい。アリシアを、お姉ちゃんを守って。アルフ」

「フェイト……」

「(……わかった。でも、絶対無理しちゃダメだからね!)」

フェイトの言葉に感動したのか少し涙ぐむアリシアと、それを聞いてフェイトが譲りそうにないと判断したアルフは一言言うと一緒に家に向かって走り出す。

「フェイト！ 絶対に無茶しちゃダメだよ！」

「うん、大丈夫。それに、レヴィも居るから」

姉の心配そうな言葉を背に受けて、フェイトはバルデイツシュを取り出す。

「バルデイツシュ」

〈Yes sir〉

お互いにただ一言だけのやり取り、しかしお互いにそれだけで良

かった。それだけで意志疎通は完了していた。

〈Set, Up〉

バルシツシユがそう言うとフェイトはバリアジャケットを纏い結界に飛び、一気に結界内へと侵入する。

結界内に入り、中を見渡すと、遠くの結界の中心部に近い場所で光が見えた。

それは良く見知った桜色の光であり、それだけでフェイトはなのが何者かに襲われているのだと予想がついた。

「なのはー！」

そう叫び、一息で駆け寄ろうとすると、目の前にそれを遮る者が現れた。

「悪いがこの先に行かせるわけにはいかな」

そう言いながらフェイトの前に現れたのはピンク色の長髪をポニーテールにした女性だった。

黒いボディスーツはそのボディラインを隠すことは無く、逆に強調し、その女性的な豊満な体を見せつけている。

しかし、その体から漂う剣気は、剣士ではないフェイトをしてなお、躊躇わせるものであり、寄らば斬ると言わんばかりのモノであった。

その剣気は右手に持ったデバイスらしき剣の所為もあるだろう。そしてその顔は、残念ながら目を覆う、黒い仮面らしきサンバイザーでよく見えない。

そんな剣呑とした雰囲気を纏った女性は、凜とした声を唯一見えて

いる口から発し、フェイトに言う。

「本来なら各個撃破と言いたかったが、ここに来ては仕方がない。悪いが我らの目的の為、斬らせてもらう」

そう言つてその女性は持つていた剣を両手で握り、正眼の構えを取る。

なのはとレヴィに連れられ、なのはの家族から剣の手ほどきを受けていたフェイトは、それだけで目の前にいる魔導師が剣士としても一流であることを感じ取っていた。

「あなたが、最近噂の通り魔ですか」

フェイトは一応、囑託魔導師の資格を持っている身として、聞いておかなければならないと思ひ質問する。

その問いを聞いた女性は、バイザーで顔は見えないが口を少しだけ歪めると小さく呟く様に言った。

「そうか、すでに噂になってしまっているか。早くしなければな」

そう言う女性にフェイトは言う。

「私は囑託魔導師です。このまま大人しく投降してくれば……」

「悪いが、それはできん!!」

囑託とは言え、管理局に所属する魔導師として必要な口上を言おうとしたら、相手がそれを聞かず襲い掛かってきた。

「つくー!」

その剣撃をバルディッシュでなんとか受け止めるが、その想像以上の「重さ」に怯む。

「ほう、今を受け止めるか。並みの魔導師ならば反応できずに一撃で斬り伏せられるのだが」

「これでも、私は!」

相手の言葉にそう叫びながら魔法を発動する。

〈Blitz Action〉

高速短距離移動魔法。フェイトが最も使う魔法の一つだ。

〈Scythe Slash〉

そして即座に後ろに回り込むと、バリディッシュをサイズフォームに変形させ斬撃を叩き込む。

「ほう。高速近接系魔導師か。最近の魔導師にしては珍しい」

しかし、その斬撃は相手の剣で容易く防がれる。

「先程の高速移動にこの斬撃。なかなかの手練れだな」

「それは、どう、もー！」

〈Photon Lancer〉

嫌味と共にフォトンランサーを放ち、その隙に離脱する。

離脱した先で相手を見ると、近距離で放ち、なおかつ直射魔法の中ではそれなりの速度を持っているはずのフォトンランサーはたやすく避けられていた。

「ふむ、力で勝てないと分かった瞬間に即座に離脱する。その若さでその強さ、さらに将来性もあるな」

相手はフェイトを一方的に分析する。

「その将来性をつぶすのは一武人として惜しむ事だが、しかしそれで我らの願いを捨てるわけにはいかん」

相手は一方的にそう言うともた構える。

「少女よ、名乗れる立場では無いが、名を聞いておきたい。教えてもらえるか」

「……フェイト・テストロッサ」

相手の言い分に素直に名を教えるフェイト。その名前を反芻すると、相手の女性は大きく頷き武器である剣を強く握りしめる。

「テストロッサよ。悪いが落させてもらう。安心しろ、殺しはせん」

その一方的な上から目線に、戦闘では冷静なフェイトが珍しく頭に血が上る。

リニスやプレシア等フェイトより強い魔導師は数多くいる。自分より魔力が少なくとも自分より強いクロノと言う相手も知っている。

しかし、しかしそれでも相手にも正面から手加減してやる。と言われそれで腹が立たないほどフェイトは達観しておらず、年老いても居なかった。

フェイトはやはりどこまで行っても未だ子供で、子供には子供なりのプライドがあるのだ。

「(レヴィ！ アレ、やるよ!!)」

そんなフェイトは自分だけの力では勝てない事を認め、レヴィ曰く『最強モード』になる事を促す。

独り立ちを決めた筈なのに、なんて事は言わない。相手は実力の似通ったのはなどではなく、今のままでは歯が立たない程の強敵なのだ。ならば自身にできる全力、それを超えた、自分だけではできない全力を出すしかない。

『了解。アイツ、ぶっとばしてやろう』

レヴィもそれをわかっていたから、何も言わず魔法の準備に入る。

「常に目指すのは最強の自分」

『ああ、遂に来てしまった。この時が』

Every^ヒone^トshake^ハsbetween^ニthe^トreal^ニand^ノ

詠唱を開始する。『最強モード』になる為の必要手順。しかし、相手は武人だからと言って、それを見逃すほど善人では無かった。

「自己強化魔法か、どちらかと言うと我らと同じ魔法詠唱に聞こえるが、すまん。悠長に敵を強化させる程、今の私に余裕は無いのでな！」

そう叫ぶとフェイトに突っ込む女性。

「くっ！」

その速度はフェイト程では無いとはいえ、さすがに悠長に詠唱を続けられる程の距離では無く、相手の攻撃を耐えられる程の防御力もない。

故に仕方なく詠唱は破棄し『最強モード』では無く、50%のーレヴィとフェイトがそれぞれ個別で魔法を使えるー状態で相手と戦う事にした。

〈Blitz Action〉

『電刃衝！』

相手の攻撃を避けると同時にレヴィが魔法を発動する。

「!?」

その発動された魔法を見て相手の女性が怯む。同時に魔法を発動した事では無い、同時に発動された直射魔法の色に驚いたのだ。

「ふむ、気づいたら魔力も少々上がっているみたいだな。どういう理屈かは知らぬが、こちらにとってはある意味都合だ！ レヴィアンティーン！」

女性は自身の愛機の名を叫ぶと、剣を鞘に納める。

そうすると鞘が何かをリロードしたのか、鞘から何かが排出される。

それは葉莢だった。

「飛龍、一閃！」

女性がそう叫ぶと共に剣を抜くと、そこから出されたのは直剣では無く蛇腹剣と呼ばれる連結刃だった。

「っ!？」

魔法の効果なのか、明らかに先ほどの質量より長く増えた連結刃を避ける為必死に飛び回るフェイト。

しかし、相手の物理法則や質量保存の法則を無視した蛇腹剣の動きには対応しきれず、所々浅い切り傷を受け血が流れる。そんな受けた

傷から流れる血を見てフェイトは驚く。

「物理干渉設定っ!？」

物理干渉設定。つまるところ物理非干渉設定―通称非殺傷設定―にされていない。と言う事だ。それはつまり、相手はこちらを本気で殺す気だと言う事である。

その事が判った瞬間、フェイトの体に震えが走る。

今までフェイトは命のやり取りを経験したことは無かった。ジユエルシードの暴走体の時は例外だが、アレは最強モードを利用して手を上回っていたため、そこまでの恐怖は無かった。

しかし今回は違う。今回の相手は格上であり、さらに最強モードも使用できない、させて貰えない状況。そんな状況でフェイトは生まれて初めて、生命の危機に瀕する根源的な恐怖を味わっていた。

『フェイト! しっかりして!』

「え?」

その恐怖に鈍った動きを相手が見逃すわけが無く、気づいたら襲撃者は目の前に迫り、剣を振り上げていた。

「紫電、一閃!!」

「っ!」

とっさにバルディッシュでガードしようと突きだす。しかし、金属が弾ける嫌な音と共に相手の剣先はフェイトの目の前を通り過ぎて行った。

——え?

一瞬、呆然とするフェイト。その手の中には持ち手の中ごろを綺麗に断ち切られたバルディツシュがあつた。

「っ!!」

それでも今は戦闘中、どうにか気を取り戻し短くなったバルディツシュで応戦を試みるが、相手はそれを簡単に避け、いなし、そして――

「すまんな」

そう一言言うと、剣を思いっきり振りかぶつた。

防御も回避もままならず直撃を喰らい吹き飛ぶフェイト。

そしてその勢いのまま歩道橋へと突撃する。

「っあー!」

あまりの衝撃と痛みにフェイトは一瞬気を失いそうになる。しかし粉塵の先に一瞬だけ、気絶し倒れているのはが見えた気がした。それだけを、自分の体など気にせず、なのはの事だけを考え、手を伸ばす。

「っ、な、のは……」

こうして状況は最初に戻る。

――痛い、痛い、痛い痛い痛いいたいいたいいたいいたいいたいっ!

ある意味初めて受ける痛みにレヴィの思考は焼き切れたように一つの単語を繰り返す。

左腕とあばらが数本折れているこの状況はレヴィにとって、フェイトにとっても初めての出来事であり痛みだった。

ばMPダメージであり、HPにダメージはほぼ行かない。そしてフェイトとレヴィはリンカーコアが別々。つまり別のMPを保持している状態である為、フェイトが気絶寸前まで魔力ダメージを受けても、レヴィに変われば回復するのだ。正確に言うなら、レヴィは攻撃を受けていないのだから、無傷のまま、と言うことになる。

そして今までの戦闘訓練と言うのは物理非干涉設定。つまり非殺傷設定で行われていたため、受けるダメージのそのほとんどは魔力ダメージとなる。これがレヴィがフェイトからレヴィに主導権を変えればダメージが回復すると勘違いしていた理由となる。

——色々と想定外でありあまり思考がうまく回らないけどつ。

レヴィがそう思っている内に不快な痛みを伴う魔力の蒐集は続く。そしてレヴィはそれを行っている相手を睨みつけ、右手に握ったバルディッシュを突き付け魔法を放つ。

「っ!？」

相手の顔面を狙った電刃衝は見事不意を突くことに成功したが、それは相手のサンバイザーのような仮面を破壊するだけで終わった。

「貴様、まだ意識がっ」

不意の攻撃を受けたシグナムはそれを行ったレヴィを驚愕の表情で見つめる。そんな目で見つめられたレヴィは不敵な笑みを浮かべながら言う。

「そんな悪趣味な仮面、美人が台無し、だよっ」

「そうか、それはすまないな」

シグナムはレヴィの挑発をさらりと受け流しながら、レヴィにそれ以上の行動が不可能だと判断すると蒐集が終わるまで油断はしまいと、レヴァンティンに手を掛ける。

——イタチの最後っ屁みただけど、映像は撮った。あとは……

薄れゆく意識の中でレヴィはバルディッシュの記録映像にシグナ

ムの顔を映せたことを確信しつつ、最後の一押しをして意識を失った。

* *

レヴィが気絶してなお、暫く魔力の吸収は続いた。それはフェイトの魔力量を大きく超えた量であり、そのあまりの魔力の多さに襲撃者、シグナムは驚愕していた。

しかし、だいたひ魔力を蒐集しこのままでは生命に関わるのではと思えるほどの量を蒐集すると、蒼いリンカーコアは一際大きく輝く。

その輝きが収まると、蒼かったリンカーコアは一瞬で金色に変わり、しかもそれだけでは無く吸ったはずの魔力すら回復したように見えた。

「なんだこれは!?! いったいどういう体をしているのだ!?!」

戦闘時は2色の魔力光を使い、撃墜して蒐集を開始したら蒼、しかししばらくすると金色に変わり、予測した量よりはるか多くの魔力が吸えてしまっている。

「テストタロツサ、フェイト・テストタロツサと言っていたな。いったいどういう体を……」

——いや、考えても仕方ない。今は想定以上に魔力が蒐集できた事だけを喜ぼう。

そうして死なない程度ギリギリまで魔力を吸って、シグナムの前にあった本、闇の書は閉じる。

「よお、シグナム。どうだ」

そう声をかけシグナムに近寄るのは、シグナムと同じような恰好だ

が、背丈はなのはやフェイトとあまり変わらない赤髪の少女。

彼女はヴィータ。シグナムと同じ闇の書の主に仕えるヴォルケンリッターの一人であり、先にもう1人の魔導師―なのは―を襲撃していたのもヴィータである。

「ああ、予想以上に蒐集できた」

「マジか。うつわすつげえ。この二人だけで40ページ位埋まってるじゃねえか」

「ああ。だが……」

とシグナムは言いかけそれを止める。

「ん？ どうした？」

「いや、なんでもない」

シグナムが先ほど言いよんだのは自分が相対した少女、フェイト・テストアロツサのリンカーコアについてだったのだが、ヴィータもシグナムと同じで考える事を得意としていない。

——今言ったところでどうにもならんか。後でシャルに話すだけにしておこう。

シグナムが守護騎士の参謀役である湖の騎士にだけ話しておこうと考えていると、ヴィータが声をかけてくる。

「どうした、早く帰ろうぜ。はやて達が待ってる」

「ああ。そうだな」

襲撃した少女たちの後始末はシャルにまかせ、シグナムとヴィータは一足先にその場を後にするのだった。

第2話 「目覚めない彼女」

「……フェイト……」

最愛の娘の手を握りながらプレシアはその名を呼ぶ。

場所はアースラの医務室。

フェイト達が何者かに襲われたしばらくした後によく地球に到着し、気絶していた二人を回収したのだ。

フェイトが寝かされているベッドの隣にはなのはが寝ており、それを囲むように高町家の面々がなのはを心配そうに見つめている。

「すみません皆さん、遅くなりました」

医務室の扉が開きそう言いながら入ってきたのはアースラの責任者であるリンデイ。なのは達の検査やクロノ達の報告などを纏めてから来たらしい。

そんなリンデイに気付き桃子が声をかける。

「リンデイさん」

「遅くなってすみません桃子さん。テストタロツサさんも」

「いえ、それでこの子達はどうかなの？」

リンデイに声を掛けられプレシアも顔を上げながら言う。その言葉にその場にいた全員が固唾を飲んでリンデイを見つめる。

「はい。なのはさんにフェイトさん。二人とも命に別状はないでしょう。激しい戦闘があったようですが、二人には高度な治療の痕がありました。それのおかげで後遺症が残る、と言った事もないでしょう」

リンデイの言った言葉になんとか安心して安堵の息をつく面々。

「今日が覚めないのは、戦闘での疲労もありますが何よりもリンカーコアの衰弱が原因であると思えます」

続き放たれた言葉にプレシアはいぶかしげにリンデイを見つめるが、高町家は得心がいかず美由紀などは首をかしている。

「リンカーコアの衰弱？ 魔力の使い過ぎでは無くて？」

リンデイにそう質問するのは自身も大魔導師と呼ばれ、過去ある理由でリンカーコアの研究もしたプレシア。その質問にリンデイは領き答える。

「はい。魔力の使い過ぎ、にとしては衰弱が激しいです。これは今までの魔導師襲撃事件の共通項なのですが、なのはさんとフェイトさんは魔力を無理やり吸い出されたと予想できません」

「無理やり、ですって!?!」

リンデイの放った言葉の異常性に気付けるのも、やはりプレシア一人だけ。

「はい。その所為でリンカーコアが衰弱し、それによって二人は未だ目覚めていないと思います。医務官の診察によると早ければ明日にでも、遅くても数日中には目を覚ます、と言う事です」

その言葉に高町家の面々は一際安心したように力を抜く。しかしプレシアは険しい表情を止めていなかった。

——魔力の強制的な吸収。なのはちゃんとフェイトが襲われた……。これは、レヴィの言う闇の書が動き出した、とみて間違いないわね。

レヴィから聞いた話、「原作」 2つ目の事件。それが闇の書事件。それが始まったと言う事はすでに闇の書の主自体ものつぴきならぬい所まで来ていると言う事である。

そんなプレシアの考えはリンデイの声で中断される。

「テストタロツサさん? どうしましたか?」

「え? あ、ああ。ごめんなさい。少し考え事を」

「そうですか。それで、失礼ですがテストタロツサさんの魔力ランクはどのくらいですか?」

「私? 私は、……Sランクよ」

「そうですか、ではアリシアさんは……」

「Fランクよ」

リンデイの質問にすぐさま答えるプレシア。その答えを聞きリンデイは領き少し考えた後口を開く。

「そうですか、ではやはりテスタロツサさんにはこちらから護衛を付けましょう」

「私が襲撃されるかも、と言う事ね？」

「はい。なのはさん達を襲った犯人が今までの魔導師襲撃事件の犯人だとしますと、その理由は魔力を蒐集する事なのではないかと思われまます。共通項としては魔力保有量が多い、大体AAランク以上の魔導師が襲われています。その犯人からしてみれば、魔力ランクオーバースのテスタロツサさんは十分以上に襲撃の対象になるかと」

「そうは言っても、悪いけど家の子ですら倒された相手よ？ そっちにそれ以上の戦力がいて？」

プレシアの言う事は最もであり、フェイトとなのはは魔力ランクAAの期待の新星である。魔導師としての戦闘力、魔導師ランクは少し落ちるだろうがそれでもAAは硬い。そんなのは達に1体1で勝てるアースラの職員はリンデイとクロノを含めても片手で足りる程しかない。

そんな戦力だが相手にしなくてはならないのは、なのはとフェイトに勝る魔導師。しかも複数いると予想されるのだ。

「それを言われると辛いのですが……。クロノ執務官を護衛に付ける、と言うのもこちらの事情的にキツイ物がありまして……」

「それだったらないよりマシ、と言うしかないわね。もし襲撃されたら、私が魔法を発動する時間を稼ぐ盾くらいにしかならないかもしれないわよ？」

「はい。極論となりますが、主力が到着するまでの時間稼ぎにはなるでしょう」

プレシアの言葉を引き継いだ、リンデイの冷たい言葉を受け止め、プレシアは諦めたかのようにため息を吐く。

「わかったわ。こっちも使い魔のリミッターを外しておくようにする。護衛の人は任せたわよ」

「はい。お任せください」

そう言つてリンデイとプレシアの話し合いが終わると、リンデイは高町家の面々に顔を向ける。

「それで、高町さん達はどうしましょう？　なのはさん達が起きたら検査をして、それで問題が無ければそちらにお返しする、と言う風にしますが……」

リンデイのその言葉で悩む高町家。全員が全員ここに残りたいと言う思いがある。しかし、恭也と美由紀は今は学生であり、学校がある。桃子と士郎は翠屋があると休もうにも休めない事情があった。

「とりあえず俺が残ろう」

そう言つたのは高町家の大黒柱である士郎だった。

「桃子が居ないなら翠屋は意味がないし、俺はコーヒーと軽食だけだから、お客さんには悪いがお出しできないと言つてくれ。恭也と美由紀は学校もある事だし行けるならちゃんと言きなさい」

士郎の一応は理屈の通つた言葉に渋々と言つた形で従う恭也と美由紀。

一応話がついたと言う事で士郎はリンデイに世話になる事を告げ頭を下げる。

「わかりました。それでテストタロツサさんは」

「こつちはアルフを残らせて私は帰る事にするわ」

「そうですか。わかりました」

そう言つてプレシアは立ち上がり、フェイトの頭を少しだけ撫でると医務室から出ようとす。

「ああ、それとこれ、家の住所よ。護衛なら必要でしょ」

「ありがとうございます」

プレシアが去り際にリンデイに紙を手渡し、医務室から去つて行った。

「それでは高町さん達も、今日は遅いですしお送りします」

リンデイのその言葉で高町家は腰を上げ、後ろ髪を引かれる思いでなのはに各々別れを告げるとリンデイに連れられ帰つて行った。

* *

なのは達が襲撃された2日後、なのはとフェイトは目を覚ました。その日は詳しい検査などで一日を費やした。

「二人とももう大丈夫みたいです。ね、リンカーコアも異常なし、どころか容量が大きく成長した位です。若さっていいですね。」

検査着を着たままの二人に向かって言うのは、アースラに搭乗している技術官のマリエル・アテンザ、愛称はマリィ。

そんなマリィは本人も16歳と若いはずなのだが、なにやら言い始めた婆臭いことになのはとフェイトはどう反応してよいのかわからず、苦笑いを浮かべる。

「あの、それでレイジングハート達は……」

話題を変える為なのはが切り出す。それは、先の戦いで破壊されてしまった自分たちのデバイスについての事だった。

「ああそれならちよつとこつちに来て様子を見てみます?」

「はい」

「お願いします」

マリィに連れられデバイスメンテナンス室へと移動するなのはとフェイト。

「ここです」

そう言われ通された先には、なにやらポットの中に浮かぶひびの入ったレイジングハートとバルディッシュだった。

「レイジングハート……」

「バルディッシュ……」

二人は悲しげな顔でそれを見つめる。自身の力が至らなかったばかりに、相棒をこんな姿にさせてしまった。そんな不甲斐無さに、悔しさに顔をゆがませる。

「こう見えて、コアの重要な部分は無事なので、今はフルリカバリモードで修復中です。必ず綺麗になって二人も元に戻ってくるからね」

そんな二人の悲しげな雰囲気を感じ取ったのマリーは、何も心配は
いらぬ事事を二人に告げる。

「はい。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

そんな優しさを見せるマリーに一言礼を言つて、二人は整備室から退室し、医務室へと帰る。

帰りの廊下で一言も会話を交わさず重たい空気が流れているのはとフェイトだったが、しばらく歩いた所でなのはが口を開く。

「……もつと、強くならなきゃね」

「……うん」

覚悟を決めた顔をするなのは。次は、もう二度と負けない。そんな決心と『強さ』への強い渴望がその瞳からは見える。

「強くなろう、二人で」

そんななのはの強さを羨みながらも、フェイトはなのはへと笑いかける。

「二人じゃない、三人。ううん、五人で、だよ」

フェイトの言葉を否定して言ったなのはの言葉の意味が少しわからなかったフェイトだが、少し考える事で思い当たる。

「うん！ 私と、なのはと」

「レヴィちゃんと、レイジングハート、バルディッシュ」

『五人で、強くなろう！』

最後の言葉は二人で手を握りながら一緒に言う。やはり、フェイトにとってなのはは最高の親友であるのだ。

ジュエルシード事件が終わった後、高町家にはレヴィの存在を打ち明けている。さすがに困惑を感じていたが、その中でもなのはと士郎だけはすぐさまレヴィの事を認めてくれていた。

なのはレヴィと面識がある上に、持ち前の朗らかさから。士郎は、親であるという事に加え、人生経験の豊富さから。そうして、レヴィは高町家とテストアロッサ家だけが居る場所では気構えなく、表に出られるようになったのだった。

それはレヴィも当然嬉しく、高町家で稽古をつけてほしい等、無茶を言う事もあったが、それも大人たちは子供の我が儘として受け止めていた。

「(次は、もっと強くなろう！ あの人に、負けないように！)」

自身の中に居るもう一人の自分と言っても遜色ない程、密接な関係にある相棒に念話で伝えるフェイト。

この廊下には周りを見てもなのはしかおらず、本来はそんな事をする必要が無いはずなのだが、この半年でできた習慣は早々に変えられるものではない。

そんな少しだけフェイトがドジをした。ただそれだけの話だった。

すぐさま、頭の中にレヴィが念話で『別に念話じゃなくていいんだよ。フェイト』などと少し苦笑いしながら喋りかけてくるはずだった。

本来ならば。

「あれ？」

予想した返答が帰ってこず疑問の声を上げるフェイト。唐突に変な声を上げると同時に歩みを止めたフェイトをなのはも訝しむ。

「どうしたの？ フェイトちゃん」

「……………うそ……………そんな」

しかし聞かれた本人のフェイトは、なのはの言葉が耳に入っていない

のかぼそぼそと独り言を呟く。

「フェイトちゃん？」

「え!?! あ、うん。えっと、ごめんどうしたの？　なのは」

再度呼びかけられた声にやっと気づいたのか驚きながら謝るフェイト。そんなフェイトをなのは心配そうな顔をしながらフェイトの顔を見つめる。

「大丈夫？　ボーっとしてたけど、まだどこか調子悪かったり……」

「ううん！　大丈夫！　大丈夫だよ」

「そう？」

「うん。とりあえず、母さん達を待たせちゃ悪いし、早く帰ろ」

「……うん」

心配するなのに対して、明らかに空元気をさせるフェイト。なのははその空元気の理由は思いつかなかったが、しかし、フェイトがなにか無理をしようとしている事はわかった。

「フェイトちゃん、何かあったら相談してね」

「うん、ありがとう。なのは」

ああ、なんと美しい友情か。しかし、そんななのはの友愛も、今のフェイトには完全には届かなかった。今のフェイトの心を占めているのは、どことなく漠然とした、しかし強烈な不安と、ぽっかりと穴が空いたかのような虚無感だけだった。

* *

どことなく落ち込んだ様子のフェイトを心配したなのはは、フェイトの手を握りながら一応医務室まで帰ってきた。

医務室のドアが開くとそこには、士郎と美由紀、そしてプレシアとアルフにリンデイが待っていた。

「なのは！　もう大丈夫なんだよね？」

入ってきたのはに飛びつかん勢いで立ち上がり無事を確認する美由紀。そんな美由紀に苦笑いを浮かべながらなのは自身の無事を告げる。

「検査でも異常は発見されていません。二人とも健康体ですよ。リンカーコアの方も異常はありませんが、大事を取って今日明日は、魔法を使わないでくださいね」

そんな少々過保護な姉を見て、リンディは少し微笑みながら注意事項を言う。

「はい。わかりました」

リンディの忠告に素直に頷くのはなのは。しかし、その隣のフェイトは、顔を俯かせたまま黙っている。

「どうしたの、フェイト？　もしかして、なにか違和感を感じてたりする？」

そんなフェイトが心配になったのか、プレシアは近づき跪くとフェイトと視線を合わせ言う。

「……リンディ、さん」

フェイトが、重く口を開く。その次に続く言葉を聞きとる為か、医務室の中がシントツと静まる。

「私、本当に異常、なかったですか？」

その声は、その言葉は、まるで自分に異常が合って欲しいかのような言い方であり、それはリンディを困らせた。

「え、ええ。あなた達が運び込まれた時と、目覚めてからの精密検査の結果を見ても、どこも異常は見当たらないと私含め医療技師は判断しました……」

「……そうですか」

リンディの言葉を聞いたフェイトの返事は、まるでどこか落胆したかのような、求めている言葉が返ってこなかったかのような、そんな印象を与えた。

「もしかして、なにか違和感を感じていたりしますか？」

プレシアと同じ質問になってしまおうが、もし検査でわからなかった異常がフェイトに有るのなら、アースラでは無くミッドチルダの総合病院でさらなる精密検査をして貰わなければならない。

「いえ、大丈夫です。一応念押しに確認したかっただけですから」

そんな確認も込めての質問だったのだが、フェイトの返答は至極あつさりとしたものだった。

「そう、ですか。今日は二人とも家に帰って貰って構いませんが、もし何か違和感や不調を感じたら、すぐさま連絡してくださいね」

「はい」

「わかりました」

リンデイの言葉に今度はフェイトも素直に頷く。

そうして、一抹の不安をリンデイとなのはに残したモノの、このままアースラで厄介になる訳にはいかないのです、二人は家族と共に帰る事になった。

「フェイトちゃん、えっと」

去り際に、なのはがフェイトに声をかける。声を掛けた理由はこれからどうするのか、やホントに何も不調は無いのか、といった事を聞きたかったのだが、なにかから聞けばいいのか纏まらず、言葉が詰まってしまう。

そんななのはの様子を察したのか、フェイトが話し始める。

「なのは、明日の朝から道場にお邪魔しても、良いかな」

「えっと、私は、良いけれど……」

それは、二人の訓練に関しての事だった。レヴィが高町家に認められてから稽古と称してたまに高町家の道場に行く事のあるフェイトだったが、それはもっぱらレヴィのための特訓だった。フェイトは今更地球の武道を学んでまで強くなる意味が見いだせなかったのだ。

しかし、今回の事件で出会った相手はまさに武人。その剣の冴えも、抑え込まれていたが、しかし漏れ出ていた殺気も、本気になった

士郎や恭也と遜色ないほどであった。

だから、たとえレヴィが居なくても、レヴィが目覚めて居なくても。そんな相手との稽古は自分の為になる。そう判断しての提案だった。

「良いでしょうか？ 士郎さん」

「……そうだね。レヴィちゃんにも言ったけど、技を教える事は出来ない。ただ打ち込みや組手の相手ならば、遠慮なく言ってくれ」
「ありがとうございます」

士郎にも確認を取り、許されたので明日の朝から高町家へと行く事になるフェイト。

「なのは、明日からよろしくね」

「う、うん。よろしく、フェイトちゃん」

どこか無理をした雰囲気で喋るフェイトと、そんなフェイトを心配そうな顔で見つめるなのは。

しかし、今日は日も落ち遅くなってしまっていると言う事で、挨拶も程々にお互いの家へ帰る事となった。

第3話 「独りにされた少女」

「89!・90!・91!」

高町家の庭に二人の少女の声が響く。

その声を発しているのは茶髪のツインテールと金髪のツインテールをした若干10歳前後の二人の少女。

高町なのはとフェイト・テスタロッサだ。

二人は道着に身を包み、まだ気温も上がらず寒い朝に、口から白い息を吐き出しながら懸命に木刀を振っている。

「98!・99!・100!」

そうして二人同時に目標である100回目の素振りを終え、木刀を握りしめていた腕を下ろし一息つく。

「よし、二人ともお疲れ。汗を流して来たら次は道場に行つて見稽古だ。ちゃんと汗を拭いておくように」

「はい!」

師範役の高町士郎はそう言うと二人に汗を拭きとる用のタオルを渡し、家の中へと入っていく。

その後続く様に、なのはとフェイトも家の中へ入り、シャワーを浴びる為バスルームへと向かう。

冬だがキチンと体を動かすとそれなりに汗をかく。そして汗をかけば服が張り付き気持ち悪くなるのに季節は関係ない。

なのはとフェイトは一足先に汗を流す為、順番待ちなどせず一緒にバスルームへと入り、ぎつとシャワーを浴びる。まだ体が小さく、さらにお互い気が置けない親友であるからこそできる事だった。

「ぎつと流したら直ぐ着替えて行こうね」

シャワーで汗を流しながらなのはがフェイトに言う。

「……」

しかし言葉を掛けられたフェイトは昨日の別れ際と同じく、どこか心ここにあらずと言った様子だった。

そんななのは心配すらさせているフェイトの胸中は今、生まれたころからの二心同体である相棒、レヴィの事でいっぱいだった。

昨日家に帰ってから、母であり天才科学者であるプレシアに相談してみたが、一向に解決しない。

そう、昨日からレヴィの反応が無くなってしまったのだ。

元からレヴィが表に出ない限りレヴィの存在を証明できたのはフェイトだけ。フェイトだけが、レヴィを感知しその存在を確認できたのだ。

しかし、今はそれすらできない。そんなフェイトですらレヴィの存在を感知できない。

フェイトとレヴィの関係を表すとするとするなら一つの部屋をルームシェアしている状態が似ている。一つの部屋―これはフェイトの部屋なのだが―にレヴィと言う同居人が居るのだ。例え相手が寝ていてもお互いの生活空間はたった一つの部屋、同じ空間なのですこし意識を割けば存在が確認できる。

しかし、今回はその部屋自体にレヴィが居ない。言い表すならそんな状況だった。

今までではありえない状況。例え眠っていても部屋からは出ない、出ることのできないフェイトとレヴィ。しかし、今回の状況はレヴィが部屋の中に存在しない。

そんな状態が外部的な検査などでわかる筈もなく。検査してわかった事は、レヴィが居た状態で正常であったフェイトの体は、レヴィが居なくても同様に正常であると言うことがわかった。ただそれだけだった。

昨日の夜はまだレヴィの目が覚めていないだけ。一晚経てば、と思
い寝た。しかし朝起きててもレヴィはフェイトの中に帰ってきていな
かった。

自分から士郎に稽古を頼み、週2で稽古をつけて貰いに行くレヴィ
なのだから、稽古をしていればひよっこり帰ってくる。そう思って家
を出た。

しかし、素振り100回が終わっても、フェイトの中に帰ってこな
い。

そんな事實は、フェイトの心を押しつぶしそうだった。その重圧は
現実にまで現れ、ぐしゃぐしゃに潰れて死んでしまうのではないのか
と、そんな錯覚すら思わせる程だった。

しかし、今その重圧に負けるわけにはいかない。連続魔導師襲撃事
件の犯人と思わしき人物は相当の実力者であり、そして次は自分の敬
愛する母が、その身にオーバースの魔力を宿す大魔導師、プレシア・
テスタロツサが襲撃されるかもしれないのだ。そんな時に、レヴィが
居ないからといって母を守る事が出来なければ、フェイトは自分で自
分が許せない。

レヴィが、相棒が、もう一人の自分が認めてくれたフェイト・テス
タロツサは。あの時、なのはとの決着をつけたあの時に認められた
フェイトは、そんな弱い少女ではないのだから。

「フェイト、ちゃん」

「なのは……」

なのはには、昨日寝る前に念話を通じてレヴィが居なくなっ
てしまった事を話していた。そうしてそんな自分をとて心配してくれ
ても居た。

しかし――

「大丈夫だよ。なのは」

——しかし、高町なのはが求めたフェイト・テスタロッサは、高町なのはに打ち勝ったフェイト・テスタロッサはそこで挫折する程の弱い少女では無い。

「レヴィが居なくても、ううん。レヴィが居ないからこそ、私はもつと強くなるなくちゃいけないんだ。レヴィが帰ってきた時に、自慢できるように」

——だから今は強くなろう。無心に、強さを求めよう。

あの、桃色の髪をした黒に身を包んだ剣士に負けないほどに、強くなろう。

「だから、一緒に強くなろう、なのは」

「うん！」

一晩かかって自分の中で折り合いをつけたのか、バスルームから出る時は、昨日とは打って変わり清々しい顔をしているフェイトをみて、なのはもまた明るく頷いた。

* *

そうして、二人は強さを求めた。ただ貪欲に、ただひたすらに。

士郎からは、バルディッシュやレイジングハートと同じ長さの棒を拵えて貰い、それを用いた棒術を磨いた。

恭也からは、本当に死ぬかもしれないと言う錯覚を起こすほどの殺気を受ける訓練をして貰った。

リニスやプレシアからは、アースラが抽出した映像から実際の戦闘を視野に入れた魔法戦技の訓練をして貰った。

アリサやすずか、アリシアは自分たちが居る時だけは訓練や、魔法の事を忘れられるようにと、色んな事をして遊んだ。

そうして周りの人たちに助けてもらいながら、鍛えて貰いながらなのはとフェイトの二人は日々を過ごしていき、そして、アースラからレイジングハートとバルディッシュの修繕が終わったと連絡が入った。

そうしてやってきたアースラの整備室。二人の目の前には綺麗に修復された愛機の姿があった。

「二人とも完全に修繕は完了。それどころか二人の要望で改造もしてあるけど、改造された部分についてはマニュアルを用意してあるから、後で読んで実際に試してみて」

「はい、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

マリーからレイジングハートとバルディッシュを受け取り、二人そろって同時にお辞儀をする。

そうして帰ってきた愛機を眺めると、二人はある違和感に気付く。

「レイジングハート、どこか変わってる。改造の影響？」

「はい。さらに可憐になったと自負しています」

「うん！ すっごく可愛いよ！」

レイジングハートのお茶目な冗談に気づかず、素直に受け取り喜ぶなのは。

「バルディッシュも、かっこよくなってる」

「ありがとうございます」

それを見て、フェイトもバルディッシュを褒めるが、バルディッシュは一言お礼を言うだけであった。

「それじゃ、レイジングハート改め、レイジングハート・エクセリオン。バルディッシュ改め、バルディッシュ・アサルト確かに受け渡ししました。二人のマニュアルはこれね」

そうやってマリーは二人にそこそこの厚さの冊子を手渡す。

「訓練室は取ってあるから、早速手慣らししてきていいよ」

「はいー」

「マリーさん、ありがとうございますー！」

大きな声でお礼を言うなり駆け出し整備室を出る二人を見送るマリー。

「あはは、若いって、良いわあ」

修繕に加え、本来ならば許されない無茶な改造を、安全に使用できる程度まで落とし込み実現したマリーは、当然その作業も突貫も突貫、ここ数日まともに寝ていないと言うレベルで仕事に取り組んでいた。

そんなマリーは、16才でありながらまるで中年のような事を吹きながらその身を椅子に預け、力尽きた。

*

そんな、さりげない所で管理局の闇が見えた整備室を後にした二人は今、マリーが取っておいてくれた訓練室でデバイスをセットアップしていた。

「これが、新しい、レイジングハート」

「バルディッシュも結構変わってるね」

二人ともマニュアルを見つつ、自身のデバイスにどこがどう変わったのか説明してもらおう。

「私もバルディッシュも大きく変わった点はカートリッジシステムの導入です」

「マニュアルのp58を開いてください」

無機質な教師二人に言われ、マニュアルを開くのはとフェイト。

カートリッジシステム。それは古代ベルカの時代に開発されたシステムであり。あらかじめ圧縮しておいた魔力をカートリッジと言

う形で保管し、戦闘時にそれをデバイスが解放することによって本来以上の魔力を得る事ができるシステムである。

古代ベルカ式アームドデバイスに搭載されていたシステムであり、術者、デバイス共に少なくない反動があり、古代ベルカでもカートリッジシステムを使いこなせる者は少なかつたと言われている。

ミッドチルダ式のデバイスは、デバイス本体の強度をアームドデバイス程重要視していない為、その反動を受けきれず無理に使おうとするとデバイスが自壊、制御しきれなくなった圧縮魔力が使用者自身を傷つけるとされ、研究はされていたが安全に使用できるほどでは無かつた。さらに研究の優先度も低く、研究に予算が多く割かれていなかったのも、カートリッジシステムが未だ実戦レベルまで至っていない理由であつた。

今回は、デバイス二人の我が儘によりマリーがそれを取り寄せ、なおかつカートリッジシステムに耐えられる程の耐久性。つまり、武器として使つても良いほどの頑丈さと、使用者への魔力のフィードバックによる被害を抑える為の魔力制御能力の上昇。それらをたった一週間足らずで成し遂げた。

マリーの涙ぐましい努力によって完成したレイジングハート・エクセリオンとバルディッシュ・アサルトは、共にカタログスペック上は耐久性が約42%程上昇し、CPU性能が26%、メモリ数が約1.5倍。さらにカートリッジの予備を保持するために、収納空間も拡張され。それだけでは無く、魔力制御のより効率化、高速化を図る為ソフト面でも改良が行われ、加えて新たな変形機構すら実装していると言ふ。まさに魔改造と言ふのがふさわしい改造を受けていた。

そんなことをマニュアルの文面と、愛機の説明から理解した二人は頬を引きつらせる。

「あ、あはは。凄いなレイジングハートは。私、レイジングハートを上手く使いこなせるかな」

なのはは、大幅に強化されたレイジングハートが自分の手を離れて行ってしまうのではないかと言う錯覚を覚え、弱音を吐いてしまう。

〈マスター。私は、先の戦いで自身を不甲斐無く感じました〉
弱音を吐くなのはを慰めるように、独白を始めるレイジングハート。

〈マスターは強い。誰よりも才能にあふれ、誰よりも強さを求め、そして誰よりも、自分に厳しい。そんなマスターがなすすべもなく負けたのは、私の所為であると。私はそう感じました〉

そうじゃない、そんなことはない。なのははレイジングハートにそう叫びたかった。しかし、レイジングハートの独白は続き、なのはが口を挟むことを許さない。

〈私がマスターの魔力をもっと上手く使えて居れば。私に敵のデバイスによる攻撃を受け止めきれほどの耐久性があれば、そうすれば、私のマスターがあんな程度の小娘に負けるはずがありません〉

合成音声のその言葉は、無機質なはずの言葉は、しかし聞いている者にレイジングハートの悔しさを、熱を伝えるに十分すぎるモノだった。

〈ですから、私は元に戻るだけでは不満だったのです。デバイスの差さえなければマスターは負けない。その事を証明するために、私はアテンザ技師に無茶を承知で頼んだのです〉

「レイジングハート……」

〈この気持ちは、その無口な彼も同じです。私達のマスターは強い。誰よりも、前回後れを取ったのは私たちの所為なのです。ですから、次は負けません〉

そう言うレイジングハートは黙る。言いたい事は全て言ったと言う風に。

「レイジングハート、ありがとう。もっと一緒に強くなろう。ずっと一緒に戦おう」

〈Yes, My master〉

そうやってなのははレイジングハートを胸に抱きしめる。

「バルディッシュ」

フェイトも愛機の名前を呼ぶ。無口で寡黙な彼もまた、先の敗北を

悔しがっているのだと知って。

「もつと強くなるう」

そう言ってフェイトはバルディツシュを握りしめる。バルディツシュはただ、静かに、コアを点滅させるだけだった。

* *

なのは達がそうして新しくなったデバイスの使い方を学んでいると、けたたましくアラームが鳴り響いた。

なのはにとつては聞きなれたその音を聞いて、何か起きたのだと判断し訓練所を飛び出す二人。そしてその勢いのままアースラのブリッジへとたどり着く。

「すみません、いったい何があったんですか!？」

ブリッジに入ると同時に謝りつつ側に居るリンデイに質問するなのは。

「なのはさん、フェイトさん。実は……」

リンデイが振り向き説明しようとするが、それより先にフェイトが叫ぶ。

「母さん!？」

そう叫んだフェイトの視線はブリッジに映し出された映像であり、そこには襲われているプレシア達の姿が映し出されていた。

そこにはアルフとリニス、それにプレシアを護衛していた武装局員数名が前に立ち、先日の襲撃犯と対峙しているところだった。

先日の襲撃犯もピンク髪の女性と赤髪の少女に加え、銀髪の男性と金髪の女性が新たに増え戦力を増している。人数だけではこちらの方が多いが、武装局員は誰もが襲撃犯と一対一で戦える実力は無いらしく弾除け程度にしかならない。今こうして映像を見ているも

一人、また一人と戦闘不能にさせられている。

「助けに、行かなくちゃ!」

そう言つて駆け出そうとするフェイトをなのはが止める。

「なのは! どうして!」

「落ち着いてフェイトちゃん。リンデイさん、クロノくんたちはどうしてるんです?」

焦るフェイトに対しなのはは冷静に状況を知る為にリンデイに尋ねる。

「クロノ達は先ほどからパトロールをしていて少々離れた場所に居ます。今、現場に急行しています」

リンデイがそう言うと、間髪入れずにアースラにクロノから通信が入る。

『こちらクロノ! 結界に到達しましたが思ったより強固なものと、見知らぬ術式の所為で時間がかかっています』

クロノの報告を聞き、リンデイはなのはとフェイトに向き直る。

「なのはさん、フェイトさん。今からあなた達を結界上空に転移させます。一部でも良いので結界を破壊してそこから侵入してください。おねがい、できますね」

『はい!』

リンデイの頼みに力強く頷くなのはとフェイト。リンデイはそれを確認するとエイミイとクロノに指示を出す。

「エイミイ、それにクロノ執務官も。今の話、聞いていましたね」

「もちろんです!」

『了解しました。なのは達が結界を破壊し次第、僕達も突入します』

クロノたちの答えを聞きつつなのはとフェイトは転送装置に入る。

「エイミイさん!」

「おねがいます!」

「了解! なのはちゃん、フェイトちゃん! いくよ!」

エイミイは二人の声を聞き、すぐさま転送を開始する。

まばゆい光が二人を包み、気が付くと強い風が体を打ち付け、眼下には海鳴市が見える。

「レイジンググハート・エクセリオン！」

「バルディッシュユ・アサルト！」

『セーット、アーーーッブ!!』

二人同時にデバイスをセットアップしバリアジャケットを纏う。

「なのは」

「うん！ フェイトちゃん！ 行くよ！」

セットアップして直ぐに二人はデバイスを構え、眼下の結界に向かつて突きだす。

「デイバイイイイイイン——」

「プラズマアアアアアアアアア——」

〈Divine Buster〉

〈Plasma Smasher〉

レイジンググハートとバルディッシュユが魔法宣言と同時にカートリッジをリロードする。

「バスツタアアアアアアアアアアアアアアアアア——!!!」

「スマッシュアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——!!!」

そうして二人の砲撃魔法が同時に放たれる。それは以前よりさらに強化され、なおかつ魔力効率もわずかだが向上していた。

そんな二つの砲撃魔法が結界に当たり、そして力技で撃ち貫く。そうしてできた穴へとなのはとフェイトはすぐさま乗り込み、遅れてクロノ達パトロールに出っていた武装局員も結界へと乗り込んだ。

その勢いそのまま高速で飛ぶフェイトの目に入ったのは、今にもシグナムに斬られそうになっている母、プレシアの姿だった。

それを見たフェイトはさらに速度を上げ、そのままシグナムとプレ

シアの間に割り込み、シグナムが振るう剣を受け止めるようにバル
デイツシュを突きだす。

「なにっ」

甲高い金属同士がぶつかり合う音を響かせながら、シグナムが振る
う剣はその勢いを殺される。

レヴァンティンを受け止められたシグナムは突然の乱入者に驚き
つつも、相手を観察するため剣を引き後退する。

「助けに来たよ。母さん」

後ろを向かず、相対する相手を警戒したまま言うフェイト。その背
中はとてもし大きく、纏う雰囲気は力強さに満ち溢れていた。

「ええ、待っていたわ。フェイト」

そんなフェイトにかけられるプレシアの言葉は、どこか安心したよ
うな優しい声色だった。

第4話 「独りにしてしまった彼女」

フェイトが独りになり、それでも強く地面を踏みしめていた頃、フェイトを独りにしてしまつたレヴィは暗闇の中をさまよっていた。

いや、漂っていたかもしれない。

いや、留まっていただけかもしれない。

いや、揺蕩っていたのかもしれない。

いや、泳いでいたのかもしれない。

いや、いや、いや――

レヴィの現状を表す言葉は数多く、しかしそのどれもが正解とは言い難い。

あえて言うなら、レヴィはその暗闇の中に『存在』していた。

「あゝ――」

その本人は暗闇の中で目覚めて自分が置かれた状況の中、濁つた声を出している。

声は出せる。

しかし、レヴィは自分の喉が震える感覚を得られなかった。

それは、フェイトの中に居た時と同じ。声は出せども、その声を出す器官は存在しない。

レヴィは今、暗闇の中で『自分が暗闇の中に居る』と言う感覚を持っているだけだった。

フェイトの中に居た時と変わりはない感覚。しかし、見える世界は黒一色。

自分がどこに居るのかもわからない。自分が在ると言う確固たるわかりやすい目安である身体はもとより存在しない。

「あ—————」

だからレヴィは自分がここに居るのだと、他でもない自分に伝えるために声を出していた。

声をだす喉が無ければ、音を受け取る耳もない。

それでも、レヴィの発した声は確かにレヴィに伝わっていた。

それは思考した言語では無く、確たる「音」としてレヴィに伝わっていた。

「あ—————」

そうして声を発しながらレヴィは自分の置かれた状況を考える。

直前の記憶は唐突にフェイトを襲った襲撃者、シグナムと戦い、一矢報いた状況。闇の書に魔力蒐集されながらも、シグナムの付けていた仮面を破壊することができた。その事はきつちりと覚えている。

そしてその時に自分が行った企みが成功していれば、今レヴィが存在している暗闇は、闇の書の中という事になる。

しかし、それを証明できるものは何もない。もし本当に闇の書の中

であれば、それを証明できる存在は居る。その存在をレヴィは1人、もしくは5人知っている。

だから、目覚めて暫くしてからはこの暗闇の中をさまよってみた。体もなく、上下左右も感じられない闇の中を。

しかし、どうしてか移動している感覚はあれど、それが情報としてフィードバックされない状況はレヴィの精神に多大なる悪影響を及ぼそうとしていた。

移動していると言う意識はあれど、動く脚は無く、見えている景色は変わらず、音もしない。そんな状況は自分が本当に動いているのか、いや、自分は本当に存在しているのか。そう言った疑問をレヴィに抱かせた。

「あめんぼ赤いなあいうえお。浮藻に小エビも泳いでる。柿の木栗の木かきくけこ——」

だからレヴィは声を発している。声を発すれば自分が存在しているのだと確信できるから。残念なことに今のレヴィは自分が移動しているのか止まっているのか、それすらも分からない状況であった。しかし、自分が今この暗闇の中に存在している事だけはわかった。

そうしてレヴィが暗闇の中を漂って……、いや、止まって……いや、揺蕩って——。ともかく、存在していると、どこかからか声が掛けられた。

「君はさっきから何をしているんだい」

その声は綺麗な女性の声であり、声色から落ち着いた女性なのだろうかがえる。

レヴィはそんな声を発した方向へと意識を向ける。

そうすると、今まで暗闇だけだった世界にたった一人だけ、銀色の女性が立っていた。

銀色の長髪で、赤い目をした整った顔立ちの女性。グラマラスなその体系を肌に密着するインナーとも呼べるような衣服で包み込んだ女性は、この暗闇しか無い世界で確固たる「個」を保っていた。

「ああ、やっと出てきてくれた」

レヴィはその女性を見て嬉しくなった。

自分の思惑が成功していたから。自分を認識できる人間に出会ったから。自分の存在が他者によって証明されたから。

レヴィは、本当の「孤独」に殺される直前に、救いの女神に出会ったのだ。

「君は、私を知っているのか？」

そんなレヴィの言葉に疑問を覚えたのか、女性はレヴィに質問をする。その質問をレヴィは笑顔で、意識だけは笑顔で答えた。

「もちろんさ。ボクは君に合いに来たんだから」

「君は、ここがどこだか知っているのかい」

「もちろんさ。なんせボクはシグナムに、烈火の将にここに連れてこられたんだから」

レヴィがそう言うのと目の前に居る女性は少し悲しそうな表情をして顔を俯かせる。

「そうか、君は蒐集の被害者なんだね」

「うん。だけど、自分の意志でここまでできたんだ。ボク自身の魔力を全部吸わせることで、ね」

レヴィの言った言葉に女性は驚く。

「随分な無茶する。そんな事をすれば死んでしまっていた……、いや、意識がここにあると言う事は、君はもう死んでしまっている」

そしてすぐに居た堪れない顔をする。

「そんな顔しないでよ。ボクの意識がここにある、と言う事はボクはまだ死んで無いよ」

「しかし、君の身体はもう手遅れだろう。良くて意識不明。永遠に目覚めない植物状態になってしまっているはずだ」

「それも心配いらない。ボクにはもともと身体は無いからね」

そう言ってレヴィは自分の事を説明する。

自意識が目覚めてからずっと、ある少女の身体を間借りしていた事。なぜか魔力がある事。そして、蒐集の件で判明した、リンカーコアだけは存在していたこと。

そこから、フエイトの事、自分の事。自分がしてきた事。色々な事を一方的にだが話した。

しかし、一方的でも、女性は嫌な顔せず、真面目に話を聞いてくれた。

「君は、随分と面白い経験をしてきたのだね」

そう言って、女性はすこしだけ微笑んだ。

「うん。それにしても、ボクが一方的に喋っちゃってごめんね」

「いや、良い。こんな所に居ると誰かと話す経験なんてほとんどないからね。それに、私も目覚めたばかりで外の状況を知らない。そうか、今将たちは、そのような事になっているのだな」

「うん。あ、でも今回の彼女たちの事は気にしなくていいよ。自分達で考えて、蒐集しているみたいだから」

「君は、なんでも知っているのだな」

「なんでもは知らないさ。知っている事だけ。ボクはキメ顔でそう言った」

「……すまない。君のキメ顔と言うのが、私には想像できない」

「あ、いや。……気にしないで、ゴメン」

レヴィのネタは当然女性には伝わらず、真面目に捉えられてしまっ

て変な空気が流れる。

「……ふ、ふふっ」

そうして二人とも何も言えなくなったが、唐突に女性が笑いだした。

「いや、すまない。このような会話はとても久しぶりで楽しくてね」

「……そっか。でも、この事件が終われば、いっぱいできるようになるさ」

「そう、だと良いのだがな」

レヴィの言葉が慰めの言葉に聞こえたのか、女性は今までの楽しそうな顔から一変して、とても悲しそうな表情を見せる。

「あ、えつと……」

「……すまない、お礼と言ってはなんだが、今の外の様子でも見ようか」

「あ、うん」

レヴィの生返事を聞いた女性が手を振りかざすと、そこに大きな画面が映し出される。

そこに映しだされたのは、守護騎士たちが管理局員と戦っている場面だった。

「……プレシア……」

その奥で、管理局員たちに守られるようにして立っている人を見つければ、レヴィが呟く。

「先程話してくれた、フェイトちゃんのお母さん、だね」

「うん」

「この状況、もしや彼女が……」

「うん。プレシアは大魔導師って呼ばれる位、魔力も実力もあるから」
「そうか、それは……」

謝るべきかそうでないのか、レヴィになって声を掛けていいのかからず口ごもる女性に、レヴィは明るく言う。

「気にしないで。この事はプレシアも想定済みだから」

「……そうか」

「守護騎士達も殺したいわけじゃないし、プレシアもちゃんと魔力が蒐集されても良いように、対抗策を練ってるはずだから、大丈夫だよ」

「魔力が蒐集される事自体には文句を言わないのだな」

「必要な事、だからね」

「君は、やはり不思議な子だ」

二人で画面に映る映像を見ながら喋っていると、画面に新しい人影が見えた。

その人影はプレシアに襲い掛かったシグナムの前に踊りでると、持っていた杖でシグナムの剣を受け止めた。

「彼女が」

「うん。フェイト、だよ」

「そうか、彼女が」

少しだけ言葉を交わし、映像を見つめる二人。

画面の中ではフェイトとシグナム、ヴィータとなのはの激しい戦闘が行われていた。

——ああ、フェイトはちゃんと強くなってる。

レヴィが居ない事を念頭に、キチンと冷静にシグナムを見て、対処をしている。自分ができる事を確実にこなしている。

「もう、ボクが居なくても。平気だね、フェイト」

これでレヴィの誰にも言っていない計画に対する懸念事項が一つ

解決した。

そうして、晴れやかな気分で映像を見ていると、また戦況に変化が起きる。

「あれは……誰だ？」

映像の中のプレシアの胸から、腕が生えていた。

シグナムのでも、ヴィータのでも。ましてやそれが可能な能力を持った闇の書を抱えているシャマルのでも無ければ、そのシャマルを護衛しているザフィーラのものでもない。

今まで戦場にいなかった、何者かの腕が、プレシアの胸から生えていた。

そうして、映像の中のシャマルはプレシアの胸を貫き、リンカーコアを露出させている、仮面を付けた男の言葉で、蒐集を開始。ザフィーラやシグナム達の働きもあって、それなりに魔力は蒐集できたのか、閃光魔法を放つと撤退していった。

「そっか。居るんだ、あの人たち」

その映像を見ていたレヴィは得心がいったかのように仮面の男を注視していた。

「彼が何者か、知っているのかい？」

「うん。知ってるけど、知りたい？」

「……いや、知る必要は無いな」

「そっか」

そうして、映像は守護騎士たちがどこかの家に帰宅するところへと変わる。

そのまま静かに画面を見つめ続ける二人。

画面の中は暗い部屋で思いつめたように話し合う守護騎士達が移されている。

「騎士たちは、随分と思い詰めて居るな」

「今回の主が良い子だからね」

「そうか、また、私の所為で彼女たちに辛い思いをさせてしまうのだな」

そうして、レヴィと女性は、ずっと映像を見ながら、時折会話をする。

「これが、今代の主か」

「うん。可愛い子でしょ」

「ああ。この年で夜天の書に選ばれるとは、随分と優れた魔力を持っているのだな」

「うん。それに、優しい娘、でしょ」

「ああ。騎士達がここまで優しく、楽しそうな表情をしているのは何時振りだろうか。……すぐさま思い出せるほど、最近では無いのは確かだな」

ある時は初めて今代の闇の書の主、八神はやてを見て。

「そうか、私の所為で、主は死にかけているのか」

「はやては、蒐集をするなって守護騎士たちに言ったんだ。だけど、彼女たちは」

「私が目覚めれば、主の許可なしでも私が起動できる600頁以上だけ集めてさえしてしまえばどうにかなる。そう思ったのだな」

「うん」

「……」

ある時は、はやてが救急車で運ばれる場面を見て。

「……鉄槌の騎士よ」

「ヴィータは、はやてが大好きになっちゃったんだ」

「……ああ」

「だから、自分がこれほど傷ついても、頑張るんだよ」
「……………ああ」

ある時は、蒐集活動を続ける騎士達を見て。

「主は、良い友人に恵まれた」

「それに、良い家族にも。だね」

「家族、か」

「君も、家族の一員だって。はやてならそう言うと思うよ」

ある時は、はやてを見舞いにくるすずかを見て。

そうして、時間は過ぎてゆく。とてもゆつくりと、しかしとても速く進んだ時間は、運命の時を迎える。

「そろそろ、蒐集が終わる。闇の書のページが、埋まる」

「うん」

「そして、今日は12月24日」

「うん」

「君の言う事が本当なら、今日。私は…………いや、ナハトヴァールは目覚めるのだな」

「うん」

「全てを、破壊するために」

「…………守護騎士を闇の書に蒐集させて、闇の書を復活させたい人たちにとつては、はやてごと君たちを封印するために、だけどね」

「どちらも変わらないさ。封印が成功しようが、封印できるまで私は破壊を続ける。そして、封印できなければ、それこそ魔力が尽きるまで破壊活動を行うだけだよ」

二人の目の前の画面には、楽しそうに5人の少女と話しているはやての姿が映し出されている。

「大丈夫。彼女たちが、なのはとフェイトが、そんなことさせないから」

「……そうであれば良いのだが、な」

そして、なのはとフェイトはシグナム達に連れられ病院の屋上へと昇る。

始まる戦闘。しかし、直ぐに仮面の男たちの介入によって、その戦闘は終わり。男たちの手によって守護騎士たちは捉えられ、はやてはなす術もなく守護騎士たちが闇の書に蒐集される場面を見せつけられた。

「絶望が、始まる」

レヴィの隣で言った女性の言葉は、画面の中に現れた闇の書の管制人格と全く同じ事を喋った。

「さて、ここからの私はマルチタスクの一部だ」

そういつて女性は、闇の書の管制人格はレヴィに向き直って言った。

「ナハトヴァールを抑える私、彼女たちと戦う私、主に夢を見させる私。そして、君と話す私。自分で言っておきながらなんだが、私もやることが多い」

そう言つて女性は笑う。

「ありがとう、レヴィ。君のおかげでここ数日の私は、今までにないほど楽しかったよ」

「うん。こつちこそ。蒐集されてからこの時まで、暇せず済んだし楽しかったよ」

「ああ。だが、これで終わりだ。私は目覚め、主は眠りについた。君にも、良い夢を見させてあげようか？」

「要らない。必要ない」

「……そうか？」

「その変わりと言っては何だけど、この映像、君が居なくなってもこのままにしておけないかな」

「それくらいならば、良いだろう」

「ありがとう」

「それでは、私もナハトヴァールを抑える手伝いをしようと思う」

「うん。バイバイ」

「ああ、さようなら。レヴィ」

そう言つて、女性は優しい笑顔を浮かべて消える。

レヴィは一人になった。

目の前の映像を見続けながら。

レヴィが見ている映像は、佳境に入ったと言える。闇の書の意志は、蒐集した魔法の中で最も威力のある魔法、スターライトブレイカーの詠唱に入り、その危険性を知っているフェイトが、なのはを連れて勢いよく離れる。

その映像を見ながら、レヴィは自分では無い誰かの声を聞いた。

『おおーーーーーっ！ すごいっ』

その声はどこか聞き覚えのある声だった。

「やっぱり居たんだね」

『あ、やばっ！ 声出しちゃった！』

「気にしないから出ておいでよ。この映像が見れる程構築が進んでるって事は、この中なら姿も表せるんじゃないの？」

『うくん、王様に怒られそうだけど……ま、いいか！』

そんな気楽な声を上げるとレヴィの隣に光が集まり人型を取る。

爽やかな水色のその光はほとんど集まり、朧気だった人型はそのデイトールを増していく。すらりとした腕に脚、目鼻立ちのくつきりとした顔、頭部からは水色の長い髪が生え、その先端は青みが買った黒。その髪をツインテールに結ぶ。完全に人の形になったそれは目を開くとそこから覗くのはワインレッドの瞳。

そんなフェイトに良く似た顔立ちをし、しかし全く違う雰囲気を纏った少女は少々釣り目がちな目でレヴィを見つめると口を開く。

『はじめまして、レヴィ^{ボク}』

その言葉にレヴィも返す。

『はじめまして。マテリアル^{ボク}』

異口同音で放たれたその言葉は、声質も響きも、イントネーションも何もかもが同じであり、別々の口から出たとは思えない程。

『その姿はどうしたんだい？』

レヴィの質問にマテリアル^{ボク}は答える。

『君の記憶から拝借したよ。君がボクになつてくれたから、ボクを再現するために強く思い描いてくれたから、ボクはこうしてDやSよりも早く躯体構築が終わったんだ。ま、王様はボクが単純だからだーっと言ってたけどさ』

『そっか。それで、他の構築体^{マテリアルズ}……DとSはどうしてるんだい？』

『もう稼働自体はしてるよ。君の記憶を元に躯体構築してるから、暫くすれば起動するんじゃないかな』

そうしてレヴィとLが話していると、画面が強く光り輝く。

『すごい魔法。クロハネが滅びの光って言うのも頷ける』

『作った本人は全然そんなつもりはなかったみたいだけどね』

映像自体は闇の書の見ている映像が映し出されている為、なのはやフェイトがどうなったかは二人にはわからない。しかし直前にフェイトが全速力で距離を取っていたし闇の書の意志には集束魔法適性が無いため、広域攻撃魔法へとアレンジされている。集束された魔力量も莫大な量では無かったため、威力自体はなのはの放つスターライトブレイカーより低いだろう。

そしてなにより、原作で二人はアクシデントがあったもののこの攻撃を乗り切っている。だからレヴィはなんの心配もしていなかった。「さて、いいタイミングで出て来てくれたところだし、君に、マテリアル―Lに頼みがあるんだ」

『なんだい?』

映像の中では、ソニックフォームとなったフェイトが闇の書に突撃し、闇の書に吸収されなのはと闇の書の意志の1体1となっていた。その状況を見つめ、レヴィは頼みごとを口にする。

『良いよ。ボクは、そのために君の前に出てきたからね』

頼みごとを聞いたマテリアル―Lは朗らかな笑顔を浮かべると快く了承した。

第5話 「少女の夢」

目を覚ますと雪国でした。

——なんて事は無く、見慣れた自室の天井が見える。その事を自覚すると、今まで眠っていた少女、フェイト・テスタロッサはけだるい体を起こす。

——えつと、朝？

寝起きで頭も動いていないのか自分が現在置かれている状況すら理解できず虚空を見つめボーっとするフェイト。

そんなフェイトが起きる事を感じ取ったのか、もともとその予定だったのかは知らないが、タイミングよく扉が開かれ声が掛けられる。

「フェイトー、起きてるー？」

そう言いながら入ってきたのはアリシア・テスタロッサ。双子と見まごうほどに瓜二つのフェイトの姉。

「あー、うーん」

まともに動かぬ頭のままなんとか返事をする。そんな朝に弱い妹を見てアリシアはため息を吐くと、無理やりフェイトの手を引っ張り立ち上がらせる。

「ほら、もう朝ゴハンできてるんだから、ちやつちやか顔洗おー！」

「ん〜」

アリシアに手を引かれるまま歩きだし、洗面所へ向かうフェイト。そのままアリシアに甲斐甲斐しく世話をされ、顔を洗うと、やっと目が覚め意識も戻ってくる。

「あ、おはよう。お姉ちゃん」

「おはよ、フェイトっ」

戻った意識ですぐそばにいた姉に挨拶すると、アリシアもフェイトが覚醒したと理解し朗らかに笑う。

そのまま二人で洗面所を出てリビングに行く。そこには

5人と1匹分の食事がすでに用意されており、皆が席に揃えばいつでも食事が始められる状態であった。

「おはようフェイト、目覚めたかしら？」

「おはようございます。フェイト」

「おはようフェイトー」

フェイト達がリビングに入るとすでに待っていた3人、いや2人と1匹から声がかかる。

「おはよう。母さん、リニス、アルフ」

それぞれに声を返しフェイトは自分の席に付く。

目の前には食パンにプレーンオムレツとベーコンにサラダにミルク。ごく一般的な朝食と言えよう。

フェイトの目の前の席にアリシアが座り、その隣にプレシア、リニスと座る。

ペットのアルフはフェイトの右隣の床に置かれた皿の前で行儀よく座っている。

そこでフェイトはふとした違和感に気づく。

それは座り順もそうだし、用意されている朝食の量もそうだった。

今思えば姉は自分の左隣りだった気がするし、朝食も一人分多い。

「……ね、ねえ」

その疑問を周りに訪ねようとした瞬間、それを遮るように玄関から大きな声と扉の閉まる声が聞こえる。

「ただいまー！」

誰かの帰宅を告げる声。フェイトの記憶では帰ってくるような人物はいない。しかしその声はどこか聞き覚えがあり、そして何故か懐かしさすら感じた。

一時でも早くその声の主を確認したくてフェイトはリビングの扉

を見つめる。

暫くして入ってきた人物は、鮮やかな水色の髪をツインテールにしており、その先端部分は青み掛かった黒色に変色している。

キリツとした少々鋭利さを感じさせる釣り目がちなワインレッドの瞳は部屋に入ってくるとまつすぐにこちらを、フェイト達を見つめる。

体の大きさから年のころはフェイトとほとんど変わらないと思われるその少女の顔立ちは、どことなく今朝鏡で見た自分に似ている気がした。

フェイトはそれが誰だかわからなかった。いったい誰なのか。そう質問する前に、自分の家族から答えが告げられる。

「おかえり！ レヴィ」

「お帰りなさい。レヴィ」

「おかえりー」

「お疲れ様です、レヴィ」

レヴィ、レヴィ、レヴィ

その名前はフェイトも知っていた。しかし目の前の少女は知らなかった。

フェイトにとってレヴィとは、最も近くに居て、常に自分の側に居て、しかしその姿は見えぬ。その顔は見えぬ。常に自分の中から声を掛けてくる。フェイトがフェイトになったその瞬間から、フェイトと共に存在していた。誰よりも近い隣人——の、筈だった。

「れ、レヴィ……？」

フェイトが困惑している間にこちらに近づき、まるでいつも通りと言わん顔で己の左隣りに座ったレヴィと呼ばれた少女にフェイトは声を掛ける。

「ん？ どうしたんだい？ フェイト」

フェイトの声に反応したレヴィと言う名の少女は、まるでいつも

フェイトがレヴィに声を掛けた時と全く同じイントネーションで、全く同じ声色で返事をする。

「な、なんで」

「なんでって、なのはの家で稽古を付けて貰ってたから……だけど？」
つい出てしまったフェイトの疑問の言葉に応えるレヴィ何某。

「まったく、フェイトったらまだ寝ぼけているのかしら？ ほら、早く朝ご飯にしましょう。ゆっくりしていたら学校に遅れてしまうわよ」
フェイトとレヴィらしき少女のやり取りに母、プレシアは苦笑しながら朝食を始めるよう促す。

その言葉で周りは各々何食わぬ顔で食べ始める周囲に戸惑いながらも、フェイトも食べ始めた。

* *

その後レヴィとアリシア、フェイトの三人は全く同じ制服に身を包み、家を出た。

道中はレヴィとアリシアが今日行った稽古について他愛もない話しをしており、そのまま学校へ向かうバス乗り場へ行く。

バス乗り場には2人、いや3人の親友であるアリサとすすかがすでに待っており、こちらに気付くと手を振りながら声を掛けてくる。

その場でもレヴィは自然に話の輪に入っており、しばらく5人で話しているとも6人グループの最後の一人であるのはも息を切らせながらやってきた。

そのまま一日は進む。

レヴィは自然とフェイトの生活の一部になっており、まるで一緒に居る事が当たり前ともいう様にフェイトと共に居た。途中フェイトの様子がおかしいとフェイトを心配するそぶりも、まるでそれが当た

り前であるかのように、当然であるかのように違和感を感じない。

そう、違和感を感じなくなっていた。

楽しかった。休み時間にレヴィと顔を合わせて喋るのも、昼休みに6人グループで和気藹々と昼食をとるのも、放課後にアリサの家に遊びに行きパーティーゲームを騒ぎながら遊ぶのも。

全部が全部、フェイトが夢見た光景そのものであり、本当に夢のようだった。

フェイトの目の前にいるレヴィは遊ぶときは快活に騒ぎ、勉強の時は真面目に取り組む。時にはお互いわからない箇所を聞きあつては、ゲームで敵対したら本気で戦う。

完璧だった。

まさに夢見た光景そのものだった。

素晴らしかった。

こんな生活を送りたいと願っていた。

それが叶った。叶っていた。

あまりにも素敵で、あまりにも完璧な日常はとても自然であり、ふと思えば当然のことのように思えた。

しかし、フェイトは知っている。世界はこんなことばかりじゃないことを。こんなに自分に優しくないことを。

この母は最初から優しくかった。姉と2年差で自分とレヴィの双子を産んだ母。優しく、頼りになる母。プレシア・テスタロッサ。

しかしフェイトの母は違う。最愛の娘を失った妄執に取りつかれ、自分を造り出した。そうしてこの世に生を受けた自分は、出来損ないだった。

だからこそ母は壊れ、だからこそレヴィは生まれた。

フェイトがアリシアではなく、フェイトであるからこそ、レヴィは

存在していたのだから。

そんなプレシアとフェイトの確執をレヴィが乗り越え、二人の溝を埋めることでフェイトはプレシアの娘になれた。プレシアはフェイトの母になってくれた。

そんな母が大好きだった。

この世界は平和だ。ジュエルシードなどは飛来しておらず、ユーノは喋ることのできるなのはのペット扱いだった。アルフもそうだ。魔法は無く、戦いもない。あるのはスポーツ代わりのなのはの実家の武道位か。だからこそ、自分の相棒も、なのはの相棒も居ない。

闇を切り裂く雷刃も、少女を導く不屈の心も無い。居ない。

平和で、優しく、素晴らしい。まるで夢のような世界。

だから、違う。

「レヴィ」

「ん？ なんだい？」

「少し、散歩しよう」

「……うん」

フェイトはレヴィと夜の散歩に行くと言ってレヴィを連れ出した。レヴィは何も言わず、何も聞かずフェイトの隣を歩いている。今まで通り、フェイトを見守ってくれている。そのことに違和感はない。朝はともかく夕食もすまし太陽も沈んだ今ではレヴィがこうして自分の隣を歩いている事に違和感を感じない。

自分とレヴィが双子の姉妹であることも、魔法が無く平和な日常を、『普通』を謳歌していれば良いことも。なにもかも、この世界のなにもかもに違和感を感じなくなっていた。

だからこそ、だからこそフェイトは決めた。

気づくと海鳴臨海公園に来ていた。無意識だったが、やはりこの場所はフェイトにとつてもそれなりに思い入れのある場所であるということらしい。

ジュエルシードを巡り―正確にはお互いの主義主張を譲らなかつただけだが―対立したなのはフェイト。そんなのは魔法を関わることを決め、自分は関わらないことを決めた。そうして別れた場所。

臨海公園の名の通り海を臨める展望台に辿り着けば、自分となのが全てを出し切って決着をつけた海が見える。

手すりに手を置き、ひやりとする海風を受けながらフェイトは口を開く。

「レヴィは、レヴィなんだよね」

他の人が聞いていたら何を言っているのかさっぱり理解できない言葉。そんな言葉でもレヴィには通じていた。ずっと共にいたレヴィだから。24時間365日片時も離れず約3年の月日を過ごしたレヴィだからこそ、込められた意味が分かった。

「そうだよ」

「私と初めて会った場所は？」

「当然、プレシアの、母さんのお腹の中……と言う事になってる」

「だけど違う」

「ボク達は冷たい手術台の上で、出会った。時の庭園の一室で」

「母さんは、私のことをなんて言っていた？」

「最愛の娘だと、今なら言う。だけどあの時、プレシアはフェイトの事を『お人形』と言った」

「アリシアは、私のなに？」

「2歳上の姉。実際は遺伝子がほとんど同じ、フェイトのオリジナル」

不思議な問答は続く。フェイトはずっと海を眺め、レヴィはそんなフェイトの背中を見つめたまま。

「私となのはが、初めて会った場所は？」

「こつちに引越してきてすぐ、側にある美味しいと噂のケーキ屋さんで、お店の手伝いをしていたのはと出会った……と言う事になってる」

「うん。だけど実際はジュエルシードの暴走体が現れたすぐかの家の庭で、お互い正体不明の敵として出会った」

「アレは、フェイトが結構一方的に攻撃してたし」

「だって怪しいもん。ここ魔法文化ないのにインテリジェントデバイスだって持ってたし」

「後から聞いたらユーノの発掘品だってね。なかなか優秀だ、あのフェレットは」

「ふふっ。そうだね」

「——クロノは？」

「知り合いのお兄さん。母親同士が親友で、その付き合い」

「最年少執務官もここではただの中学生、か」

「エイミイは同じ学校の中の良いガールフレンドらしいし、案外こつちの方がクロノにとっても幸せかもね」

「リニス——」

「家の家政婦。本名はリニス・ランスター。プレシアの使い魔なんて事もなく、山猫のリニスは別にちゃんと居る」

「二世って聞いた時は何の事かわからなかったよ」

「アリシアが拾ったリニスは数年前に死んじゃったからね」

「レヴィは、この世界のことどう思う？」

「良い世界だと思うよ。魔法は無いけど、だからこそ、フェイトが戦う理由もない」

「うん。だけど、だからこそ、私は戻らなきゃダメなんだ」

そう言いながらフェイトは振り返り、レヴィを見つめる。レヴィは

とても真剣な顔でフェイトを見つめていた。

「どうして？ 現実には辛いよ。フェイトは戦わなくちゃいけない。外では闇の書の意志が破壊をばら撒いている」

「だからだよ。だから、私が、私たちが止めなくちゃいけない」

「なのは魔法バカで、なにかと模擬戦を挑んでくるよ」

「この世界じゃなのはは武道バカで機械バカで数学バカ。向うの方が3倍はマシかも」

フェイトのなのはへの辛辣な言葉に苦笑を浮かべるレヴィ。それにつられ、ついフェイトも笑ってしまう。

「現実には辛いよ。戦いで傷つくこともあるだろうし、ひどく悲しい経験もするかもしれない」

「それでも帰るよ。向うには、現実にはなのはが、大切な友達が待つてるから」

「この世界にいれば、優しく緩やかな日常が送れるよ」

「それでも帰るよ。向うは厳しいかもしれないけど、それでも優しさはちゃんとあるから」

「向うには——」

問答を続けていたレヴィが一瞬ももる。言いたくないかのように、聞いてしまいたくないかのように。

それでも、やらなければならない。それを望んだのはレヴィであり、フェイトに必要な儀式なのだから。

フェイトに近づくレヴィ。その距離はほとんど0になり、フェイトの手を強く握る。

「——向こうには、ボクが居ないかもしれないよ。でもこの世界にはボクが居る。こうして、フェイトの目の前に居る。こうしてフェイトの手を握れる。こうして、フェイトの吐息を感じられる」

鼻と鼻が触れ合ってしまうのではないかと言う位に顔を近づけるレヴィ。そんなレヴィのワインレッドの瞳を見つめ、フェイトは応える。

「それでも、それでも帰るよ。レヴィと約束したから。私は強くなる

んだって。私は誰に言われるでもない、私の意志で帰るよ。誰かの人形じゃなく、フェイト・テスタロッサとして」

「———そっか」

フェイトの力強い言葉を聞いてレヴィは笑う。朗らかに、しかしどこか寂しそうに。

「じゃあ、これが必要だよね」

レヴィがそう言うのとレヴィに握られていた手の中に硬質の感触が生まれる。レヴィが手を離し、握らされたそれを見つめる。

「バルディッシュユ」

フェイトの相棒は、声もなく、ただ点滅するだけだった。

「行くよ」

フェイトがそう言うのとバリアジャケットが展開される。バルディッシュユ・アサルトになつて変わったバリアジャケットはさらに変化しており、裏地が赤く、表が白いマントへとかわったそれは、まるで勇者の装備の様にフェイトの背ではためいていた。

「カッコいいよ、フェイト」

その姿を見てレヴィは涙声で言う。

その言葉に声を返さず、フェイトは大剣―ザンバーフォーム―へと変形したバルディッシュユを頭上へと掲げる。

魔力で形成された半実体の魔力刃は大きく、大きく、まさに天を貫くほど大きくなる。

「最後に、これだけ手伝わせて」

電気変換資質の影響で辺りに電撃が飛び散る中、レヴィはフェイトの背中から手を伸ばし、フェイトと共にバルディッシュユを強く握る。

「うん。私、行くよ」

「それでこそ、フェイト・テスタロッサだ」

最後に一言声を掛け、二人はバルディッシュユを見つめる。

「疾風」

フェイトが言い

「迅雷」

レヴィが続く。

〈Sprite Zamber〉

バルデイツシユの宣言と共に、二人はその腕を。全てを切り裂く雷刃を、振り下ろした。

* * *

世界が割れる。

偽りの世界が。夢のような世界が。夢の世界が。

雷刃は物体も現象も結界も幻も、全てを切り裂いて世界を壊す。辺りに雷をまき散らし、世界を崩す。

世界が黄色と青色に染まる。その中に、一粒の水滴が飛び散ったように見えた。

しかし、すでに優しい世界は無い。フェイトは前だけを見ていた。辛い現実と戦うために。寂しい世界を切り開くために。

「雷光、一閃」

この刃で、闇を照らす為に。

「フェイトちゃん!!」

チェーンバインドではりつけにされ、大きな岩に押しつぶされそうになっていたなのはを、岩を両断することで助ける。

「遅れてゴメン、なのは」

はためく白いマントはフェイトの覚悟を顕わし、裏地の赤はフェイトの秘めたる激情の証。

「最後に、一緒に戦おう」

小さく呟きながらギョツと胸の前で手を握ると、フェイトは託された物を解放する。

蒼雷。

鮮やかな蒼に包まれた黄金の雷が辺りを支配する。

バルディッシュが形成する魔力刃も中央が黄色で外側は蒼色で構成されていた。

それはフェイトが託された刃。

それは最愛の隣人の置き土産。

それは、フェイトとレヴィの別れの証。

「さあ、泣き虫の駄々っ子に、教えてあげよう。この世界はそんなに悪い事ばかりじゃないんだよ。って」

「うん！」

わずか9歳の二人の魔導師が揃う。

相対するのは幾度も世界を危機に追いやり、数多くの世界を滅ぼした第一級ロストロギア、闇の書。

今、世界の命運を分けるこの地に災厄の暴風が吹き荒れる。

A S 編最終話 「蒼の雷神」

「あーあ。いっちゃった」

破壊された世界の跡に広がる闇の中で、蒼い少女はぽつりとつぶやいた。

そのワインレッドの瞳からは涙が流れつつも、しっかりと目の前の映像を見つめている。

映像の中では少女の最愛の人が、この世に降り立ってから片時も離れた事の無かった少女が親友と共に世界を救おうと奮闘している。

その勇ましき姿を、凛々しき姿を、輝かしき姿を、蒼い少女、レヴィは涙を流しながら見つめていた。

フェイトが原作通りに闇の書に吸収された事で、レヴィは最後にフェイトと触れ合う機会を得た。レヴィが夢見たように、フェイトと共に過ごす日常。その中でフェイトは優しい微温湯のような世界に甘んじるのではなく、厳しく辛い世界へ戻る事を決意した。

だからレヴィは最後となる贈り物をした。

体が分解され闇の書に吸収されていたからこそできた荒業で、自分のリンカーコアをフェイトのリンカーコアと一つにした。

だからこそ画面の中のフェイトは深い蒼に包まれた黄金の雷を振るい、闇の書の意志と戦っている。

今はまだ少々魔力量が増えた程度であろうが、10年もたてば完全にフェイトのリンカーコアと融合し本来の魔力量を大きく上回るようになっていると予想される。

フェイトと別れる事はとても悲しく。できるならばもつと一緒に居たかった。ずっと一緒に居たかった。フェイトと一緒に大人になって、フェイトと一緒に結婚して、フェイトと一緒に子供を作って、フェイトと一緒に死にたかった。

それでもレヴィはフェイトと分かれる事を決めた。フェイトは強

くなくなった。ちやんと自分の足で立って、ちやんと自分の意志で道を決められる。とても強い人間に成長した。

だからレヴィは自分がフェイトの足かせになると判断した。フェイトと一緒に居られないと、フェイトの成長を邪魔してしまうと。だから自分を構成する唯一の器官であったリンカーコアをフェイトに託した。

一緒に居られなくても、託した魔力がフェイトを守ってくれると信じて。

そしてレヴィ本人を構成する唯一の器官であったリンカーコアすら失ったレヴィは、ただただ消えるのを待つだけとなった。今現在はマテリアルから借り受けた躯体の中に意識が入っているため消えないで済んでいるが、この身体もいずれは返さなくてはならない。そうすれば、本当に消えるだけとなる。

しかしレヴィは今すぐ体を返して消えるわけにはいかなかった。まだ、レヴィにはやらなければならぬ事が残っているのだから。

闇の書の管制人格、リインフォースとナハトヴァールを完全に切り離し、リインフォースを正常な状態へ、リインフォースが居てもナハトヴァールが復活しない状態へと変える。その方法は、まさに神頼みだが、これほど頼りになる神頼みもまた他にない。

レヴィはその瞬間を見逃さぬように、画面を見つめていた。

そして画面の中に災厄の暴風が吹き荒れる。わずか10にもならぬ年の少女二人が使うコンビネーション技により、闇の書の意志は大ダメージを受けその機能を一瞬だけ失う。

その瞬間に、闇の書の主、八神はやては管理者権限を利用し自分と

管制人格を切り離れた。

そこまで確認して、映像は消える。映像を投影していた管制人格が居なくなっただけにより消えてしまったのだ。

（神様、神様。ボクの最後をお願いを、どうかよろしくお願いします）
『……任せておくが良い』

たったそれだけ、それだけのやり取りだが、プレシアをきちんと治療してくれた神なのだから大丈夫だろうと、レヴィは信じる事にした。

「さあ、それじゃあこの身体もキミに返さないかね」

レヴィがそう呟くと、レヴィの前に水色の光が現れる。

力強く光るその光は、レヴィに向けて念話をしてくる。

『ホントに良いのかい？』

「良いんだ。ボクがやらなきゃいけない事は、もう全部やったから」

『でも……』

目の前の水色の光、マテリアル―Lはなにかとレヴィを気にしているようで、軀体制御をすぐさま奪おうとしない。

「キミがいるって事は、ボクは結局偽物なんだ。フェイトが小さい頃の夢、妄想。それで片づけられる程度の、そんな存在だから。それに、キミ達にも、やらなくちゃいけない事はあるんでしょう」

『そう、だけど……でも、さあ』

軀体の権利をすぐさま返したいレヴィと返されることでレヴィが消えてしまう事に躊躇いを持つマテリアル―L。二人の押し問答はその後もしばらく続いた。

そんな煮え切らぬやり取りを続けていると、二人以外の声が唐突に響く。

『ああー、もうっ!! うっとうしいわ!!』

その大声で譲らぬ問答をしていたレヴィとLはそのやり取りを止め、辺りを見回す。

すると、いつの間にかLの側に、紫色の光が漂っていた。

『さつきから聞いておればグチグチと！ 女々しいわ！』

その紫色の光はレヴィの目の前まで来ると、まるで私怒ってますと言わんばかりに強く明滅を繰り返しながら叫ぶ。

『お、王様!?!』

「まさか、マテリアル―Dかい?」

その姿(?)に驚くマテリアル―Lとレヴィ。そんな二人を無視して紫色の光、マテリアル―Dはまくしたてる。

『なーにが側に居てはいけけないだ！ そんなこと誰が決めた！ あの小娘がそう言ったとでも言うのか!』

「そ、それは」

『良いか！ 小娘の為だとなんだと言っておきながら結局の所、貴様自身があの小娘に依存していただけなのだ！ あの小娘が自分から離れて行ってしまったから、貴様はそばで見ている事が辛くなっただけにすぎん!!』

マテリアル―Dの言う言葉に絶句するレヴィ。なぜその事がわかるのか、なぜ知っているのか。レヴィとフェイトの関係は、この目の前に居る存在が知りえる筈がないと言うのに。

レヴィがそう思いながら戸惑っていると、LのでもDの出もない違う声が響く。

『私たちはあなたの事であれば何でも知っていますよ。そう、なんでも』

その声はレヴィの後ろから発せられており、それに気づき振り向くとそこには赤い光が佇んでいた。その赤い光の言葉に続き、少しだけ落ち着いたマテリアル―Dが言葉を続ける。

『そうだ。我らは貴様の事であれば何でも知り得ている。貴様がどのようなにしてあの小娘の中に居たのかも、どうしてあの小娘の為に動いていたのかも。その動機も何もかもすべて、な』

『私たちは本来であれば闇の書が蒐集したリンカーコアの中から躯体の元となるオリジナルを選ぶ、筈でした』

『だけど、キミの存在が全て蒐集された事でキミの記憶を元にすれば

より早く躯体が完成する事に気付いたんだ。だから』

マテリアル達の言葉でレヴィも気づく。自分の記憶からマテリアル―Lはいち早く躯体が完成したのだと。それはつまり――

「――ボクの記憶を、全部見た、って事」

『うむ、そうだ。とくにマテリアル―Lは貴様の全てをコピーして構築されている。魔法も、記憶も、感情すらも、な』

感情すらも、それはつまりレヴィが何を考えどう行動したのか、その全てをマテリアル―Lは全て知っていると言うのだ。

『あなたの記憶の中のマテリアル―L、『レヴィ・ザ・スラッシュャー雷刃の襲撃者』からあなたはレヴィと言う名を、その言動を模倣コピーしました』

『だけど、ボクはキミの記憶をコピーして、キミをオリジナルとして性格、言動、外見。全てを構築している』

『まるで卵が先か鶏が先かなどと言う問題みたいだが、この件に限って言えば、マテリアル―Lが貴様のオリジナルと言うわけでは無い』

マテリアル達から告げられる真実。レヴィの思い込みとは全く違った事実。

レヴィが居たからこそその全てをコピーしてマテリアル―Lは構築された。

「じゃあ、マテリアル―L、キミがボクの前に姿を現したのも、ボクの頼みを聞いてくれたのも、全部――」

『うん。――全部、キミが望んでいたからだよ』

マテリアル―Lから告げられた言葉に多大なる衝撃を受ける。

自分がレヴィだったからこそ、マテリアル―Lは生まれ、自分が望んだから助力してくれた。

「でも、それでも」

だが、そうだとしてもレヴィにはもう理由が無かった。

「ボクには、もう向うの世界へ戻る理由が、無いから……」

フェイトは強くなった。アリスは復活し、プレシアは若返り持病も治っている。リニスはプレシアの使い魔のまま、リインフォースは消えない。

レヴィの想定していたフェイトの人生での『悲しい出来事』はもうほとんどないと言って良いだろう。あとはレヴィが何か特別な事をしなくてもフェイトは家族や友達に囲まれて幸せな道を進むだろう。だからもう、レヴィ本人に動機が、フェイトの側に居る理由が、無い。

『あなたの考えている事、わかりますよ』

『伊達にキミの感情や記憶をコピーしていないよ』

『全く、記憶を除いた時から愚か者だと思っていたが、ここまでとはな』

うつむくレヴィにマテリアル達が言う。

『理由が無いと言うのなら理由をやろう！』

『動機が無いと言うならば動機を授けましょう』

『^{ボク}キミはもう、^{ボク}キミの為に生きていいんだよ』

そう言うレヴィの目の前に映像を映した画面が現れる。

それはクロノを筆頭になのはやフェイト、復活した守護騎士達までもが居り、全員で切り離されたナハトヴァールをどうするのかの相談をしている所であった。

結局物理攻撃型と魔法攻撃型の2人ペアになり、障壁を破壊し、その後全力攻撃を叩き込み、コアを露出させ、衛星軌道上のアースラの主砲、アルカンシエルでそのコアを吹き飛ばすと言うものだった。

そこまではレヴィの知る通り原作通り。しかし、作戦が開始される直前、フェイトがはやてに、はやてとユニゾンしているリインフォー스에話しかける。

『えっと、はやてにリインフォーアスさん、あの聞きたい事があるんだけど』

『なんや？ どうしたん？ フェイトちゃん』

『なにか、懸念事項でもあるのかい？』

『えっと、闇の書、じゃなくて夜天の書に、レヴィが居たりは……』

フェイトのその言葉にはやては一体なんの事かわからず首をかしげるが、はやての中から響くリインフォースの声は悲痛さを帯びていた。

『すまない、夜天の書にはあの子は、レヴィは居ない。すでに吸収され尽くして消えたか、もし消えてないとしても切り離されたナハトヴァールと共に居るだろう』

『そっか、ありがとう』

『……すまない』

リインフォースの言葉を聞きフェイトはその姿を現そうとしているナハトヴァールを睨む。そのルビー色の鮮やかな紅い瞳からは、大粒の涙がこぼれていた。

「フェイト……」

『フェイトちゃん』

レヴィの眩きと映像の中のなのはがフェイトを心配する声が重なる。

『大丈夫。別れは、済ませてきたから。さあ、行こう』

気丈にそう言いながらで涙をぬぐうフェイト。その姿を呆然と見つめていたレヴィにマテリアル―Dが声を掛ける。

『小娘のあの姿を見ても、貴様はまだ自分が小娘の側に居てはならぬと、そう言い張るのか?』

「ボクは、僕、は……」

こぶしを握り締めるレヴィ。その手は強く強く握りしめられ、震えてすらいた。

「僕は、フェイトと、フェイトと一緒に居たいよ！ だって、その為に、それを夢見て……僕は……」

『ならば良いではありませんか』

力が抜け弱く眩くレヴィの前にマテリアル―Sが移動しながら言う。

『あなたがそう思ったのならばそう行動すればいいのです。誰に憚る必要がありませんか。自分がしたいと思った事をすればいいのです』

マテリアル―Sの言葉にレヴィの心は揺さぶられる。自分の気持ち、感情を肯定してくれるその言葉に、しかし――
「でも、僕にはもう……、外に出る方法も、外に出た後の身体も、なにも、無いから……」

もう、レヴィにリンカーコアは無い。レヴィに外の世界に出て活動できる憑代は無い。レヴィには、何も無い。

『だから、その為にボクがいるんだよ』

打つ手なしと諦めるレヴィにマテリアル―Lは言う。それに続き、マテリアル―DとSも喋る。

『何のために、我らの躯体構築を後回しにしてマテリアル―Lを完成させたと思っているのだ！』

『あなたの事は全部わかっています。そう、言ったはずですよ』

マテリアル達に体は無いが、それでも目の前の三つの光はそれぞれが笑っているような気がした。

「いいの？ 僕なんかの為に」

『キミの為であり、ボクの為でもある』

「僕は、君になにも返せない」

『返す必要は無いさ。だってボク達は一つなんだから。キミをコピーしたボクは、キミと同化することでコピーした記憶も、感情も全てをキミに返す。そのついでにその身体と、リンカーコアも、ね』

そう言うマテリアル―Lにどう返せばいいかわからず拳動不審になるレヴィ。しかし、時間は無い。

『さあ、早く済ませてしましましょう。作戦が開始しました。このままではナハトヴァールと心中することになってしまいます』

マテリアル―Sの言う通り、映像ではすでにナハトヴァールが完全に活動しており、なのは達が障壁を破壊しようと攻撃を打ち込み始めているところだった。

『さあ、ボクを受け入れて』

マテリアル―Lはそう言うのとレヴィの胸の中へと入り込む。

「まっ……」

レヴィは待ったをかける事も叶わず、マテリアル―Lとの同化が始

まる。

脳内に情報が駆け巡る。

マテリアルとしての自分の使命。レヴィイとしての思い出。

マテリアルの躯体情報。レヴィイの魔法。

マテリアルの感情。レヴィイの感情。

そうして同化は進み、リンカーコアが躯体に完全に定着する。

マテリアル―Lは、レヴィイとなった。

『気分はどうですか、マテリアル―L』

「なんともない。ボクは、僕がレヴィイだと言う意識もあるし、マテリアル―Lと呼ばれても、何の違和感もない」

『当然です、あなた達は体が別なだけの同一人物。それが一つにまとまっただけなのですから』

『貴様はこれで我が臣下となった。レヴィイよ、今から貴様が
レヴィイ・ザ・スラッシュヤー
『雷刃の襲撃者』となり、我の尖兵として活動を開始するのだ！』

フハハハと笑うマテリアル―Dに何とも微笑まじさや、優しき。そして尊敬すら感じるレヴィイは、その複雑な感情を苦笑する事であらわした。

「マテリアル―D」

『王と、我の事はそう呼べ』

「うん。王様、ありがとう」

そう言って、レヴィイは朗らかに笑う。

『さあ、完全復活したマテリアル―Lの、『力』のマテリアルの初仕事です』

『その力と共に外界の者共に示せ！ 我らは今日より、活動を開始する！』

マテリアル―Sとマテリアル―Dの声に後押しされ、レヴィイは自分の武器をその手に握る。

「バルニファイカスツ!!」

その名を叫ぶと共にセツトアップは完了し、フェイトとほとんど同じ色違いのバリアジャケットを、いや戦闘衣服である襲撃服スラッシュスーツを纏う。

大剣形態であるバルニファイカス・ブレイバーを頭上に掲げる。フェイトがそうして世界を切り裂いたのと同じように、闇を背に蒼雷をまき散らす。

大きな声で宣言する。世界に向かって。自分はここに居ていいのだと。まだ、この世界に居ていいのだと。

他の誰でもない、自分がそうしたいのだと。

「碎け散れ!」

叫ぶ。世界に向かって、過去の自分に向かって。

碎け散れ、と。

「雷刃滅殺! 極光!! 斬!!!」

闇を切り裂く蒼雷が、振り下ろされた。

「石化の槍!」

『ミストルティン!!』

ナハトヴァールが展開する多重障壁を全て破壊し、はやてとクロノの魔法で動きを止める。そうしてできた時間でなのは、フェイト、はやてが集束魔法を用いてナハトヴァールを吹き飛ばす。

そのための石化魔法だった。

しかし――

「なんやて!？」

「これは——障壁が、復活している!？」

はやてとクロノが、自分の魔法が障壁で防がれた事に驚きを隠せず
に慌てる。

リインフォースやアースラからの情報でナハトヴァールの障壁は
物魔混合の6層であったはず。バリアブレイクを得意とするアルフ
にザフィーラが1枚ずつ。なのはとヴィータで2枚。そしてフェイ
トとシグナムで2枚。計6枚、きっちり破壊した筈だった。

『まさか、隠していたのか？ 最後の障壁を!』

はやての中から響くリインフォースの言葉と共に、攻勢に出るナハ
トヴァール。

「どうするのクロノくん! はやく、早くしないと!」

その攻撃があまりにも激しく、あまりにも見境なく行われるため、
全員回避や防御で手一杯となってしまった。

「誰か、誰かあの障壁を破れないのか!」

クロノの叫びにリインフォースの落ち着いた言葉が帰ってくる。

『無理だ。執務官殿と主の魔法をはじいたと言う事はあれは対魔力障
壁。物理攻撃を得意とする鉄槌の騎士も、フェイトちゃんもこの攻撃
の中であれを破壊するほどの攻撃を繰り出せるとは、とても……』

リインフォースの諦観した言葉にこの場に居る全員が、いやアース
ラで聞いていた局員までもが絶望する。

その絶望の中でフェイトだけは諦めなかった。どうにか隙を見て、
魔力をチャージしようとするも、攻撃が激しく思うように行かない。

——どうにか、どうにかしないと!

焦りだけが募る。

自分は託されたのだから。レヴィに、大切な隣人に、もう1人の自

分に。

——レヴィ、レヴィ、レヴィ、レヴィ、レヴィ、レヴィ、レヴィ、レヴィ！

別れは終えていたはずだった。それでも、思うのはレヴィとの思い出ばかり。

フェイト・テスタロツサの思い出の中には、常にレヴィが居た。

それも当然である。フェイトがフェイトとなったその瞬間からレヴィはフェイトと共に居たのだから。

涙があふれる。

悲しさが爆発する。

「レヴィーー!!」

無意識に叫んでいた。

——まったくもう、仕方ないなあ——

どこからともなく、レヴィのそんな声が聞こえた気がした。

その瞬間、世界が蒼に染まる。

水色の極太の魔力がナハトヴァールを貫き天へと昇っていた。

その魔力を中心に、蒼雷が辺りを迸る。

蒼雷は世界を飲み込み、ナハトヴァールを、ナハトヴァールの触手をうち滅ぼして行った。

蒼雷が迸る轟音の中でフェイトには、フェイトにだけは声が聞こえ

ていた。

「雷神滅殺！ 極光！！ 斬！！！」

微かに聞こえたその声と共に、天へと昇っていた魔力はゆつくりと、傾き、ナハトヴァールを最後の障壁ごと両断する。

誰もがその光景に啞然とし、動きを止める中クロノの声が響く。

「はやて！ 魔法を！」

そう言いながら、自分も魔法の詠唱に入るクロノ。

両断された影響かそれとも蒼雷に焼き滅ぼされた所為か、ナハトヴァールは少々回復にとまでつているらしかった。

その時間でなんとか、はやてとクロノが魔法を完成させる。

『ミストルテイン！』

「エターナル・コフィン！」

石化魔法と対象を凍りつかせる絶対零度の魔法が命中する。

それを見届けるとクロノは上空を見上げる。

なのはとはやてはすでに所定の位置についていたが、フェイトが居ない。

「レヴィー！ レヴィー！！」

フェイトは両断されたナハトヴァールから一条の蒼雷が飛び出るのを目撃していた。そしてその後を追い、上空で出会ったのだ。

自分と同じようなバリアジャケットを纏った、闇の書の夢であったそのままのレヴィーと。

「フェイト、まずは、全部終わらせよう」

そう言うレヴィーは強気な笑みを浮かべフェイトを見つめる。

「うん！！」

ユーノとアルフで衛星軌道上へと転送する。

そしてしばらくの時間の後、空がキラリと光る。

その光の後に告げられるエイミイの言葉に、戦場は湧く。

ついに、どうしようも無いと思われていた闇の書を、闇の書の呪いを打ち破ってしまった。

この場に、新たなエース達が誕生した瞬間だった。

感動で抱き合ったりお互いをたたえ合う中で、フェイトとレヴィは見つめ合っていた。

「あはは、戻ってきちゃった」

どこか恥ずかしそうに頬を掻くレヴィを見て、フェイトは本当に帰ってきたのだと確信し、それと共に目の前が歪む。

「レヴィっ」

大きな涙を流しながらレヴィの胸に飛び込むフェイト。レヴィの胸のなかでフェイトは泣きながら言う。

「おかえりっ、おかえりなさいっ」

そんなフェイトを受け止め、背中を撫でながらレヴィはポツリと呟く。

「ただいま」

n
o
h
a
A
s
e
n
d
w
i
t
h
t
h
i
s.
M
a
g
i
c
a
l
G
i
r
l
L
y
r
i
c
a
l
N
a

E p i l o g u e

闇の書事件。長い長いその事件最後の地となった海鳴市。
その地で起こった闇の書事件の顛末について話す事にしよう。

* *

「みなさん、ホントにつ。ホントにつ！」

闇の書の呪いを打ち破りアースラへと戻ってきた面々を出迎えたのは、感無量と言うように涙を流すアースラの艦長、リンデイ・ハラオウンであった。

リンデイ自身、夫が闇の書によって殉職してしまうという浅からぬ縁を持つ上に、今回の現場指揮は息子であるクロノが担当し、そしてついさっきまでは地球にアルカンシエルを打ち込まなくてはならないのかと考えてしまうほどの絶望とも呼ばれる状態だった。その状態からの奇跡的な大逆転。世界を驚かせる偉業。英雄誕生の瞬間。
それらの大きな出来事をいっぺんに受けての涙だった。

「ああつ。クロノ！ 良かった。ホントにつ」

クロノの側に駆け寄り抱きしめるその姿は、管理局の提督では無く、1人の母親だった。

周りを見渡せばアースラの面々もある者は泣き、ある者は笑い、ある者は感激し。そうして生還を、世界を救った事を喜び合っていた。

「なのは！ フェイト！」

「なのはちゃん！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

「フェイトっ!!」

そうして小さな英雄達に駆け寄ってくるのは小さな友達。アリサ、
すずか、そしてアリシアの3人だった。

結界に巻き込まれ、そして危うくスターライトブレイカーに巻き込ま
れそうになった3人は何とか防ぎ切ったのはとフェイトに連れ
られ、アースラで顛末を見届けていた。

そんな3人に囲まれ、なのは、フェイト、はやての3人も互いの無
事を喜ぶ。

「レヴィ、レヴィー！」

そんな中フェイトがレヴィを手招きし、6人の前に立たせる。

「アリシア、レヴィだよー！」

輝くような笑顔でそう言うフェイト。

なのは達4人は全く持つて何のことかわからないが、アリシアには
それだけで伝わったのか、柔らかに笑いながらレヴィの手を握る。

「握れる」

「うん」

「レヴィ、なんだよね」

「うん」

「ありがとう」

「うん」

レヴィの手を握る事で、目を見つめる事で。本当にレヴィに言いた
かった。ずっとずっとと言いたかったあらゆる事が頭を埋め尽くす。

母を救ってくれてありがとう。妹と一緒にいてくれてありがとう。
自分を助けてくれてありがとう。

全部全部、フェイトには恥ずかしくて、それでもずっとレヴィに言
いたかった全部が、溢れてくる。

「おかえり、レヴィ」

「……ただいま。アリシア」

「初めまして。それとも久しぶり、かしら?」

アリシアと手を握り合うレヴィに向かってそう声を掛けるのはアリサ。天才少女と名高い彼女はその聡明な頭脳、そして観察眼からレヴィの事を見破ったようだった。

「はじめまして。それと、久しぶり。アリサ」

レヴィが笑いながらアリサの手を握る。それに続くかのようにすずかも自分の右手を差し出して言う。

「はじめまして。それから久しぶり、レヴィちゃん」

そう言ってレヴィと手を握るすずか。その空気に乗遅れないように慌ててなのはも手を差し出す。

「初めまして! って、言うのも変だね」

にやはは、と笑いながら頬を掻くのはに、笑いながらレヴィはその手を強く握る。

「初めまして。なのは」

「いやー、久しぶりやな! レヴィちゃん!」

「それは違うよ!」

急に自己主張を始めたはやてに即座に突っ込むレヴィ。そのテンポが気に入ったのか、試すような笑みから喜びの笑みへと表情を変えはやては手を差し出す。

「うちはホンマに初めましてやな。八神はやていいいます。よろしく、レヴィちゃん」

「うん。ボクはレヴィ。よろしく、はやて」

こうして遂に3人目の魔法少女とレヴィは出会う事ができた。レヴィ自身にとつては想定外であった邂逅。それは幸福なのか、不幸なのか。それでも、今こうして“自分の身体”で他人に触れると言う現実には素直にうれしかった。

そうしてその日は各々が自分の家に帰る事になった。夜も遅く、戦闘に参加した者は皆疲れ切っていたためである。後日事情聴取や検

査などに付き合ってくれば良いと、そう言いつけてリンディはその場を解散させた。

そうしてレヴィはフェイト、アリシアと共にプレシアが地球の住まいとして買ったマンションへと来ていた。

「ほらー、早くー」

「で、でも」

なぜか入る事を渋るレヴィの背中を押すアリシアとフェイト。二人がかりですらレヴィを動かす事は構わず、玄関の前でかれこれ数分は押しあつてしまっている。

『フェイト！ アリシア！』

そんな騒ぎを聞きつけたのか扉が空き出てきたのはリニスとアルフであった。

レヴィは知らない事だが、魔力蒐集されたプレシアの看病をここ一週間程していたのは彼女達であったのだ。

「あなたは……」

リニスは一瞬戸惑う。見知らぬ水色の少女がアリシアとフェイトに背中を押されているのだから。だが、水色の少女の姿はフェイトに瓜二つであった。体格、髪型、顔立ち、バリアジャケットと思われる服装まで。違う部分は、髪の毛の色と瞳の色、そしてバリアジャケットの色合い位であった。

そんな知っているようで知らないような、知らないようで知っているような、そんな少女をリニスはじっと見つめる。

「……あ、あの……」

その視線に耐えられなかったのか、水色の少女は顔をひきつらせ視線を逸らす。その仕草もまた、リニスに既視感を呼び起こさせるものだった。

「ああ」

だからリニスとは思いついた。もうそろそろ一月になろうかという長い間見ていなかった、側に居なかった少女だと。

「おかえりなさい。レヴィ」

だからリニスはとても優しく、とても柔らかく微笑み声を掛けた。その言葉に驚いたのか、レヴィは目を見開きリニスを見つめる。

「ボクの事、わかるの？」

その問いはそうであって欲しくないかのような。そんな問いかけ。「もちろんです。何年一緒に居たと思っっているのですか。こんなに長い間居なくなるなんて、まったく」

叱るようにそう言いながらリニスはレヴィを抱きしめる。

「おかえりなさい、レヴィ」

「……うん。ただいま、リニス」

そう応えたレヴィの声は震えていた。

「やつと帰ってきたのかい、全く」

大人モードのアルフもリニスが離れた後にレヴィを抱きしめる。

「ん、くすぐりたいよ、アルフ」

「あんたの臭い、覚えとかなきゃ、またどこか行くかもしれないからね」

そう言いながらアルフはレヴィの臭いをかぐ。

その光景を見て満面の笑みを浮かべるフェイトとアリシア。

「さー！ それじゃあ早くママに会おうよ！」

「ええ、そうですね」

アルフはアリシアのその言葉でレヴィを解放し、リニスと共に中に招き入れる。

「プレシアは……」

廊下を歩きながらのレヴィの質問に、リニスは笑みを浮かべたまま答える。

「大丈夫ですよ。まだ体力は戻っていませんが、自由に動ける程には回復しています。今も、あなた達が帰ってくるのを今か今かと待っていますよ」

「……そっか」

レヴィはプレシアの容態を心配したわけではない、別に良いか。そう思つてそれ以上口を開かなかつた。

「プレシア！ アリシア達が帰ってきましたよ！」

「ママ！ ただいま!!」

「ただいま、 母さん」

そう言いながらリビングに入ると、そこには椅子に座りこちらを見つめる少々やつれたプレシアの姿があつた。

「フェイト！ アリシア！」

プレシアは椅子から立ち上がりフェイト達に駆け寄ると二人を抱きしめる。

「よかつた。良かったわ、ホントに」

まるで泣いているのではないかと言うほどに弱弱しいプレシアを見て、レヴィは驚いていた。レヴィの中でプレシアと言う存在は、何でもできて、何事にも動じない。そんなイメージが作られていたからだ。

しかしプレシアの本質は愛深き女である。最愛の娘を失い、暴走する程にその愛は強く。三人の娘の為であれば、手を汚す事に躊躇いは無い。そんなプレシアが、世界の存亡にかかわる決戦の地に娘を行かせることは並大抵の心労では無かつたはずだ。

さらに、三人目の娘がここ一月ほど行方不明ですらあつたのだから。

そんな弱さをさらけ出すプレシアの腕の中で、アリシアとフェイトは視線を交わし、同時にプレシアから脱出する。

「へへー」

アリシアはいたずらっ子の様に笑い。

「母さん」

フェイトもとても嬉しそうに、あらゆる不安が取り除かれたかのよ

うに笑っている。

そうして二人は横に避けると、二人を抱きしめる為にしゃがんでいたプレシアの目の前に、水色が映る。

「あ」

その少女はプレシアの視線を感じると、とっさにその視線を逸らす。

まるでこれから叱られる子供の様に。

「あなたは……」

その少女を見てプレシアは困惑する。先ほどのリニスと同じような、懐かしさに、既視感に襲われていたからだ。

「この娘はだれでしょう！」

まるでクイズの司会者の様なテンションでレヴィを指すアリシア。

「母さん、わかる？」

対するフェイトは落ち着きながらも、プレシアの言葉を今か今かと待ちわびている様子であった。

「……ええ。ええ、わかるわ」

そう言うとプレシアは立ち上がりレヴィの前に立ち、レヴィを抱きしめる。

「レヴィ」

そうしてその名を呼んだ。

「……」

対するレヴィは俯いたまま何もしゃべらない。そんな事も気にせずプレシアは言う。行方不明だった娘に向かって。

「おかえりなさい」

「……どうして」

そんなプレシアにレヴィは疑問の言葉を投げかけた。

「どうして、皆……」

——ボクの事がわかるの？

その言葉は口から出なかった。その代り、目から涙が、大量の涙があふれていた。

「あたり前じゃない。あなたは私の娘なのだから」

プレシアはそう言い。

「そうですよ。私の立った二人の教え子なんですから。わからない訳ないじゃないですか」

リニスもそう言う。

「ご主人様はフェイトだから、私はフェイトの事ほどはレヴィの事はわからない。でもね、なんだろうね、野生の勘、って奴かね？ 一目見た時わかったよ。レヴィの事」

アルフはそう言つて朗らかに笑う。

「……」

その言葉にレヴィの涙はその勢いを増す。

「ただ、ボクは、ボクは」

もう自分が何を言いたいのかわからなかった。ただただ涙が出てきて、ただただ何かを伝えたかった。

「あなたはあの時から、フェイトと同じように私の娘なの。フェイトの別人格でも、幽霊でも、何でも構わなかったわ。あなたがたとえ人間でない何か別の存在でも、それでも、あなたは私の娘なの。あの時、あなたと話したあの日、私がそう決めたのよ」

プレシアはレヴィの顔を見つめながら、力強くそう言う。

「……ボクは……」

「あなたは、私の娘よ」

念を押すように再度言う。

「ううっ。ぐすっ」

ただひたすらに泣くレヴィ。そんなレヴィに向かって優しく笑い

ながらプレシアは言う。

「そしてここはあなたの家。おかえりなさい、レヴィ」

「……た、ただいま」

そう言ったレヴィの顔は、涙でぐしゃぐしゃになりながらも、綺麗な笑顔だった。

どこでもないどこか、しかし実際に有るどこか。そんな何も無い、闇の中に音が響く。

『う、ううつ、ずびい』

『泣きすぎです。王』

『阿呆！ 泣いてなんておらんわ！ ずずびびい』

その闇の中では紫色の光、マテリアルD『ロード・ディアーチエ闇統べる王』が、なぜか泣いていた。躯体構築すら完了していない、未だ自分を構成するのがリンカーコアと意識だけという、フェイトの中に居た頃のレヴィと同じような状態であるはずの彼女が、だ。

『な、泣いている、じゃありませんか』

ディアーチエをからかうつもりが自分の声もどこか震えてしまっているのは、緋色の光でリンカーコアを構築しているシユテル・ザ・デストラクター『星光の殲滅者』。

『なんだ！ お主も泣いておるのではないか!!』

それ見た事かと自分を柵に上げてこちらをからかってきたシユテルを攻めるディアーチエ。

『違います。これはアレです、花粉症です』

『馬鹿を言うな、こんな場所に花粉がある訳なからうが』

そんな二人きりで漫才を繰り広げるマテリアルズが、なぜ泣いて(？)いるのかと言うと、彼女達の前に映る、映像の所為であった。

画面には、大泣きするレヴィをプレシアが宥め、その光景をフェイト達4人が微笑ましく見守っているという、そういう光景だった。

『う、ううっ。家族ものは卑怯だぞ。泣いてしまうでは無いか』

なぜ、彼女たちがこんなことをしているのかと言うと、躯体構築をしながらレヴィの周囲を見る事で外界の情報収集の為であった。

『ディアーチエに言わせれば『支配するに足る世界かどうか』を見極めるための行為であるらしい。』

シユテルに言わせれば、レヴィが周りと馴染むか不安だっただけである。実際、アリサ達と握手を交わしていた時すでにディアーチエは泣いていた。

涙は流れずとも、魂は泣くのである。そう言う事にしておいてくれ。

そんな号泣しているディアーチエの隣で、シユテルもうるつと来てしまっているのだが、しかしシユテルの心を満たすのは苛立ちであった。それはシユテルには苛立ちであると判断できず、理解できない感情としてシユテルは処理していた。

——理解不能、なぜこうも、落ち着いていられないのでしょうか。

体があれば、爪を噛み、貧乏ゆすりをしていたであろう程に苛立ちを募らせてしまっているシユテル。

そんなシユテルの心境を察してか、ディアーチエは映像を消し、シユテルに話しかける。

『して、シユテルよ、我が頭脳、理のマトリアルよ。今後、我らはどう動く』

『……はい。そうですね、幸運にも我々はこうしてお互いを認識できます』

『うむ』

本来であれば各々躯体を構築し、バラバラに外界へと現れる筈だっ

たマテリアルズだが、レヴィのおかげでこうして一堂に会することができる。

そして、レヴィの知識のおかげで自分たちがしなくてはならない事も分かっている。

『まずは、既に構築が完成しているマテリアル―L、レヴィに我々の躯体構築を手伝って貰いながら行動する事になると思いますが』

『うむ。そうだな』

『その時に弊害となり得るのは、レヴィのか……周囲に居る存在です』
あえて家族と言わず言い直すシュテル。その奇怪な言動にディアーチェは気づいていながらも、あえて放っておくことにした。

『なにが、問題だと?』

『王も分かっているでしょうが、プレシア・テストアロツサは脅威です。上手く味方に引き込めば心強いでしょうが、ですが……』

『もう、これ以上は、な』
『ええ』

二人ともレヴィの記憶を全て除いたため、プレシアのこれまでの波乱万丈な人生も知っている。知ってしまったえばもう平和な世界で暮らさせてやりたいと、そうも思ってしまった。

『それに、我々の事は我々で片を付けるべきです。幸いにも我々は全てを知っている。砕けえぬ闇―システムUDがなんなのか、エグザミアがどういう物かも』

『そうであるな。であれば、我々だけでもどうにかなる、と』

『はい。残念ながらUDの防壁を突破するプログラムの中身がわからないので、これは実戦で一度戦い、その時に情報を収集するしかありませんが』

『それさえできれば戦力的には我々で十分、であるな』

『そう、判断できます』

シュテルの献策を聞き、ディアーチェはふむ、と考える。

シュテルの戦力分析も最もだし、周りを巻き込みたくないと言うの

も分からなくはない。こちらとしては態々事を大きくする必要は無いのだから。全てを知ってしまった今、砕けえぬ闇―システムUDが、ユーリ・エーベルヴァインがどのような少女なのか知ってしまった今、ディアーチエが思うことは迅速にユーリを助けだし、その後を安らかに暮らす。それだけだった。

『よし。ならばシユテルよ。お主の言い分を聞き、レヴィにも言っておくとしよう』

『私たちの事を周りに話さない、そして自分の力に慣れておく事。ですぬ』

『そうだ。幸い奴はマテリアル―Lだけの時より思慮深くなっている。キチンと説明せずとも理解するだろう』

『では、今夜にでもレヴィが就寝したらこちらに呼び出すことにしましょう』

『うむ、それで行く』

二人だけの作戦会議は終わりを告げる。

彼女たちが外に出るのは遅くても3か月後となる。その時、また海鳴市に災厄が降りかかるのか、それともディアーチエ達の思惑通り、誰にも気づかれず秘密裏に終わるのか。

結果は、事が起こってからでは無いとわからない。

彼女の話——空白期編

レヴィについてのお話し

闇の書事件が終結して、レヴィがテスタロッサ家の家族として認められた数日後。レヴィは管理局本局へとやって来ていた。

「うわ〜」

初めて見る本局、初めて見る次元の海。あらゆるものが真新しく感じ、レヴィは感嘆の声をあげていた。

「これが次元の海かあ」

「なにもないね」

「なんや、見ると変な気分になるなあ。今が昼なのか夜なのかわからなくなるわ」

そんなレヴィの側からそれぞれの感想を述べるのはフェイト、なのは、はやての3人だった。はやて達の裁判の準備の合間をぬって詳しい魔力ランクやレアスキルの登録等、諸々の事務をこなすために本局へ来ていた。

そんな4人に声を掛けるのはまだ声変わりが来ていないと感じる少年の声。

「検査が早く終われば本局でもミッドでも案内するから、今は早く行かないか」

彼女達の監視役兼案内役として選ばれたクロノ・ハラオウンである。

クロノもはやて達の裁判の準備で忙しいはずなのだが、休暇の代わりの息抜きとして上司であり母親であるリンディからの命令で彼女達に付き添っていた。

「さあ、ここで色々検査することになるが、検査員の言う事には素直に従ってくれ」

クロノにそう言われ見送られながら、レヴィたち4人、そしてリイ

ンフォースに守護騎士達の総勢9人は検査室に入って行った。

*
*
*

検査室の中でレヴィは一人たたずんでいた。

『それではレヴィ・テストロツサさん。これから検査を開始します』
室内に響く検査官の声で検査が開始される。

魔力総量、魔力出力の測定。身体検査に血液採取などの精密検査。

それらを小一時間かけてレヴィの検査はやっと終わりを見る。

『お疲れ様でした。検査結果をお待ちください』

その声でやっと検査は終わりレヴィは解放される。

検査室から出た待合室ではすでに検査を終わらせた8人が談笑していた。

「あ、レヴィ」

レヴィが出てきた事にいち早く気付くフェイト。その声で他の面々もレヴィに気づき、労いの声を掛けてくる。

「なんや、えらい時間かかったな？」

「うん。なんかねえ、色々やったんだよー。身長測ったり握力測ったり反復横跳びしたりさあ。まったく訳が分からないよ……」

はやての言葉にレヴィは愚痴りながら自分が行った検査の内容を述べる。

当然のように他の面子はそこまでの検査は受けていない。守護騎士たちは近い事は行ったが、それでもレヴィ程精密では無かった。レヴィが数多くの検査を受けたのは、ひとえにレヴィの身体が今まで存在しない筈のモノであったからだ。

レヴィは闇の書、ナハトヴァールから脱出するまでその身体は無かった。戸籍も無ければ、存在も認められていなかった。そのような存在がいきなり現れたので、どのような存在なのか、守護騎士のような存在なのかどうなのかを調べるためにかなりの時間、かなりの項目

の検査が行われたのだった。

「へく。握力とかも測ったんだ？」

「うん。なんか身体検査も兼ねてみたいでさ。ホント色々、短距離走からベンチプレスまで色々やったよ」

話を聞いたなのはの質問からレヴィは事細かに行った検査内容を話していく。

こうしてレヴィたちは和気藹々と検査結果が出るまでの時間をつぶして行つた。

一方、レヴィたちが和気藹々と歓談している頃、別室ではクロノが頭を抱えていた。

クロノの目の前には検査官が持ってきたレヴィの検査結果が書かれた紙が置かれている。

名前：レヴィ・テストロッサ 年齢：9歳

魔力内包値ランク：AAA+ 魔力発揮値ランク：S

総合魔力ランク：S-

ベンチプレス：500kg 握力：右122kg、左118kg

1500m走：5分13秒 200m走：22秒48

これら以外にも異常な数値が結果には書かれている。

「なあ……」

「はいー」

意気消沈した様子のクロノに対し、興奮した様子の検査官。クロノは検査官のテンションにすら辟易しながらも言葉を続ける。

「これは、測り間違い、というわけじゃ……」

「はい！ 違います！ 私も最初は測り間違いかと思い、再度計測し直してもらいましたが、結果は変わりませんでした！ そこに書いてある数値は2回目のモノです！」

「因みに聞くが1回目は？」

「はい。短距離走と長距離走、それと握力の記録は1回目の方が高かったです！」

「そ、そうか……」

検査官の言葉の内容に頭痛が激しさを増した気がしながらも、クロノは朝方にリインフォースから言われた話を思い出していた。

*

「執務官殿」

今日の予定を確認するために守護騎士たちを訪ねたクロノに、リインフォースが珍しく話しかけてきた。

「なんだい？」

「今日の検査はレヴィも受けるのだったな？」

「ああ。そうだが」

「そうか……」

「どうした？ なにかあるのか？」

「いや、私の予想が正しければ、レヴィの結果は執務官殿に心労をかけるものとなるだろう。だから忠告でも、と思っただけ」

そう言ったリインフォースの眼差しは、どこかクロノを憐れんでいたような気がした。

*

——くそつ、今朝の話はこの事だったのか

最近とことん自分は苦労が絶えない。そうクロノは感じていた。ジュエルシード事件でテストロッサ家と出会ってから、あそこの家の娘にはいつもなにかしらの問題をクロノに与えてくる。

「——でですね。私としては——執務官？ ハラオウン執務官！」

「うお！ すまない、なんだ」

考え事でボーっとしていたクロノを検査官が大きな声を上げ、現実へと引き戻す。

「ですから！ 私の見解として彼女はレアスキル持ちなのではないか

と思うのですよ！ 検査中も、いえ、平常時ですら彼女は極微弱な魔力が身体中から検知されました。最初は身体強化魔法かと思いましたが、多分彼女は彼女自身使っていないと言っていましたので、多分彼女はレアスキルである『超身体能力』を、しかもSランク相当の持ち主ではないかと思うんですよ！」

『超身体能力』。レアスキルの中では比較的よくみられるモノであり、レアスキルの中で珍しくランクが設定されている。

『超身体能力』自体の詳しい説明をすると、自身の魔力を常に消費する代わりに無意識に身体強化を行っているという物であり、その効果は不随意筋の様に自分の意志で調整できるものではない。そして消費される魔力は大体リンカーコアが生産する魔力で十分以上にまかなえる程度のため、魔法の使用にもそこまで支障が無い。と言うモノである。

ランク自体はEランクからSランクまでが設定されており、身体強化の度合いで決められている。Eランクは、多分あると思われる程度の効果しかなく、人よりちよつと足が速い、力が強いといったその程度でしかない。しかしSランクにもなれば、まさに超人といえる身体能力を発揮し、その為かバリアジャケットを不要とするほどの強度すら得られるなど、まさに人を超えた身体に変質させてしまう。

検査官はレヴィの検査からその可能性を思い立ったと、そう言っているのだ。しかし、レヴィの身体能力はそんなレアスキルの恩恵では無く、身体能力は基本スペックの高いマテリアル—Lの躯体が特典によって強化されていただけで。身体が纏う魔力は、身体を魔力で生成している構築体であるから当然である。

しかしそんなことはレヴィの素性を知らない検査官にわかる訳もなく、検査官は検査官なりに筋の通った思考でレアスキル説に至った訳なのだ。

そしてその思考、その説はクロノにとってもありがたい考えであった。

「なるほど。君の言う事はもつともだ」

「ですよー！」

「備考欄にレアスキル『オーバーパワー超身体能力』の可能性とでも書き加えておいてくれ」

「はいー！」

そうしてクロノはレヴィに関する諸々を『レアスキル』の一言で片づける事にした。生まれの経緯などはすでにごまかす事を始めているので、本当にレアスキルだろうとそうでは無かろうと、クロノにとってはおもはやどうでもよかったと言う点もある。

——父さん。僕は自分がどんどん汚れていくように感じます……。

それが大人になると言う事ならば大人になんてなりたくなかった。そう思いながらクロノは持っていた検査結果を放り投げた。

そんなクロノに心労をかけた検査結果が、クロノ本人からレヴィに渡されてから待合室は騒然としていた。

「うわー！ すごい！ 魔力ランクSー!!」

「なんや、この握力100kg越えって。リング何個潰せるねん」

「レヴィってやっぱり凄いなだね」

自分より高い魔力ランクに驚き、自分でも気づかない程度には羨むなのは。

レヴィの身体測定の結果に顎が外れる気持ちを感じたはやて。

純粹にレヴィの凄さを讃えるフェイト。

「あー、うん」

そんな三者三様の反応を受けレヴィはどうこたえていいかわからず、取り敢えず相槌を打つ。

レヴィとしてはこれでも手加減した方であり、それでも結果が異常

な数値を出してしまうのはまだ身体を、マテリアル—Lの躯体を使いこなせず持て余してしまっているからなのだ。

日常生活上ではリミッターが自然とかかるのか、軽く握手などをして相手の手を握りつぶしたり、鉛筆やスプーンなどを折ったりすることとは無いのだが。レヴィが意識して力を出そうとするとすぐさま異常な数値を叩きだしてしまう。

この検査以前に、リニスとプレシア監修の元時の庭園内で身体検査を行ったのだが、その時は直径3m、高さ50mある大木を身体強化なしで地面から引っこ抜く事ができた。その時レヴィが持ち上げる為に抱きついた部分はぐしゃぐしゃになってしまっている。

最初は普通に計測をしようとしたのだが、時の庭園にある機材を軒並み破壊し、反復横跳びなどは人の目では計測が不可能だったため、取り敢えず山に行つて丸太を持ち上げたりして見たのだった。

そんなレヴィの異常以上に異常な身体能力はこの数日でだいぶ力を制御する事が可能となつてきたのだが、それでもまだ持て余してしまっている。そんな状態だった。

「レヴィ」

そうしてレヴィそつちのけでレヴィの検査結果の事で守護騎士も含め騒ぐ一行を見つめていると、そこから外れてリインフォースがレヴィへ近づいてきた。

「ん？ どうしたんだい？」

「君と少し、話したくてな」

そう言いながら、他の人にはなるべく聞かせたくないのかリインフォースは壁際へとレヴィを誘う。

「私は、最初君の身体は守護騎士達と同じような物だと思っていた」

「うん。まあ、あつてるよ」

「しかし、君の身体は守護騎士より人間らしく。そして私のようなユニゾンデバイスと同じ性能を持っている可能性がある」

「??」

レヴィはリインフォースが何を言っているかわからず、首をかし

げる。

「君の身体は騎士達より自由なのだ。より人間らしい、というのは、君の身体は多分、ごく緩やかだが成長するだろう」

「なっ!？」

その言葉を聞いてレヴィは驚く。レヴィの知識では守護騎士もマテリアルズもプログラム生命体であり、守護騎士達が成長しないように、マテリアルズも成長しないと思っていたからだ。

「理由としては多分だが、騎士達のように君を縛る物が無いからだろう。騎士達は夜天の書に縛られあり方を決められてしまっている。極論だが、治癒不可能なほどの傷を受けてしまったのならロールバック、現在の構成を破棄し新たに構築し直せばいい。それが可能なのが守護騎士プログラム、プログラム生命体だ」

リインフォースの言っている事は最もであり、事実原作ゲームでもマテリアルズは躯体を再構築すれば―時間がかかるとはいえ―再生する。『死』という概念はプログラム生命体には無い。

「しかし、それゆえに守護騎士達は夜天の書に依存し縛られる。だが君は違う。君を縛る物が無いからこそ君の身体は消えない限りその生命活動を、新陳代謝を行い成長する事ができるだろう」

リインフォースの言葉を聞きレヴィは考え込んでいた。なぜそのようなことが起きてしまったのか。レヴィはその原因が転生による恩恵の影響なのではないかと予想を建てたのだが、それは見当違いであり、原作の時点でマテリアルズは緩やかであるが成長するのだ。故に、成長する躯体は正しくマテリアル―Lの躯体である。

「さて、その理由なのだが、君の異常なまでに高い身体能力なども合わせて話をしよう。レヴィ、君はその身体を創る時に、ナハトヴァールを、ナハトを利用して作ったのではないか？」

「え？」

リインフォースの言葉の意味が分からず再度首をかしげるレヴィ。「君がナハトから出てきた後、ナハトの性能が約60%低下した。魔力、再生能力、体組織。あらゆるものが弱体化していた。それは、君がナハトのリソースを利用してその身体を作ったからなのではない

か？ それだと君のその異常な身体能力もだいぶ、説明がつく。君は
いわば、ナハトの半分以上をその小さな体に凝縮しているんだと私は
思う」

リインフォースの仮説は今回に限っては全ての外れであった。ナ
ハトの性能が低下した理由として「レヴィがナハトヴァールから出た
から」と言うのはあっている。しかし、それはレヴィではなくマテリ
アルズが、永遠結晶エグザミアがナハトヴァールから離れてしまった
からなのだ。

ナハトが真に守るべき物は、何時の時代か夜天の書に組み込まれた
無限の魔力を産むエグザミア自体であり、ナハトが狂った根本の原因
も、その機能を狂い闇の書の真の闇となってしまうたエグザミアを、
システムU—Dを封じる為に無理な改造を施し続けたからであった。

そしていつしか、ナハトはエグザミアが産む魔力すら利用し、U—
Dと同じように全てを破壊しようとするプログラムと変化してし
まった。

そんな闇の書の闇、ナハトヴァールの基幹システムであるマテリア
ルズ、永遠結晶エグザミアが無くなった事でナハトヴァールはその本
来の役目を失うと共に性能を大きく削減されてしまったのだった。

「だからこそ、ナハトヴァールの再生能力はその身体を最適な状態に
維持し、ナハトヴァールの潤沢な魔力はその身体を形作る時に異常な
までに身体能力を増やした。まあ、私が言いたい事は、だ」

言葉を発さぬレヴィに対し、リインフォースは優しく語りかえる。
「もし私の予想が正しければ、君は私と同じように何時暴威を振るっ
てもおかしくない、という事だ。だから、なるべくその力を揮おうと
は思わないでくれ。君自身の人間性を疑うわけではないが、それでも
どうしようもない事は多々ある。先輩からの助言だ」

リインフォースはそう言ってレヴィの頭を優しく撫でる。

「さて、次にユニゾンデバイス云々についてだが、これは先ほどの話よ
りも仮説ともいえない予想が多くなる。レヴィ、君は自由に身体の構
築を弄れるかい？」

「弄るかどうかはわからないけど、躯体構築を一瞬で廃棄する事はできるよ」

「そうなんつても、君の意識は残るね？」

「うん」

「それなら、君は相性の良い者となら、私のようなユニゾンデバイスと同じ働きができるだろう。使用者と融合し、魔力補助、別箇での魔法の発動、魔力量の底上げ。それらができるはずだ」

そう言ったリインフォースの言葉はレヴィにとって、かなり衝撃的であった。ユニゾンデバイスの機能、それは今までレヴィとフェイトが行っていた物だったから。それが、マテリアルLとなった今でも、行える可能性がある事。

「もし、その技能を学びたいと言うなら、協力はしよう。ただ、相性の良い担い手を見つける事も一苦労だが、ね」

「それでも、それでも良い。その時になったら、よろしく」

「ああ、任せておけ」

リインフォースとレヴィはそこで話を終え、壁際から今だ何やら話している面々へと近づく。

レヴィの頭には、謎と、期待と不安。それらが植え込まれていた。

レヴィと知り合いのお兄ちゃん

「だ、だめだレヴィちゃん」

休日の白昼から高町家の道場に声が響く。声は大人に近い青年の渋い声と、まだ年端もいかない少女の甲高い声

「なんで？ ボクはこんなに滾ってるのに……」

「し、しかし」

水色の髪を項の部分で一つ結びにした少女、レヴィは眼前に居る大人びた青年、高町恭也に詰め寄っていた……。

「ねえ、恭也……。ボクと……。しよ？」

一言一言区切り、どこか艶めかしく恭也に詰め寄るレヴィ。詰め寄られている恭也は、そんなレヴィにどう対応していいかわからず慌てるばかり。

そんなどこか怪しい雰囲気醸し出す二人に救いの手が差し伸べられた。いや、それはレヴィにとつての救いの手であり、恭也にとつては悪魔の囁きだった。

「もう観念しちやえばいいじゃん、恭ちゃん」

その声は共に道場にいた恭也の妹、高町美由紀であった。

「な！ 何を言うんだ美由紀！」

そばで何食わぬ顔で素振りをしている美由紀に向かって声を荒げる恭也。しかしそんな恭也の味方はこの場には居なかった。

「そうだよお兄ちゃん。してあげれば良いじゃん」

そう言い放ったのは恭也の二人目の妹、高町なのは。彼女は美由希の隣で共に素振りをしながら視線を恭也たちには向けず、声だけをかける。

そんな美由紀、なのはの援護射撃を受け、レヴィはさらに詰め寄る。

「ほら、美由希もなのはもああ言ってるんだし、さ。ね？ 良いでしょ？」

そんなレヴィに観念したのか、それともこれ以上拒んでもらちが明

かないと判断したのか恭也は声を張り上げて言う。

「わかった！ やろう！ 準備をするから少し待っていてくれ」

「うん。待ってる！」

レヴィは恭也の言葉に、言質を取ったと言わんばかりに元気よく返事をし、恭也から離れる。

そうすると美由紀となのはも素振りを止め、道場の壁際へと下がり座る。

それを確認した恭也は道場の壁にかかっている試合用の短い木刀を2本手に取ると、既に準備が完了しているレヴィに向かって向き直る。

「御神流は門外不出の剣だ。いくら妹の親友だろうと部外者には教えられない」

そう言う恭也は先ほどまで幼い少女に翻弄されていた青年では無く、既に一人の剣士の空気を纏っていた。

「わかってるよ」

そんな恭也に相対するレヴィも、自分の身長半分ほどもある木刀を構えている。その構えからは、美由希やなのはの背筋に冷や汗をかかせる程の剣気を纏っていた。

「だから、俺ができるのは本気の試合だけだ。しかし、いくら本気と言えど……いや、本気だからこそ必要と思わなければ俺は技を使わない」

そう言った恭也は静かに両手に持った小太刀を構える。

「だから、俺に使わせてみる。御神の神髓を」

それはつまり、御神流師範代に本気にさせてみると言う事である。恭也は過去の自身を追いこみすぎた特訓の後遺症で全力が出せないと言えど、魔法抜きならばシグナムとすら打ち合える剣豪である。そんな恭也に本気を出させて見せると、レヴィを殺す気にさせて見せると恭也は言つてのけたのだ。

「ああ。それこそ、望むところ、さー！」

そう言いながらレヴィは駆け出す。

本気の試合に合図は要らない。お互いがやる気に満ち相対したならば、その時からすでに試合は、戦闘は始まっているのだ。

そうしてレヴィは本気を出す。

マテリアル―L、そして転生者^{チーター}としての本気を。魔法などを使わなくても、たとえ身体が幼くとも、人間の限界を優に超えられるその膂力の本気を。

そうしてレヴィはワンステップで消える。観戦者であるのはと美由希ですら追う事が困難なスピードで駆け恭也に肉薄する。

なのはの生来持った動体視力ですらとらえきれない速度。それはまさしく、本格的に御神流を学び始めた時、父に御神の神髄を見せて貰った時の感覚に酷似していた。つまり、何もわからない事がわかった、ただそれだけだった。

対して、本人もすでに御神の神髄にたどり着いている程にまで練度を高めている美由希は剣士の直感と、鍛え抜かれた眼でレヴィの速度を見切る。自分が動く事を度外視し、『視る』事だけに集中したからこそ、レヴィの動きを見切る事ができた。そこが、美由希と恭也の現時点での力量の差だった。

「踏み込みが甘い。それに素直すぎる。速さと腕力があるからこそ衝撃は相当だが……」

高速で向かってくるレヴィを恭也はしっかりと見切り、高速で振りぬかれる木刀を左手に持った小太刀一本で器用に衝撃を逸らす。

「一定の実力を持った剣士には通用しない」

そう言いながら容赦なく、右手の小太刀を振り下ろす。しかし、レヴィはその振りおろしを筋力に物を言わせた強引な身体操作で躲す

と、そのまま恭也から離れる。

そして突撃した速度のまま恭也から離れたレヴィは体制を崩しながらも恭也に向き直る。

「あはは、やっぱり強いなあ。恭也は」

「どうした、その程度しかできないなら俺に技の一つも使わせられんぞ」

無表情になり冷たく言い放つ恭也に対して、レヴィは心底楽しそうな表情で言う。

「うん、だから」

体制を整え木刀を構える。両手で木刀を支える正眼の構え。

「今度は剣士として、本気で行くよ」

そしてレヴィは踏み込む。

自身のスペックを、持って生まれた才能^{チート}を駆使して動く。今まで士郎や恭也たちを視て覚え、身体で覚え、理解せずとも会得した、常識はずれの学習能力を持つて。

そうして得た技術を駆使したレヴィの踏込は早かった。速いのではなく、早い。単純に身体能力に任せたスピードではなく、確かな技術によって裏打ちされた、無駄のない洗練された動きだった。故に、早い。

そうして接近したレヴィと恭也は剣を交わす。レヴィの振るう木刀を小太刀でいなし、そらし、受け流しながら使っていない方の小太刀で反撃を加える。その反撃をレヴィは持ち前の身体能力と、確かに習得し十全に使いこなせるようになった技術で躲す。

「レヴィちゃんの成長速度、飲み込みは驚くばかりだ。父さんとも話したがまるでスポンジが水を吸うようだと……」

「それはどうも！」

激しい剣劇を交わしながらも恭也は涼しい顔で喋る。対するレヴィも力が入っているものの、余裕があるのか恭也の言葉に反応する。

「だから惜しかった。君が男だったら婿養子でも養子縁組でも、何を

してでも家に迎え入れたいと思ったほどに、ね！」

最後の語気に合わせ力を込めレヴィを弾く。そうして一区切りついた激しい攻防は今度は役者を変え再開される。

「それこそ、君は剣士としては一流の域に達している。だから御神の剣士に近づきたいと言うのは理解できるし、君に技を教えればすぐさま使いこなせるようになるだろう。それが楽しみでもあり、悔しくもある。だから、少々憂さ晴らしもかねて痛めつけさせてもらおう。そして盗んで見せろ。俺から、俺の攻撃から！」

そう言い終わると今度は恭也がレヴィに肉薄する。両手に持った小太刀を使い、まるで舞う様に振るわれる小太刀は、まるで別々の動物のようにレヴィを追い立て、しかし同じ意志を持ったかのような隙のない連携でレヴィを追い込む。

「ぐふっうっ！」

数合剣を交わした後、レヴィが呻き後ろへ跳ぶ。

「つごほっ！ げほっ！」

レヴィの感覚では確かに恭也の小太刀は木刀で防いだはずだった。しかし、実際は腹に強い衝撃を受け、苦しきのあまり咳き込む程である。

「今のが御神流の基礎の一つ『貫』。相手の防御や回避の癖を見切り、その隙を突く技術だ」

咳き込むレヴィを冷ややかに見つめ自分の使った技の解説を始め恭也。なんだかんだ言いつつも、恭也はレヴィに美由紀とは違った御神の剣士の完成系を、発展系を見出していた。結局、こうして理由をこじつけ、自分をごまかしてレヴィに稽古を付ける程には。

「なるほど……視えなかつたけど、理解はしたよ」

そう言いながら不敵に笑うレヴィに向かって恭也は駆け出す。

「さあ、まだ日は昇ったばかりだ。どんどん行くぞ」

そうしてレヴィと恭也の『稽古』は激しさを増す。

幾度恭也の振るう剣を身に受けただろうか、幾度恭也の剣閃に死を感じただろうか。

そうして早朝に始まったはずの稽古は、気づけば朝食をとるには少々遅い時間となってしまった。そんな時間だからか、道場には恭也とレヴィしか居ない。二人の隙を縫って見稽古をしていたはずの美由紀となのは何時の間にか道場から退散していた。

そんな事にも気づかぬ程の集中を維持したまま数時間、レヴィと恭也は『稽古』を続けていた。

「つはあ、はあつ。こ、これが『御神流奥義之参・射抜』、だ」

「……………『射抜』……………それも、『覚えた』っ！」

恭也の突きを喰らいふらつきながらもレヴィは叫ぶ。

この数時間でレヴィは御神流の基礎と言える技術と、奥義と呼ばれる技のいくつかを完全に習得し、十全に使いこなすほどになっていた。

「今日は、ここまでには、しよう……………さすがの俺も、足がガクガクだ」

そう言つて座り込む恭也。そして恭也の言葉を聞いて力が抜けたのか、レヴィは倒れ込むようにして気絶した。

「お疲れさん、恭也」

「父さん」

そんな恭也にタオルを差し出すのは恭也の父である高町士郎。そんな士郎は困ったような笑みを浮かべていた。

「すまん、父さん。少々、熱が入ってしまった」

受け取ったタオルで身体中の汗を拭いながら恭也は父に謝る。本来ならば少々痛めつけて諦めさせる筈だったのに、気づけば奥義すら『覚えた』と言わせる程の『稽古』になってしまっていた。

「いや、かまわないさ。恭也がやらなかったら、いずれ俺がやっていただろうしな……………」

そう言う士郎の視線は倒れ込み静かに寝息を立てるレヴィに注がれていた。

「末恐ろしいな……。あれほどの才能を見てしまうと」

「ああ……。自分の今までを否定された気分になる」

士郎の言葉に恭也は頷く。

本来御神流は一朝一夕で習得できるような、そんな生ぬるい武術では無い。武術自体がそんな生ぬるくは無いが、それでも御神流は古武術として、そして門外不出の武術として並みの才能では奥義の一つに辿り着くまでに一生を捧げるなどザラであった。

士郎の記憶にも、努力は人一倍積んだが、才能が足らずに御神流を学ぶ資格なしとされた者は何人かいる。

恭也のように20になる前に免許皆伝を得、師範代にすらなれるのは相当な才能と絶え間ない努力があつてこそなのだ。

しかし目の前で死んだように眠る少女はそれを覆す。過剰なほどアブノーマルに異常な才能を持って、恭也たちのプライドを打ちのめす。

恭也も最初は御神流の技を教える気は無かった。しかし、そのあまりにも埒外な才能を目の当たりにし、その完成系を見たくなつてしまった。これは美由希という大器晩成の才能を育てる楽しみを見出しってしまった弊害とも言えた。

そして今日の稽古、後半は汗だくになるほど本気で戦っていた。キレを増し、より早くなるレヴィの素早さに負けぬように神速まで使っていた。そしてその原理を、神速の摂理をレヴィは直感で、肌で感じただけで理解し、十全に使いこなして見せた。

「あの才能は眩しすぎる。見る者全てを焼き尽くす太陽の灼熱のような才能。そんな才能を使つてでも、使いこなしてでも得たい物が、レヴィちゃんにはあるんだろう……」

レヴィが身体を手に入れてから一月がたち、レヴィの士郎や恭也に対する御神の技を求める姿勢は強くなった。がむしやらにでも力を

得たい。得なければならぬ。そんな半年程前のはと同じ雰囲気
気を士郎は感じていた。

だから例外的に、言い訳ができる様な形で自分達に、御神の信念に
言い訳をしながらレヴィに御神の技を教授した。

「恭也、今日の夜から俺の訓練に付き合え」

「どういう風の吹き回しさ」

「なに、少しでも動けるように調整しておきたくつてな」

年の功とでも言うのか、士郎の直感は小さいながらも警報を鳴らし
ていた。

レヴィが必死に力を求める何かがある。そしてその姿勢から余裕
が失われつつあることを鑑みるに、そのタイムリミットは近い。

その時に士郎に何ができるかはわからない。魔法関連の出来事
だったら手も足も出ない可能性がある。しかし、だからと言って、何
もできなくていい訳ではないのだ。

「ああ、俺も少々鈍ってたみたいだし、俺も今日から付き合うよ」

士郎に向かってそう言う恭也も、士郎と似た『なにか』を感じ取っ
ているのだろう。

「ふっ、レヴィちゃんと数時間試合した程度で汗だくになるんだ。相
当鈍ってるな」

「父さんはレヴィちゃんを甘く見てるな、明日の稽古は父さんが付け
てやると良い、俺の気持ちかわかる」

士郎の軽口と同じく軽口で答える恭也。そんな二人はそのやり取
りがツボに入ったのか二人して笑い出す。

朝とも言えない、しかし昼とも言えないそんな時間の道場に、男二
人の笑い声が響き渡った。

レヴィと闇の欠片

第97管理外世界 惑星『地球』日本海鳴市、そこにある高層マンションの一室から今、一人の少女が消えた。

忽然と、まるで魔法の様に、しかし魔法ではない方法で少女が一人消えた。その少女と共に寝ていた筈の二人の少女はそのことに気付くはずもなく、一人分を失った布団の空間に差し込む寒風に身を縮ませる。

そして海鳴市上空、そのマンションから離れた空に、人影が突然姿を現す。

黒と水色を基調とした戦闘衣服である襲撃服スラッシュスーツに身を包むのは青色の少女。

『だいぶ躯体構築にも慣れてきたようだな』

『やはりレヴィのその躯体構築速度はさすがの一言に付きますね』

そしてその少女に向かって、少女にだけ聞こえる声で話しかける二人の少女の声。その姿の無い二人に向かってレヴィは虚空に呟く様に返答する。

「まー、そりゃねえ。ここんとこずっと二人の躯体構築手伝いながら、毎日自分の躯体放棄と躯体構築してればそりゃ慣れるよね」

『今日のスコアは放棄に64秒、構築に167秒です。躯体放棄はそろそろ60秒の大打に乗りそうですね』

『うーむ、貴様は色々と馬鹿げているが、ことこの面においても馬鹿げているな。分単位でかかるとはいえほぼレアスキルショートジャンプの短距離転移に匹敵するではないか』

「って言ってもさー結局構築に2分〜3分かかるし、放棄してから構築までに、なんていうの？ 意識の移動時間？ みたなものも必要だしさー短距離転移程使いやすいは無いよねー」

『ですが、レヴィの戦闘力でどこに現れるかわからないと言うのは十

分な脅威になりえます。ファーストアタックは勿論、レヴィが1分間身を落ち着かせられる状態になってしまえばその後は相手はレヴィを確実に見失い——」

「あー、はいはい。お、見つけた」

シユテルによるレヴィの戦略的価値の高説を聞き流しながら、使用していた感知魔法に獲物が引つかかった事を感じるとレヴィは消える。

1分間かけて消え、時間をしばらく置き、また2分間かけて現れる。

そして現れたレヴィは、大上段に振り上げたバルニフィカスを獲物であるソレに向かって振り下ろし、真つ二つに斬り裂いた。

二つになったソレは断末魔を上げる事もなく闇に溶けて消える。

そしてそれを目撃してしまったのか、目の前の白い魔法少女はその顔に恐怖と驚愕の表情を張りつかせてレヴィを見る。

「な、なんで……」

獲物が一つ消えるのを確認しながら、レヴィも前に居るソレを見つめる。その瞳はとてもヒトを見る様な物では無い、とても冷たい瞳だった。

「なんでそんなことをするの？ 私が悪い子だから、だからフェイトちゃんを??」

ぼそぼそと呟く様に目の前の白い魔法少女はレヴィに向かって喋りかける。しかしその言葉はレヴィには届かず、レヴィの心を動かす事は無い。

「黙れよ」

ただ一言呟くとレヴィは握っている愛機をザンバーフォームに変形させ振りぬく。

「え？」

自分に起こった事が信じられないのだろう、白い魔法少女は落ちる視界、自分の目に映る自分の下半身を見ながら闇に溶けて消えた。

その光景に対し、なんでもない出来事のように無関心な様子のレヴィにまた声が掛けられる。

『ずいぶんと処理にも慣れてきたな』

デИАーチエのその言葉通り、レヴィにとって今の戦闘——処理はただの作業であった。

「そりやーさー。こーこー週間ずつとだもんねー。さすがに飽きるしなれるよね」

レヴィの声色からも、先ほどの出来事への関心はうかがえず、ただただ面倒であると言う事だけが伺えた。

『そして今の様にファーストアタックでレヴィの確殺圏内に敵を含む事ができ、戦力を減らせるのは——』

そしてシュテルは未だ、レヴィの技能についての戦略的価値を説いていた。

『まあ、シュテルは置いておき。今日も励め、あと数日で我らの躯体も完成する。それまでの辛抱だ』

「つて言ってもさー、さすがにそろそろ一人じゃ辛くなってきたよー。昨日なんて別の世界には手が回らなくなって来てたしさー、さすがにそろそろ管理局も気づくんじゃない?」

『しかし、それが我が参謀の出した策よ。我が承認し貴様が異を唱えなかったのだからそれに従うほかなからう。それにどちらか片方だけ躯体構築を終わらせても、それはそれで面倒が多い』

デИАーチエの言っている事はレヴィにもわかつてはいた。どちらか片方だけの躯体が完成しても結局最後の一人の躯体構築が完了するまではどこかで身を隠す必要があり、それらの手配の面倒を考えたら結果こうしてレヴィが一人で頑張るという結論に達したのだから。

そんな雑談を繰り広げながらもレヴィは次々と獲物を見つけては処理していく。こうして片手間に処理を終わらせられる程に、レヴィにとってソレは無価値であり無力であった。

そして処理を初め数時間した頃、レヴィの目の前には恐ろしい光景が広がっていた。

「うわー」

『こいつはまた』

『珍しい事もありますね』

三者三様にレヴィの目の前の光景に対して感想を述べる。

レヴィの目の前にはそれほどの光景が広がっていた。

『軽く見ても1000は居るな』

『反応の数から察するに300近いでしょうか。これほどの闇の欠片が一堂に会するとは』

そう、レヴィの目の前に移っている光景は300に迫る闇の欠片達が集まっている光景だった。

『欠片達もどうしていいのかわからず睨み合っているだけのようだな』

ディアーチエの言葉通り、好戦的な欠片達でも動くに動けずならみ合いが続いている。それもそのはずで集まった欠片の達はどれもオリジナルに劣るとはいえ、守護騎士達が蒐集に値すると定めた魔導師達だけであり、その実力は高い。しかも同一人物が元ネタの欠片も多いらしく、自分と同じ存在に対して対処しかねているようだった。

「もう時間も遅いしさー、さすがにこの数の処理を秘密裏にっても無理じゃない？」

そんな光景を見てレヴィは自分の参謀と王に具申する。

『確かに、もう他の世界への手もまわりきっていませんしここらが引き上げ時、と言うことでしようね』

『レヴィの手に余る状況になってしまっているな、後はスピード勝負になるか。よし、レヴィ、マテリアル―S、我が剣よ。我らはこれよりフェーズ2に入る。許すゆえ、満足いくまで暴れるといい』

「OK, BOSS」

ディアーチエの許しを得てレヴィは獰猛な笑みを浮かべると辺り一帯を結界で切り離す。封時封鎖結界。戦闘の影響を結界外に反映

させず、そして結界内のモノを逃がさないレヴィにとっての狩猟空間。

結界によって新たな存在が現れた事に気付いたのか闇の欠片達が一斉にレヴィの方へ視線を向ける。

しかし、既に時遅くレヴィは戦闘態勢に入っていた。

ディアーチェから派手に暴れて良いと許可を貰った事でここ1週間のフラストレーションを晴らすかのように、新技を披露する。

「奥義——『神速』——三段重ね!!」

その言葉をキーワードに、レヴィの知覚が加速する。

レヴィが恭也や士郎に相對し覚えた神速の摂理。それを応用した技。

本来神速は人間にかかっている無意識のリミッターを解除し身体能力を極限まで引き出すと共に、その状態でも正常に判断できるほどまで知覚能力、思考速度を加速させる技術。人間が人間のまま人間の限界をひねり出す為の技である。

しかし、それはレヴィにとっては何の意味の無い技術であった。生来より人間より恵まれた身体能力を持っているマテリアルと言う躯体は、機械が自分の性能を十全に発揮できるように最初からリミッターなどと言った物は存在していなかったからである。十全の力を発揮しないのはそれが不必要いからであり、必要とあらばいつでも意識的に十全のスペックを発揮できる。それがマテリアルという魔導生命に許された特権であった。

故にマテリアルであるレヴィには神速という技術は摂理は理解できても使用する事などできない筈であった。

だがそこで終わるレヴィでは無い。利用できるのならば利用できるようにすれば良い。パンが無いならケーキを食べればいいのだ。そんな思考に則りレヴィの言う『神速』は完成した

本来の神速が“人間の限界を引き出す”『技術』ならば、『神速』は“限界を超える”『魔法』。簡単に言えば、強化魔法の凄い版である。

スペックを超える程の身体強化、身体硬化、知覚の高速化、並列思考の増加。それらを一度に発動するレヴィのバカみたいな魔力量とアホみたいな出力が可能にした究極の力技。

そして『神速』は本家神速が三段重ねまでの神速重ねという奥義ができるように、3回まで重ね掛けができた。

故に——奥義『神速』三段重ね——。

力技の極致を使用した力のマテリアル。速さとパワーを兼ね備えたレヴィは、これをもつて結晶時間への入門を遂げる。

発動するだけで時が遅く感じる『神速』の思考加速を3回重ねたその状態はまさに、時間の停止。正確に言うならば止まったように感じる程限りなく遅くなった時間にレヴィは存在していた。

「ザンメツゴウライデンジンシンヨウ残滅轟雷電刃衝」

その世界に入った瞬間に、レヴィは魔法を発動していた。残滅轟雷電刃衝。いわゆるフェイトのフォトンランサー・フランクスシフトのレヴィ版であるが、本来は1点に集中するように射出されるように展開するスフィアだが、今回は欠片達の大部分が射線に入るよう、扇状に広がるように展開していた。故にどちらかと言えばリインフォースの使ったジェノサイドシフトの方が近いだろう。

そうして発動された魔法はレヴィにとっては遅く、欠片達にとっては不意をつかれた形で電刃衝をまき散らす。

雷速に近い速度の筈の電刃衝ですらゆっくりと移動しているようにしか見えないほど、レヴィの知覚している時間はかけ離れた者だった。

ゆっくりじわじわと動く電刃衝を後目に、レヴィは電刃衝が当たらないような場所に居る欠片に近づきバルニフィカスを振るう。

一振りですら近い欠片が両断される。二振りでさらに十、さらに十、十、十。

レヴィが両腕に握りしめた特大剣とかした愛機を振るたびに欠片達が斬り裂かれていく。

そうしてレヴィだけで半数程の欠片を処理した頃、ようやく電刃衝の第1派が戦闘の欠片に到達する。

とつさに張ったのであろう防御魔法に当たり、削り、貫く電刃衝。それらに貫かれ消えていく欠片たちをレヴィは遅くなった時間のせいで色彩に欠け、音もない無音の世界でただただ見つめていた。

そしてレヴィにとつて長い長い時間、しかし通常の時間に生きる者にとつては短い時間が過ぎ、追加の電刃衝は放たれなくなっていた。そこまでの時間を体感し、やっと『残滅轟雷電刃衝』ザンメツゴウライデンジンシヨウの射出時間である4秒が過ぎたのだ。それを理解したレヴィは、未だ消えぬ欠片達の無残な断片の中で、かろうじて耐えきった運の良い一握りの獲物を探す。そして見つけるとすぐさま近寄り、自分の手で処理していく。遅くなった時間の中で射撃攻撃をするくらいならば自分で移動した方が速いと気づいたからである。

そしてレヴィの感知するところに稼働可能な闇の欠片が居なくなったのを確かめるとレヴィは『神速』を解除した。

その瞬間、世界に色と音が戻り、まるで圧縮したかのように電刃衝がスパークする音と欠片達の断末魔が耳に響く。

たった5秒足らずで300程いた欠片達は全員消えていた。闇に溶け、消えていた。

『レヴィ、お主……』

デイアーチエの驚愕したような声が届くが、レヴィは気にしなかった。いや、気にできなかつたと言つて良いかもしれない。

今レヴィは数多の感情に支配されていた。圧倒的な力を揮った高揚感。あまりにも圧倒的な自己の力への恐怖。ある時自分に忠告してきたリインフォースの声がリフレインする。

レヴィは高揚感に震える自分と恐怖に震える自分。そしてリインフォースの忠告を冷静に思い出す自分がごちゃ混ぜになった感覚に襲われていた。

——カット、カット、カット。

『神速』の影響で増えすぎた並列思考を意識的にカットして処理を軽くしていく。そうしていくうちにレヴィは、自分がとても疲れている事に気付いた。

まるで全力疾走を数時間つづけたかのような極度の疲労に、レヴィの目の間が一瞬真っ白になる。

『おい！ 大丈夫か!? しつかりせい！ レヴィ!!』

ディアーチエのその言葉でかろうじて意識をつなぎとめたレヴィは、端から聞いても直ぐにわかるほど疲労困憊といった声をひねり出す。

「あー。ちよつと疲れた、かも」

『何をしたのか我々には理解が及びつきませんでした、その説明は後日求めるとしましょう。レヴィもこの様子ですし、今日は終わりにした方が良いでしょう』

『ああ、時間も時間だし戻った方が良いでしょう。レヴィ、大丈夫か』

「うんー。がんばるー」

シユテルの提案とディアーチエの指示を話半分で聞きながらレヴィは躯体を放棄する。

そしてその数十分後、テストロッサ家の一室に人が一人増える。

「うぼあー」

まるでゾンビのような声を出しながらレヴィはフェイトとアリシアが寝ているベッドに潜りこむ。

するとまるでレヴィが布団に入った事を感知したのか、抱き枕にし

がみつくようにフェイトがレヴィを抱きしめる。
その温かさを感じながら、レヴィはそのまま意識を落した。

彼女たちの戦い——GOD編

GOD編第1話 「Start of [GOD]」

日も傾き空がオレンジ色に染まりつつある時間、レヴィは海鳴臨海公園の展望台から色が変わりつつある空と海を眺めていた。

爽やかなライトブルーのコートに身を包み両手をポケットの中に入れたまま海を眺めるレヴィ。彼女の心の中は期待と寂しさで満たされていた。遂に始まってしまふ事件、その先に出会う敵への期待。そして、その後に訪れる別れへの寂しさ。それらをひとまとめにして、レヴィは白い息を吐く。

『そろそろだな』

『遂に我等が悲願の叶う時』

ここ一月ほど常に共に居る少女二人の声が響く。レヴィにだけ聞こえる声。念話でもない、あらゆる概念を超越したテレパシー。

仲間にして同一存在。友にして同士。一つのモノから生まれた家族——マテリアル——。

その二人の声に返答するように、レヴィは小さく呟く。

「はじめよう」

その一言を寒空の下に残し、レヴィは消える。

誰も居ないその場所で、ガチリと歯車が噛みあい動き出す音が聞こえた。

——『The Gears Of Destiny
運命の歯車』は動き出す。

フエイトは焦っていた。

自分と瓜二つの少女と戦いながら、フェイトは焦っていた。
実力では楽勝なはずの目の前の少女に勝ちあぐねる程に、フェイトは焦っていた。

「このっ」

相棒であるバルディッシュをクレツセントフォームに変形させ切り込む。それに合わせるかのように、自分に瓜二つな少女も手に持ったデバイスを鎌型に変形させバルディッシュを受け止める。

「母さんのために……」

目の前の少女が呟く。

「私は、あなたに構ってる暇は無いんだ！」

フェイトが吼える。

フェイトは焦っていた。目の前の陰鬱な雰囲気を纏った少女が自分であることに気付かぬほどに焦っていた。

「バルディッシュ!!」

故にフェイトは気づかぬまま剣を振るう。居なくなったレヴィを探す為に、我武者羅に空を駆ける。

「レヴィっ!!」

大切な家族を求め、空を駆ける。その姿は焦燥に塗れていた。

一方ある少女たちも海鳴の空を駆けていた。

最後の夜天の王、八神はやて。

闇の書事件の後、ギル・グレアム、リンディ・ハラウン、聖王教会を保護観察者、後ろ盾とし管理局で数年の無償奉仕を罰として言い渡された、なのはやフェイトと同じ年の少女。

そしてその少女と共に空を駆けるのは主を見守るリインフォース。

現在の二人は任務にあたる際は基本セットで動いていた。

そんな二人は地球に不可思議な転移反応があり、その調査をして貰いたいというクロノの指令を受けこうして空を舞っていた。

そして、指示されたポイントに付くと桃色の女性が何かを探すように手元を見ながら飛行していた。

魔法使いが居ないはずの地球、魔法文化がない故の管理外世界。そんな世界で空に浮く女性。明らかに第一容疑者発見の瞬間であった。「ちよつとそこのお姉さくん。お話聞かせてもらいたいんやけど〜」ゆるやかなカールのかかった長い桃色の髪に、同じく桃色を基調としたバリアジャケットらしき服を纏った少女と女の間程度の年頃の女性ははやてが声を掛けると明らかに表情を崩し振り返る。

しかし、はやての顔を見た瞬間に女性の表情がまた変わる。

「あら〜？ これは早々ビンゴ引いちやったかしら〜？ ちよつと色が違う気がしないでもないけど。あなた王様〜？」

「王様？ 何のことや？？ それよりこつちに来て話聞かせて貰いたいんやけど、お姉さんには今無断渡航者の容疑が掛かってるんやけど、任意同行。お願いできひんかな？」

「あく。まさかそつくりサンつて奴だったり？ キリエ困つちやうわ〜。ごめんなさいね、人違いだったみたい。それじゃあ〜」

桃色の女性、キリエは一方的に言うとお話を切り上げ、高速でその場から離脱する。

「あ！ ちよ、まちいな！ 追うよ、リインフォース！」

「はい。我が主」

それをはやてとリインフォースも追いかける。

1対2の奇妙な追いかけつこが始まった。

レヴィは立っていた。いや、正確には仁王立ちしているかのように空に浮いていた。

目をつぶり、腕を組みまるで己を誇示するかのような仁王立ち、所謂ガイナ立ちと呼ばれる立ち方である。

『セクター7進行率80%、81%、86%——』

レヴィの頭の中で無機質な声が聞こえる。念話でもない、レヴィにしか聞こえない声。システムの声が響く。

夜の帳が落ちる空の中で、レヴィはその無機質な声を聞き続けた。

「あら、こんな所に。今度は色もあつてそうだしこれビンゴって奴じゃない？」

そんなレヴィの耳に少女と女の間のような女性の声が届く。

「あなた、王様の側近？ お友達？ よね。王様、どこにいるか知らない？」

その声を聞きレヴィは目を開く。その目の前には桃色の女性がいた。

「やつぱり、まあ、そうなるよね」

参謀の予想は外れ自分の予想は当たった。こちらとしては邪魔者が入らないようになり計画を早めた筈だが、相手には関係ない。なぜなら彼女はエグザミアが目覚める時間軸にワープするのだから、それが早かろうが遅かろうが関係ないのだ。

——シユテるんはちよつと焦ってるのかな？

マテリアルズの参謀としての冷静さを失うほどに、シユテルは焦っているのかもしれない。

そうレヴィが考えていると、レヴィのつぶやきが聞こえたのか目の前の桃色の女性——キリエ——が話かけてくる。

「あら？。もしかして私の事知ってたりしちやったり？」

レヴィのそんな呟きが聞こえたのかキリエは首をかしげながらレ

ヴィに問いかける。

「うーん。まあ、ちよつとね」

「あらあら、じゃあお姉さんの目的も?」

そうして二人が世間話(?)を始めようとした所で、横やりが入る。

「追いついた! 堪忍しいや!」

「あらく、随分はやいわね」

その横やりは当然キリエを追いかけていたはやとリインフォース。二人の予想以上のスピードにキリエは純粹に驚いていた。

「逃がさへんで! お姉さんには違法次元渡航の疑いがかけられて……つて、レヴィちゃん?」

キリエに向かい囑託魔導士らしく口上を述べるはやとは、その途中で側にいるレヴィに気付いて口上を止める。

「なんでレヴィちゃんがここに? もう、いい年なんやし家出しちゃあかんで? フェイトちゃんから通信あつたけど、多分今も探してるはずやで?」

「うん。そつかでもごめんねはやて。フェイトにはもう会えないんだ」

「は? いったいなにを」

はやてがレヴィに聞き返そうとしたその声を遮るように、大声があたり一帯に響き渡る。

「ふっはははははははははははははははははあっ!!!」

かなりの大音量で響き渡るその笑い声にははやては目を剥き、リインフォースは無言のまま警戒を強める。

そんな二人から視線を外しある一点を見つめるレヴィ。その空間には歪みが発生していた。

「な、なんやこのけつたいな笑い声は!」

「お気を付けください主、あの歪みに多大な魔力が集中しています」

はやてが驚き、そんなはやてを守るようにリインフォースが前にでる。

そうして4人が見守る中、歪みがだんだんと人の形をなす。

体軀は少女。約9歳ほどの、はやてと似通った背格好の人型。

その歪みから形作られた人型に色がつく。黒と紫を基調とした豪華な服に、紫色の十字が先端についたその体軀と同じほどの長さをもつ杖を持ち、もう片方の手には紫色の本を携える。

その少女は、堂々と胸を張り、両目を見開く。

「我！ 顕現せり！」

その姿はまるで色違いのはやてであった。はやてと違うのは帽子をしていないこと、目つきが鋭く勝気な性格であろうことがうかがえること、あとは偉そうな口調であろう。

「ふははははははっ！ ここが現世か！ これが軀体か！ やはり実物は良い！ ふはははははははははっ!!」

「おはよう。王様」

レヴィは高笑いし続けるその少女に近づきながら親し気に声をかける。

「おう、レヴィか、大儀であった！」

そしてレヴィに王様と呼ばれた少女もレヴィを偉そうな口調のままねぎらう。

そんなとてもキャラの濃い自分のそっくりさんの登場にはやてが硬直しているなか、レヴィ以外にも『王様』に近づく者が一人。

「あの、あなたが王様？」

『王様』を目的として動いてるキリエである。

そんなキリエはいつものフワフワお姉さん口調を極力減らし、まじめな雰囲気話しかける。

「ふん、キリエか。あやつの予想は外れたな」

「え？ 私、名前教えたかしら？」

名乗ったはずのない名前を知られていることにキリエは驚く。そんなキリエを見て『王様』はフンと鼻を鳴らしながら言い放つ。

「我はなんでも知っている。我は闇統べる王！ その名の通り、この世すべての闇を統べる王の中の王！ キリエよ、貴様の目的も知って

おる。我によく仕えるのならば褒美にかなえてやらんこともない」

『王様』、ディアーチエは厚顔不遜な態度でキリエに一方的に告げる。

「あ、ありがたき幸せ？」

いわれたキリエも話についていけず、疑問視をつけながらディアーチエにお礼を告げる。

「さて、やはりというべきか、想定外というべきか。小鴉に親鴉が我が謁見に混ざっているようだな」

レヴィを待らせたディアーチエは礼を述べたキリエから視線を外すと、まるで招待していないとでも言うようにはやて達をその鋭い眼でみつめる。

「もしかして小鴉ってうちのことか？　なんやそれ、いきなり表れて失礼な子やな」

「そうすると親は私のことかい？」

その視線に自分のことだと感づいたのかはやては少々不満げに声を上げ、リンフォースは困惑しつつも少し嬉しそうな様子で「主の親、ふふっそれも悪くないかも」などとつぶやいている。

「ふん、羽も生え揃わぬ者など小鴉で十分よ」

ディアーチエはそういうとまるで見せつけるかのように、背中から生えている――もちろん魔法で生えている――羽を大きく広げる。その偉そう、というよりいわゆるドヤ顔ととれる顔にはやては少々イラつきながら、大人の対応をとる。

「む、なんや感じ悪い子やな。初対面でいきなり人の悪口言うのは関心せえへんで？」

「ふん、小鴉がなにやらピーチクパーチクわめいているな」

「あんまお姉さんを怒らせん方がええで？　お姉さんこれでも結構強いんやで？」

「何を言う、生まれたばかりの小鴉に王たる我が負けるわけがなからう」

売り言葉に買い言葉、はやてとディアーチエの口論が激しさを増す

のを、リインフォースはどう対応すればわからずうろたえ、キリエはついていけずに傍観者へと落ち着き、レヴィは無関心を貫いていた。そうして止める者がいないまま口論が激しくなり、片方があわや実力行使に訴えかけそうになった瞬間にその空気をぶった切る声が響く。

「キリエ！ やつと追いつきましたよ!!」

「げ、アミタ……」

「はい！ お姉ちゃん、参上！」

キリエにアミタと呼ばれた赤と青色の女性は、明らかに空気の読めてないまま、キリエに詰め寄る。

「さあキリエ！ お姉ちゃんと一緒に帰りますよ！」

「ちよつと、私の打ち込んだウイルスどうしたのよ……」

「気合で治しました！ 私、お姉ちゃんですから!!」

「んな、無茶苦茶な」

キリエのつぶやきにその場にいたもの全員の思いが一致する。

「ふ、ふん、まあ呼ばれぬ客が増えたがよい、すべて薙ぎ倒してくれよう」

とりえず空気を戻すためにディアーチエは本を開き杖を構える。その様子に戦闘態勢に入ったことを察知し、リインフォースとはやてもいつでも戦闘行動に入れるように構える。

「3対3、ちようどよいバランスではないか。まあ、鎖に繋がれた親鴉対我が自慢の特攻隊長では、少々こちらが有利すぎるか？」

ディアーチエはお互いの戦力を一瞬で分析する。

キリエVSアミタ、ディアーチエVSはやて、レヴィVSリインフォース。キリエとアミタはほぼ互角。ディアーチエとはやてではディアーチエが有利。レヴィと今の状態のリインフォースではレヴィが圧倒的に有利。そう、ディアーチエの頭の中では戦力図が展開していた。

「その情報は少々間違っていますね」

そんなディアーチエを責めるかのように、新たな声が聞こえる。

「また!? この一瞬で登場キャラ増えすぎやろ！」

つついはいはやてが電波を受け取って突っ込むが、それをディアーチエは華麗にスルーしある一点を見つめる。

そこには、ディアーチエが現れたときと同じ空間の歪みが発生していた。

しかし違うのは、その歪みはだんだんと燃え始め、その炎が人型をとること。

赤紫の色で包まれたまたもや小さな体軀を形作る歪み。そしてその炎が完全な人型を取ると、そこにははやてにとって見覚えのある容姿の人物がそこに立っていた。

「システム、オールグリーン」

目をゆっくりと開きながらその人物は言う。

「うちの次はこんどはなのはちゃんか」

そして新たに表れた少女を見てはやてが苦々しくつぶやく。そう、その少女はなのはによく似ている少女だった。これまた着ている服の色は違うが、形状なのはのバリアジャケットと全く同じ、でありデバイスの形状も同一。違うのは瞳の色が朝やかな青色であることと、髪の長さがなのはに比べるとだいぶ短い。

「不思議な感覚ですね。まるであちらに主とフェイトちゃん、それになのはちゃんまでが居るような気分です」

「せやね、全員色違いだけど、だいぶ趣味悪いんとちゃう、王様？」

リインフォースのつぶやきにははやてが反応し、ディアーチエに問いかける。

それはそうだろう、自分だけではなく自分と仲の良い魔法少女3人組が―色違いとはいえ―相手に固まってしまっているのだから。

「ふん、文句を言われても我にはどうしようもない。なるべくしてなった。それだけの事」

「そんなことより、これで4対3です。こちらが圧倒的に有利ですね」
なのはによく似た少女、シユテルはなのはとは違い、落ち着いた冷徹な声で言う。その言葉は流石にはやても反論できず顔をゆがめる。

ただでさえ若干不利だったのがこれで相手に戦力の天秤が大きく傾いたことになるからだ。

「あ、それだったら僕はいいよ。弱い者いじめしても詰まんないし。準備もあるしね」

レヴィはそういうとバルニフィカスを待機状態にすると後ろに下がる。

「ふむ、そうか、まあそれだったらちょうど良いか。やれるな？ シュテル」

「ええ。この躯体の慣らしにはちょうど良い相手でしょう」

レヴィが抜けるのをいともあっさりとは認めるディアーチエ。しかし、それでも戦力がイーブンになった程度。どころか良い運動だとも言いたげにはやて達を見る。

「さて、待たせたな小鴉。軽く捻ってやるからせいぜい足掻け。キリエ、貴様の働きを期待しているぞ」

「いや、王様に頼まれちゃしようがないわね」

ディアーチエの言葉にはやてとキリエが戦闘態勢をとる。

「やるつきや無い、か。お姉さん！ 急で悪いですけど助力お願いできますか？」

「はい！ 妹の不始末は姉の責任です！ キリエは任せてください！」

「リインフォースもリミッター外せへんけど、やれるな？」

「はい。大丈夫です」

はやてはぼつと出だがアマタに助力を頼み、リインフォースに戦えるかを確認する。

リインフォースは当然といった様子でリミッターのかかった状態のまま拳を握りしめる。

戦況は3対3の形をした1対1と2対2の戦いであった。それはそうであり、今初めて会ったキリエとマテリアルズ、アマタと夜天の主とその融合騎がコンビネーションを発揮できるわけもなく、お互いがキリエVSアマタのワンマン戦闘と、マテリアルズー1VS夜天

コンビという形になっていた。

その様子を周囲に空間投影ディスプレイを浮かばせて、なにやら投影キーボードを叩きながらレヴィは眺めていた。

——戦況はどっこいどっこいか。

レヴィは作業を行いながらその様子を眺めそのように評価を下した。

レヴィの分析では基本スペックでこちらのマテリアルズチームが勝っている。キリエと同性能のアミタはキリエに打ち込まれたウィルスが原因でフルスペックが発揮できていない。本来なら動けないはずの体を、お姉ちゃん^根パワー^性で動かしているのだから当然といえば当然である。なのでキリエVSアミタは圧倒的にキリエが優勢であった。

しかしその優勢を均衡まで底上げしているのがはやてであった。

本来広範囲型であるはやてであるが、コンビネーションの取れない仲間がいるためその強みが殺されている。しかしそれはディアーチエも同じであり、そうなるとその2人は大味の魔法ではなく小回りの利く魔法を用いる必要があった。そうすると有利なのはディアーチエではなくはやてである。

身体の使い方、生身の戦闘に慣れているはやての方が、生身の戦闘に慣れていないディアーチエより若干の余裕を持っていた。そしてその余裕をもってはやてはアミタの援護も行っているのだった。

——はやては1月だけ魔法の特訓をただけなのにかなり戦えるようになってる。

流石は夜天の書に選ばれるだけの才能はある、という事だろうか。『魔法少女リリカルなのは』の中核を担っているのは伊達ではない。

ただその戦況も前衛の均衡が崩れれば一気に崩れ去る筈であった。それを崩すのが今回レヴィの代わりに前衛を任されているシュテルの役目でもあった。

しかしそのシュテルも攻めあぐねていた。リミッターがかかっているとはいえ夜天の魔導書の管制人格。夜天の融合騎にして、闇の書

時代に直接的な振るった彼女ーリインフォースは伊達ではない。

守護騎士が過去の記憶を薄れさせる中、夜天の書の魔法収集ストレージという特性を活かすために膨大な記憶容量を持たされた彼女は、その持前の経験を生かしてシュテルを抑え込んでいた。

スペック上は有利であるはずのマテリアルズは、たった1騎のユニゾンデバイスの「戦闘経験」によって有利であるはずの戦況を同格までに持ち込まれていた。

「くっ！ つよいっ……」

シュテルがうめくように呟いた言葉を、近接戦闘を行っていたが故にリインフォースが拾う。

「伊達に長生きはしていないさ。それに貴様もつよい。それこそ高町なのはよりも中距離と近距離に長けている分オールラウンダー向きだ」

「……っ！」

なのはの名を出されシュテルの攻撃が苛烈になる。

「だがー！」

その攻撃はリインフォースに軽くあしらわれてしまう。

「熱意、才能、身体能力、思考速度、反応速度。どれをとっても十分どころか十二分にある。しかしどこか焦っているな。一見冷静に見える外見だが、その実心の内は焦燥に焦がれているな。それが隙となっているぞー！」

そしてあしらわれるだけではなく、手痛いカウンターも食らってしまふ。

「っあー！」

そんなシュテルを見てディアーチエが援護をする。

「下がれシュテル！ アロンダイト!!」

ディアーチエの言葉に従い下がったシュテルの隙間を縫い、リインフォースに向けて砲撃魔法が放たれる。

「リインー させへんで！ クラウソラスー！」

それを防ぐかのようにはやても砲撃魔法を放つ。

そしてリインに向かう砲撃魔法を堰き止めると、そうしてできた隙をリインが狙う。

「駆けよー！ ブラッティダガー！」

その言葉と共に大量に表れるのは深紅の短剣の群れ。それがシュテルとディアーチエに向かって走る。

「ちいっ！ やりにくいっただら無いな！ 仕方ないとはいえこうも同系統の魔法を使われると!! 行け！ ブラッティダガー!!」

負けじとディアーチエも迎撃のために大量の魔力で生み出された短剣を射出する。

「穿て、ディザスターヒート！」

魔法をつかってできたリンフォースの一瞬の隙を狙い穿つシユテルの砲撃魔法。

「甘いぞー！ ショートバスター！ 続けてサンダースマツシャー！」

しかし、それもまたリインフォースに防がれ、上回られる。夜天の書に刻まれたすべての魔法。その普通ではありえない大量の手札はリインフォースという頭脳によつて巧みに操られることによつて真価を発揮する。

はやてに夢を見せ、ナハトヴァールの活動を抑制し、レヴィのため以外の光景を映像に投影し続けながら会話し、その状態でなのはとフェイトの二人組と戦う。

普通の人間にはできないことを、考え動き、己で魔法を使うデバイスという特性を十二分に活用できるリインフォースだからこそその芸当。

その圧倒的な手札の前に戦況は一進一退を繰り返して、膠着していた。

しかしそれも終わりを告げる。

青い雷と共に。

「ぎゃあっー」

「アマタさん!？」

「主! 防御魔法、間に合え!!」

雲も無いのに降り注ぐ落雷に撃たれ、撃墜まではならないものほ
ぼ体力を持って行かれるアマタ。そのアマタに気を取られた事によ
りはやては自分で防御魔法を使うタイミングを逃し、なんとか射線を
遮ったリインフォースが自分に防御魔法を使用しながらはやてをか
ばう。

「さて、申し訳ないけど準備終わっちゃったからさ、王様もシユテるん
もそこまでだよ」

介入したのは準備のために傍観していたレヴィ。しかし準備が終
わればその限りではない。なにせ準備の時間稼ぎのための戦闘だっ
たのだから。

「さあ、そろそろボク達の目的が目覚める。始まるよ、最高で最低な戦
いがさ」

レヴィがそういうとディアーチエとシユテルは戦闘態勢を解きレ
ヴィに近づく。

「小鴉! この戦いは預けておくぞ! 我らが目的を成就した時、今
一度貴様との決着をつける!!」

ディアーチエははやてに向かいそう言うど背を向ける。

「まちなな! なにするかわからんけど危険な事は見過ごせへんで
!」

ディアーチエの背中にかけるははやての声を無視してディアー
チエは飛び出す。

「夜天の書の管制人格、リインフォース。あなたとはいずれ決着をつ
けます。私が私である事を証明したその次は、あなたです」

リインフォースを睨みながらそう言い放つとシユテルもディアー
チエのあとを追い飛んでいく。

「あ！ ちょっとまってよ王様あ!!　　ってことでアマタ！　　もう私の邪魔しないでよね!」

飛び出した二人を追ってキリエもアマタに言い残すと飛び出す。

残されたのははやて達とレヴィ。

「レヴィちゃん、一体何しようっていうの？　　フェイトちゃんも心配しとるし、私と一緒に一回帰ろ？　　な?」

「ごめんね、はやて。それはできないや」

はやての言葉を、首を横に振りながらレヴィは拒絶する。

「フェイトにも改めて伝えてくれるかな。『君はもう強いから。大丈夫だよ』って。じゃあね」

そう、一方的に言い残し飛び立とうとするレヴィをリインフォースが止める。

「レヴィ、君は、大丈夫だよ?」

「……大丈夫だよ。これはボク達の仲間の、家族のためだから」

それだけ言うとレヴィも3人の後を追い飛び立つ。

はやて達は、高速で離れていくレヴィをただ見送るしかできなかった。

G O D 編第2話 「C o n t a c t o f [U—
D]」

海鳴市。その名の通り海が臨める市で、大都市とは程遠いが市の中心は栄えながらも、自然とのバランスの取れた土地である。

そんな海鳴市からしばらく沖合に出た海の上空で二人の少女と一人の女性が空中に浮かびながら作業を行っていた。

「キリエ、調子はどうだ」

その中の一人で杖と本を携えた少女、ディアーチェが桃色の女性に声をかける。

「はいは〜い。こっちは順調よ〜」

「そうか」

「それにしても、まさかエグザミアが王様達みたいな女の子とはねえ……」

作業を続けながらも独り言をこぼすキリエ。それもその筈であり、彼女は自分の生まれた世界を救済する機械や、Oパーツのような物を創造していたのだから。それがただの少女であると知れば落胆もしよう。

「まあ、これから呼び起こすのはエグザミアのメインを司っているユーリを起こすだけだ。我ら紫天のマテリアルズ三基と、紫天の盟主であるユーリ・エーベルヴァイン。この四人が揃って初めて『無限連環機構』は完成する」

ディアーチェの言葉に続くのはマテリアルズの参謀役であるマテリアル—S、シユテル。

「ユーリが揃った我々に不可能などありません。完全なる人体を持たぬが故の無限に近い時間。エグザミアが齎す無限の魔力。そして我々三人のサポートがあればどのような事も成し遂げて見せましよう」

「ま、そういう事だ。事が終われば貴様の世界をまず征服してやる。今はタダ働きという事で少々心苦しいがな」

「いえいえ、まさか王様がここまで優しいとは思ってなかったから問題ないわよ。話を聞いた時は無駄足踏んだとも思っちゃったんだし、私達の世界を何とかできるかどうかかりができるなら十分よ」
キリエの言葉にディアーチェは大きく肯くと作業を進めるために再度集中する。

「ただいま」

そうして少々の時が経った頃、新たな少女が現れた。

「おう、レヴィ」

「おかえりなさい」

「どうでしたか、レヴィ」

ディアーチェ、キリエ、シュテルがその少女、レヴィを迎え入れる。
「うん。かなり多くなってる。邪魔になりそうな欠片は処理してきたけど、できるだけ早く事を終わらせたいね」

「うむ。そろそろ最終セクターに入る。何も無いが、少しだけ体を休めてろ」

「その方が良いでしょう。初回は様子見とは言え、エグザミアの本体、魄翼に加え無限の魔力を宿すユーリが相手です。こちらの最強戦力であるレヴィには万全を保ってもらう必要があるでしょう」

レヴィの報告に対しねぎらいの言葉をかける二人の好意に甘え、レヴィは休むことにしたのかお礼を言うと言空中で横になり目をつむる。

「さて、作業スピードを上げろ。邪魔が入る前にファーストコンタクトは終わらせたい」

ディアーチェの言葉により、空間投影キーボードを叩く音がより早くなる。

デイアーチエ達が沖合の上空で作業を続けている頃、レヴィの介入によりキリエ達を逃したはやては、アースラへ行動不能になったアミタを預けた後、レヴィの飛び去って行った方向へ飛び続けていた。「うん。そや。わかった。じゃあうちとリインフォースはこのまま先行しとるから、クロノくんはなのはちゃん達を頼んだで」

そうしてアースラのクロノへの報告を終えると、はやては側にいるリインフォースの方へ顔を向ける。

「ってわけでリイン。こちらは先行してレヴィちゃん達の搜索続行や」

「イエス。マイスター」

リインフォースに確認して、共に魔力を込め移動速度を上げる。

そうして数分探し回っていると、アースラからレヴィの魔力反応を見つけたと連絡が入る。

「よし、この先やな。素直に移動しただけで助かったわ」

「しかし、なぜ彼女たちは……レヴィまで、一体なにをしようとしているのでしょうか」

移動しながらの世間話としてか、純粹に疑問に思っただけなのか、リインフォースの言葉にははやては少し考える。

「せやなあ……レヴィちゃんの最後の言葉、普通に考えるとフェイトちゃんやらに關係しとるんやないかと思うんやけど……」

「ですが、先ほど突然現れた主似の少女、デイアーチエと言いましたか、あの少女はまるでレヴィが仲間であることを当然かのようにふるまっています」

「せやったなあ。それにわたし、レヴィちゃんに攻撃、されたもんなあ……」

はやてがレヴィに攻撃された事実を思い出し、落ち込む。そのはや

てに対してリインフォースはなんと口に出せば良いかわからず慌てるが、はやては持ち前の切り替えの早さで、気を持ち直す。

「ま、それももっかい会って聞かなあかな。なんや理由があるに決まっとる。あのフェイトちゃんの家族なんやから」

「そうですね、もう一度、今度は落ち着いて話を聞かなくてはなりませんね」

はやての口から出た名をリインフォースも思い出す。本当に心優しく、強い子であったと。

「さー！ あとちよつとや！ 気合入れて行くで！」

「はい」

気合を入れなおし、はやて達は飛ぶ。レヴィ達の目的を暴くために。

「さて、気合入れてるところ悪いわね。小鴉ちゃん。ここから先は進入禁止よ」

レヴィの魔力に向かって移動を続けていたはやての達の前に進行方向を遮るようにキリエが現れる。

「お姉さん、それはわたしの言葉やで。今お姉さんには無断次元渡航の上公務執行妨害まで罪状まみれやで」

「まあ怖い、でもちよつとだけお姉さんに付き合ってくれないかしら。ホントに、この先は危険なの。邪魔されたくないとかじゃないわ。100%善意からの言葉よ」

珍しく間延びのない真剣な口調のキリエにはやても何かを感じ取る。しかし、それでもはやては進まねばならない。

「申し訳ないですけど、それはできませんわ。私は友達のためにレヴィちゃんしばいて連れてかなアカン」

友達―フェイトとレヴィーのために、レヴィを連れて行って事情を聴く。自分たちが手伝えるなら手伝って、その後は大人からお説教を

してもらえればお終いであるのだ。

「そ。それは残念。だけど、ありがとねお姉さんのお喋りに付き合ってもらって。もう十分よ」

キリエがそう言った瞬間に周囲の空気が変わる。位相がズレる。

「これは!?!」

「主、結界です」

はやてもその空気を感じとり、リインフォースはその原因を突き止める。それと全く同時にアースからはやてに通信が入る。

『はやてちゃん!』

「エイミィさん。結界に閉じ込められちゃいましたわ」

『それはごっちゃんも観測してるけどそうじゃないの!』

通信からはエイミィの焦った声が響く。そしてキリエは武器を構えているがはやてに対しては敵意がなく。あくまで注意はキリエの後ろ、はやての目的地であるレヴィ達が居るはずの場所へと注がれていた。

そんなキリエに対して向けていたはやての意識は、エイミィからもたらされた言葉でそらされる。

『特大の魔力反応がはやてちゃんの前! レヴィちゃんがいる場所から観測されてる!! ヤバイよ! 正確にはナハトヴァールくらいヤバイ!!』

「はっ。」

キリエに向けていた意識がそらされる。いや、キリエに意識を向ける余裕すら無くなる。

「ナハトヴァール級、つまり暴走した闇の書私と同じ?」

「違う!」

隣にいるリインフォースのつぶやきにはやては条件反射で叫んで

いた。

「ナハトヴァールとリインフォースは違う！ あれはリインフォースが望んでやった事やないやろ！」

「……そう、ですね。申し訳ありません、主はやて」

「さて、始まつちやったし。本当に進まない方が良いわよく。つて言うかここからでもその理由わかるだろうし、それ見てからでも決めるのは遅くないんじゃない？」

キリエの言葉と視線につられはやて達もその先を見る。

そこには『闇』が広がっていた。

「さあ。キリエは小鴉の足止めに向かった。始めるぞ」

「やつとはじまるね」

「我ら悲願の叶う時」

キリエに危険だからとはやての対処を任せた後、ついにユーリを呼び起こす準備が整った。

闇の書の真なる闇、砕けえぬ闇、永遠結晶エグザミア、魂魄の翼。ユーリを表す言葉は数多くあれど、マテリアル達にしてみれば最後のピースであり、家族であり、存在理由である。

「我らが盟主を呪縛から解き放ち」

「ディアーチエは言いながら紫天の魔導書を起動する。」

「私達の家族を取り戻す」

シユテルも言葉を紡ぎながら多数の魔導式を起動する。

「おはよう、『砕けえぬ闇』。おはよう、ユーリ。悪い夢から目覚める時間だよ」

そしてレヴィもそう目の前の少女に言い放つ。

三人の目の前には『闇』があった。

『人の形をした絶望』がそこにはあった。

「なぜ……わたしを……めざめさせてしまったのですか……」

最悪の存在
ユーリが口を開く。

「我等のため、そして貴様のためよ」

独り言であつたつぶやきにディアーチエが答える。

「私は……目覚めたくなんて、なかったのに……」

「安心してください。その苦しみは今日で終わりです」

シユテルは言いながら魔導式を走らせ続ける。攻撃のためではない。しかし、勝つために必要なモノである。

「ああ、もう抑えられない。私は『私』が抑えられない！」

細い腕でその華奢な身体を掻き抱くユーリの背中からエネルギーの翼が生える。そしてそれは大きさを増し、質量を増し、巨大な腕となる。本体の小ささと反比例するかのような巨大で禍々しい腕。それはユーリの意思に反し、猛然と三人に襲い掛かる。

「だから、ボク達が居るんだ」

その双腕は阻まれる。

2本の雷剣に。
一つの蒼雷に。

たった一人の少女に、受け止められる。

「ユーリ、君を助けるよ」

バルニフィカス・ツインブレイバーで魄翼の腕を受け止めながら、
レヴィ・ザ・スラッシュヤー
マテリアル―Lが闇の書の真なる闇の前に踊りでる――。

スピリットフレアによって形造られた巨腕と蒼雷によって形作られた双剣が交差する。

魔力に物を言わせた圧倒的な出力と、魔力に物を言わせた圧倒的なスピード。

その対決では、一見、スピード——レヴィが有利に思えた。

——全然、攻撃が通らない事を除けば、ね……。

レヴィはその素早さによりあらゆる攻撃を回避し、受け流しながら攻撃を加えていた。

しかし、その攻撃もすべてが無意味であった。

対U―D戦を想定して無理いつて習得させてもらった御神流。

その技の中に「徹」と言われるものがある。

攻撃の衝撃を表面ではなく内部まで「徹」し、ダメージを与えると

いう技術。武術などでは「裏当て」「遠当て」などと呼ばれる技である。

これを魔導師戦に用いた場合、とても凶悪な技になる。

なにせ表面、バリアジャケットを素通りし、直接本人にダメージを与える事ができるのだから。つまりバリアジャケットに始まるバリア系統の魔法を、全て無効化できると言う事になる。

そしてこれは、U—D^{ユール}の無限の魔力による暴力その1である、圧倒的なまでの防御力を無意味にできると言う事だった。

しかし、それを自由に使えればここまでレヴィも苦勞はしない。それが自由に使えないからこそ、ここまで相手にダメージと言うダメージを与えられずにいた。

御神流は魔力が無い世界の戦闘技術である。それすなわち、使用者が空中に浮いているという状況を想定していないと言う事でもある。

そしてそもそも武術と言うのは地に脚がついている状況を想定する動きがほとんどであり、少ない動きで最大の威力を発揮する発勁も、踏込によつて生まれた力を、身体を伝い伝達する事が重要である。

つまり、人間の近接攻撃と言うのはすべからず地に足がついている事を前提にされている事がほとんどなのだ。

これはミッドでも行われる格闘大会を見ればわかる通り、格闘大会では空戦魔導師は出てこない。それは空を飛んでは、満足な打撃が放てないからである。

故に魔導師の花型の空戦魔導師は射撃系がほとんどであり、フェイトのように空戦で近接攻撃の威力を増したければ、遠心力を利用する大振りな動きになりがちである。

これは、シグナムやヴィータの空における戦闘方法を観察すれば、ミッドもベルカも関係ないことがわかる。

故に「徹」をするためには地に足を付けなければ満足に扱えない。しかしここは上空。降下しても海があるだけで地面などない。

ならばどうするか、簡単な事である。

地面を作れば良い。

自分の足場を魔法で編み出し、それを踏み込み、技を放てばよい。しかしそれをするにはレヴィの躯体は相性が悪かった。

元来細かい魔力操作などを行う事が想定されていない
カのマテリアル
マテリアル―Lはそれゆえに強い。

躯体の素の性能は高いし、魔力の出力も大魔法を扱うマテリアル―Dと同程度かそれ以上に高い。

単純故に強い。それがマテリアル―Lのコンセプトであり、強みである。

しかしそれゆえに、マテリアル―Lは「技」との相性が悪かった。

根本的に技術を扱うと言う繊細さと精密さに欠けていた。

マテリアル―Lであるレヴィだが、時間があればどうにかできた。ヴォルケンリッターと違い、「成長」が可能なプログラムであるマテリアルズは、苦手な事でも熟練度を高める時間があればどうとでもなった。

特に学習能力が極めて高いレヴィならなおさらだ。

しかし今回は時間が無かった。レヴィが躯体を得てからまだ1月もたっていない内にマテリアルズは起動し、ユーリは目覚めた。

あまりにも時間が足りなかった。

もしくはU―D砕けえぬ闇に大きな隙があれば使えた。熟練度の足りていない状態でもレヴィの踏込みに耐える強度の足場を作り、そこを踏み込み技を放つ隙があれば。

故にレヴィはユーリの奮闘によって生まれる大きな隙を狙って、足場を作り「徹」を行う以外にダメージを与える事ができなかった。大きな隙と言っても現在のレヴィにとっては足場を作り「徹」の一撃を与えることが精一杯であり、そうして与えたダメージも莫大な魔力に

よって回復されてしまう。

たとえダメージを与えられても、回復を上回る高火力を高頻度で放てないのであれば砕けえぬ闇に勝てる可能性は0であった。

故に、この戦闘でレヴィが勝てる道理は無かった。

しかし、今回のレヴィの勝利条件は勝つことでは無い。時間を稼ぐことである。

今シユテルとディアーチエが全力で取りかかっている解析の魔導式によってユーリ、U—D砕けえぬ闇を解析し、圧倒的な防御力を打ち破る打開策を生み出す。

それまでの時間が稼げればよかった。

「ぐう、あああああああああああああああああつ!!」

ユーリが咆哮と共に巨腕を拡散し、魄翼へと、純粹な魔力による炎の状態へと戻す。

そして、自身の周りを飛び回る、鬱陶しい羽虫レヴィを360度隙間なく発生させた衝撃波により吹き飛ばす。

「つうー!」

流星の超スピードでも全方位に放たれた衝撃は避けようがなく、レヴィは防御魔法を展開しながらも、それごと吹き飛ばされ強制的に距離をとらされる。

速度が速く攻撃が当たらない相手に攻撃を当てるにはどうすればよいのか。方法はいくつかあるだろう。

一つは相手を上回る速度を出すこと。

二つは相手の攻撃の瞬間にカウンターを入れること。

三つは相手の動きを止めること。

U—Dが選んだ方法はそのどれでもなく四つ目。

避ける隙間を与えない面制圧

「これは、ヤバいでしょ!？」

視界をすべて埋め尽くす魔力の壁。

無限の魔力によるごり押し of 極致。避ける隙間のない魔力によって作られた壁。それが高速で迫ってくる。

誘導は無い。そんなものは必要ない。

ただ早く、ただ広く、ただ強力に。

必ず殺す。その意思を感じられる暴力の極致。

まるで彼の大魔王様のごとき暴力にあやかり名を借り名づけるのなら。

『カラミティウォール』

その圧倒的な災厄の壁に対抗するためにとっさに選んだそれは、自身が習得し改良し編み出した最も信頼のおける『強化魔法』。

「神、速！」

思考速度を強化する――。

反応速度を強化する――。

身体速度を強化する――。

自身のあらゆる性能を底上げする強化魔法の極致。もう一つの暴力の化身。

今までの速度をはるかに凌駕する速度で動く。

今まで見せなかつた速度は流石に計算に入れられていないのか、カラムティウオールが迫る速度を大きく上回り、迂回する形で回避する。

その速度にU—Dが慣れる前に近づき、一撃を加える。

——魔力により地面を生成！ 速度を殺すために強く踏み抜き生まれたエネルギーを、脚、腰、胴、肩、腕、それらを連動させ剣先へと伝達！

レヴィの必殺の意思に連動してバルニフィカスが変形する。奥手その2。この日のために未来から先取りしたバルニフィカスの第4形態。いや、新たな第3形態。

バルニフィカス・デイオスブレイバー

未来のフェイトの用いるバルディッシュのリミットブレイク、ライオットザンバーを参考に御神流を使いこなすためにチューンナップしたフォーム。

元来大味を好むマテリアル^レ—L^{ウイ}の好みとは正反対の細身の小太刀であり、参考元のライオットザンバー・ステインガーより短く細身であり、御神流を用いることにのみ特化した形態。

デイオスブレイバーに変形したバルディッシュを両手で握りしめ、同時に作成した足場を強く踏みしめる。

神速によって生み出された速度を一瞬で0にするほどの強力な制動力によって生まれたエネルギーを、螺旋のように身体を伝達させる。

武術というものは突き詰めればどこも似たような技術にたどり着く。

レヴィの行った力を伝達させる技術は、古代ベルカのとある流派の極致に瓜二つであった。

そうして伝えられた力、強化されたマテリアル『力』のマテリアル—Lでなければ体が耐えられないほどの力は、ある動作によってU—D砕けえぬ間を穿つ。

刺突。それは、剣の基本動作の中で最も避けにくく、最も殺傷力の高い動作。

「奥義之参……『射抜』！」

踏み込みによって生み出されたエネルギーを右腕に伝達させ突き出す。

そして剣先がU—Dのバリアフィールドに接触する瞬間、その衝撃をズラす。

神速を使い体感時間が加速した今のレヴィであれば、御神流の奥義と基礎技術の「徹」を同時に行う事も可能となっていた。

「つがぁッ」

強力な一撃がU—Dユ—リに通る。防御壁をすり抜けた一撃が刺さる。

しかしレヴィは止まらない。

たった一度の単純な突きであればわざわざ奥義などとは言わない。

自分の生み出した疑似的な地面を強く踏みしめながら足をひねる。

脚を伝う——。

腰を伝う――。
胴を伝う――。

身体の捻りと共に、突き出した右腕を後ろに戻しながら左腕を突き出す。

肩を伝う――。
腕を伝う――。

最小の動作で生み出されたエネルギーが、身体を伝うことで最大のエネルギーへと増幅され、放たれる。

二撃目の刺突が穿たれる

御神流奥義之参・『射抜』。

それは最速の突きを放つ超高速連続突き。突きを行った衝撃が抜け切る前にもう片方の小太刀で二撃目を放ち、二撃目と同時に一撃目を引くことで連続での攻撃が可能の、基礎を突き詰めた故の奥義。

レヴィによって一撃が唯人であれば必殺の威力を持つ刺突が連続で放たれる。

三度目が放たれる――。

四度目が放たれる――。

五度目が放たれる――。

六度目が放たれる――。

七度目が放たれる――。

八度目が放たれる――。
「るあああああああああああああああつ
!!!!!!」

突きが連続で炸裂する音は、通常の時間に過ぎず者からしたらまるでマシンガンの如し。

一瞬の隙を狙い、最大のダメージを叩きだす。

普通であればすでに決着はついていた。

相手はまるでマシンガンに撃たれたかのように、ハチの巣になり無残な死体を晒しているはずだった。

しかし相手は^{最悪の存在}砕けえぬ闇。

原作において、未来からの迷い人を含め約20人の一線級魔導師が束になってやっと制御プログラムを打ち込む隙を作ることしかできなかった原作屈指の最強キャラ。

その力は伊達ではなかった。

ガ　　オ　　ン

そんな擬音が聞こえる程の強い衝撃がレヴィのいた空間を薙ぐ。

身体への痛みを、衝撃をすべて無視して、スピリットフレアによって形作られた巨腕がレヴィのいた空間を薙ぎ払う。

「っはあ、はあっ」

神速を維持したまま射抜による連続攻撃を行っていたレヴィは、死角からの攻撃すら見切って避けると同時に少しばかり距離を取った。

神速の世界にいたレヴィにとって死角外であろうと認識できなければ通常より遅い攻撃であるため、避けること自体は造作もないこと

であった。

神速を維持し続け高速での連続突き、そして気配を感じ取るという技術により、常に反撃を警戒していたレヴィは、一先ず神速を解除しなくてはならない程に疲労していた。

従来の身体強化を凌駕する圧倒的な強化率によって生み出される速度。その速度に認識を追いつかせるために思考速度、反応速度など頭からつま先までのあらゆる部分、あらゆる性能を強化する『強化魔法・神速』は本来長時間使い続ける魔法ではなく、使った時は勝負を決める時である事が理想だった。

——自分以上の相手に対して神速を使うのは、大変なんだなあ……。

まだ神速の段階は一段階。重ね掛けをしていない状態でこの疲労。これも一重にレヴィの経験不足、強敵との経験が不足している事が原因であった。

予想以上の疲労に一周回って頭は冷静であった、というかマルチタスクの一部が壊れたのか変な感想を抱いていた。

たった一人の魔導師に予想以上のダメージを与えられたからか、砕けえぬU—Dはこちらを敵として認識したらしい。

ユーリは体を掻き抱き、内側から溢れ出る衝動を必死にとどめようとしているが、その意思に反しエグザミアが出力を上げているのか、ユーリの体表に赤いラインが現れる。

「マテリアル—L……その力なら……。でもダメ、まだ、私には届かないっ！」

魔力の供給が増えたのか、魄翼の腕が一回り巨大になる。与えたはずのダメージが即座に回復していく。

——こいつは、ジリ貧だなあ……。

個人としては大量の魔力があれど、相手は無限の魔力製造機の持ち主。有限と無限。その差は歴然としていた。

「(シユテるん！ 王様！ まだ時間かかりそう!?)」

振るわれる巨腕。逃げ場をふさぐようにばら撒かれる魔力弾を回避しながらレヴィはU—D^{ユリ}を解析している残りのマテリアルに向かって念話を飛ばした。

「(すまんがもうしばし耐えてくれ!)」

「(現在解析率70%を突破しました。流れ弾の処理もしつつですの
で、予想より時間がかかっています。申し訳ありませんが、今しばらく耐えて下さい!)」

「(あーダメダメ！ 解析と念話と流れ弾処理とか王様ツライ！
アーツ！ ユーリの魔力弾しゅごいのおおおおおつ強すぎる
のおおおおおお)」

「(王が頭おかしくなってるので念話終了します!)」

手助けは求めていなかったが、あちらはあちらで中々大変らしいと言っただけはわかった。あの自分のキャラにこだわるディアーチエが、変な事を念話してくるくらいには大変らしい。

「もう、私にカマワナイデー!」

したくもない破壊、行いたくない暴力を振るいながらU—D^{ユリ}は悲痛な叫び声をあげる。

「悪いけど、もう少しだけボクと付き合ってもらおうよ!」

レヴィはユーリにそう語りかけながら射撃攻撃はせずに高速で飛び続ける。

射撃攻撃は魔力の無駄遣いだから行わない。しかしU—Dがこちらを取るに足らない相手だと認識しないように、自分だけに攻撃の意思が及ぶようになるべくダメージを与える。

あと少し、もう少し耐えるだけでこちらの反撃の手筈は整う。

「レヴィっ!!!」

不意の邪魔が入らなければ。

「!？」

聞き知った声、この場では聞きたくなかった声を聞きレヴィの動きが一瞬止まる。

そしてそれに反応したのはレヴィだけではなかった。

戦闘空域に急に表れたそれにユーリも反応した。してしまった。

U—Dの反応、それはすなわち、破壊行為となってそれを襲う。

「フェイトオ!!!」

神速を、極限の神速を発動する。
神速の重ね掛けを行い、驚異的なスピードを得てレヴィは飛ぶ。

それでも、レヴィしか見えていなかった、レヴィ以外のすべてが意識の外にあったそれを、
p > < r t
U | D < / r t > < r p > (< / r p > < / r u b y > の暴虐から
庇うことしかできなかった。

「っがあっ」

激痛によって出たうめき声と共に血飛沫が舞う。

レヴィの腹を貫いていたのはユーリの腕から延びる魔力の杭。

スピリットフレアによって形作られたそれは、レヴィに燃えるような熱さを覚えさせる。いや、実際にその杭は燃えている。なにせスピリットフレアによって作られているのだから。

「れ、レヴィ……」

周囲が見えていなかった、レヴィしか見えていなかったフェイトの視界に、急に自分の目の前にレヴィが現れたかと思うと、自分を庇い貫かれたレヴィが映る。

「あ、ご、ごめんなさい……。わたし……。ちがうの……」

そのあまりにもあまりな光景に錯乱するフェイトを、レヴィは杭から無理やり脱出すると弱弱しく抱きしめる。

「フェイトが無事で、よかったよ——」

「あ、ああ」

『あああああああああああつ!』

絶望の空に複数の叫び声が響く。

一人は自分の過失で最愛の家族に大けがをさせてしまったフェイト。

もう一人は自分の意思ではなくとも、自分の家族を貫いてしまったユーリ。

「私は、わたしはあつ!」

そう叫びながらユーリは己の頭を抱えると転移魔法でその場から姿を消す。

そして絶叫を上げた最後の一人は――。

「フェイト、テストロツサアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

絶望の光景の元凶に、恨みの言葉を叩きつけた――。

GOD 編第3話 「Briefing of [Ar
thra]」

「フェイト、テスタロッサアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
慟哭が響く。

ユーリ^{UURID}が転移によって姿を消した上空は恐ろしいほどに静まり、先
ほどまでの激闘の痕跡すらない。

いや、痕跡はあった。自分と瓜二つの少女を抱きかかえるフェイト
の腕の中に。

「いや、いやだよ……レヴィ……」

フェイトはただ震えることしかできなかった。現実が直視できな
かった。自分の最愛の家族が自分のせいでこのような姿になってい
るのだと信じたくなかった。

「フェイトオ！ 離れろ！ レヴィから離れろ!!」

静かなはずの空に慟哭を上げるシュテル。意気消沈としている
フェイトとは対照的に、彼女はいつもの様子からは想像もできないほ
どに怒り狂っていた。

「落ち着け！ シュテル！」

今にもフェイトに掴み掛りそうな勢いのシュテルをダイアーチェ
が羽交い絞めで抑え込む。

今のシュテルは抑え込まれている事にも目もくれず、怒りに我を忘
れて暴れていた。

「なんやけつたいな事になつとるな」

「ほらほらく、シュテルちゃんも落ち着いてね」

そんな状況に、離れた場所から戦闘を見守っていたはやとキリエ
が駆けつける。

「小鶉！ 貴様はまずレヴィの方を」

「わかつとる。ラインがもう応急処置始めとるよ。アースラにも連絡入れたから、直ぐにでも跳べるで」

「背に腹は代えられんか。キリエ！ シュテルを落とせ、一回頭を冷やさせる」

はやての言葉にディアーチエは素直にうなづくときリエに指示をだす。

「はいはい」

ディアーチエの指示を聞くと、即座にキリエは自分の武器の銃床でシュテルの後頭部を強く殴りつける。

「さて、うるさいのも黙ったし、レヴィもそちらに連れていかれた。早く貴様の拠点に連れて行ってもらおうか」

「なんや不気味なくらい素直やな」

素直にうなづいたディアーチエにはやては怪訝な顔を浮かべながら、転移魔法の準備をする。

「こちらにも事情があるのだ。詳しいことは人を集めてから話す。何度も説明するのも手間だしな」

「まあわかったわ。それじゃあ跳ぶで」

納得しきれていないが、重要参考人がついて来てくれるというのは文句も無く、はやてはディアーチエと気絶したシュテルを抱えたキリエを連れ、アースラへと転移した。

アースラへと転移したディアーチエ達を待っていたのは当然、アースラ付き執務官であるクロノ・ハラオウンであった。

「さて、ロード・ディアーチエだったか。早速だが君たちについて、そ

して君たちが戦っていたあの少女について話してもらおうか」
広々とした一室に人が集められディアアーチエに対しての事情聴取が行われる。

クロノとディアアーチエの他に同席しているのは、同じく参考人であるキリエ。意識を失っているシュテル。記録官として執務官補佐のエイミイ。ディアアーチエ達を連れてきたはやとリインフォースとなっている。

「ふむ、まあ長くなる故、こちらの話が終わるまで質問などは控えていただきたい」

ディアアーチエの言葉にクロノが頷くのを確認し、ディアアーチエは語りだす。

自分たちが闇の書に囚われていたエグザミアの構築体^{マテリアル}であること。現在現れている、やたらダウンナーな魔導師達は、自分たちの復活に合わせて現れた闇の書の蒐集データの残滓であること。自分たちが戦っていた少女、ユーリの事。エグザミアとはなんなのか。

それらを一通り語り終えるとディアアーチエは一息つく。

「んう」

そのタイミングでちょうどよくシュテルが呻き、目を開く。

「おお、目が覚めたか、シュテル」

「王……ここは……っ！ レヴィは!?!」

そういいながら勢いよく体を起こすシュテル。そのシュテルに対しはやてが声をかける。

「レヴィちゃんなら無事やで。今は医務室でよう眠つとる」

「……八神はやて……それにクロノ・ハラオウン。そうですか、ここはアースラですか」

シュテルの視線を受けディアアーチエが説明を始める。

「レヴィも緊急とは言えここに連れられ、貴様は錯乱していた。あの

状態ではここに来ないのはむしろ悪手だった」

「……」

ディアーチエの言葉で自分の醜態を思い出したのか、シュテルは苦虫を噛み潰したような表情をしながらディアーチエから視線を外す。まっすぐ見つめてくるディアーチエがまるで自分を責めているように、直視できなかつたのだ。

もちろん、ディアーチエはシュテルを責めるつもりはない。

「この状況では仕方がない故、事情を話し協力を仰ぐつもりであった。今こちらの状況と事情。我々が何者なのかの説明を終えたところだ。貴様もわかつていよう。小鴉達の手を借りた方が余程事は上手く進むはずだと」

「ですがっ彼らはー！」

「確かに、我等の事情に他者を巻き込むのは心苦しいが、もうそういう状況ではないのだ。想定外の事とはいえ、レヴィは現在戦闘不能になり、ユーリも見失った。それにまだ対抗プログラムも完成していない。このまま三つ巴を続けていけば最悪の状況になる可能性すらある。故に我々は現時点より時空管理局巡航艦アースラ乗組員、および囑託魔導師に協力を要請する。まあ、虫のいい話ではあるが、な」

ディアーチエの言葉は合理的であり、確かに最初のシュテルの献策は非合理的であった。いくら事情があろうと、少なくともレヴィと交友のある現地の魔導師たちには話を通しておくべきであった。

シュテルもそのことに気付いているがゆえに、ディアーチエから視線を外したまま、ディアーチエの言葉に頷く。

「わかり、ました。王の御言葉のままに」

「うむ。キリエも、それでよいな」

シュテルの言葉に応用に頷くと、ディアーチエはキリエにも確認を取る。

「まー、しようがないって感じよね。あー、やだなー。アマタに怒られるんだらうなあ……」

自分を待ち受ける未来を思い浮かべ、キリエも肩をすくめながら大きくため息をつく。

「さて、こちらはそんな感じだ。話を中断させてすまなかつたな」
「色々聞きたいことがあるが、まず、こちらに協力を要請する、というのは」

「うむ。まあはつきりと言えば我等、ユーリ、貴様等の三つ巴の状況になつてしまえば、全てユーリに蹂躪されて世界が滅びるだけだ。そして我等紫天のマテリアルズを1基でも失えば、ユーリを止めるには存在する世界諸共虚数空間に吹き飛ばすしか方法はない。絶対に破壊で き ない 闇 の 書 の 真 なる 闇。 故 に Unbreakable-Dark」

「つまり、僕達は君たちに協力するか、さもなければ彼女が地球にいる内にアルカンシエルを打ち込まないと行けない、ってことか」

クロノのその言葉にディアーチェは意地悪そうな笑みを浮かべる。
「アルカンシエルでユーリが破壊できるなら、な」

ディアーチェのその言葉にクロノはディアーチェを睨みつける。
そうしてしばしにらみ合い続ける二人の間に、空気に耐えかねたのかはやてが割り込む。

「まあまあ！ わたし達としても地球毎吹き飛ばされるのは止めて貰いたいし、一先ずなんとかできる手段があるなら手を取りあおう？ ない？」

はやての言葉にディアーチェは笑みをより深くし、対してクロノはあきらめたように大きく息を吐いた。

「はっはっ！ 小鴨にしては大局が見えているではないか」

「まあ仕方がないだろう。元からアルカンシエルは最終手段だ。使わないに越した事は無い」

二人のその言葉にははやては明るい笑みを浮かべクロノとディアーチェの手を取り、重ねあう。

「ほなこれからは仲間ゆうことで、よろしくの握手！」

「よろしく頼むぞ、執務官殿」

「よろしく頼む。闇統べる王」

はやての言葉で二人とも笑みを浮かべながら手を握り合う。

「さて、話も纏まった所で早速対策を、と言いたいがその前にレヴィに
合わせてくれんか」

手を放すとディアーチェは立ち上がり、体を伸ばしながら言う。その
言葉にクロノは少々乗り気ではない口調で答える。

「それは別にいいが、なるべく早く方針や作戦を詰めた方がいいのだが……」
「そう急ぐな執務官どの。しばらくは転移したユーリの捜索と闇の書
の欠片の処理に追われることになる。その間にユーリをどうにかす
る手段を用意する必要がある」

「王、そこらは私にお任せを。想定外の乱入によりデータは少々足り
ませんが、それは時間、もしくはアースラのスタッフを借りれば十分
挽回が効きます」

ベッドから立ち上がりながらそう言うシュテルの瞳には理知の光
が灯っており、気絶させられる直前の狂乱はかけらも見当たらない。
「よし。シュテルも調子を取り戻したようだし、ユーリをなんとかす
る手段はこちらで用意できよう。しかしそれもレヴィがいてこそ、
だ。ゆえにまずはレヴィを起こすぞ」

ディアーチェは一方的にそう言い放つとクロノたちを置いて、部屋
を後にする。

「おい！ 勝手に話を進めるな！」

立ち去るディアーチェの背中に向けてクロノが声を荒げるが、その
隣を通り過ぎるように人影が移動する。

「それでは私も先に失礼させていただきます、ハラオウン執務官」

「わたしも先にいつとるよ」

「すまないな、執務官殿。先へ行っている」

「若いころからそんなプリプリしていると苦労するわよ。じゃあね
」

順にシュテル、はやと車いすを押しリインフォース、そしてキリ
エが、各々クロノに一声かけるとディアーチェの後を追うように、部
屋を後にする。

「くそっレヴィに関わることは碌なことがない！」

そんな本来ホームのはずのアースラで不当にぞんざいな扱いを受

け、クロノは悪態をつきながらも先に歩いて行った少女らを追い、速足で医務室へと向かうことにした。

ディアーチエを先頭にした一行が医務室へ赴くと、中からはかすかに人の話し声が聞こえてきた。

それに構わず、ディアーチエが扉を開けると、そこには眠っているレヴィを挟みながらも、明るく話すアミティエ・フローリアン——アミタと、フェイトの姿であった。

「……」

その光景を前に無表情であるシュテルの顔が少し歪む。それはディアーチエぐらいでしか感じ取れないわずかな変化だったが、不機嫌になったシュテルが醸し出す雰囲気ガラリと変わった。

それに気づいたからか、はたまたディアーチエが開けた扉の音に気付いただけか、扉に背を向けていたフェイトが振り向くと同時に、表情を暗くさせた。

シュテルを見慣れていないフェイトですら感じれるほどに、今のシュテルからは不機嫌なオーラが漏れ出していた。

「あ、えっと」

「なにか」

口を開こうとしたフェイトに対してシュテルが強い語気で応える。その対応にフェイトはシュテルから顔をそらしうつむいてしまった。

——のは一瞬で、すぐさま顔を上げると、先ほどまでとはうって変わって困ったような苦笑を浮かべながらフェイトが口を開く。

「まあそう怒らないで上げてよ、フェイトも反省してるしよ」

その瞳は本来のフェイトの紅色の瞳ではなく、澄み切った快晴の空のように鮮やかな青色になっている。

「ほら、レヴィこう言っているのだ。そう目の敵にしてやるな」

そう。フェイトではなく、レヴィがシュテルに言葉をかけるのに乗じて、ディアーチエもまたシュテルに声をかける。

「ええ。わかっています。これから協力体制をとる中で不和は起こさない方がよいと理性では理解しています。ですが、度し難いですね。私はこれほど自分の感情が手に余るとは思っていませんでした」

ディアーチエにも散々言われ、被害を受けた本人であるレヴィですら許しているのに、自分だけがフェイトを許せないでいる。そんな本来人として当然であるはずの反応が、人ではない、マテリアルであるシュテルにとつては理解に苦しむ反応であった。

「ホントに、ごめんなさい！」

目の前の金髪の少女が大声をあげて頭を下げる。

頭を下げているが故に瞳の色はうかがえないが、雰囲気から察せる。いまの謝罪はフェイト本人のものである、と。

そうして頭を下げ続けるフェイトの頭をシュテルは一睨みすると、大きく息を吐きだして肩の力を抜く。

「わかりました。今は個人の感情より全体の利をとりましょう」

その言葉に反応し顔を上げるフェイト、その表情はすこし明るい。「しかし！ あなたの蛮行のせいで我々の計画は頓挫し、ひいてはレヴィを失ってしまった可能性すらあるのです！ それは努々忘れないうようにしてください！」

「うん。それに関しては本当にごめんなさい。本当に、周りが見えてなかったから。もう2度と起こさない」

その言葉を放ったフェイトの瞳には理知の光が宿り、凜とした雰囲気を感じる。

「なら良いです。申し訳ありません、王。それに執務官殿も。個人の事情に突き合わせてしまいました」

自分とフェイトとの確執のせいで、短くない時間クロノやはやて達を入口で立呆けさせてしまったことにシュテルが謝る。

「いや、構わない。後々の懸念を解消しておくのは大事なことだ」

「せやせや。みんな仲良くが一番やしな」

謝ったシュテルに快く答えながら、クロノとはやても医務室へと入

室する。

そうして、全員が眠っているレヴィ（の体）の周りに椅子を持ち出し集まることとなる。

隣のベッドにアマタ。

そのそばにキリエ。そしてそれからレヴィを囲むようにディアーチエ、シユテル、はやてにリインフォース、クロノにフェイトと、騒然たるメンバーが医務室にあつまっていた。

「正直手狭だな……」

「ま、まああれだしようがなからう！　まだアマタも復調しておらぬしな！」

クロノがつぶやいた言葉に各々が心の中でうなづきつつ、医務室へ誘導したディアーチエは少々焦ったように言い訳をする。

しかしその言葉に誰もが反応しなかったのを感じ、おおきく咳払いをし無理やり空気を変えた。

「さて、まずは今後の方針の前に、我らの計画を話しておこう。ユーリ・エーベルヴァインを正常に戻し、我らが無限連環結晶エグザミアを完成させる計画を……」

空気をなんとか変えたディアーチエは語る。自分たちマテリアルの目的とそれを達成するための方法を。

1、U—D復活に合わせて準備を進めてきた解析をかけている間、レヴィがU—Dの足止めおよび戦闘方法の確立を行う。

2、U—Dの防御プログラムの解析が終了したら、ディアーチエとシユテルは即座に戦線を離脱。レヴィが足止めを行い、機を見てレヴィも離脱。

3、U—Dからつかず離れずの位置にて、解析した防御プログラムを弱体化させるウィルス、および突破するための強化プログラムを作成し、3人にインストールを行う。

4、万全の状態を整え、ウィルスプログラムを打ち込んでから、全力をもって即座にU—Dを鎮圧。ディアーチエが紫天の書に保管さ

れているエグザミアの制御プログラムを打ち込み、ユーリ・エーベルヴァインを紫天の盟主として再登録し、正気を取り戻させる。

「以上が我らの計画の概要だ。最大の障害は最終段階の即座にU—Dを鎮圧、という箇所だったが。この状況では上手く進むことができればそれも改善できよう」

そこまで言うとき、デИАーチエは少し息を吐き、一心地つく。

「なるほど、つまり僕らに求めているのはその最終段階での戦力というわけか」

「ええそうです。このアースラに我らが解析した防御プログラムのデータを貸与すれば、強化プログラムを我らの数以上に量産することも可能かと思えます」

デИАーチエの話聞き、即座にアースラが求められていることを導き出したクロノの言葉をシュテルが肯定する。

そして、戦闘力だけではなくアースラという『拠点』としての力も、利用できるはずだと添えて。

しかし

「だが」

そこで、デИАーチエが再度口を開く。

「そもそもしてまずはレヴィの躯体を万全にする必要がある」

つよく言い放ったデИАーチエの言葉にはやてが疑問を挟む。

「言わせてもらおうけど、レヴィちゃんはかなりの重傷やで？ 特異能力で今はフェイトちゃんに意識を移動させとるみたいやけど、体の方はそんな簡単に治るもんとちゃうで？」

「主はやて、お言葉ですが彼女たちならば可能かと」

そんなはやての疑問にリインフォースが答える。

「彼女たち——マテリアルズはいわば守護騎士プログラムと同じ仕組みなはずです。いわばプログラム生命体。であれば一度躯体のデータを破棄し、再構築しなせば守護騎士達のように万全の状態での復活を果たすことができる……そういうことだろうか？」

最後の言葉はマテリアルズの3人への問いかけであったが、リインフォースの言う通りであった。

「親ガラスの言う通り、我とシユテルがバックアップをしつつレヴィの躯体を再構築しなোস」

「幸い、と言っているかわかりませんが、レヴィ、マテリアル―Sは我らマテリアルズの中で最も単純な機構です。私や王であったら、他人のサポートがあっても再構築に2日ぐらいはかかるところでしたが、マテリアル―Lの躯体であれば1日もあれば再構築できるでしょう」

シユテルは補足説明を終えて、質問者であるはやてへと視線を向ける。

「りよーかい。大丈夫ならええです」

その視線を受け、はやてはうなづきながら言った。

「よし、ではまずはレヴィよ、現在の躯体を完全廃棄しろ。物理分解だけでなく完全分解でだ。一度根本から再構築する」

『おっけー。んじゃあやっちゃうよ』

自分の体を廃棄しろという傍から聞けばあんまりなディアーチェの命令に対して、レヴィは軽々しく応えたと即座にレヴィの身体がベッドの上から消える。

「え!?!」

「はやっ!」

これにはマテリアルズ以外の周囲にいた一同は騒然とする。あまりにもあつさりど、まるで気軽にレヴィの身体が消えてしまったためだ。

そうして驚いている面々と驚いていないマテリアルズの二人に、呑気な口調でレヴィの念話が届く。

『まだ物理的構築を分解しただけだから、完全廃棄にはもう少しかかるよ。あ、あとしばらくフェイトの中にお邪魔するね』

「え、う。うん。それは良いけど」

「さて、レヴィの躯体廃棄が完了する前に、もう少し詳しい話を詰めるでしょう」

ディアーチェのその言葉にもう一度話し込む姿勢になった面々に、アミタが片手をあげながら申し訳なきそうに切り出す。

「あの、私は概略はわかりましたし、難しい話とかされても少々あれですの……ここでは手狭ですし、レヴィちゃんの身体ももうここにはないみたいです……。」

私のことは気にせずお広い部屋に移動していただいてもかまいませんよ?」

「そうか? それは少々ありがたい。詳細な話となると僕も補佐官を呼びたいところだったんだ」

「そうか、ではアミタの言葉に甘えましょう」

アミタの言葉にクロノとディアーチェが返すと、軽く礼をしながら立ち上がる。

「ゆくぞシユテル。執務官殿、会議室までの案内頼むぞ」

「かしこまりました、わが王」

「なぜ君は一々そう偉そうなんだ……。他はどうする? 無理に付き合う必要はない。どうせ後で詳細が決まり次第共有はすることになる」

立ち上がると同時にシユテルをつれ入口へ向かうディアーチェ。そんなディアーチェの言葉にため息をつきながらもクロノは現在医務室にいる他の面々に確認をとる。

「ん、私は遠慮しとこうかな、もう夜も遅いし、ここにいないのはちゃんに連絡だけでもしときたいしな」

「私は主の意に従うまでだ」

はやてとリインフォースはそう言つて欠席の意を示す。

「じゃあ私もご遠慮ねがっちゃおっかなあ」

はやてたちに便乗して何事もないように部屋から出ていこうとするキリエを、アミタが止める。

「キリエ?」

「……はい」

「あなたは出ますよね?」

「い、いや、私もくそういう話は苦手かな〜って——」

「でますよね？」

なんとかやり過ぎそうとしたキリエに対し、アミタが威圧的な笑みを浮かべながらいう。

そんなアミタの威圧感を受けてかどんどんと体が縮こまっていくキリエ。

「私たちのできることやスペックをお話ししなくては、私たちも手伝うに作戦を立てづらいでしょうし、私が説明をしてもよいのですが、そうすると結局会議場所がここになってしまいます。なにせ私は動けませんから？ どこぞの妹のせい？ お姉ちゃん寝込んでますから？ どこぞの妹のせい？」

「う、うう……」

「ですので、案や意見は出さずとも私たちのことについて質問されたらキチンと答えること。いいですね？」

「……」

「いいですね？」

「……はい……」

アミタのあまりの威圧感に屈したのか、キリエは両肩を見てわかるほどに落とし、項垂れ了承の返事を返す。

そんなキリエの姿に苦笑を漏らしながらクロノは最後の一人——二人へと声をかける。

「それで？ フェイトとレヴィはどうする？」

『あー、フェイトに任せるよ。どうなっても今は躯体放棄と再構築にリソース割いちやっててまともにレスポンス返せそうにないし』

「それじゃあ、申し訳ないけど今日はもう帰らせてもらおうかな。レヴィが急にいなくなって母さんたちも心配してたから」

『ぐう……』

申し訳なさそうに出席を辞退するフェイトの言い分に、レヴィは呻き声を上げる。

その様子を見てシュテルはばつが悪そうにフェイトから視線をそらし、ディアーチエは困った表情を浮かべる。

「レヴィに何も知らせるなどいったのは我らなのだ。しばらくはア—

スラとの会議があるゆえ時間が取れるかわからぬが、協力者の保護者にも説明が必要であろう。その時に、レヴィを唆した事について謝罪させてくれと、プレシア女史に伝えておいてはくれぬか」

困ったような表情のままディアアーチエはフェイトに伝言を頼む。

「うん、わかった。母さんには伝えておくね」

「すまぬな」

「ううん、良いんだ。結局取り乱しちゃった私も、レヴィにも、あなた達にも悪いことしちゃったから」

そうしてお互いに謝りあう二人に、クロノが声をかける。

「それじゃあディアアーチエ達は僕について来てくれ。艦長と一度会ってもらおう」

「わかった。それではな、フェイト、小鴉。レヴィは躯体の放棄が終了したら一度連絡を寄越せ。よいな」

『はい。オツケー』

「なんでフェイトちゃんは名前呼びで私は小鴉のまんまなん。はやて、はやてって名前で呼んでな」

「はん！ 貴様なんぞ小鴉で十分よ！ 我に認めてほしければそれ相應の働きを見せることだな！」

「あ、あはは。とりあえずまたね、ディアアーチエ、シユテルも」

はやてにだけやたらと突っかかるディアアーチエに苦笑いを浮かべつつも、フェイトもディアアーチエとシユテルに別れのあいさつを行う。

「……ええ、それでは」

シユテルはフェイトにそれだけ言うと、一人さっさと部屋から出て行ってしまった。

「奴もあれはあれで自分が制御しきれておらんようなのだ。特にレヴィに関することにはな、だから気を長くして付き合っつけてくれ」

「うん。大丈夫、私もちよつとはわかるから」

「そうか。ではまたな」

シユテルへのフォローを行ったディアアーチエもそう言うと部屋か

ら出て行きシユテルを追う。

そうして部屋を出て行ったダイアーチエを見送ると、はやてとフェイトも部屋から出てアースラの転移室へと向かう。

「それじゃ、私たちも帰ろうか。母さんも心配してるだろうし」

『はい！』

「レヴィちゃん随分元気やけど、お母さんに怒られんのは覚悟しといた方がええよ？」

『ぐっ……』

「あはは、まあそうだね。母さんも、心配してたから」

『フェイトお、プレシアへの弁明手伝って〜』

「往生際が悪いなレヴィ。親に心配をかけさせたのだ、甘んじて受けた方がいい」

廊下を歩きながらそんな会話を繰り返しながらレヴィ達4人は家へと向かっていくのだった。

その様子は、この後に待つ奇妙な出会いと、激戦を予想させない、嵐の前の静けさのような穏やかさだった。

GOD編第4話 「Time traveler of
Magical girl」

―夜。太陽が沈み切り、闇が支配する時間。

―海鳴市中央XXビル屋上。

真冬の夜という最も寒さが厳しくなる時間、風が強く気温以上に寒さを感じる高層ビルの屋上という場所。

人っ子一人居ないどころか、昼間でも人気のないその場所には、珍しく人影があつた。

「うゝゝん」

その人影は空間投影ディスプレイを眺めながら腕を組み頭を捻っている。

その容姿は幼いながらも将来を待望させる美貌が伺える金髪オッドアイの美少女。特に特徴的なのは、鮮やかな赤と碧の虹彩異色。

そんな少女に、もう一人居た人影が声をかける。

「なにかわかりましたか？ ヴィヴィオさん」

声をかけたのはヴィヴィオと呼ばれた少女と同年代のこれまた美少女。

髪は透き通った碧銀の長髪を二つにまとめ、そしてヴィヴィオと同じく紺と紫色の虹彩異色を持つ少女であつた。

その少女に声をかけられたヴィヴィオは捻っていた頭を上げ、声をかけた主に向き直る。

「あ、アインハルトさん。いやー、軽々く周囲を探索してみたんですけど、やっぱりここは地球の海鳴市みたいですね」

「そうですね。私の方は知り合いに片っ端から連絡をしてみましたが一繋がりませんでした」

「アインハルトさんもですか……」

「も。ということはヴィヴィオさんの方も……」

「はい。ママ達やパパにも繋がりません……。端末自体は異次元間通信もできる、おばさんお墨付きの端末なんですけどねえ」

そう話しているうちにヴィヴィオは意気消沈とし元気がなくなつていくように見える。

そんなヴィヴィオを励ますように、アインハルトは話を切り出す。

「一応誰とも通じないことが確認できた時点で、救難信号を定期的に発信するようにテイオに伝えてあります」

アインハルトがそう言うと、肩に乗っていた猫のぬいぐるみが力強く鳴き声を上げる。

その様子に元気づけられたのか、ヴィヴィオは「ありがとね」と言いながらテイオと呼ばれた猫のぬいぐるみの頭を撫でる。

「それにしても、海鳴市だったらなのはママの実家や、おばあちゃんが居るはずなのですが、そっちにも繋がらなくて……。困ったもんです」

「とりあえずはプレシアさん達か、近辺を巡回している次元艦が救難信号に気付いてくれる事を祈るしかありませんね」

「はい。そうですね」

お互いの状況確認が終わってしまおうと喋るべき内容が無くなり無言の時間がただ過ぎていく。

「うーん。クリス達が居てくれて助かったなあ」

ヴィヴィオは唐突にそう言うと、クリスと呼んだ兎のぬいぐるみの頭をなでる。

「そうですね。この子たちが居ない状態でこんな寒空の下放り出されたら魔力がいくらあっても足りない所です」

ヴィヴィオの独白に共感しながら、アインハルトもテイオを胸に抱きかかえる。

「不測の事態に備えてなるべく魔力はとっておきたいですもんね。魔力の消費を抑えながらも、最低限の温度調整はしてくれるし、ありがとね〜クリスマス〜」

ヴィヴィオのお礼に、クリスは片腕をビシッと上げ応える。

そうこうして時間が過ぎ、ついにヴィヴィオ達の我慢の限界が訪れる。

空腹という形で。

ぐくぐ

と、二人のうちのどちらかから、もしかしたら両方からお腹の音が大きく鳴る。

「ひもじいよお……」

「お腹、空きましたね……」

「アインハルトさん地球のお金持ってないですよえ」

「流石に持ってませんよ、私地球に来たの初めてですし……。それこそヴィヴィオさんは持ってないんですか」

「クラナガンで暮らしてたら今時貨幣なんて持ち歩きませんよお。ミッドのクレジットは地球じゃ使えませんし、今は実質無一文ってやつです」

「今、何時なんでしょうね」

「ミッドではそろそろ19時みたいですわね。端末の時間がそう告げています」

「空、暗いですね」

「絶対19時っていう時間ではないですねー。星はちらほら見えますけど、さすがに地球の星座から時期と時間を割り出すのは無理です」

そう他愛ない話をして気を紛らわせても生理現象は容赦なく二人

を襲い、再度大きくお腹が鳴る。

「お腹、空きましたね……」

「あつたかい物が、飲みたいですね……」

「私は今むしょーにステーキが食べたいです」

「アインハルトさんって女子力低いですよね……」

「なんですかいきなり」

「いや、年頃の女の子がお腹空かせてお肉ガッツリ食べたいとか、それ女子力じゃなくて漢力ですよ。漢力ガジェットLV50ですよ」

「む、たんぱく質は格闘家にとっては第二の友ですよ。たんぱく質が補給できるお肉は大事です」

「因みに第一の友は？」

「筋肉です」

「ふええ……脳筋だよお……」

「むむ、なんですかその言い分は。それでも格闘家ですか」

「私は格闘家じゃなくて武闘家です……」。私の流派は総合戦闘術ですんで」

「それを言うなら霸王流も総合戦闘術です。クラウドは武芸百般に通じていましたとも。その中でも特に拳を用いた戦闘を好んでいただけです。もちろん、クラウドの記憶を受け継いだ私も、武芸百般ですとも。ええ」

「すぐバレる嘘は辞めた方がいいですよー。アインハルトさんが武器振ってる姿なんて見たことありませんし」

「それを言うヴィヴィオさんはどうなんですか。私もヴィヴィオさんが武器を振ってる姿なんて見た事ありませんよ」

「私は毎朝素振り100回は鍛錬としてやっていますしー。まだパパから他流試合を禁じられてるので公にはお見せできませんけど」

「むむつ、ま、まあそうやって複数の事をやっても武の道は極められませんかし？」

「あれれー？ アインハルトさんもしかして嫉妬ですかー？ まあアインハルトさんぶきつちよですもんねー。ヴィヴィオちゃんみたいに器用に物事を学ぶ才能ないですもんねー」

いた。

『……あ、あー』

タイミングの悪い生理現象によって気が削がれた上に、空腹を思い出した二人は一気に力が抜けそのままへたりこむ。

「そ、そうでした」

「お腹、空いてましたね……」

空腹を思い出した上、先程の言い合いによって更に体力を消費してしまい、遂には言葉すら発することが億劫な状態になってしまった。

「あ、あの……」

そんな二人の頭上から声が降り注ぐ。

その声に導かれ無い体力を振り絞って二人は顔をあげ、声をかけた者を視界に納めると、そこには白き衣を身に纏う天の使いが、二人のもとに舞い降りていた――。

夜になりしばらくすぎた時間。食事時なのかアースラの食堂は賑わっていた。

多くの人が集う食堂の中で、その視線の多くを引き寄せている人影が二人。

その二人は綺麗な金髪の美少女と碧銀の髪を持つ美少女。その顔は整っており平素であつたらさぞ美しかろうという少女二人は、自分

たちが食堂中の視線を集めていることにも頓着せず、その綺麗な長髪を振り乱しながら己の欲望を満たすことだけに専念していた。

「はふっはぐっもぐもぐ」

「っはむぐっズズズズもぐもぐ」

目を引くほどの美少女二人が、数人前はありそうな量の食事を脇目も振らず、息つく暇もなくながつついていたら、それはもう食堂中の視線を集めるのもしようがないと言えよう。

そんな二人——ヴィヴィオとアインハルトが最後の皿を綺麗にし、成人男性数人分の食事を終わるとやつと一息つき、その顔を上げた。「ふいっ。やつと満足出来ましたっ。ごちそうさまですっ」

自分のお腹を擦りながら目の前の人物にお礼を言うヴィヴィオに続き、アインハルトも頭を下げる。

「本当に、ありがとうございます。ヴィヴィオさんの……ではなく、高町なのはさん」

お礼を言われた人物、高町なのはは目の前に高く積まれた皿を傍目に入れ、苦笑いしながら相づちを打つ。

「……にやはは、どういたしまして。えっと、アインハルトちゃんに、ヴィヴィオちゃん。で良いんだよね」

「はい。改めまして、アインハルト・ストラトスです。この度は私達を救助していただき、誠にお礼を申し上げます」

なのはの言葉に頷くと、再度頭を下げるアインハルト。

「高町ヴィヴィオです！ ミッドのクレジットの規格が変わってなければ食べた分は自分達で支払うから安心してね！ なのはママ」

頭を下げたアインハルトに続き名前を言うヴィヴィオの言葉に、なのは強く反応する。

「そ、それ！ 会った時も言ってたけどママってなに!? 私まだ結婚もしてないよ!？」

高町なのは弱冠9歳。自分を母と呼ぶ少女と出会う。

衝撃の事実思いあたり、口から魂が抜けたかのように呆然とするのは。

「あ、私養子だから、なのはママがお腹を痛めて産んだ子じゃないから安心して」

そんななのはと比べ、ヴィヴィオはひどくあっさりともたもや衝撃的な事実を口にする。

「え？ 養子って……？」

「ええ、そのことを語るには聞くも涙語るも涙の超大作。アニメにして24話分。劇場版にして約2作分のお時間が……」

「まあ、ヴィヴィオさんも色々複雑な事情がありますので、そちらは長くなりますしまたの機会にでも」

よよよとハンカチで目を押さえ嘘泣きをするヴィヴィオを華麗に流すアインハルト。

その慣れた対応、雰囲気からなのは二人が本当に信頼しあう友人なのだと感じ取り、なぜだかわからないが嬉しくなってしまう笑みがこぼれる。

「二人は、とっても仲がいいんだね」

「んー、まあ、そうですねー。アインハルトさんとも色々ありましたしねー」

「そうですね。色々ありましたから」

そう言ってお互いに視線をあわせはにかむヴィヴィオとアインハルト。

そんな二人を見つめ微笑むのは。その光景は年齢はなのはのほうが低いのに関わらず、まるで娘の友達を見て喜ぶ母の雰囲気を感ぜさせた。

三人がそうして談笑していると、なのはに取って見知った人物が声をかけてくる。

「すまない。会議が長引いてしまった」

声をかけたのはアースラのNo2。クロノ・ハラオウン執務官。

「初めまして。この艦の執務官のクロノ・ハラオウンだ。救助者として責任をもって君たちの問題に対処させてもらう。よろしく頼む」

身分証を投影しながら自己紹介するクロノ。しかしなぜかクロノを見て啞然とする目の前の二人を見て頭をかしげる。

「あの、どうかしたかい？」

(小さい……)

(小さい……)

(14年前……)

(年齢……平均身長……)

いきなりクロノを目の前にして、小さな声で話しあう二人。

そしてなにがしかの結論が出たのか二人は急に立ち上がりクロノの手を握る。

「うおっ、急にどうし……」

「大丈夫です！ 諦めないで下しさい！」

「ぞうぞうでずっ……自分を未来をズズッ。しんしんてくったさ……い」

アインハルトからは力強く。なぜかヴィヴィオは号泣しながらクロノの不屈の心を説き始める。

「な、なんなんだ一体……」

「……にや、にやはは」

唐突に年下の女子二人に詰め寄られクロノは堪らなくなり、なのはに視線で助けを求めるがなのはは苦笑いしか浮かべることができなかった。

「と、とりあえず。この二人に関しては僕が引き継ぐ。なのはもう遅いから帰るといい」

「う、うんよろしくねクロノくん。それじゃあヴィヴィオちゃんにアインハルトちゃんもまたね」

妙なテンションで若干付き合いにくさを感じる二人をクロノ一人に任せるうしろめたさを感じつつも、遅い時間であり帰らねばならないということもあり、後ろ髪を引かれる思いながらその場を後にする。

「あ！なのはマ……なのはさん！レヴィ、さんに『ヴィヴィオが会いたい』と言っていたって伝えてもらっていいですか！」

「え？」

「おねがいますー！」

「うん！」

去り際にヴィヴィオから、意味の分からない伝言を受けるがそれを笑って快諾し、なのはは食堂を後にした。

GOD編第5話 「Message of Future」

後にどのような名でも呼ばれない、公的な記録に残らない事件。

ユース・エーベルヴァイン^{ジュース・エーベルヴァイン}が目覚め、永遠結晶エグザミアに纏わる事件―言うならば『エグザミア事件』―が始まった夜の次の朝。

アースラに保護された高町ヴィヴィオは自分が父と呼び慕う人物から託された頼み事をこなすため、アースラを歩き回っていた。

「いや、それにしてもアースラがアースラで助かりましたねえ」

「そうですね、八神さんのお陰でどこに何があるのか、大体わかりますしね」

アインハルト本人には特に用事はないのだが、一人でいても何もすることがないためヴィヴィオと共にアースラを散策していた。

ヴィヴィオもアインハルトも自分の時代、今からすると未来の世界ではある理由により補修されたアースラに何度か乗った事があったため、現在の補修前のアースラでもどこに何があるのかが把握できていた。

そのため二人の足取りには不安などは欠片もなく、しつかりとした足取りで艦内を進んでいく。

「あ、ありました。第1作戦会議室。パパの情報によると王様は大抵ここに居るらしいので、早速お邪魔しちゃいましょう」

第1作戦会議室とプレートに書かれた部屋を前にしてヴィヴィオは扉を手の甲で叩き、声をかけながら扉を開ける。

「すみませくん、高町ヴィヴィオです。デИАーチェ・K・クローデИАさんはいらつしやいますか」

「む？」

「あら」

会議室の扉を開くとそこにはアースラの館長であるリンディと執務官のクロノ、それにヴィヴィオの目的の人物である、ディアーチェがいた。

「どうしたのかしらヴィヴィオさん。残念だけどここにクローディア？ って名前の人は今はいないわよ」

場を代表してリンディがヴィヴィオに話しかけるが、ヴィヴィオはその言葉に首をかしげる。

「あれ？ でも、王様——ディアーチェさんそこに居ますよね」

ヴィヴィオのその言葉に何か気が付いたのは、呼ばれた本人であるディアーチェと、ヴィヴィオの隣にいるアインハルトの二人。

「ん？ なるほど、そういうことか」

ディアーチェはそうひとりごちる。

「ヴィヴィオさん、多分クローディアさんはまだその名前を名乗っては居ないのではないでしょうか」

「ああ、なるほど！」

隣のアインハルトにそう言われて初めてやっとヴィヴィオも納得がいったのか、手を叩きながら大きくうなづく。

「それで、このディアーチェに用事がある、でいいのかな。こちらは今後についての会議中なので、手短に済むことでなければ後回しにして貰いたいのだが……」

お互いの認識のすれ違いが解消されたところで、クロノが話を進めるため口を開く。

「はい。そのお話の参考になるだろう伝言？ を預かってます。クリス」

クロノの言葉にうなづきながら、ヴィヴィオは愛機であるセイクリッドハートを呼び出すと、呼ばれたクリスはふよふよと飛行し会議室の奥へ行き、空間にディスプレイを投影し何かの映像を投射しだし

た。

「私のパパ、まあ未来の人からの伝言です。なにやら私が今回のような状況になることを知っていたらしく、そうなった際、ディアーチェさん、シユテルさん、クロノさん、リンデイさんへの伝言をクリスの中に残していたみたいで」

ヴィヴィオはそういうと目の前の映像を見つめる。その先は映像を見たほうが早いとでも言うように。

それにつられて、その場にいた全員の視線がクリスが投影している映像に注がれる。

「

映像が終了してから少しの間、会議室内は静寂で満たされていた。その静寂はヴィヴィオの声で終わる。

「——以上、みたいです」

ヴィヴィオの言葉に映像を投影していたクリスは同意するように、何度もうなづく。ヴィヴィオの下に帰っていく。

「——なるほど、確かに今後の方針が大きく変わりそうだ」

映像の内容を吟味するためか、クロノはそうつぶやくと目を閉じて黙考する。

それに対してディアーチェは大声をあげていた。

映像の内容と、伝言と共に預けられた物を予想できなかった自分自身に対して笑いをこらえきれなかった。

「くくつ、まあそうよなあ。未来人が現れると知っていて、それが自分の知り合いなら、メッセージを残さない理由はないというわけか。くつはははははははははは。考えてみれば当然のこと、我もシユテルの

ことをバカにできんなあ。ははははっ」

そんな二人に対しリンディが声をかける。

「クロノ、ディアーチェさん」

「はい」

「ああ」

「至急、シユテルさんとエイミィ、それにアテンザ技師も呼んでください。ヴィヴィオさんから提供いただいた動画と、このデータデータを元に今後の方針を再検討します」

「了解しました」

「わかっている。シユテルにはもう既に伝えた。ちょうどその技師と対抗プログラムについての会議をしていたようだから、ついでに連れてくるよう伝えている」

「わかりました。なのはさんたちがこちらに来るまでに、あらかじめの方針を決めておいた方が良いでしょう」

クロノとディアーチェの返答を聞き、リンディはうなづくき、ヴィヴィオに視線を向ける。

「ヴィヴィオさん」

「はい」

「伝言によるとあなたにもこれからの会議、引いては今回の作戦に参加して貰った方がいいと思うの。本来は保護すべき私たちがあなたにこういうのは大変申し訳ないのだけれど、どうかお手伝いしてもらえるかしら」

まっすぐにヴィヴィオの目に視線を合わせそう言うリンディは静かに頭を下げる。

「わわっ、そんなかしこまらないでください！ この高町ヴィヴィオ、血は繋がっていなくても高町なのはの子として、困ってる人を見捨てるわけにはいきません！ 安心してください、私これでも並の魔導師より強いので！ 全力全開でお手伝いしますよ！」

頭を下げたリンディに慌てながらも力強く宣言するヴィヴィオ。

その横にいたアインハルトはリンディの肩に手を置きリンディの

顔を上げさせる

「リンディ提督。ヴィヴィオさんのお父様の伝言によると私たちが元の時代に帰るには、アマタさんとキリエさんの助力が必要であるとか。それならば、お手伝いしないわけにはいきません。それに、ヴィヴィオさんの言う通り、私もヴィヴィオさんもある事情により通常の人間より戦うことに慣れていきますので、殺しても死なないような敵であるならば、それこそ全力を振るえるというものです」

そうリンディに語り掛けるアインハルトの口調は、いつも通り静かでゆつたりとしたものであったが、リンディにだけ見えるアインハルトの瞳の奥底には、強敵を求める猛獣が潜んでいた。

その瞳の奥を見て、リンディの背中に冷や汗がつつう。

直感と呼べるものでリンディは感じ取っていた。限定オーバーS。魔導師としては最高峰に近いランクを持つ自分でさえ、目の前の少女と全力でやり逢えば、両方とも無事では済まないという事を。

「わ、わかりました。本当に感謝の言葉が絶えませんが、よろしくお願いたします。高町ヴィヴィオさん、アインハルトストラトスさん」

冷や汗の不快感を隠しながら、リンディは頭を上げ精一杯の笑顔を浮かべた。

『はいー』

それに対し、ヴィヴィオとアインハルトの笑顔のなんと無邪気なところか。

その笑顔にリンディは一抹の恐怖とともに強い頼もしさを感じていた。

会議室でヴィヴィオが伝言を伝えてから数時間後、日課の早朝訓練を終えたなのは、フェイト、はやての三人（+はやての車イスを操るラインフォース）はアースラ内で話ながらブリーフィングルームを指していた。

「というわけで、そのヴィヴィオちゃんは私のことを『ママ』って呼ぶんだよ」

主に話していることは昨日の出来事であったが

、現在はなのが保護した（自称）未来人の二人についてであった。「はく。それがホンマやったらけつたいなことやなあ。勉強した中じゃ次元移動技術や魔法でも時間移動はできんらしいやん」

「うん。でも確認した身分証の発行日は確かに未来の日付だったんだよね。ミッドの保険証とザンクトヒルデ？　って言う学校の学生証を提示されてて、そっちは今リンデイさん経由で本局に問い合わせ中」

「まあ未来人やつたら問い合わせても該当なしやろうし、無駄手間な気はするけど、身分証を偽造するのに態々未来日なんてあからさまなもんも作らんやろうしなあ。ラインフォースは時間移動の魔法にとかには覚ええないん？」

「はい、残念ながら。体感時間を引き伸ばす事での擬似的な時間操作には心当たりがありますが、時間遡行や時間軸移動に類する魔法やレアスキルの持ち主には出会ったことはありません」

「夜天の書で色んな魔法を集めてたラインフォースさんが知らないならどうしようも無いかもね。フェイトちゃんはと思う？」

「え？　うん。良くわかんないけど、なのはが育てた子供なら良い子だと思うよ？」

話に入ってこずにずっと傍らで話を聞いているだけだったフェイトに、なのはは話題を降るが返ってきた答えはまさに話題を理解してない的外れな返答だった。

そのあまりの天然さにはやては器用にも車イスの上で滑り、なのは

は思わず苦笑いを浮かべる。

『……あのさあ、フェイト。今の話題でその話はちよつとちがくない？』

周囲の友人だけでなく、今は自分の中に居る半身からも突っ込まれフェイトは明らかに狼狽しながら、弁明を図る。

「で、でも。ホントになのはに育てられた子なら、嘘をつくとか、ましてや公文書偽造なんて犯罪に手を染めるとは思わないから、信じても良いと思うな！」

「あゝ、なるほどなあ。まあなのはちゃんの子供ってことを信じるならそうなんやろうけどなあ」

未来人、ひいてはなのはの子供という自己申告すら話し半分のはやてにとつては、フェイトの言葉には納得しにくい物が少しあり、なんとも言えない思いを感じ、語尾が弱くなる。

「フェイトちゃんは素直で優しいね」

対してなのはは、フェイトの『なのはの子供だから』という理由でヴィヴィオの事を信用できるという、『なのは』への信頼を感じられ胸が温かくなる思いを感じていた。

「なんやー、なのはちゃん。その言い方だとうちがひねくれてて優しくない見たいな言い分やな。その喧嘩買うで〜」

「ええ!? そんなつもりじゃ無いよ！ ホントだよ！」

「そ、そうだよ、はやては優しいよ！」

なのはのフェイトへの言葉にからかい気味で頬を膨らませながらはやてが突つかかるとなのはとフェイトは慌てて言い繕う。

その様子をどこかから俯瞰視点で見ていたレヴィは、面白くてつい笑ってしまった。

『あはははっ。まあフェイトとはやてが揃ってればちようど良いんじゃないかな』

「そ、そうなの！ 優しいフェイトちゃんと冷静なはやてちゃんできう、なんか、アレが良い感じだと思うな！」

レヴィの笑いながらのフォローに、なのはもすぐさま乗っかりはやてを宥めようと声をかける。

その小動物のような様子にはやてもたまらなくなり吹き出してしまふ。

「ぷぷっ。はははっ、そんなに慌てんでもええよ、なのはちゃん。別に不機嫌になつてへんから」

「ほ、ほんど?」

「ホンマに」

「よ、よかつた〜」

はやての言葉が演技だとわかりホッと胸をなでおろし、安心するのは。

そうして3人娘（主にはやてとなのは）が姦しくおしゃべりをしていくうちに、目的地であるブリーフィングルームはすぐそこまで近づいていた。

『ほら、3人ともそうこうしているうちにそろそろブリーフィングルームだよ』

レヴィのその言葉で三人とも声を静め、なのはが代表して扉を叩いた後に開ける。

「高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて、以下2名現着しました!」

扉を開けながらなのはは自分たちが来たことを伝える。それにも早く反応したのは中にいたヴィヴィオであった。

「あゝ、なのはママ〜」

やつほーと言いながら、入り口近くの椅子から乗り出しなのはに向かって手をヴィヴィオを見ると、なのはは少しだけ微笑ましい思いになり、ヴィヴィオに微笑みながら小さく手を振る。

部屋の中にいるのはアースラススタッフから艦長であるリンディ、執務官のクロノ、執務官補佐であり会議では書記を担当することの多いエイミー、技術スタッフのマリー。

それ以外の面子は、ディアーチェとシユテル、アマタにキリエ、ヴィオにアインハルトと、この事件に関わり合いのある人物が勢ぞろ

いしていた。

なのは達が開いている席に座るのを確認すると、クロノが立ち上がり口を開く。

「それでは全員揃ったのでブリーフィングを始めます。今回の議題は現在この海鳴市周辺で発生している闇の欠片の出現、およびその原因と思われる存在システムU―D、以下U―Dと呼称します。そのU―Dそのものである少女、ユーリ・エーベルヴァインへの今後の対応と対策について」

クロノの言葉に合わせ、会議室のモニターには様々な情報が映し出される。

そうして会議はクロノ司会の下、アマタとキリエによるエルトリアの説明、ディアーチエたちによるエグザミア、システムU―Dについての詳細説明などが行われつつがなく進行する。

「と、言うわけで現状と我々の目標、U―Dの鎮圧、およびユーリ・エーベルヴァインの保護が共有できたところで次の議題に進みます。次の議題ですがシステムU―Dの対抗策についてです。これは先日のレヴィとU―Dの直接戦闘の記録をアースラでも確保していますが、ハッキリ言って革新的な対抗策が無ければ直接戦闘においては無謀の一言です。我々の最終手段であるアルカンシエルについてもディアーチエ曰く有効打となるかどうかは試してみるまで分からない、との事。既存の地球での事件規模で言えばナハトヴァール、闇の書の闇の戦闘力が少女大の大きさにまで凝縮された存在と言っても過言ではないでしょう」

クロノのU―Dへの説明を引き継ぐように、シュテルが発言する。「はい、そこで我々、私シュテルとアースラの技術官であるマリエル・アテンザ両名は、U―Dの自動防壁を中和する攻勢プログラムの開発を行っている最中です。ですがこちらはU―Dの解析不足、技術不足もあり、主力と想定されるインテリジェントデバイス、およびデュアルデバイスが行えるメンバー分を用意するのに5日程は要します。

正直言って5日もユーリを放置している余裕はありませんので、ミッド式、ベルカ式プログラムを一つずつの計2つ分を2日で作成する、といったところが妥協点となるでしょうか」

「やっぱり時間が足りませぬねー。ベルカとミッドだけでも大分仕組みが変わるのに加え、各々のデバイス用に調整となるとどうしても……。正直シュテルちゃんのU—Dの解析率が100%でも主力メンバー分を実戦で安定運用させるためにはやっぱり3、4日はかかってちゃう。これがミッド式だけで良いんだったらもうちよつと短くなるんだけど、それでも結局戦力になるのはなのはちゃんとフェイトちゃんだけになっちゃうし、特にフェイトちゃんのバルディツシュは難しい子だから……」

シュテルの説明を引き継ぐ形でマリーが弁明する。これでもマリーは技師としては上級である上、シュテルもその「理」の性質をいかななく発揮し、マリーを手助けしていた。この二人でなかったらミッド式1本だけでも開発に3日は必要としていただろう。

「やはり、時間が足りない」

その二人の意見を再度確認するクロノに、二人は黙ってうなづく。「では今回の主題であるが、それを解決する手段がある、と言ったらどうなる」

「解決する手段、とは？」

「正確に言ってしまうえば、攻勢プログラムのミッド式、ベルカ式、インダストリアル式それぞれの完成品だ」

クロノの言葉に大きな衝撃を受けるのは、先ほど説明を行ったシュテルとマリー。

その二人ほどではないにしろ、驚いているのが説明を聞いたばかりのなのは、フェイト、はやて、リインフォース。そしてレヴィ。

「それを説明してもらうため、今回特別に今作戦に参加してもらおうことになった一般人協力者の高町ヴィヴィオに出席してもらっています。ヴィヴィオ、よろしく頼む」

「はー」

驚く面々を置いてクロノはヴィヴィオに話を振ると、ヴィヴィオは

元気よく返事をして立ち上がる。

「ご紹介にあずかりました、高町ヴィヴィオです。今回の事件の影響で、新暦80年のミッドチルダからこちらの時代に迷い込んでしまいました。自己紹介は置いておいて、そんな私の状況を予想していたのか、私が父と呼び慕っている人物から、この世界の皆様に向けてのメッセージと贈り物があります！」

「このメッセージは僕とリンディ提督、あとディアーチエは先に拝見している。そのメッセージを見れば彼女の言っていることが本当だと思っしかないだらう。そして、先に言っておくが、その人物からの贈り物、というのがこの事件で、U-Dとの戦闘の時に主力となるメンバー全員分の完成済み攻勢プログラムだ」

「なんと、まさかそんな事が……。そうですか、未来の人物とほもしや……。クロノ執務官、映像を見せていただいても」

ヴィヴィオとクロノの説明を聞き、シユテルは何かを思いついたのか、件の映像を催促する。

その催促にクロノは頷き、エイミィに指示を出すと部屋が暗くなり映像が流れ始める。

『えーっと。これ撮れてる？ OK?』

映像が流れ始め最初に映し出されたのは、10代後半から20代前半といった見た目の妙齢の女性だった。

鮮やかな水色の長髪をうなじの当たりで一つに結び、切れ長で凛々しい目から見える瞳の色はワインレッド。

スタイルは良く、ソファアーに座っている姿だが、女性にしては長身であることも伺える。

そんな女性は一つ咳払いすると、言葉を仕切り直し、語り始める。

『えー、これを見ている、ということとはもうボクはこの世には居ない、ということでしょう……』

そんな重い台詞を言った瞬間、画面の横から出てきた女性がハリセンで最初の女性の頭を引っ叩く。

『いだっ』

『戯け！ 自分でメツセージを送りたいからと譲ってみれば、なにをふざけて居る！』

ハリセンをもち、水色の髪の女性を叱るのは、銀髪で毛先が黒く染まっているショートカットの女性。

『いや、やっぱこういうメツセージを残すんだったらやつとかなきやいけないかな』と、お約束じゃんこういうの』

ハリセンで叩かれた頭を上げ、銀髪の女性に言い訳をする水色の女性、最初の凛々しい雰囲気は消し飛び、少年のような無邪気さを伺える表情がその顔には表れていた。

『ダイアーチエの言う通りですよレヴィ。そもそもこれは過去へのメツセージなんですから、あなたが死んでるわけじゃないじゃないですか』

画面に映る二人とはまた違う女性の声とする。声の主が言った名前を雰囲気から察するに、水色の髪の女性がレヴィ、銀髪ショートカットの女性がダイアーチエなのだろう。

『いいから真面目にやらんか戯け』

そういうとダイアーチエだと思われる女性は画面外へと出て行ってしまふ。

『はーい。さて、えーつと今は新暦79年です。そっちの時代は……シユテるん、何年だっけ？』

『たしか新暦66年ですね』

『なるほど、んじゃあこの映像を見ている人はみんな新暦66年の地球、海鳴市でこの映像を見ていると思う。』

この映像を持ち込んだ少女、高町ヴィヴィオの言っている事はこのボク、レヴィ・テスタロツサが保証しよう。彼女はまさしく新暦66年からしたら未来の人物であり、高町なのはの娘だ。

そして、13年前のクロノにリンディさん、それからなのは、フェイト、はやて以下夜天の守護騎士たち。そして無断次元移動の容疑でアースラにつかまっていたりしなかったりするかもしれないけど、アミティエ・フロリアンにキリエ・フロリアンの二人。それからボク、王様、シュテるんの三人。

君たちは今、ユーリに、システムU-Dに対抗する手段を求めているはずだ。

それをボクはこの映像とともにクリス、ヴィヴィオのインテリジェントデバイスであるセイクリッドハートに託した。

シュテるんが作ろうとしていたシステムU-Dの自動防壁を破るための攻勢プログラムを戦闘に参加するであろうメンバー用の物。

未来の技術が用いられているけど、それぞれのデバイスの強化版の設計図。こっちは偶然にもヴィヴィオが早期にアースラに保護されたら使えると思う。ボクの記憶ではそんな暇は無かったはずだから攻勢プログラムのインストールだけになるかもしれないけど。

そして、システムU-D、ユーリと直接対決する際に最も気を付けなければならぬ能力への対抗策。

ユーリの他者の魔力、生命力を結晶化し奪う能力へ対抗するための力。ミッド式の魔法でも、ベルカ式の魔法でも、インダストリーの化学でも、地球の武術でもない。それら全てでなく、しかし全てを兼ね備えた技術。<F・O・R・M・U・L・A>システム。ボクたちが開発した魔法と科学を合わせた新しい力。

そのシステムと、フォーミュラを扱うために必要なナノマシンの設計図、そしてサンプルも送ってある。理想は全員がフォーミュラを身に着けて挑めれば最高だけど、さすがにそんな時間は無いと思うから、もしタイミング良くボクの躯体の再構築が必要になったら、この

フォーミュラ用の躯体で再構築してほしい。

ボクのアノ記憶と違って、実際のユーリの力は凶悪になってるから。このフォーミュラを使いこなせる魔導師が一人以上居なければ、誰もユーリには勝てない。本気を出した、見境なく力を振るうほどまでに暴走したユーリとの戦いで、このフォーミュラが無ければ、戦闘メンバー全員瞬く間に魔力と生命力を結晶化され奪われ、死ぬだけになる。

多分このメッセージを聞いてるってことは、ボクの躯体を作り直してる頃だと思う。だから、時間がかかっても絶対にこのフォーミュラの躯体を作って。そのための設計図もフォーミュラの設計図と合わせて送ってあるから。

最後に、過去のボク。フォーミュラ用の躯体が出来たら、絶対にヴィヴィオと1戦はすること。ヴィヴィオにはボクの全てを、ボクが学んだ御神流と魔法、その全てを合わせ「完成」させた魔法戦技。その全てを仕込んである。まだ神速の領域ではないから免許皆伝はあげないけど、それでも基礎と奥義、戦術のすべては叩き込んでるはずだから。ヴィヴィオと戦って盗んで、完成させるんだ。新しい躯体での戦い方と、ボクのための御神流の使い方を。

さて、伝えたいことは以上だと思う。みんなの検討を祈るよ。最後にヴィヴィオ、もし側にアインハルトもいたらアインハルトも。キチンと無事に帰ってくることを。確かに君はなのはに似て強い子だし無理もしがちだけど、それでも無事に帰ってくるのを皆望んでるからね。それじゃあ皆、頑張ってるよ。』

頑張ってるよ。その言葉を最後に映像はフェードアウトし、再生が終了したことを映像ソフトの画面が切り替わることで会議室の面々は気づく。

「以上が、ヴィヴィオが持ってきてくれた映像だ。この映像と共にクリスより提供のあった各種データは後々マリー達のほうで検査して

確かめてくれ」

クロノの言葉にマリーは黙ってうなづく。

「それでは、以上で今回の会議の主題に関しては終了です。今後の動きですが、シユテル、マリーはヴィヴィオと共にクリスからデータ提供、およびその解析。デイアーチェ、レヴィ、シユテルはメッセージ通りにするしないはともかく、レヴィの躯体の構築が最優先。なのは、フェイト、はやて達には申し訳ないが闇の欠片の駆除にあたってもらいたい」

「了解」

「守護騎士たちもなんとかリンディ提督の掛け合いで今日の夜にはこちらに合流できる事になったので、合流次第指揮権をはやてに移譲する」

「わかりました」

各々の今後の動きの確認を終えるとクロノは会議室を見渡し、伝え漏れがないかを確認すると会議の終了を宣言した。

「それでは、会議終了となります。リンディ提督から何か一言あれば」「はい、それでは。高町ヴィヴィオさんのご助力により事件は早期解決に向けて大きな一歩を踏み出せることになりました。そして皆さんにはそのためにさらに頑張っていたただく必要がありますが、どうかよろしくお願いします。皆、頑張りましたよう！」

『はー！』

クロノの言葉にうなづいてリンディが一言を述べ、会議室全員が一致団結し、会議は解散することとなった――。

——一方そのころ、海鳴市近郊——。

「いつつつ、ここ、どこだ？」

『大丈夫？ トーマ』

「ああ、リレイのおかげでなんとかね、それにしても、変なところに来ちやっとなあ」

『そうだね、他の人とかどうなってるのかな……』

「ま、ともあれ少し散策してみよう、何かわかるかもしれないし」
『うん』

新たな来訪者が、また二人増えていた。

GOD編第6話 「Take of Rest」

会議が解散となった直後、フェイトとレヴィはシユテル達と共にアースラ技術部に足を運んでいた。

「〜♪」

そんなフェイトの隣には、なにやら楽しそうに鼻歌を歌い、スキツプしながら並走するヴィヴィオの姿。

なのはとはやて、クロノは闇の欠片の対処のため出勤し、フェイトだけはレヴィがヴィヴィオのデータを確認する関係上シユテルやヴィヴィオと共に技術部へと向かっていた。

そのように行動を分けると決定した後、ヴィヴィオは急に上機嫌になりフェイトの周りをウロチョロしながら、物珍しそうに観察していた。

「えつと〜、ヴィヴィオ、ちゃん？」

「はいヴィヴィオです！ ヴィヴィオって呼んでくださいな！」

あまりにも周囲をウロチョロとするハイテンションガールに我慢できず、フェイト自らが声をかけると、やたらと大きな声を廊下に響かせ元気な返事が返ってくる。

「あ、うん」

これには流石のフェイトも若干引き気味になりつつも、会議室からこれまでのヴィヴィオの視線の意を問う。

「えつと、じゃあヴィヴィオ」

「はいヴィヴィオです！」

「……さつきから私のこと物珍しそうに観察してるけど、なにか気になることでもあるのかな」

「はい！ えつとえつと、今フェイトm、さんとレヴィ……さんは一つになってるんだ、ですよね！」

「え、うん。そうだけどそれも未来のレヴィから聞いてたりするの？」

「はい！　そういう能力があるって小さい頃はずっとそうだったって聞いてたんですけど、私自身は全然目にしたことが無かったので！　レアです！　SRキャラですよ！」

若干鼻息あらく顔の距離も近づくとヴィヴィオの圧力に負け、フェイトは引きながらもなんとか愛想笑いを浮かべる。

「あ、あはは。そうなんだ」

「そうなのです！」

「ちよつとヴィヴィオさん」

そんなヴィヴィオのテンションについていけないフェイトを見かね、フェイトとヴィヴィオの後ろを歩いていたアインハルトが声をかける。

「さつきからそのうざいテンションなんなんですか。うざいのでどうにかしてください。流石のフェイトさんも困うざがってってますよ」

そのアインハルトのちよつと毒の入った助け舟も何のその、ヴィヴィオはハイテンションのままアインハルトの方へ詰め寄る。

「いやいやいや、何言ってるんですかアインハルトさん！　フェイトま、さんとレヴィP、さんのユニゾン！　ほとんど人間のプログラム生命体と人間のユニゾンですよ！　実際レア！　学会で発表すれば大人気間違いなし！　知る人ぞ知る『黄色い死神』フェイト・テストタロツサの全力全開本気の本気、『雷神フェイト』ですよ！」

「ええ、なにその恥ずかしい名前……」

『えーいいじゃん雷神。カッコいいじゃん』

ヴィヴィオから飛び出たトンデモな二つ名に未来の自分が心配になるフェイト。そんなフェイトとは裏腹にレヴィはヴィヴィオの発言を受け止めるどころか、レヴィのセンスと合致したのか大層気に入っていた。

「しまいには二人合わさったときの通称『最強モード』を『雷神モード』に正式決定しようとするほどに。」

「たしかにゴシック記事などではその噂はよく耳にしますが、誰が流したのかわからない眉唾もんじゃないですか」

「いやいや、アインハルトさんもまだまだですね。なんせ、私は名付け親本人から聞いていますので！ 確実性は高いですよ！」

「おや、そうなんですか」

「はい！ なんせ『雷神フェイト』の名付け親はレヴィパパですからね！ なのはママやフェイトママの勇姿とともに寝物語によく聞いたものです」

「え？？」

レヴィと『最強モード』の正式名称について脳内会議に熱が入っていたフェイトですら、聞き逃せない単語がわらわらとヴィヴィオからあふれ出る。

「ちよつ、ちよつとヴィヴィオ？」

「はいヴィヴィオです！ なに!? フェイトママ！」

もうテンションも上がりまくって敬語すらとりつくろわなくなったヴィヴィオは、自分が今まで（一応）隠していた事実を暴露したことに気づかず、アインハルトからフェイトに向き直る。

「今の話」「その話、詳しく聞かせてもらいましょうか」

フェイトが話を聞き出そうとした瞬間、マリーとともに先頭を歩いていたはずのシュテルが爆速Uターンを決め、ヴィヴィオの肩を強く握りながら声をかける。

「え、えつと何のお話でしょうか……」

「あなたの父親がレヴィで？ あなたの母親がフェイトだというお話です」

ヴィヴィオの肩を握りながら詰め寄るシュテルは、背中に紅蓮の炎を幻視するほどの圧力を放っていた。

その圧力と熱量にはさすがのヴィヴィオも冷や水を被せたかのよ

うに冷静になり、自分の失言を思い出す。

「いいいいいいいいいいいい、ななつななにをいつているんでししししよう」

その目線はプロの水泳選手が25mプールでバタフライを泳ぐかの如く激しくいつたり来たり。目が泳ぐってレベルでない動揺を表していた。

「今更言い逃れはできませんよ。なぜ、レヴィが、あなたの、父に、なるのか、キチン教えていただきまししようか」

「うむ、それは我も興味があるな。今のところ我らの躯体には『そういう性能』は詰め込む予定はないはずだが」

いつの間にかデイアーチェエまでもが話に入ってきて、一行の足は止まっている。唯一関係のなさそうなマリーも、技術官としての興味からか一先ず止める気はなさそうであり、ヴィヴィオは気づいたら一同に囲まれていた。

「あ、アインハルトさん！ この眉目秀麗、才色兼備、実は文系魔法少女のヴィヴィオちゃんが必要な失態を犯すわけないですよね！ ほら弁護士！ 弁護を！」

ヴィヴィオは苦し紛れに自分の後ろにいる同胞に助けを求める。

ヴィヴィオとアインハルトには切っても切れぬ因縁がそりや前世の時代からあると言っても過言ではない、多生の縁である。ここはズバツと断空拳バリの一撃必殺な一言で解決してくれるに違いない。

「Levi, s your father. (いや、めっちゃ言ってますからね)」

!!!!!!!
「!!!!!!!」

そんなヴィヴィオの一縷の望みは淡泊な対応と共に切り捨てられる。

頼られた当の本人であるアインハルトなんかは呆れのあまり半眼

になるほどであり、ヴィヴィオを白い目で見ていた。

「さあ、もう言い逃れはできません、キリキリ吐くもん吐いて楽になりなさい」

「くっ！ 殺せっ！」

まるでどこぞのジャンルの女騎士のように悔しそうな表情を浮かべ抵抗の意を示すヴィヴィオだったが、一連の流れでヴィヴィオの性質をなんとなく掴んだのか、周りの面々は無言でヴィヴィオを見つめ続ける。

その無言の圧力に屈し、ヴィヴィオは両手をあげ降参の意を示すと自分の身の上を語り始めた。

「ほほう、で、そのあと高町なのはがあなたの里親に、保護責任者になった、と」

「……は？」

なんか流れて正座をさせられ(場所はアースラの会議室から技術部へ向かう廊下の端)、身の上をある程度語らされたヴィヴィオは意気消沈、といった形でうなだれていた。

尋問官は主にシユテル。たまにフェイト。

それ以外は邪魔にならない程度に離れて話を聞いていた。

「それで、なんでレヴィがお父さんになったの？」

「いや、それが私にもハッキリとしなくて……、なんか引き取られた当初の精神年齢の相当幼かった私が、なんかレヴィパパを一目見たときに『パパ！』って呼んだらしく……」

「ほう」

「それで、気づいたらパパ呼びが定着していたというか」
「なるほどね」

ヴィヴィオの様子から嘘はついていないだろうと判断したフェイトは、なんとなくだが納得していた。

まあ幼い子供の言うことだからと好きにさせていたのだろう。今のフェイトでもそう判断してしまうだろうし、未来で年齢も重ねた自分であったらそう判断するのだろうと、一人納得していた。

「それで、私はなんと呼んでいたのです？」

しかし何が納得できないのかシユテルはヴィヴィオの尋問を続ける。

「え？」

今までと関係のなさそうな質問に、質問された本人であるヴィヴィオも思わず聞き返してしまう。

「だから、あなたは私のことをどのような呼び方をしていたのです？」

レヴィを父と呼び慕っていたのですから当然私とも交流はあったでしょう」

「え、まあそうですねえ」

シユテルの質問に面食らうヴィヴィオ、ヴィヴィオ以外にも面食らったのか後ろから「おーい、そこは『私達』だろ、我を仲間外れにするな」とかいう言葉が聞こえた気がするがシユテルはこれを華麗にスルー。

「で？ 何と呼んでいたのですか？」

「いやあ、その件もまた複雑というかめんどくさい事情がありました」

「はい」

「シユテルさん、と人前では呼んでいます」

「人前で、とは」

「えっと、実はパパをパパって呼び始めた頃にシユテルさんからは

『シユテルママ』と呼ぶように教わったのですが……。なにやらなのはママが良い顔をしなかったというか、私の保護責任者になってからはよりその傾向が増したと言いますか。ですので人前、特になのはママの前では『シユテルさん』と、ちよつと他人行儀な感じで、パパやデイアーチエさん、シユテルママだけの時は『シユテルママ』とちよつとフランクな感じでこう、使い分けるようになりまして」

「なるほどなるほど」

「えーつと、これでご満足いただけただけでしょうか……」

「はい。特に聞くことはないでしょう」

「ぐええ」

シユテルからの了承を経た瞬間、もう語るものは語りつくしたと言わんばかりに、ヴィヴィオは足を崩し廊下であろうがお構いなしに崩れ落ちる。

「ちよつと、ヴィヴィオ汚いよ」

そんなヴィヴィオを流石に見咎めたのかフェイトが慌てて近寄り立たせようとするが――

「あー！ フェイトママいけません！ いけませんフェイトママ！ 足がしびれてあー!! いけません！」

フェイトに腕を引っ張られたせいで足に刺激が走ったのか、涙目になりながら悲鳴を上げ始める。

「あわわ。ごめんね、足しびれてたんだね……」

「はい、そうなのです、ヴィヴィオはもう動けないのです。なので、フェイトママにおんぶを要求するのです。足がしびれて動けないので」

割とガチで半泣きになりながらも、自分のキャラを見失わずフェイトに無茶振りをするヴィヴィオ。その要求はさすがに優しさの化身、大天使フェイトといえど（物理的な意味で）叶えることは無理であった。

さすがにそんな無茶な要求をしたヴィヴィオが目にも余ったのか、脇で静観していたアインハルトがヴィヴィオに注意する。

「こら、ヴィヴィオさん。さすがに今のフェイトさんにその要求は無茶無謀つてもんですよ。自分の体重考えてください」

そんなアインハルトの言葉もまた、相も変わらず毒が多分に含まれていた。

常日頃ならスルーもできるアインハルトの毒だったが、さすがに女子としては聞き逃せないワードが入っていたため、ヴィヴィオも抗議を返す。

「なんと！ アインハルトさんは今女子に入ってはならないワード堂々の第一位を言いましたね！ これは戦争ですよ！」

「なーにが、戦争ですか。足がしびれて動けない軟弱者が。ウリウリ」
「あつ！ ダメつ！ ダメです！ そこは今はダメえ！」

容赦なくヴィヴィオの足をつつくアインハルトの猛攻に耐え切れず、足に衝撃が入らない程度に身体を振じるヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオの反応が面白いのか、それとも今までの憂さ晴らしかアインハルトは執拗にヴィヴィオの足へ刺激を与え続け、ヴィヴィオの反応を楽しんでいた。

「おい、シュテルにフェイト、さすがに收拾がつかん。どうにかせよ」
そんな二人を眺めながら、現在ヴィヴィオが足をしびれさせる原因を作りだした二人に、ディアーチエが王命を下す。

「む、まあそうですね、たしかに無駄な時間を使わせてしまいました」
「あ、そうだよ、今は時間が無いんだもんね」

ディアーチエの言葉で現在のアースラの状況を思い出した二人は、とりあえずはしやいでるヴィヴィオとアインハルトをどうにかしようとする。

「とりあえずヴィヴィオ、行きますよ。抱えられなくても二人がかりで担いで飛行でもすれば問題ないでしょう」

「うーん、ちよつと乱暴な気もしなくもないけど仕方ないかなあ」

そう相談しながらシュテルとフェイトは、ヴィヴィオを両方から抱

えようとヴィヴィオを挟む位置に移動すると、それを拒むようにヴィヴィオが丸まり、防御態勢をとる。

「ヴィヴィオはアインハルトさんにけがされて傷心なのです。そんな荷物みたいに扱われるくらいなら、元気が戻るまでここでうずくまってるのです」

「えーっと」

「むう、どうしましょうか」

駄々っ子そのものの対応をするヴィヴィオ（なお、フェイトは9歳、ヴィヴィオは11歳）の対応に困り、シユテルとフェイトの手は差し出された状態で虚空をさまよう。

「まったく——」

流星に我がままが過ぎるし、自分も遊びすぎたと反省したのか、一息つくまにアインハルトの空気が変わりかけた瞬間——

『フェイト、しばらく体借りるよ』

——レヴィの念話が一同に届く。

その念話を区切りにフェイトの雰囲気が変わる。

柔和な雰囲気は凜とした雰囲気へと激変し、虚空へと差し出された手は確固たる意志を持ってヴィヴィオへと伸ばされる。

そしてそのままヴィヴィオの首の下と太ももへと腕を差し込み、ヴィヴィオを軽々と持ち上げる。

いわゆるお姫様抱っここの体勢であった。

「全く、お痛がすぎるよ、ヴィヴィオ」

「ふえ」

急に与えられた浮遊感に驚き目を開くと、ヴィヴィオの眼前には

凜々しい表情の青色の瞳をしたフェイトの姿。

「フェイト……レヴィパパ？」

「うん、そうだよ、ヴィヴィオ」

その雰囲気、自分を見つめるその表情が、ヴィヴィオの幼かったころの懐かしい記憶を呼び起こす。

「ほら、今回だけは特別にこのまま連れて行ってあげるから、危ないからボクの首に手をまわして」

「うん」

さつきまでとは打って変わって、まるで借りてきた猫のように大人しくなったヴィヴィオは、素直にレヴィの言うことを聞きレヴィの首へと腕を回す。

「さ、行こうか。ごめんね王様、マリーさん。無駄な時間使わせちゃったね」

「いや、よい。面白い話であったしな」

「はい。未来のフェイトちゃんになのはちゃんねえ。大層立派になっちゃうみたいじゃない」

レヴィの言葉にデイアーチェとマリーは笑って許し、たいして時間を使った張本人たちは、少々申し訳なさそうであった。

「すみません、レヴィさん。少々おふざけが過ぎました」

「そうですね、あなたに手をかけさせてしまい申し訳ありません」

『ごめんね、レヴィ』

アインハルト、シユテル、フェイトの順に、三者三様にレヴィに向かって謝る。

その謝罪をレヴィは笑いながら受け止めていた。

「あはは、ボクも止めはしなかったからね、謝られるほどじゃないよ」

そう言って朗らかに笑うレヴィの首元から微かにレヴィにのみ聞き取れる声が聞こえる。

「……パパ」

「ん？ なんだい、ヴィヴィオ」

「……ごめんささい」

レヴィの首元に顔を埋めたまま、小さく謝るヴィヴィオ。

その謝罪の言葉を聞くと、レヴィは慈愛を感じさせる穏やかな微笑を浮かべ――

「ん、良い子だね。ヴィヴィオ」

――ヴィヴィオにだけ聞き取れるよう囁いた。

ひと悶着あり時間はかかったが、レヴィ達はみなアースラの技術部へとたどり着く。

「はい、もう足も大丈夫でしょ」

技術部へとたどり着くとレヴィはここまで抱えてきたヴィヴィオを優しく地面に立たせる。

「うん。ありがとう、パパ」

「どういたしまして」

事情がバレてしまったては仕方ないとばかりに、ヴィヴィオからレヴィとフェイトに対しての呼び方は『パパ』、『フェイトママ』といった、ヴィヴィオの慣れた呼び方へと変わっていた。

「それじゃあヴィヴィオちゃん、ついて早々で悪いんだけど件のもの確認させてもらえないかな」

「はい、大丈夫です。クリス、お願い」

マリーの頼みに快く頷きながらヴィヴィオはクリスに呼びかける。ヴィヴィオの呼びかけにクリスは頷くと、マリーの下へ行き、どこからともなく(クリスにとっては)一抱えある記録媒体を取り出した。

「あ、外部ストレージかなにかにまとめてあるのね、助かるわ」

クリスが抱える媒体を受け取りつつ、マリーはクリスの頭をなでな

がらお礼を言うを受け取った媒体を端末に接続した。

「うん、特に危険なものとかもなさそう。これかな」

端末を操作しながら媒体の中身を吸い出していくマリィ。

他の面子は思い思いの場所に座り、マリィの作業の様子を眺めていた。

「なんか、すごいね。操作が早すぎて何が何だかわからないや」

ヴィヴィオを下した後に身体の操作権を返してもらったフェイトは、高速で動く画面に目を右往左往させながらポツリとつぶやく。

「レヴィはなにしているかわかる？」

『うんにや、全然。そういうのはシュテるんとか王様の役目だから』
「そっかー」

「あ、はは。まあ今は危険なものが無いかの調査中なのよ。ヴィヴィオちゃんや未来のレヴィちゃんを信じてないわけじゃないんだけど、外部の物だから、一応ね」

天然娘とアホの子の会話を聞き、マリィは苦笑いしつつ二人に向かって言う。

「ん、終わったようですね」

そうこうしているうちに、マリィのチェックは終わり、吸い出したファイルが開かれる。

「うーん、たしかに。プログラムそのものみたいね」

「はい、私達が作成しようとしていた攻勢プログラムの完成系、と言えるでしょうね」

シュテルとマリィは与えられたファイルを眺めていく。

「これが未来のレヴィちゃんが言っていた
F・O・R・M・U・L・A システム関連みたいね。これダイ
アーチェちゃんとシュテルちゃんにも送信するわね」

「はい。ありがとうございます」

「うむ、助かる」

言うが早いか行うが早いかというタイミングでシユテルとデイアーチエにマリーからファイルが転送され、二人は手元でそれを開き、食い入るように眺める。

「論文も入っていますね」

「ああ、『Force Obstructive Rule Material Unified Lyrical Ability』の頭文字をとりFORMULA。『力を妨害する支配物質を統一した叙情的な技能』……。……。全くもって意味が分からんな。名称もいまいち文章というより単語を並べただけのように感じられる」

「王、フォーミュラの命名はレヴィのようですね。注釈に書いてあります」

「そのようだな。『Lyrical』はせつかくだから盛り込んだ（※命名者談）だと……。全くもって意味が分からん……」

フォーミュラに関してのあまりにトンでもな命名理由を読み、デイアーチエは頭痛がしてきたのか眉間を揉み解しながら、読み進めていく。

「とりあえず、こっちは正常に動かせそうだよ」

デイアーチエとシユテルがフォーミュラの論文、設計図を読み進めるのに夢中になっている最中、端末を操作してたマリーが顔を上げ、二人に向かって声をかける。

「そうですか。それは良かった」

「うん、こっちの予測結果も十分満たしてるし、見たところ問題はなさそう。あとは皆のデバイスを借りればすぐにでもインストールできるとよ」

「それは重畳よ」

『あ、ならさ、せつかくだしフェイトのバルディッシュに先にインストールしてもらいなよ。今日はボクと一緒にだから出撃予定無いしさ』
「うん、そうね。なるべくずらして作業した方が出動の事とか考えないと必要よね。うん、フェイトちゃんが良いならそうしましょう」

レヴィの申し出を少し考えたのち、マリーは快くうなづきフェイトへ伺う。

「えっと、どのくらいかかりそうですか？」

「うーんそうね」

フェイトの質問に対しマリーは少し考え答える。

「ほとんど完品だからインストールは10分くらいかしらね。そのあとは訓練室で動作確認してもらった方が良いから、出動できるようになるまで1時間ももらえれば十分かな」

「それなら、はい。大丈夫です」

今日はフェイトは待機任務であるため、よほどの事がない限りは出撃する予定はなく。その中でも1時間程度であるなら何の問題もないと判断し、バルディッシュをマリーへと託す。

「バルディッシュのこと、よろしくお願いします」

「はい。バルディッシュ、たしかに預かりました」

その様子を見ながら思案にふけていたディアーチェは、マリーがバルディッシュを端末につなぐのを見ると、マリーに声をかけた。

「アテンザ技師」

「はい？ どうしたの？ ディアーチェちゃん」

「せつかくの機会だ。我——いや、ここにいる面子全員分のインストールを任せてもよいだろうか」

その言葉に驚いたのは、『ここにいる面子』であるヴィヴィオとアインハルト。

特にアインハルトははたから見てもわかりにくいが大層驚いていた。

「すみませんディアーチェさん。まさか、私達の方も用意されているのですか？」

「ん？ ああ。そのようだ。アインハルトはアステイオン、ヴィヴィオはコールブランド用とわざわざデバイス名まで指定されているぞ」「なんと……」

「おー。まさか私達の分まであるだなんて。流石パパ、先見の明といえますかよく昔のこと覚えているといえますか」

アインハルトとヴィヴィオが未来のレヴィの準備の良さに驚いている中、マリィはディアーチェの提案を脳内で検討していた。

「そう、ねえ。さっきの会議の結論としてシュテルちゃんとディアーチェちゃんはレヴィちゃんの躯体作成を優先するんだったよね」

「ええ。そうなります」

「うん、ならそうだね。せっかくだし一緒に預かっちゃおっか」

「ああ、よろしく頼む」

そういいながらディアーチェは自身の杖であるエルシニアクロイツをマリィへと渡す。

ディアーチェを皮切りにシュテル、アインハルト、ヴィヴィオも自身のデバイスをマリィへと預けていく。

「はい、エルシニアクロイツに、ルシフェリオン。アステイオンにコールブランド、ね。確かに気づきました」

『王様。ボクの方はどうするの？』

皆がマリィへとデバイスを預ける中、レヴィの念話が届く。

躯体の完全廃棄と同時にバルニフィカスも廃棄したレヴィは、現状預けようにも預けるものが無い状態であった。

「レヴィの分は躯体構築と同時にバルニフィカスにも手を加える予定だ、その時にこちらで同時に組み込む事にした」

『あ、そうなんだ。了解。それなら大丈夫！』

「うん。それじゃあ皆は私が責任をもって預かるから、ちよつと待っていてね。せっかくだし出撃組が返ってくるまでに皆の分動作確認まですませちゃおう」

マリィの言葉に全員挨拶を返し、全員分のデバイスにプログラムのインストールが終了するまで、しばしの休憩時間を取ることとなっ

た。

G O D 編第7話 「Levi of Rebirth
h」

『躯体構築率45%……50%……』

機械的な音声のみが聞こえる闇の中、レヴィはただ誕生の時を待っていた。

未来からのメッセージを確認したのが昨日の出来事。

今日はフェイトが出撃当番となっているため、レヴィ自身はマテリアルの意識のみがある闇の中、『紫天の魔導書』の中で自分の躯体の構築を手伝っていた。

『躯体構築率75%……』

シユテルとディアーチェの献身もあり、躯体の設計自体は早朝に完成し、それからずっと3人のリソースをつぎ込みレヴィの躯体構築を続けていた。

今、シユテルとディアーチェの躯体自体は与えられたアースラ内にある自室で、眠るように動作を停止している事だろう。

『躯体構築率99%……』

そしてレヴィ自身もまた、躯体構築が始まってからはずっと紫天の魔導書内で躯体構築を行っていた。作業の進捗率のみが時間の指標となっているこの闇の中、外では何時間が過ぎているのか見当がつかない。

『躯体構築率100%……』

しかし、それももう終わる。長かったような短かったような、懐かしさすら感じる何もない闇の世界に居なければならぬ時間は終わる。

『システムチェック…… オールグリーン……』

『躯体構築は正常に終了しました』

『おはようございます。マテリアル—L』

その音声と共に、レヴィの意識は、レヴィが認識していた闇は蒼に染まる。

軀体からだの表面を稲妻が走る。

本来感じるはずのない電流の刺激に、1日ぶりの身体の実感を感じながら、レヴィは目を開く。

すぐさま目に入るのは仲間であり、家族でもある、大事な二人――。

「うむ、無事目が覚めたようだな」

マテリアル—Dと

「おはようございます。レヴィ」

マテリアル—S。

「おはよう、王様。シユテるん」

そうやってレヴィは朗らかな笑顔を浮かべた。

とりあえず躯体構築が終了したばかりで全裸なのもどうなのかということとなり、スラッシュユース戦闘服をまといその場しのぎとしたレヴィ。

レヴィがそうしている間にディアアーチェは、レヴィの躯体構築が完了した連絡をリンディ達に行っていた。

そうしているとドタドタと廊下を走る大きな足音が聞こえ、レヴィ達のいる扉が開く。

「パパ、起きた!？」

大声を上げながら、勢いよく入ってきたのはヴィヴィオであった。「わあすごい！ほんとにフェイトママそっくり！ 2Pカラーみたい!!」

入ってくるなりレヴィを見つけるや否や、テン上げ→→状態でレヴィの周りを飛び跳ねながら回るヴィヴィオ。

昨日顔をあわせてからというものの何かとテンションが高いヴィオであったが、ここに来て記録更新をたたき出すテンションの上がりっぷりには、さすがのレヴィもどう対応してよいかわからず苦笑を浮かべる事しかできない。

「いや……ヴィヴィオ……2Pカラーって……」

レヴィの、マテリアルLの成り立ちを考えれば2Pカラーというものもあるが間違いではないため、レヴィはヴィヴィオの言葉を強く否定する事ができなかった。

そんなはしゃぐヴィヴィオにレヴィが困っている中、その様子を見かねたディアアーチェが助け舟を出す。

「ところで、ヴィヴィオよ随分と急いでやってきたようだが、どうし

た」

「はい！ パパが復活したとリンディさんからお聞きしたので！ なのでパパ！ 早速一戦やりましょう！ そうしましょう！」

デイアーチエからの問いに答えると、レヴィの目の前でステップとシャドーボクシングを始めるヴィヴィオ。その様はかなりさまになっていた。

「パパからのメッセージで、私と一戦以上するようにとのことでしたので！ さあやりましょう！」

ヴィヴィオ曰く未来のレヴィからのメッセージにあった、レヴィの躯体の再構築が終了したらヴィヴィオと必ず戦うように。との指令を早速こなそうということであった。

「そうですね。レヴィの躯体の様子も確認するつもりでしたし、実際のフォーミュラを利用したレヴィの戦闘力を作戦に組み込むために、どこかで実戦形式で戦っていたかどうかと思っておりますので、いい機会ですし早速やつてもらいましょう」

「うん、シユテるんの言う通りだね。それじゃあヴィヴィオ、お願いできるか？」

「はい！ ヴィヴィオにお任せください！」

シユテルの言葉もあり、レヴィはヴィヴィオに躯体の動作確認の相手を頼む。その言葉にヴィヴィオはとても良い笑顔を浮かべ、力強くうなづくのであった。

レヴィ達はその後、場所をアースラ内の模擬戦室に移していた。

『それでは、レヴィの戦闘データの記録のため、思う存分気のすむまで戦^やりあってください』

シュテルは観測のため、そばに併設されたモニタールームへと途中で合流したアインハルトと共に入り、モニターの準備が完了したことを模擬戦室の中の二人に告げる。

『ヴィヴィオさんの技等の実況、解説は私アインハルトでお送りいたします。よろしくお願ひしますシュテルさん』

『はい。よろしくお願ひします』

なにやらモニタールームが実況スペースの体裁をとりはじめたが、レヴィの前に相対するヴィヴィオはそれを気にせずストレッチを行い、体をほぐしていた。

「それじゃあ、やりましょう！」

「うん。よろしくね、ヴィヴィオ」

「バルニフィカス」

「セイクリッドハート！」

『セットアップ!!』

レヴィは自分の躯体と共に設計が見直された新たなバルニフィカス、バルニフィカス・ジアンサーを握りしめる。

対するヴィヴィオはセットアップと共にその姿を大きく変えていた。

まず身長が伸び、体の各所がヴィヴィオを大人にしたかのように成長を遂げている。

足や腹、腕などの局所に鎧が装着された紺色のボディスーツの上から、上半身だけに白いジャケットを羽織っている。

ヴィヴィオの武装形態、大人モードである。

「昨日もお見せしましたが、今回ヴィヴィオはパパから与えられたすべてをお見せします」

そういつてどこからともなくヴィヴィオは剣型のネックレスを取り出すと掲げる叫ぶ。

「コールブランド!!!」

『セツトアップ 聖 装 ! ! ! 』

その言葉と共にヴィヴィオはまばゆい輝きに包まれる。

そしてその光が収まるとそこには、武装を追加したヴィヴィオの姿。

上から羽織っていたジャケットは裾が伸び、足、腹の装甲は動きをなるべく阻害しない形で大きく防御する範囲が広がっている。

腰の装甲から広がるスカート状の布は、紺色から白色へと変わりよリスカートのように、長く大きく広がる。

サイドポニーの形でまとめられていた長髪は、三つ編みを編み込んだシニョンの形に後頭部でまとめられている。

裾が伸びたジャケットの上からは表が白で、裏地が赤のマントを羽織り、ジャケットの前腕には、指先から前腕を覆うように巨大なガンレットが装着されていた。

「コールブランドTYPE I」

武装展開を終えたヴィヴィオは静かにそうつぶやくと、重厚な鎧に包まれた拳を握りしめファイティングポーズをとる。

その表情は今までの天真爛漫な笑顔とは打って変わり、目元が鋭く口元もきつく結ばれた真剣なものへと変わっていた。

ヴィヴィオから発せられる空気の変化を感じ取り、レヴィもバルニフィカスを両手で握りしめ構える。

『それでは、今回の戦いはクラッシュエミュレートを利用した模擬戦闘で行います。レギュレーションは対ユーリ戦を想定し空中での戦闘のみとしてください』

モニタールームから聞こえるシユテルの声を聴き、レヴィとヴィヴィオはどちらともなく飛行魔法を発動し空へと浮かび上がる。

そしてある一定の高さまで浮かび上がった瞬間——レヴィの目の前からヴィヴィオが消えた。

「!？」

驚く隙もなく腹部に走る強烈な衝撃、そして目の前にはヴィヴィオの姿。

「っは」

あまりにもいきなり受けた衝撃に、レヴィは肺の中の空気をすべて抜かれ苦しむ。

そしてレヴィの体勢が整う前にヴィヴィオは、レヴィの腹に埋めていた左手を引き抜くとともに大きく腰を振り、斜め上から打ち下ろすように右拳をレヴィの顔にたたきつけ、そのまま地面に向けて振りぬいた。

殴り飛ばされた勢いのまま、大きな音を立てて床に激突するレヴィ。

そのダメージから戦闘続行が困難と判断されたのか、ゴングの音が鳴り響きクラッシュエミュレートが解除される。

「さあ、立ってください。まだ、こんなものじゃないですよ」

空に浮かんだまま、ヴィヴィオはレヴィを見下ろしそういう。

「私がパパから教えられた技、力。まだまだこんなものじゃないんです。レヴィ・テスタロッサがレヴィ・テスタロッサのために『完成』させた『御神流』。まだパパから免許皆伝は貰ってないけど。それでも、レヴィ・テスタロッサが認めた、レヴィ・テスタロッサが唯一『完了』を見た王者の姿——『永全不動八門一派御神亜流 総合魔法戦闘術』」

クラッシュエミュレートが解除されても、いきなり受けた衝撃から回復できず、ヴィヴィオを見上げるレヴィに対しヴィヴィオは言う。

「その全てをお見せします。まずは、徒手空拳から——」

レヴィを見下ろすヴィヴィオの姿は、まさに支配者としての――
――王者の姿だった。

あれから三度ヴィヴィオの前に膝をついた。

二度目はヴィヴィオに触れることすら許されず、全ての攻撃を巧みに躲かれ、カウンターで急所を抉られた。

三度目はすべての行動の出足をジャブやローキックで潰され、なすすべもなく体力を削り取られた。

そして四度目の今は、遠距離戦に持ち込もうと放った砲撃魔法を、上から砲撃魔法で押しつぶされ、その隙に近づかれサブミッションで体中を破壊された。

明らかに動きが違った。

こちらはいとも通り空中戦を行っているのに、ヴィヴィオはまるで地面の上に居るように、巧みに体を使いレヴィにダメージを徹してくる。

最初の違いには2度目で気付いた。

レヴィU―Dと戦ったさいに使った足場固定用の魔法。あれを小さく、こまめに打撃の瞬間に生成することで、瞬発力や機動力、打撃力を地上の時と遜色なくくらいに発揮していることに気づいた。

それを試そうとした3度目では、空中に居ながら地上であるという条件が揃ったにもかかわらず、全ての行動の先を行かれた。まだ、ヴィヴィオのほうが早かった。

先ほどの4度目では、あえて見に戻るために距離をとり、射撃戦に努めた。マテリアル―Iとしての気質か、レヴィ本来の気質かはわからないが、あまり気の乗らない射撃やバインドといった絡めてを珍しく使い、時間を稼いだ。

結局はそれすらも相手が上手であり、まともにダメージを与えられずに圧殺された。

「さて、まだできますよね」

時間がないからか、他の理由か。ヴィヴィオは決着がつくと必ず5分ほどしか休憩の時間を与えてくれなかった。

それでも、その5分でレヴィの頭の中の整理は済んだ。観察した結果は解析し終えた。

「うん、十分だ」

そういうと模擬戦室の床で大の字になっていたレヴィはネックスプリングの要領で跳ね起きる。

跳ね起きたレヴィの顔は不敵な笑顔を浮かべていた。

「なにか、掴みましたか」

両の拳を握りながらヴィヴィオが訪ねる。

「うん。ボクとヴィヴィオの違いに気づいたよ」

「そうですか、では——答え合わせです！」

そういうと同時にヴィヴィオは軸足の底に小さく展開した足場を踏み込み、チャージを仕掛ける。

レヴィと、普通の空戦魔導師との違いのその一である。

本来空戦魔導師は空中での移動は全て飛行魔法で行う。それは加速はもちろん、スタートとストップまで飛行魔法で行っている。

普通の空戦魔導師であればそれで問題はない。

しかし普通でないのなら。武術としての踏み込みや歩法を習得した空戦魔導師に限って言えば、初速だけなら己の足で地面を蹴った方

が速い。

いうならばロケットが己の力だけでエンジンを噴火し加速するだけではなく、カタパルトを用いて勢いをつけ初速を稼ぐようなもの。

それをするために、ヴィヴィオはデバイスが無くても足場を自分の足元に瞬時に生成することができるように鍛えられている。ほぼ無意識に、踏み込みたいときに踏み込みたい場所に足場が生成されるように。毎日毎日、幼いときにレヴィに指示を仰いでから毎日。無意識に刷り込まれるほどにその魔法を繰り返していた。

そして初等部4年生の進級祝いで与えられたデバイスの中に、それを補助する装備が含まれていた。

現在もヴィヴィオが足に装着している足鎧。それは、スバル・ナカジマのマツハキャリバーのような、足場を生成する魔法が組み込まれた、それを補助するためのだけのデバイス。

そして、それと同じものはレヴィの設計書にも含まれていた。故に、一つ目の違いにはすぐさま思い至ることができた。

踏み込みの勢いそのままヴィヴィオが拳を突き出す。

ただのストレート。

しかしそのストレートは、空中で無理やり腕を振るつたにしてはコンパクトで、鋭く、そして腰が乗っていた。

空戦中に行う拳の突き出しにしては早く、鋭く、体重の乗った一撃。

その予想を反する早さに、重さにレヴィは苦戦してきていた。

今まで苦労したそれをレヴィは最小限の動きで避ける。

そしてカウンターに魔力刃を展開し薙刀状に変形したバルニフィカスで突く。

その動きもまた、これまでのレヴィの動きとは見違えるほどコンパクトで早く、鋭い一撃だった。

その一撃をヴィヴィオは突き出していない側の腕で防御し逸らす。

模擬戦が始まってから初めてヴィヴィオが防いだ瞬間であった。

拳と薙刀を突き出しあつた至近距離で二人は笑みを浮かべる。

「気づき、ましたね」

「うん。君の動きの種は暴いたよ」

ヴィヴィオの動きの理由。

空中で地上と同じ動きが、大振りによる遠心力を利用する以外で打撃力を増すことができた理由。

圧倒的に速いはずのレヴィがすべての行動においてヴィヴィオに後の先を取られた理由。

「まさか、自分の身体を、自分の魔力で無理やり動かすなんて、ね」

レヴィのその言葉にヴィヴィオは笑みを深める。

「教えたのはパパですよ。そしてそれこそ私が、私だけが唯一パパのための御神流を継げると、そう判断された理由です」

ヴィヴィオの遺伝子の元となったベルカ最強と謳われた最後の聖王、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。彼女の両腕は義手であった。

血の通わぬ仮初の両腕を、魔力で人形を操るように、外側から動かす。それによって彼女は日常生活を営み、武術を嗜んでいた。

その才能が、綿密で緻密な魔力操作の熟練度が、それを行っていた記憶が、ヴィヴィオがレヴィに御神流が継げると、己の全てを授けられると判断された理由だった。

「正気の沙汰じゃない。調整を間違えれば、自分の身体を傷つける」

「はい。だからパパは人並み以上に頑丈で、人ではない身体の自分だからできる身体運用だと言っていました。私が、ほんの少しでも身体が弱ければ、絶対に教えなかった、とも」

二人はどちらともなく、拳と武器を下し距離を取りながら、会話を続ける。

「やっぱり、正気じゃないよ。ボクの、マテリアルLの運用方針とはかけ離れた結論だ。精密な魔力操作だなんて、パワーの代わりに精密動作性をおざなりにしたマテリアル^ポLのコンセプトとは真逆もいところだ」

「そうです。それでも」

「それでも、そうしないとユーリには、U-Dには勝てないんだね」

「そうだと思います。パパは『覚える必要があったから覚えた。使わなきゃいけなかったから使った』そう言っていましたから」

その言葉を聞き、レヴィは目を閉じ、深呼吸を一度行う。

「わかった。きつとそのために君が、生きる教本が居るんだろう。だから未来のボクはボクに、ヴィヴィオと戦えと、そうメッセージを残したんだね。君から全てを学べと、今、ここでボクのための御神流を『完成』させろ、と」

目を開き、ヴィヴィオをまっすぐ見つめるレヴィの瞳を、ヴィヴィオもまたまっすぐに見返しながら

「そうです。あのメッセージと一緒に、私宛にパパから手紙が入っていました。『ヴィヴィオのすべてを、その時代のボクに見せなさい。』と」

そういうとヴィヴィオの右腕が、右腕のガントレットが光り輝く。

「さあ、Lesson1『身体の使い方を覚えよう』は終了です。このまま次にいきましょう」

そう言い終えると、ヴィヴィオの右前腕は重厚なガントレットではなく、ジャケットそのままになっており、その右手には一本の長剣が握られていた。そうしてヴィヴィオは告げる。

「コールブランドTYPEⅡ」

「なるほど、コールブランド。そのデバイスは——」

「はい。パパとアリシアおばさんが私にくれた。御神流の技を、千変

万化の戦い方スタイルを実現するためのアームドデバイスです」

そういうと、ヴィヴィオは構える。左腕を前に突き出し、右手に持った長剣は相手から見てヴィヴィオの身体に隠れるような、そんな独特な構え。

「Lesson2 『御神流を覚えよう』」

ヴィヴィオのその言葉と同時に、ヴィヴィオとレヴィはお互いの距離を0にする――。

レヴィとヴィヴィオが模擬戦を開始してからどれほどの時間がたっただろうか。少なくとも1時間で済まない時間が立っているのは確実であった。

二人の戦いは今はついに「Lesson3 『フォーミユラを覚えよう』」まで突入しており、最初のころとは打って変わった激戦を繰り広げている。

躯体再構築の際に、それ専用設計し、再構成したシュテルとデイアーチエの考えた答えの一つ。バルニフィカス・ジアンサーの新機能も正常に動作しているのを確認した。

そうして二人が模擬戦し続けているなか、併設されたモニタールームではシュテルが延々と観測を行っていた。

「できれば、あなたの力も実際に目で見ながら計測したかったです
が」

シュテルはそう、隣に座りながらモニターを真剣に見続けるアインハルトに告げる。

「そう、ですね。私も、今とてもだれかと拳を合わせたくてうずうずしています」

そういうアインハルトは、無意識なのかしばらく前から右手を握っては開き、握っては開きとずっと繰り返していた。

「参考までにお聞きしますが、あなたはヴィヴィオとはどれくらいやれますか」

なぜシユテルがアインハルトにそんな質問をするのか、それは今モニタールームで行っている作業と関係がある。

シユテルは今までずっと、ヴィヴィオとレヴィの戦闘を観測しながら、二人の戦闘力に関する詳細なデータを取得、蓄積しあるシミュレーションを行っていた。

「あのお二人の戦いぶりを見ても、まだ不安ですか。ユーリさんの戦いは」

アインハルトが視線もあわせず言い放つ言葉の通り、シユテルはずっと最終決戦となるであろうユーリとの、U—Dとの戦闘をシミュレーションしていた。

より詳細により精密にするべく、作戦の要であるフォーミュラを使える二人の戦いを観測し続けながら。

「そうですね、不安。なのでしよう。なんと繰り返しても、なんと実施しても、私のこの目の前に現れる結果を見れば、不安にもなります」「……そうですね。ヴィヴィオさんと、の話になりますか」

そう言つて、少しだけ弱気な発言をするシユテルを、アインハルトは横目で見てつぶやくように語り始める。

「ヴィヴィオさんとは練習試合、公式戦。それこそ格闘戦、総合戦あわせて何度も拳を交えてきました。その中で、あのように武器を使うヴィヴィオさんを見るのは、正直言つて初めてです。ですので、今のヴィヴィオさんとはそれこそ拳を交えねばわからないでしょう。」

ですが、お互い徒手空拳でなら、魔法を含めた空中戦でも、今のヴィヴィオさんに対しては私が有利ですね。これでもまだU—15チャ

ンピオンの場は明け渡しておりませんので。

フォーミュラを使われて同格か、私のほうが不利なのでしょうね、フォーミュラというモノの性質を見るに。戦えば戦うほど、時間が長引けば長引くほど、私が不利になっていくのでしよう。

私の戦力としては、だいたいそのような物、とお考え下さい」

アインハルトにしては珍しい長台詞を受けてもまだ、シユテルの顔色は良くならない。

「……そう、ですか」

シユテルはそういうことがやつとであり、すぐさまアインハルトの言葉から推測されるデータをシミュレータに打ち込んでいく。

それでも、シユテルの纏う雰囲気は、晴れやかにならない。

「どうだ、様子は」

そんな中、レヴィとヴィヴィオの決着が20回目を迎えようとしている中、別件のとある人物についてリンディ達と話し合っていたダイアーチェが、様子を見に来たのかモニタールームにやってきた。

「ダイアーチェですか、そうですねレヴィは徐々に仕上がってきていますよ」

やってきたダイアーチェへと視線を向けながらシユテルが言うように、レヴィは戦いを通じて新たな躯体、新たな力に対して途轍もない速度で習熟していた。

「いまさつき20回決着を迎えて現在は小休止を取っているようですが、このままヴィヴィオと戦って学び、アインハルトという別の相手と戦って復習を行えば、じきにレヴィの中で『完成』するでしょう」
「そうか。しかし順調そうな割にはシユテル、貴様の表情は優れないようだな」

ダイアーチェの指摘を受け目を背けるように、シユテルは模擬戦をモニターしている画面とは違う、もう一つの画面に視線を移す。

ダイアーチェはシユテルの後ろに移動し、背中越しにシユテルの見つめる画面を視界に収める。

「ふむ、これはシミュレーションか」

「はい」

「見たところユーリとの戦闘か」

「そうです。未来のレヴィからもたらされたデータでユーリの戦闘力、およびこちらの戦力を修正したうえで私なりに実戦を想定したシミュレーションを組み立てています。戦闘の要であるレヴィとヴィオの戦闘データは現在モニターしつつ最新のものへ逐次アップデートを重ね、なるべく決戦時と同様の状況を構築しようとしています」

シユテルは話しながら組み立てたシミュレーションを実行する。その動作を眺めていくうちに、ディアーチエにはシユテルがなぜ浮かない顔でモニターを眺めるのかを思い至る。

「このシミュレーション、もしや……」

「はい。ディアーチエもお気づきの通り、足りないのです」

そうして行くうちにシミュレーション戦闘は決着を迎える。

レヴィ達の敗北という結果を。

「どうしても、どうしてもあと一手が足りないのです。」

現状の戦力ではレヴィとヴィオの二人でユーリの生命力を吸収する能力からの防御、回復、そしてユーリへの攻撃を分担する。しなくてははいけません。しかし、そうするには2人では手が足りません。

そして王の検証の結果、フォーミュラと同様にユーリの能力に耐性を持つと推測されるECドライバーのトーマ。しかしECドライバーの全力を発揮されると、今度はフォーミュラが使えるレヴィ、ヴィオ、そしてトーマ以外の魔導師がともに戦闘できなくなります。ですので、結局2人の負担は変わりません。

せめてあと一人フォーミュラ使いが居れば、それかレヴィではなくフォーミュラを使えるのが私か王であったならば……」

悔しさか焦燥のあまりシユテルは無意識のうちに親指を噛み締め

ていた。

その後ろでディアーチェも顎に手を当てながら考える。考えながらシユテルと会話をする。

「しかし、シユテルか我、そのどちらでもここまで早い躯体の再構築、そして初期設計にない力への習熟は無理だ。それこそまさに時間が足りない」

「はい。王のおっしゃる通りです。今回の計画はレヴィだから、マテリアル—Lだからこそ実行できたスケジュールです。私や王では、あまりにも複雑に過ぎますから」

シユテルとディアーチェの言う通り、初期設計にない仕様を追加してのVerUPをこの短時間で不具合なく完成させることができたのは、偏にレヴィ—マテリアル—Lのもともとの作りが簡素かつ単純であったからできたことであった。

さらに、レヴィ自身はその特殊な生まれから、技術を学ぶということに関しては他の追随を許さないほどの速度があるため、実戦で活用できるレベルまで新技能を習熟することが可能であった。

これがシユテルであれば、新たな躯体のロールアウトにレヴィの10倍、動作テストがスムーズに行っても、新機能を満足に戦術に取り込むほどの習熟には、少なく見積もってもレヴィの5倍の時間を要することだろう。

ディアーチェであればシユテルよりさらに大きく期間を延ばすことになる。

これはそもそもマテリアルの設計思想がそのようになっていたためどうしようもできない事柄であった。

『ふう……は、ははは。勝ったあ』

『が——、また負けたあ!!』

そうしてシユテルが悩んでいる間にレヴィとヴィヴィオの模擬戦もひと段落ついたようであった。

それを見計らい、ディアーチェがマイクのスイッチを入れしやべりかける。

「おい、レヴィ」

『んあ？ 王様じゃん、どうしたの？』

「貴様らが模擬戦を始めて数時間は立っている。もうよい時間だ、ひと段落ついたようだし食事にしよう。実は小鴉が次元渡航者を拾ってきた。そいつと顔合わせもしたい」

『あーい。了解。立てるくらい元気になったら行く』

「ヴィヴィオもだ。よいな」

『はーい。わかりました』

二人の返答を聞くとディアーチェはマイクのスイッチを切るとシュテルの方に向き直る。

「と、いうわけで我はお前たちを呼びに来たのだ。考え続けるだけでは煮詰まろう。とりあえず食事をとりながら気分転換でもするがいい」

「そう、ですね。王の言う通りです」

「なに、腹も満ちて気分が変わればポツと打開策が見つかるやもしれんしな！ では我は先に行っているぞ」

ディアーチェはそういうと、明るく笑いながらモニタールームを去っていった。

「ディアーチェさんの言う通りですね。私はヴィヴィオさんたちを迎えに行つてそのまま一緒に食堂へ向かいます」

ディアーチェの後を追うようにアインハルトも最後にそれでは。といつてモニタールームを後にする。

一人残つたシュテルはシミュレーションを終了し、機材の電源を落としていく。

モニタールームに映し出されている光景を、大人モードを解除したヴィヴィオと一緒に寝ころび談笑している中、アインハルトが入ってきてヴィヴィオと軽口をたたきあう。

そんな光景を見て明るい、満面の笑みを浮かべているレヴィを見つ

めながら――

――対抗策ならば、もうすでに……。でも、それは――。

――シユテルはそう、一人思い悩みながら、モニターの電源を落としました

GOD編第8話 「Battle of [Eve]」

——新暦66年

——第97管理外世界 惑星『地球』、海鳴市上空

——次元航行艦『アースラ』ブリーフィングルーム

そこには、今、総勢30名近い人数が一堂に介していた。

そのメンバーの視線を受けながら、前方の檀上に立つのはアースラのNo2・クロノ・ハラオウン執務官。

「皆、急な招集に応じ、この短時間で声をかけた全員が集まってもらったことに、まず感謝の言葉を」

そういつてクロノは一礼し、すぐさま頭をあげ話を続ける。

「我々アースラスタッフは現在、ロード・デИАーチェ他二名からの要請により、システムU—D、ユーリ・エーベルヴァインの対策のため出動および情報収集を繰り返してきた。

今回こうしてその件に関わるメンバーを集めさせてもらったのは他でもない。先ほど、我らがアースラの優秀な情報官、管制官が今回の作戦対象U—Dを発見した」

クロノのその言葉と共に、脇にいるエイミイが端末を操作し、クロノの背後にある巨大スクリーンに映像が映し出される。

クロノの言葉、その映像を見てブリーフィングルームはざわつく。

「現在流れている映像は、今も管制官が必死に対象にばれないよう、追跡させているサーチャーから送られているリアルタイム映像だ。見てわかる通り、対象は現在、低速ではあるもののランダムに移動を続けている。

デИАーチェから協力要請を受けて今日で5日目、今まで血眼になって探しても見つからなかった対象をやっと見つけられた千載一遇のチャンスだ。

この場に居る面々にはすでに対象を見つけた後の作戦行動については伝えてある通り、このチャンスに失敗は許されない。絶対に掴ま

なければいけないチャンスである。

各員はすでに承知のことと思うが、我々はこの世界の、引いては次元世界の平和のため、このチャンスを必ずモノにしなくてはならない！」

喋っているうちにテンションが上がったのか、演出なのかは定かではないが、クロノの語りは徐々に声が大きくなり語尾が強くなる。

そして、クロノにしては珍しく、断言するように力強く言い放った言葉は、ブリーフィングルームに居る面々全員に鳥肌を浮かばせるほどの気迫に満ち溢れていた。

クロノはあえて、視線を下し、自分の強く握り締めた拳を見つめる。「辛い作戦になる。苦しい戦いになる。もしかしたら、明日はこの場にいる全員とは顔を合わせることができないかもしれない」

そして言葉を切り、深く息を吸い込むと、強く握りしめた拳を台に叩きつけ叫ぶ

「しかし！ それでも我々は勝たなくてはならない！ 無辜の民を守るために！ 平和な日常を守るために！！ なにより！ 望まぬ戦いに身を捧げる、一人の少女を救うために！！

平和の守護者としての誇りと矜持を胸に、挑まなくてはならない！ 究極の闇に、闇の書の真なる闇に！

我々の手で取り戻す！ いたいけな少女を！ 我々の手で終わらせる！ 闇の書の悲劇を！」

叫ぶとクロノは叩きつけた拳を振り上げ、大声で叫ぶ。

「^進Ahead! ^進Ahead!! ^来Go, ^進Ahead!!!」

クロノから発せられる熱狂は、情熱はその言葉と共に、ブリーフィングルーム中へ伝播する。

「これより、最終作戦『エヘリデイ・ダウンケルハイト』を発令する！

各員！ 奮闘努力せよ!!」

クロノが言い終わるとともに、部屋中が拍手と雄叫びに包まれる。

万雷の拍手に送られながら、クロノが壇上から降りると共に、暗かった室内は明るくなり、出入り口から近い者たちから部屋を後にする。

檀上から降りたクロノの元にはエイミイのほかにも数名の人影が集まっていた。

「すごかったよクロノくん！」

そのうちの一人である高町なのはは両拳を握りしめ、振り回しながら、先ほどのクロノの演説を褒め称える。

「せやなあ。さすが現役の執務官さまさまやね」

はやても先ほどのクロノを素直に絶賛していた。

「さっき言ったことはすべて本当だ。辛い戦いになる。それでも、気持ちで負けていては、成すべき事も成す事はできない。なら部下が気持ちよく戦えるよう、気持ちを盛り上げるのも、上官の役目というわけだ」

クロノの言葉に感心したようにうなづくはやてとなのは。

その二人に対しクロノは言葉にできない感情が胸に湧き上がるのをグツとこらえ、いつもの真面目な顔を作り出す。

「さあ、時間はない。二人も作戦に取って重要な戦力だ。万全を整えていてくれ」

「うん！ 調子は十分！ さっきのクロノくんの言葉で、気持ちも十二分！」

「今なら、だれが相手でも負けるせえへんな！」

クロノの言葉に、なのはとはやては笑顔で答える。

クロノ達以外にもブリーフィングルームだけではなく、アースラ中で特に仲の良い者同士で言葉を交わしあいながら、出撃の準備が着々と進められていた。

「さーて！ いっちよやつちやりましょうかねえ！」

「あまり調子にのって空回りしないでくださいよ。ヴィヴィオさんは

どうにも調子に乗りたがりますからね」

「ぶー！ アインハルトさんは足引つ張らないでくださいね！」

「ちよつと、ヴィヴィオにアインハルト、二人ともこんな時まで口喧嘩はよそうよ……」

『大丈夫だよ、トーマ。これが二人の平常運転、だもんね』

あるところでは、未来からの来訪者たちが。

「闇の書の真なる闇、か」

「誰が相手だろうと関係ねえ！ 全部ぶち壊してやるよ！」

「私、現場に行つて役に立てるかしら……」

「……」

「——夜天の守護騎士達よ、共に主のために力を尽くそう」

『ああ／おうよ！／ええ／もちろんだ』

あるところでは、守護騎士たちが。

そして——

「レヴィ、レヴィ！」

「なんだい？ フェイト」

同じ顔をした二人も、生まれてからこの時までほとんどの時間を共に過ごした二人も。

「絶対に、ユーリを助けようね」

「うん。絶対に助けよう」

言葉少ないが、それでも誰よりも共に過ごした二人だから、二人だけには、言葉にしなくても伝わる物がある。

そんなレヴィとフェイトの二人を遠目に見つめ、シユテルは表情を引き締める。

「ついに時間だな」

そんなシユテルにディアーチエが声をかける。

「ええ」

「最後のピースは、見つかったか？」

「見つかりませんでした」

「ディアーチエの質問に何でもないかのように平然とシユテルが答える。

「そうか、それにしては。成功率の高くない作戦に挑むというのに、貴様にしては清々しい顔をしているではないか」

「そうですね。覚悟を、決めましたから。もう後は奇跡を祈るしかありませんので。ですので、その奇跡を手繰り寄せる覚悟を、決めました」

決してディアーチエとは視線を合わせず、シユテルの視線はもう一人の家族に、レヴィにのみ注がれていた。

まるで、美しい光景を目に焼き付けるかのように。

「……死ぬなよ」

そんなシユテルの様子になにかを感じ取ったのか、ディアーチエは真面目な表情をさらに引き締めながら、言葉をこぼす。

「もちろんです。死にませんし、死ぬませんから。我々が一基でも欠ければ、ユーリを救う手立てはなくなりますので。王こそ、御身を大事にして下さい。我々がどれだけ努力しても、奇跡をつかみ取っても、最後に彼女を救えるのは王のお力だけです」

「それこそ、誰にモノを言っている。我は王の中の王、全ての闇を統べる究極の王『闇統べる王』ぞ」

その言葉を聞き、シユテルは少しだけ口角を合げ、柔らかい笑顔を浮かべディアーチエを見つめる。

「流石です、我らが王。出過ぎた発言をお許しく下さい」

「許す。先ほどの執務官の言葉ではないが、貴様も奮闘努力しろ。『為すべき事を為せ』。すべて、我がすべて許す」

「はい。ご配慮のお言葉、感謝いたします」

そうして、皆が自然と部屋を立ち去る。

ブリーフィングルームに誰一人として残らず、部屋の明かりが消える。

決戦の時は、すぐそこまで迫っていた――。

GOD 編第9話 「Start of the Combat」

ふよふよと空を揺蕩う少女が居た。

カールのついた輝くような金色の長髪が海風に流される。

どこへ行くわけでもなく。

どこへも行かないように。

ずっとずっと逃げ続けていた。

生命きれいなひかりの灯から。

ふと意識が奪われ、明るい光が、温かい光が多くある方へ方向を変えるも、すぐに意識を取り戻し反転する。

そうしてずっと、ふらふらと、ふよふよと。

意識と無意識の狭間で、生命きれいなものの灯から逃げるように。

—— そうしないといけないから。

—— そうしないと怖いから。

—— あんなにもきれいなものを、システムU—Dはすべて奪ってしまっから。

そうして、ユーリ・エーベルヴァインはずっと己と戦っていた。
ありとあらゆる生命シの天敵スと。

そうしている時、ふと気が付く。

沢山の光生命反応が、己に近づいてくることに。

——ダメ。私に近づいてはいけない！

そう思っても、声にはならなかった。

目が覚めてから、目を覚ましてしまつてから長い時間己を律してきた彼女はもう夢うつつであり、今自分の身体を操っているのがユーリ自分なのかU—Dなのかすら判断つかなかった。

そうしているうちに、自分がいる場所が変わったことを直感で理解する。

アースラから遠隔で起動された結界である。

「対象とエンゲージ」

『みんな、頑張つてね！』

黒づくめの小さい魔導師の言葉に、どこからか声が返ってくるのを見つめるユーリ。

気付いたら、周囲は大きさまざまな眩いのちのひかりい輝きに囲まれていた。

「ユーリ」

その中から、まだ唯一認識できる存在が声をかけてくる。

——マテリアル—D。

「マテリアル—D」

こんどの思考は口に出すことができた、今はまだ、自分であるらしい。

「終わらせに来たぞユーリ。すべてを」

「そう、ですか」

——やっつと、終われるんですね……。すべての命を喰らってしまう

私は。^{せしほう}

「——やく」

「なに？」

「はやく、してください。私^Uが、あなたたちを殺さないうちに!!」

ユーリの慟哭と共に、ユーリの背中から炎が噴き出す。

魄翼^ソは大きく広がり、魄翼^ソから広がるエネルギー^ア光はユーリの身体を覆う。

その姿はまさに巨鳥。どす黒い血のような、赤黒い、絶望の鳥。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ
AAAAHHHHHHHH——」

『魔力反応爆発的に増加中!』

アースラの管制室から現場に、ユーリの慟哭と共におきた変化が伝えられる。

「総員戦闘態勢!」

「待っているユーリ! 今、救ってやる!!」

クロノとディアーチェの叫びとともに、戦いの火ぶたは切つて落とされた。

「一番槍は——」

「私たちが貰ったあ!!」

クロノの指示とほぼ同時にユーリに向かって飛び出したのは、夜天の守護騎士であるシグナムとヴァイータ。

対人戦闘力がトップクラスのシグナムに、対物対大物などの破壊性能の高いヴィータ。

現場にあつまる魔導師の中でもトップクラスの攻撃力をもつ2人が躍り出る。

「手加減は無用と判断させてもらおう！ 紫電——」

「遠慮は無しで行くぜ!! ラケーテン——」

シグナムが剣を振りかざし、ヴィータが槌を振り上げる。

2人のデバイスがカートリッジをありつたけ装填し、葉莖を輩出するとともに、魔力を爆発的に増加させる。

「一閃!!!」

「ハンマー!!!」

炎の斬撃とロケット噴射で加速した槌が同時に激突する。

たった一人の、小柄な少女に向かって。

「!!!」

爆炎と共に吹き上がる煙幕によりユーリの姿は見えなくなる。

あいさつ代わりに技を打ち終わった2人は、しかして油断せずその煙幕を見据える。

「どうだ、ヴィータ」

「話に聞いてたよりは手ごたえがあった。バリアを砕いた感触もした。攻勢プログラムってのは十分効いてるっぽいぜ。だけど」

「ああ。だが——」

海風によって急速に晴れていく煙幕を見つめながら2人は声を掛け合う。

ヴィータの言う通り、シグナムにも手ごたえはあった。

それは、レヴィイから聞いていた話よりは大分大きいものだった。

しかし——

「浅い、か」

——晴れた煙幕から現れるのは、傷どころか汚れすら服にも体にも付着していないユーリの姿。

手ごたえはあれど、それは話に聞いていたよりは、の但し書きがつく。

今の手ごたえでは、仕留めたどころか傷をつけたことも怪しいと2人は感じていた。

そしてその感覚はあたっていた。

痛くも痒くもない、といった様子でユーリは佇んでいた。

そして、その背の魄翼が大きく開くと、そこから雨霰のごとく魔力弾がまき散らされる。

「散れー!」

シグナムの声と共に、ユーリの側から各々の判断で魔力弾を避けるために動く。

しかし、動かぬ人影がただ一人。

桃色の光を放つ魔法陣の上に立ち、デバイスをユーリに突きつけるのは、高町なのは。

「ユーノくん!」

なのはに向かっていた魔力弾が当たるかと思われたその時、なのはの声とともに緑色の障壁がなのはの目の前に現れる。

「なのは、防御は任せて!」

なのはと共に死線を潜り抜けたユーノ。その補助魔法の能力はクロノをして「流石」と言わしめるほどの腕前。

そんな彼が、全力でなのはをサポートしていた。

なのはが全力を出せるように、意識のすべてを攻撃に割けるよう、防御のすべてを担っていた。

「うん！ 受けてみて、私の全力全開！」

<Excelsion Buster>

「ブレイク、シューーーーーーシューーーーーーット!!!」

掛け声とともに放つはエクセリオンバスター。現状のなのはの砲撃魔法では随一の威力を誇る。

その砲撃は道中にある魔力弾をかき消しながら一直線にユーリへと飛翔する。

ユーリもその砲撃の脅威を悟ったのか、魄翼が攻撃の手を止め、周囲へ展開しバリア状に変化する。

直撃。

エクセリオンバスターの炸裂反応もあわさり、再度煙の中に埋もれるユーリ。

そして、エクセリオンバスターを防御するために緩んだ攻撃の手。その隙を見逃す魔導師は、この場には立っていない。

「プラズマスマッシュャー」

「雷光破」

「デイザスターヒート」

「シユワルベフリーゲン」

「ブライズカノン」

「アロنداイト」

「ブリユーナク」

「デイバインバスター」

「シルバーハンマー」

『ファイネストカノン』

雨霰と四方八方から飛び交う砲撃魔法。

そのどれもが手加減なく、そのどれもが本気で。そんな集中攻撃を受けては一溜りもないだろう。

相手が、普通の魔導師であつたのなら。

雨霰と降り注いだ砲撃魔法によつて煙幕はさらに濃度を増したが、その煙幕を切り裂くように無数の炎弾がところかまわずまき散らされる。

己に近づけないためと、視界を確保するためにユーリはスピットフレアを撒き散らす。

「いまの一斉射でもダメージ無し、か」

煙が晴れた先に見える無傷のユーリを見てクロノが呟く。

「ちくしょう。堅すぎんだよ！」

スピットフレアによる弾幕を避けながらヴィータが叫ぶ。

砲撃魔法を使える者が全員で一斉掃射した砲撃魔法を受けても傷一つついた様子のないユーリにヴィータだけでなく、戦場にいる全ての人が同様の感想を持っていた。

「でも、まだアレは使つてこないみたいですね」

最小限の動きで弾幕をよけつつも接近を狙うヴィヴィオの言葉に全員が言葉もないうなづく。

「多分、残っているユーリ本人の意思が使わないよう抑制しているのでしょうか。その代わりその抑制が強固な防御として機能してしまっているのかと」

ヴィヴィオの言葉を引き継ぐようにシユテルが主観を述べる。

その考察の裏付けをとるように、ユーリは戦闘開始からその場を一歩も動いてはおらず、その両腕は己を掻き抱き、攻撃といえる攻撃は背の魄翼から放たれる散弾による無差別な弾幕のみであつた。

それはまるで、自分に誰も近付けさせないように丸まるハリネズミのよう。

「そのおかげでこうして全員が好きに行動できる、というのはありがたいが——」

「向こうにダメージが通らんかったらなんも意味ないなあ」

そんなユーリの様子に辟易としているディアーチェとはやての言葉は、その場に居る全員の焦りを代弁していた。

その中で積極的に動く影が二つ。

「フェイト、いこう」

「うん。レヴィ」

この場に居る誰よりも速い2人が同時に加速する。

ユーリが張る弾幕を、フェイトは極力無駄の無い動作で。レヴィは強引に身体を操りながら無理やり。

お互いの性格が表れる機動を取りながらも、高速で、確実にユーリに近づく。

「スライサー」

レヴィの呟いた言葉と共にバルニフィカス・ジアンサーは薙刀状のスライサー形態へと変形し、魔力刃を展開。

< Crescent Form >

たいしてフェイトの持つバルディッシュ・アサルトは音声で変形を告げ、大鎌状のクレツセントフォームへと変形する。

「ズレないでよ、フェイト」

「あわせるよ、レヴィ」

そうして愛機を変形させた2人は、ユーリを軌道上の中心に置くように大きく離れ、一気に加速する。

「雷光——」

「ライトニング——」

そうして2人が描く線が、ちょうどユウリを中心点として重なる瞬間——

『X字切り！』

——手に持った刃を振りぬきながら、加速を止めずそのまま交差し通り過ぎる。

ライトニング クロススラッシュ
雷光 X字切り

その名の通りレヴィとフェイトが高速で対象をX字に交差するよう切り裂き、その加速を止めずに過ぎ去る一撃離脱のコンビネーション技。

高速移動による加速度のつた一撃。その威力、衝撃はさることながら、2人で挟むように同時に斬撃を対象に命中させることにより、ダメージの受け流しを許さず、対象に確実に強烈な一撃を与える。

その威力は相乗効果によって一人で突撃するより何倍もの威力を発揮する。

しかしこの技、一瞬でも衝撃の伝わる打点、攻撃の当たるタイミンがズレたら最大威力を発揮せず、ただの1+1のダメージしか与えられない繊細な技でもあり、長年一つの身体に同居していた2人だからこそ最大限の威力を発揮できる連携技であった。

その攻撃はさすがのユウリも怯んだのか、一瞬スピットフレアの勢いが弱まる。

極短時間、それこそ数秒もない時間を利用し、ユウリに近づく影。

X字切りを放った勢いのまま反転し、再度X字切りを狙うレヴィとフェイト、そしてそれに合わせるように動いている剣の騎士、シグナム。

「シグナム!?!」

予想外の乱入者にレヴィは驚くも、シグナムの存在を気にも留めな

いフェイトに気づく。

「シグナムなら、大丈夫」

レヴィの視線に気づき、強くなつきシグナムに対して強い信頼を見せるフェイト。

フェイトとシグナムが出会ってからの3か月。短いようで長い3か月は、フェイトにとってシグナムの実力に疑問を抱かせる必要はない時間であった。

「シグナム！ 合わせられる!?!」

コンビネーションを中断することもできるが、する気のないフェイトを、シグナムの力量を信頼するフェイトを信頼しレヴィは叫ぶようにシグナムに問う。

「愚問。ひよっこ2人に合わせることなど、造作もない!」

シグナムはそう叫びながらユーリに近づくにつれ、レヴァンティンを振り上げカートリッジを装填、炸裂させる。

「紫電——」

一足早く魔法を発動し、目の前に迫るユーリを叩き切らんと剣に炎を纏わせるシグナム。

明らかにフェイトやレヴィより早い魔法の発動。しかし、それはレヴィとフェイトの速度を計算したうえでの移動、魔法発動であり

「雷光——」

「ライトニング——」

遅れてレヴィとフェイトが体制を整えたように見えても——

「一閃!!!」『クロススラッシュ!!!』

——三本の剣閃は綺麗に*の字を描くようにユーリを中心に交差する。

そして先ほどと同様にレヴィとフェイトは勢いを止めずにユーリ

から離れ、シグナムも剣を振り下ろした勢いをあえて殺さず、海面に向かつて降下する。

3人の即席連携攻撃の衝撃でユーリが大きく怯み、そしてその攻撃を繰り返した3人は高速でユーリの側からなにかに道を譲るように離れる。

そしてそれは訪れる。

「チャージ完了！」

「迸れ、焰の煌めき！」

ザファイラとユーノ。

防御役の2人にユーリからの防御を完全に任せきること、なのはとシュテルの砲撃魔法は準備を完了していた。

2人の眼前に聳えるのは収束魔法と見紛う魔力球。

防御に気を裂かず、自信の魔力のみを溜めに溜めた砲撃魔法は、まるで二つの恒星のように、桃色の光と朱色の光が煌めき輝く。

「ハイペリオン——」

<Hyperion Smasher>

「セレネシアン——」

フェイト、レヴィ、シグナムの3人による*字切りによって完全に一瞬スピットフレアが止まり、前衛の2人が道を開けることが可能になったその瞬間を狙ってフルチャージの砲撃魔法が放たれる。

『スマッシュャー!!!』

なのはとシュテルの砲撃は迷うことなくユーリへと突き進み、直撃。

込められたあまりの魔力量に着弾した魔力はそのまま止まらず、ユーリにぶつかり弾けるようにユーリの後ろへと拡散。

なのはとシュテルの2人とユーリを挟み逆側に位置してしまつて

いた者は慌てて、その余波を避けるほどの勢いで、二つの大魔力砲撃はユーリを飲み込んだ。

その光が途切れる間もなく、旋回を終えたレヴィとフェイトは三度ユーリへと突き進む。

シグナムとの即席連携、なのはとシユテルの砲撃により、スピットフレアは完全に止まり、2人を阻む物は何もない。

単純に、最速で、一直線に。

レヴィとフェイトで挟むように高速で接近し、砲撃魔法の光が収まる瞬間を狙い、三度目のコンビネーションを放つ。

『ライトニング雷光——』

2人の三度目の斬撃がユーリに向かって放たれるその瞬間。

炎の剣が二本、光から飛び出てくる。

ユーリを挟むように振るわれた二本の剣閃は、先ほどまでとは違い、突き進むことなく止められる。

光から、光の中から現れたユーリの腕から出る、二本の炎剣によって。

ユーリの意識を乗っ取りつつあるU—Dはプログラム特有の冷静な計算によって、レヴィとフェイトの三度目のX字切りを予測し、対抗した。

そしてユーリの視界が晴れると同時に、U—Dは己の予測が間違っていないことを、炎剣によって動きを止められたレヴィとフェイトを見て確認する。

そしてユーリの細腕を振るい、レヴィとフェイトを薙ぎ払うと共に、長大な炎剣によって切り裂こうとした。

その瞬間ユーリは背中から強い衝撃を受けた。

選択していたのがスピットフレアによる周囲の無作為爆撃で逢ったのなら、また話は変わったのだろうが、直近の脅威と認識したレイバとフェイトのコンビネーションへの対応のためにエターナルセインバーによる薙ぎ払いを優先してしまったがゆえに、ユーリは決定的な隙をさらしてしまっていた。

視線を背中側に向けると、そこには魔力で作り出した足場を踏みしめる少女の姿。

ユーリが知らない、現状の自分に対して有効打をもち、最も高いダメージの出せる存在——

「わが拳は空を断つ」

——拳を引く覇王の姿。

拳が繰り出される。

ユーリの身体に強い衝撃が走る。

戦闘が始まってからはじめて、ユーリがうけたまともなダメージであった。

「我が脚は地を穿つ」

蹴りが繰り出さる。

動くことも、反応することも許されないほどの高速で、隙のない連

撃。

その一撃一撃が、確実にユーリにダメージを与えていった。

「殺意は波濤の如く、その武は嵐が如し」

殴打が、蹴りが。

拳が、足が。

絶え間なく、自然に、止まることなくユーリを打ち付ける。

あながしぬまで、なぐるのをやめない
「殺激嵐武断空撃」

——拳打

——蹴打

拳打蹴打

拳打打蹴打蹴!

蹴打打打打蹴蹴蹴蹴打打打蹴打打蹴蹴蹴打打打打打!!!

あまりの衝撃のためか、人体を殴っているとは思えない轟音が、豪雨の音のように絶え間なく鳴り響く。

これこそが、ヴィヴィオをして徒手空拳で勝つのは難しいと言わしめる覇^{アインハルト}王の武。

全ての動作が霸王流の極みに、断空に至ったが故に、アインハルトの繰り出す攻撃は、すべてが拘束も防御も意味をなさない神の一撃。

——神撃。

若干14歳にしてその域にたどり着いた霸王の拳^{けん}。

隙を見せたら殺される。

防御をしたら殺される。

一撃貰ったら殺される。

触れられたら殺される。

掴まれた腕を引き、ユーリを自分に引き寄せそのまま体を回転。
肘でユーリの胸を打つ。これも断空。

そのまま背負い投げの形でユーリに自分の肩を強く打ち付ける。
これもまた断空。

そしてそのまま、投げに入ろうとしたところで、アインハルトの動きが止まる。

「っ!!」

息をのむアインハルト。

右腕はユーリの右手に。

左腕はユーリの左手に。

そして、両足はユーリの魄翼の巨腕に掴まれていた。

たった一瞬の間。アインハルトが鉄山靠てつざんこうの要領で断空を放った一瞬の間を突かれた。

唯人であればあまりの衝撃に動くことはおろか、呼吸すら、心臓の鼓動すらままならぬ打撃を受けてなお、その衝撃を持ち前のタフネスで耐え、システムシステムが身体を動かしているという利点により無理やりアインハルトを拘束した。

アインハルトの攻撃を受けて倒れないタフネスと、4つの腕という普通の人には無い部位があるからこそ実現した突破法。まさに怪物の所業。

「しま——」

——った。アインハルトがそう言い切る暇もなく、U—Dの浸食が始まる。

「あ、あっ」

身体が沸き立つ。

血管が沸騰する。
神経が泣き叫ぶ。
魔力が暴れ狂う。

ダメージを受けたU—Dが、そのダメージをアインハルトそのもので補うために捕食する。
奪い取る。

「ぐ、あああああああああああああつ!!!」

アインハルトの苦痛の叫びと共に、アインハルトの身体から血のような色の結晶が生える。

結晶樹。

ユーリU—Dが持つすべての生命の天敵たる理由。
生命力という概念を物質化し結晶化させ、奪う。
全ての命を喰らいつくす災厄さいあくの力。

いままではユーリの意志で封印されていたそれが、アインハルトの猛攻により受けたダメージによってU—Dの防御反応がユーリの意識を上回ってしまったことで、ついに解禁された。

アインハルトの結晶樹を奪うかのように、ユーリの身体には両手から赤い刺青が体中に刻まれていく。

それはもう、ユーリではなく、破壊の化身。すべての生命の天敵。
『システムU—D砕けえぬ闇』そのものであった。

「ちよおおおおと待ったああああ!!!」

生命力を奪われるアインハルトと奪うU―Dの間を切り裂くように青い閃光が走る。

それを察知し、アインハルトを投げ捨て離脱したU―Dの位置を予測したかのように、U―Dに向かって虹色の砲撃が飛ぶ。

円形に広げた魄翼の障壁でその砲撃を防いだU―Dは回復の邪魔をした攻撃の先を見る。

そこには、フルドライブ^{特大劍形態}状態のバルニフィカス・ギガブレイバーを振るうレヴィと、アインハルトの隣からU―Dへと、同じくコールブルランドのフルドライブである大劍^{TYPE III}を突きつけるヴィヴィオの姿。

「全く、足引つ張らないでくださいってヴィヴィオちゃん言いましたよね」

身体中から生える結晶樹によって身動きが取れないアインハルトに、U―Dから視線を外さずにヴィヴィオが声をかける。

「……あれで落とす気でしたのですが、……少々驕ったようです」

そのヴィヴィオに辛そうながらも声を返すアインハルト。

「アインハルトの返答を確認し、ヴィヴィオは小さく、されど深く息を吐く。」

「良かった、死んではないんですね。私がチャンピオンベルト奪うまで死んじゃダメですからね」

「——それは、長生きしないと……いけないですね」

「UUUUUUUUAHHHHHHAAAAA
AAAAAA■■■■■■■■■■■■——」

ヴィヴィオとアインハルトの会話も、戦場に響く慟哭にかき消される。

それはアインハルトの結晶樹を吸収したことで身体中に刺青のような模様が走り、瞳は緑色、綺麗な輝くような金髪はくすんだ黄色へと変色したユーリの姿。^{システムU—D}

そしてその咆哮と共に、U—Dを取り囲むように動いていた魔導師全員の身体に不快感が走る。

「つう」

その声にならぬ驚愕はだれの口から出たものか、しかし魔導師全員が、機械の身体であるアミタ、キリエ。そして他の存在を浸食するウィルスを保有するEC因子適合者のトーマ以外のすべてがその不快感を覚えていた。

「うええ気持ち悪い！」

「ヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオはあまりの不快感に声をあげるも、レヴィの声で我にかえる。

「はい！」

「使うよ！」

「了解です！」

ヴィヴィオに声をかけながら、レヴィはヴィヴィオと己でU—Dを挟むように大きく旋回する。

その間にも魔導師たちは己の生命力が外へ出ないように抗うかのよう^に身体を掻き抱く。

「時間稼ぎは私たちにおまかせを！」

「なるべく早くお願いね」

「行くよ！ リリィ！」

『行くうー トーマ！』

その身体が機械であるがゆえに生命力という概念の無いフローリ

アン姉妹と、ECウイルスを持つが故にユーリの能力と干渉し、打ち消しあうトーマ。

U・D能力の適応外である3人は足止めのため、咆哮を続けるU・Dに突撃し、四方八方から前衛、後衛を臨機応変に切り替え戦っている。

全ては切り札の準備が整う時間稼ぎのために。

その3人の奮闘もありレヴィは所定の位置につくと愛機、バルニフィカス・ジアンサーを構える。

「バルニフィカス・ジアンサー」

「セイクリッドハート」

ヴィヴィオも胸に手を当て、己の中に同化している愛機へと声をかける。

「超過駆動解放」

レヴィの構えたバルニフィカスは、武器の部分が弾けるように消え去り、持ち手だけとなった棒状に変化する。

「疑似聖王核連結起動」

ヴィヴィオのその言葉と同時に、ヴィヴィオの魔力が爆発的に上昇。

体中からは虹色の魔力光が渦巻くように体外へと放出される。

<F・O・R・M・U・L・A Drive>

『ドライブイグニッション!!』

2人の声が同時に響き渡る。

それと同時に2人の魔力が吹きあれ、そして魔力ではない何か戦場を満たす。

そのなにかによって、アインハルトの身体から生えていた結晶樹は

破壊され、幾分かアインハルトの身体に活力がみなぎる。

それと同じく他のメンバーの身体を覆っていた結晶樹になりかけの結晶が弾け、虚空に消えていくと主に身体中を駆け巡っていた不快感は失せ意識がはつきりとしていく。

そして戦場に居る全員は目にする。

戦場を満たした光の発生源である2人の姿を。

レヴィの襲撃^{スラッシュユースーツ}服は全ての無駄をそぎ落とされ、スプライトモード同様のボディスーツだけとなり、その右手には銀色の鉄棒、コアと持ち手以外のすべてをパージしたバルニフィカス・フォーミュラブレイドが握られている。

あまりにも無駄の無い姿。あらゆる無駄をそぎ落とした、ありのままの形。

対してU—Dをレヴィと挟む対角線上に位置するヴィヴィオはというと、コールブランドの追加装甲により増えたバリアジャケットはさらに豪華さを増し、装甲や装飾がこれでもかというほどに身体中を覆う。

その姿はヴィヴィオの身体が一回り大きくなったように見えるほどに、鎧が鎧の上に羽織っている衣服の量が増していた。

唯一見える顔にも、今までなかった王冠のような髪飾りがすえられ、まさに聖王かくありきと言わんばかりの出で立ちであった。

その右手には聖王の姿とは打って変わり装飾などない、地金と塗装によって見劣りしない程度の見栄えに整えられた長剣が握られており、背には6対12枚のフローターユニットがまるで天使の翼のようにヴィヴィオの背中後ろに浮遊している。

その姿はまさに、現代に蘇りし聖王そのものであった。

その姿を見て一番最初に正気に戻ったのはクロノであった。

作戦の、戦闘の要はレヴィとヴィヴィオであるとはいえ、クロノは戦闘の全指揮権を戦闘に参加する全員から移譲されていた。

その責任感が、使命感がクロノを最も早く正気に戻らせた。

「作戦をBに移行！ 各員フォーメーションF！」

クロノの声によって、全員が意識を切り替え、即座に動く。

前衛はレヴィを筆頭にアミタ、キリエ、トーマが努める形で4人がU—Dへと突撃する。

ディアーチエ、はやて(ユニゾンinリインフォース)、ユーノ、シャルが最後衛となり、それを守るようにヴィヴィオとザフィーラが位置する。

そして残りの全員が中衛という、戦況に応じて前衛の穴埋め、もしくは後衛の防御というフォーメーションを取っていた。

これがフォーメーションフォーミュラ F。作戦B、U—Dが攻撃重視となり結晶樹を使ってきた際、レヴィとヴィヴィオがフォーミュラを発動した後の状況を想定した陣形。

前衛はレヴィが他人の回復、防御にフォーミュラを使う必要があるべく少なくなるように、結晶樹の効果を受けないメンバーがメインで努める。

そして作戦の要であるディアーチエを温存するために、補助に特化したメンバー+広域魔導師のはやてを最後衛に配置。

残りの中衛に対する結晶樹の防御、回復をヴィヴィオが中衛と後衛の間から判断して実施。

少々ヴィヴィオへの負担が重くなるが、疑似聖王核として身体に埋め込まれているロストロギア級の魔力タンクを、それも二基を起動させた今のヴィヴィオはまさに無限に近い魔力を保有していた。

完全なる無限ではないが、無限に近い有限。それを有するため問題ないというヴィヴィオの強い意志もあり、このフォーメーションは決定された。

そして戦況は若干膠着する様相を呈しながらも、緩やかに、しかし激しく行われる。

防御行動が減り、その分のリソースが攻撃行動へと回されたU―Dをレヴィ筆頭の前衛が抑える。連携なんてあつてないようなものだが、隙を見て殴って、殴られそうになったら離れる。それを4人で繰り返す。

その際に中衛は射砲撃や、4人のローテーションが間に合わなかった際の緊急遊撃として、U―Dへと攻撃を続ける。

U―Dの攻撃を受け、大きなダメージを負った場合は早めに離脱し最後衛のユーノ、シャマルから回復と補給を受け再度戻る。

まるで整った模擬戦のような集団戦の様子が、一人相手に行われていた。

フォーミュラの影響範囲から外れないようにするために、ある程度メンバーを固まらせるためやむを得ず取ったこの陣形は、攻撃能力こそ全員での一斉攻撃より少ないものの、安定した戦いぶりを見せていた。

しかしクロノも、シュテルも、ディアーチェも。それだけではない、ここに参加している全員が、その安定にこそ恐怖を覚えていた。

千日手。

勝ちもしない、負けもしない。永遠と同じ手が繰り返される。

普通の持久戦であれば補給の受けれる上、人数の多い側が有利なのは明白。しかし相手は無限の魔力の持ち主。

先ほどまでとは変わり攻撃重視になったため防御力が落ちているとはいえ、無限の魔力の下地に支えられるバリア魔法は、全員の中で最も堅いバリアジャケットを展開するなのは数倍の防御力を誇り、その攻撃能力は対単体に置いてはレヴィやヴィヴィオ、アインハルトと同格であり、対集団においてはディアーチェやはやてに引けを取らない。

そして本当に本当の、誇張表現も嘘偽りもない真の無限の魔力。絶対に尽きないリソース。それをういた回復、それはユーノとシヤマルが魔力炉と連結して回復を行い続けているような状態。

たった一人で20人近い魔導師と同様の戦力を誇る化け物。それがエグザミアをその身に抱く砕けえぬ闇^{システムU1D}。

つまり、無限対有限の戦い。それはたとえ千日手と言われようが、千日たった後どちらが戦闘可能状態であるかなど、日の目を見るより明らかな事実。

どれだけ1を重ねても無限には届かないように、有限は無限には敵わない。

ただそんな当たり前の事実が付きつけられるだけであった。

そのことをわかっているからこそ、クロノを筆頭に戦闘員は全員が内心で焦っていた。

しかしそれで事を急いではいけないということも、今回の作戦立案をメインで担当したシユテルから強く言い含められていた。

そうして放たれた魔法はU—Dとその他で違った結果を表す。

U—Dには砲撃魔法と同様のダメージとして、それ以外には結晶樹の破壊という結果を。

マルチロックオンと、綿密な変数管理をマニュアルで行うことによつて実現する、一人一人効果の違う魔法。

味方には回復を、敵には攻撃を。一つの魔法で複数の結果をもたらすという絶技。

そして、この魔法が放たれたのは、作戦Bに移行してから三度目であつた。

三度同じやり取りをした。

U—Dへ地道にダメージを与え、焦れたU—Dが結晶樹を強引に発揮させようとするのをヴィヴィオが妨害する。

そしてその隙について、またダメージを徐々に与える。

そんな気が遠くなるような行いを三度繰り返した。

そして、ついに戦況が動く。

邪魔な羽虫を落とそうと攻撃を繰り返すも、それすらもさらに邪魔な存在に防がれることに焦れ、ついにU—Dが行動を変える。

┌

甲高い声にならない咆哮を上げると共にU—Dから攻撃性を持たないまばゆい光が放射される。

それはあまりにも唐突であり、初めての動きであったため反応が遅れるも、その閃光をとっさに目を覆うことで防ごうとする。

そうしても腕を、脛をすり抜けて直接眼球を刺すような光量は、まさに閃光弾のような役目を果たし、腕で視界を覆った者たちの視界を奪った。

ほとんどが視界がまともに働かないため、うかつに動くこともできず、視界が元に戻るのを待つ事しかできない。

そのため、唐突にU—Dが行った閃光魔法の理由を知ることができたものは数少ない。

そんな数少ないうちの一人であるレヴィは、せわしなく視線を動かし、必死に周囲を見渡していた。

高速戦闘を止まらず行うため、フォーミュラの力で眼球に防御膜を展開していたため、閃光をほぼ無効化できたレヴィは、眩い光の中でU—Dが消えたのを目撃していた。

戦闘域は武装局員とアースラによって結界で閉ざされており、その役目は戦闘の余波を漏らさないことも理由だが、最大の目的は転移によって結界の内外へ移動する事を防ぐことであった。

これは先のレヴィの威力偵察の後、転移でユーリが移動し見失ったためであり、同じように逃がすことをしないよう強力な転移阻害と封鎖結界が展開されていた。

そのために総勢20名、ローテーションで絶え間なくアースラの武装局員が魔力を注入し続けているという徹底具合である。

それを承知であるためレヴィはU—Dが消えても結界の外へは移動していないと確信していた。であれば消えた理由は唯一つ。

ショートジャンプ
短距離瞬間移動。

奇襲、暗殺。それらを容易にする技能。その技能を戦闘中に使いこなすのは特別な素養が必要であると言われており、使いこなせる者は瞬間移動者と特別な呼称をされる。

そのショートジャンプをU—Dが使ってきた。

ならば狙うのは中衛か後衛。レヴィ達前衛が足止めをしていたからこそ、通常の攻撃行動が届かない位置にいる者。

そして、その中でU—Dへの対抗策をもち、もつとも厄介な者。それは——

「っ!!」

その事実気づいた瞬間にレヴィは足場と移動魔法を同時に発動し、加速を開始しながら後ろへと振り返る。

そして加速が始まる瞬間、目にしたのは——ヴィヴィオの後ろに現れ腕を振りかざすU—Dの姿。

「ヴィヴィオ!!」

レヴィの叫びが響き渡る。

——U—Dの腕が振るわれる。

足場を踏み込み移動を始める。

しかし、遅い。気づくのがあと数瞬早ければ間に合ったかもしれないのに。

——鮮血が飛び散る。

U—Dの腕が彼女の身体を貫通している。

赤い戦闘衣服が鮮血の深紅に上書きされる。

「——ママ」

ヴィヴィオの呆然とした声が聞こえる。

閃光によつて視界を一瞬奪われたかと思つたら、自分に走る衝撃によりその場から強制的に移動させられた。

U—Dの攻撃かと思ひ振り向くと、そこには自分をかばうように腕を突き出し、U—Dに胸を抉られているシュテルの姿。

「——シュテルママ！」

ヴィヴィオの叫び声が戦場に響き渡る。それと同時にシュテルの傷口からは赤黒い結晶樹が急速に、何本も生える。

そしてそのまま、それをU—Dが吸収を始めたところで、無表情であつたユーリの目が見開かれる。

結晶樹に包まれる中、シュテルはU—Dの腕を両手でしっかりとつかみ、その表情を見つめる。

「——驚きましたか？」

U—Dの放つた唐突な閃光魔法により多くのモノが視界をふさがれ、行動を困難とする状況の中、シュテルが動けた理由。

シュテルだけが、ヴィヴィオを庇えた理由。それは——

シュテルは想定し予想し、戦術を戦略を組み立てていった。

そうしていずれ、死なないためにこの陣形に落ち着き、そして全滅

するだろうことまでたどり着いた。

皆が五体満足でいながらU—Dに勝つ方法はない。
シユテルの度重なるシミュレーションはそう告げていた。

だからシユテルは覚悟を決めた。

犠牲が0で勝てないのなら、犠牲を最小限にして勝つ。そのために必要な条件を、戦略を組み立てた。

数少ない情報からU—Dの行動を想像し、予測し、戦場を作戰段階から組み立てた。

そうして今、シユテルはヴィヴィオを庇いU—Dに貫かれ、己の生命力を結晶化させられ奪われている。

——全て予想通りだった。

今までの戦闘はすべてシユテルの想像通りに、シミュレーション通りに動いていた。

ヴィヴィオを防御、妨害役としたのも、中衛と後衛の間に配置したのも。

全てU—Dの動きを誘導するため。

U—Dがヴィヴィオの妨害に不快感を感じ、優先的に排除するようにさせるため、あえて千日手になる作戦を、陣形を組んだ。

ヴィヴィオを庇うためにあえて自分は攻撃に積極的に参加せず、

ヴィヴィオの近くの位置取りをキープした。

すべてはこのために。
己を犠牲にするために。

聡明なディアーチェに気づかせないため、あえて中衛の数を多くし、自分がそこに紛れるように配置した。

レヴィが間違つて間に合わないように、ヴィヴィオを中衛より後ろに配置した。

全ては自分の結晶樹をU—Dに吸収させるために。

「———どうです、あなたのために特別に拵えた調味料は。さぞ、美味しい、ことでしょう」

結晶樹による生命力奪取の疲労感と胸を貫通させられているための、呼吸困難。その中で逢つてもシユテルは気丈に言葉を紡ぐ。

「GU G U A A A ■■■■■———」

そうしているうちに、U—Dがもがき苦しみます。

シユテルから腕を抜こうとするのを、シユテルは渾身の力を込めて握りしめる。

「私の身体の中に忍ばせた特性のウィルスです。お残しは、許しませんよ———！」

U—Dの抵抗は激しさを増す。

しかし負けじと腕を握りしめるシュテル。

そうしている数瞬、数秒もたたぬ内に加速したレヴィが到達する。

「——っ！」

渾身の力とここまで移動するための加速のすべてが詰まった突撃。

ヴァリアントコアにより形状をランス状へと変化させたバルニフィカスを握りしめ速度を殺さずに、そのままU—Dに突撃する。

「らあっ!!」

気合の声と共に突き出されるランス。その勢いにシュテルの握力は耐えることができずもならず。

そして目標の時間は、U—Dにウイルスを打ち込むための最低限の時間の拘束を達成したために、シュテルは自らユーリの腕を離す。

そうして拘束がなくなった瞬間、U—Dはレヴィの勢いそのままに、その小さい身体を吹き飛ばされていった。

その勢いのまま胸から腕を引き抜かれたシュテルは一瞬意識を失い、飛行魔法を維持することもできず、崩れるように墜ちる。

「シュテルんー！」

レヴィはU—Dを吹き飛ばすと、すぐさま墜ちかけていた血まみれのシュテルを抱き止め、その腕の中に抱きかかえる。

「シュテルママー！」

レヴィが表れU—Dが吹き飛ばされたことで、呆然自失から立ち直ったヴィヴィオもシュテルの側に近寄る。

視界を取り戻した面々はその3人を囲うように陣形を変え、吹き飛ばされたU—Dへ警戒を行う。

「シュテル！」

視界を取り戻したディアーチェも、レヴィに抱かれるシュテルの側に駆け寄る。

そのころには、ヴィヴィオとレヴィによって、シュテルの身体から結晶樹は取り除かれていたが、そのせいでシュテルの胸に空いた大穴がよく見えてしまう。

その穴は、シュテルの胸に空いた虚空は、誰がどう見ても手遅れだった。

「シュテルん、シュテルん！ しっかりして！」

「シュテルママ、なんで、私を庇って——」

「シュテル、なぜこんなバカなことを！」

三者三様に詰められることで意識を取り戻したシュテルは、涙を流すレヴィの頬を弱弱しい手で撫でると、口を開く。

「——必要な、ことでした」

そうしてゆつくりと、シュテルは説明する。

「彼女に、U—Dに勝つための最後の奇跡。それを引き寄せる生贄に自分を選びました。私の身体を貫いたU—Dに、私の血肉を媒介に直接専用のウィルスを打ち込みました。これで、U—Dの魔力運用は阻害され、勝ちの目が出てきたはずです」

「馬鹿者！ それで貴様が再起不能になってしまえば元も子もないではないか！」

「——王の、いう通りですね。そこが、その部分だけが賭けでした。奇跡を祈るしか、ありませんでした」

レヴィ達の泣き顔を優しい顔で見つめながら喋るシュテルに、レヴィは悲痛な声を上げる。

「シュテルん！ もういいから！ 間に合うなら早く軀体を——」

その言葉を頬をなでていた手をレヴィの口へと当てることでシュテルは止めると、ヴィヴィオのほうへと視線を向ける。

シュテルの視線の先には、レヴィと同様に涙を流すヴィヴィオの姿があった。

「——ヴィヴィオ」

「——はいつ。ヴィヴィオですっ」

「私は、大丈夫ですから。戦線に戻ってください。あなたが居ないと、他の皆が、危険。ですから」

「——っ。わかり、ました……」

シュテルの言葉に息を飲み込むと、ヴィヴィオは涙をジャケットで拭い、表情を引き締め、戦闘音が鳴り響く前線に目を向ける。

その先にはシュテルのウィルスにより動きに精彩を欠きながらも他を圧倒するU—Dの姿と、それに抗い傷つきながらも懸命に戦う勇者の姿。

その光景を見て、ヴィヴィオは心を切り替える。

「絶対、勝ちますから」

「——ええ」

シュテルにそれだけ告げると、ヴィヴィオは戦線に復帰していった。

ヴィヴィオが戻ったことを見るとシュテルは再度レヴィに視線を戻す。

「——今から、私は躯体を放棄します」

「うん、だから早く」

「でも、躯体修復には入りません。私は、レヴィ。あなたとユニゾンします」

シュテルの言葉にレヴィだけではなくデИАーチエもまた驚愕に目を見開く。

その機能は知っている。レヴィ原の記憶作ではレヴィとシユテルが
ディアーチエに対して行ったことである。

「トリニティドライブ。我々本来の機能を用いて、私はあなたの頭脳
となり、私があなただのフォーミュラの使用を補助します」

「そうか、それが貴様の最後のピースか」

シユテルの言う言葉に、ディアーチエは心あたりがあつたのかシユ
テルにそう問うとシユテルはゆっくりと頷きを返す。

「私を、受け入れてください。レヴィ」

そういつて、光も失われつつある瞳でレヴィを見つめるシユテル。
そのまなざしを受け止め、レヴィは頷き返す。

「わかった。それが必要なら。シユテルんの作戦なら、それに従うよ。
ボクは2人の、マテリアルズの手足だから——」

レヴィのその言葉を聞いて安心したのか、シユテルは目を閉じる。
するとシユテルの身体が光の粒子となり解けていく。

シユテルの魔力光である赤い光は、シユテルの躯体を構成していた
魔力であり、シユテルそのもの。それは本来なら虚空に消え、紫天の
書へと返るはずが、そうはならずそのままレヴィへと吸収されてい
く。

光シユテルが身体へ入るごとに、レヴィにも変化が現れる。

青色が基調の戦闘衣服は、シユテルの赤を取り入れたためか紫へと
変色し、その身体からは紅炎が吹き上がる。

「受け取ったよ、シユテルんの力」

そうつぶやくと、レヴィは強く拳を握りしめ顔を上げる。

「シユテルの意志を無駄にするわけにはいかん。疾く征くぞレヴィ」

「うん。いこう」
紅炎を纏う焰神レヴィ・ザ・フレイムの刃と、暗黒を纏う闇統べる王ロード・デイアーチエ。

2人は並び立ち、激戦の最中に舞い戻る――。

GOD編第10話 「Battle of Saac
red king」

時間は少々巻き戻り、シユテルがU―Dに胸を貫かれた後、レヴィによってU―Dが吹き飛ばされた瞬間。

視界を取り戻し始め、そして目にしたその光景に一部の魔導師、特になのはやはやては端から見ても狼狽していた。

「気を取り直せ！」

そんな面々にU―Dの方向へ移動しながら叫ぶクロノの声が響く。

「U―Dを彼女に近づけさせるな!!」

クロノのその言葉に、いち早く冷静を取り戻したのはヴォルケンリッターの面々。

「そうだ、今はU―Dを抑えることが先決だ」

シグナムはそばに居たフェイト肩をつかみ。

「しつかりしろなのは！ アイツは私達と同じなんだから問題ねえんだよ!!」

ヴィータもまたシユテルを見て呆然自失としているのはに活を入れる。

『主はやて、鉄槌の騎士の言う通りです。彼女たちなら大丈夫、最悪でも死ぬ。ということはないはずです』

そしてリインフォースもまた、はやての内側から動けないはやてに声を投げかけていた。

『アクセラレイター!』

そんな死になれていない少女たちの横を、自身に搭載された加速装置を起動したアミタとキリエが高速で通り過ぎる。

エネルギーの消費が大きいため乱発はできないが、今は一刻も早くU-Dの足止めを行う前線を構築することが重要だと判断したためである。

それに続くようにトーマが、アインハルトがU-Dへ向かい翔ける。

「……シグナム、ごめん。いこう」

「ありがとう、ヴィータちゃん。心配かけさせてごめん」

「ありがとうなりインフォース。私はもう大丈夫やから」

なのは、フェイト、はやての3人はほぼ同時に呆然自失状態から立ち直り、移動を開始する。

なんとか心を切り替えて。なるべく、シユテルの事は考えないようにして。

——今はただ、目の前のことをキチンとこなす。目の前の子を助ける。悲しむのも怖がるのも、全部後でいい!

なのは達が戻った先では、もがき苦しむように荒々しい動作で攻撃を繰り返すU-Dと、それに対処しながら戦うクロノ達の姿が目に入る。

「クロノくん!?!」

その瞬間なのははつい叫んでしまった。
クロノの身体は、あまりにも、あんまりな状態だった。

クロノの半身は結晶樹に覆われていた。

右腕も右足も、顔の右半分も。まさにクロノの右半分からは結晶樹が乱立し、辛うじて飛行魔法が発動できているといった、まさに死に体の状態であった。

そんなクロノを守るように、結晶樹が生え始めているザフィーラがU—Dとの間に仁王立ちをし、クロノの体力を少しでも回復するため、シヤマルもまた、体から結晶樹が生え始めているにもかかわらず、回復魔法をクロノに使用していた。

そんな面々からU—Dを離すように、アミタ、キリエ、トーマは戦っていた。

その特性から結晶樹こそ生えてきてはいないものの、全員が全員傷が目立つ状態であった。

ECドライバーのトーマでさえ、その身体にダメージを負っているのが分かるほど、負担の大きい戦いを強いられていた。

「っ」

その光景になのは達は息をのむ。

しかし足踏みをしているわけにはいかない。

今はだれもが、己の死と隣り合わせにもなりながら、足を踏みしめなくてはならない場面であるのだから。

なのは達も合流したことにより、なんとか戦線を構築する事ができた。

しかし、ヴィヴィオもレヴィも居ない中で結晶樹の能力が常時で発動しているUーDの相手をするのは、常に死と隣り合わせであり、クロノのように一人また一人と動くことができなくなっていく。

シユテルの犠牲によりUーD本体の動きの精細は欠き、魔力の循環が阻害されているためか攻撃力、防御力ともに大幅に減少していた。

そのため、主力である2人を欠いた状態であるにも関わらず予想以上に戦えてはいるのだが、結晶樹への対策が無いため時間と共に戦力が削られていく。

まず長時間戦っていたクロノが。

次にクロノを守るためにUーDを足止めしていたザファイラが。

そしてなのは達が合流してからは攻撃をするために近づかなくてはならないアインハルトを筆頭に、戦線を構築している殆どの者が五体満足でいられる状況ではなかった。

アインハルトは既に左足と両腕を結晶樹に包まれほぼほぼ戦闘不能。

シグナム、ヴィータ、フェイトもどことは言わないが結晶樹が至る所から生え、動きに精彩を欠く。

UーDに近づく必要のないのはとはやては、2人を結晶樹の影響を弱らすために尽力してくれたユーノのお陰もあり、まだ戦闘が可能な状況ではあった。

そのユーノも、回復に尽力していたシャマルも先ほど魔法の使用が困難になるまで結晶樹に覆われてしまった。

そしてそもそも結晶樹の影響を受けないアマタ、キリエ、トーマを含めた5人だけがUーDと戦い――既にただの足止めでしかないが――続けている状況であった。

銀の福音によるガイドによって、U-Dが短距離転移により自分の背後をとった事に気づいたトーマはつい振り向いてします。

これがシグナムやクロノといった戦闘経験豊富な者であれば、今のトーマのように振り向いたりはしなかった。

一度U-Dが短距離転移によってヴィヴィオの胸を貫こうとしたのをみているのだから、選ぶ選択肢は振り向いての対応などではなく、全速力で斜め前方へ移動すること。

しかしトーマの戦闘経験はこの数ヶ月までほぼ皆無であり、短距離転移者との戦闘経験は無いに等しかった。

そのためトーマは選択を間違えてしまった。

『トーマア!!』

間違えてしまったがゆえに、己と同化しているリリーの悲痛な叫びが頭の中に響き、自分の胸から深紅の華が生えてしまっていた。

「——がはっ」

胸を貫かれたことで呼吸困難になり、気道に入り込んだ鮮血を口から吐き出すトーマ。

トーマの血を浴びながら、U-Dはトーマの胸から腕をゆつくりと引き抜く。

引き抜いた腕の先から現れるのは結晶樹によって形作られた巨大な杭。

「エンシエント・マトリクス」

雄叫びを上げながらU-Dは眼前のトーマを蹴り飛ばし、その勢いでトーマの血せいめいりよく肉にくによって作り出した杭を引き抜き。

そのままトーマに向かって投擲した。

トーマは蹴り飛ばされた勢いのまま、超質量の物体によって押しつぶされる形で海へと墜落する。

やけに死が迫るのが遅く感じる。世界から色が消える。

——ああ、これが走馬灯ってやつか……。

そんな事を悠長に考えられるほどに、なのはの体感する時間は長くなっていた。

もしかしたら今なら、と思い身体に力を込めてもうんともすんとも言わない。唯一動かさせた右腕もすでに結晶樹の浸食が広がり、もう動かすことはできないだろう。

——ごめんなさい。お父さん、お母さん、お兄ちゃんにお姉ちゃん。先立つなのはを許して……。

このまま二度と会えなくなってしまうかもしれない家族に心の中で謝り、なのははゆっくりと動く世界の中で体の力を抜いた。

諦めるように、負けを認めるように。

そうして諦めたなのはの意識が落ちようとする瞬間、色が失せていた世界の中に、光り輝く虹が見えた。

その虹はU—Dの背後で強く光り輝くと、だんだんと人の形をとり両手で握りしめた大剣を振り下ろす。

魄翼の腕が目の前に迫る。

大剣がU—Dの肩を強く打ち付ける。

なのはの目の前に迫っていた禍々しい指先がブレる。

そして、なのはの世界は通常の時間を取り戻す。

ドオウン!!

爆音とともに大きな水柱が昇りなのはの視界を埋め尽くす。
その水流のなかから漏れるのは虹の光。

水柱が引いていくのに合わせて、なのは目の前に虹の光を背負った人物の姿が浮かび上がる。

輝く12枚の翼のような虹色の光を噴射する光背を背負い、豪華な戦闘装束を身にまとった十代後半の少女の姿。

「——ヴィヴィオ」

高町ヴィヴィオ。

未来の高町なのはの娘。

「はい、ヴィヴィオです。待たせてごめんね、なのはママ」

現状唯一U—Dへ対抗できる主力が鮮烈に姿を現した——
|。

ヴィヴィオは姿を表すとなのはとはやてにまとわりついていた結晶樹をフォーミュラの力によって破壊しながら、穏やかな表情で声をかける。

「待たせてごめんさい。私が来たからにはもう大丈夫だから。シヤマルさんたちはこっち来る途中で結晶樹から解放しましたので、なのはママとはやて司令は一旦下がって回復してもらって、ね」

「そんな！ ヴィヴィオだけで戦うなんて！」

「せや、私達でもないよりマシなはずやで」

そう言うなのはとやての2人に対し、ヴィヴィオは首を横に振る。

「今のママたちじや、ハッキリ言って足手まといだから。消耗しきっているママたちと一緒に戦ったら、さっきのシユテルママみたいに、今度は私になっちゃう」

「あ……」

「……」

ヴィヴィオの言葉で、シユテルの惨状を思い出し言葉を失うのはとやて。

心では共に戦いたい、自分たちの身体が全力を出せないのもまた事実。

そしてヴィヴィオ本人がU—Dと直接矛を交えるために、結晶樹の能力から守らなくてはならないのは達がそばに居る事が重荷になることも、また事実。

それゆえ心では否定したいが、冷静になればそれは無謀なことであるとわかりきってしまった。

「……わかった」

そうして顔を伏せるのはとやてのうち、先に諦めたのはなのの方であった。

はやてもこの三か月でなのはの頑固さは身に染みており、なのはがこうもあっさり折れるとは思っておらず、つい驚いてしまう。

「なのはちゃん」

はやての言葉になのはは顔を上げると、まっすぐにヴィヴィオを見つめる。

「このまま私たちがいても、確かに邪魔だもんね。無理でもやらなきゃいけない時がある。そんな時はわたしも引けない。でも、無茶を押し通してもいい結果にはならない。それは大切な人に教わったから。でも、ヴィヴィオは、無理してない？」

とても、9歳の少女とは思えない達観した、けれども優しい顔なのははヴィヴィオに語り掛ける。

そんななのはにヴィヴィオは力強く、そしてとても明るい笑顔を見せ大きくうなづく。

「うん。ヴィヴィオは強い子だから。大丈夫だよ」

ヴィヴィオがそう言った瞬間、水面が爆発し大きな水柱が立ち昇る。

噴出する水柱を弾けさせながら現れるのは見たところ傷を受けているようには見えないU—Dの姿。

それを視界の端に入れるとヴィヴィオはその端整な顔を不快気にゆがめる。

「ツチ。さつきので腕の一本でも貫うつもりだったんですがねえ……」

そう吐き捨てたヴィヴィオはなのは達へと向き直り、先ほどの不快気な表情から打って変わり穏やかに声をかける。

「さ、2人はシャマルさんのところへ。あとはヴィヴィオに任せてください」

「わかった。頼んだで、ヴィヴィオちゃん」

「無茶しないでね、ヴィヴィオ」

2人の声援を聞きながらヴィヴィオは背を向けながら、強く握りしめた拳を2人に見えるように掲げる。

それを「大丈夫」という意味であると受け取った2人は、なるべくヴィヴィオの邪魔にならないよう、急いで後方、シャマル達の元へと移動を開始した。

ゆっくりと上昇してくるU—Dを見つめながら、ヴィヴィオはなのはとはやてが戦線を離脱したのを感じすると、小さな声で己の身体に命令を下す。

「魄翼・聖天式、超過駆動開始」

ヴィヴィオの言葉と同時に、ヴィヴィオの背中に浮遊していたフ
ローターユニット『魄翼・聖天式』がその機構を展開する。

12枚の魄翼は等間隔に円形に広がり、それを結ぶように虹色の光
輪が展開される。

広がった魄翼はまさに大天使の翼であり、現れた光輪はまさに釈迦
の光背のよう。

さらにヴィヴィオは続けて唱える。

「第1次聖王核、第2次聖王核共に駆動率上昇。連結聖王核リミットリリース解除」

その言葉と共にヴィヴィオの身体から虹色の魔力光が噴出し、ヴィ
ヴィオを包み込むように渦を巻く。

それは父と呼び親しむ人とその姉、そしてその母がヴィヴィオの後
遺症をなんとかするために生み出したシステム。

憎き生みの親が残した負の遺産の結晶。それを2人の天才技術者
と4人の知識と経験によって安定させたもの。

ヴィヴィオの体内に残った超級ロストログアを魔力タンク、および
第2第3のリンカーコアとして使用することで、平均的な魔導師の何
倍もの魔力保有量、魔力出力を發揮させるもの。

そしてそれを安定稼働させる役目として、体内に過剰な魔力をため
込まないよう魔力を排出する廃燃魔力排出機関、および周囲に漂う魔
力を吸収、分解し聖王核へと供給する疑似無限機関である外付けユ
ニットの魄翼・聖天式。

本来はヴィヴィオの身体に残ってしまった後遺症を和らげる医療
機器を改造し、増設したもの。

設計者の特異技能の名を借り、それには魄翼と名付けられた。

魄翼を与えられた結果、ヴィヴィオの聖王核によってもたらされて
いた常人からすれば無限に思えるが、しかし有限である魔力は、実質
無限と言えるようになった。

これを受けられたとき、父と慕いそして武の師であるレヴィからはこう伝えられた。

——これは、ヴィヴィオの身体を正常に近づけながらも、より強い力を行使するための翼。聖王であることを切つても切り離せない君は、これから沢山の苦難と譲れない選択を経験するだろう。そのとき、ヴィヴィオの力になれるよう、ボクたちからの贈り物。

優しい顔でありながら、しかし力強い眼差しで語った父の言葉は今でも思い出すことができる。

——だけど、それを無闇に振るってはイケないよ。御神の武も、その翼の力も、ヴィヴィオがどうしても譲れない、命と魂と信念を懸ける、そんな時にだけ使うんだ。強すぎる力もまた、君を不幸にしてしまうから。

そう告げられてから、この翼は体調を管理する名目以外で使ったことはなかった。

魔法戦技の公式大会はもとより、アインハルトとのアノ戦いですらも。

譲れない信念を守るために御神の武を振るうことはあっても、その信念を守るからこそ翼を使うことはなかった。

——でも今は、今こそが、私の命と魂と信念を懸ける戦い。 シユテル 母と約束した『勝つ』という誓いを果たすために。

覚悟を決めヴィヴィオは最後の聖句を唱える。

「コールブランド、TYPEⅡ」

その言葉と共に右手に握っていたコールブランドが二本の長剣に分割し、ヴィヴィオの手を放れ虚空に漂う。

虹色に輝く12枚の魄翼と虹色の光背。そして、渦巻く魔力の壁を纏い、周囲に二本の聖剣を滞空させるヴィヴィオを見て、U—Dが初めて人語を口にする。

命中はした。ヴィヴィオは避ける様子もなく、突撃の速度を落とさずU・Dへと向かってくる。

命中したはずのエターナルセイバーは、ヴィヴィオの周りで渦巻く虹色の壁に遮られていた。

聖王の鎧。

肉体資質で劣るはずのオリヴィエが、霸王クラウドの攻撃を寄せ付けなかった最大の理由。

絶対突破不可能な防御壁。

聖王の鎧があるからこそ聖王を止めることのできる者は居らず、聖王の鎧があるからこそ聖王は止まらない。

古代ベルカにおいて、聖王が最強と謳われた所以。

それを、未来の聖王であるヴィヴィオも纏っていた。

とある事件の後遺症により、不具合を起こした聖王核のせいで、本来の聖王のように己の魔力だけで常に発動させることは叶わないが、尊敬する人達の力によって生み出された連結聖王核と魄翼。それらを起動させた状態であれば使えるようになった最強の鎧。

人並み以上ではあるものの、アスリートとして身体の頑健さがあるとは決して言えないヴィヴィオの防御力を解決する強固な鎧。

なのはのブラスターモードでのスターライトブレイカーや、アインハルトの放つ神撃の霸王断空拳など例外はあるが、並みの攻撃であればヴィヴィオに触れることすら許さない聖王の鎧にとつて、中距離相手に向かって振るわれた技も力も無いただ長いだけの剣なぞ小枝にも等しい。

ゆえにヴィヴィオは避けない。

今までの戦闘で、U・Dは格闘距離クロスレンジでの単体攻撃力は未恐ろしいも

のがあるが、遠く中距離に限って言えば聖王の鎧を貫ける大火力技は持ち合わせていないとヴィヴィオは判断した。

ゆえに、避けることは考えず、近づいてぶちのめす。

その事だけをヴィヴィオは考えていた。

エターナルセイバーと聖王の鎧がぶつかり合い発生する火花をまといながら、ヴィヴィオは強引に近づく。

そしてU-Dとの距離が近距離ショートレンジ—格闘距離ではないが、射撃魔導師にとって射撃を撃ち合うには近すぎる距離—まで近づいた瞬間、ヴィヴィオは再度踏み込み、加速する。

「御神流奥義之壺、『虎切』」

その言葉を置き去りに加速したヴィヴィオは、左腰に添えていた右腕を抜刀する。

剣を使わずに、拳をもって神速の抜刀術『虎切』を放つ。

実際のところ、ヴィヴィオは未だ神速の域には達しておらず、レヴィヤなのはの実家本家にてたどり着く目標として奥義を一通り見せてもらっただけであるため、厳密には虎切であるとは言い切れないのだが、そこはテンション優先。

師であるレヴィも『カツコいい』から、という理由で技名はほとんどん叫ぶべきと教えられている。

そんな理由により、厳密には虎切もどきと言うべき技は、本来小太刀を用いるべきところを本人の手刀をもって放たれる。

添えた左手を鞘に見立て、右手刀を刀として放つ抜刀術は、操作魔法によって己の身体自信を操るレヴィとヴィヴィオの御神流なればこそその業。

再度の踏み込みによって加速したヴィヴィオは、U-Dとの距離を一足で0にし、右手を振り抜く。

一閃。

加速の勢いが乗ったヴィヴィオの抜刀はU—Dの防壁を突き破り、その身に傷をつける。

U—Dの胸を切り裂き、そこから鮮血が舞う。

そのかすかな赤は、続く旋風によって巻き散らされる。

『『虎切』連結変成『虎嵐』』

その言葉と共にヴィヴィオの左貫手が放たれる。

それもまたU—Dの右肩を抉り鮮血を虚空に撒き散らす。貫通こそしないものの常人であれば二度と肩が上がらないようになるであろう傷をU—Dに刻みこむ。

それでもヴィヴィオは止まらない。

聖王の鎧を纏った自分の身体を、魔力により外部から操作することによって己自信を最硬の剣と化したヴィヴィオの業。

だからといって、どこぞの完了形のように刀が使えないわけではない。

全世界の武術を極め、その総てをあわせた武の境地を『完成』させたレヴィの『御神流』。

『永全不動八門一派御神巫流 総合魔法戦闘術』。

その理念は使えるものは使う。剣も、槍も、斧も、槌も、拳も、石も、砂も、なにもかも。

それを人間用に習得する技術を限定し、発展させ、量産性を増した『完了形』。それがヴィヴィオの『御神流』。

そのヴィヴィオが、剣が使えないなど、ありえない。

故に使う。

たとえ剣を握っておらずとも、ヴィヴィオが振れる剣は、そばに二振り存在するのだから。

「続けて変則多重連撃」

その言葉と共にU—Dの背中に剣閃が走る。
ヴィヴィオは目の前に居るというのに、背中に鋭い切り傷が刻まれる。

それは、ヴィヴィオの側に滞空していた二振りの聖剣。

ヴィヴィオを守る盾であり、ヴィヴィオの第3、第4の腕である
アームドデバイス、コールブランド。

『花菱』

ヴィヴィオが技名をつぶやくと同時に、2本の長剣と2本の手刀、
計4本の刃がU—Dへと息もつかせぬ連撃を浴びせる。

身体を外部から操作することをレヴィから教わったヴィヴィオ。
そんなヴィヴィオの武は、ある友人の使う魔法を知ることでの発想
にたどり着いた。

己の徒手格闘と、操作する外部兵装。それらをすべて扱う、常人に
は到底たどり着けない手数。それが操作系魔導師兼格闘家である友
人のたどり着いた境地であった。

それを知った師は能天気×にこういった。

——それ、ヴィヴィオにピッタリの戦法じゃん。

ヴィヴィオの好みの問題もあり、公式の大会では、格闘技メインで
戦っているが、実際問題この戦法はヴィヴィオの好みと素質。

好きなこととできることと得意なこと。その総てがマッチした、ま
さにヴィヴィオ向けの戦い方であった。

息もつかせぬ刃の嵐。

スイッチングフリッカーによってしなやかさを獲得したヴィヴィ
オの腕の軌道は、手刀であっても変わらず、御神流の技術『貫』をもつ
て、的確にU—Dの間をつく。

そしてそれと同時にヴィヴィオのマルチタスクによって操られた

コールブランドは、ヴィヴィオの身体に比べては乱雑だが、その代わり果敢に、猛烈に、果敢なくU—Dを切り裂き続ける。

元来コールブランドはヴィヴィオの防護となるよう設計されており、高出力形態である大剣形態以外はすべからず最も優先されている設計思想が「頑丈さ」であった。

そのため籠手、長剣形態では魔法の補助機能は殆どなく、純粹に壊れない武器および防具。としての性能が突き詰められている。

そのため、強固な防護壁を持つU—Dに対し多少乱雑に扱っても問題なく、精密に操作する必要が無いためヴィヴィオの思考リソースの消耗を軽減できていた。

だが、ヴィヴィオが果敢な連撃を繰り返すも、相手が相手。アインハルトの断空による連撃を受け切った真正の怪物。

フォーミュラの相性。鍛えられた観察眼によって防御の甘い箇所を見つけ、磨かれた技巧によって確実に打ち抜く。それができてやつとU—Dに傷をつけられる。

しかし、そこまでやってもU—Dは壊せない。

——天から二物どころか五物くらい与えられた、才能の塊であるこの私が嫉妬しちゃうほどの身体強度……。完全に化け物ですね……。

頭の中で悪態をついているうちに先ほど付けた切り傷はふさがり、最も大きな傷であった虎切による切り傷と虎嵐による右肩の傷も治りかけている。

人智を超越した身体強度。そして無限の魔力による強引な回復。これこそがU—Dとの1対1の戦いにおいて最も懸念すべき力。

純粹に強い。

少しまえに、これまたヴィヴィオを歯牙にもかけない圧倒的な恵体を持つ選手と戦ったが、それ以上の怪物。

その選手がゴリラだとしたら目の前の存在はドラゴン。たいしてヴィヴィオは剣と鎧で武装した兵士。

身体的な話に限って言えば、それほどまでに圧倒的な差が、ヴィヴィオとU—Dにはあった。

その差を利用し、U—Dが魄翼の巨腕をヴィヴィオに向かって振るう。

強力な薙払いを、ヴィヴィオは聖王の鎧で足止めし、生まれたわずかばかりの時間で余裕を持って回避する。

薙払いが終わらぬうちに避けたことを確信すると、即座にカウンター。

連撃を再開する。

ヴィヴィオのそばを薙いだ巨腕から発せられる音は、その威力と速度を想像させるに相応しいものではあり、内心冷や冷やするもの。それを表に出さず冷静に攻撃を続ける。

ヴィヴィオは的確な攻撃により、U—D本体の行動を出足で潰し、その場に釘付けにしていた。

エネルギー状であるがゆえに、不定形である魄翼だけは唯一釘付けにできないため、相手に反撃を許してしまうものの、逆に言えばそれだけを警戒すれば良かった。

一見圧倒しているように見えるヴィヴィオであるが、その内心は荒れていた。

——くっそお。やっぱり壊滅的に相性が悪い！

アインハルトのような、堅いが攻撃を続けられればいずれ倒せるような相手であればヴィヴィオの心がこれほど荒れることはない。なぜなら倒れるまで攻撃すれば良いのだから。

相手の攻撃を全部避けて、こちらの攻撃を全部当てる。それを相手が倒れるまで続ける。

いつもやっていることだった。

ただ違うのは、相手がこちらのダメージと同等か上回る回復力を持つていることである。

御神の技、魄翼による魔力供給と聖王の鎧の硬度、あらゆる物を利用しても、ヴィヴィオの火力は高いとはいえない。けして低いわけではなく、ヴィヴィオの手刀の一撃は純粋な攻撃力だけを見ても現在のなののはショートバスターより高い。

それでも、U-Dの回復力と同等かという程度でしかない。

母から受け継いだ収束砲撃や、父から教わった収束斬撃など、大技はあるにはあれどそれを放つ時間も無ければ、放って倒せる保証もない。

であればこそ選択したのが今の戦い方。相手に傷は負わせている。ならば後少しだけ、威力か速度を増せばいい。

——相手が倒れるまで全部避けて全分当てる！ いつもと同じことをやればいい！

自分に言い聞かせながらヴィヴィオは攻撃を続ける。

観察し思考し相手の動作の始まりを妨害する。

なにもさせない。

結局戦いとは相手の嫌がる事を多くやった方の勝ちなのだ。

U-Dが魄翼をたたみ、防御壁として展開しようが関係ない。御神流剣士の眼はその中で最も弱い箇所を見抜く。そこを突けばよい。

足を止めず、さりとて攻撃の手も止めず。

U-Dの周囲を回るようにヴィヴィオは移動しながら、防御の薄い部分を的確について、確実にダメージを蓄積していった。

それを体感時間上は長く感じられる時間続けた。

このままなら押し切れる。そういう確信もあった。

油断か慢心か。

確信は安心に変わり、安心は本人も気づかない程わずかにヴィヴィ

オの集中力を奪ってしまった。

ゆえに、U・I・Dの打開策への対応が遅れてしまった。

U・I・Dがなぜ隙のある防御を行っているのかを考察できなかった。

だからヴィヴィオは、U・I・Dに釣られてしまった。

「■■■■■■■■■■」

防御壁の魔力濃度が変わり、再度魔力の薄い―防御の弱い―部分を攻撃するため回り込んだヴィヴィオ。

それを待っていたと言わんばかりに、ヴィヴィオが回り込むと同時にU・I・Dが吼える。

「んなあつー！」

そしてヴィヴィオの視界を赤黒い壁が覆い尽くす。

その壁は高濃度の魔力が流動しながら迫るカラミティウォール。

この技を放つためU・I・Dは防御を固め、この技をヴィヴィオに確実に当てるため、あえて防御が弱い部分を作った。

ヴィヴィオの防御が弱い部分を狙うというルーチンを利用された形だった。

災厄の壁がヴィヴィオを飲み込まんと迫る。

直撃を受けたら流石のフォーミュラと聖王の鎧といえども無事ではすまないだろう。

それほどの魔力が目の前の破壊の力に込められていた。

聖王の鎧の防御力にも限度というものがある。

――回避つ、無理!!

レヴィであれば、後ろに高速移動しながら大きく迂回することで強引に避けられただろうが、残念ながらヴィヴィオにそこまでの機動力

と加速力は無い。

——なら、受けるしかない！

ヴィヴィオは壁が迫る一瞬のうちに覚悟を決めると、足元に足場を生成そ、強く踏みしめる。

「聖王の鎧、出力全開！・魔力解放！」

ヴィヴィオのかけ声と共にヴィヴィオの周囲に虹色の魔力が渦巻く。

魔力の壁がヴィヴィオに迫る。

当たる直前にフォーミュラで魔力に干渉、分解中和を試みつつ、防御魔法に魔力を回す。

「セイクリッドディフェンダー！」

フォーミュラで多少なりとも威力を減衰させ、聖王の鎧と防御魔法で無理やりやり過ごす。

カラミティウオールが聖王の鎧と防御魔法に当たると、そのあまりの圧に後ろに押し切られる。

それを踏ん張りながら、聖王の鎧で魔力の壁をこじ開け、防御魔法で軽減しながら押し切る。

聖王の鎧と全力の防御魔法。その二つを行使するため、ヴィヴィオの保有魔力が急激に減少を始めていた。

——消費魔力に対して魄翼の循環回復が追いついてないっ。

ヴィヴィオの魔力が尽き果て、壁に飲み込まれ塵になるのが先か、それとも壁をこじ開け破壊の波から脱出するのが先か。

「こんなくそおおおおおお!!! 死んで、たまるかああああ

あああああああつ!!!
!!!」

ヤケクソ気味に叫び、保有魔力を全て使い切る勢いで聖王の鎧を増幅、無理やり破壊の障壁をこじ開ける。

その先に見えたのは、星々がかがやく夜空であった。

「——つはあ！ はあつ」

——耐えきつたつ！

ヴィヴィオは生き延びた喜びがこみ上げ思わずガッツポーズをしかけるも、今が戦闘中であることをすぐさま思い出し肩で大きく息をしながらも視線をU—Dが居る方向へ向ける。

「っ！」

そして息をのみつつ足場を展開。踏み込み、前に飛び出た。

ヴィヴィオが見た本来U—Dが居るべき場所。カラミティウオールの発生源に、U—Dの姿が見えなかった。

一度使われた戦法。ヴィヴィオが不覚を取った行動。

こちらの視界をふさぎ、その隙にショートジャンプで後方に回る。一つ覚えだが、たしかに効果的ではある短距離転移者の常套手段であった。

それを知っているゆえに、ヴィヴィオは回復しきっていないなけなしの魔力を使って、前に飛び出た。

後ろからの奇襲を警戒しての行動だった。

前が出るヴィヴィオの耳に、音が響く。

それは鋼鉄を引き裂く騒音。

回路がショートする破裂音。

機械が破壊される音。

ヴィヴィオはその音を確認するため、U—Dを視界に入れるため、前に飛び出た勢いを殺さず、体だけをひねり後ろをへと視線を向ける。

そこには予想通り、U—Dが居た。

一つ覚えにショートジャンプでヴィヴィオの後ろに転移したらしいU—D。

その背から生える魄翼の巨腕は、なにかの機械を握りつぶしていた。

「あつ」

それを見てヴィヴィオはやつと気づく。

自分への魔力の供給が減っている。

即座に自身にリンクしている魄翼・聖天式の数を数える。

その数9枚。

——3基、破壊された!?

破壊されたのは3基。たった3。されど3。

3／12ということは、つまるところ25%である。

魄翼・聖天式は、ヴィヴィオの保有魔力を調節する役割をもった機械である。

もともとの役割は、ヴィヴィオに残った後遺症によって魔力をため込みすぎてしまつて起きる魔力熱を緩和するため、ヴィヴィオの保有魔力が一定になるよう調節する役割を持つ医療器械であった。

それを魔改造し、周囲の魔力を収束しヴィヴィオに還元することで魔力を回復。

実質的に無限の魔力を得る。という代物に変わったのである。

それは計算上、12枚すべてが超過駆動を行つている場合、秒間3発のデイバインバスターを放てるほどの供給量を実現していた。

その供給量をもつて、聖王の鎧を常時発動させていたのである。

つまるところ、聖王の鎧という名前だが、やっていることはU—Dの常時展開の魔力防御と同じである。

莫大な魔力を無意識に高密度のバリアに変換する。それが聖王の鎧。

当然魔力の消費も半端ないものであるため、現在のヴィヴィオでは魄翼・聖天式がなければまともに発動することすら危うい。

その魄翼が3枚失われた。つまりヴィヴィオへ供給される魔力が25%も減少したということである。

——現在の聖王核内臓魔力量は……10%以下!?

ロストログア級の魔力タンクである擬似聖王核を2つも合わせ持つ連結聖王核。それは魔力保有量SSSランクの数倍はある。それほどまでに莫大な魔力を先ほどの防御でほとんどを使い切つてしまつていた。

——この状態で魄翼が3枚失われた……。これは魔力の回復はほぼ不可能。聖王の鎧も省エネしてかないとすぐ枯渇する……。

そこまで瞬時に考えると、そばに滞空していたコールブランドを手元によせ、自分の手で握る。

——今は少しでも魔力を温存しないと。もう一度さっきの奴をやられたら今度こそ死ぬ……。

U—Dの起死回生の一撃はまさにヴィヴィオにとって手痛い一撃であり、そのたつた一撃で一気に不利な状況にたたきってしまった。

しかしそれで足を止めるわけには行かない。気持ちも身体も前に出ず。前にでてUーDに攻撃を加える。

持久戦こそUーDが最も得意とする戦法なのだから。

ヴィヴィオの魄翼を破壊してからUーDは思考していた。

ヴィヴィオの動きが変わった理由、因果関係について。

ある瞬間からヴィヴィオの戦闘力、特に攻撃力が減少した。浮遊していた剣を己で振るうのは、純粹に攻撃の手が半減したことを意味する。

ヴィヴィオの技術によって行われる行動阻害は鬱陶しいことこの上ないが、それでも秒間単位で受けるダメージや、攻撃の手が減ったことにより拘束力は明らかに減少していた。

なぜ？

—— 2本の剣＋徒手格闘から双剣術に変わったことによる手数
の減少、及び攻撃に使われる魔力の絶対量の減少。

己の能力を阻害する正体不明の要素には減少が見られないため、こ
ちらの防御力の増加ではないと判断。純粹に対象の攻撃力が減少し
たことが原因と推測。

いつから？

—— 対象が剣を握ったときから。

なぜ対象は剣を握った？

—— 魔力の枯渇による制限が濃厚。

—— 今までの観測結果から対象は膨大な魔力ストレージ、もし
くは魔力回復手段を持ち合わせていると推測。そのどちらか、もしくは

は両方に不具合が発生した可能性。

——魔力ストレージ、魔力回復手段どちらの不具合でも、弱体前と後で変わった点は、先ほど破壊した機構。現状これによる弱体化の可能性が濃厚。

ヴィヴィオの攻撃を受けながらも、ヴィヴィオの攻撃の手が減ったことよって生まれた余裕を使い、U—Dは考察する。

——仮説の検証、要。

そして、U—Dの攻撃は明確にヴィヴィオの魄翼を狙う動きに変化した。

「ちよっ、まっ」

これ以上魄翼を破壊されては戦闘行動の継続すら危ぶまれるため、ヴィヴィオは今までとは打って変わり、大袈裟に回避行動をとる。

——対象の負の感情を検知。検索結果照合、感情値『不快』。

戦いは、相手の嫌がる行為を最も多く行った方が勝つ。

ユーリの記憶と思考により感情すらも検証できる上、プログラムとしての高速演算、冷徹な思考を持ち合わせるシステムU—D。

ヴィヴィオは、そんな相手に、致命的な隙をさらしてしまった。

戦闘の様子は先ほどまでとは打って変わり、今度はU—Dがヴィヴィオへと猛攻を繰り広げる形になった。

ヴィヴィオも回避と反撃を試みるも、そもそもU—Dの目標はヴィヴィオの背中に浮かぶ魄翼。

ヴィヴィオ本体を狙っていないため回避は容易であるものの、魄翼を破壊されないように反撃するとなると、難しいのが現状であった。

実質、ヴィヴィオの当たり判定が魄翼の部分だけ増えているのと同じ義であるのだから。

——くっそお。明らかに翼が狙われてる！ やりにくい！ とてもやりにくい。こんなことならもっと全戦力状態での実戦経験を積んどけばよかったあ！

別にヴィヴィオが全戦^今力^状態^態での戦闘訓練をサボっていたわけではない。ただ、最近はアインハルトのU—15引退チャンピオンシップに向けての調整が主になっており、たしかに格闘競技以外がおろそかになっていた部分はあった。

U—Dと攻撃の押収を繰り返す時間が増すにつれ、1枚、また1枚とヴィヴィオの魄翼にダメージが与えられ、不具合をおこし破壊されていく。

——残り7枚、稼働率は50%………残り6枚!?

魄翼が破壊されるたびにヴィヴィオのパフォーマンスが落ちていく。魄翼が少なくなるにつれ、多量の魔力を前提としたヴィヴィオのフォーミュラドライブは制限が厳しくなっていく。

——聖装解除、バリアジャケット変更！ 魄翼・聖天式格納！

魄翼を気にしながら戦うことに限界を感じ、ヴィヴィオは魄翼の展開を解除し、バリアジャケットすら格闘戦技で使うだけの最低限の装いへと変える。

「コールブランド、TYPE I—II」

タイツスーツ型のバリアジャケット姿に、左腕に籠手型のTYPE Iコールブランド、左手に長剣型のTYPE IIコールブランドを持つ、ヴィヴィオ本人だけの全力の姿。

そもそも、装甲が追加された重量型バリアジャケットである聖装は、魄翼が稼働していて魔力が潤沢にある状態を想定したバリアジャケットのため、魄翼の機能の半数以上が失われた今、維持すること自体がヴィヴィオにとっては重しとなっていた。

それゆえ、バリアジャケットを最低限の初期状態に戻した。

体内のセイクリッドリッスハートはフォーミュラドライブの制御をしてもらわなくてはならないため、防セイクリッドディフェンダー御魔法のピンポイント展開をクルスに頼むことは難しく、残魔力量の関係上聖王の鎧を発動するとう選択すら取ることはできない。そのため、ヴィヴィオはこれからU—Dの攻撃をすべて回避するしかない。

スピリットフレアの弾一発すらも当たれば致命傷となるほどの防御力。現状のヴィヴィオはU—Dに対しその程度のか弱い存在でしかなくなっていた。

バリアジャケットを戻した身軽な状態でU—Dの攻撃をよけつつ、ヴィヴィオは自分を心の中で鼓舞する。

——気合を入れる高町ヴィヴィオ！　これから瞬きすらも許されない。全部避ける！　避けなければ……死ぬ！！

連結聖王核に残ったなげなしの魔力と、自分個人の今この場においては貧相としか表現できない魔力。

それだけで目の前の化け物を倒す。

その覚悟を決め、拳を強く握りしめた瞬間、ヴィヴィオの視界が闇

に染まる。

「え!？」

U—Dが闇に飲まれ姿がヴィヴィオの視界から消え失せる。

その代わり、ヴィヴィオの目の前には闇からヴィヴィオを守るように、朱色と蒼に埋め尽くされる。

「まったく、そんなになるまで頑張つて。遅れてごめんね、ヴィヴィオ」

朱色を纏う蒼は、視線だけヴィヴィオに向けると悲しげな、慈しむような表情でヴィヴィオに声をかける。

「パパ……」

紅炎を纏う小さな背。

ヴィヴィオを守るように前に立ちはだかるその背は、ヴィヴィオにとって何よりも、誰よりも大きく見える。

「あとは任せて、ヴィヴィオ。ここからはレヴィ^ポ・ザ^ッ・フレイム^達の戦いだ」

「全くたった一人でU—Dを抑えるとは、誰に似たんだが無茶をしおつてからに」

ヴィヴィオの背に悪態をつき、後ろから現れるのはU—Dを闇に閉

ざした張本人。

「ディアーチェさん」

「そのように貧相な見た目になるほど消耗しておって、少し下がって小鴉達と共に休んでおれ」

泰然と構えながら親指で後ろを指さすディアーチェに、ヴィヴィオは力が抜ける感覚を覚えながらも困惑していた。

「え、で、でも」

「ふん、なのはと小鴉には邪魔だから下がってろと言っていたらしいな。今は貴様こそそうよ。そのような貧弱な状態では、それこそ邪魔というもの」

やれやれと言った様子で手を広げ肩をすくめるディアーチェの言葉に、ヴィヴィオはバツが悪い感覚を覚える。

「そうだよ、ヴィヴィオ」

そんなヴィヴィオに優しくな声がディアーチェの後ろからかけられる。

「なのはママ」

ヴィヴィオが後ろに下がらせたなのはが、いやヴィヴィオが一人で戦ったがゆえに、回復を行えたメンバー全員が、その場に集結していた。

「そうやでヴィヴィオちゃん。今のヴィヴィオちゃんは足手まといになるから、下がってて、な？」

意趣返しと言わんばかりに少し意地の悪い顔で言うはやて。

「大丈夫だよ、私達を、レヴィを信じて今は休んで、ね？」

優しく温かく包み込むような雰囲気ですすフェイト。

「今は足手まといになるということを素直に認めた方が良いですよ、全く負けず嫌いなんですから」

いつも通りの刺々しさと無表情さで冷たい印象を与えるも、そこには友人特有の気安さが垣間見えるアインハルトの言葉。

「はやて指令、フェイトママ、アインハルトさん……みんなも」

U—Dにやられ、戦線を離脱していたメンバー全員が、万全とはいがたいものの元気な姿ではあるものの、ヴィヴィオの前に姿を見せていた。

「トーマ、アミタさんにキリエさん。無事だったんですね」

「ああ、ヴィヴィオの奮闘してくれたおかげで他のひとに救助されて、さ」

『私もトーマも、体質の関係でほぼ万全。大丈夫だよ』

ヴィヴィオの言葉にトーマとリリイが返す。

「大丈夫です、お姉ちゃんは強いですから！」

「ちよーつと体に違和感あるけど、まだまだ全然戦えちゃうわよ」

アミタが力こぶを作り元気をアピールし、キリエは自分の胸を撫でながら無事を告げる。

「みんな、ヴィヴィオが頑張ってくれたから、一人で踏ん張ってくれたからここまで元気になれた。だから、ヴィヴィオは少しだけ休んで、ね？」

ヴィヴィオの頬をなでるように触りながら、なのはは優しくヴィヴィオを諭す。

「……うん」

張りつめていた緊張の糸が途切れてしまったせいか、ヴィヴィオは瞳に涙を浮かべながら、なのはの言葉にうなづく。

「みんな！ そろそろ王様の拘束が破壊されるよ！」

感動的な場面のなかにレヴィの厳しい声が響く。

その声をきき、全員が武器を構え、戦士の顔つきへと変わる。

「なのはママ、みんな。ちよつとだけ、休むね」

ヴィヴィオはそういうと、ユーノとシャマルに連れられ後方へと下がる。

そうしているうちにU―Dを包んでいた闇に徐々に亀裂が走っていく。

「さて、クロノ指揮官、なにか作戦は？」

その闇を見つめながら、レヴィは戦闘指揮官であるクロノへと意見を問う。

その意見にクロノは少し考え、作戦を伝える。

「作戦Cでいこう」

「作戦C？ なんだそれは」

事前には無かった作戦パターンにシグナムが疑問を口にする。

「そんなものはない！ 各員生きることが最優先に臨機応変に対応してくれ！ 以上だ!!」

シグナムの疑問にやたらと力強くクロノが答えた内容は、クロノの性格できかなりありえない作戦であった。

クロノがまさかこの状況でそんな冗談のようなことを言うとは思わず、一堂は思わず瞠目する中レヴィの笑い声だけが響く。

「あっはっはははっ。了解！ 最初に強く当たってあとは流れで、つてことで！」

レヴィは笑いながら、クロノの作戦を復唱すると、バルニフィカスの特大剣の形状に変形させ、紅炎の魔力刃を形成する。

レヴィが魔力刃を形成した瞬間、U―Dをとらえていた闇の亀裂は

GOD編第11話 「Sphere of God」
speed」

戦闘が始まってから、レヴィ達がU—Dを押し形で戦闘は進んでいった。

と、言うよりも——

「と、言うかこれ、我ら不要説が濃厚では？」

そんな惚けた台詞がディアアーチエから放たれるほどに、特定の二人を除いた面子は戦闘に参加していなかった。

特定の二人、つまるところU—Dとレヴィの二人である。

「ただ黙ってみてるとか夜天の守護騎士の名が泣いちまうぜ」

「仕方なからう。万全な状態ならともかく、現状の我々ではあの戦闘についていけるとは思えん」

悔しがるヴィータと、その隣で腕を組みいぶし銀なオーラを放つザフィーラもまた、そんな悠長な会話ができるほどに、戦線から離脱していた。

その二人だけではない。それこそレヴィを除いた全員が、レヴィとU—Dの戦闘に巻き込まれないように離れ、遠巻きに眺めていることしかできていなかった。

「うん。ハッキリいって今あそこに近づくのはレヴィちゃんにとって邪魔、になっちゃうね」

なのはもまた、自分たちの置かれた現状に困り、しかし目の前で繰り広げられる光景を見て、納得するしかできなかった。

U—Dとレヴィの戦い。それはまさに次元の違う戦いが行われていた。

高速移動、それこそフェイトの速度の数倍の速度で移動しながら、炎を纏った二本の特大剣をまるで小太刀のように振るうレヴィ。

それに対するは、小規模ながらも高圧魔力による破壊力をもったカラミティウオールを乱発し、レヴィの移動に対応するためショートジャンプを繰り返すU—D。

神速の移動と瞬間移動。高速で広範囲を薙ぎ払う炎剣と、空間ごと魔力の奔流に飲み込もうとする災厄の壁が入り乱れる戦場。

そこはまさに、生半なものが近づけば一瞬で塵にされる殺意の嵐となっていた。

そんな光景を遠巻きに観察する面々に、明るい声がかける。

「あれれ、皆さんどうしましたか」

ユーとのシャマルによって体力、魔力共にある程度回復させたヴィオオが、バリアジャケットはそのままに、6基に減った魄翼を背負いながら、ユーノ達とともにやってきた。

「う、うくん」

ヴィヴィオに発破切った手前、なんとも顔を合わし辛いのが、どう説明したもんかと悩み首をかしげる。

「ヴィヴィオさん、アレを見てください」

百聞は一見に如かずということで、アインハルトがヴィヴィオに目

の前で繰り広げられる頂上決戦を指さす。

「え？ うわあ」

アインハルトが指さした先に広がる光景を見て、ヴィヴィオはたまらず引きつった笑みを浮かべる。

「え、アレもしかしてレヴィパパですか？」

その顔のまま周りのメンバーに視線を向けるも、返ってきたのは無言での首肯のみ。

その返答と目の前の光景を見て、ヴィヴィオもこの場にいる者の心情を汲み取る。

「いや／＼さすがにあれはちよつと……。どうしちゃったんですパパ。なんか急に強くなりすぎでは？ 覚醒ですか？ 最終上限解放でも実装されました？」

「ううむ、あながち間違っではないいな」

「え、どういうことですか王様？」

ヴィヴィオとしてはいつもの軽口のもりで言った言葉であったが、予想外にディアーチェが肯定してきたため困惑が深まり、より詳細な説明をヴィヴィオは求める。

それに一つ首肯するとディアーチェは語りだす。

「まあ端的に言うのだ。今のレヴィはシユテルとユニゾンしている状態にある。正確にはユニゾンフュージョンより融合といった方が近いがな。今レヴィがまどつている火焰は元来シユテルの変換資質であるのだが、それを融合することでレヴィでも自由に扱えるようになっていとうわけだ」

「ほえ／＼。なんとそのような隠し玉があったとは。でもそれだけですか？ ただのユニゾンであそこまで強くなるとは思いにくいのですが」

「うむ、それはシユテルの活躍によるものであろう。シユテルはレヴィの頭脳となり、フォーミュラを制御するといっていた。それゆえ、レヴィが扱うよりも繊細で緻密な制御。そしてシユテルにフォー

ミュラを任せることで空いた処理能力を戦闘に使っておるのだろう」
「ディアーチエの解説の通り、現在のレヴィはフォーミュラドライブの制御を融合したシュテルに任せており、そのため自身のすべてを目の前の相手に注力することができた。それができるがゆえに、レヴィは空いた処理能力を用いて神速の世界でU—Dと対決しているのである。それこそがレヴィが爆発的に強化された所以。たった一人でU—Dと渡り合える理由であった。」

そうしてディアーチエ解説のなか、皆が見守る先でレヴィは徐々にU—Dを追い詰めていっていた。

『順調です、さすがレヴィ。確実にU—Dを追い詰めています』

「シュテルんこそ流石だよ！ バルニフィカスがボクの意志をくみ取るより早く変形する！ ボクが攻撃したい場所の防壁が弱まる！ 相手の攻撃が分解される！ ボクじゃできない、シュテルんが一緒に居てくれるから、ボクはここまで自由に戦える！」

『ええ。あなたを阻む防壁も、攻撃もすべて私が制御するフォーミュラで分解しましょう。ですからあなたは気にせず、全てを目の前の相手に傾けてください』

『神速』の世界の中を縦横無尽に翔け、U—Dを滅多切りにしながらレヴィとシュテルはトリニティドライブによって融合した力を、お互いの苦手な部分を補い2倍にも、3倍にも跳ね上がった戦闘能力に高揚していた。

魔力保有量、魔力発揮値はけた外れであれど、細かい魔力操作やマルチタスクが苦手なマテリアル—L。

魔力に関してはマテリアル—Lほどではないが、高速演算や戦術構築、状況分析などが得意なマテリアル—S。

二人の相性はまるで鍵と錠。陰陽太極図の陰と陽。

凸凹であるがゆえに、お互いが一つになったときガツチリとハマッ

た力を発揮する。

『ショートジャンプの予兆です』

「了解！ 消える前に、10回は切り刻める！」

そういつてレヴィはU—Dに突っ込むと日本の特大剣を小枝のように振るう。

本来一瞬で消え一瞬で現れるはずのショートジャンプであるが、現在の『神速』を発動しているレヴィにとって、亀のような遅さ。

『薙旋』かーらーのー、『花菱』！

U—Dが消える直前に宣言通り10回U—Dへと剣閃を浴びせる。

——圧倒的、これがレヴィの『神速』！ これが、レヴィの見える世界！

神速外から見たらU—Dが消える1秒もない一瞬で、左右合わせて10回の斬撃を放ったレヴィ。それはまさに目にもとまらぬ速さであったが、シユテルはレヴィとの融合を経ることとその感覚を、神速の世界を体感していた。

たんなる合体ではなく、融合し一体となるトリニティドライブだからこそその感覚であった。

シユテルはレヴィの認識の中から、シユテルの意志でレヴィの魔法の制御や、分析を重ねている。シユテルが得られる情報はすべてレヴィが得ている情報であるのがトリニティドライブ。それゆえレヴィの自己強化魔法『神速』により加速した認識を、そのままシユテルも得ることになったのだ。

——U—Dの動きが手に取るようにわかる。相手が一手動く間にこちらは十手先を予測できる。莫大な魔力消費の変わりに圧倒的な力を得る。これが『神速』。レヴィの到達した『力』の極点。

その速度を利用してシユテルはU—Dの動作の兆候を観測、予測しレヴィに伝えることで、レヴィの戦闘を補助していた。

「悪いね！ 何も聞こえない、よー！」

ショートジャンプ後に咆哮を上げながら放たれるU—Dの攻撃を、レヴィは不適な笑みを浮かべながら逆に後ろへと回り込む。

『U—Dもだいぶ弱ってきています。ここで、一気にかたをつけましょう』

「了解！ この長い戦いもこれでファイナーレだ！」

シユテルの指示をきき、背後からU—Dを拘束する。

『ルベライト！』

「雷光輪！」

炎の楔と雷の輪が、U—Dを雁字搦めにしぼりつける。

そしてそして距離を離すと、『神速』を維持したままレヴィは極大魔法を唱える。

「閃光爆炎！」

レヴィによって生成された極大熱量へと変換された魔力は、バルニフィカスの魔力刃へと収束、圧縮を繰り返し、眩い光を放つ。

それは太陽のように閃光と熱線を放つ極大熱量の剣。

その剣を振りかざすと、レヴィは『神速』で突撃する。

一瞬、拘束が解けないU—Dとすれ違うその一瞬、レヴィは剣を振る。

「爆炎閃熱・太陽剣!!」

レヴィは剣を振りぬいた姿勢で、U—Dからだだいぶ離れた場所で止まると、『神速』を解除。

「ヒート、エンドー！」

ポーズをとりながら、スペルワードを叫ぶ。

そして感じるのは背中へと注がれる閃光と閃熱。

爆炎閃熱剣に込められた熱量がU—Dを切り裂いたことで解放され、放出されたエネルギーが、U—Dを中心に激しい光と熱を周囲へと放射する。

夜空を裂く光。

海を照らす輝き。

それはまさに、深夜の海上に唐突に表れた太陽のごとし輝きであった。

レヴィはポーズを終えると、遠方にいるダイアーチエに向かって大きく手を振りながら念話をする。

「(王様く。ちやちやつとシメちやつてよ〜〜)」

決め技を華麗に決めたレヴィは能天気な様子で念話を送る。

「(たわけ！ 相手から目を背けるな！)」

『レヴィ！ 後ろです!!』

しかしダイアーチエから返ってきた念話は怒声交じりの切迫した声。

そして、それと同時に響くシユテルの叫び声。

「え？」

その忠告によって呼び起こされたレヴィの直感の後ろを振り向くのではなく、横に回避しろと告げた。

レヴィその直感に逆らわず、横方向へと加速魔法を発動する。

しかし遅い。

もつとレヴィが御神流を、武道を学んでいたら。残心の心得がなかったかを身に染みていたら、こんな隙はさらさなかった。

鋭い痛みがわき腹に走る。

焰とは違う赤が視界に入る。

スラリとした白魚のような肌の長い腕が自分のわき腹から生えている。

「ぐっ、があ」

叫び声を上げそうになる口を力づくでねじ伏せ、自身の後ろに居るなにかに向かって薙刀状へと変形させたバルニフィカスを突き立てる。

ガキインと。

鋭く甲高い、金属をひっかく音が響く。

レヴィの視界には何らかの機械が見え、その隙間からレヴィのわき腹を抉った腕は生えていた。

そしてその隙間からもう一つの腕が表れ、レヴィの右腕をつかみ、そのままレヴィを引き寄せる。

そして現れたのは、ウェーブのかかった綺麗な長い金髪を暗闇にな

びかせ、身体中に赤い刺青をした長身の女性。

その女性は、引き寄せたレヴィの右腕を肩にかけるように身体を反転させ、肩に背負うと背負い投げの要領で、一気にレヴィの腕を引き下げる。

「っ！」

——折られる!!

肘に変な圧力がかかるのを感じた瞬間、レヴィは自分から投げられるように女性の前方へ加速し、女性の肩を支点に回転し右腕を庇う。それを見た女性も素早く動き、回転の勢いで、足元へと回るレヴィの身体を、腕と同じく長い脚で挟むように固定し押さえつけると——

ゴギヤツ

——鈍く、汚らしい音がレヴィの身体から響く。

一瞬遅れて脳みそに届く信号。

「ぐ」

それは痛み。

「がああああああああああああああああああつ!!!」

右肩から先が変な方向に振じられ、肩と手首を破壊された激痛に、レヴィは絶叫する。

しかしそれでもU—Dは止まらない。

己を破壊しうる敵の存在をU—Dは許さない。

レヴィの利き腕を、バルニフィカスを持つ右腕を貫う。

そうまでしないと、この姿大きくになった意味が無いから。

表現しようのない不快な音が、なんらかの繊維を引きちぎるような音がレヴィの体から、右腕から直接脳髄に響く。

「ぐ、があつ。こ、のおー」

苦し紛れに電刃衝を放つが、先ほどバルニフィカスの魔力刃を防いだ機械が滑り込み行く手を阻む。

それはレヴィの電刃衝だけでなく、周囲からの射砲撃魔法をも完璧に防ぐ絶対の壁となつて周りの皆とレヴィたちの間に佇む。

その機械はまるでヴィヴィオの魄翼・聖天式の色違いであり、瓜二つの造形であつた。

正確には、ヴィヴィオの魄翼がソレに瓜二つなのであるのだが。

U—Dが先ほど浴びせられたレヴィの避けようもない攻撃。それは高い火力と『神速』による加速連撃によって、U—Dですら危険と判断するほどのDPSを叩き出した。

それに対抗するためにU—Dはまず魄翼を捨てた。

正確には純粋なエネルギーの塊である魄翼の特性である変幻自在な変形を捨てた。

より堅く、より硬度を上げ、ただ防御力のみを目的とした変化。

変形機能を捨て、どんな攻撃でも防ぎきる、どんな邪魔すら阻害する強固な壁となるように魄翼を変化させた。

そうして産み出したのは12枚からなる金属の翼。

己を守る絶対の壁。

そうして手に入れた防御力で閃熱をふせぎながら、U—Dは2つ目の対策を講じた。

魄翼の自由度が失われたことによつて下がった攻撃能力、クロスレンジでの射程。

それを補う方法は、すでに知っていた。

オリヴィエウイウイオの強化魔法。

変身魔法と組み合わせることによつて、成長した自分を先取りし身体能力、特に徒手空拳での射程を上昇させる強化魔法であり、低年齢の格闘選手にとってはメジャーな魔法であつた。

U—Dはそれを模倣した。

そうして己ユリの成長した姿、長身の女性へと変化させたことで射程と攻撃力の減少を少しだけ打ち消した。

そうして変化を終えた後の奇襲は、レヴィの油断もあり綺麗に決まつた。

邪魔の入らない空間で、レヴィを上回るために成長し、レヴィを壊すために変化させた身体をもつて、マテリアル—Lレヴィ・ザ・スラッシュヤーを破壊する。

まずは右腕から。

そう判断したU—Dがレヴィの右腕へと力を込め直した瞬間、その力はするりと抜けた。

重いと予想した荷物が大変軽かつた時のように、予想外の勢いでU—Dが掴んでいたレヴィの右腕が浮き上がる。

それに驚いている隙にもU—Dの脚に衝撃がはしり、そのせいで拘束してたレヴィの身体を離してしまう。

そうしてU—Dが足元へ視線を向けると、そこには右二の腕が半ばから綺麗に断ち切られたレヴィが墜落していく姿だつた。

U—Dに右腕を破壊された後、それだけでは飽き足らず、U—Dはレヴィの右腕を完全に腕ごと力を込めていた。

優秀な回復魔法の使い手が居ると、レヴィの使用する身体操作魔法を警戒しての事であった。

ゆえにレヴィは力の入らなくなった右手から零れ落ちたバルニフィカスを左手でつかむと同時に、バルニフィカスに短剣状の魔力刃を生成し、それで自分の腕毎、U—Dの両足へと斬撃を加えた。

まさかの自分から右腕を切り捨てる行為と、腐ってもフォーミュラブレイドであるバルニフィカスの刃により、運よくU—Dの拘束は緩み、脱出することはできた。

できたが、ただそれだけだった。

『レヴィ！ 気を確かに！』

融合しているシュテルが内側から声をかけてくれるお陰で意識を失わずに済んでいるものの、ただそれだけでレヴィは痛みに混乱する思考を制御できずにいた。

——痛い。痛い。痛い。痛い。

——右腕なくなっちゃった。

——こんなに痛いとかマジ？

——シュテルんの声がすごい聞こえる。

——つらたん

——てかこれ墜ちてるよね。やばたにえん

制御を失ったマルチタスクが暴走し、レヴィは飛行魔法すら発動できずに、海へ向かって落ちていく。

『っ、せめて飛行魔法だけでも……』

シュテルがそう独り言ち、魔法を発動しようとした瞬間、レヴィの

身体は落下をやめ横方向へと高速で移動を始める。

「レヴィー！ レヴィー！ しっかりして!!」

その声は魄翼の壁から抜け落ちたレヴィーを見た瞬間にソニックムーブを発動したフェイトであった。

——フェイト

——フェイト

——フェイト

——フェイト

「——フェイト……」

フェイトの声を聴き、姿を目にしたことでレヴィーの思考がまともり、現状を正しく認識する。

『助かりました、フェイト・テスタロッサ』

レヴィーを救出したことにはシユテルも素直にフェイトに対してお礼を言う。

「よかった、今は少し離れよう。ここにレヴィーを残したら危険だから」
レヴィーの声とシユテルのお礼を聞いたフェイトは泣きそうな顔でレヴィーに笑いかけると速度を上げU—Dから離れるように戦線から離脱した。

そうしてフェイトがレヴィーを連れ去り去っていくのをU—Dは感慨もなく見つめていた。

敵を完全に破壊はできなかつたものの、当初の目的である腕の切りはなしは達成したためである。

であればあそこまで弱ったマテリアル―Lは恐るるに足らず。残ったマテリアル―DがトリニティドライブによってLとSの力を受け継ぐだろうが、マテリアル―Lを倒すために変化した己にとつて、マテリアル―Dがいくら強化されたところで敵ではない。

——だから

だからあとは、周りの小虫を散らすだけ。

そう判断し、U―Dは腕を振りかざした――。

フェイトがレヴィを救出したその瞬間から、残りのメンバーはU―Dを包囲していた。

U―Dがいつ動き出してもいいように、せめてレヴィの応急手当が安全に実施できるようにと。

しかし現状U―Dが堅牢な魄翼の壁で覆われている限り、手出しは魔力の無駄使いであることも、レヴィが捕らえられた先ほどの一幕で思い知らされていた。

「おいはやてのパチモン」

そんな緊張感の中、ヴィータがディアーチエへと声をかける。

「……なんだ、鉄槌の騎士よ」

「正直に言え。お前今のアレをどうにかできんのか？」

ヴィータのその言葉に、ディアーチエは顔をしかめる。

そしてヴィータの声が聞こえた全員が、ディアーチエの返答を言葉

い彼らの視界には、結晶樹に包まれる仲間たちの姿。

『なんで?! フォーミュラは?!』

トーマの中から悲嘆の声をあげるリリイの疑問も最もである。なぜならこの場にはまだフォーミュラドライブを発動しているヴィヴィオがいるのだから。

「迂闊でした」

まわりの状況からヴィヴィオの様子を読み取ったアミタは悔しそうに顔をゆがめる。

「どういうことですか、アミタさん」

「ヴィヴィオさんは、ヴィヴィオさんとその相棒のセイクリッドハートはもう限界という事です」

アミタの言う通りに、ヴィヴィオはもう限界であった。

それは自分以外をフォーミュラで守れないほどに、守るための演算を行う余裕が無いほどにヴィヴィオは疲弊していた。

先ほどのU・Dとのタイマンによつて消耗した体力、精神力。疑似無限機関は失われバリアジャケットを通常状態にする必要があるほど魔力も消耗してしまっている。

それらが重なり大きく落ちた防御力の現状で、さらに近接戦闘能力を増したU・Dに一方的に狙われている。

こんな状況で、下手すれば死んでしまう状況で他人にリソースを回せるほどヴィヴィオから余裕は無くなっていた。

「それなら、早く援護にいかないと!」

アミタの説明を聞き叫ぶトーマの声を残ったアミタもキリエも否定しない。

「はい。せめてヴィヴィオさんが皆さんを結晶樹から解放できる隙くらは稼ぐ必要があります。いきますよ、トーマさん、キリエ!」

「はい!」

「わかつてる!」

アミタの号令により目的を統一した三人はヴィヴィオとU・Dの

間へと入り込む。

「つう！ 成長してだいぶ重くなったみたいね！」

「疲弊しているとはいえ、私たちの出力を上回りますか！」

UーDの振るう拳をキリエとアマタの二人でやっとな受け止め、拘束する。

「うおおおっ！ 『ゼロ・イクリップス』！！！！」

そこへトーマが渾身の一撃を放つ。

白銀の極光に飲まれるUーDこら視線を外さぬまま、アマタはヴィ
ヴィオへと声をかける。

「ヴィヴィオさん！ 私たちが足止めをしているうちに皆さんを助け
てあげてくださいー！」

「！ はい！ ありがとうございます！！」

アマタへと礼をしながらヴィヴィオは移動を始めようとするが――

「うわああああああつ」

トーマの叫び声と

「お姉ちゃん！！」

キリエの声に中断させられる。

振り向いたヴィヴィオの目の前には、極光を弾き返したまま、アマ
タの腹を貫くUーDの腕が見える。

ECウィルスはその性質としてフォーミュラと近い作用を働かせ
ることが可能である。

そのため、ECホルダーのトーマは結晶樹の影響を受けないのだ
が、敵は進化する怪物。

自身の障害となる謎の力と魔力を同時に扱うヴィヴィオとレヴィ
に勝つために進化を繰り返した化け物。

その化け物に、フォーミュラと同等のECの力だけで戦うトーマの一撃など恐れるに足らず、ゼロ・イクリップスを弾き返すと、そのままヴィヴィオへと突進し、それを阻む物を破壊した。

ただ、それだけだった。

「こんのおー！」

姉を貫いた化け物へと大剣を振りかざすキリエ。

しかしU-Dはキリエを一瞥すらせず、避けることも防ぐこともせずそのまま受け止める。

「なー！」

自身の攻撃意にも止めないU-Dき驚き声をあげるキリエだが、その声はすぐさま悲鳴へと変わる。

人間がコバエに突進されて痛くなくとも、目障りだという理由で殺すように、U-Dもまた目障りだという理由でキリエの腕をつかみ、そのまま握りつぶした。

「あああつああつー！」

絶叫するキリエを振り回し、そのまま右腕に絡みついていたアマタへとぶつけ二人まとめて海へと叩きつける。

一瞬だった。

一瞬でヴィヴィオの目の前から仲間が3人減った。

ほんの数秒で戦場に残るのはヴィヴィオだけとなった。

周りには結晶樹に包まれた仲間と、撃墜された仲間のみ。

ヴィヴィオの目の前に、明確な死が迫っていた。

一方、戦線からだいぶ離れた箇所に、フェイトとレヴィの姿があった。

「レヴィ！ レヴィ！」

右腕を―文字通り―切り離してU―Dの拘束から逃れたレヴィは、墜落の最中フェイトに救出されたが、そのまま気を失ってしまっていた。

レヴィを抱えたフェイトは気を失ったレヴィを連れて、流れ弾があたらないよう戦線から距離をとり絶えずレヴィへ声をかけ続けた。

『レヴィ！ 目を覚ましてください！ レヴィ！』

それは現在レヴィとユニゾンしているシュテルも同様であり、フェイトとシュテルによって外と内の双方からレヴィに呼びかけていた。

「……つう」

その甲斐あってかレヴィがうめき声を上げ、うつすらとまぶたを開く。

「レヴィ！ 気がついた!？」

「……フェ、ト」

レヴィの放つか細い声を聞き、涙を貯めていたフェイトの瞳は決壊し、涙がとどめなくあふれ出る。

「レヴィ、よかったあ」

『ええ、意識を取り戻してひとまず安心しました』

内側から聞こえるシュテルの声も合わさり、レヴィの意識は徐々に覚醒する。

「あ、そうか、ボクは……」

『はい。あの後姿形を変化させたU―Dの奇襲に対応できず……』

シュテルの説明を聞くうちにレヴィの頭もはつきりし、自分の失態と現在の状況を認識し始める。

「つぐう」

右腕の部分から走る激痛に口からうめき声が漏れる。その痛みを

意識的に遮断しながらレヴィはフェイトの腕の中から出ようともがきだす。

「ちよ、ちよつとレヴィ！ ダメだよ！」

自分の腕から逃れるような動作に気づき、フェイト驚きながらも逃すまいと腕の力を強めレヴィを押しさえつける。

「離して、フェイト……。はやく、はやく行かなきゃ皆が……」

「そんな体じゃ無理だよ！」

『そうです！ 今無理をしてあなたを失えばそれこそユーリを救うことはできないのですよ!?!』

右腕を失ってもまだ戦線へ戻ろうとするレヴィをフェイトとシュテルが諫めるも、レヴィの視線は遠い戦場に注がれており、その瞳からは戦意が失われていない。

「それでも、ボクが行かなきゃ。戦えなくても、フォーミュラでみんなを、ヴィヴィオをサポートしなくちゃ。ヴィヴィオだけじゃ、フォーミュラを使えるのが一人だけじゃ結局ユーリは止められない」

『それでも、今のあなたが参加したらユーリ、U—Dは再度あなたを狙うでしょう。それでしたら今すぐ駆体を放棄してディアーチエに託した方がマシなはずです!』

「それじゃあ、何も変わらない！ ディアーチエの駆体ではフォーミュラは使えないんだよ!?! 結局ヴィヴィオひとりにフォーミュラを頼ってる

現状のままだ！」

白熱するレヴィとシュテルの言い合い。二人の言い分はお互いが納得できるものではあったがお互いが受け入れ難いものでもあった。

フォーミュラ使いがもう一人居なければ現状が改善しないというレヴィの言い分。

そもそもレヴィを失ってはU—Dを制御することはできないため、本末転倒であるというシュテルの言い分。

どちらも正しく間違っていない。意見が交わらないのは、ひとえにお互いが優先するものが違うため。

レヴィは自分の油断によって、戦闘可能なフォーミュラ使いを減ら

してしまったという悔悟と責任感から。

シユテルはレヴィを失いたくないという恐怖と失った際のリスクの大きさから。

どちらの意見も、根元には自分の感情があるために譲れないものへととなり果てていた。

「二人とも落ち着いて！」

その終わらぬ口論をその場にいた第三者がせき止める。

「私に、良い考えがあるよ——」

望まぬ形で再度U—Dとの一騎打ちをヴィヴィオは苦心していた。先程とは打って変わりU—Dの戦闘方法は変身系強化魔法によって強化された身体能力による徒手格闘へと変わっていた。

流派はなく、技術もない。ただの身体能力にあぐらをかいた喧嘩殺法。

しかし現状のヴィヴィオにとってはそれでも十二分に驚異となっていた。

——神経を研ぎ澄ませ集中しろ！

今のヴィヴィオは残存魔力の影響でバリアジャケットはいつも通りの形態。お世辞にも防御力が高いとは言えない代物である。

それはU—Dの拳が直撃すれば最後、ヴィヴィオの身体は無事では済まされないであろう頼りないもの。

ヴィヴィオの拳はコールブランドTYPE Iによって保護されているが、それは攻撃力を増すためというよりも、埒外な身体硬度を誇るU—Dから自分の拳を保護する意味合いの方が強かった。

それほどまでにその魔力のほぼ全てを身体強化に注ぎ込んだU—Dの身体性能は桁外れであり、アスリートとしては身体能力に恵まれなかったヴィヴィオとは比べるべくもない隔絶したものであった。

そんなU—Dであるが、技術というものは無く、格闘技のかの字も見られないその攻撃を避ける事はヴィヴィオにとつては容易い事であった。

しかし振り抜かれるU—Dの拳がヴィヴィオの恐怖を呼び起こす。直撃すなわち死。攻撃がかすつてもそれだけで五体不十分になることは容易に想像されるその威力は、生命の危機という根源的な恐怖をヴィヴィオに齎す。

恐怖は身を強ばらせる。

恐怖は思考を奪う。

怪物の前で恐怖に支配されたものは、喰われるのが自然の定め。

そのため今のヴィヴィオは、己の恐怖と戦っていると言っても過言ではなかった。

——腰を据えろ！ 腰が引けたら死ぬぞ！

——避けるときは下がるな！ 前に出ろ！

——まばたきをするな、顔を上げろ！

——恐怖を、心を支配しろ高町ヴィヴィオ！

心の中で自分を叱咤しながらU—Dの拳を避けカウンターを入れる。

——いつもと同じ。よく見て、避ける！ 確実にこなせ！

生命の危機が、余裕のない極限の瀬戸際がヴィヴィオに過去最高の集中力を与える。

今のヴィヴィオには結晶樹に沈んだ仲間を助けようという思考はない。他者のことを考えている余裕がない。

己と敵。ヴィヴィオにはそれだけしか視えていない。

そして、人知を超えた極限の集中は、ヴィヴィオの前にそびえ立つ扉を解放する。

武術の達人は極限の集中を迎えると体感時間が何倍にも引き延ば

される経験をするという。

その領域への扉を意図して開けることこそ、ヴィヴィオが父から学ぶ流派の極地。

——御神流 奥義之歩法 神速——

ヴィヴィオの視覚から色が消える。

ヴィヴィオの聴覚から音が消える。

目の前の敵の動きが緩慢になる。

己の身体が重くなる。

ヴィヴィオは集中力によって、ついにその扉を完全に開け、その先の領域へと踏み込んだ。

——これは、今までも何度か感じたあの感覚。

すべての時間が遅くなったように感じる感覚。

何度か起きた事のある感覚。

それは師曰わく神速と呼ばれるものである、と。

今までは意識の加速だけであった。

しかしヴィヴィオは今までとは違う手応えを感じていた。

——今なら、今の私ならできる！

確固たる確信。

今までのヴィヴィオは神速への扉を少しだけ開き、その隙間から神速の領域を覗くだけだった。

故に意識の加速だけ起こった。

しかし今は違う。

神速への扉は完全に開かれ、神速の領域はすぐ目の前にあった。
あとは一步を踏み出すだけ。

U—Dの拳が振るわれる。

ゆっくりと、緩慢にヴィヴィオに死神の鎌が差し迫る。

——恐れるな！ 高町ヴィヴィオ！！

ヴィヴィオの身体がゆっくりと振れる。

死神の鎌を避けるために。

——踏み出せ！ 『永全不動八門一派御神亜流 総合魔法戦闘術』

正当後継者 高町ヴィヴィオ！

ヴィヴィオの足が一步を踏み出す。

目の前の敵を倒すために。

——極限を超える！ 『聖王』ヴィヴィオ||オリヴィエ・テスタロツ

サ・高町・ゼーゲブレヒト！

ヴィヴィオの拳に魔力が宿る。

全てを打ち抜く光が宿る。

「アクセルスマッシュ
っ！」

ヴィヴィオの口が言葉を紡ぐ。

ヴィヴィオには届かぬ『必殺』の意志を相手に伝えるために。

「インフラインティ
神速!!!」

ヴィヴィオの必殺が高速で——否、神速で放たれる！

右の拳がU—Dのこめかみへと突き刺さる。

——まだU—Dは拳を振りかざしている。

左の拳がU—Dの顔面へと突き刺さる。

——U—Dの拳が放たれる。

右の拳が放たれ左の拳が突き刺さる。

——U—Dの肘が延びてゆき、拳が突き出される。

そこにはもうヴィヴィオの身体は無く、U—Dの拳は空へと虚しく消える。

右左右左右左右左右左右左右左右左右左右左右左右左右

U—Dの拳が一度放たれる間にヴィヴィオは数え切れないほどの連打をU—Dへと振るう。

流れるような体裁きによって絶え間なく振るわれる拳は∞を描き、とめどなく注がれる。

U—Dがその拳を捕らえようと手を伸ばしてもそこには既にヴィヴィオの拳は無く、U—Dが衝撃に身を振る前兆すらヴィヴィオは見逃さない。

的確に、確実に人体の弱点に向かって拳が放たれる。

加速した体感時間によって非の打ち所のない『徹』を実現した打撃を防ぐ術は無く。

加速した身体による高速の拳は『貫』でなくとも避けることも受け止めることも叶わない。

神速の連撃。

相手が膝をつく緩慢な動作すら許さない。

死ぬまで一方的に殴り続ける必殺の体現。

——これで倒しきる！

必殺の意志を乗せ。

——これで終わらせる！

拳を振るう。

——これで！

鮮血がゆつくりと空をまう。

U—Dのではない、ヴィ・ヴィオから流れ出た血が飛び散る。

初めての神速の領域。

身体の限界を、リミッターを外すことで実現する神速の高速移動を続けていたヴィ・ヴィオ。怪物が倒れかけるまで続けられたそれによつて、ヴィ・ヴィオの身体は既に限界を迎えていた。

いや、限界を超えていた。

身体の崩壊など、外から肉体を動かす術を持つヴィ・ヴィオにとって動作を阻害する理由にはならない。

身体も魔力も総てが尽きるまでヴィ・ヴィオは止まらない。聖王は止められない。

しかし、そのはずの拳が止まる。

——っ!?

振るった拳が、掴まれている。

相手はU—D。無限の魔力による埒外の身体強化による防御力。

それを越えても、無効化しても無限の回復による耐久性はまさに怪物に相応しい。

そしてもつとも恐ろしいのは、U—Dがシステムであり、ヒトであるということ。

元はユーリ・エーベルヴァインという少女^{ヒト}である。

ヒトは、考える葦である。

ヒトが動物と違うのは考える、対策をとることである。

それは地球において、文明の発展という進化を瞬きするほどの速さで及ぼす。

ヒトは考え、対策をたて、高速で進化する生物である。

ならば、元がヒトであるU—Dもまた、進化するのは何ら不思議ではない。

自身の不利をシステマチックな思考が受け入れ、対策を考え、進化する。

その進化を考慮できなかったからこそ、レヴィは足を掬われ、右腕を失った。

U—Dに時間を与えてはならない。

物語の主人公が戦いの中で進化するように、彼女^{U—D}という怪物もまた、進化する。

U—Dに時間を与えてはならない。

しかしU—Dに時間を与えず倒しきれるものなど、果たしてこの世に存在するのであろうか。

無限の魔力によってもたらされる防御力と回復力は、まさに時間を稼ぐのにふさわしい性能ではないか。

故に無限の絶望。

故に碎けえぬ闇。

故にそれは星を滅ぼし、世界と引き替えに封じられたモノ。

ヴィヴィオは——いや、厳密に言えばレヴィは、U—Dに時間を与えすぎた。

U—Dを圧倒する速さを実現する魔法をU—Dに幾度と無く見せ、それでいて全ての局面にて倒しきれなかった。

それゆえ、U—Dは到達した。

至ってしまった。

『神速』の魔法に。

極限身体強化魔法『神速』。

それは単純な身体強化、反応速度強化、思考速度強化を莫大な魔力で発動するだけの魔法。

莫大な魔力——U—Dの魔力は無限である。

身体強化——ヴィヴィオを一撃で致死に追いやり、ヴィヴィオが集中をしなければ避けきれない攻撃を、技術も無しに放てるほどの速さをもたらす身体強化は既に発動している。

ならばあとは、反応速度と思考速度を強化するのみ。

レヴィが神速のかわりに生み出した『神速』。それゆえに『神速』さえ発動できてしまえば、ヴィヴィオの神速に追いつける。

だから、ヴィヴィオの拳は受け止められた。

加速しているはずのヴィヴィオの認識においてすら高速でU—Dの拳が進る。

とつさに捕まれていない腕で防ぐが、U—Dの拳と衝突したコールブランドは甲高い音を立て破壊され、抑えきれなかった衝撃が腕をひしやげ、弾く。

そして、そのまま終わらせぬと言わんばかりに、U—Dは握っているヴィヴィオの腕を引く。

引かれた勢いのまま上体を、顔面を差し出すヴィヴィオは、眼前に見える死神の鎌^{U—Dの拳}を見て、反射的に目をつぶる。

——ママ！

祈るように頭の中に言葉が響く。誰でもなく、ただ母を求めた。

目を閉じているのに死が自分に迫るのがわかる。

気配だけで、自分は死ぬのだと確信する。

——パパ——。

祈るように頭の中に言葉が浮かぶ。

誰でもなく、ただ一人を求めた。

ヴィヴィオの目の前が白に染まる。

目を閉じているのに、外は夜なのに、白に染まる。

——ああ、今度こそ、死んじやいましたかね。

あまりにも綺麗に頭が吹っ飛んだのであろうか、痛みはなく、ヴィオは目の前の白を死後の世界の色だと直感した。

——ヴィヴィオー。
フェイト
母の声が聞こえる。

——ヴィヴィオー。
レヴィ
父の声が聞こえる。

——ヴィヴィオ！
シュテル
母の声が聞こえる。

ああやはり自分は死んだのだと、ヴィヴィオは確信した。

フェイトもレヴィもシュテルも自分のそばに居ないはずであるのだから。

シュテルは自分の不注意のせいで戦線を離脱し、レヴィも深手を負いフェイトに連れられ戦線から離れていた。

そんな親の声が聞こえてくるのだ。死んだ自分の幻想だと思ってもしようがないであろう。

『目を開けなさい！ ヴィヴィオ！』

しかしその幻想は頭に響くシュテルの怒声によりかき消される。

「は、はい!？」
頭に直接響いた怒声に従い目を開けるヴィヴィオ。

「——あれ」

その視界に入ってきたのは鮮やかな金糸に、紅と蒼の宝石。

U—Dの『レヴィ』への咆哮が重なる。

『フェイト』は紅蓮の炎剣と蒼金の雷刃、二本の大剣を展開しU—Dへと向き直る。

『私は、^{ボク}「フェイト」でも「レヴィ」でもない』

そしてヴィヴィオとU—D、二人の言葉に答えるように、U—Dを見つめながら静かに言葉を紡ぐ。

『ユーリ^君を、救う者だ』

GOD 編第12話 「Flash of Thunder god」

時間はレヴィとシュテルの交わらぬ口論をフェイトが止めたときに遡る。

「私に、良い考えがあるよ——」

その言葉に、レヴィとシュテルの言い争いは中断された。

言い争いを中断したレヴィはフェイトに向き直ると、無言のまま視線だけで続きを促す。

それを感じ取りフェイトは一つ頷くと自身の案を語る。

「前みたいに、レヴィの身体を作り直せば——」

『それは無理ですね』

しかしそれは、すぐさまシュテルに却下された。

『レヴィの躯体を再構築する事自体は可能です。しかし、右腕を失うほどの損傷を受けている現状では、先日と同様に完全なる再構築が必要です。それでは時間がかかり過ぎますし、それでしたらそのまま私の案であるディアーチェへのトリニティドライブを実行した方がマシというものでしょう』

「そ、そっか」

あまりもの速さでの反論に、フェイトは怯むが、シュテルの反論を肯定するようにレヴィも頷く。

「あの、レヴィはフォーミュラが使える人が戦場にもう一人必要だっ
て思ってるんだよね？」

それでもフェイトはめげず、レヴィの意見を聞く。

「うん、そうだね。正直に言って今のユーリ、U—Dは予想、予測の埒外だ。せめて防御と攻撃。二つの役割をこなすためにフォーミュラが使える人は二人いなきやだめだ」

「うん。それは私もそう思う」

レヴィの意見を今度はフェイトが肯定する。

「だから！ はやくボクが戻らなくちゃ——」

「だったら、私が、フォーミュラを使えないかな」

そしてレヴィの言葉を遮るようにして放たれたフェイトの言葉に、レヴィとシユテルは絶句する。

「レヴィの身体の中にあるナノマシン？ を注射かなにかで移植して、それでレヴィは私とユニゾンする。私がレヴィの身体になる。そうすれば、フォーミュラを使える魔導師が戦線に戻れるでしょ？」

フェイトの言葉は正しくはあつた。

しかしその正しさは机上の空論。実現が可能であれば、という但し書きが付くものである。

「ダメだ！ 危険すぎる！ どんな影響があるかわからないんだよ！？」

『レヴィの言うとおりです。それに現在レヴィはトリニティドライブによって私とユニゾンしている状態です。こんな状態のレヴィを受け入れるなつて、不可能です。万が一できたとしても融合事故が100%起きて——』

「うん、それでいいんだよ」

シユテルの放った融合事故の言葉にフェイトは強くうなづく。

「融合事故つて、あの後習ったけどはやてを取り込んだリインフォースみたいに、融合騎が表に出る奴でしょ？ それでいいんだ。言ったでしょ、『私がレヴィの身体になる』つて」

そう言い放ったフェイトは力強い視線でレヴィの瞳を見つめる。

そのあまりにも力強い視線はレヴィがとつきにうろたえるほどの力が、覚悟が込められていた。

『確かに、あなたの言う通りにうまく成功すれば、全て解決です。です

が、全てが失敗すれば、あなたは最悪命を失うかもしれないですよ」
「シユテるん!? 何言ってるのさ!?!」
「うん、覚悟の上だよ」
「フェイト!?!」

自身の中にいるシユテルが放ったフェイト覚悟の確認の言葉に、レヴィはただただ困惑の言葉を放つ。

そして、その覚悟すらフェイトはできていると言いつ放つではないか。

『レヴィは躯体を放棄してあなたと融合が失敗すれば、ディアーチエとトリニティドライブを再度すれば大丈夫でしょう。しかし、フォーミュラを移植した上でユニゾンまで失敗すれば、あなたはただの無駄死になる可能性すらあります』

「それでも、やらないよりマシでしょ」

「フェイト! 何言ってるのさ!! ダメだよそんなの! フェイトが犠牲になるなんて!」

レヴィを無視して進む二人の会話にレヴィは思わずフェイトの肩を残った左手で強く握りしめる。

そうしてフェイトの瞳に映るレヴィは、右腕を失い身体中が傷だらけで、弱い弱い瞳に不安と恐怖を浮かべており、自分の右肩を握る力は弱弱しく、痛みなど感じない。

——ああ、レヴィはこんなにも頑張ってるのに。

自分も傷を負っているが、それでもレヴィほどではない。
フェイトはこの時初めて、レヴィもヒトなのだと感じた。
ずっと自分と一緒にいてくれて、いろんな話でフェイトを楽しませてくれたレヴィ。

戦い方のアイデアを出したり、魔法で補助してくれたり、自分を助

けてくれたレヴィ。

一度は別れを覚悟したものの、自分の吐いた弱音を聞いて戻ってきてくれたレヴィ。

フェイト・テスタロッサにとって、レヴィ・テスタロッサという少女は、家族であり、双子の姉妹であり、自身の最大の理解者であり――

――私の、救世主^{ヒーロー}だった。

だけど、目の前の少女はどうだ。身体中傷だらけで右腕は失ってしまった。

身体の特異性により、本人すらも右腕を失ったことに頓着していないが、その戦闘衣服は血に塗れ汚れ切ってしまったている。

身体が傷つけば血を流し、心が傷つけば涙を流す。

どこにでもいる一人の少女ではないか。

自分となんらかわらない、大切な少女ではないか。

「レヴィ」

あまりのも当たり前なことをやっと認識したとき、フェイトは愛おしさがあふれ、レヴィを優しく抱きしめていた。

「フェイト、止めようよ。ボクが頑張るから。絶対ユーリだって救う。だから、君が犠牲になることなんて――」

抱きしめられたレヴィの声はあまりにも弱弱しく、抱きしめたレヴィの身体はあまりにも華奢だった。

生まれ上当然であるが、自分と全く変わらない背丈に全く変わらない肉付きをしている。

見た目には、あれほどの身体能力を發揮するなど想像もつかない、齡一桁の少女の身体であった。

そんな少女に守られていたことを、見守られていたことをフェイト

はやつと認識した。初めて、自覚した。

だからまずは感謝の言葉を述べよう。

「レヴィ、今までも、いつも私を守ってくれてありがとう」

「フェイト……」

「私はもう大丈夫だよ。あの時約束したもんね。私はキミがいなくても大丈夫になるって」

闇の書の幸せな時間。魔法はなく、しかしレヴィがいる。友達がいる。すべてが幸せで完璧な世界。

それを捨ててでも、夢の世界に背を向けてでも、現実に戻ると決めたときにフェイトは決めたはずだった。レヴィがいなくても大丈夫になる、と。独り立ちするのだと。

それは結局、レヴィが自分の涙を拭いに現れてしまったことどうやむやになり、結局自分はレヴィに甘えることを卒業できなかった。そのせいで先日は大きな被害を招いた。

あわや、この腕の中の愛おしい存在を失うところであった。

そして、今もまた、目の前の蒼い少女は己を犠牲にしようとしている。もう頑張らなくていいはずなのに頑張ろうとしている。

だから――

「だから、今度は私にキミを守らせて。私に、キミの力にならせて」

「――フェイト」

「姉でも妹でもない。守る人と守られる人じゃない。支える人と支えられる人じゃない」

――今度は、これからは、フェイト・テスタロッサも同じくらい頑張る番なのだ。

「二人一緒に、守りあう関係で、支えあう関係になろう。レヴィの身体

がもう戦えないなら、代わりに私が戦う。

レヴィがフォーミュラが必要だというのなら、私がフォーミュラを使う」

力強く、慈しみを込めて宣言しよう。

「私にレヴィの隣に居させて。大丈夫だよ、絶対なんとかなる。だって私達が揃ったら、『最強』なんだから」

フェイト・テストロッサ レヴィ・テストロッサ
わたしは、 キ ミの片翼になろう。

「二人でなら、どこまでも飛んでいけるはずだから」

そういつて、フェイトはレヴィを強く見つめた。二人の瞳に、互いの瞳しか映らないほどに――。

「……わかった」

そうして少々の間を置いて、レヴィはフェイトの案を実行することを認めた。

『むう、色々と言いたいことはありますが、時間がありません。その話はあとにします』

なにやら拗ねた様子の子のシュテルの声が聞こえてくるが、シュテル本人も気を取り直して、作業を始める。

『始めに、フォーミュラを移植します。バルニフィカスを巨大な注射器としましたので、これでレヴィの体内からフォーミュラを利用するためのナノマシンを、血液を介して移植します』

「うん。わかった」

『レヴィは、血が減る影響で脳が朦朧とするかもしれませんが、その状態になったら躯体を放棄してください。その後、私とのトリニティド

ライブを維持したままフェイト・テスタロッサとユニゾン、変則トリニティに移行します』

「りょーかい」

『フェイト・テスタロッサはレヴィの身体が消え次第バルニフィカスを用いて自身に輸血を。血液の拒否反応はあなたとレヴィならば出ないでしょうが、ナノマシンの動作は保証できません。そもそもレヴィはナノマシンが存在する事を前提に再構築されており、唯一の人間サンプルであるヴィヴィオは最初からフォーミュラを扱うことを前提としているようなので』

「うん、とつくに覚悟、完了だよ」

フェイトのその言葉と揺らぎない瞳をみつめ、レヴィは深呼吸する。

『始めましょう。あまり時間はありません』

そのシユテルの言葉と共に、レヴィはフォーミュラの力で機械的な注射器へと変わったバルニフィカスを自分に突きさした。

それと同時にものすごい勢いで血が吸い取られ、そのままレヴィは躯体を破棄する。

そうして残されたバルニフィカスを手に取ると、フェイトは躊躇なく自身の片腕に突きさす。

「ぐっ」

『大丈夫？ フェイト』

注射器から液体が注入される独特の不快感にうめき声を漏らすと、自分のそばに見知った声が聞こえるのが感じられる。

「大丈夫だよ、レヴィ」

レヴィが己と共にいる感覚を懐かしく思っていると、バルニフィカスからの輸血は完了していた。

「っ、っぐう」

それと程なくして訪れる不快感。身体が変質する気持ち悪さと痛いのかどうかすらわからない表現しようのない感覚に襲われる。

『フェイト——』

「大丈夫。レヴィと一緒になら絶対、大丈夫だから。

だから——私と、一つになろう」

フェイトの言葉にレヴィも、シユテルも、そして、バルディツシユも声もなく同意を示す。

示された同意の意志がフェイトに伝わる。

「常に目指すのは最強の自分」

『ああ、遂に来てしまった。この時が』

『比翼の鳥と言うらしい』

Every^ヒone^ト sh^ハake^モs Be^ガtwe^ン the^ト rea^ル and^ノ

691

そうして放たれる4つの言葉。

それはレヴィとフェイトが一つになる魔法の呪文。

今はそれにシユテルまでも追加し、即興で呪文を唱える。それはもはや何が起こるのかすら予想できない、いわばパンドラの箱。

「我が身が求めしは理想の体」

『なんと悲しいことか、世界はやはり誰にでも優しく、誰にも優しくな
い』

『二つが揃わなければ飛べない不完全な鳥であるが、我らは四つ』

That^ダ, s^カ why^ラ, pe^コople^ソ wo^ヒuld^ハ ask^理 for^想 ide^を

パンドラの箱の中にはあまたの絶望が詰まっているという。

「体は二つ、心は三つ。だけど今だけは体は一つで、心も一つ」

『だけど、私だけは優しくあろうとそう決めた』

『ならば揃った我らは羽ばたき、どこまでも飛んでいこう』

〈Not a bad thing it never〉

しかし相手は人型の絶望。

絶望の権化が相手であるのならば――

「その全てで、理想を追い求める事に決めた」

『その全てで、理想を追い求める事に決めた』

『その全てで、理想を追い求める事に決めた』

〈In all, it was decided to pursue the〉
——パンドラの箱の中には、希望のみが入っているはずなのだから。

『だから私は、理想の自分なのだ』

言葉は一つとなり、フェイトの変革も終わる。

身体はフォーミュラドライブ独特の光を放ち、綺麗な金髪の中に、爽やかな水色の房がメッシュのように混じる。

それはまるで、本当にフェイトとレヴィが一つになってしまったのかの如く。

『ある意味失敗で、ある意味成功ですね』

『フェイト』の中からシュテルの声が響く。シュテルだけは従来のユニゾンと同じ状況であるらしい。

『うん、そうだね』

そう言う『フェイト』の声は二重音声のように、同じ声が重なって放たれる。

その身体からは、抑えきれない魔力が、緋色の焰と蒼に包まれる金色の稲妻となつて迸る。

『この状態のあなたを、私はどう呼びましょうか』

『どうでもいいよ。私はフェイトであつてレヴィであり、フェイトでもレヴィでもないから』

『そうですか、では今は保留にしておきましょう』

シユテルと喋りながら身体の調子を確認していると、こみ上げてくる嘔吐感を我慢できずに、せき込む。

『ごほっ、がはっ』

咳をするように吐き出したそれは、グローブに包まれた手を赤く染め上げていた。

『大丈夫ですか』

『ナノマシンの急な改造と、融合事故は流石に負荷が高いみたいだね。即死しなかったただけマシ、かな』

『これはますます時間がありませんね、早く戻りましょう』

シユテルの言葉にうなづき、汚れた手をマントで拭うと、両手に二つのデバイスを握りしめる。

『行こう、これで本当の本当に、最後にしよう』

そうつぶやくと、『フェイト』は神速で移動を開始した。

そうして『フェイト』は間に合った。ヴィヴィオの掴むU—Dの腕を切り裂き、ヴィヴィオを救出した。

『ヴィヴィオ、無茶をさせて悪いんだけど、もう少しだけフォーミュラで皆を守ってあげて』

「は、はい」

U—Dから目を離さぬままヴィヴィオに向かつてかけられた言葉に頷きつつ、ヴィヴィオは『フエイト』の言う通りにした。

『大丈夫。すぐ、終わらせるから』

離れていくヴィヴィオに向かつてか、それとも目の前で咆哮を上げるU—D^{ユール}に向かつての言葉か。

その言葉を聞くや否やU—Dが加速する。『神速』を用いた高速移動を行う。ただひたすらに眼前の敵^{『フエイト』}を倒すために。

その動きはすでに神速の領域外に居るヴィヴィオでは見切れない速度であった。

しかし、届かない。

ヴィヴィオの視界では消えるようなスピードで高速移動をしたU—Dは気付いたら傷を増やし吹き飛んでいた。

ヴィヴィオが救出された際についた左腕の傷だけでなく、身体中に裂傷と火傷を負い、この一瞬で鮮血に塗れている。

そして今も、閃光が『フエイト』とU—Dの間で煌めくと、U—Dに傷が増えていく。

U—Dの防御力を超え、回復力を上回る速度で。

その閃光が傷を負わせている何かなのだらうとは気づいたが、何なのかは認識すらできない。

閃光が煌めくのが先か、U—Dの傷が増えるのが先か。神速を発動していないヴィヴィオにはどちらが先なのかもわからなかった。

いや、神速を発動していてもわからないであろう。

なにせ、『神速』を用いて神速の領域にいるはずのU—Dですら《認識できていない》のだから。

マテリアル—Lの高速移動を解析し、実行しする事でオリヴィエの動きを補足できた。

この魔法を得たことで基礎スペックで勝る己がマテリアル—Lに負ける理由など何一つなかった。そのはずであった。

しかし戻ってきた、姿を変えたマテリアル—Lは己の認識外の速度で現れ、左腕を切り裂きオリヴィエを救出した。

そして今もU—Dが動くより先に、認識不可能な閃光のみが迸る何かで攻撃し続けている。神速の領域にいるはずのU—Dですら認識不可能な何か。

それはレヴィがフェイトと同一化したことによる恩恵。

限界のないマテリアル—Lと、限界のあるフェイト・テスタロッサが合一となった故の反則手^{チート技}。

能力値を爆発的に上昇させ限界を超える強化魔法『神速』と。

人間のもつ限界を解除し限界を超える奥義之歩法 神速。

それらを同時に発動することによる多重神速。神速三段掛けと『神速』三段重ね、合わせて六段。

まさに御神流歩式奥義之極 神移。恭也ですら見せなかった、見せることのできない奥義の極点に至った今の『フェイト』は、U—Dの2倍以上に早く、全てが停止した世界に居る。

そんな誰もが追いつけない孤独の世界に居る『フェイト』が繰り出す技こそ、もう一つの極点。

停止した世界で、呼吸を整え、左右の手に握る轟雷の特大剣と爆焰の特大剣を同時に、神速で振るう。

停止した世界においてさえ神速と呼べる速度で振るわれた双特大剣は、まさに速度の足りぬ世界において、振った後の剣閃しか認識できない。

奥義之極 閃

それがU—Dを傷つける閃光の正体であった。

しかし、いくら強化されても、いくら神チーの恩恵が適応されようとも、
齡10歳の身体で御神流の奥義。さらにその極と呼ばれる技を同時に、
何度も使用してタダで済むわけもなく。

『フェイト』の感覚で言えば気づけば、通常の世界では一瞬で。
『フェイト』の身体は血に塗れていた。

筋肉は千切れ骨は砕け内蔵は機能障害を起こす。

閃光の煌きはより多くなり、それがもたらす傷はより深くU—Dを
傷つけている。

そしてそれに比例して、『フェイト』の身体もまた、傷ついていく。

『そろそろお互い限界だね』

だから零れた言葉。

『フェイト』がU—Dへと向けたその言葉によってU—Dはあること
に気づく。

——声が届く。

意識の加速をもたらしていた『神速』の強化魔法が解除されている。

それだけではなく、ほぼ無意識とっていいほどに行っていた自動
回復が発動しておらず、意識的に使おうとしても魔力の流れが阻害さ
れているのか効果が著しく減退している。

それはマテリアル—Sの罫にかかり取り込まされたウイルスと似
た感覚であった。

『だいぶ斬ったけど、やつと君の内側にまでフォーミュラが届いた。フォーミュラの本質は解析と分解、そして再構築。今君の体を毒が蝕むように徐々に君の力を削いでいつている』

口や鼻、目から流れてくる血を拭いながら『フェイト』は言う。

「■■■■■■■■■■」
「!!!!」

『さあ、もう終わらせよう』

咆哮をあげながら『フェイト』へと突撃するU—D。その速度はもう高速移動など間違っても言えない速度。

それを二本の特大剣を構え迎え撃つ『フェイト』。

閃光が煌く。

二本の閃光がU—Dを切り裂く。

「あ——」

その閃光にU—Dは耐え切れず、か細い声を上げ意識を失う。U—Dとしての機能が積みかさなった負荷に強制終了する。

そうして墜落を始めるU—Dを、ユーリを見て『フェイト』とシユテルが声を上げる。

『ディアーチエ！』

『王よー！』

『フェイト』によってU—Dの脅威から逃れたヴィヴィオがまず初めに行ったのがディアーチエの治療であった。

作戦の要ゆえに、最後の締めはディアーチエが、エグザミアの管制基が行わなければならないがゆえに。

そうして、直されてからU—Dが完全に行動不能になるまで、デИАーチエは耐えた。

生命力も削られ、長期戦によって魔力はともかく体力は残り少ない中、意識を失わぬよう強い意志でその瞬間を待ち続けた。

「待ちくたびれたぞ！ この時をー！」

空にデИАーチエの声が響き渡ると、落ち始めユーリを掬うように極大の闇が下方から湧き上がる。

万感の思いで待ち続けた瞬間がやつと来る。

万雷の拍手を鳴らせ。

万雷の喝采を奏でよ。

「さあ、終幕の時！ 我の下に帰って来い！ ユーリ!!」

その言葉と共に闇がユーリを包み込む。

意識を失ったはずのユーリにも声が聞こえた。

ユーリと、自分を呼ぶマテリアル^デアー^アルの^チエ^エの声が。

「ユーリ。それが、私の名前……?」

「そうだ。ユーリ・エーベルヴァイン。紫天の盟主にして我らが同胞。家族の名だ」

気づけばユーリはディアーチエの腕の中に抱えられていた。

目を開けば、優しい表情のディアーチエが見えた。その姿は傷だらけであり、その傷をつけたのは自分であることは想像に難くない。

「ああ、マテリアル―L。ごめんなさい……私は……」

目の前のディアーチエの痛ましい姿に涙を流すユーリの目元を、ディアーチエは拭い、涙を払う。

「たわけ、家族が非行に走ったのなら止めるのが家族の役目。それに、我が名はロード・ディアーチエ、闇統べる王。貴様の暴虐すら、全て支配する王の中の王ぞ」

それに――、とディアーチエは言葉を繋げ、ユーリに周囲を視るよう促す。

「見よ。ここにいる全員が貴様を救うために戦い、そして生き延びた。砕けえぬ闇にするもので、我らにはそれも塵芥に過ぎぬ。貴様は、誰の命も奪わなかったのだ」

ディアーチエに促され辺りを見回すと、自分たちを囲むように複数の人影が見えた。誰もが少なくない怪我をしているように見えるのに、その全てが自分の事を慈しむような、安堵したような表情を浮かべていた。

自分に対してそんな顔をする人は、もうユーリの記憶にはない。

「ごめ……ごめん、なさい」

向けられる優しさに耐えきれないはずが無く、ユーリは瞳は涙であふれ、ユーリの口からは謝罪の言葉が零れる。

『ちがうよ、ユーリ』

『フェイト』がその言葉を窘める。

『そうですよ、ユーリ。』

シユテルもまた、ユーリの謝罪を宥める。

「こういう時はな、『ありがとう』と、感謝の言葉を述べるのだ」

ディアーチエの言葉にユーリは呆気にとられるも、腑に落ちた感触を得ていた。

「ありがとう、とう？」

「そうだ」

——そうだ、この気持ちは、この涙の理由は。

ユーリの心を満たして溢れ出た気持ち。それはユーリにとっては謝罪という形でしか表現できなかった。

しかし、それを訂正された。

「ありがとう」

『うん』

嬉しかった。自分を止めてくれて。

「ありがとう」

『はい』

嬉しかった。自分を救ってくれて。

「ありがとう、ごっごいますー」

だからその気持ちを表現するために、ユーリは生まれて初めて、大声で感謝の言葉を述べ、大泣きした。

今度はその涙を拭うものは居ない。

新生児の泣き声を止めるものがないように。

ユーリ・エーベルヴァインは、ここに産声をあげた――。

GOD編最終話 「Story of Farewell」

こうして、ボクーレヴィー史上最大の事件は幕をとじた。

後は語るほどのことは無い。誰もが幸せな未来に向かって歩んでいくだけの話。

それでも、この物語の最後の一幕、幸せな未来の最初の一步を少しだけ語るとしよう。

「ほんつとうにつ、申し訳ありません！」

大きな声と共に金糸の長髪を振り乱す勢いで頭を下げるのはユーリ・エーベルヴァイン。

システムUーDそのものであり、エグザミアの基幹部である少女は己が繰り広げた惨状の被害者たちに向かって頭を下げていた。

無事―死者が出なかったという点で何事も無く―ディアーチエの制御プログラムにより溢れる力を制御可能となったユーリであるが、UーDに行動を支配されていた中でも己の意識はあり、自分を止めようとする勇者たちを傷つけ続ける光景は心苦しいものであった。

幸運と奇跡が重なりなんとか死者は出なかったものの、アマタは腹部貫通、キリエは右腕破損。シユテルとレヴィは駆体放棄―通常的肉体であれば死亡と同義である―と、運良く怪我の影響が少ない者のみに重傷者が出ただけであり、それ以外の者が同じ傷を受けていたら良くて四肢欠損であった。

そして死亡してはいないものの、フェイトは全身の筋断裂、血管の損傷による体全体に広がる内出血と簡易的な診断だけでも一命をとりとめただけであり、レヴィ曰わく脳にも多大な損傷が出ててもおかしくないという、一際大きな怪我を負っていた。

そのためフェイトだけは現在アースラ医務室にて医療スタッフ達による集中治療の真っ最中である。

以上にあげた人物が比較的重傷であったというだけであり、それ以外のメンバーも皆傷を受けていないものは居らず、なおかつ生命力という概念的なエネルギーすら奪われている状態のため体力、自然治癒力も衰えているという状態であるためけっして軽傷者とは言い難い。

それら戦闘に参加したフェイト以外のメンバーは、現在後衛に徹したため比較的消耗の少ないユーノとシヤマルに、デイアーチエがユーリから受け取った無限の魔力を分け与え続けるという無茶苦茶効率が悪く方法ながら、回復魔法で無理矢理治療している最中であった。

そんな野戦病院もかくやといった様相の食堂―治療室は現在フェイトに付きつきりなため広い場所に集められている―にて、魔力タンの役目があり、そしてまだ自分で魔力を分け与える、他人へ治療魔法を使うなど繊細な魔力運用に不安のあるユーリは離れることもできず、しかし己で何かをすることもできず、こうして頭を下げることにできずにいた。

「にやはは、気にしないでユーリちゃん」

頭を下げるユーリに向かってなのはが言うが、これはもう何度も繰り返された情景であった。

ユーリは律義にもこの場の全員一人一人に頭を下げていた。

そんなユーリをある者は許し、ある者は「しょうがない」と言い、またある者は再戦を約束させ、そしてなのはは「気にするな」と言った。「許すも何も、私達がしたくてやったことだから。レヴィちゃん達のお願いを聞いて、ユーリちゃんの事情を聞いて。それで助けたくなくなった。私達が勝手にユーリちゃんを助けたくて助けた。ただそれだけだから」

その言葉を聞き、それでも頭を下げるづけるユーリを見て、なのは

は言葉が続ける。

「ユーリちゃんは実は誰かに助けてほしかった」

ちがう？ と聞くのはにユーリは顔を上げながら頭を横に振る。「違います。私は、救ってほしかった。望まぬ暴虐を振るう私自身から」

「うん。だから私達は助けたかった。そしてユーリちゃんは助かった。なら、別の言葉が欲しいな」

自分のエゴを認めるユーリの苦い表情に対し、なのはは優しく、やわらかく笑いながら手を差し出す。

差し出された手となのはの顔を不思議そうに見つめるユーリ。

「別の、言葉……？」

「うん。助けて欲しいときに助けられた、転んだ時に差し出された手を取った。そんな時に、一番最初に言う言葉」

なのはの言葉に、ユーリのハツと思い当たり、なのはの手を強く握る。

「ありがとうございます」

「うん」

「ありがとうございます」

「うん」

「私を助けてくれて、ありがとうございます！」

「うん！」

ディアーチエに制御プログラムを打ち込まれ、朦朧とする意識の中でも言った言葉。

それでも今度はしつかりとした意識で、自分の意志で言葉にする。感謝の気持ちを謝罪の言葉ではなく、直接感謝の言葉に乗せて。

そうしていてもたってもいられなくなったのか、ユーリは立ち上がると再度一人一人の手をとり感謝の言葉を述べる。

「ありがとうございます！」

「気にするな、というとなのはと同じか。ああ、感謝の言葉、素直に受け取っておくよ」

アースラの執務官に。

「ありがとうございます！」

「はい！ どういたしまして、です！」

未来の聖王に。

「ありがとうございます！」

「はい。謝礼は再戦でいいですよ」

覇王の末裔に。

「ありがとうございます！」

「おおきにな。ほんに助かって良かったわ」

「ああ、ほんとに、よかった」

夜天の主とその融合騎に。

「ありがとうございます！」

「ああ」

「お、おう」

「はい！」

「……む」

夜天の守護騎士達に。

「ありがとうございます！」

「えっと、うん。よかった」

『ほんとにね、助けてあげられて私もうれしいよ！』

ECドライバーとリアクターの二人に。

「ありがとうございます！」

「うん。無事に助けられてよかった」

考古学者兼、未来の司書長に。

「ありがとうございます！」

「はい！ 綺麗に K・O・Y収まってです！」

「うーん、まあ何とか死者も居ないし？ 万事解決ってことでいいんじゃない？」

未来のアンドロイドの姉妹に。

「ありがとうございます！」

「うむ。レヴィとシユテルの躯体が完了したら、また言ってやるとよ

い」

家族に。

みんなに、ありがとうと言える喜びを伝えよう。

「はい！ それと、マテリアール、レヴィに似た……」

「フェイトちゃんにも、目が覚めたら、伝えよう。ね？」

「はっ」

戦場に立った中で唯一、この場に居ない雷鳴の少女にも――。

そうした一幕が野戦病院とかした食堂であってから、数時間後、火をまたぎ朝陽が昇ろうとした時間に、フェイトの緊急治療は終了。

目を覚ましたのはその次の日の朝、戦闘終了から時間にして32時間後、日付にして2日後の事であった。

各々自室、自宅で休息にあてている最中、フェイトの目が覚めたことが伝えられ、時間にして10時。フェイトが目覚ましてから4時間後に全員が、フェイトのいる救護室に集まっていた。

そこには戦闘に参加したメンバーに加え、看病のため前日から付きっ切りだったテストタロッサ家もおり、かなりの人口密集度をたたき出していた。

「フェイト、さん」

そうしてフェイトに言葉を伝えるため、フェイトの前に進み出るユーリ。

しかし、その前を遮る人影。

「母さん」

フェイトの言葉が示す通り、その人物はプレシア・テストタロッサ。フェイトの母親である。

「あ、えっと」

元から目筋が鋭いプレシアが身長差のあるユーリを見下ろす光景は、見下ろされる側にかかなりの威圧感を与える。

その威圧感にユーリが怯む中、プレシアは言葉を紡ぐ。

「フェイトから、レヴィイからも、事情は聞いているわ。根本的にあなたのせいでは無いということも、怪我の原因は無茶な強化魔法を使った反動で、ほとんど自業自得のようなものであることも」

そこまで言って、プレシアは息を整えるために何度か呼吸を繰り返すと、再度口をひらく。

「それでも私は、怪我をした娘の、死ぬかもしれない娘の母親として、あなたを殴る権利があると思っているわ」

「……はい。その、通りです」

プレシアの言葉を聞いて、覚悟を決めるように、しつかりとその言葉を肯定したユーリを見て、プレシアは手を振りかぶる。

スパアン！と大きな破裂音が救護室に響き渡る。

「っ」

ユーリはその衝撃と、そして胸に響くなにかの衝撃で、顔を逸らす。

「痛いわ」

そしてプレシアもユーリの頬を打った右手を左手でさする。

「人を、生身でぶったのは久々よ。こんなにも、痛かったのね」

誰に言うでもなく、ただ自分に語りかけるようにプレシアは独り言ち、今度はユーリを見下ろすのではなく、視線を合わせるように屈みユーリと視線を合わせる。

「ごめんなさいね、もちろん無茶をした娘二人は先ほどこれでもかかって程に叱ったわ。それでも、親として母としての感情をあなたにぶつけてしまった。やるせない感情をぶつけるしかなかったの。ごめんなさい、痛かったでしょう」

先ほどとは打って変わり優しい表情でユーリの頬をさするプレシ

ア。

「……はい、胸が、痛い、です」

その手が、先ほど自分の頬を打った手と同じだと、こんな優しい手にあんな苛烈なことをさせてしまったのだと。

それほどの事を自分はしてきたのだと、改めて実感させられたユーリは、気づいたら涙が止まらなくなっていた。

「あなたにそれほどの思いを、怒りを、憎しみを持たせて。こんなに優しく頬を、撫でられる人に、そんな思いをさせてしまった程、私は罪深いのだと。」

これまでもそう、ずっと昔私が私を諦めてしまったあの時から、こんな思いをする人を生み出し続けてしまっていたと。

私は今更になつて、あなたに頬を打たれて、今やつと、実感したんです。知ったんです。だから、胸が痛い。です」

泣きながら独白するユーリの頬を、プレシアは優しく撫でる。

「そう、それが分かっているなら、何も言うことは無いわ。私の分はさつきの平手で相殺。それ以外は、あなたが折り合いをつけていくのよ」

「はいっ。ありがとう、ごさい、ますー」

プレシアの激励に感謝の言葉を言い、ユーリは目元を強く拭う。

そして、本日の本題の少女へと相對する。

その少女は自分の母の行動に慌てていた。身体中を包帯やガーゼで覆い、端から見るに痛々しい少女は、その綺麗な金髪は魔法の後遺症か、何房か色が抜け落ち銀に近いメッシュが入ったようになってしまっている。

そんな少女の前に、ユーリは立つ。

「フェイト・テストタロツサさん」

「うん。ユーリ、だよ。ね。なにかな」

フェイトはまだ身体を起こすのも辛いだろうに、それでも上半身を起こして、ユーリの目を真っ直ぐに見つめ返してくる。

そんなフェイトの手を、ユーリはなるべく優しく、力を入れずに握る。もはや握るといふより両手で包む、といった方が的確かもしれない。そんな力でフェイトと手を重ねる。

「ありがとうございます、ございました！」

そして、しっかりと感謝の言葉を述べ、頭を下げる。

「レヴィを、私の家族でもある大切な人を助けてくれて。

レヴィの思いを優先してくれて。

レヴィと一緒に私を止めてくれて。

私を、助けてくれて——」

ありがとう

万感の思いを込めた感謝の言葉を受け取ったフェイトはゆっくりと、空いた手を自分の手を握るユーリの手を重ねる。

「どういたしまして。私も、ユーリが助けられて、嬉しい」

そういって、朗らかに笑った。

これが、この事件にかかわる人へのユーリの後始末。

これからも、ユーリは今まで奪った命への贖罪を続ける。

でもそれは、決して後ろ向きではなく、自分たちを救ってくれた人への感謝を胸に、前向きに向き合っていく。

そう決めることができたというだけの、話。

後始末で顛末だけど、これがユーリの、ユーリ・エーベルヴァイン

の、始まりの一步。

始まりがあれば終わりがあのように、出会いがあれば別れがある。

だから、別れを始めよう。

そうして、数日を用いて各々が体調をある程度整えた時、ついにその時は来る。

「さみしく、なっちゃうね」

そういつて笑うなのは表情は、少し寂しそうで、切なさを感じるもので。

「そうですね、だけど大丈夫です！ 絶対、会えますから！」

対するヴィヴィオは、いつも通りに——いつも以上に元気澁刺な様相で。

——別れの時が来た。

ただそれだけの話。

ヴィヴィオ、アインハルト、トーマとリリーの4人は、キリエとア

ミタの時空移動に巻き込まれた被害者であり、現代からみて未来の人物である。

その人物との出会いや、伝えられた情報はこの世界から全て抹消しなくてはならない。

それはつまり、今のなのにとってヴィヴィオとの別れは、『娘』を忘れることと同意義であった。

しかし、そのことはすでに承知の上で、そうしなければいけない理由も説明され、納得した。それでも寂しいものは、寂しいのだ。

「絶対、また会いますから、なのはママにとっては10年後かもしれないし、13年後かもしれないけど、それでも絶対私と会えます」

「うん。わかってる。だから、『またね』ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの言葉を信じた。だからこそその『またね』。また会おうとそう決めたなのはの言葉に、ヴィヴィオが心の底から嬉しそうな、朗らかな笑顔を浮かべる。

「うん！ 『またね』！ なのはママ!!」

「高町なのは」

ヴィヴィオとの別れを済ませたなのはにシュテルが声をかける。

「シュテルちゃん」

「あなたとは、結局手合わせできず仕舞いでしたね」

「うん、そうだね」

表情のあまり変わらないシュテルと、よく変わるなのは。対照的だが、それでも似ている二人は、しばし無言で見つめあう。

「それでは、『また』」

「うん。『またね』」

それだけで今は良い。

あまり関わりあいの無い二人だったが、その関わりが永久に途絶えるわけでは無いのだから。

だから、今はこれで良いのだ。

いろんな場所で別れがあるように、ここにもまた、別れがある。

「ほんとに、行っちゃうんだね」

そういうのは輝く金色の長髪に、銀に近い白髪がメツシユのように何房か混じる少女。

その少女の言葉を受けて、バツが悪そうに、後味が悪そうにするのは鮮やかな水色の長髪に、先端が蒼色へと変わるグラデーシヨンの少女。

そう、これはレヴィとフェイトの別れの話。

「あー、うん。やっぱり行かなくちゃいけないから」

ユーリの力の制御の練習と、ディアーチエ達に協力したキリエへの報酬として、ディアーチエ達はアマタとキリエの故郷、エルトリアへと同行し、キリエがこの時代のこの世界にやってきた問題に対処するということを決めた。

厳密には、元から決めていた。

寂しくなるから、悲しくなるからできれば知らせずに終わりたい。伝えずに出ていきかけた。

フェイトではなく、レヴィが寂しくなるから。

それがレヴィがフェイトに伝えず置手紙だけを残して家出した理由である。

「でも、帰ってくるんだよね」

「うん」

それでも、未レヴィ人のおかげで、その寂しさはやわらいだ。

レヴィがいてから。レヴィが、フェイトのことを母と、レヴィのことを父と呼び慕うからこそ、踏ん切りがついた。

「絶対返ってくる。何年たっても、何百年たっても。絶対にキミのフェイトの居るところに帰ってくる」

断言した。

強い意志で。確固たる意志で断念した。

どのようになっても、どんな理由があろうとも、レヴィの存在意義はフェイトであり、レヴィの存在理由はフェイトなのだから。

「うん。だから、ちよつとだけお別れ。大丈夫。あの時も言ったけど、私は大丈夫。今度は帰ってきてくれるって、また会えるって保証があるから。だから絶対、大丈夫だよ」

それが分かっているからフェイトには寂しさは少ない。

無いわけではない。レヴィが家出をしたときは狂乱するほどに、フェイトにとってもレヴィは大事で、大事で、仕方がないのだから。それでも、自分のわがままで大勢の人に迷惑をかけるわけにもいか

ないし、なにより――

「帰ってきたら、立派な『人間』になってるから。もうお人形な私じゃない。もう守られる私じゃない。レヴィの隣に居られる、私になるから」

夢ができた。

未来予想図が生まれた。

そのために、一時離れる必要があると、そう思ったから。

「だから、『またね』レヴィ」

その言葉を聞いて、レヴィはフェイトの意志を感じ、涙を流す。

「うん」

いつだって、別れるときに先に涙を流すのはレヴィの方だった。

『『またね』。フェイト』

フェイトとレヴィの別れの言葉が終わり、一行はアマタとキリエに引きつられ光の柱の中へ姿を消す。

そう、これは二人の少女の別れの物語――。

—
F
i
n.

L×F Ⅱ

epilogue 「レヴィ×フェイトⅡそれは

」

愛しい君へ——。

あれから、今日で3年以上の月日が流れました。

君は今なにをやっているのかな？

そんなことをしよっちゅう考えているのは、この手紙代わりの日記を読めばわかっちゃうけど、それでも書かずにはいられません。

あれからもう3年以上、こちらでは今日から新年度が始まろうとしています。

結局、君が入る予定だった聖祥付属小学校は、君が居ないまま恙なく卒業して、新年度となった今日私はなのは達と一緒に聖祥付属中学校に進学することになりました。

そうです、花のJCです。今日はなんと入学式なのです。

聖祥中の制服はブレザーで、なかなか新鮮な気分だし大変かわいらしいと思います。

どうせ母さんが写真はいっぱい撮ると思うけど、それでもやっぱり記念すべき日の新たな装いを一番最初に見るのは君であって欲しかったと思わざるを得ません。

まだまだ色々書きたいことはあるけど、そろそろ準備しないとなのは達との待ち合わせに間に合わないの、朝は一旦ここまでにしておきます。

——君の愛しのフェイトより。

「フェイトくそろそろ行くよ」
「はい！」

海鳴市のある高層マンションの一室にそんな声が響く。

その一室だけではなく、海鳴市の——いや、日本中のいたるところで同様の会話が行われているだろう。

なぜなら今日は新年度。あらたな門出の日であるのだから。

「フェイト」

「母さん」

それはこの一幕のテストタロツサ家でも同じ。

今日は3人娘の二人、長女のアリシアと妹のフェイトが中学校へ入学する式典があるのだ。

「どうかな、変なところないかな」

「ええ。大変似合ってるわ」

「そっか！」

フェイトはプレシアの目の前でぐるりと回ってみせると、チエツク結果を聞く。

「行ってきまーす！」

「それじゃあ行ってきます！」

「行ってらっしゃい。アリシア、フェイト」

母に見送られ二人は仲良くマンションを降りる。

そうしてしばらく歩くと待ち合わせの場所へとたどり着く。

待ち合わせ場所には燃えるような輝く金髪のお嬢様と、しつとりと

した鳥の濡れ羽色をした黒髪のお嬢様の二人の姿。

「アリサ！　すぐか！　おはよう！」

その二人の姿を見つけるとアリシアが駆け寄りながら元気よく挨拶する。

「あら。アリシア、フェイトも、おはよう！」

「アリシアちゃん、フェイトちゃん。おはよう」

「二人とも、おはよう」

アリシアの声でフェイト達の接近に気づくいた二人と朝の挨拶を交わす。

小学生の頃からの習慣であった。

そうしているともう一人近づいてくる人影が。

「おおく集まっとるなあ。おはよう」

『はやて（ちゃん）。おはよう』

八神はやて。小学4年生の頃から、こうして同じように通学を始め、これからもまた同じ場所へと通う。

4年生のころからこうして6人は、仲良く一緒に学生生活を送っていた。

「あら、なのはちゃん来とらんのかな」

その最後の一人、高町なのははまだ姿を現さない。

いつもはフェイトたちとほぼ同タイミングで集合するのだが、今日に限って来ておらず4人の視線はフェイトへと向く。

「うーん。今日は大事な日だから、って母さんに朝練を禁止させられたから。私もわかんないかな」

いつもはフェイトとなのはは朝の調練を共に行っている関係で、だいたい同じ時間に集合していたのだが、本日は勝手が違ったらしい。

「うーん、どうする？　そろそろバス来ちゃうよ？」

少々困った様子ですすがその場の全員に尋ねる。

彼女たちはいつもバス停の少し前で集合し、そこから皆でバス停まで移動するようにしていたため、そろそろ移動を開始しないとバスの時間に間に合わないのである。

「うーん、流石に士郎さんが寝坊を許すとは思えないんだけど……」

なのはの道場で稽古をつけて貰っているフェイトとしては、あの高町士郎がなのはの寝坊を許すとは到底思えず、首をかしげると遠くから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「みんな~~~~」

女子中学生にしてはかなりの速度で走ってくるその姿。

栗色の長髪を頭部の横でまとめるサイドポニーテールの形で結びんだ少女。

「ふう。おはよ~~~~」

『おはよう。なのは（ちゃん）』

走って近づいてくると、息を整えたのちに挨拶をするのはにたいして、5人が一斉に挨拶を返す。

こうして聖祥6大美少女が揃って和気藹々とバス停へと足を運んだ。

『これより、聖祥付属中学校の入学式を開始いたします』

そうして6人が登校してから少しすると入学式が始まる。

フェイトにとっては人生で2回目の大規模な式であり、人一倍式に

集中しているが、そもそも私立中学校である聖祥付属中学校は近辺ではお嬢様校であると認識されており、それにふさわしい教育環境が整っている。

そのため、新入生・在校生ふくめ、一般の入学式を想像するような気もそぞろな生徒は居らず、式は恙なく進行していった。

『続きまして、新入生代表挨拶』

そして式は新入生代表挨拶へと進む。

新入生の中で最も優秀である学生が代表となる新入生代表挨拶であるが、フエイト達の学年で最も優秀であり卒業生代表もつとめたアリサは今回登壇しない。

これは聖祥の伝統であり、入学式の代表は途中入学者からのみ選出され、入学試験の成績のみが選考対象となる。

そのような理由により、今回登壇する人物は学生達にとっては知らない人物である事が多い。

『新入生代表、キングスディアーチエ・K・クローディア』
「はい」

そんな中登壇した人物に見覚えがある者は新入生の中で多く、これまで静かに進行していた入学式が始めてざわつき静寂を破る。

しかし教育の行き届いた生徒達は注意されるまでもなくざわつきは鳴りを納める。

新入生をざわつかせた人物は、まず美しかった。

中学生にしては高めの身長、毛先が黒へと変わる不思議なグラデーシヨンのある銀髪。

理的で、勝ち気な印象を与える切れ長の目。

そして登壇するまで、そして壇上に立ち会場を見渡す堂々たる姿。まるでこのような場は慣れていると言わんばかりの風貌には一種

のカリスマ性すら感じる。

しかしその程度でここまで明確なざわつきは起きない。

確かに名前や風貌から外人であることが伺えるため、普通の学校で登壇したらざわつきも起きるだろう。

しかし聖祥付属小には卒業生代表もつとめたアリサ・バニングスがおり、新入生の9割を占めるエスカレーター組に彼女を知らぬ者は居らず、外人にも慣れている。

しかし今回のざわつきは、新入生の過半数以上、エスカレーター組が驚きのあまり漏らした言葉が集まりざわつきとなったモノ。

そう。あまりにも、あまりにもディアーチェ・K・クローディアは八神はやてに顔立ちが似すぎていた。

外人のような風貌だがその顔はあまりにも、日本的であり、そして新入生の中での有名人に似すぎていた。

「(なのは！ はやて！ あれって……)」

そんな驚きをフェイトは念話で友人、なのはとはやてへ伝える。

魔法少女の職権乱用であった。

「(うん。私も驚いちゃった。ううん思い出した)」

「(私もや。今頭がスツキリしたで、あれ王様や)」

そうした三人の脳内会議は満場一致で結論を下す。

「(この世には三人同じ顔がおるらしいとは言え、流石にディアーチェって名前で私に似てる人間が二人もおるなんて考えられへん)」

三人が念話で会議を続ける中新入生代表挨拶は、目立ったこともなく定型文を並べた言葉により恙なく進んでいく。

「(ただ思い出した王様とギャップがあるというか、ちょっと大人しいと言うか……。大人になったんかな)」

ついそんな雑談を念話してしまう程に目の前のディアーチェは

やて達の印象とはかけ離れていた。

ぶつちやけはやて達にとつて、特にはやてにとつてディアーチエの印象は初見の印象が強く、登壇した後高笑いと共に学園征服の宣言でもしてもおかしくないという印象しかなかった。

しかし、目の前のディアーチエは高笑いもしなければ変な発言もせず、大人しくなったと感じられる。そして何より、明らかにはやてより成長している。

どことは明言しないが、色々。

『——以上。 新入生代表、ディアーチエ・K・クローディア』

そして新入生代表挨拶が終わりディアーチエは降壇する。

はやてやなのははその姿や言葉に変な部分がないか集中していたが、フェイトは集中していなかった。

それどころかその後の式にすら集中していなかった。

魔導師として鍛えられたマルチタスクによって、端から見ただけではそのように見えないがフェイトの頭はあることではいっぴいであった。

——ディアーチエが帰ってきたのなら……、だったらあの子も！

今までの子と別れた正確な理由は、頭に霧がかかったように思い出す事ができなかった。

ただフェイトはこの3年と少し、あの子との約束だけを信じて待ち続けていた。

どこへ行ったのか、誰と行ったのかすら思い出す事ができなかったが、『絶対に帰ってくる』という言葉、絶対に守ってくれるという確信だけで、これまで過ごしてきた。

再開したとき、誇れる自分であるように、と。

——レヴィが、帰ってきた！

早く会いたかった。

式の時間も、退場の時間も、自分のクラスでの担任との顔合わせも、何もかもが焦れつたくて、終わる時間が待ち遠しくかった。

だからHRが終わり解散となった瞬間に駆け出した。

自分のクラスに見覚えのある鮮やかな水色は無かったから。

荷物も、同じクラスになったのはとアリサも置いて、一目散に駆け出した。

聖祥付属中学校は小学校と違い男女別棟での教育環境となっており、実質女子校である。

そのため、途中入学を受け付けても一学年のクラス数は多くない。今年の新一年生のクラス数は全部で4クラス。

そして聖祥6大美少女は3人ずつの別クラスに別れ、自分と姉は別クラス。

混同を避けるため双子等はクラスを別々にする事が多いらしく、そのようにクラスを決められて居るならば残りは2クラス。

あの子がレヴィであるなら。

レヴィ・テスタロッサであるならば、自分とも姉とも別のクラスであるとの予想。

一つ目のクラス。

勢いよく放たれた扉の音に中にいた全員の動きが止まる。

しかもやってきたのは小学校時代の有名人の一人。全員の視線が集まるが、フェイトは集まる視線に頓着せずクラス内を一瞥する。

——いない！

そう判断するや否や全速で次のクラスへと向かう。

「勢いよくやってきたと思ったら全力疾走で消えるフェイトに、覗かれたクラスにいた少女達は訳も分からず困惑するばかり。」

同じことがもう一つのクラスでも行われる。

——ここにもいない!? なら、どこに……!」

鬼気迫る雰囲気フェイトに出入り口に立たれ、困惑する少女達を尻目に、フェイトは考える。

もはやディアーチエが別人であるという可能性も、レヴィが帰ってきていないという可能性もフェイトの頭の中には無い。

「あ、あのフェイトさん……!」

「あつ!!」

偶然6年生の時に同じクラスであり、顔見知り程度の仲の少女が人柱とされフェイトに声をかけたその瞬間、フェイトに電撃が走る。

そしてその直感に導かれるまま後ろへ振り返り、廊下の窓から飛び降りた。

「ええ……!」

意を決して話しかけたら大声を上げ、そのまま地上3階から身を投げたフェイトの姿。

そんな状況を、声をかけた少女の脳味噌は処理しきれず眠るように倒れる。

入学初日の身投げと意識不明者の発生に騒然となる校舎。

そんな大事件を起こしていると気付かず、意にも止めず、フェイトは空を駆ける。

魔法の隠匿など知らぬ。

魔法の規定区域外での無断使用など知らぬ。

フェイトにとってレヴィより大事な事など、もう有りはしないのだから。

なのはやはやてから送られる念話も気にもとめず。
姉からの電話で鳴り響く携帯にも気付かず。

まさに一心不乱。

フェイトは真っ直ぐ、空という直線にして最短距離を最速で移動する。

直感に従い、海の方へと突き進む。

その日、快晴であった海鳴市で、雷の音を聞いた人が続出した。
一部では真横に迸る稲妻を見たと言証する者までいた。

そんな一歩間違えれば都市伝説や異常気象などの騒ぎになっていることなど露知らず、フェイトは目的の場所へと降り立つ。

——その日、快晴であるにも関わらず海鳴臨海公園に雷が落ちた——。

降り立ったフェイトは走る。

確信があった。

なぜなら、ここは自分にとって特別な場所だから。

数々の別れを経験してきた場所だから。

だから、彼女ならここにいと確信していた。

鮮やかな青が見える。

雲一つ無い澄み渡る空の青。

波一つ無い透き通る海の蒼。

それらよりも明るく、爽やかで、透き通った——水色。

——知っている色、しかしその髪型は知らない。

「ここからの景色に、あまり良い思い出は無い」

その人物は誰に話しかけるわけでもなく、しかし近づくフェイトに聞こえるように喋り出す。

——聞き覚えはある、しかし記憶にはない声。

「ここはずっと、別れの場所だったから」

——見覚えのある、しかし見たことはない背中。

「ボクにとってはそんな場所」

——良く知った一人称。

声は、自分とよく似ていた。

少しハスキーだが、自分と良く似た声質。

後ろ姿はとても大きかった。

今の自分より頭半分以上、一つまでとは言わずともそれほどには大

きい、女性にしては高身長な背丈。広い背中。

フェイトは男子以外でその一人称を使う女性を知らない。

でも、生まれたその時から3年以上もの間、ずっと一緒だった大切な人の、一人称だった。

「キミにとっても、それは変わらない」

初めて目の前の彼女は明確に誰かへと、見えていないはずのフェイトへと語りかける。

その女性の言うとおり、フェイトにとっても、この場所は良い思い出があるとは言い難い。

ずっと、別ればかりを繰り返してきた場所だから。

——だから

「だから」

フェイトの思考と、女性の言葉が被る。

その言葉の続きを言うのはフェイト——。

「だから、君はここにいる」

フェイトの言葉の続きを言うのは女性——。

「良い思い出を、別れじゃない、出会いの思い出をキミに上げたかった」

わかっていた。

だからフェイトはここに来た。

彼女なら、あの子なら、愛しい君ならそうすると、そうしてくれる
と思ったから。

「レヴィ」

「フェイト」

目の前の女性が振り返る。

切れ長で凛々しい目つき。

スラツとしながら、メリハリのついた身体。

爽やかな水色の髪を、うなじの部分でひとまとめに結んだ長髪。

パンツスーツに薄手のコートを纏うその姿は、フェイトよりも高い身長もあり大変大人びて見える。

それでも、間違えようがなかった。

待ちわびた人だった。

「レヴィ！」

フェイトが駆け出す。

万感の思いを弾けさせる。

「フェイト」

レヴィが、駆け出すフェイトを優しく待つ。

「おかえり！ レヴィ！」

二人の影が重なり――

「ただいま。フエイト」

—— わかれてた二つが、ふたたび一つになる。

—— 新暦XX年。

—— 次元宇宙のどこか、某管理外世界。

そこに作られた拠点内にアナウンスが響き渡る。

『それではこれより作戦『L—A』を開始します。職員は所定の位置に着いてください』

その言葉により整然としていた内部の人影は慌ただしく動き出す。

ある者は戦闘準備をはじめ。

あるものは機器に不備が無いかの最終確認をする。

そんなある者に、声をかける者もいる。

「執務官殿」

「——提督」

声をかけたのは整った顔立ちの美丈夫。その顔に似合わず、声は低く厳かにも聞こえる。

そんな提督に声をかけられたのは、これまた顔立ちの整った美女。いつもは優しくおっとりした雰囲気を纏う女性だが、これから戦場へと征くその雰囲気は凛々しく、荒々しい。

「すまないな、予定より大分長引いてしまった」

「あー、そうですね。まあしょうがない、ですから」

提督と呼ばれた男性の言葉に、執務官殿と呼ばれた女性は複雑な表情を浮かべる。

確かに予定以上の任務——つまるところ残業に付き合わされている訳だが、予定外だからといって拒むこともできない。

なぜならここは管理外世界にして、魔導テロリストの本拠地なのだから。

そのテロリストの一斉検挙に向けての任務、出張である。予定が長引くことなどよくあることであった。

しかし、それでも黒髪の提督は、何房か白のメッシュの入った金髪の執務官へと申し訳なく思っていた。

「しかし、もうすぐだろう。君の娘——ヴィヴィオの誕生日は」

そう、クロノ・ハラオウン提督にも子供がいるために、フェイト・テストロツサ執務官の娘の誕生日に間に合わないかもしれないスケジュールになってしまったことを、大変悔やんでいた。

「あー、まあそうですけど。今日の昼までに全員一人残さず逮捕して、今日中に証拠押さえられれば、ギリギリ当日中には間に合いますから」

そういうフェイトだが、クロノにはそれは不可能であることは百も

承知であった。

相手もバカではなく管理局が乗り込んでくることは予想されているだろうし、抵抗も激しいだろう。

なぜなら相手は魔導テロリスト。つまるところ、魔導師なのだから。

「しかし、それは――」

「だから」

だからクロノが無理であると、そう言おうとした瞬間、フェイトの側に光の渦が表れる。

その渦は徐々に収束していき人影を形作る。

「申し訳ないんですけど、助っ人呼びました」

その人影はフェイトとほぼ同じ背格好の女性であった。

背丈はフェイトより数センチほど大きいか。

スタイルはフェイト同様整っており、すらりと長い手足の印象もあり大変凛々しく見える。

「君は――」

「や、久しぶり。クロノ」

毛先が濃紺へと変わるグラデーションをした爽やかな水色の長髪を、うなじの部分で一纏めにして流しただけの髪型。

パンツスーツ紺色のコートを纏うその顔は、まさにフェイトとうり二つであり、男装の麗人といっても過言ではない。

「レヴィ」

その予想外の人物の登場にクロノもさすがに驚く。

レヴィの戦闘力は承知であるため、たしかに強力な助っ人ではあるが、彼女は管理局員ではない。さすがに依頼もしていない局員外の魔導師を任務に参加させるわけにはいかなかった。

「まあまあ。大丈夫です。レヴィは戦いませんから」

クロノがそういうであろうと予想しているかのように、クロノが声を上げる前にフェイトが先手を打つ。

「ボクだけの特殊技術^{レアスキル}で、ボクはフェイトとユニゾンするから。実際にはフェイトだけが戦うことになるよ」

そもそもが、この場に転移してきたのだからレヴィの用いる魔力ではない力によって、魔力反応を検知させない転移を行い現れたのである。これでフェイトとユニゾンしてしまえば、公式にはレヴィという協力者はいなかったという扱ひも難しくはない。

それはわかる。理屈上は理解はできる。

理解できることと、納得できる事は全くもって関係ないのだが。

「——っ。……わかった」

クロノは無理やり自分を納得させた。

もともとフェイトの貴重な有給取得のタイミング——本来であればフェイトはすでに有給を用い自宅に居るはずだった——を失くしてしまった負い目もある。

だから、クロノは無理やり自分を納得させた。

「ああ、君が関わるといつも僕の腹痛は酷くなる……」

そう愚痴をこぼすと「あとは任せておけ」と言っただけでクロノは足早にその場を離れる。

よほどレヴィと長時間顔を合わせるのがキツイのか、それとも最近手元を離れていた胃薬を取りに行ったのか。

「あはは、クロノには悪かったかな」

「いいよ。クロノがもっととっぴかりしてればこんな少数人数で任務をすることも無かつたんだし。自業自得」

昔からクロノの迷惑をかけていたことを思い出し、申し訳なきを感じるレヴィと、自分の予定を狂わされた腹いせができてご満悦のフェイト。

姿は似ている二人だったが、その中身は似ても似つかない。

だから、二人は支えあう。

『テスタロッサ強襲執務官。そろそろ出撃時間が迫っています』

「ごめん。すぐ向かうね」

執務官補佐からの催促に謝り通信を切ると、フェイトはレヴィの手をとる。

「行こう、レヴィ」

「うん。行こう、フェイト」

二人は両手を握りあい、額をくっつけあう。

「エンゲージスタート」

そして改良に改良を重ねた祝詞を唱える。

「コネクティング↓『フェイト』」

分かれた二人が一つになる、魔法の力。

「コネクト『レヴィ』アクセプト。リターンコネクティング↓『レヴィ』」

「コネクト『フェイト』アクセプト」

たとえば物語うんめいが二人を分割わかつとも

『システム《リンクド・フェイト》ドライブイグニッション』

運命フエイトは二人の絆をまた結ぶ。

『おまたせ』

出撃エリアに『フェイト』が表れる。

「――あ、テストロッサ……執務官?」

出撃要因の最後の一人を見て、武装局員の一人は困惑の表情を浮かべる。

彼が見たことのない姿だったから。

白いメツシユがあつた部分は今は水色のメツシユへと変わり、その

瞳は鮮やかな紅と蒼の虹彩異色へと変わっている。

そして、うつすらと身体に纏う謎の光。

ここ数日同じ艦で過ごし、ドキュメンタリー番組などでも何度も見る憧れの人の、初めて見る姿だった。

『準備はできてる?』

「あ、はい! 皆準備完了しています!」

側にいた局員は、フェイトの見慣れぬ姿に見惚れていると、当の本
人から声をかけられ、慌てて返答を返す。

『ん、ならサクツと行こう。私が容疑者を無力化するから。皆は捕縛
できるね?』

『了解!』

『それじゃあ、行こう』

『フェイト』がそう宣言し、突入が開始する。

しかしそれは『フェイト』以外のすべての局員の予想を上回りあっ
さりしたものだっただ。

『フェイト』魔法陣を展開し、容疑者の拠点へとデバイスを向けると――

――内部のすべてが無力化された。

機械は動作を停止し、魔法は効力を発揮せず。

そうしてあらゆる防護手段がなくなった施設の中へ、『フェイト』は当然のように歩き出す。

その歩みは何物にも阻まれない。

隔壁は下りず。

自動迎撃装置は起動せず。

『フェイト』の前に立つ者は魔法が使えず。

実弾兵器は『フェイト』へ向けた瞬間にバラバラに自壊し。

『フェイト』へと突き立てた刃は、その嫺やかな指に掴まれると、消失する。

そうして無防備になったテロリスト達は順番に局員に捕縛されていく。

そんな中でも局員たちは魔法が使えた。道具が使えた。

『フェイト』に敵対する者のみ、何もすることを許されず。

『フェイト』に味方する者は、何も阻害されない。

一方的な場面だった。

ここままで一方的な戦闘はない。もはや戦闘ではない。

『フェイト』は歩く。施設の最奥へと向かって。

そこには、隠し扉があつたのであろう場所を何度も叩き、動作しないことに悪態をつく、羽振りのよさそうな男性がいた。

『あなたを、次元法第一——条、テロ禁止法に基づき逮捕します』

その男性に向けて、『フェイト』は淡々と言葉を放つ。

事務的に、なんの感慨もなく。

当然のように。

「ヴィヴィオー！ ただいまー!!」

「フェイトママー!!」

ある家庭に和やかな言葉が響き渡る。

娘がつい最近まで出張していた母を出迎える温かい光景が広げられる。

「ヴィヴィオ、ただいま」

「レヴィパパもおかえりなさい!!」

「おつかれ、フェイトちゃん。大変だったね」

「ありがと、なのは。でもレヴィのお陰でちゃんと帰ってこれたから」

「そうだね。レヴィちゃんと一緒だもんね」

「フェイトママを連れ帰って来てくれてありがとう！ パパ！」

「ん？ うん、やっぱり誕生日は当日に祝いたいからね。心配かけちゃったかな」

「ううん。パパと一緒にフェイトママは凄いから、心配してないよ」

「うん、レヴィと一緒になら『最強』だからね」

「あー、それは聞き捨てなら無いなあ。今んとこフェイトちゃんには47勝45敗54引き分けで私の勝ち越ししただけだなあ」

「むー。レヴィと一緒にならなのはなんかに負けないもん」

「うーん、それはズルだと思うからなのはとの一騎打ちにはボクは手を貸さないからね?」

「フェイトママずるっこー」

「ええ〜。レヴィもヴィヴィオもひどいよ〜」

そんな、温かい団欒の光景が、繰り広げられる。

レヴィ×フェイトⅡ

それは運命と絆の物語

作者の後語り

と、いうわけで「魔法少女リリカルなのはL×FⅡ」。無事完結を迎えることができました。

まず初めに、この小説はGOD編最終話が更新された9月28日に5周年を迎えました。

最初は20歳になり初めてのアルコールによる謎テンションで投稿したこの作品でしたが、ここまでの長い間皆さんの声援のお陰もあり、完結まで続けることができました。

当初から原作前、無印、A's、GODで終了する想定であり。実は文量はともかく、話数自体は連載開始からそこまで予想は外れていません。

だいたい50話程度、2年くらい。社会人になる前に終わるだろう。

そう思っていました。大変甘かったです。

自分の飽き性を甘く見ていました。

結果、2.5倍の期間5年もかかったわけですが、それでも私の飽き性であれば何時エタってもおかしくありませんでした。

更新が半年ないのは実質エタってるかもしれないが、まあ終わりをければすべてよし。完結まで行けましたので、エタってない、ということで。

これも一重に更新のたびに感想をくれる皆さまの温かい声援のお陰であります。

この場を持ちまして、重ね重ね感謝の言葉を述べさせていただきます。

本当に、ほんつとうに！

応援、ありがとうございます!!

さて、話を変えまして、以下は雑談というか落書きというか、チラ裏的な話。

元来この小説は、フェイトが好きで、レヴィ×フェイトとレヴィ×シユテルにハマってた私が、そういう話を書きたい。

レヴィとフェイトが共にいる話を書きたい。というのが始まりでした。

そこからフェイトの救済、レヴィと無二の絆を結ぶために、フェイトにレヴィを憑依、同居させよう。という発想になりました。

ですが、原作レヴィのアホっぽいけど実は賢いというキャラクター性の描写の難しさや、マテリアルズから一人だけ独立し、フェイトに寄生（誤字にあらす）するレヴィが想像つかず、よくある神様転生物となることになりました。

これは、完全に私の力量不足です。

もともと完全ご都合主義のかつ、設定が甘い部分を無理やりこじつける、まさにご都合主義な神様転生であるため、神様転生であることは全くもって活かされておらず、ただ単に設定や描写を省くためのデウスエクスマキナでした。

ただその代わりに、レヴィと名乗った彼女は、私の願望とほんの少しのレヴィらしさをブレンドした大分思い入れのあるキャラクターになったと私自身は思っております。

彼女の行動理由は0から100まで『フェイトのため』であり、彼

女の存在理由もまた同様です。

だいぶ前に活動報告でも語りましたが、この小説のレヴィはそんな理由、そして世界に転生してから「フェイトの身体を俯瞰的に見る」という状態のため、ずっと神様視点。

演劇の演者ではなく、演劇の脚本家、演出家。それらの目線でいました。

それが解消されているのは実はエピローグだけであり、本編中でレヴィは真にこの世界に生まれたとは言い難いです。

フェイトを幸せにするために。

フェイトが悲しむから。

フェイトが死なないために。

そんな理由で、自分勝手なエゴでアリシアを救い、リインフォースを救い、ユーリを救ってきました。

そうして純粹培養されたフェイトに、別れと悲しみを与えるのもまたレヴィの役目、レヴィの計画でした。

マテリアルズが居ないなら夢の世界で、居るならエルトリアへと渡ることで。

フェイトに別れと悲しみを与える。それを乗り越えるための保険はすでに作り終えているから。

なんて自分勝手に、自己満足の塊で、最低な奴です。

私は私の願望が乗ったレヴィが好きです。

フェイトちゃんは泣き顔や絶望顔も可愛いよ（ω・ω）

そんな最低な動機によつて形作られたこの物語ですが、この世界のフェイトちゃんはやんとレヴィの思惑通り幸せになります。それはレヴィが居るから。

神様の特典のフェイトとの「縁」「絆」「運命の赤い糸」は絶対に二人を離さないのです。

神様の力つてすげー！（ご都合主義）

ここからはチラ裏もチラ裏。

劇中で語られない裏設定や、StS編をやらさないが、脳内妄想から形作られた語られない未来設定の話。

なのはについて。

この小説で一番変わったのはフェイトであることは言うべきではありませんが、実は結構変わってるのがなのはです。

第1部無印編では、変わったフェイトと、そのフェイトに触発されて変わっていくなのはの話でした。

その中でなのはは負けられない呪いを受けた主人公のように、敵であるフェイトに連れられ原作以上のハイスピードで原作より強くたくましくなっています。

そんななのはの将来はは、まさに「さん」を付けろよデコ助野郎」と言いたくなるような状態になるという裏設定がります。

ここなのはは二次創作でよくある士郎と恭也の元で御神流の修行を受けていますが、実は剣の才能が恭也や美由紀ほど無い＆魔法に打ち込んでいるため、奥義や神速の習得まではいかずにミッドチルダ

へと行ってしまいます。

ですが、修行で培われた近接戦闘技能により、原作より総合戦闘力は高く万能よりです。

そして土郎や恭也から散々オーバーワークについて耳にタコができるほど注意を受けているため、この世界のなのはさんは原作のなのはさん程ワーカーホリックじゃありません。

しかし墜落事件は起きます。

それは某女子小学生博士がある目的のためになのはの遺伝子が欲しかったため、めつためたになのはをメタって対策した初見殺しを慣行したためです。

そして世界の修正力のようなのはさんは、その悔しさを後進に味合わせないために教導官を目指します。

そうして生まれるのは御神流の薫陶を受け、しかしオーバーワークにならないギリギリの訓練を施す鬼教官の出来上がり。

なのはの訓練を受けてさらに自主訓練なんてしたら即オーバーワーク確定。

普通は疲れ切ってできませんが……ティアナかわいそす案件まったなし。

そして実はこの小説のなのはは途中少しだけ描写されていますが、無印編で一度もフェイトから勝利をもぎ取れなかったため、その後戦闘の事に関してはフェイトの上を行こうとしています。

簡単に言うとな戦闘面に関してはフェイトにマウントを取りたがりません。

なので、フェイトが執務官資格（一尉待遇）を取った数年後になのはは異例の速さで三佐へと昇進します。

なぜならフェイトにマウントを取りたいから。

そんな高町なのは三等空佐ですが、それ以外は比較的原作通りにS
tSを終わらせ、ヴィヴィオを養子に取ります。

それどころか、この世界ではGOD編の記憶が中学生時代からある
ので、まだ聖王の記憶のない幼女ヴィヴィオに対して、ママと呼ぶこ
とを強要したりするちよつと危ない人になっていたりしますが、それ
でもちゃんとヴィヴィオと絆を結んで養子にして、それ以降は原作と
ほぼ変わりません。

仕事の量を減らして良いお母さんをやっていくでしょう。

未来のフェイトついて。

レヴィと別れた後のフェイトはひと月ほど悲しみのあまり寝込ん
だ後、自立について考え、とりあえず公務員になってみるかという理
由で管理局員になることを決めます。

これにはプレシアも反対しますが、結局フェイトの意思を尊重。
その後、手っ取り早く階級を上げるために現役執務官とのコネク
ションを利用し、執務官試験を取るための勉強を始めます。

やる気や熱意が原作ほどあるわけではなかったので、執務官試験に
は3度落ち、中学生になってレヴィが帰ってくるると一念発起。

レヴィに褒められたという、ある意味純粹である意味邪まな理由
で執務官試験に合格しました。

その数年後(何年かは決めてませんが)、フェイトはその働きっぷりか
ら「強襲執務官」という呼ばれ方をされます。

事件の調査よりも、調査が終わった後の武力行使に重きを置いた活
動をしていたためです。

一時期は「管理局の黄色い猪」「雷撃のクラスター爆弾」などと物騒
な異名が付けられていましたが、ある事件をきっかけに無事「黄色い
死神」の異名を獲得。原作通りだね、やったねフェイトちゃん！

外見については数好くない原作から変更のあるキャラでして、最終決戦で無理やり移植したナノマシンの影響で頭髪が何房か白のメッシュが入ったように色が抜け落ちていきます。

その後マテリアルズのエルトリア行きに合わせ現代からフォーミュラに関する論文も消失。

ナノマシンが機能制限のままフェイトの体内に残留し続けたことと、色が変わった髪を見る旅に度にレヴィの存在を感じるというフェイト談により、色素に関しては治療されなままとなりました。

そして未来の世界では、レヴィとユニゾンするとナノマシンが超過駆動をはじめ、その部分がレヴィの髪色である水色に変色する。という設定です。

未来のフェイトは、レヴィとユニゾンしなくてもフォーミュラは使えるが、ユニゾンすることで十全に使いこなせる。

という設定だったりします。

未来ではレヴィの置き土産もあり、本気になれば原作より相当強くなっていますが、本人にやる気がないため、世間からの評価は原作と同程度に収まっています。

そんなフェイトに男の影などなく、本人はレヴィ一筋でこれからもやっていくことでしょう。あんま原作と変わらないですね。

マテリアルズについて。

マテリアルズとユーリはエルトリアへ行った後、原作GOD後雑誌特典ドラマCD時系列と同様にエルトリアを回復させるために数十年暮らします。

通常の間人より成長が遅く寿命という概念のないマテリアルズは遅々とした成長の中で20歳程度にまで成長するまでエルトリアで暮らしたあと、再度タイムリープで戻ってきた。という設定です。

なので、中等部の入学式で再会したとき、なのは達オリジナルよりだいぶ成長しているのはそのためです。

実は現代地球での戸籍などを確保するため一年ほどヨーロッパで生活していたという設定で、レヴィイ含めた4人とも向こうでは何本か論文を発表しており、その界限では有名人という設定。

入学式のとくにレヴィイが制服ではなくスーツだったのはそれ関係の仕事があり入学式に出ていないためという設定です。

中等部入学後はレヴィイはレヴィイ・テストロッサとしてテストロッサ家に。

他の3人には関しては、それぞれINNOCENTと同じ苗字を名乗り、テストロッサ家近くのマンションを借りて暮らしています。

シユテルは中等部から桃子に弟子入りし、StSの時代にはクラナガンに『ダーク・マテリアルズ』喫茶翠屋・クラナガン支店』という喫茶店をオープンするという未来が待っています。

——— ヴィヴィオについて。

StS編以降をやる予定の無いこの小説では、ヴィヴィオは私の不治の病（厨二病・設定厨）が発症し、大変な魔改造を受け、レヴィイと同じくらいオリキャラ感醸し出す設定になっています。

以下プロフィール

戸籍上の名前：高町ヴィヴィオ

聖王としての宗教上の名前：ヴィヴィオIIオリヴィエ・テストロッサ

サ・高町・ゼーゲブレヒト

年齢：11歳（本編GOD編時点）

使用流派：永全不動八門一派御神垂流 総合魔法戦闘術

スタイル：公式戦は主に徒手格闘と射砲撃を混ぜた一般的なストライクアーツに近いスタイル。

本気状態では双剣と徒手格闘を織り交ぜた独自の戦闘スタイル（師匠からまだ公式戦での使用を制限されている）。

設定：

アニメ「Vivid Strike!!」放送後の時間軸から到来した高町ヴィヴィオ。

とある事情で聖王としての自覚——『力（戦闘力、権力をも含めた総合的な力）を持つものの義務を持っているため、聖王であることを吹聴はしないものの、聖王教会の関係者が「聖王様」と呼ぶことを咎めず、将来は「職業：聖王」となることを受け入れている。

魔法の才能は、針を通すような綿密な魔力制御と射砲撃に秀でており、反して身体強化系は苦手。

これはどれも世間一般的には普通以上の才能を有してはいるが、本人の中ではという評価。

これはクローンとして作成されるときに使用された「高町なのは」の遺伝子が多いに関係している。

遺伝子的には「高町なのは」と「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」の子供に近い。

体内に不安定なレリック2個分が残留しており、現在は外部ユニット『魄翼・聖天式』を利用することで疑似聖王核——追加リンカーコアとして使用可能だが、あまりに規格外すぎるため使う機会は無い。

フォーミュラシステムの利用が身体設計段階から組み込まれており、聖王核が正常稼働していたStS編ラストバトル時は自由に使えた。現在は、フォーミュラドライブを発動するためには聖王核の起動と、クリス（インテリジェントデバイス）による優先的な制御が必要。

Vivid編、Vivid Strike!!編の中で何度か周りの景色が遅くなる現象に出会っているが、自分の意思でそれを発動できたことはないため、免許皆伝には至っていない——が、GOD編内に

てついにその扉を解放。神速の領域に到達する。

この後数秒だけだが自由に神速を発動できるようになったヴィイオは、負けなしでアインハルトが引退した後のU-15ワールドチャンピオンを手にする。

御神流の奥義を使用しない限り格闘家としての防御力、打撃力のなさは原作通りであるため、神速の領域に至れても、その間の攻撃をすべて耐えて、一撃でKOされるほどの威力を持つ、アインハルトなどのパワーファイターは相変わらず苦手。

人体の急所へのクリーンヒットを数秒のうちに数十発連続して当たたにもかかわらず、KOが取れないアインハルトがおかしい。とはヴィイオの談。

格闘文系魔法少女、高町ヴィイオの物語があるとすれば、多分タイトルは「聖王武闘伝 Lヴィイオ」

以上。

まさに『ぼくのかんがえたさいきょうのせいおう。』

盛り盛りである。

公式戦ルール下での苦手な選手が耐久力の高いパワーファイターな上、公式戦上位ランカーにはアインハルトを筆頭にその類の選手が多く、なんだかんだ試合ではいつも苦労してる。

レヴィが幼いころから見せてくれた娯楽作品のお陰でやたらとネタが豊富。それを良く聞くことになる仲良し3人組のリオとコロナも地味にネタが豊富。

であった頃は原作通りだったアインハルトも1年で本編の通り。感染力が高すぎる。

——アインハルトについて。

地味にヴィイオのあおりを受けて魔改造されてるのがアインハルト。

基本は原作通りだが、GOD編時点ですであらゆる体制から断空を放てる『神撃の領域』に居る。

これは魔改造のせいで原作より避けが上手くなっているヴィヴィオに対抗するためであり、一撃でも当てればヴィヴィオをKOさせる事ができるように到達した執念の一撃。

回避の上手いヴィヴィオに当てるために研ぎ澄まされたその一撃は、あまりにも速く、あまりにも鋭く、あまりにも重い。

一撃で相手を粉碎する霸王の拳。レヴィ曰く『二の打ち要らず』。

Vivid Strike!! 時空の時点でその域に至ってしまつたため、U-15ワールドシップでは、ヴィヴィオ以外の対戦相手はすべて1RワンパンKOの絶対王者。

弟子いわく「リンネがゴリラならハルさんは重戦車」。

レフェリー曰く「あまりに強すぎて盛り上げられない」。

あまりにも強すぎて、チケットの売り上げや視聴率が奮わなかったため、15歳になる前にU-15ワールドシップ大会初めての殿堂入りに任命された（実質の出場停止）。

その後のU-15ワールドチャンピオンのヴィヴィオも2年間のベルト防衛を記念して殿堂入りしている。

ナカジマジムのインフレがやばい（）

——— 某J・S博士について。

プロローグの最後の方にてプレシアとの取引により地味に変わったのがJS博士の技術、特にプロジェクトFを用いた人造魔導師の技術ですが、実はこれ秘匿され、これが使用されている人造魔導師はフェイトとヴィヴィオだけとなっています。

ぶっちゃけ他の研究成果で十分原作と同様の境遇を受けれる上、大昔に自分が手放した技術の発展形を飼い主に渡す意味が博士自身には無かったので、プレシアの要求を飲んだのは彼なりのプレシアへの敬意の現れだったりします。

しかし、そこからフェイトが管理局で有名になっていくにつれ、彼は地球の事を知り、そして必然的にフォーミュラへとたどり着きます。

魔力に対してはECウイルスやAMFのような動作も行うことが可能ながら、実際の本質はそこではない新たな力学であるフォーミュラ。

当然、自身の計画に必要な箱舟の起動キーであり、最後の防衛装置であるヴィヴィオには彼の知りうる、彼の持ちうるあらゆる技術が詰め込まれています。

地球で暮らすレヴィ達から集めたフォーミュラの断片的な知識。フェイトが任務中に使用したフォーミュラのナノマシン。

高町なのはという類を見ない天然の才能の遺伝子。

それらを集め、分析し、再現して生み出されたのが聖王のクローン、ヴィヴィオ。

なのはの才能―眼と魔力素質、魔力容量―を遺伝し、聖王の遺伝子を持ち、フォーミュラを利用できる身体として設計されたヴィヴィオはまさに古代と現代が融合した新しい聖王として生まれました。

結局原作通りにヴィヴィオは輸送中に脱走し、六課に引き取られることになり、あえなく御用になるわけですが。

そんな彼が起こすJS事件、これもまた原作より苛烈さが増すことが容易に予想されます。

レヴィの影響を受けてないゆえに強化されてないフォワードの4人はかわいそうですが、なのはさんの訓練を受けた彼らならキチンとやってくれることでしょう。

さて、私が思いつく中では原作との差異が大きい人物は以上。

それ以外の人は基本原作からあまり変わらないです。

リンフォース・アインズがいてもリンフォース・ツヴァイは生まれますし。

クロノは胃薬と友達になったりしていますが、基本変わらないです。

さて、そんなわけで後語りもここまで。

何か知りたい設定とか質問とかあれば追記したり答えたりしますが、あんまり深く考えてないので満足のいく返答とかはないと思います。ノリとテンションで書いて来たので。

今後の予定は未定です。

反響が多ければ脳内にある小咄をやるかもしれませんが、やらないと思います。

それではこちらでも感謝の言葉で示させて締めさせていただきます。

5年という長い年月の連載に付き合っていたいただいた方や、途中からでもこの話を見初めて最後まで読んでくださった皆様。

本当にありがとうございました。

「魔法少女リリカルなのは L×FⅡ」これにて完走です！

番外編

『もしもの時間、もしもの世界の彼女たち』

——新暦69年1月1日

それは、ミッドチルダにおいて時空管理局が次元世界を管理するようになってから69年たったという年でもある。

しかし、ここ地球においてはそんな事は関係なく、目出度い事と言えば、新年が明けたと言う事位だろう。

これはそんな地球の海鳴市に住んでいる中学生の少女たちのちよつとしたお話し。

*

「ほら、フェイト、もうちよつと頑張りなさい！」

「……で、でも母さん……。くる、しいよ」

新年の朝から騒いでいるのは『翠屋』と書かれた看板が表にある店の中。今ではclosedの表札がかけられており営業してない事が判る。

そんな翠屋に居る2人の親子だった。

一人はプレシア・テストロッサ。紫がかつた長い黒髪が特徴のテストロッサ家の家長にして、家主。

もう一人はフェイト・テストロッサ。私立聖祥学園中等部1年生であり、初等部に在籍していた時代は、聖祥小6大美少女の一人であり、現在は聖祥中9大美少女の一人でもある。

9人って多すぎじゃないかと思うかもしれないが、この9人はそれぞれがそれぞれタイプが別れていて、日夜議論を醸しているため、5大や3大、四天王などの語呂が良い数に減らすことが叶わない為現在では9大美少女と言われている。

そんな美少女と言って良いほどの彼女は、いつもはストレートで流している金髪を今は項の部分で纏め、簪で止めている。ここまでの情

報で察しが良い人はわかるだろうが、現在は1月1日の元日。髪には簪を差し、中学生の中ではスタイルの良い体を母に締め付けられ苦しんでいる。

そう、つまりフェイトは今、着物を着る為の着付けをさせられているのだ。

「あはは、フェイトちゃんスタイル良いもんねえ……」

苦笑いしながら苦しんでいる親友を見ている少女は、高町なのは。この翠屋を経営している高町士郎、高町桃子両人の娘であり、高町家の次女。フェイトと同じ私立聖祥学園の中等部に所属している。

そんな彼女は、中学1年生としては、特に日本人としては一般的な体系をしており、直接的に言うとは未来に期待。と言う程度であるのだが、周りにスタイル抜群の美女が多いため、自身のスタイルにコンプレックスを抱いているらしい。

そんな不屈だが、ちよつと卑屈なのはもフェイトと同じように着物を着ている。中学生になってからはサイドポニーにしていた髪は、その場所でお団子のようにまとめられていて、フェイトと同じく簪が刺さっている。

「なのはは、楽で、良いです、ねえ！ほんとに、うらやまし、いですよ。……桃子さん。苦しいですつ……」

なのははに嫌味を言いながらも、締め付けられ苦しんでいるのは、シユテル・スタークス。去年の4月に聖祥中に途中入学した3人の内の一人である。彼女は、なのはにとてもよく似ていて、違うところは、瞳の色と髪の毛の長さ、そして発育位なもので、よく姉妹と間違えられるが名前で察してもらえる通り外国人であり、高町なのはと血のつながりは一切ない。そんな彼女は発育が良く、身長は160cmを超えた位、バストもフェイトよりあると言う、中学生より高校生に見える外見である。

そんな彼女は今現在、日本に留学するにあたってホームステイ先となっている高町家の母、高町桃子にその豊満な胸をタオルで押さえつけられており、とても苦しそうだった。

「シユテルちゃんはおっぱい大きいからこうしないと着物が可愛く見

れないのよ。だから、我慢してね」

「ぐぬう……。この胸に恨みを抱くときがこようとは……」

「……ホント、羨ましい悩みだよ……」

胸を締め付けられ、苦しんでいるフェイトやシュテルを見て、1人早々と着付けが終わったなのは悲しみに暮れていた。

そんなこんなで新年初日の朝、翠屋は女性陣が集まり、着付けと称し騒いでいたのであった。

それも数分立ち、おとなしくなる頃。

「ああ、もうこんな時間。リニス」

プレシアが側で色々手伝っていた家政婦のリニスを呼びつけた。

「はい。なんででしょうか」

「うちのお寝坊さん達を起こしてきてちょうだい。特にレヴィは放っておくとテキトーな服しか着ないんだから、ちゃんとそれなりのおめかしはしてあげて頂戴ね」

「わかりました」

プレシアに告げられた要件を終わらせるために、リニスは翠屋を出ていく。

テスタロツサ家は高町家とは家が近く、当然裏手にある翠屋とも近い。そんなテスタロツサ家にはフェイト以外にも娘が2人おり、その二人は年越しの夜更かしの際に大騒ぎしており、その疲れが出ているのか未だ起床していなかった。

「さて、これで大丈夫ね」

「うん。ありがとう、母さん」

「シュテルちゃんも。終わりよ」

「ありがとうございます。桃子さん」

「フェイトちゃんもシュテルも。二人とも可愛いよ」

「ありがとう。なのは」

「ありがとうございます。なのは」

リニスが出て行きしばらくした時、やっと二人の着付けが終わったようだ。

フェイトも、シュテルも本人に合った色合いの着物であり。フェイ

トは本人が好む、黒地に金の詩集の入った着物。シユテルはえんじ色にピンクの花があしらわれた着物であった。

そんな二人、特に愛娘であるフェイトを見て大きくうなずきながらプレシアは娘に語りかける。

「ええ。とても似合ってるわよフェイト。これならレヴィも満足ね」
「ちよ、母さん！」

そんなプレシアのちよっとしたからかいに、フェイトは少し頬を赤く染めからかってきた母に対して講義をするが、その仕方は母を呼ぶだけであり、特に何もしない。

「さて、じゃあレヴィちゃんとアリシアちゃんが来るまで、少しお茶にしましょうか」

桃子のそんな提案に各々賛成の意を示し、姦しい女たちの着付け教室はひとまずの終わりを見た。

*

一方その頃、リニスが向かったテストロッサ家では、二人の美女、美少女があられもない姿で一つのベッドの上で寝ていた。

二人ともフェイトによく似ており、その内の片方は、瓜二つと言っても過言ではない。

一人は、レヴィ・テストロッサ。水色の髪に毛先が黒のグラデーションが入った美女。身長は現在160後半。ほぼ170と言う長身であり、スタイル抜群。寝間着から見える脚や腕は、鍛えられているのかよく引き締まっており健康的なエロスすら醸しだしており、特に目を張るのは胸部。

その胸部は仰向けで寝ている今でも、重力に逆らい綺麗な形を保っており、特に男ならば自然と目がひきつけられてしまうほどの、所謂巨乳である。

これでも彼女は、一応は聖祥学園中等部1年生である。彼女は聖祥中9大美少女の内の一人であり、シユテルと共に去年の4月に途中入学してきた、3人のうちの一人である。

彼女は、その長身や、真面目な顔は凛々しく、学力は優秀、運動は抜群。明るくよく笑い、誰にでも優しい。と、非のつけどころの無いスペックであり、男子より女子に人気がある。

その人気っぷりは、男女混合のファンクラブまである程であり、その会員には9大美少女も入っているとかなんとか。とにかく、聖祥中の女子と一部の男子に人気があり、聖祥学園中等部では文句なしの人気者である。

そんな彼女は現在、隣に居る姉、アリシアと共に爆睡している。その口は大きく開かれ少し涎もたれているが、それが幻滅させるわけでも無く、その姿も愛嬌のある姿としてとらえられる程である。美人は得だということだ。

そんなレヴィの隣で寝ているのは、レヴィとフェイトの姉のアリシア・テスタロッツサである。

彼女はフェイトに瓜二つであり、違うところと言えば、過去の闘病生活による成長不良であり、同じ学年の女子と比べても色々としただけ小さい。もちろんレヴィと比べると大人と子供の様に見えてしまう。

そんなアリシアも聖祥中1年生とフェイトと同学年ではあるが、双子ではなく姉妹だと本人たちは主張している。幼いころに闘病生活で勉強が間に合わず、妹と同じ学年になってしまったのだと言う。姉妹だと言うと、必ずアリシアが妹、フェイトが姉として見られてしまうのは、身長だけの所為では無く。姉のアリシアは明朗快活天真爛漫。明るい元気な子であり、逆に妹のフェイトは大人しめで、よくアリシアやレヴィに振り回されている。そんな性格の差の為か、フェイトは落ち着きがあり大人っぽく、アリシアは子供っぽく見えてしまうのも、二人の姉妹としての印象が逆になってしまう要因だろう。

そんな、彼女たち仲の良い3人姉妹の内2人は絶賛爆睡中である。それはもうよくそんな眠れるなど言われるほどの爆睡中であった。

しかし、それもお天道様が許しても許さない人物がいる。プレシアに言われ、二人を起こしに来たテスタロッツサ家の家政婦、リニスである。

「……ハア」

彼女は家にやってきても未だ惰眠をむさぼっている二人を見て大きくため息をついた。

「……こらー！ 二人とも、いい加減に起きなさい!!」

そしてそのため息を吸い込むほどの勢いで大きく息を吸うと、腰に手を当て大声で二人を起こした。

「ヒヤイ！」

「……ふあ〜い」

その大声であわてて起きるのは、アリシア。そんな怒声を聞いてもマイペースにあくびをしながら起きるのがレヴィ。

アリシアはリニスに怒っているのを感じ、あわてて起き上がるが、レヴィはそれでもものんきに朝の挨拶をする。

「わわっ。リニス」

「ん〜、リニスおはよ〜」

「二人とも、もうみんな準備が終わって二人を待っているのですから、早く顔を洗って準備をしてください！」

「は、はーい!!」

「は〜い」

その言葉を残し、アリシアはレヴィの手を強くひき、風のように部屋を飛び出した。

残されたりリニスは、ため息を再度つくときクローゼットから今日の目出度き日に合うような服を選び始めた。

——フェイトは振袖なので……、せめてそれと釣り合わなくても良い感じに見える服装にしないとイケませんね……。

そんな事を考えるのは、昔からテストタロツサ家の家事雑用を一身に引き受けていたリニスだからであり、たとえコートで隠れるとしてもそれでもそれなりの格好にしなければならぬと言いついがあった。

そんな思いの元、リニスはいそいそとクローゼットをあさり、二人に合う服を見繕い始めたのだった。

*

「もう！ レヴィ早く行くよ!!」

「アリシアく、結局遅刻は遅刻なんだから、もうちよつとゆつくり行こうよ」

「だめー!」

アリシアとレヴィは、そんなやり取りを家の玄関でしていた。リニスは服を用意するとさっさと翠屋へ向かってしまい、二人はそんなリニスが用意した服を素直に着ると出かける準備をしていたのだが、アリシアは新年の会合が楽しみなのと、寝坊して待たせてしまっている妹たちへの申し訳なさを為、高速で準備を整えていたが、レヴィはそんなのお構いなしと言わんばかりにマイペースに荷物の確認やらトイレやらを済ませていた。

「はい、お待たせ」

「お待たせしてるのは私じゃなくて、みんな〜!」

「はいはい。じゃ、行こう」

「階段ダツシユ!」

レヴィの準備が整うや否やすぐさまマンションの階段を駆け下りようとするアリシア。そんなアリシアをレヴィは、家の鍵をかけながら注意して、自分も気持ち駆け足でおり始めた。

*

「ぜーはー。ぜーはー」

「……お、お疲れ。アリシアちゃん」

結局その後も約十階分の階段を駆け足で降りたアリシアとレヴィ。テスタロツサ家のマンションと翠屋は近く、マンションから出てしまえば、数十メートルもないと言った距離なのだが、いかんせんフェイトやレヴィ程運動が得意では無く、将来の夢は科学者と言ってはばからない生粋のインドア少女であったアリシアの体力はそれはもう、火を見るより明らかであり、今は膝に手を付け、なのはに慰められていた。

「ごめんごめん。遅くなっちゃった」

「もう。レヴィだったら。せつかくみんなでおめかししようって言った

のに」

「そうですよ。せつかくの目出度い日なので。もう少し計画性を持って動いてください。あなたは昔からそうなんですから」

レヴィも遅刻した事を笑いながら謝るが、フェイトとシユテルはご立腹らしく、特にシユテルは、レヴィのいつもの行動までその説教範囲が及んでいた。

「さ、それじゃあ皆、アリサちゃん達が待っているのでしょう？ 早く行ってらっしゃい」

談笑している少女たちに桃子が声をかけ早く行くことを促すと、彼女たちははっと気づいたのかあわてて歩き出す。

『いってきまーす！』

中学生5人の少女による挨拶を見送る家族たち。

行くべき場所はこの近辺にある最大の神社。待つのは少女たちの友達。

「はにゃあっ!？」

「大丈夫？ なのは」

途中、運動神経が切れてるのはがなれない着物と下駄で駆け足になったため、転びかけると言うアクシデントがあったが、最もカジユアルな服装のレヴィが助け、無事を得る。

「そう言えば、レヴィ。私たちになにか言うことがあるのでは？」

「え？ ……遅れて、ごめんなさい。？」

シユテルの唐突な話題振りについて足を止めてしまうレヴィ。しばらく、何事かと考えるが、とんと思いつかばずとりあえず遅れた謝罪が足りなかったのだろうかと思いついて謝るが正解では無かったようで、シユテルは冷たい目でレヴィを睨みだす。

そんなシユテルに得心がいったのか、なのははポンと手を叩くとニヤニヤと笑みを浮かべながらレヴィに言う。

「そうだね。レヴィちゃんはシユテルやフェイトちゃんに何か言うべきだよねえ」

「ええ!?! 私も?。」

唐突に話題が自分の所へ来たのか、フェイトは一瞬焦るが、何のこ
とを言われているのか、理解できずに首を横に傾ける。

そんなフェイトに呆れたのか、アリシアは額に手を乗せながらため
息をつき、「まったく、お姉ちゃんが居ないとダメだなく」などと呟き
つつもフェイトの横に並び、背伸びして耳打ちする。

「ええ!？」

アリシアに何を言われたのか急に顔を真っ赤にし飛び上がるフェ
イト。その隣では、シュテルが自身を見せつけるかのように、手を広
げポーズをとっていた。

「どうです?… これでも何か言うことは無いと?」

「え、え〜とと……」

そんなことを言われても……。とでも言いたげに、レヴィは頬をか
く。そうしている間にも、アリシアに説得されたのかフェイトもシュ
テルの隣に立ち、何やらポーズを決めレヴィに対して、アピールして
きた。

「えつと、ああ。二人とも着物姿、よく似合っつて綺麗だよ」

「あ、あわわわ」

「……月並みですが、今は良しとしましょう」

そんな二人のアピールにやつと気づいたのか、シュテルとフェイト
の着物姿を褒める。フェイトはレヴィの笑顔と褒められたことに照
れたのか顔を赤くしてあわてており、シュテルも言葉は辛らつだが、
その動かない表情はどこか満足そうであった。

「ほら!… 三人とも、早く行くよ〜」

「そうだよ。アリサちゃん達待たせてるんだから、早く行くよー!」
少し先を歩いていたアリシアとなのはに急かされ、少し早足で歩き
だす三人。

「怒られちゃったね」

「うん」

「早く行きましょう」

フェイト、レヴィ、シュテルの順に横並びになり、歩き出す三人の
姿はどこか満足げで、楽しげなそんな雰囲気を感じさせるのだった。

d o n o t f o l l o w o r c o n t i n u e .
I d o n o t k n o w a n y o n e o r

{ I M G 1 7 1 9 }

エルトリアでの小話

「ビビッと来た！」

時はレヴィ達がエルトリアへと渡ってから大分月日がたったある日、唐突にレヴィが叫びだした。

「なんだいきなり」

「どうしました、レヴィ」

唐突に叫びだしたレヴィに側にいたディアーチエとシュテルが様子を見る。

叫び声があまりにも大きかったためか、少々離れていたアミタやキリエ、ユーリも様子を伺い近づいてきている。

そんな他の人の様子など気にせずディアーチエに向かって語り始める。

「ねえシュテルんに王様。ボクたちにはトリニティドライブっていう奥の手がある訳じゃん」

「うむ、まあそうだな」

「でも奥の手っていう割にはそこまで強くないと思うんだよ」

「ふむ。まあそうだな」

「レヴィが気ままに戦って私と王がサポートした方が戦いやすいですからね」

「そうだよー。でもね、それじゃあダメだと思うんだ！」

シュテルの言葉に同意しつつ、なにやらレヴィは何か燃えているらしく、現状を強く否定する。

「奥の手が！ 切り札が通常状態より弱いなんてダメなんだよ！」

そんなの最強フォームのない平成ライダー、ロボットが合体しない戦隊ヒーロー、スーパーサイヤ人にならないドラゴンボールだよ。片手落ちなんだよー！」

「お、おう。そうだな」

熱意が溢れてしょうがないのか、段々と語気が荒くなっていくレ

ヴィ。

その熱意に圧され、ディアーチエはちよつと引いていた。

「なあシュテル。今日はレヴィの幼児退行が酷くないか？」

「そうですね。フェイトと離れて張り詰めていた糸が緩んだのか、エルトリアこつちに来てからだいぶ言動が幼くなりましたが、今日は一段と駄々をこねてますね。そんなレヴィも可愛らしいですが。ウフフ」

「ええ……」

シュテルとディアーチエがそんな会話をしていることには気付かず、レヴィは語る。

「そもそもね、ボクたちは4人揃って永遠結晶エグザミアのはずなのに奥の手が『トリニティ』大いなる生みの親ドライブってのが良くない。

いや、我らが都築大明神を否定する訳じゃないよ？ ユーリに對抗するための力になる設定なのに、ユーリが必要とかゲームだったらバグを疑うしね。パネルミッションを全てクリアするためにはパネルミッションを全てクリアする必要がある。みたいなレベルのバグだよね。

ともかく、ボクたちはユーリを含めて紫天のマテリアル。4人揃って永遠結晶エグザミアなわけだよ。ならユーリも一緒じゃなきゃ嘘じゃん？ ボクらは家族なんだから一つになるべきなんだよ！」

「んっ」

長々と語るレヴィの言葉にディアーチエは辟易し始めていたが、シュテルはレヴィの何かが琴線に触れたらしく謎のうめき声を上げる。

「どうしたシュテル」

「大丈夫？ シュテるん」

不可思議なうめき声を上げたシュテルに隣のディアーチエはともかく、語っていたレヴィも語りを止めシュテルを心配する。

「だ、大丈夫です。少し衝撃的なことがありましたので」

そう言うシュテルはなぜかエルトリア独自の記録版をどこからともなく取り出すと、レヴィに詰め寄る。

「すみませんレヴィ。今の部分もう一回言つて貰つても良いですか

？」

「えつと、そもそもね、ボクたち——」

「いえ、もつと後です」

なにやら語りのリテイクを求めたと思ったたらやたらと注文をつけるシュテル。注文の多い星光の殲滅者である。

「ボクたちはユーリも含めて——」

「もう少し後です」

「ならユーリは——」

「惜しい！ もうちよつと！」

「ボクらは家族なんだから一つになるべきなんだよ」

「そうです！ もつと大きな声で！」

「ボクらは家族なんだから！」

「はい！」

「一つになるべきなんだよ！」

「はい！ そこを私に要求して！！」

「一つになろう！！ シュテルん！！」

「YES!!!」

「シュテルも最近キャラぶれ激しいと思うなー。我」

そんなやり取りを端から見ていたディアーチェのキャラぶれ激しい一言であった。

「とりあえずまあ、レヴィはあとで私と一つになる（意味深）として、実際どういったものをレヴィは考えているのですか」

「うんとねー。まずはユーリも含めた4人みんなでユニゾンするでしょー。んで、ハードの部分はボクが担当して、OSが王様でー、CPUがシュテルんで、ユーリは電源と外付けユニット的な感じかな」
「うーん、わかりそうでわからんなー！」

「電源？ ……と外付けユニットですか??」

シユテルの要件ヒアリングによって導き出されたレヴィイの出した要件は、PCパーツに喩えられ、わかる人にはわかる程度のニユアンスしか含んでおらず、レヴィイの記憶をトレースしてるシユテルとディアーチエはともかく、そういうのが一切ないユーリは頭の上にはてなマークを浮かべていた。

「ふむ。レヴィイの言いたいことを噛み砕きますと、実際に4人でユニゾンした際のハード、つまり実躯体のベースは最も頑丈で力強いレヴィイが担当する、マテリアル—Lの素体を使うということでしょう。そしてその身体を扱うOS——統率者としてディアーチエの意識が。実際の思考としては最も思考が早くマルチタスクに長けた理のマテリアルである私。最後に戦闘で扱う魔力源、そして外部兵装として魄翼の管制をユーリが。ということですよね」

「うん。大体そんな感じ」

レヴィイによって翻訳された内容によってディアーチエもユーリも想像できたのか、得心が言ったようになづいている。

「流石我らが参謀」

「レヴィイの言いたい事を良く理解していますね」

ディアーチエとユーリの誉め言葉に、シユテルは得意げに胸を反らせる。

「ええ、レヴィイの一番の理解者はフェイトではない！ このシユテルだ！ という奴ですね」

胸を反らした状態で腕を突き上げ自身を指さしながら言うシユテルの発言にレヴィイも「流石シユテルん、そこに痺れる憧れる」と、喝采する。

そんな小劇場がその後、数日起きに繰り返されることとなる。

「そもそもユーリからボクらに魔力供給ってできるの？」

「できなくはないですが……」

「今のところ効率は悪いな、普通にマジカルトランスフアーを行って
いるだけであるしな」

「それだとなんだかなー」

「ふむ、奥の手といわず平時でもユーリから高効率で魔力供給が受け
れば色々やれることが広がるな。考えてみるか」

「ディアーチエがユーリの無限の魔力について考えたり——
」。

「じゃじゃーん、見てみて！」

「どうしたのレヴィ。あら……絵、かしら？」

「うん。4身合体エグザミアの時のボク達のデザイン画！」

「あら、上手じゃないですか」

「そうねえ、でも服装がよくないとキリエちゃんは思うなー」

「うーん、服飾はボクよくわからないんだよね」

「うふっふ、お姉さんに任せないな」

キリエとアミタと一緒に絵描きしたり——。

「そういえばユーリの魄翼って変形できないの？」

「変形ですか……。そういう機能は先の戦いでオミットして、防御力
特化にしてみましたから……」

「ボクのうけた天啓映画最新作ではユーリの魄翼はもつとジャキーンって感じ
でドーンって感じだったからそうしよう！」

「ええ（困惑）。お願いですからレヴィ、もつと人間が理解できる言語
で喋ってください……」

ユーリの魄翼改造計画を立てたり――。

「名前を募集する！」

「また唐突な」

「なんの名前ですか？」

「ボクが4身合体エグザミアって仮称してる奥の手の奴だよ」

「あれ仮称だったんだ」

「私は結構好きですけどね、4身合体エグザミア！　なんか、胸がたぎりますよね」

「ふむ、単純にエグザミアドライブとかではダメなのでしようか」

「やだ！　もつとカッコいいのが良い！　聖王モードとか、雷神モードみたいなの！」

「とりあえず漢字使っとけば良いのではないか？」

「そういえばレヴィの魔法名って基本漢字なんですよね」

「カッコいいからね！」

「うーむ、闇黒王モードとかはどうだ」

「うーん、いい線いってるけど王様色が強すぎるから保留！」

「四天結合とかどうでしょう」

「紫天と四をかけてもいいけどもう一捻り欲しい！　保留！」

「スーパージェットデリシヤス大車輪山嵐」

「それはボールとラケットを使った格闘技の技だからダメ！」

「超究極完全体・エグザミア」

「おっきな虫を連想するからヤダ！」

みんなで名前大喜利をしたり――。

――そんなこんなでそれはなんとかそれっぽい体裁を整えることができた。

そこに居るのは、長身の女性。

170 cm台の長身は、同様に銀髪に水色や茶色、金色といったカラフルなメツシユの入った長髪を風に流している。

背には3対6枚の魔力で生成された翼。羽根先が緋色、背が水色で中間が黒。トリニティドライブと同様の配色の翼が6枚。

自身の身体を覆うように4枚のシールド状の硬質な翼―魄翼―と、2本の鋼で形作られた巨腕が浮いている。

女性本人は、というと。

左腕は重厚な腕甲に覆われ、それとは対照的に右腕は袖なしにグローブというアシンメトリー。

脚部は要所要所はプロテクターで覆われているが、関節部などは動きやすさを重視し軽装である。

長いロングスカート状の腰布は、前側が豪快に開いており、前たれのように前側だけが長いワンピースの裾が大事な部分を隠している。

そんな人物は腕を組み、空中に浮かんでいた。

「ふむ、で。我が動かすのか、この身体。んん、なかなか不思議な感触だな自分から他人の声が聞こえるのは」

声色はレヴィに似ているが、レヴィよりドスが聞いており、口調は完全にディアーチエのもの。

そんな声で喋ったディアーチエに内側から返答が聞こえる。

『とりあえずそれで行こう！』

『私達は基本的に各々の判断で魔法を使ったりする感じで』

『私はとりあえず皆への魔力供給と、魄翼を邪魔にならないように動かす事に専念します！』

と、そんな感じで別に意識の統一などは図らず、とりあえず合体してみました。といった体の仮組状態が今のディアーチエである。

「ふむ、とりあえず、軽く動いてみる——」

そういつてディアーチエが身体に力を込めた瞬間、その姿が消える。

「かあっ???
!!!??」

大きな音を立てて、先ほどまで地平線に見えていた山に衝突したディアーチエ。

急に受けた衝撃と、一瞬で変わった景色にディアーチエは一体何が起こったのか理解できていなかった。

『あちやー、王様もつと最初は軽くて良いんだよー』

「軽く動いたぞ我！ くそ、とりあえず」

レヴィの指摘に言い訳しつつ体勢を整えるため、腕を地面につける。

ダウン

腹の底に響く轟音が響きわたり、鳥は飛び立ち衝撃は大地を揺らし

「はあ!?!」

ディアーチエが手をついた地面は陥没していた。

『だから王様、そんな本気でやらなくても——』

「たわけ！ 誰が起き上がるのに本気を出すか！ 我は力なんぞ込め

ていないぞ！　なんだこの躯体は!?　出力が出鱈目過ぎるわ！」

『えー、おかしいなあ、カタログスペック上はボクの躯体とほとんど変わらないはずなんだけどなあ。変身魔法もただの変身魔法で強化魔法の要素は入ってないはずだし』

「なあ!?　レヴィ貴様常日頃からこんな出力を制御していたのか!？」

マテリアル―Lの躯体。それを始めて操るディアーチエは、その出力の違いに驚愕していた。

あまりにも違い過ぎる。反応が良すぎる。

今まで軽自動車を使っていたドライバーがいきなりスポーツカーに乗ったようなもの。ハンドリングもアクセルの踏み方も、何もかもの手が違う。

それがマテリアル―L、それが転生特典^{チート}。その二つが合わさった身体こそが、レヴィ。テストアロッサの肉体。

「くっ、一先ず拠点に帰る！」

『しようがないなー、もつと調整が必要かなあ』

残念がるレヴィの言葉を無視してディアーチエは飛び上がるように力を込める。

『あ、王——』

シユテルはそのことに気づいたが、もう遅い。

「ぬわああああああああ」

高速で地上が離れていく、雲が視界の横を高速で通過する。

「———っ」

そしてディアーチエが勢いを止めるように意識したところで、なん

とか身体の上昇は止まる。

『わあ、星がきれいですね』

ユーリの呑気な声が恨めしい。

『こう見るとエルトリアも結構緑化が進んでるね』

『ええ、達成感を感じますね』

レヴィとシユテルの会話が恨めしい。

そう、さつき迄昼だったのにあたりは暗く、前方には広大な星々の輝きが数多と見え、後方には緑色の部分が増えてきたエルトリアの星が見える。

——これが、宇宙……か。

ディアーチエはそんなことを思いながら現実逃避していた。

気付いたら宇宙にいた。

成層圏も超え、熱圏すらも超えた。星の引力が働かない広大な無重力空間、宇宙。

「もう我やだ――！！！！」

そんなディアーチエの悲痛な叫び声は、空気がないためその声は宇宙には響かなかつたが、中に居る3人の胸にだけは響いたのであった。

高町なのはが墜ちた日

エース・オブ・エース墜落。

そのニュースはミッドチルダ中を騒がせた。

『エース・オブ・エース』高町なのは

管理外世界出身ながら9歳にしてAAAランクの魔力を保有し、管理外世界にて発生したロストログアによる次元世界を揺るがすほどの大事件を未然に防ぐ大活躍。

そしてそんな彼女は強く、愛らしく、芯の通った少女であり、その容姿はさることながら性格の良さも相まり、ミッドチルダでは人気が急上昇していた。

現在11歳である彼女は短期訓練課程を修了した後、出身世界で学生生活を送りつつも、管理局の一員として任務にあたるという二重生活を送っていた。

公的な身分は囑託魔導師であるため、長期間の任務などには駆り出されないが、若く可愛らしい将来有望な魔導師であり、大事件を2件も解決した実績をもつ彼女は管理局広報課の目に留まり、華々しく宣伝活動を手伝わされていた。

そのためミッドチルダにおいて高町なのはの名は無名ではなく、それどころか有名人といっても良いほどの知名度を持つ。

そんな高町なのはが墜落。

任務中に正体不明の襲撃を受け重傷。

そのニュースは、ミッドチルダでも話題になり、ミッドチルダを騒

がせた。

なのはが入院してから数日後、ミッドチルダではその件について新たなニュースが広がる。

曰く、エース・オブ・エースはもう、空が飛べない――。

そのニュースはなのはのもととの知名度にあわせ、若干11歳の少女が未来を断られた衝撃もあり、ミッドチルダ中を駆け巡り話題となった。

「なのは、もう起きてていいの」

「あ、フェイトちゃん」

そんな世間をにぎわせているなのは本人が入院している病院に、フェイトが見舞いに来ていた。

数日前まで意識不明であったなのはは、上体を起こし先ほどまで読んでいた手紙から視線を上げ、入室してきたフェイトへと顔を向ける。

「ごめんね、来るのがこんなにこんなに遅くなっちゃって」

「ううん。大丈夫だよ」

「それにしても良かった、なのはが元気そうで」

「うん。怪我の方はもうだいたい大丈夫みたいなんだ」

笑ってはいるがその表情にいつもの明るさはなく、努めて笑顔を作り出していることをフェイトは感じ取っていた。

フェイトとなのははたった2年ちよつとの付き合いであるが、それ

でもわかるくらいには、何時もの元気がなかった。

「なにを読んだの？」

「なんかね、ファンレター？　かな」

「ファンレター？」

「うん、最近私って任務の一環で管理局の広報に使われてたでしょ？　それで一般の人にもちよつと顔が知られてるみたいだね。撃墜させられて、ちよつと世間を騒がせちゃったみたい。それでこんな励ましの手紙が管理局に送られてるんだって」

見る？　　と言いながら渡された手紙をフェイトは流し読みする。

そこには書いた人の純粋なものはを心配する言葉と――、

「……っ」

——なのはがもう飛べないことを残念がる言葉が綴られていた。

「なのは……、えっと」

なんと声をかけて良いかわからなかった。

自分と衝突するほどに魔法にのめり込んでいた目の前の少女が、もう魔法が使えないかもしれない。

空を飛ぶことに拘っていた少女が、もう飛べないのかもしれない。

そんな現実をなのはは手紙を通して知ってしまったのかと思うと、かける言葉がみつからない。

「あはは、笑っちゃうよね。私目が覚めたの数日前なのに、自分の身体のことを知ったのがこんな手紙が始めてなんて。

お医者さんもお医者さんだよ、別に正直に話してくれてもよかった

のにぎ。管理局の人も管理局の人だよ、こんな時くらい手紙の中身を精査してくれてもいいじゃんね」

努めて明るくしようとしているのだろう。口調は明るい、その顔は喋っているうちに下を向き、声も震える。

「——なのは」

そんななのはを、フェイトは抱きしめる。俯くなのはの顔を、自分の胸へ押し付けるように、自分の心音を聞かせるように。

「なのは、ここには私しかない。なのはの家族の人も、アリサやすずか、はやても。私しかないから。だから、我慢しなくていいんだ。なのはの本音を、あの時みたいに私にぶつけて良いから。私はなのはの喧嘩友達で、だからなのはが本音をぶつけられるって、そう思っているから——」

——だから、良いんだ。

フェイトはそう言ってなのはを強く、優しく抱きしめる。

抱きしめられたなのはは、しばらく黙っていた。

そんな無言の時間を、フェイトはなのはの頭と背中を撫でながら待ち続ける。

言外にいつまでも待つという気持ちを込めて。

そんな気持ち伝わったのか、喋りたいことの整理ができたのか、なのはは唸々と語り始める。

「私ね、頑張ったんだ。

皆が、悲しまないように、私ができる限りの事はしようって。

お父さんに剣術も教えて貰って、残念ながらあんまり才能は無いらしいけど、それでもお兄ちゃんとお姉ちゃんと、同じ事ができて、同じ事をさせてもらえて貰えて嬉しかった。

任務もね、別に辛くないんだよ。お父さんもリンディさんもクロノくんも、ハードワークにならないようにって調節してくれてるし、それでも私にやって欲しいって、私が必要だっていう任務ばかりだし、それで誰かが救えるんだって、悲しむ人が少なくなるんだって。広報もそれはそれで楽しいんだ。年下の子で『私みたいになりたい』って言うてくれた子もいた。私に助けられたって人とも話ができた。

ホントに私、楽しかったし、もつとみんなの役に立てるようになって、皆が望んだ『なのは』になれるようになって、頑張ったんだよ」

「うん。なのはが頑張ってるのは知ってる。なのはと出会ってから、なのはと友達になってから、なのはがずっと頑張ってきたのを見てきたから」

途切れ途切れに言葉を選びながら喋るなのは。

そんななのはの言葉に、フェイトはただただ頷く。

「目が覚めて次の日にね、家族のみんなが来てくれたの。皆悲しそうなお顔をしてた。お父さんの事を思い出したのかなって思って、『大丈夫だよ。すぐ元気になれる』って言ったら、みんな泣きそうな顔をしてね。お姉ちゃんも泣き出すし、お父さんは『少しの休憩だと思って、今は休みなさい』って、頭を撫でてくれた。

その次の日くらいにね、はやてちゃんとアリサちゃんにすすかちゃんが来てくれたの」

「そっか、ごめんね。直ぐに来れなくて」

「ううん、フェイトちゃんがちょうど忙しかったのも知ってるから、いいの」

自分以外の知人がすぐさま見舞いに来ていたと知ったフェイトは、再度その事を謝るが、なのははフェイトの胸の中でゆっくりと首を降り、気にするな、と言う。

そうして、少々無言の時間が流れると、なのはが再度語り出す。

「それでね、はやてちゃんとすすかちゃんは結構お話ししてくれたんだけど、アリサちゃんはずっと黙ってたの。だから『すぐ元気になるから大丈夫だよ』って言ったら、『ごめん』って謝られて、そのまま帰っ

ちやつて、すずかちゃんも悲しそうな顔をしてアリサちゃんの後を追つて、はやてちゃんも2人を送るからつて、一緒に帰つちやつたの……。

みんな、みんなねなのはに会つたら悲しそうな顔をするの。心配かけちやつたなつて、思つてただけど、そうじゃなかつたんだね。なのはがもう、歩けないかもつて……。みんな、なのはが知らないのに……、みんなは知つてて……。

なのはの言葉が段々と小さくなる。
段々と弱々しくなる。

「――ぎけるな」

「ふぎけるな!!」

「なのはを勝手に決めるな！ 私を勝手に判断するな!! なのははまだ飛べる！ 私は諦めてない！ なのに、他人が勝手に私を、なのはの未来を決め付けるな!!」

「私は良い子じゃないし、優しくもない、奇跡も起こせない。その時にできる、最善を、皆が求めるなのはを選んできた！ それなのに、それなのにっ！ みんなっ、みんな！ 私を可哀想な目で見る！ なのはから目を背ける!!」

なのはがみんなの求めるのはであろうと頑張つたのに、皆はなのはの求める皆でいてくれない！ こんな時ぐらい、なのはが欲しい皆で居てくれても良いのに!!」

悲痛な叫びが、フエイトの胸へと響く。
心を突き刺す。

「なのはが諦めてないのに、皆が諦めてる！ 勝手になのはの空を皆が諦めてる！ なのはが弱いつて決めつけてる！ なのははまだ飛

べる、なのはの空は私の物だ！」

11歳の少女の慟哭が響く。

その言葉を聞いたから、彼女の事を思うから、フェイトは優しく、厳しい言葉を投げかける。

「悔しい？」

「悔しいよ！ みんなの中ではなのはは弱いままで、弱いからもう飛べないって決めつけられる！」

「悲しい？」

「悲しいよ！ みんな、みんな『もう頑張らなくて良い』って思ってる！・なのはを憐れんでる！ 『なのはは可哀想だ』って思ってる！」

「もう一度、頑張りたい？」

「やってやる——」

「もう一度、空を飛びたい？」

「飛んでやる——」

「諦めない、諦めてやらない！ 血反吐を吐いても、泥に塗れても、もう一度！・もう一度——」

「空を、飛ぼう。もう一度一緒に。それで一緒に空を飛んで、また一緒に喧嘩しよう。」

それができたら、私は嬉しいから。それが叶うなら私もなんだってやる。なのはと一緒に血反吐を吐いても良い、泥に塗れても良い。

だから、もう一度飛べるように、一緒に頑張ろう。なのは「

「う、うあああああああああああああああああつ」

なのはの泣き声が病室に響き渡る。

皆のために頑張った。

必要とされたいから頑張った。

必要とされたこと、やれること、やりたいこと。

その全部が詰まった、込められたのが魔法だった。なのはの力だった。

それが他人に奪われた。

他人に、諦められた。

たった一度死にかけてくらいで、たった一度撃墜されたくらいで、諦められた、見捨てられた。

それは、他人が心の底からなのはの魔法を切望していないのだと、なのはは感じてしまった。

だから、フェイトは逆に求めた。なのはを求めた。なのはの魔法を求めた。

諦められないから、楽しそうに魔法を使うなのはを。

なのはと一緒に空を飛んでいた、あの楽しさを諦められないから。

フェイトの胸の中へと納まる、こんなに弱った少女に、死ぬかもしれない目にあった少女に、もう一度頑張れと。また、死ぬかもしれない世界に戻れと、そういうのは酷であろう。

でも、なのはが求めているのは、慰めの言葉ではない。

なのはを必要とする言葉。

誰かのためにしか頑張れない少女は、自分のために誰かの言葉を欲
しがった。

「もう一度飛びたい！」

「うん、飛ぼう」

「まだフェイトちゃんに勝ち越してない！」

「うん、また戦おう」

「まだ、諦めきれないよ！」

「諦めなくていいよ。私はどんななのでも良い。だけど、一緒に飛
べるなののが、一番いい」

「だって——」

「だって——」

「なのは空を飛んでる時が、一番楽しかったんだから!!」

「なのは空を飛んでる時が、一番楽しそうだったから——」

なのは なのは やりたい事と、 フェイト 誰かがやって欲しい事。

その二つが合わさった時が、高町なのはが最も 生き生きとして 頑張れる瞬間なの
だから。

*

「ごめんね、フェイトちゃん」

フェイトの胸の中で叫んで落ち着いたのか、なのはそう言いなが

ら、顔を上げる。

目は涙で腫れ、赤くなっているが、その顔はフェイトが入室した時と比べ、だいぶスッキリしているようだった。

「なのは、大丈夫?」

フェイトはそう聞く。大丈夫か、と。まだ我慢はしていないかと。

「大丈夫、私を求めてくれるなら、フェイトちゃんが私を求めてくれるから。私は、頑張れるよ」

「うん、そっか。じゃあ、私のために、頑張つて。なのは」

「うん。私とフェイトちゃんのために、頑張るよ。フェイトちゃん」

そういつて、なのはは笑った。

その笑顔は、無理して作った笑顔ではなく、心の底から湧き出た笑顔だった。

どれくらいなのはが泣いていたのかはわからないが、気づけば病室から見える外は日が落ち暗くなっている。

それは、病院の面会時間の終了が迫っているということであった。

「それじゃあ、私そろそろ行くね」

そう言つて立ち上がるつたフェイトの袖を、なのはが掴む。

「なのは?」

「……フェイトちゃん。今日だけ、今日だけでいいの。明日からは頑張るから。だから、今日だけ私の、なのはの我儘を聞いて欲しい、な……」

か細い声で、なのはが言う。

「うん。わかった、何でも言っつて。なのはのためなら、なんだつてするから」

フェイトはなのはへと向き直り、なのはの我儘を聞く体制へと変える。

「今日は、なのはと一緒に居て。なのはと一緒に寝て欲しいの」

小さな声でそう呟いたなのはの言葉に、フェイトはしばらく考えたと

「わかった。私に任せて、なのは」

そう言っつて力強くうなづいた。

その後、消灯時間も過ぎ、カーテンが開いている病室には月の光だけが差し込んでいる時間。

なのはは一人でベッドの上で横になっていた。

そんな時、なのはの病室の窓が叩かれる。

「なーのーはっ」

その声と共に、鍵が開いていた窓が開くと、パジャマ姿のフェイトが姿を現した。

「フェイトちゃん」

「遅くなつてごめんね。母さんたちにも手伝ってもらつたから、病院の方は大丈夫だと思う。誰かが病室に来なければ、バレないと思うよ」

そう言いながらフェイトはなのはのベッドへと入り込む。

「えへへ。ありがとう、フェイトちゃん」

「どういたしまして。でも、母さんたちが何とかしてくれてても、無断は無断だから、明日の早朝には帰るからね?」

「うん、それでもいいの。今日は、一人は嫌だったから」

そういうなのはを、フェイトはたまらず抱きしめる。面会時と同じように、なのはの頭を胸の中に抱きかかえる。

「ふえ、フェイトちゃん?」

「どう?。なのは。落ち着く?」

少々慌てるなのはに、フェイトは優しく声をかける。
その声を聴いて、なのはは身体から力を抜き、目を閉じる。

「うん。フェイトちゃんの心臓の音が聞こえる」

トクントクンと、定期的なリズムで聞こえる鼓動は、なのはの心に懐かしさと、温かさと呼び起こさせる。

「私の鼓動に耳を澄ませて」

「うん。落ち着くよ。ありがとう、フェイトちゃ——」

言い切る前に、なのはの意識は落ち、夢の中へと旅立つ。

「私には、甘えて良いんだよ——」

そう呟いたフェイトの言葉は、月と星の輝く夜の空へと消えていった――。

後の世にて発刊された、『徹底解剖！エース・オブ・エースに迫る』と題されたインタビュー記事にてエース・オブ・エース墜落事件について、高町なのは自身が語っている。

以下はその記事の抜粋である。

―それでは最後に、お話しづらい事をお聞きしますがよろしいでしょうか。

高町さん「大丈夫ですよ？ 元々そういう趣旨ですしね」

―高町さんは昔、撃墜され『エース・オブ・エース墜落事件』として世間を騒がせ、一時は飛べなくなるかもと言われながらも、奇跡的な回復をみせました。

高町さん「あー、その話ですか」

―やはり、語りにくいでしょうか？

高町さん「いえ、そんな事無いですよ。あれがきっかけで私は教導官を目指したので、ある意味今の私を作る一因ですから。じゃんじゃん聞いてください」

―それではお言葉に甘えまして、あの事件で一時期は空を二度と飛べないと危ぶまれた高町さんですが、その時の心情をお聞きしても？

高町さん「そうですね……、『悔しい』でしょうか」

―それはやはり、飛べなくなるという事にでしょうか。それとも、撃墜されたこと自体に？

高町さん「飛べなくなる事に対してはちよつとはありますが、撃墜された事に関しては特にそういう思いはないですね」

―と、言いますと？

高町さん「撃墜されたのは、有り体に言ってしまうえば私の実力不足、経験不足でしたから。墜とされたこと自体に対しては悔しいとかはあまり思いませんでしたね。まあ次元そちの果てまでも追いかけて絶対

に捕まえてやる。くらいは思っていましたけど（笑）」

—高町さんにそう思われていたら、夜も眠れませんか……。
高町さん「にやはは。まあそんな訳で撃墜されたことは元より、飛べなくなるかもという事実自体もそこまで悔しいとは思っていないかったですね」

—それでも、『悔しい』と表すということは、他に何か悔しいことが？

高町さん「はい。実は当時局に届いたファンレターを読みましてね、そこには私の無事を祈る言葉と、私が飛べなくなることとを嘆く言葉が綴られていたんです」

—それが、『悔しい』と高町さんは思われたので？

高町さん「はい。その手紙や私をお見舞いに来てくれた家族、友人も。みんな、私が飛べなくなるかもしれないことを悲しんでいました」

—えっと……。それは当然かと思いますが……。

高町さん「そうですね。でも、当時の私にとってはそうじゃなかった。だって飛べなくなるかもなんですよ？ 飛べなくなつた。ではなく、かも。不確定だったわけです。それなのに、手紙では飛べなくなつたと断定してくる。皆は飛べなくなること前提で勝手に悲しんでいる。皆、勝手に私のことをそれまでだって思ってたんですよ。飛べるようになる、歩けるようになる可能性はあつたのに、皆勝手にそうはならないと思つてた。私が頑張れば良いことを、勝手に頑張れないと思つてた。舐められてたんですよ。当時の私はそう思つたから、悔しかつたんです」

—な、なるほど。しかし、それは実際当然の反応かと思いますが……。

高町さん「あの時より大人になった今なら、そう思います。それでも、私は今同じ状況になつても『悔しい』と思うでしょうね」

—それは、なぜか聞いても？

高町さん「だってそれって、私じゃない他人が、勝手に私を決めつける、私はその程度の弱い人間なんだって決めつける事じゃないですか。家族でも友達でも他人は他人なんです。私のことを決めるのは、決められるのはこの世で私ただ一人なんです」

—普通の人は、そこまで自分を信じれないと、少なくとも私は自分のことをそこまで信じれないかと思えます。

高町さん「あはは。その事は、教官という職に着いてからイヤと言うほど思い知りました。先輩にも言われたんです『おまえ以外の人間は、お前ほど自分を信じれないし、自分に厳しくなれないんだ』って。それをわかってるから、今では当時ほどの激情は抱かないかと思えます」

—なるほど、そんな激情が原動力となり、奇跡的な回復を実現できた。

高町さん「私はあんまり奇跡って言葉、好きじゃないんですよ。昔から『奇跡の魔導師』とか恥ずかしい異名で呼ばれてましたけど、私は奇跡なんて一つも起こした事はないです。その場にいた皆ができることを、できる限り頑張ってそうして掴んだ必然なんです。奇跡って、埜外の幸運な出来事の意味じゃないですか。そんな曖昧で軽いものじゃないんです。それに、私の座右の銘は『できるまでやれば100%できる』ですから。こうしてもう一度飛べるようになったのだから、飛べるようになるまで頑張ったからであって、決して埜外の幸運なんかじゃ無いんです。文字通り血反吐も吐いたし、泥も舐めました。それを奇跡って言葉で表されたら、私の頑張りが軽くなる。だから奇跡って言葉はあんまり好きじゃありません。それにもし、今もまだ飛べないままだったら、私は今も飛べるようになるまで頑張ってると思えますしね」

—正直、人間としての強さの違い、みたいなものを感じてしまいませんか。

高町さん「にやはは。先輩にも言われました。『お前は強すぎるから指導員には向かない』って」

—それでは、そこまで頑張れる秘訣などは、なにかありますか？

高町さん「そうですね。私が頑張る理由は色々ありますけど、当時の話に限って言えば、ある言葉でしようか」

—先ほどの座右の銘ですか？

高町さん「いえ。ただ『私のことが好きだ』って言ってくれた人がいたんです。『空を楽しそうに飛んでる私が一番好きだ』って。だから、私を好きでいてくれるこの人のために頑張ろう。そう思ったんです」

—それほ、家族の方やご友人以外で、という事ですか？

高町さん「もちろん、家族も友人も、私のことが好きだったと、好きだと信じてます。それでも、その人はそう言って発破をかけてくれたんです」

—差し支えなければ、その人の事を伺ってもよろしいでしょうか。

高町さん「うーん、そうですね——

世界で一番、大切な人

——ですかね」

後にそのインタビュをした記者はこう語る。

—その時の高町さんの顔は、美の女神も見惚れる程、明るく、美しく、魅力的な笑顔であった——と。

モブ子運命に出会う

『#1 モブ子恋に落ちる』

私はその日、恋に落ちました。

何のことだよと思う人も多いかと思うので、まずは自己紹介を。

私の名前は茂部もぶ 栄子えいこ。

親しい友人はモブ子とか、Aちゃんって呼びます。

そんな私は近場では有名なお嬢様学校である、聖祥附属中学校女子学部への途中編入を果たしました。

そんな私ですがとある日の下校中、怖いお兄さん方に目を付けられ、因縁をかけられていました。

「うわーいてー！こりや骨折れてるわー」

「え……あ……その」

「君が前方不注意で連れにぶつかっただから、連れの骨折れたらしいんだわ。どうしてくれるの？なあ！」

2人組のお兄さんの片方が、歩いている私の目の前に出てきたと思ったら、そんな事を言っただけです。

自分より大きい男の人が睨んでくる恐怖といったら筆舌にしがたなく、私は疎んで反論すらできませんでした。

周りの人は見て見ぬ振りをする人ばかり、誰も助けくれません。

「その制服キミあの聖祥の子でしょ？とりあえず誠意を見せて欲しいわけ」

「ひっ」

男の人に詰め寄られて、小さく悲鳴を漏らしてしまい、無意識のうちに後ろに下がろうとしても、気づけばもう一人が回り込んでいました。

「別にさあ、とって食おうとか思っていないわけ。ただ、怪我させといてゴメンですむ訳無いよなあ？誠意を見せて欲しいのよ」

後ろに回った男の人は私の肩を掴んで、耳元でそうささやきました。囁きました。

恐怖と嫌悪感がない交ぜになり、私はただただ硬直し、震える事しかできずできませんでした。

「おい」

そんなときです。私が、運命に出会ったのは。

「君たち、何やってんの」

その声は女性にしては少々低めなハスキーボイスで、男性にしてはだいぶ艶やかな声色をしました。

「あん？」

「ひゅ〜」

私の後ろの人がドスの利いた声を出しながら振り向き、前にいた人は下手くそな口笛を吹いていました。

「おいおい、きれいなお姉さんじゃん」

「いや、俺らちよつとこの子と大事なお話してるからさあ。邪魔しないでくんない？」

「ってかお姉さんそれ聖祥中の制服？ コスプレ趣味でもあんのw」

「うわw 流石にその年齢で中学生のコスプレは無いでしょw w w キャバ嬢かよw w w」

男性達の言葉に釣られて私も振り返ると、そこには言葉通り綺麗な女性が立っていました。

170cmはありそうな長身にスラツとした手足。

爽やかな水色の長髪は、毛先に向かって紺色のグラデーションをしていて、かなり奇抜な色であるはずなのに違和感を覚えない程に似合っている。

ワインレッドの瞳をもつ目は今は怒りからか、鋭く細められその眼光は底冷えするような輝きを放っている。

放つオーラも含め、その顔立ち、体つきは明らかに20代のものしか見えない。

そんなスタイル抜群な超絶美人なお姉さんは、男性達が言うように私と同じ聖祥中の制服に身を包んでいる。

リボンタイの色から私より一つ上の二年生であることが伺えるが、男性の言うとおりに成人女性のコスプレにしか見えない。

「……ボクの事はどうでも良いからその子を解放しな。遠目から見ただけで、歩いてるその子の前に急に飛び出したのはあんたらの方だろ」

「ボｗｗｗｗクｗｗｗｗ お姉さんキャラ作りすぎｗｗｗｗｗｗ 片w腹w大激痛ｗｗｗｗｗｗ」

「お姉さん必死だねｗｗｗｗ 客引き？ お店教えてくれたら行ってあげようかｗｗｗｗ」
「ちっ」

男性達の嘲るような言葉に我慢の限界が来たのか、お姉さんは舌打ちをするとより剣呑な雰囲気をもとう。

「どこにでもクズは居るもんだ。一つ、ボクはこれでも14歳だ。二つ、骨が折れたと言ったけど本当に骨が折れてるならもつとカルシウムを採ることをオススメするよ。三つ、人の外見や口調を笑うのは止めた方が良い、痛い目を見るからね」

「痛い目ｗｗｗｗ なに？ お姉さんやるって言うの？ｗｗｗｗ」

「おいおいｗｗｗｗ 女のくせに癖に男2人に勝てるわけ無いだろｗｗｗｗ」

忠告を含めたお姉さんの言葉は男性達には届かず、頭にくる嘲笑を止めない。

その事にお姉さんは一周回って呆れたのか、大きな溜め息をつく。

「……四つ、女だからって、舐めない方が良い」

お姉さんがそう言うのとバチッと静電気がはじける弾けるような大きな音がする。

「いっ」

「うおっ、なんだ」

男性達もその音を聞き、驚きの声を上げると、そのうちの一人が後ろへと下がる。

「おい、驚いたのはわかるけど下がりがすぎだろ」

もう一人が後ろへ下がった男性に声をかけるが、声をかけられた男

理解不能な状況に、私はただただ困惑しながら手を引かれるままにその場を離れることしかできなかった。

「ここまで来れば良いか。大丈夫？ 全く白昼堂々と迷惑な奴らだ」
ある程度歩くと、お姉さんは立ち止まり私のことを気遣ってくれる。

「えっ、あ、はい！ 大丈夫です！」

「ホントに？ 怪我とかしてない？」

「はい！ 暴力とか、されてないです！」

「怖かったでしょ。もつと早く助けに入れば良かった」

「い、いえ！ 助けていただいただけで！ ホントに！」

「見たところボクの後輩みたいだからね。つまるところ王様の臣下だ。助けるのは当然さ」

そう言うとお姉さんは私の頭を優しく撫でながら、先程とは打って変わって優しく暖かい笑顔を私に向けてくれました。

「ひゅいつ」

心臓が止まるかと思いました。

いえ、多分一瞬止まりました。そのせいか心臓の鼓動はとても強く早くなり、息苦しさを感じさせるほど。

血流が早くなったせいか、身体中が火照って熱くなり、多分私の顔は真っ赤なのでしょう。自分でもわかるほどに顔が熱くなっていました。

「大丈夫？ 体調悪い？」

そう言うとお姉さんは私の頬に手を添えます。

白魚のようにシミ一つ無い美しい肌。

頬に触れる感触は白樺のようにスベスベとし、長身も相まって一般

男性と同じくらいある大きな手が頬に添えられ。それから伸びるたおやかな長い指が私の耳や首筋に触れる。

私の様子を見るために近づいたお姉さん。そのためその整った顔つきがよく見える。

長いまつげは数も多く、されども付けまつげには見えない自然な物。

切れ長な目は先程の怒りに染まった眼光ではなく、優しげな光を携えている。

二重がしっかりと刻まれ、細目がちな目は睫毛と合わさり全く持つてそんな印象は与えず、くりくりとしたワインレッド色の瞳は可愛らしい印象すら受ける。

高い鼻筋はしっかりと綺麗な直線を描き、その延長線上にある唇は厚めで柔らかさそうという感想を抱かせる程にプルプルとしている。

見たところルージュは付けていなそうなのに、血色が良いのか薄紅の唇はしつとりとしており大変艶めかしい。

完璧。

日本人に在らざるその容貌は、しかして外国人にしても整いすぎている。

まさに神が生んだ奇跡。神が作りたもうた芸術品。

最も神に近い最初の人間の一人である、イヴの生まれ変わりとする思えるほどに整った容姿。

そんなあまりもの美しさに、触れたら壊れるのではないかと思わせる儚さを錯覚し、しかして鍛えられた刃のように、恐ろしさを感じさせる美しさと強さを持ったお姉さんは、月のような優しい光を放っている錯覚すら覚える。

見ているだけで鼓動が強くなる。

鼓動が早いから頭に血が昇る、頭が沸騰する。

「？」

あまりにも心臓の音が煩くて、お姉さんの言葉が聞こえない。頭に入らない。

お姉さんの開いた口から見えた歯は、外国人のイメージから外れず、整った歯並びをしており、新品のタオルのように真っ白で綺麗な歯だった。

「!」

なにを思ったのかお姉さんは、鞆を漁ると何かを取り出し私の口に放り込んだ。

「んう!!?」

「飴ちゃん。甘いもの食べると落ち着くからね」

あまりもの衝撃に私は死んだ。

死んでないけど死んだ。

この短時間に心臓が二度も止まった。

お姉さんは飴を取り出すと、包装紙を剥ぎ取り、そのまま私の口の中に差し込んできたのだ。

驚きのあまり反射的に口を閉じてしまったが、そのせいで私の唇に何かが触れる感触がした。

それは、飴を差し出したお姉さんの指先。

お姉さんの指先は、甘い味がした。

「大丈夫? 落ち着いた?」

「ふあ、はい」

一周回ってなんとやら、なんとか正気を取り戻した私は、理解できるようにになった目の前の女神の言葉にただただ頷く。

「そっか、それは良かった」

そう言ってニカッと笑ったお姉さんは、今までの印象とは打って変

わって、幼い子供のような快活な印象を受ける。

女神のように美しく。

男性よりも強く。

子供のように快活で。

母のような優しさを持ち。

正義の心を持ち。

慈しみの愛を放ち。

悪意に臆さず。

暴力に屈しない。

そんな完璧な、傷一つ無い宝玉のような、欠けない満月のような。

究極の人間が私の目の前にいた。

「それじゃ、ボクはもう帰るけど、君も気をつけるんだよ？」

そう言ってお姉さんは屈んでいた身体を起こすと、私に背を向け歩
き出す。

神が去ってしまう。

女神の美しき顔かんばせが見えなくなる。

夜闇の中、唯一の明かりであつた月が雲に隠れるように、その優し
い光が感じられなくなる。

「あ、あのー！」

胸に飛来した焦燥と哀愁に突き動かされ、私は大きな声でお姉さんを呼び止めていた。

「ん？」

私の声で振り向くお姉さん。

「あ、あの！ お名前、は……」

意を決して話しかけたものの、言葉尻がか弱くなってしまった私の言葉は辛うじてお姉さんに伝わったのかお姉さんは私にこの世で最も貴い聖句名を授けてくださりました。

「レヴィ。レヴィ・テスタロッサ」

それだけ伝えるとお姉さんはまた歩き出します。

「レヴィ先輩！ 助けていただいて、ありがとうございました！」

レヴィ先輩の背に声をかけると、今度は振り向かず右手を上げ手を振る。

その動作がその背中が「気にするな」と語っているようで、そのクルな仕草に落ち着いた筈の私の心臓が再度全力疾走を始める。

——この苦しさ、切なさ。

これが、恋。

そうして私は、恋に落ちたのです。

『#2 深淵レヴィを覗くとき、深淵レヴィもまた、こちらを覗いているのだ』

そんな運命的な出会いをした翌日、文字通りレヴィ先輩を夢に見た

私はハイテンションのまま登校しました。

「いよちゃん！ いよちゃん！ 聞いて聞いて聞いて！」

教室に入るなり、私と仲良くしてくれてる橋本^{はしもと} 伊予ちゃん^{いよ}に詰め寄ります。

「うわ、どうしたモブ子。今日はやたらとテンション高いね」

「あのねあのね！ 私昨日ね！」

ハイテンションな私に若干引きつつも話を聞いてくれる伊予ちゃんに私は昨日あつた事を話し始めました。

「はー、なるほどね。聖祥の王子様にモブ子もやられちゃったかー」

「聖祥の王子様？」

聞き慣れない単語に私が首を傾げると、伊予ちゃんは「マジか」と言って驚いた表情をする。

「あんた、入学してもう1ヶ月になるんだからそれくらい知つときなさいな」

「レヴィ先輩は有名なの？ それになんで王子様？」

「それはね、」

そう言つて伊予ちゃんはレヴィ先輩を初めとした聖祥中女子部の有名人について話し始めました。

聖祥中女子部には絶世の美少女が9人いる。

聖祥小からの持ち上がり組であり、現在2年生の6人。

バニングス商事の一人娘、アリサ・バニングス。

月村重工の令嬢、月村すずか。

その二人の友人、高町なのはに八神はやて。

バニングス先輩と同じ金髪外人姉妹のアリシア・テストロッサ、フェイトテストロッサ姉妹。

以上の6人は見眼麗しい上に、小等部からの持ち上がりのため聖祥内での知名度は高いとのこと。

そして、去年編入した3人。こちらはローカルな話ではなく世界的にガチの有名人だという。

ヨーロッパでは有名な投資家にて天才少女集団の筆頭。たった一年で世界富豪格付けに名を連ねた稀代の傑物。一年生で生徒会長に就任した稀代のカリスマ、ディアーチェ・K・クローディア。

クローディア会長の右腕にして、同じくヨーロッパでは電子工学の時代を5年進めたと謳われる天才少女集団の一人。クローディア生徒会副会長、シユテル・スタークス。

そして最後。たった一年で約30近い数式や定理を発表し、その傍らに格闘技を含めた10種類の個人スポーツ競技計20個の公式大会で優勝を果たした天才少女集団の広告塔。クローディア生徒会会計、レヴィ・テスタロッサ。

以上の3人をあわせて9人。

この9人は仲が良く、よく一緒にいるため纏めて聖祥9大美少女と噂されている。

「——と、いうわけよ」

「ほえー」

知りたいと言ったのは私だが、すごい情報量を捲し立てられて呆けるしかできない。

「なにモブ子。呆けちゃって」

「いや、伊代ちゃんはホントに良く知ってるなーって」

「まあねえ。情報は私の命だからね」

鼻高々にそういう伊代ちゃん。

「ま、そんなわけであんたが知りたい王子様は、ガチの有名人でなわけよそれに——」

と、伊代ちゃんがなにか言おうとした所で担任の先生がやってきて

朝のSHRが始まってしまふ。

結局その後も移動教室が多い時間帯もあり、なかなかタイミングが合わず、伊代ちゃんからその先の話を聞くことはできなかつた。

そうして暫くの日が過ぎた。

私はその数日、ずっとレヴィ先輩について考えていて、視界に入ればレヴィ先輩を目で追つてしまふという生活を送つていた。

そんな私にある日の放課後、来客が来たのである。

「すみません。ここに茂部 栄子さんはいる？」

放課後直ぐに扉の開く音と共にそんな声が聞こえた。

声質がレヴィ先輩に良く似ていたせいで、私は反射的にその声を放つ人物へと顔を向ける。

そこにはレヴィ先輩と良く一緒にいる姉妹の一人、フェイト・テスタロッサ先輩と、同じく良く一緒にいるシユテル・スタークス副会長がいた。

その2人を見て私はいやな予感を感じる。背筋に悪寒が走り、身体は無意識のうちに萎縮する。

フェイト先輩は決して怖い表情をしていない、それどころかとても可愛らしい笑顔を浮かべているのに、私にはその表情がとても恐ろしいものに見えた。

そしてそんな見た目は楚々とした出で立ちのフェイト先輩とは打って変わり、副会長は開いた扉に体重を預けるようにもたれかかり、鋭い視線が教室中を舐めまわす。

そしてそんな無言の重圧に吞まれ、騒がしかった教室が無音となるのも気にせず、副会長は私に目を付けた。

「ひっ」

その射抜くような、凍えるような視線を浴び、私はつい小さく悲鳴を上げる。

決して大きな声では無かつたはずなのに、静かな教室で発生した唯

一の音は酷く大きく響く。

「彼女です。確保しなさい」

私の悲鳴を聞くやいなや、副会長が淡々と素晴らしい放つと、どこからともなく不審者の集団が教室になだれ込んでくる。

不審者集団は皆一様に、頭に水色のとんがり帽子のような布を装着している。

その布は目の部分だけに穴があり、それ以外は肩にいたるまで一切の隙間がない。

そして額のあたりに黄色と朱色の『L』の二文字と数字だけが記載されている。

そんな奇っ怪な布を被った聖祥中の制服を着た人達が私の周りを囲む。

総勢で十数人は居るだろう。

そんな多量の不審者集団に囲まれ、逃げ場を無くした私は、恐ろしさのあまり立ち上がっていた腰を自分の席に下ろす。

あまりの恐怖に腰が抜けてしまったのだ。

そうしていると私を取り囲んでいた人垣が割れる。

その中を当然と言わんばかりに進み、私に近寄ってくるフェイト先輩と副会長。

その2人は私の目の前に立ち、私を見下ろしてくる。

同年代より遥かに発育の良い体格は、その雰囲気も相まって相当の威圧感を私に与える。

「二応確認します。あなたが、茂部栄子さんですね」

副会長が私にそう問いかける。

いや、その口振りは質問では決してない。

言葉の通り確認なのだろう。

副会長は私が茂部栄子である事を確信している。

会ったことも無い人物が、雲の上の存在が己を認識し語りかけてくる。

その恐ろしさと言ったら語る言葉が見つからない。

「あわ、はわわ」

あまりの恐怖に身体は強張り、口がふるえる。そのせいで「はい」の二文字すらまともに口にできずにいた。

「返事は？」

そんなライオンに睨まれたチワワのように、か弱い存在の私に、目の前に立つもう一人、フエイト先輩が声をかけてくる。

その声はとても柔らかく、優しくそうで、とても恐ろしかった。

私以外の人にはそのようには聞こえないだろう。

声色も、イントネーションも、雰囲気も。何もかもが優しさと慈愛に満ちている。

その事実が恐ろしい。

「はい！・ 私が茂部栄子ですうー！」

あまりもの寒気。本能的に感じる恐怖。

理性と本能が、意識と無意識が齟齬を起こす不快感。

そんな耐え難い『負』の感覚に支配され、私は大きな声で自分の名前を叫んでいた。

そんな、せつぱ詰まった私の叫び声に、フエイト先輩が優しく頷くと、副会長は冷たい視線のまま周りの不審者に指示をする。

「連行しなさい」

そんな端的な言葉が放たれると、私は椅子に座ったまま持ち上げられる。

「えっ!? え???'」

そしてそのまま訳も分からず胴上げ状態で椅子とともに運ばれる私。

気づけば暗い部屋に放り込まれていた。

蛍光灯は着いておらず、カーテンによって外からの灯りを調節することで意図的に薄暗さを演出させられた教室。

その中心、机が円形に囲われ、中央に広い空間の作られたその中央に私は椅子毎設置されていた。

周囲を見渡すと数多の不審者が私を囲っている。

ある者は椅子に座り。

ある者は棒立ちで。

ある者は端に寄せられた机に座り。

そこには私を連れ去った不審者と同じ格好をした不審者が30人は存在していた。

「さて、手荒な扱いをして申し訳ありませんでしたね」

そんな不審者集団の視線を浴びる私に、目の前に座る副会長が声をかけてくる。

「単刀直入に聞きます」

「あなた、レヴィのこと、好きだよな？」

副会長の言葉を、その隣に座っているフェイト先輩が引き継ぐように私に質問をしてきた。

「ひょえっ!?! い、いきなり何を!?!」

あまりに唐突な言葉に私は変な声を上げてしまう。

そんな私を気にもとめず、副会長は淡々と、冷静に言葉を連ねる。

「大事な事です。あなたのレヴィへの想いはここ数日の調べて並大抵の物では無いことはわかっています。

あとはそれが好意^{Like}なのか、愛^{Love}なのか。それが最重要なのです。

さあ、語りなさい。

速やかに。

隠し事無く。

赤裸々に。

とめどなく。

溢れるままに。

あなたの想いを語りなさい、露わにしなさい。

この査問会が、拷問へと変わる前に、ね」

そう言った副会長はその冷徹な目で私を射抜く。
焰よりも熱く、氷よりも冷たいその視線は、やると言ったらやる凄
みがあった。

その凄みに屈するように、私は口を開いた。

気づけば長時間話していたのか、私の喉はカラカラに乾いており、
外から射し込む光は夕焼けの色に染まっていた。

少々暗くなったからか、設置されているテーブルランプ（刑事ドラ
マで取り調べの時に置いてあるような奴）を、壁に向けて光らせ反射
光により部屋をほんのりと明るくしている。

何故か頑なに教室の蛍光灯は使わないらしい。

そんな日が傾くほど長時間語った私は、遂に喋ることも無くなり無
言になる。

なにを語ったかあまり記憶にないが、臆気に思い出すと大分恥ずか
しい事まで喋った気がする気がする。

「なるほど。あなたの思い、大変理解しました。彼女の熱い想いを受
け、この場で採決を取ることになります」

そう言いながら副会長は立ち上がると、副会長の左手側に座ってい
る不審者に視線を向ける。

視線を受けた不審者は片手を上げ「異議なし」と一言喋った。

それを皮切りに左回り、私の周りを囲っている机に着席している
人達が順番に同じ動作、同じ言葉を発していく。

そうして一周する最後の一人。

副会長の右手側に座っていたフェイト先輩の番となる。

それまでスムーズに一定のテンポで言葉が発されていたが、フェイト先輩はあえてその流れに乗らず言葉をためる。

「異議——」

ゴクリと誰かが唾を飲んだ音がする。

この場の全員がフェイト先輩を注視している。

鶴の一声を待つように。

「——なし」

その言葉が部屋に響くと誰とも無く拍手を始める。

一瞬にして拍手の音は先程までの静寂を打ち破り部屋を支配する。

決を取るために立っていた副会長も拍手をし、最後に言葉を放ったフェイト先輩も拍手をしながら立ち上がる。

「讃えましょう。新たな同朋の誕生を。新たな使徒の誕生を。おめでとう」

「おめでとうございます」

フェイト先輩がそう言う副会長が私に向かって祝いの言葉を放つ。

そうしてまた一人一人「おめでとう」と行って回る。

しかし今度は椅子に座る数人だけではなく、部屋の中にいる全員が喋るまで続いた。

そうして全員から祝いの言葉を贈られると、フェイト先輩が私の目の前に水色の布を差し出す。

「おめでとう、会員N0237。あなたは237番目の使徒です」

その布には、黄色と朱色の「L」が二文字と、「237」という数字が刺繍されていた。

後日、あの儀式がなんなのか詳細な説明を求めたところ、あれは半公認レヴィ・テスタロッツサファンクラブ『LL団』の入団面接だったのだという。

なぜ半公認かというと、レヴィ先輩はLL団の存在は知っているが、誰が所属しているか、どんな活動をしているかは知らないかららしい。

入会資格はレヴィ先輩を『愛している』こと。

最も大切な規則はレヴィ先輩に迷惑をかけること。

他にも細かい規則は数多くあれど、その全てがレヴィ先輩を保護するためのものだ。

例を上げると、レヴィ先輩への贈り物は団長と参謀のチェックを通る必要がある。とか

ラブレターを送れるのは入団してから一定期間以上経過した者のうち、予約順で一日一人、一週間で5人まで。とか。

因みにLL団の『LL』はレヴィ・ラヴの頭文字らしい。

そんなやべー集団への入団を強要された私だが、結局そのまま居着くことにした。

締め付けの多いファンクラブであるが、その分その恩恵は計り知れない。

まずレヴィ先輩へ贈り物を贈れる。

実はLL団に入団してないと、レヴィ先輩への贈り物は、渡せてもその後破棄されてしまうらしい。

正確にはレヴィ先輩の家族である団長フェイト先輩
副会長と、プライベートでも仲が良く、レヴィ先輩からの信頼の厚い参謀が処分してしまうとのこと。

処分する理由は毒が入っているだとか、危険物だからだとかテキトーな理由らしいが、レヴィ先輩は疑わずに従ってくれるらしい。

なんて清らかな心を持っているのだろう。好き。

あとほかの理由、こちらが入団し続ける理由のほとんどを占めてい

るのだが。

LL団限定のレヴィ先輩グッズが購入できるようになるのだ。

ピンナップやチェキから、レヴィ先輩の使っているシャンプーやリンス。あと上級会員向けにプレミアムでアダルティなグッズもあるらしい。その存在を教えてくださいました上級会員の先輩は、そのグッズを思い出したのか語っているさなか最中に涎を垂らしていた。

まさに文字通り垂涎ものの一品らしい。

欲しい。どうしても一目お目にかかるだけでも良いから欲しいのだ。

まあそんなわけ（物に釣られて）で、私は晴れて不審者集団の仲間入りを果たしたのであった。

レヴィ先輩へ秘めた想いを持っている人は気をつけた方が良い。

——レヴィ先輩を覗くとき、覗いているあなたを、LL団もまた覗いているのだから。